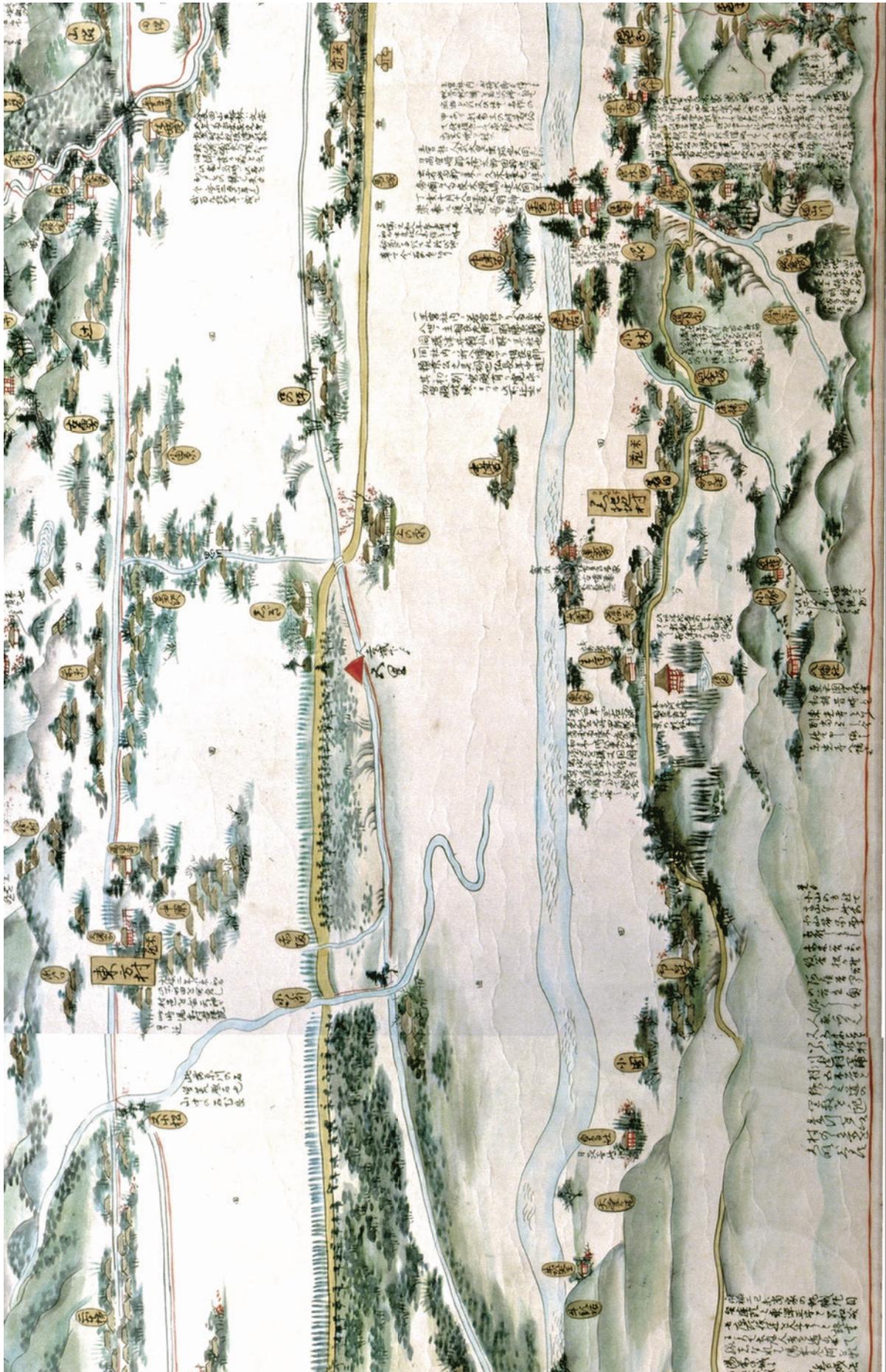


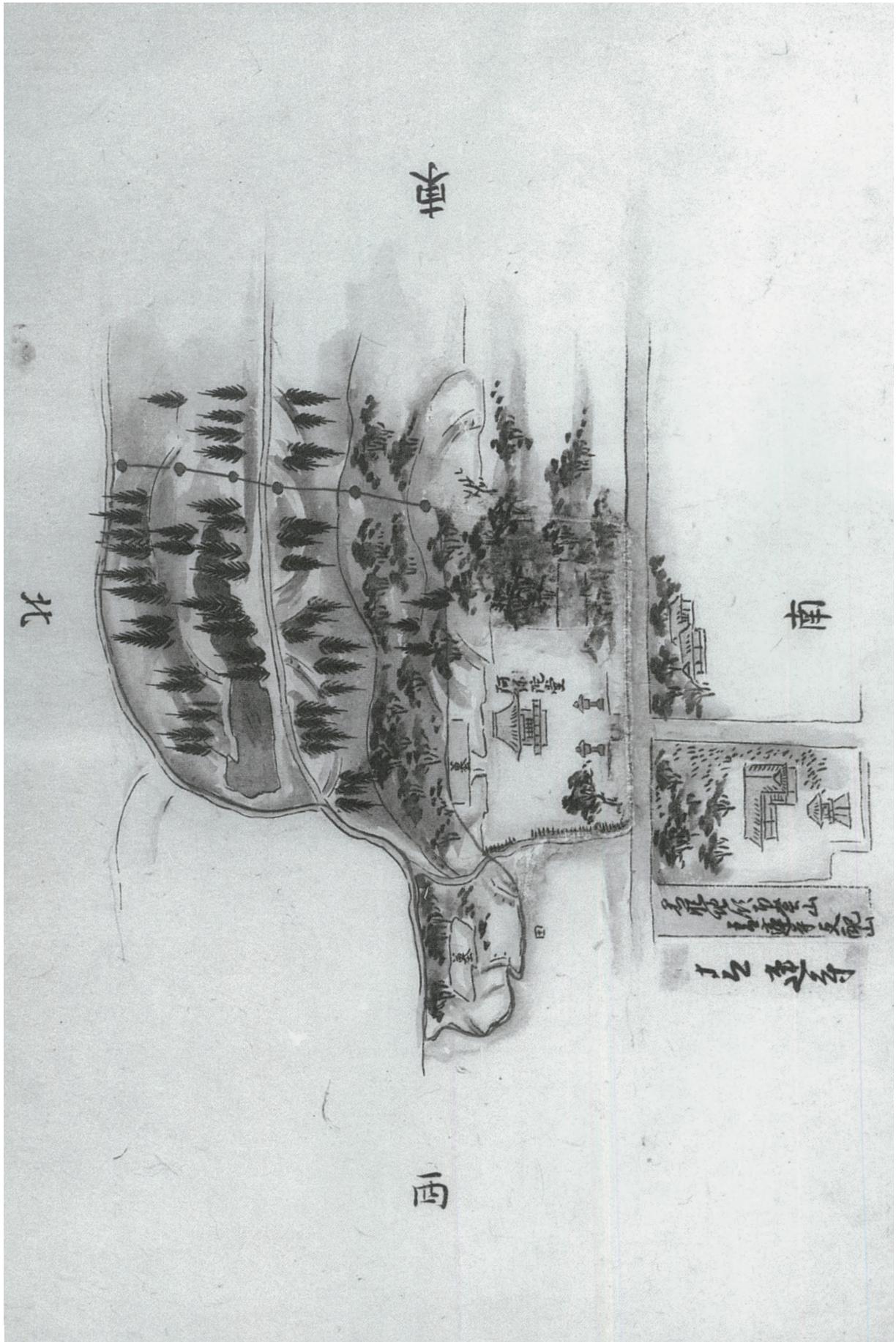
多良木相良氏遺跡

多良木相良氏関連遺跡群総合調査報告書

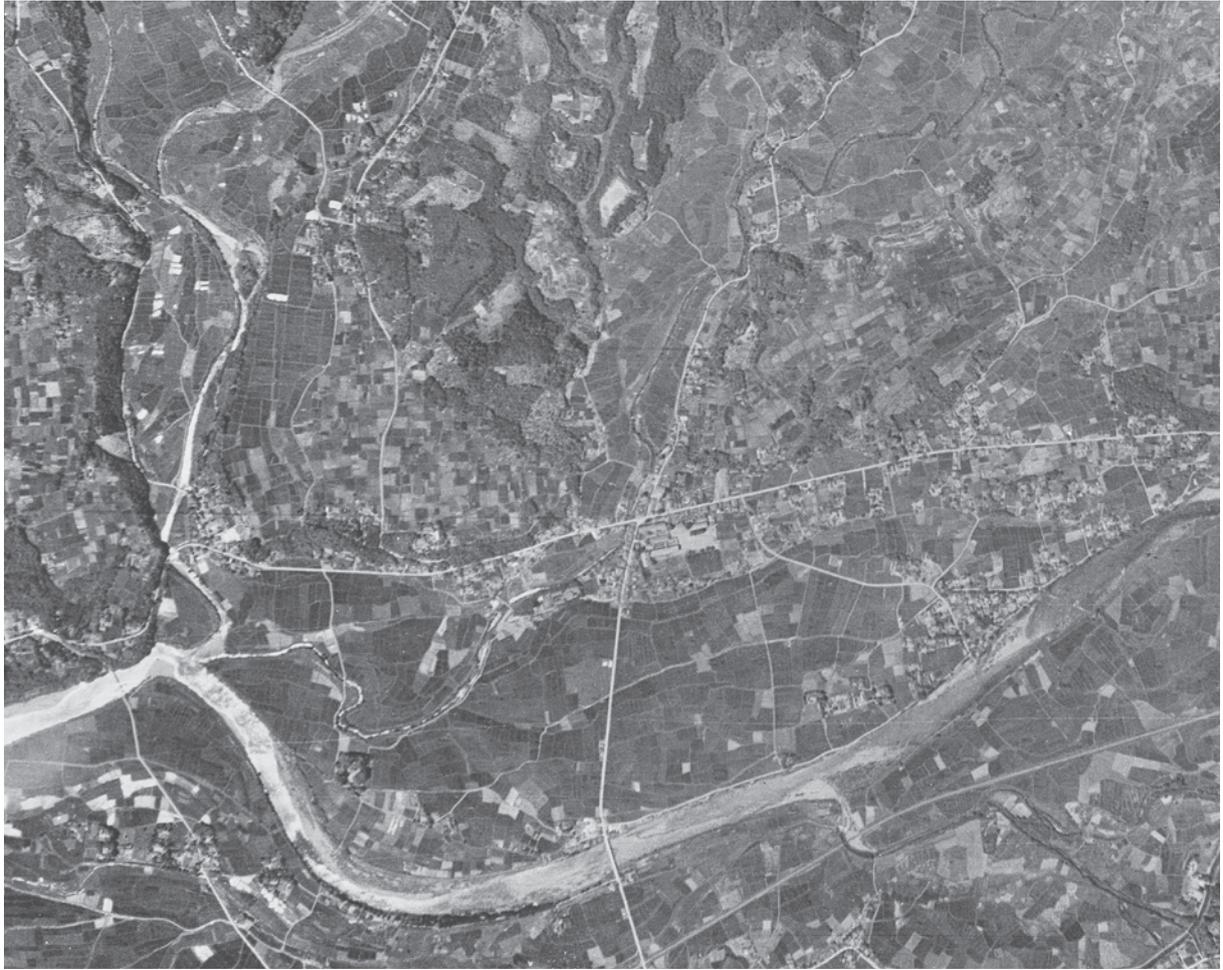
2024
多良木町教育委員会



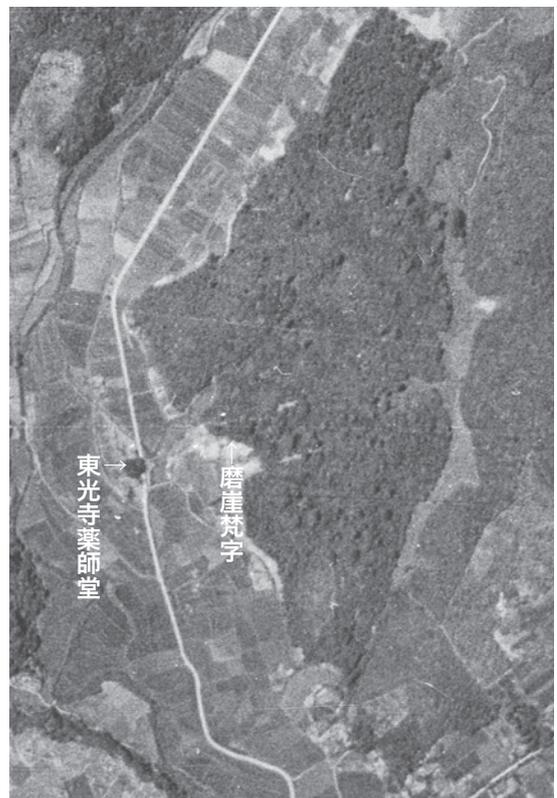
球磨絵図 [部分] (1773) (人吉市教育委員会提供)



広島大学図書館所蔵「相良家文書」(寛政8年山絵図のうち、青蓮寺絵図)



球磨川右岸の蓮花寺跡・相良頼景館跡・青蓮寺周辺の様子 ※出典：USA-M319-35



米軍が撮影した昭和 22 年の多良木町 (USA-M319-35 を編集・加工して使用)

巻頭図版 4



石積堤防（東から）



石積堤防・広場・切落し（東から）



石積堤防（西から）



石積堤防（東から）



石積堤防基礎部



石積堤防背後の状況（北から）

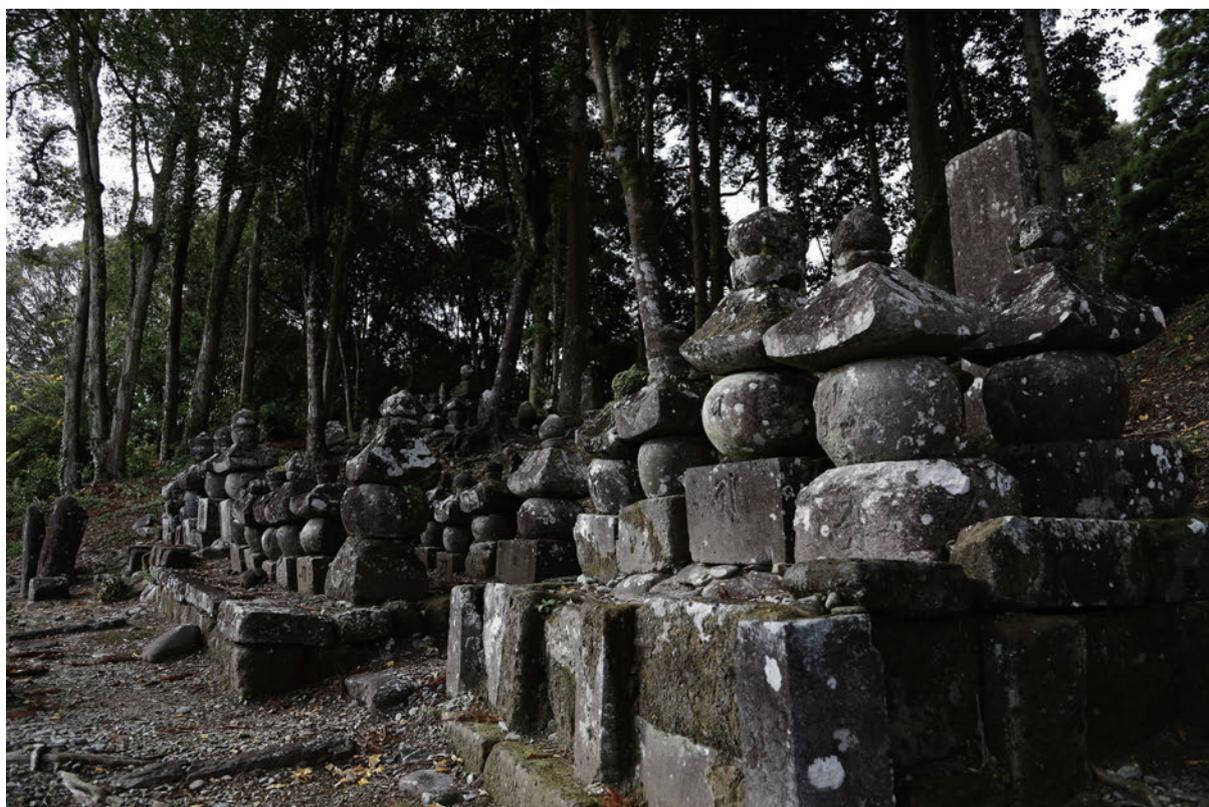


石積堤防・東濠跡の接続状況（南から）

熊本県文化課調査写真(昭和 49 ~ 50 年)



青蓮寺阿弥陀堂の背後から球磨川を眺む



県史跡・青蓮寺古塔碑群



相良頼景館跡北側土塁トレンチ断面



相良頼景館跡北側堀トレンチ断面



東光寺磨崖板碑オルソ画像 S=1/25

巻頭図版 8



調査前磨崖板碑・石窟状況



石窟内部状況



石窟内右側壁から奥へと続く空洞状況

序 文

今回、刊行しました調査報告書「多良木相良氏遺跡」は、熊本県球磨郡多良木町に所在する遺跡の調査報告です。

多良木町は、鎮西相良氏の惣領家である多良木相良氏が本拠を構えた場所です。多良木相良氏の足跡は、遺跡・建造物・仏神像・石造物・伝統芸能など多岐にわたり、私たちの生活空間の中に溶け込んでいます。これほどまでに豊かな中世の歴史文化遺産が存在する地域は全国的にみても、さほどないものと自負するところです。

令和3年度から始動した調査では、伝相良頼景館跡・青蓮寺・東光寺磨崖板碑といった重要な遺跡を対象に、発掘調査や石造物調査を行いました。その調査の成果は、これまでの相良氏研究に一石を投じるだけでなく、日本史研究の視野を広げることができるような成果を得ました。今回の調査成果が、学術資料としてはもとより、広く、地域の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助としてご活用いただけることを願ってやみません。

最後に、各種調査を実地するにあたり、多大なご支援とご協力を頂いた文化庁・熊本県文化課・多良木町教育委員会の皆様、並びに指導助言を賜りました諸先生方、更に地域の方々、発掘・遺物整理作業に携わられた方々に対し、心から感謝の意を表し厚く御礼申し上げます。

令和6年3月31日

多良木町長 吉瀬 浩一郎
多良木町教育長 佐藤 邦壽

報告書抄録

ふりがな	たらぎさがらしいせき
書名	多良木相良氏遺跡
副書名	多良木相良氏関連遺跡群総合調査報告書
シリーズ名	多良木町文化財調査報告
シリーズ番号	第3集
編著者名	永井孝宏 上村麻妃
編集機関	多良木町教育委員会
所在地	〒868-0595 熊本県球磨郡多良木町大字多良木 1648 番地
発行年月日	2024年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まちせき 町史跡 さがらよしかげやかたあと 相良頼景館跡	くまもとけんくまぐんたらぎまち 熊本県球磨郡多良木町 おおあざくろひじあざれんげじ 大字黒肥地字蓮花寺 825-1 他	435058	多 23	32度 16分 22秒	130度 56分 45秒	2021/9/2 ～ 2022/3/29 2022/9/21 ～ 2022/12/1	約 62.8㎡	遺跡範囲確認
しょうれんじけいだい 青蓮寺境内	くまもとけんくまぐんたらぎまち 熊本県球磨郡多良木町 おおあざくろひじあざきたやました 大字黒肥地字北山下 3992		多 25	32度 16分 40秒	130度 56分 46秒	2021/9/2 ～ 2022/11/2	-	遺跡内容確認
まちせき 町史跡 とうこうじまがいぼんじ 東光寺磨崖梵字	くまもとけんくまぐんたらぎまち 熊本県球磨郡多良木町 おおあざくろひじあざほらいこう 大字黒肥地字祓川 4939-3		多 20	32度 17分 41秒	130度 57分 3秒	2021/9/2 ～ 2022/2/14 2022/9/1 ～ 2022/11/2	約 7.7㎡	遺跡範囲確認

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
町史跡 相良頼景館跡	館	中世～近世	堀跡 土塁跡 石積堤防 切落し 広場 土器溜 溝 石積基壇 石造物群	土師器 青磁 白磁 天目 瀬戸 常滑 中世須恵器 滑石製品 東播系須恵器 近世陶磁器	川湊関連施設 か居館の可能性 がある
青蓮寺境内	寺院	中世～現代	石造物群・壇上積基壇		一族の供養所
町史跡 東光寺磨崖梵字	宗教施設	中世	磨崖板碑・石窟	青磁 土師器 中世須恵器	磨崖板碑

要約	<p>多良木相良氏遺跡は鎌倉時代に西遷し、鎮西相良氏の惣領家として存在した多良木相良氏に関する遺跡である。相良家文書に登場する「多良木村」は多良木相良氏の本拠である。</p> <p>相良頼景館跡は鎌倉時代から機能した遺跡である。多良木相良氏が開発したとされる灌漑域に占地し、当初は堀によって方形に区画され、球磨川に面し石積堤防を整備した遺跡であった。北側の堀は15世紀中頃には一度埋め戻され、多良木相良氏滅亡後の16世紀後半には再度堀が掘られ、土塁が造成される。遺跡の形成は、史料から得られた多良木相良氏の活動時期と一致しており、地域開発の拠点施設と考えられる。</p> <p>青蓮寺境内の当初の姿は、鎮西相良氏の祖・頼景の廟所が設けられ、廟所の中に阿弥陀三尊を安置、その背後中軸線上に壇上積基壇配置、その上に五輪塔を設置するという墓所景観が復元できる。これらの墓所整備は、永仁3年(1295)に多良木相良氏主催のもと行われており、一族の墓所として機能していたと考えられる。青蓮寺境内は多良木相良氏にとって支配の正当性を示すものであり、多良木相良氏滅亡後も、墓所空間は支配の正当性を保持する装置であった。</p> <p>東光寺磨崖梵字は磨崖板碑であることがわかった。その隣には石窟も確認できた。東国御家人である多良木家にとって、自らの出自を主張するための装置であるとともに、地域社会への権威付けの機能があったものと考えられる。</p>
----	---

例 言

1. 本書は、熊本県球磨郡多良木町に所在する多良木相良氏遺跡の総合調査報告書である。
2. 総合調査は、国指定を目指す動きに伴い史跡指定を目的として実施した。相良頼景館跡（町史跡）、青蓮寺境内（「青蓮寺古塔碑群」県史跡）、東光寺磨崖梵字（町史跡）の調査は、令和3・4年度に「国宝重要文化財等保存整備費補助金」の交付を受けた「町内遺跡発掘調査」により実施したものである。多良木相良氏関連遺跡群の総合調査報告書の刊行は、令和5年度に「国宝重要文化財等保存整備費補助金」の交付を受けた「町内遺跡発掘調査」により実施したものである。
3. 調査は多良木町教育委員会主導のもと、多良木町企画観光課が担当した。令和3年4月より、文化財行政は多良木町教育委員会から多良木町企画観光課に移管され、補助執行となっている。
4. 発掘調査は令和3年4月1日から令和5年3月31日までの期間で実施した。詳細な工程は第1章第2節に記した。
5. 発掘調査における水準点・基準点測量、地形測量は（株）九州文化財研究所に委託した。
6. 自然科学分析はパリノ・サーヴェイ（株）に委託した。
7. 整理・報告書作成作業は平成28年度から令和2年度までは基礎的再整理作業を行い、令和3年4月から令和6年3月までの期間で実測、デジタルトレース、図版作成などの報告書作成を行った。詳細な日程は第1章第3節に記した。
8. 遺物の実測・トレースは、永井及び整理作業会計年度任用職員が行った。
9. 遺物の写真撮影は、永井及び整理作業会計年度任用職員が行った。
10. 方位及び座標は、国土地理「平面直角座標系Ⅱ系」による。標高値は海拔高である。
11. 本書で用いた土壌・胎土の色調名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帳」に基づく。
12. 報告書内の遺跡名は、令和5年4月1日時点での熊本県遺跡地図に基づく遺跡名である。相良頼景館跡は多良木町、青蓮寺古塔碑群は熊本県、東光寺磨崖梵字は多良木町の史跡指定を受けている。
13. 昭和49～50年にかけて行われた熊本県文化課による発掘調査を「県調査」、その成果である昭和52年刊行の「蓮花寺跡・相良頼景館跡」『熊本県文化財調査報告第22集』を「県22集」と記す。
14. 本書の編集は永井・上村が担当した。
15. 多良木相良氏に係る史資料の分析を次の方に依頼し、また次の方々から玉稿をいただいた。
稲葉継陽（熊本大学 永青文庫研究センター長）
小野正敏（国立歴史民俗博物館名誉教授）
狭川真一（大阪大谷大学文学部教授）
鶴嶋俊彦（元人吉城歴史館長）
有木芳隆（公益財団法人 永青文庫副館長）
村木二郎（国立歴史民俗博物館准教授）
16. 発掘調査記録及び出土遺物は多良木町教育委員会で保管している。

凡 例

1. 出土遺物の分類方法

土師器、輸入陶磁器、国内産陶器、瓦、土師質製品、石製品、古銭、金属器に大分類し、さらに種別や産地、器種を考慮して再分類し、本報告はこの順に図を掲載している。

土師器	坏、小皿、土錘など
輸入磁器	青磁（碗、皿、浅型碗、小碗、坏、盤） 白磁（碗、皿、坏） その他の青磁白磁 青白磁（坏、壺、合子、小皿） 青花（碗、皿、大皿、その他）
輸入陶器	中国陶器（天目碗、盤、鉢、水注、四耳壺、壺、甕、その他） 朝鮮陶器
国内産陶器	中世陶器（瀬戸、美濃、常滑） 中世須恵器（東播系、在地系） 瓦質土器
銭貨	
金属器	刀剣、金具、鏡
石製品	滑石製品、砥石
その他	
近世陶磁器	磁器（碗、小坏、皿、鉢、蓋、瓶） 陶器（碗、小坏、皿、鉢、蓋、瓶）

なお、貿易陶磁器の分類は、小野正敏氏・村木二郎氏らによる全点調査に基づき、次の文献をもとに分類した。巻末の観察表に記載している。

・池谷初恵・小野正敏・岩元康成・小出麻友美・佐々木健策・村木二郎「中世琉球における貿易陶磁器調査Ⅰ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第226集 43-84頁 2021

また、出土遺物の分類・年代や編年にあたっては、次の文献を使用した。

- ・中野晴久「生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所 2005
- ・九州近世陶磁学会「九州陶磁の編年」2000
- ・山本信夫ほか「大宰府条坊跡XV陶磁器分類編」『大宰府条坊XV』2000 太宰府市教育委員会
- ・森田勉「14～16世紀の白磁に分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』1982
- ・小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』1982
- ・美濃口雅朗「樺番城窯（熊本県）」『中世窯業の諸相』2007「中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—」実行委員会
- ・美濃口雅朗「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究X』1994
- ・新版『概説 中世の土器・陶磁器』2022 日本中世土器研究会編

2. 人吉盆地産出石材の識別方法

これまで人吉盆地に所在する石造物の石材は、色調の違いから暗い色調の凝灰岩を阿蘇溶結凝灰岩、明るい色調の凝灰岩を加久藤溶結凝灰岩として認知されてきた。しかし、本報告では、パリノ・サーヴェイ（株）現地指導のもと、肉眼観察による岩石含有物（岩片・角閃石・輝石・長石・基質）の特定を行い、その特徴をもとに凝灰岩の識別を行った。その結果に基づき石材名を記載している。

3. 中世相良氏の認識について

本報告における中世相良氏の認識については、稲葉継陽・小川弘和編『中世相良氏の展開と地域社会』（戎光祥出版、2020年）を参考としている。

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 多良木相良氏の歴史文化遺産	1
第2節 計画の経緯と調査体制	5
1. 計画までの経緯	5
2. 調査・報告書作成の体制	5
第3節 調査の概要	5
1. 調査の概要	5
2. 調査に係る事務経過	6
3. 調査日誌抄録（令和3年度）	6
4. 調査日誌抄録（令和4年度）	7
5. 整理作業の経過	8
6. 各種の関連調査	8
7. 調査成果の公開と報告	8
第4節 多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会の記録	10

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 多良木町の位置と環境	12
1. 地理的環境	12
2. 歴史的環境	12

第Ⅲ章 蓮花寺跡・相良頼景館跡の再報告

第1節 『蓮花寺跡・相良頼景館』の再報告の概要	20
1. 再報告の趣旨	20
2. 再整理の方法	20
3. 出土遺物の分類方法	20
4. 熊本県文化課調査の経過	20
第2節 蓮花寺跡の再整理の成果	21
1. 蓮花寺跡の概要	21
2. 熊本県文化課調査（県調査）の概要	21
3. 遺構及び出土遺物	22
第3節 相良頼景館跡の再整理の成果	62
1. 相良頼景館跡の概要	62
2. 熊本県文化課調査の概要と資料の整合	62
3. 遺構及び出土遺物	63

第Ⅳ章 相良頼景館跡の調査

第1節 調査の方法	97
第2節 調査の成果	97
1. 令和3年度の調査成果	97
2. 令和4年度の調査成果	98

第Ⅴ章 青蓮寺境内の調査

第1節 遺跡の概要	106
1. 遺跡の概要	106
2. 青蓮寺阿弥陀堂の履歴	106
3. 平成25年度下水道再設置時の調査	106
4. 平成27年度下水道設置工事時の調査	106
5. 平成28年度の青蓮寺阿弥陀堂保存修理事業に伴う確認調査	107
第2節 青蓮寺古塔碑群の調査	113
1. 石造物の調査	113
2. 壇上積基壇の調査	113

第VI章 東光寺磨崖梵字の調査

第1節 遺跡の概要	121
第2節 東光寺出土の経筒	121
1. 経筒発見の経緯の整理	121
2. 経筒の出土状況（『九州日日新聞の記事から』）	121
3. 経筒出土地点の特定	122
第3節 調査の成果	122
1. 調査の方法	122
2. 調査の成果	123

第VII章 科学分析

1. 相良頼景館跡の自然科学分析	133
2. 東光寺の自然科学分析	150
3. 人吉盆地に分布する石塔に用いられた黒色物資の材質調査	156

第VIII章 総括

第1節 多良木相良氏研究の諸論	164
1. 稲葉継陽 『文献史料からみた多良木相良家・相良氏』	165
2. 小野正敏 『蓮花寺・伝相良頼景館跡と相良氏関連遺跡出土の貿易陶磁器調査』	176
3. 狭川真一 『青蓮寺壇上積基壇の系譜』	182
『東光寺磨崖梵字の系譜』	186
4. 鶴嶋俊彦 『多良木相良氏の城館遺跡』	190
5. 有木芳隆 『中世多良木の仏像と多良木相良氏』	199
6. 村木二郎 『東光寺経塚と出土資料について』	213
第2節 総括	221

挿図・目次

第1図 多良木町位置図	2
第1表 多良木村における遺跡概要	2
第2図 多良木相良氏関連遺跡位置図	3
第3図 相良氏系図	4
第4図 人吉盆地の地質図	16
第5図 人吉盆地の活断層と地形分類	16
第6図 多良木町遺跡地図	17
第2表 多良木遺跡地名表	18
第7図 多良木町字図	19
第8図 熊本県調査時の遺跡配置図及び旧地形図	26
第9図 蓮花寺跡トレンチ配置図及び遺構配置図	27
第10図 石積基壇検出状況図	28
第11図 石積基壇基礎部確認図及び蔵骨器出土状況図	29
第12図 石積基壇上に配置された石造物実測図	30
第3表 石積基壇上五輪塔計測表	31
第13図 石積基壇出土遺物（1）	32
第14図 石積基壇出土遺物（2）	33
第15図 石積基壇出土遺物（3）	34
第16図 A区埋鏡遺構及び石造物位置図・埋鏡遺構出土遺物	35
第17図 A区溝土層断面図	36
第18図 A区溝出土遺物（1）	37
第19図 A区溝出土遺物（2）	38
第20図 A区溝出土遺物（3）	39
第21図 A区溝出土遺物（4）	40
第22図 A区溝出土遺物（5）	41
第23図 A区溝出土遺物（6）	42
第24図 A区溝出土遺物（7）	43
第25図 A区溝出土遺物（8）	44
第26図 A区溝出土遺物（9）	45
第27図 A区溝出土遺物（10）	46
第28図 B区溝及び土層断面図	47
第29図 B区溝出土遺物（1）	48
第30図 B区溝出土遺物（2）	49
第31図 B区溝出土遺物（3）	50
第32図 B区溝出土遺物（4）	51
第33図 B区溝出土遺物（5）	52
第34図 B区溝出土遺物（6）	53
第35図 B区溝下層出土遺物（1）	54
第36図 B区溝下層出土遺物（2）	55
第37図 B区石敷遺構検出状況図	56
第38図 A区出土遺物	57
第39図 B区出土遺物	58
第40図 C区出土遺物（1）	59
第41図 C区出土遺物（2）	60
第42図 注記不明遺物	61
第43図 相良頼景館跡旧地形図及び土層断面図	68
第44図 相良頼景館跡遺構配置図及び土層断面図	69
第45図 東外濠出土遺物（1）	70
第46図 東外濠出土遺物（2）	71
第47図 西外濠出土遺物（1）	72
第48図 西外濠出土遺物（2）	73
第49図 西外濠出土遺物（3）	74
第50図 B区遺構配置図及び断面図（1）	75
第51図 B区遺構配置図及び断面図（2）	76
第52図 B区遺構配置図及び断面図（3）	77
第53図 A区遺構配置図	78

第 54 図	A 区断面図	79
第 55 図	柱穴出土遺物 (1)	80
第 56 図	柱穴出土遺物 (2)	81
第 57 図	B 区土器溜出土遺物	82
第 58 図	B 区Ⅲ層 (褐色土・盛土) 出土遺物 (1)	83
第 59 図	B 区Ⅲ層 (褐色土・盛土) 出土遺物 (2)	84
第 60 図	B 区Ⅲ層 (褐色土・盛土) 出土遺物 (3)	85
第 61 図	石積堤防詳細図	86
第 62 図	石積堤防立面図	87
第 63 図	広場出土遺物及び石積堤防基底部出土遺物	88
第 64 図	B 区出土遺物 (1)	89
第 65 図	B 区出土遺物 (2)	90
第 66 図	B 区出土遺物 (3)	91
第 67 図	B 区出土遺物 (4)	92
第 68 図	B 区出土遺物 (5)	93
第 69 図	A 区出土遺物	94
第 70 図	C・D 区出土遺物	95
第 71 図	D 区・注記不明遺物	96
第 72 図	相良頼景館跡地形図及びトレンチ配置図	99
第 73 図	令和 3 年度調査 北側土塁断面図	100
第 74 図	令和 3 年度調査 北側堀断面図	101

第 75 図	令和 3 年度調査時の出土遺物	102
第 76 図	令和 4 年度調査 北側堀断面図	103
第 77 図	令和 4 年度調査 北西側トレンチ・東側トレンチ	104
第 78 図	令和 4 年度調査時の出土遺物	105
第 79 図	青蓮寺境内地形図	108
第 80 図	青蓮寺阿弥陀堂立面図	109
第 4 表	青蓮寺阿弥陀堂変遷表	110
第 81 図	アンカーウエイト掘削時の土層図	112
第 82 図	青蓮寺古塔碑群配置図	114
第 83 図	壇上積基壇実測図及び頼景塔実測図	115
第 5 表	青蓮寺古塔碑群一覧表	116
第 84 図	東光寺磨崖梵字地形測量図	125
第 85 図	東光寺地区 CS 立体図	126
第 86 図	東光寺磨崖梵字法線マップ及び実測図	127
第 87 図	磨崖面横断及び縦断面	128
第 88 図	トレンチ土層断面図	129
第 89 図	令和 3 年度調査時の出土遺物	130
第 90 図	石窟展開図	131
第 91 図	石窟土層断面図及び令和 4 年度調査時の出土遺物	132
第 6 表	多良木相良氏に関する資料目録	224
	観察表	228

巻頭図版

- 巻頭図版 1** 球磨絵図 [部分] (1773) (人吉市教育委員会提供)
- 巻頭図版 2** 広島大学図書館所蔵「相良家文書」(寛政 8 年 山絵図のうち、青蓮寺絵図)
- 巻頭図版 3** 球磨川右岸の蓮花寺跡・相良頼景館跡・青蓮寺周辺の様子
米軍が撮影した昭和 22 年の多良木町
- 巻頭図版 4** 熊本県文化課調査写真 (昭和 49 ~ 50 年)
石積堤防・東濠跡
- 巻頭図版 5** 青蓮寺阿弥陀堂の背後から球磨川を眺む
県史跡・青蓮寺古塔碑群

- 巻頭図版 6** 相良頼景館跡北側土塁トレンチ断面
相良頼景館跡北側堀トレンチ断面
- 巻頭図版 7** 東光寺磨崖板碑オルソ画像
- 巻頭図版 8** 調査前磨崖板碑・石窟状況
石窟内部状況
石窟内右側壁から奥へと続く空洞状況

写真図版・目次

令和 3 年度 北側土塁トレンチ 南側土層断面	268
令和 3 年度 北側土塁トレンチ 中央部土層断面	268
令和 3 年度 北側堀トレンチ H-27 層青磁出土状況	268
令和 3 年度 北側土塁トレンチ 北側土層断面	268
令和 3 年度 北側堀トレンチ H-27 層青磁出土状況	268
令和 3 年度 北側堀トレンチ下層状況	268
令和 3 年度 北側土塁・堀トレンチ土層断面	269
令和 4 年度 北西側トレンチ 土層断面	269
令和 4 年度 北西側トレンチ 石積検出状況	269
令和 4 年度 北側トレンチ堀検出状況	269
令和 4 年度 北側トレンチ北堀 2 礫廃棄状況	269
令和 4 年度 北側トレンチ 北堀 2 覆土炭化物散在状況	269
令和 4 年度 東側トレンチ 土層断面	269
磨崖板碑 上部梵字残存状況	270
磨崖板碑 下部梵字残存状況	270
令和 3 年度 東光寺磨崖梵字トレンチ土層断面 (西側)	271
令和 3 年度 東光寺磨崖梵字トレンチ土層断面 (東側)	271
令和 3 年度 トレンチ 10 層出土状況 (1385)	271

令和 4 年度 石窟前庭~内部状況	271
令和 4 年度 石窟内 湧水の水道	272
令和 4 年度 石窟右側壁柄内	272
令和 4 年度 石窟天井に残る加工痕	272
令和 4 年度 石窟内部 土層断面	272
令和 4 年度 石窟奥床検出状況	272
令和 4 年度 石窟左側壁柄内	272
令和 4 年度 石窟左側壁に残る加工痕	272
青蓮寺古塔碑群へと続く階段	273
青蓮寺・壇上積基壇 (南側)	273
青蓮寺・壇上積基壇 (東側)	273
青蓮寺・壇上積基壇 (西側)	273
相良頼景館跡 B 区土器溜め出土・土師器	274
蓮花寺跡出土・中世須恵器 (仏具)	274
蓮花寺跡出土・瓦質土器 (火舎)	274
蓮花寺跡 B 区溝下層出土・土師器	274
蓮花寺跡 B 区溝出土・粘土塊	274
蓮花寺跡 B 区溝出土・鉄滓	274

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 多良木相良氏の歴史文化遺産 ※大日本古文書家わけ『相良家文書之一』〔相1号〕と記す

肥後国球磨郡の荘園公領制は、平頼盛の太宰大貳時代に蓮華王院領とする球磨御領立荘から始まる。在地領主が上納を共同で請け負うという国衙領的性格の強い半輪租領であった。その後、鎌倉幕府の成立を機に一旦没官領化された後、再び球磨白間野荘として頼盛へ安堵され、建久3年(1192)に球磨御領は上球磨を中心とする公田、中球磨を中心とする鎌倉殿御領、下球磨を中心とする人吉荘に再編成される〔相2号〕。この公田の中には没官領「多良木村百丁」が設定され、それを相良頼景が獲得し、その嫡子・長頼が元久2年(1205)に人吉荘地頭に補任〔相3号〕されることから、相良氏の球磨郡支配は人吉盆地の東西両端から出発する。以後、彼らを祖とする鎮西相良氏は、領家側の権限を侵食しつつ、地域開発を行っていく。

このように、相良頼景が球磨郡多良木村や肥後国山北・山井などを獲得するところから鎮西相良氏ははじまるが、そもそも、相良頼景は遠江国相良荘を本貫とする御家人であった。頼景の嫡子・長頼は元久2年(1205)に人吉荘地頭職に補任され、安貞3年(1229)の頼景讓状〔相5号〕によって、多良木村も継承している。また、頼景は庶子たちに山北・山井を分割相続し、宗頼の泉本荘高橋や頼平の筑後三池北郷内など、庶子らも勲功所領を経て鎮西相良氏各家を分出させていく。

相良庶家が出分される中で、建長元年(1249)頃に長頼は嫡子・頼氏に多良木村を継がせたと考えられ〔相11号〕、ここから鎮西相良氏全体の嫡流・多良木家がはじまる。一方、長頼は庶子たちに人吉荘南方の名々を分与するが、その中の庶子・頼俊から佐牟田家が始まり、また、長頼の庶子・頼親の流れがのちに戦国大名へと成長する永富家へと繋がっていく。

鎌倉時代をとおして多良木家が惣領権を有しており、佐牟田家の菩提寺である願成寺の管理権も多良木家が掌握していた〔願成寺文書〕。その多良木家の本拠となったのが「多良木村」である。鎌倉時代後期の鎮西相良氏の権益地をひろくと、本拠である多良木村をはじめ、人吉荘や熊本県北部の山井山北、泉新荘、京都、鎌倉、遠江などにあり、惣領家である多良木家はそれらに対し、権益を有していた。また、異国警固番役の諸役の沙汰も惣領が所管していた〔相32号〕。

南北朝期の相良氏の情勢が窺える『相良経頼契約状』〔相62・63号〕は、元弘3年(1333)に頼広(佐牟田家)が経頼(多良木家)から人吉荘地頭職の証文を借り出したもので、寛元元年(1243)の鎌倉幕府による人吉荘北方の没収判決に対する回復活動を建武政権に訴訟

をおこす際の契約状である。人吉荘重要文書を多良木家が所持していることがわかる。では、佐牟田家はその担保として多良木家に出した条件は、回復時には四分の一の権益を譲渡すること、訴訟に際しては何度でも証文を貸し出すこと、互いに約束を破った場合には、人吉荘の全てをどちらか一方が支配することであった。結果的に佐牟田家は建武5年(1338)8月に回復に成功〔相80号〕するが、借り出した際の約束は履行されることはなかった。何故ならば、この回復は南朝側の多良木家を討伐した功績として与えられたものだったからである。このように鎌倉時代における多良木家の惣領家たる地位を、南北朝期を境に佐牟田家が圧倒するようになる。

球磨郡は上球磨を中心とする勢力をまとめた多良木家と、下球磨の勢力をまとめた佐牟田家が、南北朝内乱では互いに抗争するが、元中8年・明德2年(1391)には、佐牟田家と多良木家は和解している〔相186号〕。その頃の多良木家の活動を挙げれば、応永19年(1412)に御大師像造像〔仏像紀年銘〕、応永23年(1416)に王宮神社楼門整備、嘉吉3年(1443)に青蓮寺阿弥陀堂大規模改修〔棟札〕を行っている。

室町時代の文安5年(1448)、永富家の永富長統が佐牟田家・多良木家の両家を統一、相良本宗家を継承する。この文安5年の内訌によって、多良木相良氏は滅亡した。以後、相良氏の名跡は版籍奉還まで続き、相良氏のように鎌倉初期から明治初期まで所領・本拠を変転せず封建領主として名跡を継承した武家は全国でも大変珍しい事例である。相良家に伝来した国重文『相良家文書』(慶應義塾大学蔵)や中世以来の建造物などの豊富な資料群は、中世社会を知る好史料群となっている。

人吉球磨地域には、このような相良氏の足跡を具体的に物語る歴史文化遺産が保存状態良く残されている。その上、一向宗の禁制やウンスンカルタ遊戯法、臼太鼓踊り・球磨神楽・球磨拳などの伝承、独特の意匠を継承した多くの社寺建造物群など、有形無形の独特の文化が継承されている。

特に、多良木町大字黒肥地地域は相良氏惣領家が本拠を構えた土地で、鎌倉から室町時代にかけて形成された遺跡・山城跡・菩提寺・神社などが状態良く残されている。第1表・第2図に多良木相良氏関連の歴史文化遺産の位置図・一覧表を、第3図で相良氏系図を掲載しているので参照いただきたい。

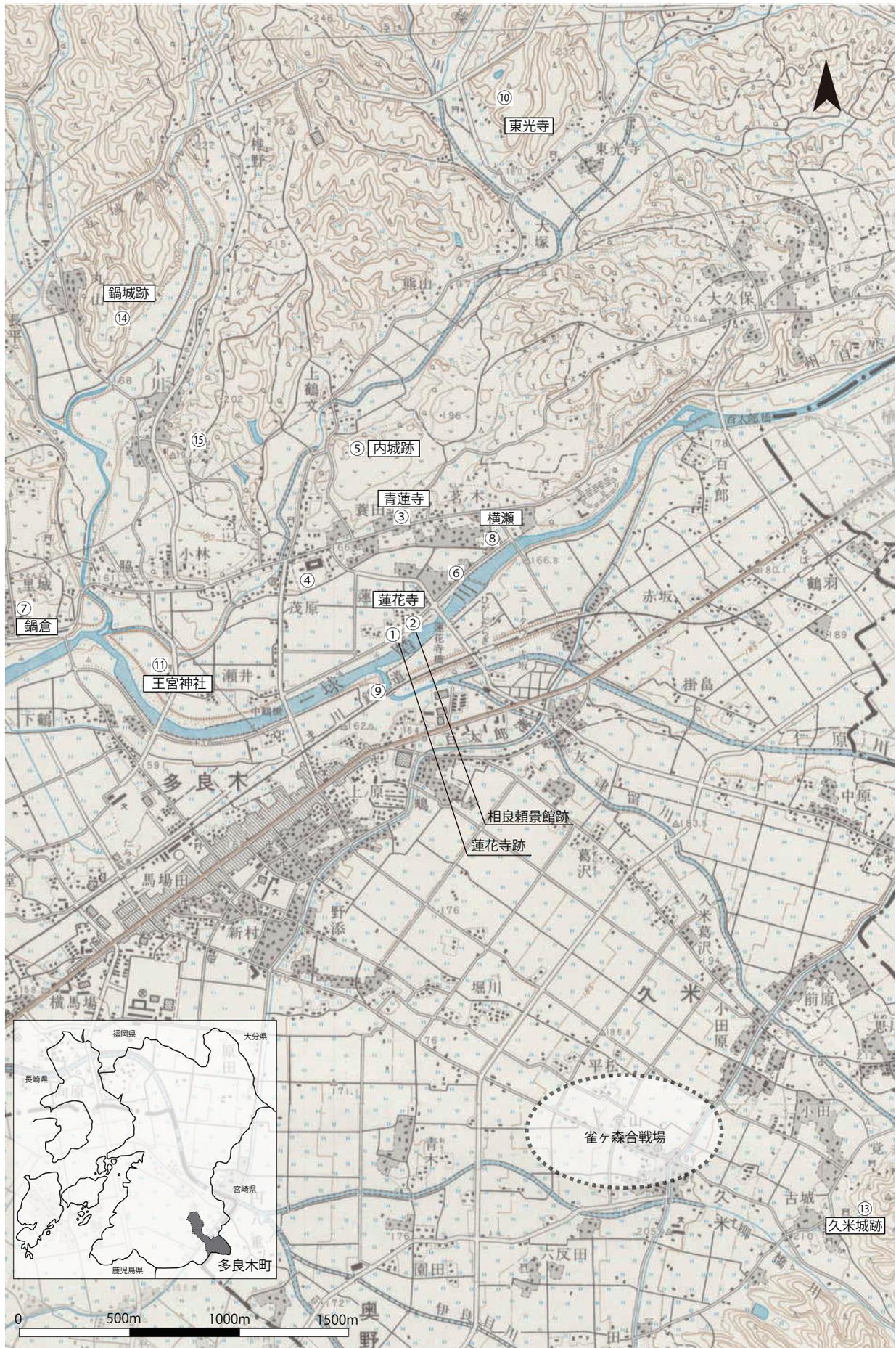


第1図 多良木町位置図

第1表 多良木村における遺跡概要

No.	遺跡・城館・寺社等	歴史文化遺産の概要
①	蓮花寺跡	嘉禎元年（1235）、多良木相良家・頼氏の創建と伝わる。五輪塔 102 基、石塔 30 基が残る
	蓮花寺跡古塔碑群 [県（建）]	文永 6 年（1269）銘の笠塔婆は、多良木相良家・頼氏の極楽往生を祈願したもの
②	相良頼景館跡 [町（史）]	相良頼景の館跡比定地〔外・南・嗣・当〕
③	青蓮寺阿弥陀堂 [国（建）]	多良木家・頼宗が、頼景を供養するために永仁 3 年（1295）に廟所を創建、その 3 年後に青蓮寺創建
	青蓮寺古塔碑群 [県（史）]	
	青蓮寺阿弥陀三尊 [国（彫）]	堂内には、永仁 3 年銘の阿弥陀三尊が安置、背後斜面に五輪塔群が残る
④	伝弥勒寺跡	鍋城に安置されていた大治 5 年（1130）銘の薬師如来像が安置されていた
⑤	内城跡	青蓮寺背後の台地の北端に所在し、多良木家・頼観が城主とされる
⑥	鮎之瀬井手	「永仁三年五月 鮎之瀬井手碑 領主相良頼宗建」記銘の石造物が所在
⑦	里ノ城跡	多良木家滅亡後、永富家の城代が城番となる
⑧	伝横瀬館跡	永吉荘を領知した横瀬（平河）高実の館跡との伝承が残る
⑨	伝妙法寺跡	仁治元年（1240）土井口妙法寺再興とある
	東光寺薬師堂 [町（建）]	多良木家・頼氏の再興と伝えられる
⑩	東光寺経塚及び経筒 [県（工）]	凝灰岩壁に彫刻された磨崖板碑があり、隣接地から経筒 8 口が出土している
	東光寺磨崖梵字 [町（史）]	銘文には頼氏をはじめ大神氏、太秦氏などの名がみえる
⑪	王宮神社・楼門 [県（建）]	創建には日向在庁土持氏に関わる。楼門は多良木家・頼久が応永 23 年（1416）に再建した建造物
⑫	東城跡	多良木家・頼観及び舎弟頼仙が城主であったが、文安 5 年（1448）多良木相良家が滅亡すると廃城になる
⑬	久米城跡	戦国時代の相良氏が久米支配のために置いた支城の一つで、南北朝期・室町期の城跡も残る
⑭	鍋城跡	南北朝期の多良木家の居城と伝えられる
⑮	長運寺阿弥陀如来座像 [県（彫）]	長運寺は元々鍋城にあった寺院で、火災のため弘和 3 年（1383）に現在地の長野に再建されたと伝わる
	長運寺厨子 [県（工）]	
	西光寺厨子 [県（工）]	

※球麻外史（外）、南藤蔓綿録（南）、嗣誠独集覧（嗣）、御当家聞書（当）

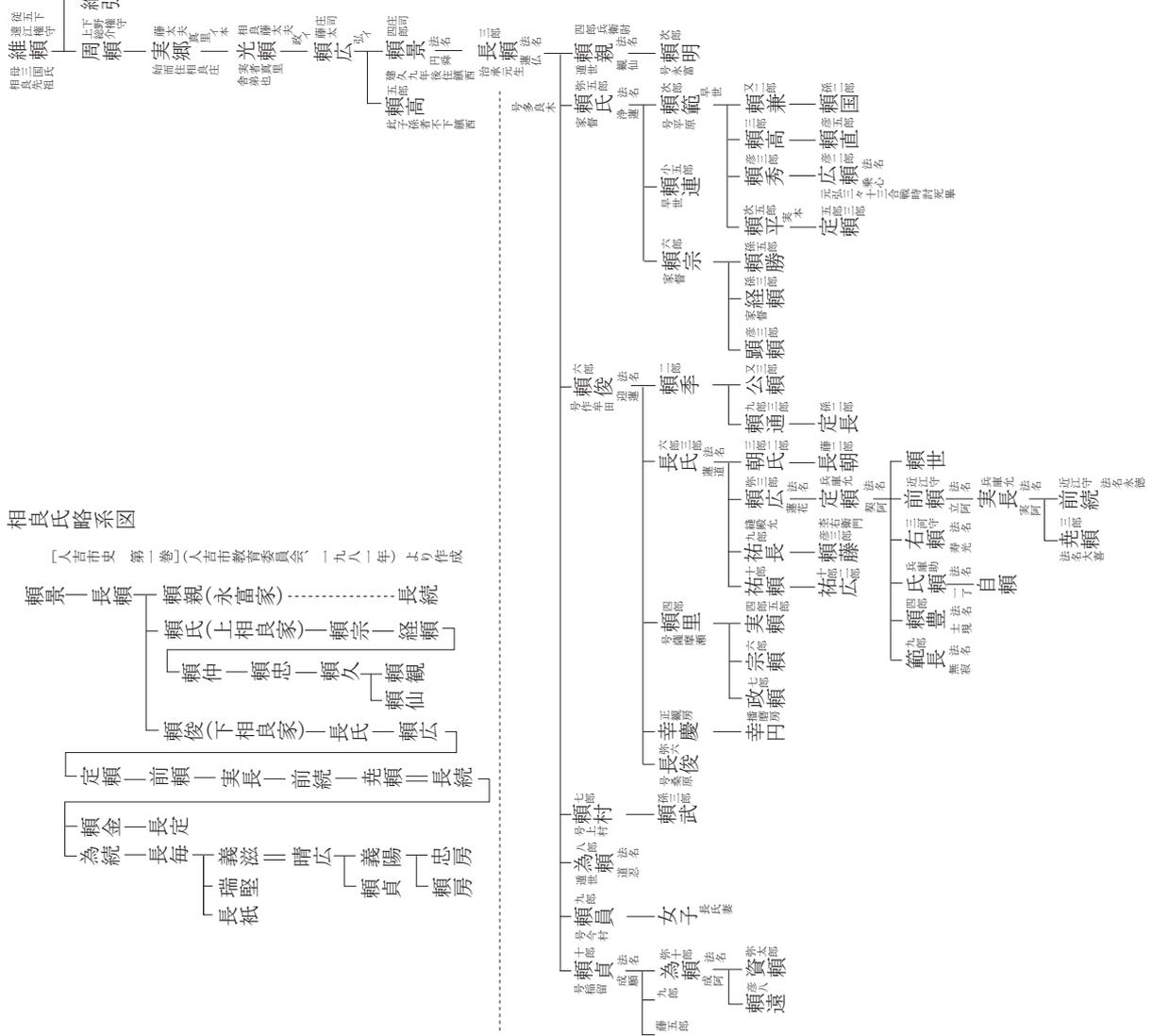


第2図 多良木相良氏関連遺跡位置図

相良氏系図

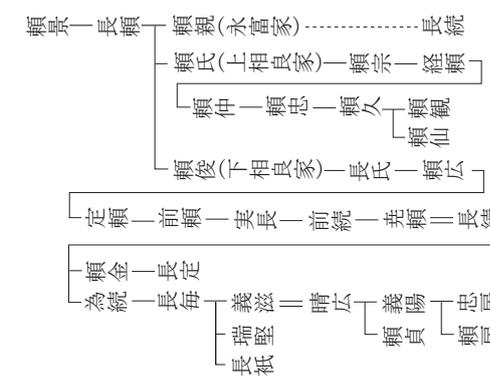
相良氏系図(部分) 相良家書(中六十四) 慶應義塾図書館所蔵

「ほとけの里と相良の名宝」(ほとけの里と相良名宝調査委員会、二〇一五)より作成

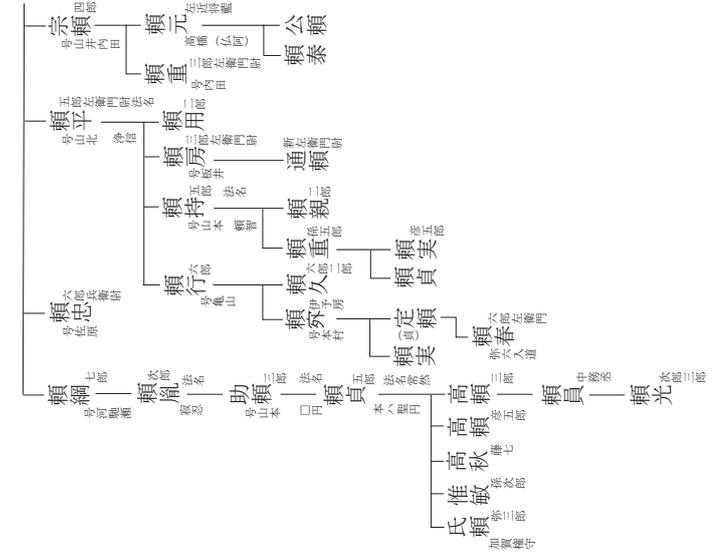


相良氏略系図

「古事記 第二巻」(吉市教育委員会、一九八一)より作成



相良氏系図 (阿蘇品保氏氏所蔵「写本相良庶家系図」を中心に作成)



第3図 祐氏系図

第2節 計画の経緯と調査体制

1. 計画までの経緯

多良木町では、平成21年度から歴史回廊事業に着手した。この歴史回廊事業は、歴史文化遺産の調査と活用を推進することを目的にした事業である。その一環として、歴史的建造物調査及び仏神像調査を実施した。平成21～24年度にかけては、建造物・仏神像・遺跡・山城跡・石造物・経筒・文献・連歌などの各分野の専門家を招聘した講演会及び現地見学会を実施した。平成26年度には、指定文化財及びその他の歴史文化遺産の悉皆調査(文化財の総合的把握)を実施した。これらの成果をもとに、平成27年度「多良木町歴史文化基本構想(以下「基本構想」という。)」を策定している。この基本構想の中で「相良氏関連遺跡群」を地域の文化財の特性と位置付けた。

平成27年には「相良700年が生んだ保守と進取の文化」と題した物語が日本遺産に認定された。この構成文化財においても「多良木相良氏遺跡群」を構成文化財として位置付けた。

こうした歴史文化遺産に光をあて、遺産価値を明らかにして国レベルの文化財指定を図って保存と活用を推進し、人吉市の人吉城跡や国宝青井阿蘇神社を中心とした相良氏に係る史跡・国宝・重要文化財と併せて、「相良氏遺跡群」をキーワードに人吉球磨地域全体を周遊する核に位置付け、周辺の観光素材を取り込んだ「歴史回廊」の実現を目的に、本調査は計画された。

さらに、多良木相良氏関連遺跡群の歴史的な変遷や機能を総合的に考察することが必要になり、令和3年度から多良木相良氏関連遺跡群を対象とした、国庫補助事業として多良木相良氏関連遺跡群発掘調査に着手した。

この事業は令和4年3月に策定された「第6次多良木町総合計画」「多良木町教育大綱」に、「歴史回廊たらい交流促進事業」として位置付けられている。

2. 調査・報告書作成の体制

【調査・報告書作成機関】

(令和3年度)

〔事業主体〕 多良木町長 吉瀬 浩一郎
多良木町教育長 佐藤 邦壽
〔事業総括〕 企画観光課長 林田 浩之
〔事業担当〕 歴史観光係長 永井 孝宏
歴史観光係学芸員 上村 麻妃
歴史観光係主事 宗像 星磨
〔調査・整理作業〕 久保 なつ子 大原 絵梨加
〔発掘調査協力〕 蓑田 温子 八橋 正徳

(令和4年度)

〔事業主体〕 多良木町長 吉瀬 浩一郎
多良木町教育長 佐藤 邦壽

〔事業総括〕 企画観光課長 林田 浩之
〔事業担当〕 歴史観光係長 永井 孝宏
歴史観光係学芸員 上村 麻妃
歴史観光係主事 宗像 星磨
〔調査・整理作業〕 大原 絵梨加 谷口 千香
〔発掘調査協力〕 蓑田 温子 八橋 正徳

(令和5年度)

〔事業主体〕 多良木町長 吉瀬 浩一郎
多良木町教育長 佐藤 邦壽
〔事業総括〕 企画観光課長 林田 浩之
〔事業担当〕 歴史観光係長 永井 孝宏
歴史観光係学芸員 上村 麻妃
歴史観光係主事 平田 真人
〔調査・整理作業〕 大原 絵梨加 谷口 千香
〔調査協力者・見学者〕

浅野晴樹 荒木和憲 有木芳隆 池田朋生 石井伸夫
市村高男 伊藤裕偉 今岡 稔 上床 真 榎本 渉
大石一久 大木公彦 小川弘和 海邊博史 岸田裕一
黒川信義 佐々木健策 佐藤亜聖 島津義昭 島田豊彰
下村 悟 鈴木康之 杉村彰一 高津 孝 高橋 学
竹田宏司 田中大喜 千々和至 塚本和弘 出合宏光
手柴由美子 中司健一 中島圭一 中山 圭 西田尚史
西山昌孝 橋口 亘 長谷川倫和 花岡興史 原田昭一
福島金治 藤井佐由里 前川清一 松下善和 溝下昌美
美濃口雅朗 三村講介 村木二郎 森山由香里
柳原敏昭 山口博之

第3節 調査の概要

1. 調査の概要

相良頼景館跡は、隣接する蓮花寺跡とともに昭和49・50年に熊本県文化課による調査が行われ、昭和52年に報告書が刊行されている。出土遺物や図面を含む関連資料は、平成27年に熊本県から多良木町に譲渡された。

今回の調査は「蓮花寺跡・相良頼景館跡」『熊本県文化財調査報告書第22号』の再整理作業、保存目的の重要遺跡確認調査、青蓮寺及び蓮花寺跡の石造物調査で構成した。

「蓮花寺跡・相良頼景館跡」の再整理作業では、当時作成された図面の整理・デジタル化、写真資料のデジタル化、出土遺物全点を対象に再分類・再実測を行った。その成果を、再報告するものである。

重要遺跡確認調査では、相良頼景館跡の範囲確認のためのトレンチ調査や、遺存する土塁及び堀の構築時期の特定及び構造確認のためのトレンチ調査を行った。

東光寺磨崖梵字では、令和3年第1回の調査指導委員会において、磨崖梵字ではなく磨崖板碑であることの確

認がなされたために、この委員会会議では「東光寺磨崖板碑」と呼称している。調査は、磨崖面の実測、磨崖面前面でのトレンチ調査、磨崖面脇に穿たれた石窟の調査を行った。

青蓮寺境内地の調査では、解体修理調査の報告及び周辺開発による試掘確認調査の整理、県指定史跡「青蓮寺古塔碑群」の記銘調査・主要五輪塔の実測を行った。また、現蓮花寺に移設された石積基壇上の主要五輪塔の実測も併せて行った。

2. 調査に係る事務経過

【令和3年度】

令和3年5月22日付け多企発第27号(相良頼景館跡)及び28号(東光寺磨崖梵字)にて法99条の通知。

令和4年3月29日付け多教発第2177号(東光寺磨崖梵字)、2178号(相良頼景館跡)で、埋蔵物発見届を多良木警察署長に提出。

【令和4年度】

令和4年6月3日付け多企発第451号(相良頼景館跡)及び453号(東光寺磨崖梵字)にて法99条の通知。

令和5年3月31日付け多教発第2188号(東光寺磨崖梵字)、2187号(相良頼景館跡)で、埋蔵物発見届を多良木警察署長に提出。

3. 調査日誌抄録(令和3年度)

(相良頼景館跡)

9/2	調査開始 写真撮影
9/6	土塁断面掘削中に、土留め材に転用された整形切石を確認。1点は記念碑からの転用材。
9/7	整形切石の背後から近世陶磁器出土。
9/8	土塁断面部分の掘削がある程度進んだところで、下位確認のためにトレンチを設定。土塁構築土から瓦質土器出土。
9/9	北側土塁トレンチ掘削。
9/10	土塁北側石積の裏込め部分掘削。地権者・橋本氏見学。
9/13	北側土塁トレンチ掘削。北側堀予想部分にトレンチ設定し、掘削始める。
9/15	北側土塁トレンチ掘削。北側堀トレンチ掘削、近代以降の溝跡確認。
9/16	台風14号の影響で午後から雨。北側土塁断面の精査及び3D測量。
9/21	北側土塁及び堀トレンチの掘削。

9/22	北側土塁及び堀トレンチの掘削。隣家の黒川氏からヒアリング。土塁北側の石積(1975-1985)構築後に、土塁開削が行われたとのこと。基礎掘り込みは石積構築に伴うもので、昭和50年の調査時の断面と比較した結果、50年調査後に大きな改変をうけていることがわかった。
9/24	北側堀トレンチの旧耕作土から近代の陶磁器出土。
9/27	北側堀トレンチの掘削。
9/29	多良木中学校職場体験(発掘体験)。
9/30	北側堀トレンチの掘削。
10/1	北側堀トレンチの掘削。水田耕作に伴う溝覆土の掘削終わる。
10/2	出合氏(相良村)来跡。北側堀トレンチの掘削。北側土塁の整地層を土壌サンプリング。
10/4	北側土塁トレンチにて整地層を掘削。土師器多数出土。北側堀トレンチにて、堀覆土の礫層を確認。
10/6	木村氏(県文化課)、溝下氏(元湯前町)来跡。北側堀トレンチの掘削。北側堀跡の南側を確認。
10/7	北側土塁トレンチ掘削。北側堀トレンチの掘削。耕作土を掘削。
10/8	北側堀トレンチの掘削。
10/12	転落防止柵設置。
10/14	重機による表土除去及び安全養生。北側堀跡の北側対岸を確認するためトレンチを延長。北側堀トレンチ延長は9mとなる。層位は現代水田土、床土、旧水田土、旧床土、その下に礫層(地山)を確認。その上面にて堀の掘り方を確認した。堀跡は上端幅が6mを測る。その後、堀掘り方中位まで掘削した。中位層までは、拳大から頭大の礫が多く出土した。中位下からは植物遺体を含む粘質土を認め、その中から青磁碗が出土した。断面確認の堆積状況から、当初堀跡が埋没した後に、堀を掘り直していることがわかる。この掘り直し堀の埋没は、人為的に礫を中心に廃棄。その礫層中から土師坏が1点出土。
10/15	堀覆土粘土層から出土した青磁碗の取上げ。その後、堀覆土掘削。
10/18	中司氏(益田市)来跡。北側土塁トレンチ整地層掘削。堀覆土掘削。
10/19	堀覆土最下層まで掘削。
10/21	写真撮影のための清掃作業。土層精査及び分層。

10/22	写真撮影。北側土塁トレンチ掘削。北側土塁下の中世整地層及び地山と思われる明褐色シルト層まで掘削した。この北側土塁トレンチ南側では黒褐色土（カーボン含む）が中世整地層から10cm落しても消えなかったため、これをS-1とし、ここから出土した遺物もS-1として取り上げた。
10/27	北側土層堆積状況精査。
10/30	北側土層堆積状況精査。
11/2	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会準備
11/4	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会準備
11/5-6	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会
11/15	北側土塁トレンチ南側の掘削。
11/16	北側土塁トレンチ掘削。中世整地層の下を全体的に掘削。明褐色シルト層、その下の赤味帯びる粘性のある明褐色土、その下に礫層が堆積。明褐色シルト層、その下の赤味帯びる粘性のある明褐色土は、トレンチ南側には堆積していない。トレンチ北側では、明褐色シルト層、その下の赤味帯びる粘性のある明褐色土の下に、黄褐色シルトが確認され、その下が礫層となる。また、土塁直下の黒色シルトを中世整地層として整理していたが、精査の結果、上から鉄分混じりの黒褐色シルト、炭化物が多く混じる黒褐色シルト、明褐色シルトが混じる黒褐色シルトに分層した。さらに、トレンチ南側で確認した炭化物・焼土が混じる層を便宜上、中世整地層②とした。
11/18	北側土塁トレンチ北側石積付近の中世整地層の下位を掘削。堆積状況を確認。堆積状況は次の通り。 土塁構築土 中世整地層①：カーボン、土器片多く含む 中世整地層①-2：上下の漸移層 明褐色シルト：混じりないシルト、水性堆積物 赤味ある褐色粘質土：遺物出土なし 明褐色シルト：混じりないシルト、水性堆積物 礫層：基盤層、土塁付近が最高所、自然堤防跡か
11/19	土塁トレンチ写真撮影。土層図作成。
11/24	奥球磨セミナー現場見学（25人）教育委員会現場視察。
11/26	奥球磨セミナー現場見学（24人）
11/29	多良木町議会による現場視察。
12/1	杉村彰一氏による現場指導。県調査についてヒアリング。
12/21	科学分析土壌サンプル採取。

1/5	土層注記作業。
3/29	北側堀跡トレンチ、重機による埋め戻し。

〔東光寺磨崖梵字〕

9/2	調査開始。
10/8	調査前状況撮影。
10/11	トレンチを設定、掘削始める。
10/12	トレンチ掘削、竹根除去。
10/13	トレンチ掘削。
10/20	表土下の暗褐色シルトを掘削。
10/30	堆積状況は、表土の下に明褐色土（混入物あり）が約60cm堆積していた。その下位層から土器破片が出土。この層の下位が岩盤と予想。
11/2	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会準備
11/4	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会準備
11/5-6	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会
12/3	トレンチ掘削、磨崖梵字周辺の地衣類を除去。
12/7	トレンチ掘削、暗褐色シルト層を掘削。
12/8	トレンチ掘削、写真撮影。基盤層と思われる層は、凝灰岩風化土と思われ、白灰色土のブロックが目立つ。その中に、褐色ブロックも少々混じっており、盛土の可能性もある。現段階では、これを基盤層としているが、この直上にて、土師器や青磁碗が出土した。
2/3	基盤層と予想していた層を掘削。
2/4	基盤層と予想していた暗灰褐色シルトから瓦質土器が出土。出土状況の撮影を行い、周辺を精査。この層が客土であることを確認。その下位からグライ化した層を確認。この層が調査対象時期の堆積物と思われる。グライ層は斜めに堆積している。
2/7	グライ層まで掘削。
2/10	グライ層掘削。
2/14	グライ層掘削。写真撮影。図面作成、調査終了。

4. 調査日誌抄録（令和4年度）

〔相良頼景館跡〕

9/21	台風14号により倒木した樹木の撤去。
10/5	調査前撮影、除草作業、トレンチ設定。
10/6	北西トレンチの掘削、表土直下に現代の焼土層確認。
10/12	北西トレンチの掘削。
10/14	北西トレンチの掘削、整地層確認。常滑出土
10/18	北西トレンチの掘削、トレンチ北側で石積確認。
10/19	東側トレンチの設定及び掘削。
10/24	北側トレンチの設定、重機掘削の準備。

10/25	北側トレンチ重機による表土除去・遺構検出。 北西トレンチ重機による北側伸長。
10/26	北西トレンチの掘削。北側トレンチの掘削、 旧耕作土及び溝跡を掘削。
10/27	北側トレンチの掘削、堆積層の分層作業。
10/28	北側トレンチの掘削、旧耕作土・床土の除去 完了。トレンチ配置図の作成。
11/4	北側トレンチの掘削。
11/7	北側トレンチの掘削。 堀掘り方北側にて頭大の礫群を確認。
11/8	東側トレンチの掘削。北側トレンチの掘削、 堀掘り方南側部分を掘削。
11/9	東側トレンチの掘削。旧溝を確認。 北側トレンチの掘削。堀1と堀2の位置確認。 堀2覆土にて炭化物の散在層を確認。
11/10	北側トレンチの掘削・清掃。 北側トレンチの土層断面図作成、写真撮影。
11/15	東側トレンチの掘削、旧暗渠確認。
11/17	東側トレンチの掘削、東側堀の掘り方を確認。
11/21	下村氏（別府大学）視察
11/24	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会準備。
11/25	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員による 視察。
12/1	北西トレンチの掘削、整地層の下が水性堆積 層で無遺物層、その上面から遺構掘り方を確認、 その覆土は堀1覆土に似る。 東側トレンチの掘削、水性堆積層の下に礫層 を確認。

〔東光寺磨崖梵字〕

9/1	調査着手、写真撮影、調査準備（清掃・除草）。
9/5	台風11号接近による現場養生。
9/6	台風11号接近による現場養生。 午後から台風通過後の清掃作業。
9/7	石窟前面の崩落土の掘削。
9/8	石窟前面の崩落土の掘削、土壌の採取。
9/12	石窟の掘削、前庭部にて礫を確認。
9/13	石窟及び前庭部の掘削、土壌サンプル採取。
9/14	石窟及び前庭部の掘削、断面にて土層検討。
9/15	石窟の掘削、磨崖面の地衣類の除去。
9/16	磨崖面地衣類の除去、台風14号接近による 現場養生。
9/20	台風14号の影響により倒木あり。
9/21	台風14号により倒木した木の撤去。
9/23	狭川委員による専門指導。 西教育委員、高橋氏（太宰府市）視察。
9/26	石窟奥壁部分の掘削、土壌サンプル採取。

9/28	石窟奥右奥の撮影、前庭部の掘削。 磨崖面左側の窟内部の撮影。
9/29	石窟清掃、土層精査、磨崖面の除草。
9/30	石窟土層断面撮影、土層注記。
10/4	石窟の実測作業。
10/7	東光寺調査撮影。
11/2	石窟展開図・土層図作成。調査終了。

5. 整理作業の経過

【平成28年度（2016）～令和元年度（2019）】

- 1次整理：現場図面一覧表及び遺物一覧表の作成
現場図面と遺物の整理
出土遺物の清掃

【令和2年度（2020）】

- 2次整理：現場図面のデジタル化
現場写真のデジタル化
遺物の分類、実測、デジタルトレース

【令和3年度（2021）】

- 令和3年度出土遺物の洗浄・注記
遺物実測及びデジタルトレース
図版作成

【令和4年度（2022）】

- 令和4年度出土遺物の洗浄・注記
遺物実測及びデジタルトレース
図版作成

【令和5年度（2023）】

- 遺物実測及びデジタルトレース
図版作成
レイアウト編集
報告書作成

6. 各種の関連調査

令和5年1/10～12：小野委員による灰塚遺跡陶磁器
全点調査

令和5年3/16～18：牧之原市・菊川市調査

令和5年8/18：パリノ・サーヴェイ(株)による石材調査

令和5年9/30～10/3：小野委員による相良頼俊館跡・
中原城跡・山田城跡・高城跡陶磁器全点調査

令和5年9/29：九州国立博物館協力による石造物蛍光
X線分析

7. 調査成果の公開と報告

発掘調査は原則公開とし、現場説明会や地元依頼の見
学会を積極的に行った。

2021.11.24 多良木町教育委員会による見学



2021.11.29 多良木町議会視察



2021.11.24-26 奥球磨セミナー



2022.3.12 黒肥地 1.2.3 区へ公開



2022.11.1 久米2区公民分館視察





Taragi Town Topics



町内文化財を国史跡に 調査指導委員会開催

7月1日、多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会が開催されました。

当委員会は、多良木相良氏関連の文化財を国史跡にすることを目的に、令和3年度から開催され、今回で2回目となります。委員によって、これまでの発掘調査の成果や、今後の調査方針が議論されたほか、伝相良頼景館跡・青蓮寺古塔碑群・東光寺磨崖梵字の現地視察を行いました。

5 広報たらぎ 2022. 8

第4節 多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会の記録

多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会を令和3年4月1日付けて設置（令和3年3月24日多良木町教育委員会告示第5号）した。

〔多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会〕

- 稲葉 継陽（熊本大学永青文庫研究センター長）
- 小野 正敏（国立歴史民俗博物館名誉教授）
- 狭川 真一（大阪大谷大学文学部歴史文化学科教授）
- 鶴嶋 俊彦（元人吉城歴史館館長）
- 蓑田 温子（多良木町文化財保護委員）

【令和3年11月5日～6日 第1回委員会】

委嘱状交付

委員長及び副委員長の互選

互選により稲葉委員長、鶴嶋副委員長に決定
報告事項（事業趣旨説明）

検討事項

- ・相良頼景館跡及び東光寺トレンチ調査の成果報告
- ・東光寺磨崖梵字は磨崖板碑

現地見学

・相良頼景館跡・青蓮寺・東光寺磨崖梵字・中山観音堂

【令和4年7月1日 第2回委員会】

令和3年度調査の報告

令和4年度の調査方針

総合調査報告書について

現地視察

- ・相良頼景館跡・青蓮寺・東光寺磨崖梵字

【令和4年11月25日 第3回委員会】

令和4年度調査の報告

遺跡の名称と範囲について

総合調査報告書について

将来の方向性について

現地視察

- ・相良頼景館跡・東光寺・青蓮寺・内城跡・里城跡
- ・八日薬師堂・古多良木・久米城跡

【令和5年8月4日 第4回委員会】

委嘱状交付

委員長及び副委員長の互選

互選により稲葉委員長、鶴嶋副委員長に決定
令和4年度調査の報告

総合調査報告書について

中世城館・近世城郭遺跡等の保存に関する検討会について



①伝相良頼景館跡の土塁跡 ②伝相良頼景館跡の土塁跡 ③東光寺磨崖梵字の観察状況

協力していただく専門家皆さま

氏名	所属	役割
稲葉 継陽 さん	熊本大学永青文庫 研究センター長	専門は文献史学。 古文書から遺跡の変遷を解明、価値付けを行います。
小野 正敏 さん	国立歴史民俗博物館 名誉教授	専門は考古学。特に陶磁器研究の第一人者。 伝相良頼景館跡から出土した陶磁器の分析を担当します。
狭川 真一 さん	大阪大学文学部 文化学専攻	専門は考古学。特に石造物研究の第一人者。 東光寺磨崖梵字を調査し、価値付けを行います。
鶴嶋 俊彦 さん	元人吉城歴史館館長	専門は歴史地理。 ほとんどの相良氏関連の山城跡を踏破しています。
養田 潤子 さん	多良木町文化財 保護委員	歴史文化遺産の保護と活用を図ります。

伝相良頼景館跡では、土塁の外側に幅6m、深さ20cm程度の溝があることがわかりました。その溝からは15世紀中頃の中国の青磁が出土しました。今後の調査の焦点は、溝の変遷を明らかにすることです。

また、東光寺磨崖梵字では、磨崖梵字の元図化を行った結果、磨崖梵字の板碑であることがわかりました。板碑とは、関東二田で鎌倉時代に流行する石造物です。なぜ、東国の石造物文化を移入したのか興味深いポイントです。

【文化庁発】YouTube
「いせきへ行くこう！」vol.9
中世が薫る隠れ里
～熊本県多良木町～ 配信中

ただ今、発掘中！

多良木相良氏遺跡群

町では、多良木相良氏関連遺跡群の国史跡への指定を目指しています。令和3年度の調査では、伝相良頼景館跡および東光寺磨崖梵字の発掘調査を行い、さまざまなことが明らかになりました。

本格的調査の初年度 調査委員会を設置

相良家史の多くは、御家人である相良頼景の downward 建久4年(1193)とし、その居住地を「東ノ前」と記載しています。このような相良氏下向にまつわるシナリオは、相良家史の基になった天文5年(1536)の「沙汰洞然長状」には成立しており、慎重な史料解釈が求められます。

「東ノ前」とは、黒肥地字蓮花寺の少し上流にある地名です。現在は、伝相良頼景館跡という遺跡にあたり、この伝相良頼景館跡を含む蓮寺・東光寺磨崖梵字は東国からやってきた相良氏による地域支配の中

心的な場所といえます。さらに黒肥地域の水田を潤す「瀬井手」というかんがい用水の整備には、相良氏の地域開発への意気込みが感じられます。

これらの遺跡を学術的な調査により、歴史的价值を明らかにすることで、国史跡への指定を目指します。この価値付けのために、日本歴史研究の第一線で活躍されている専門家による多良木相良氏関連遺跡群調査委員会(以下、「委員会」)を設置しました。

11月5・6日の委員会では、今後の調査の方針や調査経路の検討、現地の視察が行われ、さまざまな角度から検討がされています。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 多良木町の位置と環境（第4・5図）

1. 地理的環境

〔多良木町の位置と地勢〕

熊本県南部に位置する人吉盆地の中央を、市房山（標高1721.8m）を源に発する球磨川が盆地を西流し、八代海に注ぐ。多良木町の東側は、湯前町・水上村・宮崎県児湯郡西米良村、西側はあさぎり町、南側は宮崎県小林市に接している。多良木町は、東経130度56分18秒、北緯32度15分38秒に位置し、熊本県の南部、人吉盆地の東部に所在する。標高160.51m、東西21.0km、南北22.8km、中央部は平坦地で、南部と北部は九州山地の支脈を形成する山地におおわれている。面積は165.86km²、人口8,682人（令和5年3月31日時点）を有し、面積の約80%は山林原野で、水利の便に恵まれ農林業が発達している。土地は肥沃で、温暖多湿の気候にも恵まれ良質米や果樹等が栽培されるとともに、豊富な森林資源により椎茸等の林産物も数多く産出されている。

明治4年の廃藩置県後、明治22年の市制及町村制施行により多良木村、黒肥地村、久米村が誕生した。大正15年5月1日には多良木村は町制を施行している。昭和30年4月、町村合併促進法により、多良木町、黒肥地村、久米村が合併、現在の多良木町に至っている。

産業は、農業及び林業を中心とした第1次産業を基幹産業として栄えてきた。しかしながら、本町の総就業者数は昭和55年以降、年々減少している。第2次産業、第3次産業の就業人口は、それぞれ微減及び横ばいとなっているものの、第1次産業における就業人口の減少は大きく、昭和55年（2,967人）と比較して平成17年（1,389人）は約半数である。産業別就業者割合における第1次産業の就業者割合は、昭和55年に38.9%を占めていたが、後継者不足、従事者の高齢化などのために、平成17年には23.9%までに急激に減少している。これと相反して、第2次産業、第3次産業の就業者割合は増加して、平成2年には第1次産業を逆転し、平成17年にはそれぞれ、28.6%、47.5%となっており、町の産業構造は著しい変化をみせている。

〔地質〕

人吉盆地は、九州山地に開口した断層盆地であり、北部は八代・球磨山地、東部は九州山地、南部及び西部は肥薩火山群に囲まれている。この肥薩火山群の活動によって、低地形の球磨盆地の西側が塞がれ「古人吉湖」が形成された。約100万年前に、侵食によって湖水の出水とともに猛烈な河流侵食をうけて深い渓谷が形成された。やがて湖水が枯渇して人吉盆地の祖形が削出される。人吉盆地の地質は、四万十層・人吉層・安山岩類・

火砕流堆積物・洪積層・沖積層に大きく分けられる。球磨川源流域から球磨川兩岸にかけて、四万十累帯コンプレックスの後期白亜系諸塚層群が分布し、火山岩類の玄武岩・堆積岩類の砂岩・頁岩およびチャート・変成岩類の片状砂岩・粘板岩及び千枚岩によって構成されている。また、市房山には諸塚層群および日向層群が貫入して、中新世の深成岩類の花崗閃緑岩が分布し、花崗閃緑岩と周囲の地質帯との接触部には、接触変性作用によりホルンフェルスが生じている。

多良木相良氏関連遺跡群が所在する人吉盆地東部には、新第三紀後期～第四紀にかけて形成された段丘堆積物や、阿蘇カルデラや加久藤カルデラを起源とする火砕流堆積物が分布する。盆地北側では未固結堆積物や火砕流堆積物からなる小起伏丘陵地が発達し、南側では段丘が広く分布するという特徴を有している。

多良木町のほぼ中央の球磨川兩岸は、低平地で形成され、礫層を中心とした表層である。北部は九州山地から幾多の支脈とともに球磨川への支流を形成、宮ヶ野・永谷・柳野の溪谷から小椎川・牛繰川が山間地を縫うように流れ球磨川に合流する。北部山地末端から球磨川河岸段丘沿いにかけては、加久藤溶結凝灰岩が発達、この上位に礫層が堆積し周囲は急崖をなし、崖の高さは数十メートルに達するところも多い。

球磨川左岸は、南部山地山麓から北西に向い球磨川に達する複合扇状地を形成し、その末端はほぼ河岸段丘沿いに達している。南部は黒原山の分水嶺を境にしだいに緩やかな傾斜をもって南北に分かれる。北に向かって仁原川・枝川内川が複合扇状地を形成しつつ球磨川に合流する。また、南へは綾北川が槻木の細長い溪谷を縫うように宮崎県に抜け、大淀川に注いでいる。

中部は、南北両山地に挟まれた球磨川の開析による沖積平野が広がり、国道219号線一帯には、商店街や住宅、公共施設が展開する。

人吉盆地から産出される石材は、阿蘇溶結凝灰岩・加久藤溶結凝灰岩・安山岩・砂岩等がある。盆地内に残る建造物や石造物には、加久藤溶結凝灰岩が利用されていることが多い。

2. 歴史的環境（第6・7図・第2表）

〔旧石器時代〕

人吉盆地は、熊本県下でも旧石器時代の遺跡が多い地域である。特に、入戸火砕流（AT）の上位と下位の層で石器文化の存在が明らかとなっている。多良木町内の里城遺跡からは細石器、大久保遺跡群からは角錐状石器や細石器などの後期旧石器時代の石器が出土している。

[縄文時代]

縄文時代草創期の資料は、里城遺跡から槍先形尖頭器、隆起線文土器・細石刃が出土している。

縄文時代早期になると、沖積地を望む台地上や丘陵上に集落が形成されるようになる。代表的な人吉盆地の遺跡は、狸谷遺跡、大丸藤ノ迫遺跡、城・馬場遺跡、村山閤谷遺跡、鼓ヶ峰遺跡、天道ヶ尾遺跡、島廻遺跡、赤坂永谷遺跡、石清水遺跡・灰塚遺跡等が挙げられる。人吉盆地の縄文時代早期の土器は、手向山式土器・中原式土器・石清水式土器・塞ノ神式土器が主体で、南九州地域の影響を多分に受けている。

大久保遺跡群の調査では、早期の炉穴9基・集石35基が確認されている。これらの遺構からは、手向山式土器・石清水式土器・中原式土器・平椀式土器・塞ノ神式土器が出土している。特に、北井出詰遺跡の炉穴からは、良好な状態で手向山式土器・石清水式土器が出土している。追ノ原遺跡では、滑石製の岩偶が出土し、その造形は鹿児島県上野原遺跡出土の土偶に似る。

縄文時代前期の遺跡は町内には現在のところ確認されていない。

縄文時代中期になると、川辺川流域を中心に遺跡が形成され、阿高式土器が出土している野原遺跡・逆瀬川遺跡などが挙げられる。また、深水谷川遺跡・金川遺跡・頭地田口A遺跡・逆瀬川遺跡・鼓ヶ峯遺跡で船元式土器が数点確認されている。大久保遺跡群では、上球磨地域では初見となる船元Ⅱ式土器が出土するとともに、船元式土器に影響を受けた縄文施文と条痕施文の土器群が一定量出土している。このように、人吉盆地は九州西海岸・東海岸の文化圏が重なる地域である。

縄文時代後期になると、球磨川右岸に数多くの遺跡が形成されるようになる。町内の軍野地区から獣型土偶が表採されている。また、熊山遺跡から石刀片が出土している。

縄文時代晩期では、久米字思川から黒川式土器の壺型土器が確認されている。大久保遺跡群からは晩期の土器とともに、刻目突帯文土器が一定量出土している。

[弥生時代]

人吉盆地の弥生時代前期・中期の遺跡は不明な点が多い。沖松遺跡や深水谷川遺跡からは、亀ノ甲式土器が出土している。中通遺跡では住居跡が確認され、城ノ越式土器が出土した。

大久保遺跡群の調査では、刻目突帯文土器・精製の浅鉢・組織痕土器が出土している。また、弥生時代前期～中期前半の亀ノ甲タイプや、板付Ⅱ期並行期の土器群も確認されている。特に、北大久保B遺跡では、当地域初となる弥生時代前期末～中期初頭の竪穴建物が確認されている。表採資料ではあるが、大久保台地では有柄二

段柄式磨製石剣、台地西側の緩斜面に位置する鍮掛松遺跡から細型銅剣も採集されている。このように、大久保台地上には縄文時代晩期から弥生時代の拠点集落が形成されていたことがわかる。

あさぎり町に所在する夏女遺跡は、盆地の拠点集落であることが確認され、集落内より青銅鏡・銅釧が出土している。

弥生時代後期の遺跡としては、大丸藤ヶ迫遺跡、荒毛遺跡、中通遺跡、夏女遺跡、本目遺跡などが挙げられる。

[古墳時代]

人吉盆地の古墳時代は、在地的墓制の伝統が強く継承され、畿内型高塚古墳の造営開始が遅れることが特徴である。在地的墓制である板石積石棺墓や地下式横穴墓が分布し、大久保遺跡群においても前者の存在が指摘されていた。荒毛遺跡や新深田遺跡などでは、板石積石棺墓の存在が古くから認識されている。また、南九州固有の墓制である地下式横穴墓も、天道ヶ尾遺跡で確認されている。

一方、畿内型の高塚古墳では、盆地中央を中心に5世紀後半以降に造営が開始される。錦町亀塚古墳群は、盆地内唯一の前方後円墳であり、「景行紀」にみえる「熊県」との関係が指摘されている。そのほか、鍮金獣帯鏡をはじめ豊富な副葬品が出土した才園古墳群2号墳や、巨石を用いた横穴式石室の鬼ノ釜古墳などがある。また、人吉市鬼塚古墳は、横穴式石室を有し、出土須恵器や鉄製品から5世紀後半の造営である。

町内では、球磨川左岸に複数の馬具が埋葬された赤坂古墳や、中原古墳・雀森古墳の円墳が確認されている。また、球磨川右岸の大久保台地には、大久保夫婦塚古墳が造営されている。

赤坂第1号古墳は昭和9年10月に坂本経堯氏による調査が行われている。大久保夫婦塚古墳も昭和42年8月に実測調査が行われ、7世紀前半頃という評価を得ている。横穴墓は、小椎野古墳・土屋横穴群・大塚横穴群・内の城横穴群・小路迫横穴群・大園下横穴群・瀬野原横穴群が球磨川右岸に展開しており、加久藤溶結凝灰岩の露頭が発達した位置と重複する。

[奈良・平安時代]

「和名抄」には、久米・球玖・人吉・東村・西村・千脱の六郷が確認できる。古墳時代の古墳造営地を、有力勢力の影響地域として想定すると、郷域の比定が可能である。この内、現在の多良木町は、概ね東村・久米にあたる。また、郡家の場所は諸説あるが、須恵器窯跡や平安中期の古瓦を出土している前田遺跡が位置するあさぎり町免田周辺が、最も有力な候補地となっている。郡家を構成する四等官には、在地勢力である須恵氏・久米氏・

人吉氏・平河氏が担っていたと考えられ、彼らの所領は郡一帯に散在していた可能性が高いという。

人吉盆地には、平安時代の神仏像が多く現存している。多良木町の場合、中山観音堂内の木造観世音菩薩立像及び四天王像をはじめ、栖山観音堂内の木造千手観音菩薩立像及び四天王像、馬門薬師堂内の木造薬師如来坐像、そして、大治5年(1130)の銘を持つ元は鍋城にあった西光寺の釈迦如来座像、長運寺由来の薬師如来座像などがある。

[中世]

球磨郡の荘園公領制の展開は、球磨御領の成立を嚆矢とする。郡衙機構を構成する有力在地勢力が荘園領主への上納を事実上共同で請け負うという国衙領的性格の強い半輸租領であった。源平内乱期には院領であり、平頼盛の大宰大貳時代に平家領、鎌倉幕府の成立を契機とし、一旦没管領化されたのち、球磨白間野荘の頼盛への安堵という複雑な変遷過程をたどる。その後、建久3年(1192)、球磨御領は上球磨を中心とする公田、中球磨を中心とする鎌倉殿御領、下球磨を中心とする人吉荘に再編成されたといった展開が、既往の研究により明らかにされている。この内、東国御家人であった相良頼景が得たのが「多良木村」である。

『歴代 嗣誠独集覧』に「頼景公其前御当地居住始ハ多良木蓮花寺ノ上ニ大川端、今東ノ前ト云御屋敷也」と相良頼景の居住地に関する記載があり、「東ノ前」地名や小字名「蓮花寺」が現在に残る。昭和49～50年、方形居館跡と隣接する蓮花寺跡の調査が行われ、昭和52年に報告書「蓮花寺跡・相良頼景館跡」が刊行された。

相良頼景館跡の調査では、球磨川に面し護岸施設が確認され、船着場の機能を有する館跡として評価されていた。また、蓮花寺跡では、石積基壇や溝が確認され、鎌倉時代から江戸時代の五輪塔が確認されている。

頼景を祖とする鎮西相良氏は、その嫡子・長頼が人吉荘地頭職に補任され、頼景が得た多良木村を相続する。その後、長頼は嫡子・頼氏に多良木村を継がせて、その家系が鎮西相良氏全体の嫡流・多良木家となった。その多良木相良氏の菩提寺が青蓮寺であり、永仁3年(1295)銘の阿弥陀如来立像を安置した青蓮寺阿弥陀堂が所在し、その背後の斜面には五輪塔78基、石塔22基が遺存する。

東光寺は、経筒出土地や磨崖梵字、薬師堂、八幡神社など濃厚な宗教的要素を持つ地域である。相5号文書には「東光寺村」との記載があり、多良木相良氏の権益地であることがわかる。東光寺地域を流れる川も「祓川」という。

文安5年(1448)に多良木相良氏が滅亡するまでの間、多良木家と佐牟田家の両家を中心に、南北朝内乱には双

方とも武家方や天皇方に目まぐるしく変遷し、敵対と和平をくりかえす。室町時代中頃、山田城主永留長統が佐牟田家と多良木家を滅ぼして相良氏の名跡を継ぎ、球磨郡を統一する。

相良庶家を統一した長統は、四男の頼泰を多良木に譲り、頼泰の知行は文明3年(1471)まで続く。その後、一旦頼泰は知行を解かれるが、文明16年(1484)に多良木知行に復帰し、翌年には多良木村に入部し鍋倉城で祝儀を行っている。長享元年(1487)に頼泰は謀反の疑いにより生害。以後、多良木村は相良氏の直轄領として代官が置かれるようになる。

相良氏は戦国時代、芦北郡や八代郡に出兵して領地とし大名に成長、人吉と八代を本拠とし「相良家法度」と呼ばれる法律を作り、徳淵津を利用して海外交易も行っている。永禄2年(1559)には、東長兄と丸目頼美の間に内訌がおり、大久保台地上で頼野原合戦が起こっている。

天正9年(1581)、水俣合戦で島津軍に下った相良氏は球磨郡のみが領土となり、天正15年(1587)の豊臣秀吉の九州出兵では直ぐにその軍門に下る。朝鮮出兵を経て、関ヶ原合戦の時、当初西軍として大垣城を守備していた相良氏は東軍側に寝返り、その開城に協力したことから、江戸時代も人吉城を拠点に球磨地方を治めることになる。

以上のように、多良木町には相頼景館跡・蓮花寺跡・内城跡・久米城跡・里ノ城跡・鍋城跡など相良氏に関連する遺跡が多数存在する。また、中世の建造物は、青蓮寺阿弥陀堂・王宮神社楼門・大久保阿弥陀堂・久米治頼神社・東光寺八幡神社・槻木四所神社がある。また、西光寺厨子・長運寺厨子・八日薬師堂厨子も中世のもので貴重である。

[近世]

近世を通して人吉盆地は人吉藩の支配下にあった。元禄～宝永年間に多良木には百太郎溝・幸野溝が開削され、前者は農民主導、後者は人吉藩士高橋七郎兵衛政重の差配による施工と伝えられている。百太郎溝は球磨川南岸の多良木町・百太郎が取入口であり、多良木町、あさぎり町を通り、錦町・原田川にいたる灌漑水路である。現在全長18.9km、灌漑面積は1490haに及ぶ。この本流の工事は鎌倉時代に始まり、農民の手によって何度も受け継がれ、約320年前に難工事の末に完成したと伝わる。取水口構築にあたり百太郎という人物が人柱に立ったことが伝説として残っており、溝名の由来とされる。幸野溝は球磨川の上流の幸野ダム(球磨川)より取水し、湯前町、多良木町、あさぎり町にいたる灌漑水路である。現在全長15.4km、灌漑面積1381haに及ぶ。この工事は元禄9年(1696)、人吉藩が高橋政重に開田

に必要な水利施設の工事を命じたことにより始まった。堰の工事は難航し、洪水による流失もあり、苦勞の末に着工から10年目の宝永2年(1705)に完成した。同3年(1706)には高橋発願により多良木町中原に天神社と観音堂が建立され、十一面観音像が安置されたという。また、同地を中心に入植者を集めた結果、新田村が形成された。しかし、寛政元年(1789)には、人吉藩は新田村の年貢免除を取り消したことから、庄屋と目付が訴願に及び2名は斬首され、新田村は湯前・久米・多良木の3ヶ村に分割併合されてしまった。世に云う「新田くずれ」である。

「天保郷帳」には多良木・久米・奥野・槻木の4ヶ村がみえるが、延宝4年(1676)、多良木村から黒肥地村が分かれている。

近世中期以降、人吉藩では家作り規制が厳しく、上級武士以外は、梁間三間以上の住宅が禁止されていた。領内に鉤型の民家が多いのは、こうした制限下で、住宅の部屋数と規模を拡大するために鉤型に棟を伸ばす方法がとられたからである。重要文化財である太田家住宅は二鉤を有する民家であり、この地域を代表する建造物である。また、近世中期の分棟型住宅跡が北大久保C遺跡から確認されている。

太田家住宅以外にも近世以来の建造物は、王宮神社本殿、槻木菅原神社、白鳥神社本殿、長運寺薬師堂、栖山観音堂、諏訪神社本殿、久米熊野座神社本殿、中山観音堂、木下家住宅、東家住宅などがある。

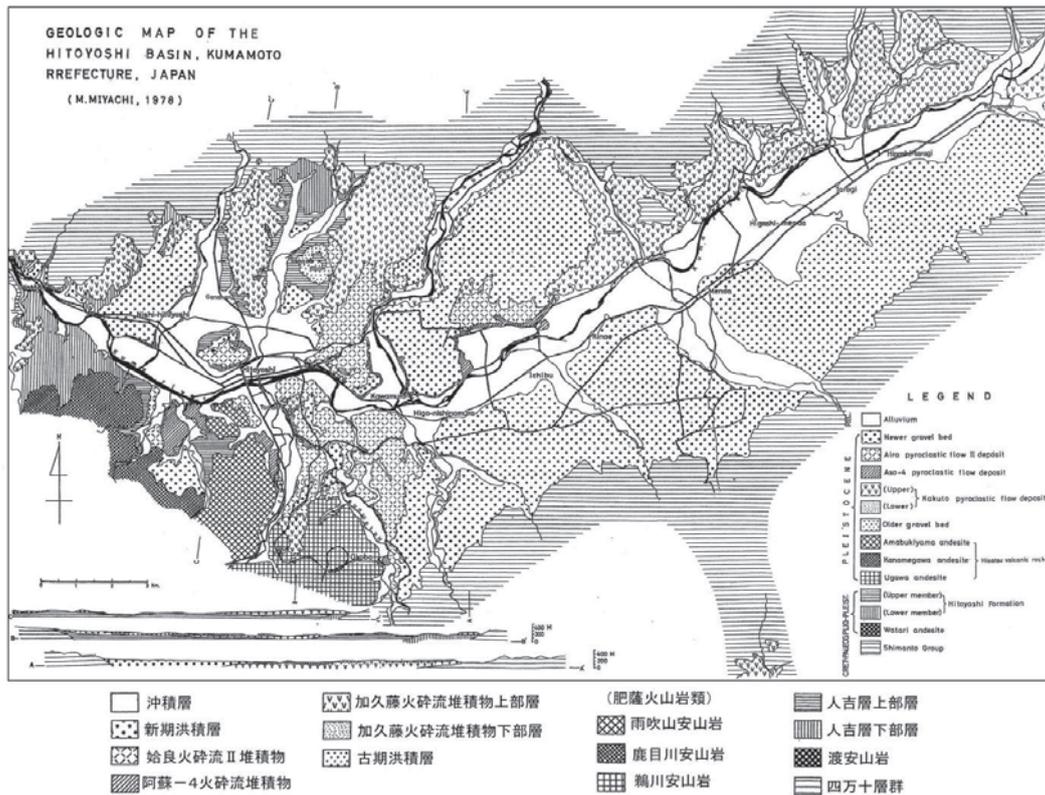
[近代]

明治4年(1871)、人吉県から八代県へ、同6年(1873)には白川県を経て、明治9年(1876)に熊本県に再編される。明治5年(1872)10月には、多良木・黒肥地・久米など、球磨郡の6ヶ村の農民が年貢米の俵作りや畠税などに関して強訴におよぶという騒擾事件が発生する。明治10年(1877)の西南戦争の際には、花立山～槻木峠～黒原山にかけて、台場や陣地が築造され、槻木地域には薩軍敗走の伝承が残る。

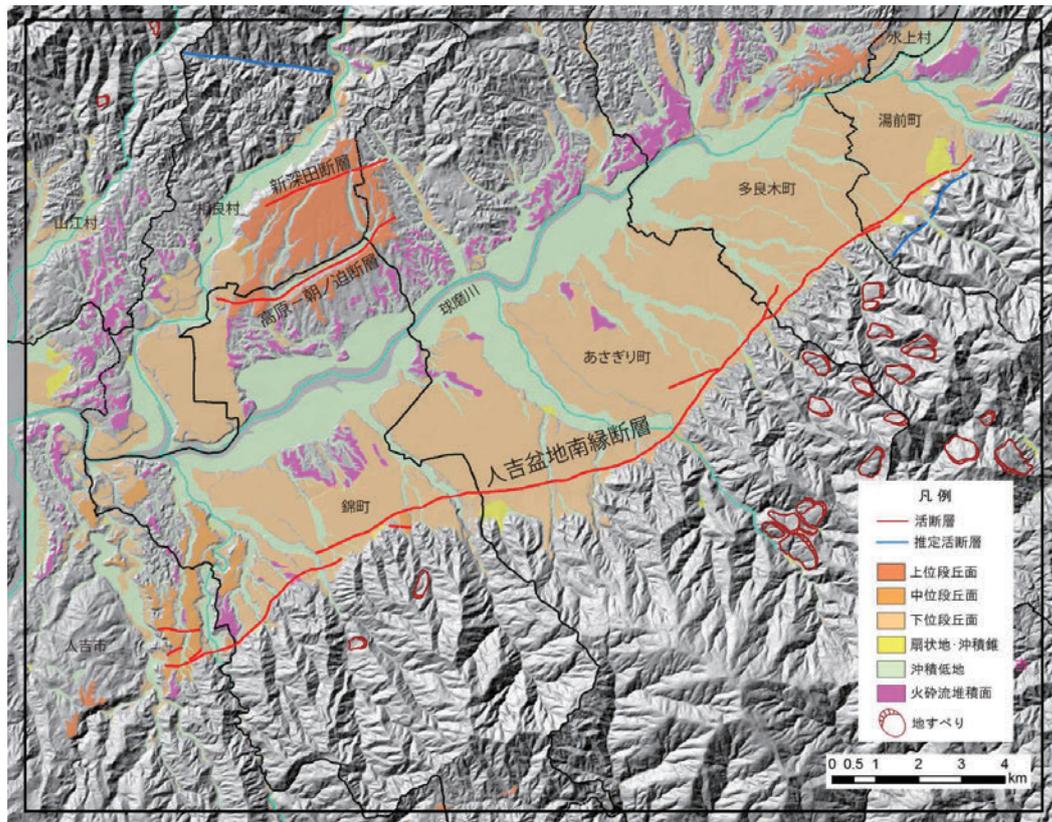
その後、明治20年(1887)人吉警察署多良木分署、翌年には熊本大林区署人吉出張所多良木派出所が開設され、同24年(1891)には人吉区裁判所多良木出張所が開庁、同23年(1890)4月に高等球磨小学校多良木支校、大正7年(1918)には多良木村ほか8か村組合立の郡立実科高等女学校(旧熊本県立多良木高校)も設立された。大正13年(1924)、人吉から湯前にいたる国鉄湯前線が開通して多良木駅が開業したほか、郡立多良木病院が多良木ほか9か村組合立病院となり、上球磨の拠点として体制を整えていった。明治22年(1889)の町村制施行に伴い、多良木を上球磨の中心都市とする計画が策定され、当時先進地であった北海道札幌市の状況を視

察、帰郷ののち、幅員5間の道路を東西に貫通・整備に到る。この幅員5間の道路は、現在も面影を残している。

熊本県による近代和風建造物調査では、第一次調査リストとして59件の調査が実施されている。



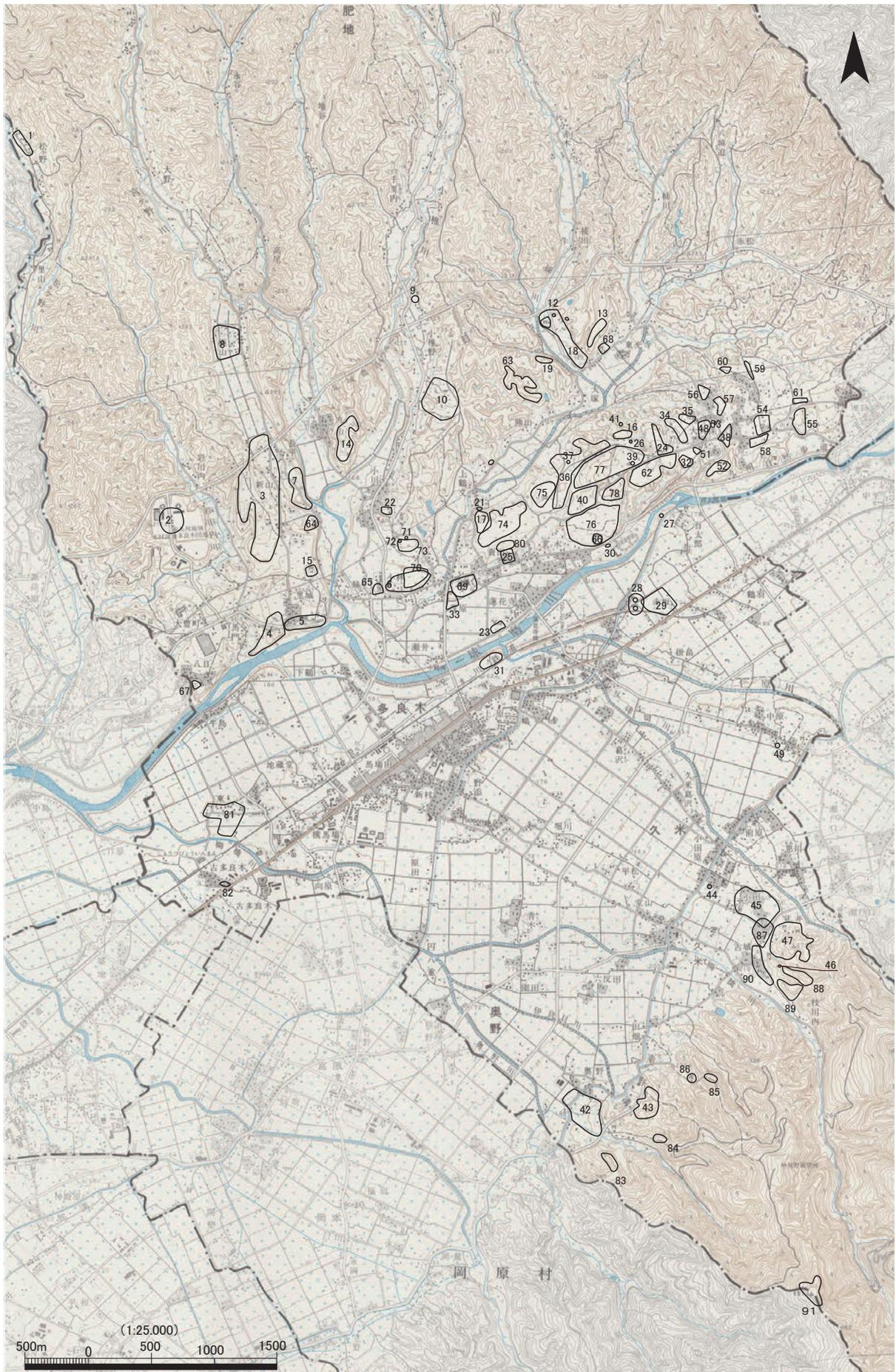
第4図 人吉盆地の地質図



第5図 人吉盆地の活断層と地形分類

基盤地図情報「数値標高モデル10mメッシュ(標高)」から国土地理院作成。
活断層線及び地形分類は本調査の結果による。

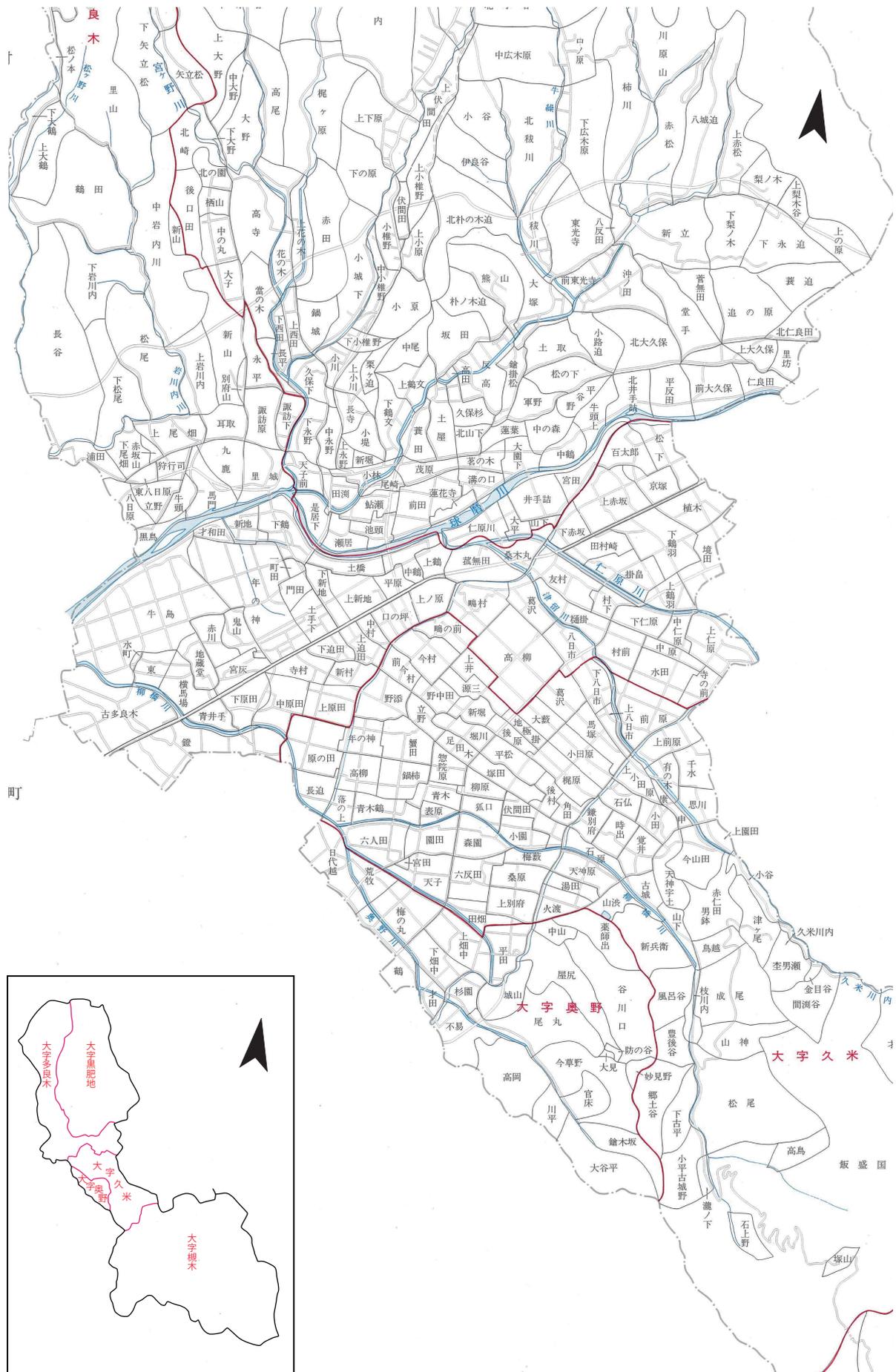
千田 昇(2015):1:25000都市圏活断層図人吉盆地南縁断層とその周辺「人吉盆地」解説書.国土地理院技術資料D1-No.740.19P



第6図 多良木町遺跡地図

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考	出典
1	松ヶ野	多良木 松ヶ野	縄文	包蔵地		石斧	①
2	岩川内立石	多良木 下岩川内	縄文～古代	包蔵地		石器・土器	①
3	新山	多良木 新山	縄文・弥生	包蔵地		縄文後晩期、十字型石器・弥生土器・須恵器出土	①②
4	里城跡	多良木 里城	中世	城		『多良木之城』比定地	①⑤
5	里城	多良木 里城	縄文～古代	包蔵地			①
6	小林	黒肥路 新堀	縄文・中世	包蔵地		石鏃 土師皿	①②
7	長平	黒肥地 長平	縄文・弥生	包蔵地		縄文中・後・晩期土器、磨製石剣、弥生土器	①②
8	栖山	黒肥地 栖山	縄文	包蔵地		縄文晩期土器、石剣	①
9	小稚野古墳	黒肥地 小稚野	古墳	古墳			①
10	小川	黒肥地 小川	縄文	包蔵地		石鏃	①
11	土屋横穴群	黒肥地 坂田	古墳	古墳	町	3基	①
12	東光寺経塚	黒肥地 東光寺	鎌倉	経塚		金銅製経筒8本、経巻、詳細地は不明	①
13	東光寺	黒肥地 東光寺	縄文	包蔵地		縄文後晩期土器・石器・石匙	①
14	鍋城跡	黒肥地 鍋城	中世	城	町	宋代青磁、土師器	①
15	諏訪神社	多良木 里城	中世	寺社		本殿は町指定有形文化財	①
16	小路迫 A	黒肥地 小路迫	縄文	包蔵地			試掘
17	内城城跡	黒肥地 土屋	中世	城		空堀跡・郭・土橋	①
18	東光寺跡	黒肥地 東光寺	中世	寺社		中村家屋敷	①
19	大塚横穴群	黒肥地 大塚	古墳	古墳		鉄鏃	①②
20	東光寺磨崖梵字	黒肥地 祓川	中世	石造物	町	岩壁彫刻	①②
21	内子の城横穴群	黒肥地 土屋	古墳	古墳		5基以上	①
22	長連寺跡	黒肥地 小川	中世	寺社		境内に薬師堂・西光寺釈迦堂、山門あり	①
23	相良頼景館跡	黒肥地 蓮花寺	中世	館	町	昭和50年発掘調査	①
24	小路迫 B	黒肥地 小路迫	縄文	包蔵地			試掘
25	青蓮寺阿弥陀堂	黒肥地 北山下	中世	寺社		国指定阿弥陀三尊像、県指定古塔碑群	①
26	小路迫横穴	黒肥地 小路迫	古墳	古墳		1基	踏査
27	百太郎溝取入口水門跡	黒肥地 百太郎	近世	生産		旧水路跡	①
28	赤坂古墳群	多良木 上赤坂	古墳	古墳	町	2基。1号墳から刀・轡・馬具出土	①
29	赤坂	多良木 上赤坂	縄文	包蔵地		縄文早期土器	①
30	大園下横穴群	黒肥地 大園下	古墳	古墳	町	2基	①
31	妙法寺跡	多良木 上鶴	中世	寺社			①
32	北井手詰	黒肥地 北井手詰	縄文	包蔵地			試掘
33	弥勒寺跡	黒肥地 茂原	古代	寺社		石塔あり	①
34	北大久保 A	黒肥地 北大久保	弥生	包蔵地		弥生後期土器	試掘
35	北大久保 B	黒肥地 北大久保	弥生	包蔵地			試掘
36	大久保ヤリカケ松	黒肥地 槍掛松	弥生～古墳	包蔵地		(熊本博物館収蔵) 細型銅剣出土地	①②
37	細型銅剣出土地	黒肥地 槍掛松	弥生	包蔵地		昭和11年の出土箇所詳細不明	①②
38	上大久保 A	黒肥地 上大久保	縄文・弥生	包蔵地		縄文早～晩期土器・十字型石器・環状石器・弥生後期土器	①
39	大久保夫婦塚古墳群	黒肥地 松の下	古墳	古墳	町	横穴式円墳2基、台地頂部円墳2基	①②
40	軍野	黒肥地 軍野	縄文	包蔵地		須恵器・縄文晩期土器・獣型土偶	①②
41	瀬野原横穴群	黒肥地 小路迫	古墳	古墳	町	8基	①②
42	奥野	奥野 杉園	縄文	包蔵地		石肩打製石器	①
43	奥野城跡	奥野 城山	中世	城		牧場化で地形改変、一部発掘有り	①④
44	雀ヶ森(小田原)古墳	久米 小田原	古墳	古墳		伝刀剣出土 伝「千人塚」 雀ヶ森は違う場所	①
45	小田	久米 小田原	縄文	包蔵地		石製紡錘車・縄文晩期土器	①
46	久米治禰神社(本殿)	久米 天神宇土	中世	寺社		永禄9年創建 本殿は町指定文化財	①
47	久米城跡	久米 今山田	中世	城		ほぼ全体公園化済み	①
48	北大久保 C	黒肥地 北大久保	弥生	包蔵地			試掘
49	中原古墳	多良木 中原	古墳	古墳		円墳1基、須恵器甕・杯蓋	①
50	槻木四所神社	槻木 下槻木	中世	神社		社殿は町指定	①
51	平反田 A	黒肥地 平反田	古墳	包蔵地			試掘
52	平反田 B	黒肥地 平反田	弥生	包蔵地		深水 勉採集土師甕	②
53	大久保阿弥陀堂石塔群	黒肥地 北大久保	中世	祭祀		五輪塔	②
54	上大久保 B	黒肥地 上大久保	古墳	古墳		地下式板石積石室墓3基、重弧文土器	②
55	上大久保 C	黒肥地 上大久保	古墳	古墳			
56	堂手 A	黒肥地 堂手		包蔵地			
57	堂手 B	黒肥地 堂手		包蔵地			
58	前大久保	黒肥地 前大久保		包蔵地			
59	道の原	黒肥地 道の原	縄文	包蔵地		県試掘、縄文早期集石	
60	菅無田	黒肥地 菅無田		包蔵地			
61	トキボトケ	黒肥地 トキボトケ		包蔵地			
62	牛頭上	黒肥地 牛頭上ほか	縄文	包蔵地		縄文早期 塞ノ神式ほか	試掘
63	熊山	黒肥地 熊山	縄文	包蔵地		石刀	②
64	新八幡宮裏	多良木 永平	縄文	包蔵地		手向山式土器	②
65	黒肥地寺跡	黒肥地 上永野	中世	寺社		中世寺院跡、古塔碑群あり	②
66	白鳥神社	黒肥地 中鶴	中世	寺社		土師皿片散布 町指定社殿	
67	八日薬師堂	多良木 八日原	中世	寺社		中世寺院跡	
68	東光寺八幡宮	黒肥地 前東光寺	中世	寺社		中世神社跡	
69	伝羽根田城跡	黒肥地 茂原	中世	城跡		中世城、溝、板碑、五輪塔	⑤
70	伝新堀城跡	黒肥地 新堀	中世	城跡		実態不明	⑤
71	長寺の石塔婆	黒肥地 長寺	中世	祭祀		永禄2年瀬野原合戦供養碑 町指定	
72	長寺の塚	黒肥地 長寺	中世?	祭祀		一字一石塚か?	
73	長寺遺跡	黒肥地 長寺	縄文	包蔵地		石鏃	
74	久保杉	黒肥地 久保杉	中世	包蔵地		中世土師皿	表採
75	反高	黒肥地 反高	?	包蔵地		地形的な判断	
76	中の森	黒肥地 中の森	縄文	包蔵地		地形的な判断	
77	松の下	黒肥地 松の下	縄文・弥生	包蔵地		打製石鏃・磨製石鏃、福井氏採集	表採
78	平谷野	黒肥地 平谷野	縄文	包蔵地		土器	表採
79	道の原笠塔婆	黒肥地 道の原	中世	祭祀	町	天文5年	
80	青蓮寺古塔碑群	黒肥地 北山下	中世	祭祀	県	上相良氏関係石塔ほか	
81	東城跡	多良木 東(城山)	中世	城跡		試掘調査あり	②
82	古多良寺跡古塔碑群	多良木 古多良木	中世	祭祀		阿弥陀堂、五輪塔15基	②
83	ふえきの城跡	奥野 不易	中世	城跡		『ふえきの城』堀切	④
84	尾丸平城跡	奥野 尾丸	中世	城跡		『奥野村絵図下図』「平城」	④
85	中山屋尻平城跡	奥野 屋尻	中世	城跡		『奥野村絵図下図』「平城」堀切	④
86	中山寺跡	奥野 中山	中世	祭祀		石塔	②
87	久米城下集落	久米 寛井	中世	集落			
88	久米天神宇土城跡	久米 天神宇土	中世	城跡		堀切	④
89	久米山下城跡	久米 山下	中世	城跡		堀切	
90	堪提寺跡	久米 古城	中世	社寺		切岸	②
91	古城野西南戦争塹壕跡	久米 古城野	近代	城跡			
92	上槻木城跡	槻木 永谷	中世	城跡			
93	京塚	槻木 京塚	縄文	包蔵地			

第2表 多良木遺跡地名表



第7図 多良木町字図

第III章 蓮花寺跡・相良頼景館跡の再報告

第1節 『蓮花寺跡・相良頼景館』の再報告の概要

1. 再報告の趣旨

蓮花寺跡・相良頼景館跡の発掘調査（以下、「県調査」という。）は、昭和49～50年にかけて熊本県文化課が行った。その成果は、昭和52年に「蓮花寺跡・相良頼景館跡」『熊本県文化財調査報告第22集』（以下「県22集」という。）として刊行され、出土品及び記録類は熊本県文化財収蔵庫にて保管されていた。

多良木町では平成21年度から始まった大久保地区畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査や、「たらぎ歴史回廊事業」に伴う有識者による仏神像・建造物等の調査によって、調査成果が蓄積されてきた。平成24年度には、歴史資料を保存・活用するための施設の必要性から、旧黒肥地農業協同組合倉庫（昭和17年棟上）を埋蔵文化財センターに改修する基本方針が示された。この方針に基づき、平成24～26年度にかけて改修工事が行われ、平成26年7月に多良木町埋蔵文化財等センター（愛称：古代の風 黒の蔵）が設置された（平成26年多良木町条例第8号）。施設設置により、熊本県所有の蓮花寺跡・相良頼景館跡出土遺物等の譲与が可能となり、次に記す手続きを行い、県資料の譲与がなされた。

平成27年1月26日付け多教発第1622号（相良頼景館跡）1622号の2（蓮花寺跡）にて、熊本県文化課に出土文化財譲与申請を行った。熊本県文化課では平成27年2月5日付け教文第2067号（相良頼景館跡）2068号（蓮花寺跡）2069号（里の城跡）2070号（奥野城跡）により、熊本県から多良木町に譲与された（※文化財としての認定は平成26年7月9日）。

所有権移転後、多良木町・多良木町教育委員会では平成28年度から令和5年度までの間、譲与資料の再整理作業を行った。今回、多良木相良氏遺跡の歴史的価値を明らかにするために、再整理の成果を再報告するものである。

2. 再整理の方法

熊本県からの譲与資料は次のとおりである。

・出土遺物 ・現場図面 ・写真記録 ・遺物実測図

資料の譲与後、譲与資料の台帳をそれぞれ作成し、県22集と記録類との突合作業を行なった。また、発掘調査記録や発掘調査日誌などの内容確認を進めた。

現場図面は県22集や現場写真を確認しながらデジタルトレースを行った。本報告の掲載図面はデジタルデータをもとに、作成・編集したものである。県22集には、調査日誌とともに遺構及び遺物の解釈が記載されている。本報告では遺構説明は県22集に沿いながら、加筆・修正を加えている。遺構名は県22集に準じている。発

掘調査の段階でしか得られないような重要な所見は括弧書きで引用した。

出土遺物は現場図面と遺物注記を頼りに、出土地点の特定に努めた。巻末の遺物観察表に県調査時の「出土地区・層位」と、今回の再整理作業後の「出土地区・層位」を併記している。

譲与資料の中には、経年劣化のため注記が解読できなかった資料、出土位置が復元できなかった資料も多数ある。それらの資料も観察表にその旨を記載している。

3. 出土遺物の分類方法

出土遺物全点を実見・再分類を行った。

再整理作業の中で最も時間を要したのが資料の再分類である。凡例に基づき、土師器、輸入陶磁器、国内産陶器、瓦、土師質製品、石製品、古銭、金属器に大分類し、さらに種別や産地、器種を考慮して再分類し、本報告はこの順に図を掲載している。

4. 熊本県文化課調査の経過

昭和36年度、熊本県教育委員会による総合的な基礎調査（『熊本県文化財調査報告 第4集』）が実施され、昭和44年3月20日、蓮花寺跡古塔碑群は県指定史跡になっていた。その後、蓮花寺跡・相良頼景館跡の指定解除から発掘調査までの経過は次のとおりである。

日時	発掘調査・指定解除までの経過・内容
S48年 7/18	多良木町教育委員会社会教育課長から熊本県教育庁文化課に電話連絡によって「建設省から49年度に球磨川の改修工事に着手するので、蓮花寺跡古塔碑群の調査、移転を48年度中に終了して欲しいとの相談があった」ことが伝えられた。
7/19	町社会教育課長が県文化課に出向く。事情聴取。県史跡の現状変更であり、全面的に遺跡が消滅するので指定解除の可能性はある。県指定として初めてのケースであり、建設省から事情説明と正式な書類提出を求める必要があるとの結論に達する。
7/20	建設省八代工事事務所工務課工務第1係長、用地課主任に県文化課への来庁を願う。その結果、49年度着工ということではなかったが、上流からの改修が始まっており、計画変更はありえないとの状況であった。そこで、熊本県文化財専門委員会に諮問する必要があると、同年9月の同委員会に諮問して検討することになる。その際に、文化財包蔵地であることから発掘調査を実施する必要があることが提起される。

8/4	宮元多良木町長はじめ町当局、町教委、地区代表者及び建設省関係者の協議が行われ、古塔碑群の移転先の用地問題、発掘調査について検討がなされ、地元は全面的に協力するという合意が形成される。
9/7	多良木町文化財保護委員会。蓮花寺跡の調査、移転等について審議。
9/14	熊本県文化財専門委員会にて、八代工事事務所工務課長、多良木町教委社会教育課長から説明。 (建設省)改修計画は昭和41年にたてられたもので、蓮花寺跡も同計画内に含まれている。すでに左岸は工事完了しており、現段階での計画変更は無理である。 (文化財専門委員)文化財を無視した計画は困る。県指定の解除は前代未聞で、移転するだけという安易な処理は問題である。計画を立てる段階で協議すべきである。しかし、工事はすでに始まっており、計画変更は無理であろうから、事務手続きをとって発掘調査を行い、史跡の指定解除を行い、有形文化財として改めて指定する方針をとることになった。
S49 1/9	熊本県文化財専門委員の現地調査。この調査により、発掘調査の方針が固まる。
10/9 ～10	松本寿三郎氏、花岡興輝氏らが現地調査。
12/24	地元代表者主催の発掘安全祈願祭。

発掘調査の届出は、蓮花寺跡古塔碑群は昭和50年1月17日付け教文第791号で、相良頼景館跡は昭和50年8月7日付け教文第322号で提出された。昭和50年2月14日付け委保第5の104、昭和50年8月29日付け委保第5の1879で許可となる。

昭和50年1月10日から蓮花寺跡古塔碑群発掘調査開始。

昭和50年8月23日から相良頼景館跡発掘調査開始。

当時の発掘調査の経過については、県22集を参照のこと。

第2節 蓮花寺跡の再整理の成果

1. 蓮花寺跡の概要(第8図)

相良家史によれば、多良木家の相良頼氏が嘉禎元年(1235)に創建したとされる。また、蓮花寺は正長元年(1428)に没した多良木家の相良頼久の位牌所とされる。文安の内証では、蓮花寺は多良木相良氏側に属していた。

永正11年(1514)に相良長毎によって蓮花寺は再興される。堂内に安置された木造阿弥陀如来立像の背面に

は、「大旦那藤原長毎并満乗丸、當寺院主大願主秀尊敬白、于時永正11年甲戌八月彼岸廿八日、台座裏に「大心法見之子、佛師与次良重元(花押)」との墨書銘がある。また、箱台座裏には「弘化三丙午歳、再興佛師弓削田市内、請込人柳原郡八、盛山喜左衛門、飛田弥兵衛、一、後光并御殿彩色家根茸替致候事」との銘がありこれを証左する。元龜4年(1573)、相良義陽は蓮花寺の僧を薩摩に遣い隣交を求めている。

江戸期の「村明細帳」によれば、蓮花寺は3間×4間の阿弥陀堂一字があり、青蓮寺の管理となっている。現在でも蓮花寺の法要は青蓮寺が所管している。

県調査時の蓮花寺跡は球磨川の右岸に所在し、阿弥陀堂を中心に五輪塔や板碑などの石造物群が遺存していた。蓮花寺跡南側の85～102号は、相良頼景館跡の南東部の開墾時に確認されたものを移転したものである(県22集27頁)。

2. 熊本県文化課調査(県調査)の概要(第9図)

県調査では、調査区をA区(ガランサン:阿弥陀堂周辺)、B区(A区の北側:石塔群移転地)、C区(A区西側)に分け、各区にてトレンチ調査が実施されている。現在A・C区は球磨川堤防下となり、B区には移転された蓮花寺跡古塔碑群(県指定)を見ることができる。県調査当時の蓮花寺跡古塔碑群の内訳は、板碑24基、五輪塔102基の総数128基である。

県調査当時の灌漑用水・鮎之瀬井手は、B区東側を南進し、A区とB区の間を流れ、C区北側を西流していた。

調査区にA-A～C Tr、B-A～G Tr、C-A～E Trのトレンチが設定され調査が進められた。

各区の層序は次のとおりである。

【A区の層序】

I層(表土)

II層(砂層)

III層(礫層)

【B区の層序】

第I層(水田耕作土:黒灰色の粘質土)

第II層(砂礫を含む褐色土)

第III層(砂礫層:大小の礫を多量に含む)

遺構検出面はA区ではII層上面、B区ではIII層上面である。A区II層は水性堆積層、A区第III層及びB区第III層は地山の礫層である。蓮花寺跡の層順を整理すると上から次のような堆積となる。

A区I層・B区I層

B区II層(砂礫を含む褐色土)

A区II層(砂層)水性堆積物

A区III層・B区III層:地山礫層

3. 遺構及び出土遺物

(1) A区：石積基壇（第10・11図）

本報告での各石造物の番号は、県22集の掲載番号に対応している。

石積基壇は阿弥陀堂の北側にて確認され、石積基壇上には15～38号の五輪塔が二列に並べられていた。検出時の石積基壇は東西約5.7m、南北3.7m、高さ1.3mの不定形である。東側、西側及び南側の各裾部には、積石の露出箇所が多く見られ、上面・北裾部は土が積石を薄く被っていた。東西端部には火輪及び水輪が、川原石や土と一緒に積まれ表面に露出していた。県22集によれば、川原石とともに多くの五輪塔の各部位が積まれており、その中には火葬骨を入れたままの水輪も含まれていた。

東側の基礎部は不明瞭であり、下部と上部に石を多く用い、中には土を多く用いていた。壁面はなだらかな斜面を形成しているが、本来の形状を示すものではない。西側の肩部には50年以上を超える大木が生え、その下に五輪塔が埋没していた。

【石積基壇の構築】

県22集では、この石積基壇の構築面期を3回に分けている。

1回目は東西4.0m、南北4.0m、高さ1.0～1.3mの方形を呈する石組である。基礎には平坦面をもつ川原石の小口を外側に向け、隅には直角を保つような石が配置されていた。内部は大小の川原石が不規則に充填されていた。上面には薄く「玉砂利」が敷かれ、「26号五輪塔直下、第1回目の築造の東辺より西寄りのほぼ中央」にて蔵骨器が出土している。

2回目は1回目を、東に1.3m、西に2.8m、北に1.8m、南に1.6m拡張し、東西8.2m、南北6.8mの平面長方形となる。西側の拡張部基礎は1回目とは異なり、大石を横置き区画している。東・南・北拡張部基礎は、基礎部に大型の川原石を並べる部分もあるが、存在しない箇所も多い。

3回目は、2回目を東に2.8m、西に1.2m拡張する。西拡張部は基礎部に大川原石を南-北に直線的に築いていたことが確認されている。

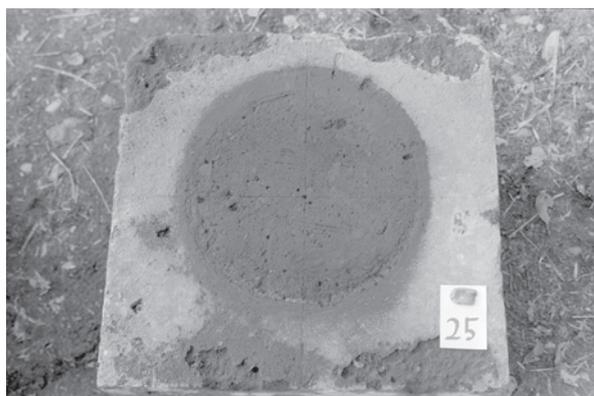
【石積基壇上の石造物群】（第12図・第3表）

石積基壇上の石造物は『図説石塔調べのコツとツボ』（狭川真一・藤澤典彦編、2017）をもとに計測した。

県調査以前に、石積基壇北西袖から笠塔婆が出土している。この笠塔婆は加久藤溶結凝灰岩で、高さ108cm、幅24.3cm、柄長さ12cm、柄幅18cmを測る。塔身上部の四面には、阿弥陀三尊の種子を薬研に刻む。正面種子の下には次のような紀年銘がある。



25号塔水輪上面の柄穴



25号塔地輪上面に残された基準線



蓮花寺跡出土・相輪

右石塔志趣者奉爲沙弥上蓮尊靈
往生極樂證大菩提造立如件
文永六年己巳七月十四日 比丘尼妙阿弥陀佛敬白
孝子藤原□□敬白
「沙弥上蓮」は相良頼氏のことで、「比丘尼」は頼氏の妻、「孝子」は頼氏の嫡子・頼宗のことである。
石積基壇上に設置されていた五輪塔の実測図及び部位

計測値は第12図、第3表に掲載している。一部の紀年銘は形状・型式から明らかに追刻である。

基壇上の五輪塔の石材は全て加久藤溶結凝灰岩である。23号塔・25号塔（伝頼仲塔）はそれぞれの部位寸法誤差は1cm以内に収まり、近似した形態である。各部位に基準線を縦に刻み、五大種子の四転、種子は面に対し大ぶりの葉研彫りである。火輪軒裏の反りは緩やかである。地輪幅52cmに対し、軒高は100cmを測る。水輪はやや縦長を意識している。23号塔・25号塔は部位形式に古相を有していることから13世紀後半に位置付けられる。

20～22号塔・24・26号塔・30号塔は23号塔・25号塔よりも軒高が一寸程度高くなる。また、種子は23号塔・25号塔に比べ小ぶりの葉研彫りとなる。

29・31・37号塔は、火輪軒裏の反りがやや顕著である。大型の29号は、水輪がより楕円形化の傾向にあり、37号塔は火輪軒口が肥厚、31号塔は各部位が縮小している。

4号塔は応仁2年（1468）の紀年銘があり、小型の五輪塔である。火輪軒口が肥厚し、軒裏の反りも大きくなる。また、27・28号塔は弘治3年（1557）という紀年銘を有し、火輪軒口が厚く壺型の水輪を持つ。35号塔（伝頼宗塔）は、建武3年（1336）の紀年銘を有し、地輪幅は61cmを測る。水輪はやや壺型を呈する。4号塔と、27・28号塔の紀年銘は、追刻ではない。

【出土遺物】（第13・14・15図）

出土地点・層位が確実なものは、1回目の石積基壇（石組墓）から出土した褐釉の四耳壺のみである。他の出土遺物は、石積基壇構築1回目から3回目のどの構築面期に該当するのかが明確ではないが、参考として観察表に出土地点を記載している。

1～4は土師器杯、5～35は土師器小皿である。22のみ底部切り離しはヘラ切りで、その他は全て糸切りである。36は褐釉四耳壺VI-1類に該当し、13世紀に位置付けられる。26号塔直下から出土したものである。口縁内面に目痕が残る。37～46は中世須恵器の瓶で、仏具である。頸部～口縁はナデ調整で、内面はハケメ調整を施す。41の体部外面には山形タタキ痕を残す。47は中世須恵器の鉢である。48は瓦質の火鉢で、口縁帯に巴文のスタンプを施す。49～53は新寛永通宝、54は元豊通宝、55は輸入銭と思われる。56は短刀である。57は肥前広東碗、58・59は内底に蛇の目釉剥ぎ痕を残す染付皿である。60は肥前のコンニャク印判手の小杯、61は透明釉の陶器碗、62は肥前内野山窯の碗である。

（2）A区：埋鏡遺構（第16図）

A-Bトレンチの西端で検出された。第II層（砂層）

中に埋設され、掘り込み面及び掘り方は不明である。鏡は背面を下に置き、上から完形の挿鉢の口縁部を下に、ほぼ水平に伏せている。鏡は斜になって挿鉢より約1/3ほどはみ出している。

63は中世須恵器の挿鉢で、7本単位の卸目が施されている。64は銅製の双鶴鏡である。

（3）A区溝（第17図）

A区の東端で検出された。溝幅3.5m、溝底幅0.58m、深さ0.9mを測る。検出面は第II層（砂層）上面である。A区溝とB区溝は同一の遺構である。県22集には、溝の北側セクションA-A'が掲載されている。今回、新たに原図をもとにA-A'、B-B'、C-C'の土層図を作成し、第17図に掲載した。

A-A'では、覆土は3層に分層されている。②層は礫と五輪塔部材を含む黒褐色土、③層は大きな礫を含む褐色土、④層は粘質を帯び小礫を含む黄褐色土である。B-B'では、5層に分層されている。①層は土器を多く含む黒褐色土、②層は小礫を含む褐色土、③層は土器を含む黄褐色土、④層は黄褐色の砂礫層、⑤層は暗褐色の砂層で土器を含んでいる。C-C'では、5層に分層されている。②層は土器を含む暗褐色土、③層は褐色土、④層は黄褐色土、⑤層は黒褐色土、⑥層は砂質の黄褐色土である。

A-A'の断面で、溝掘り方が砂層上面であることが確認できる。B-B'の断面で、溝埋没後に石塔群が配置されていることが確認できる。C-C'の断面で、溝の掘り直しがなされていることが確認できる。

【出土遺物】（第18～27図）

65～227は土師器杯である。底部切り離しは全て糸切り離しである。100・103・111・143・144・171・178・182・188・191・194・209・217・218・219の底部に板目圧痕が、221の底部は簾状圧痕が残る。161は口縁が大きく歪む。227は底部糸切り離し後に脚が付く。228～356は土師器小皿である。底部切り離しは全て糸切り離しである。274・323は底部に板目圧痕が残る。270の底部に穿孔痕が残る。239・254・352・353の口縁内面にはススが付着する。

357～367は、土師器土錘である。

368～371は龍泉窯系A類の青磁碗である。369・370の内底に片彫りの草花文を施す。372～376は龍泉窯系B類の青磁碗である。374は無鎊である。377・378は同安窯系青磁皿である。379は龍泉窯系の小型酒海壺の蓋で、外面に貼付け文を施す。380は青磁瓶の下半部と思われる。381は白磁IX類の皿、382は白磁梅瓶である。383は中国産天目碗で、厚い天目釉がかかる。384は備前の甕、385は常滑焼の甕で5型式に該当する。

386～390は中世須恵器の瓶である。388・390には体部外面に山形タタキ痕、内面にハケメによる調整が残る。391～401は中世須恵器の鉢・挿鉢である。外面はユビ押え後ナデ調整、腰部はヨコ方向のヘラケズリを基調とする。402は瓦質の火鉢で、体部外面に山形タタキ痕、内面にハケメ調整が残る。また、体部には透かしが入る。403は瓦質の火鉢で、外反した口縁上面と外面に巴文スタンプを施している。404は瓦質の甕である。

405・406は土師質の鞆羽口である。407～410は鉄製品。

411は肥前の端反碗である。412は近代の銅板転写の染付碗である。413は肥前染付の蜻唐草文の瓶で、御神酒徳利である。414は内底蛇の目釉剥ぎの皿である。415は透明釉の陶器皿で内野山窯産。



B区溝西側にて確認された杭

(4) B区溝 (第28図)

B区東側にて、第Ⅲ層(砂礫層)上面にて検出された。県22集第29図(B区溝断面図)のⅡ層は、砂礫を含む褐色土である。B区ではA区Ⅱ層(砂層)は認められないため、A区Ⅱ層(砂層)は河川沿いに堆積する水性堆積物である。

B区溝は北側でやや東側にゆるく北方向にカーブする。南側は比較的直線的でA区溝へと延びる。溝幅は北側で3.0m、中央で3.4m、南側では3.5～3.6m前後である。溝底標高も南方向に向かって緩やかに傾斜する。検出面から溝底まで約1.6mである。溝覆土は、Aは淡灰色の砂礫層に含まれる礫は小さい。多量の遺物がA層から出土していた。Bは大きな礫を含む粘質土である。C層は粘質土で鉄分を多く含む。D層は小さな礫を含む層で、わずかに褐色土を混える。E層は青灰色粘土である。

土層断面図作成地点から少し南側では、C層とD層の間に黒色の有機物を多く含む層が確認されている。この層には木葉・植物の種子が含まれていた。溝西側の肩に、7本の杭列が検出されている。径5cm前後の丸太杭で、30～40cm間隔である。トレンチ南端で1～4m北方

に、赤く焼けた部分がみられ、点々とスラッグが確認されている。

B区溝からは土師器坏・小皿をはじめ、陶磁器、中世須恵器などが出土している。また、鉄滓や粘土塊も出土している。

県22集では、「溝の中からは、青磁・白磁・陶質土器・鉄器など、多量の遺物が出土したが、そのほとんどはA層からの出土で、次いでB層、C・D層ではまったく含まれていない」「B区南側で人為的に埋められたように、褐色の粘質土が満たされていた。溝の中位以下では遺物がなく、上層から遺物が多く出土することから、廃絶されたのは早い時期と考えられる」との所見が記載されている。

以上の調査所見から、D層の堆積とその上位のA・B・C層の堆積には時期差がある。また、この溝は人為的に廃棄されている。

再整理の過程で、B区溝出土遺物を確認したところ、「溝Ⅰ・Ⅱ層」「溝Ⅲ層」「溝4層・溝Ⅳ層」と注記されていた。注記の中では「溝4層・溝Ⅳ層」が最下部を意味しており、このⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層がA・B・C・D層に対応していると考えられる。よって、本報告では、溝Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層と溝Ⅳ層出土遺物を分けて掲載している。

【出土遺物】(第29～36図)

再報告にあたり、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層とⅣ層の出土遺物を分けて掲載する。416～566がⅠ・Ⅱ・Ⅲ層からの出土遺物。567～636がⅣ層出土の遺物である。

416～448は土師器坏である。425・429・430の底部には板目圧痕が残る。449～472は土師器小皿である。449の底部には板目圧痕が残る。456の口縁にスス付着。470～472は口径が10cmを超える大型の皿である。

473・474は龍泉窯系A類の青磁碗である。474の内底にスタンプを加えている。475～495は龍泉窯系B類の青磁碗である。477・488・489の内底に草花文・印花文が施されている。492・493は浅形碗である。494・495は東口碗である。496・497は龍泉窯系B4類の青磁碗底部で、胎土は粗である。498は龍泉窯系C類の青磁碗である。499・500は龍泉窯系D類の無文端反の碗である。501は折縁皿である。502は元様式的大型青磁盤。503・504は白磁Ⅴ類碗、505は白磁Ⅸ類碗である。506～512は白磁Ⅸ類皿である。513は白磁ⅢB群。514～517は白磁合子である。518は青白磁の挿鉢小壺である。519は染付C群碗である。520は釉垂れを残す大型の甕である。521は6b型式の常滑焼の甕である。

522・523は中世須恵器の壺で、格子目タタキ痕が体部に残る。524は体部に菱形文の押型を施している。525は中世須恵器の瓶である。526～560は中世須恵

器の鉢・搦鉢である。561は瓦質の盤である。542・545は、胎土の状態から樺番城窯の製品である可能性がある。

562は肥前系の碗蓋。563は肥前系の染付碗。565は内野山窯の皿、566は肥前の打刷毛目の皿である。

567は高台付の土師器杯である。568～583は土師器杯である。576の底部に簾状圧痕が残る。572は内外面にユビ押えが残る。584～613は土師器小皿である。586・601の底部には板目圧痕が残る。

614～621は龍泉窯系B類の青磁碗である。622は龍泉窯系D類の無文端反の碗である。623は同安窯系の青磁皿である。624は白磁合子である。625は白磁四耳壺である。626は中国天目碗である。627は褐釉の四耳壺である。628は釉垂れが残る大型甕である。

629は中世須恵器の壺である。630～634は中世須恵器の鉢・搦鉢である。635・636は滑石製の鍔付石鍋である。

(5) B区石敷遺構 (第37図)

B区の北端にて検出された。調査区の西側及び北側へと遺構は広がりを見せる。西端で幅1.1m、B-B'断面で幅1.7m前後を測る。西側から15.3mのところまで北方向へと直角に曲がる。溝の上面のほぼ全面に円礫がしかれている。礫の大きさは拳大から人頭大までである。

(6) A区出土遺物 (第38図)

637・638は土師器杯である。639は龍泉窯系B類の青磁碗で無鎬蓮弁である。640は龍泉窯系C類の青磁碗で、外面口縁に雷帯文、体部下半にラマ式蓮弁をもつ。

641は中世須恵器の瓶である。642は大型の瓦質の火鉢である。鍔上面及び側面に巴文スタンプ、体部には山形タタキ痕が残る、底部には脚を貼り付ける。643は端反り碗。644は肥前染付の小坏、645は内野山窯の碗である。

(7) B区出土遺物 (第39図)

646・647は龍泉窯系A類の青磁碗で、内底に片彫蓮花文を施している。648～650は龍泉窯系B類の青磁碗である。651は龍泉窯系B4類の青磁碗である。652は白磁V類碗、653は白磁VI類皿、654は白磁IX類皿である。655は白磁皿C1群である。656は白磁合子の蓋で、体部に貼り付け文を加えている。657は染付皿C群で漳州窯の製品である。658は褐釉四耳壺。659は釉垂れが残る大型甕である。660は瀬戸の天目碗である。

661・662は滑石製の鍔付石鍋である。663は鉄製の鍔である。664は肥前の染付皿。665・666は肥前小坏である。667は染付蓋である。668は肥前の陶器皿である。

(8) C区出土遺物 (第40・41図)

669～675は土師器杯である。676～700は土師器小皿である。677の口縁にススが付着する。

701～704は龍泉窯系A類の青磁碗である。705～712は龍泉窯系B類の青磁碗である。713は折縁皿、714・715は折縁盤である。716は同安窯系の青磁皿である。717は白磁IX類碗、718は白磁IX類皿である。719は白磁梅瓶の口縁部である。720は白磁合子である。721は白磁四耳壺である。722・723は16世紀後半の染付の内湾大皿である。724は染付F群の皿である。725は褐釉壺である。

726～731は常滑焼の甕である。726は4型式、727は5型式、728・729は6a型式、730は7型式である。732は中世須恵器の搦鉢である。

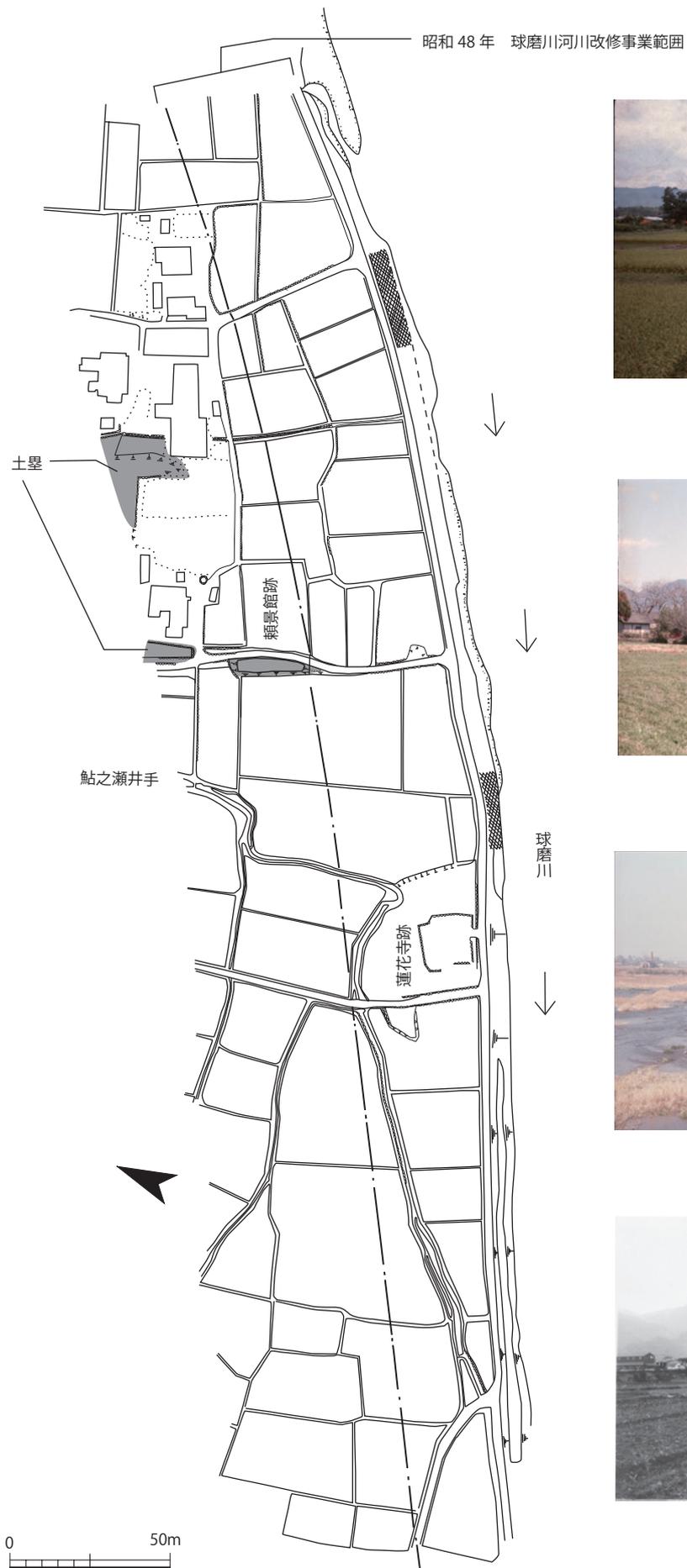
733～735は肥前系の染付碗である。736は肥前の染付碗である。737は染付小碗である。738～744は小坏である。745は内底蛇の目釉剥ぎの皿である。746は一勝地の碗である。747・748は内野山窯産の碗・皿である。749は白化粧土を刷毛塗り後、鉄絵を施す皿である。

(9) 注記不明分 (第42図)

750～758は土師器杯である。759～763は土師器小皿である。

764は龍泉窯系A6類の青磁碗で、縦に櫛目その後片彫り蓮花文、内面は草花文を施している。765は龍泉窯系A類の青磁碗である。766は龍泉窯系B類の青磁碗である。767は龍泉窯系B0類の碗である。768は白磁V類碗、769・770は白磁IX類皿である。771は染付碗B群、772・773は染付碗C群。774～776は宝相花唐草文の染付皿B1群の組皿である。

777は中世須恵器の壺である。778は肥前の染付碗、779・780は肥前の染付小坏である。781は肥前の染付瓶、782は一勝地の碗である。



南側から頼景館跡を撮影



北西側から頼景館跡を撮影

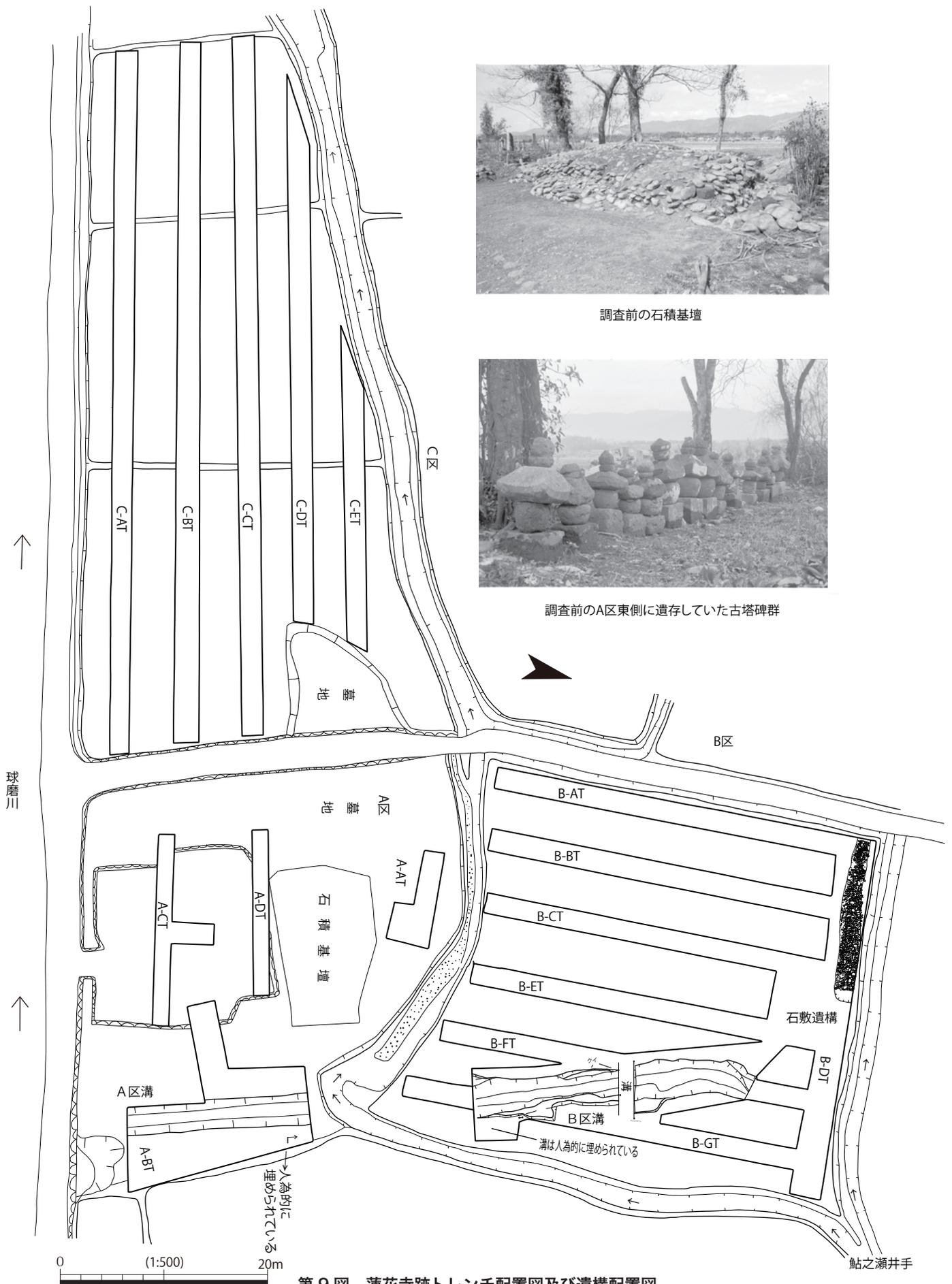


東側から頼景館跡を撮影



西側から蓮花寺跡を撮影

第8図 熊本県調査時の遺跡配置図及び旧地形図

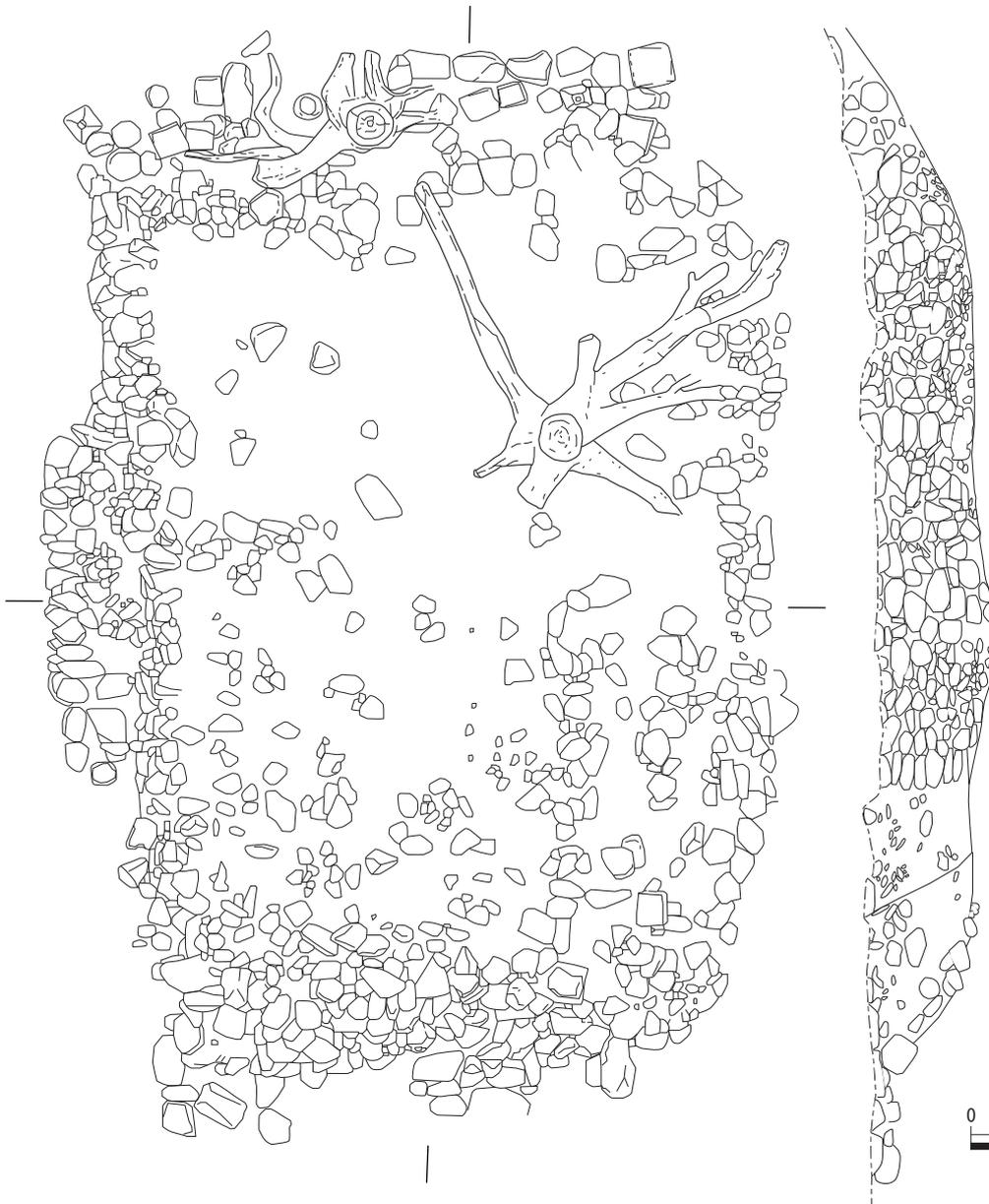
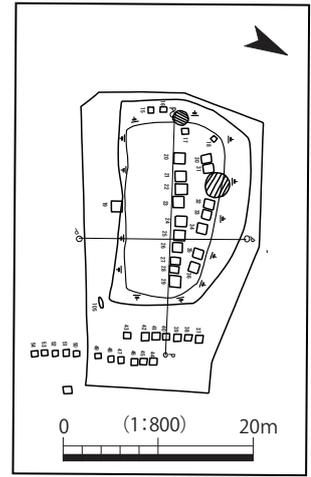
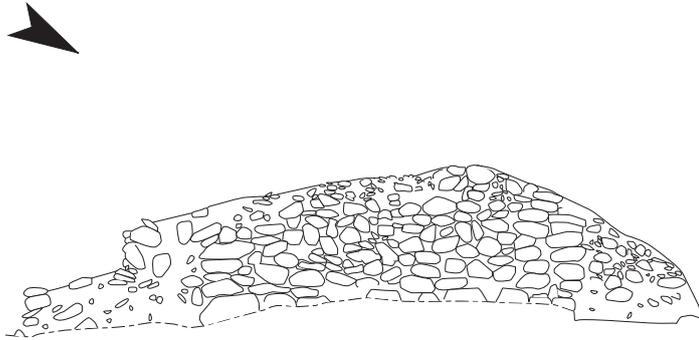


調査前の石積基壇

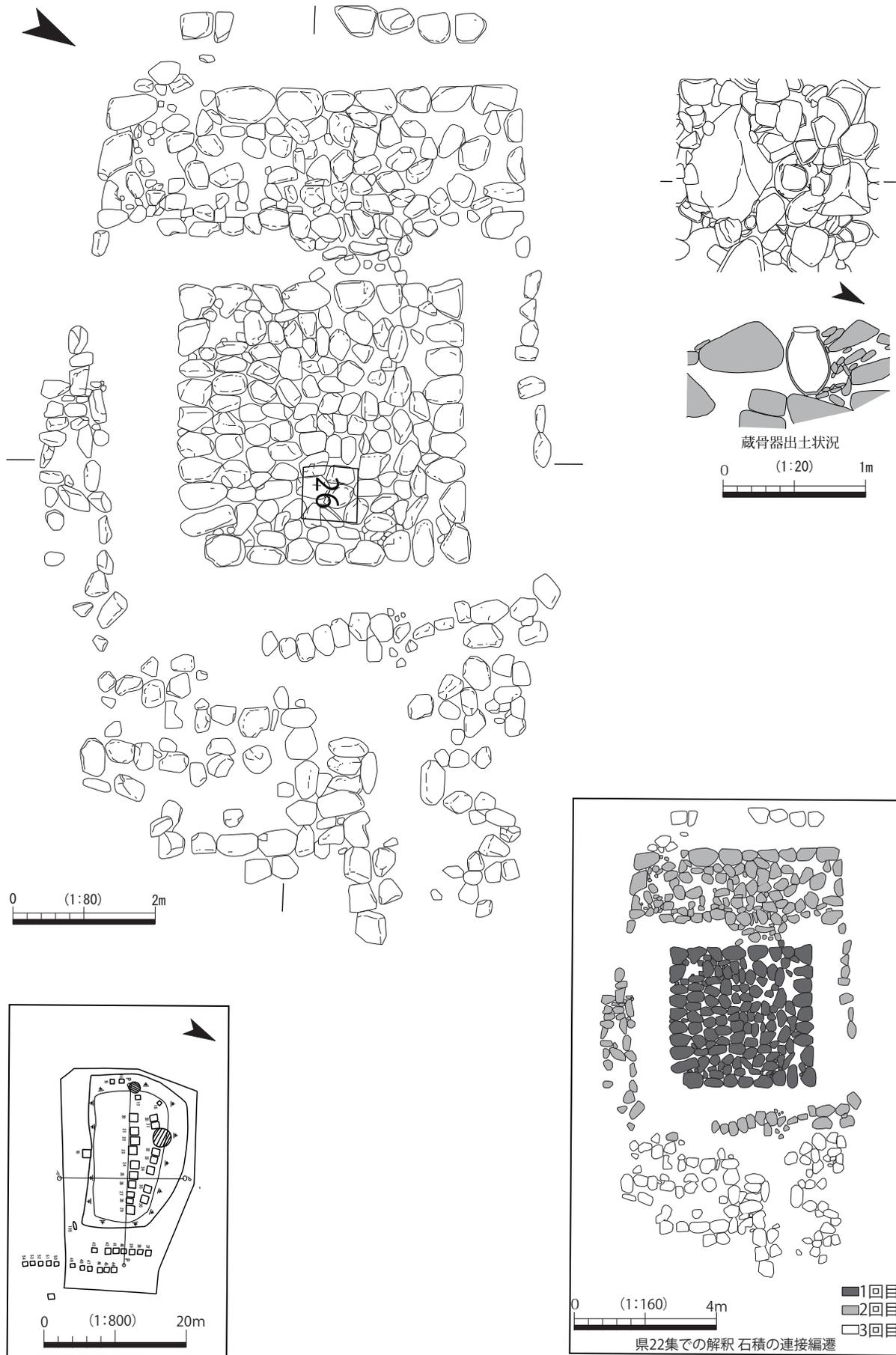


調査前のA区東側に遺存していた古塔碑群

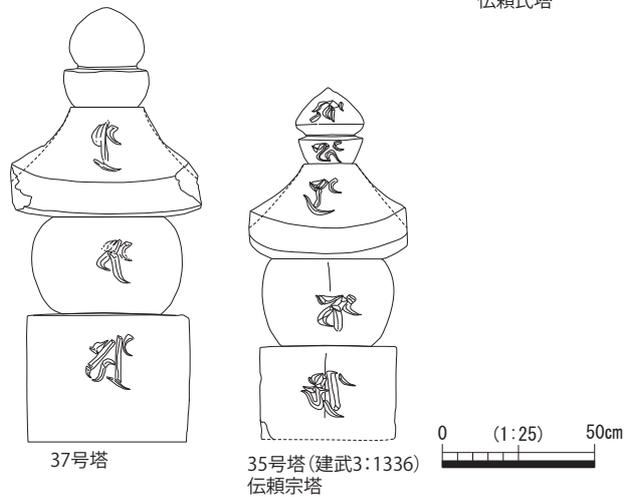
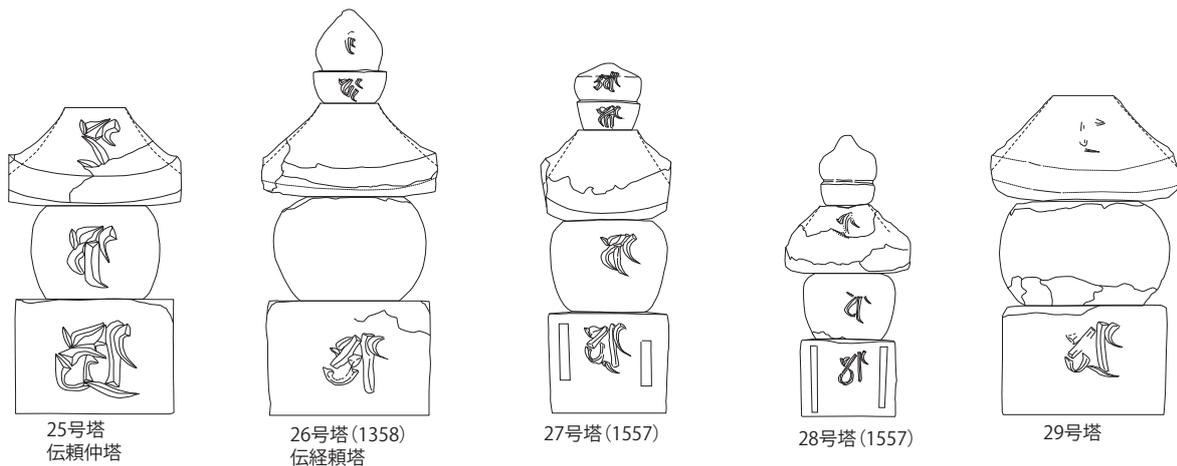
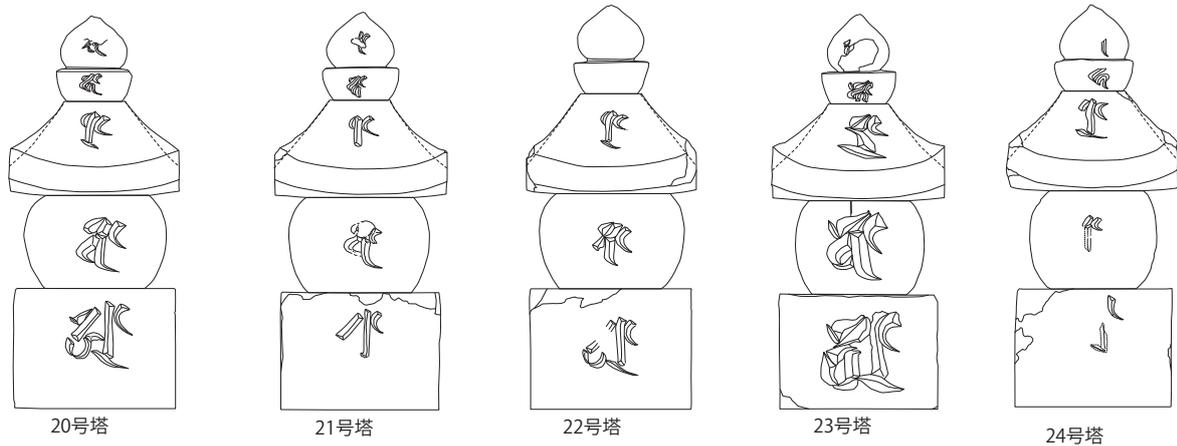
第9図 蓮花寺跡トレンチ配置図及び遺構配置図



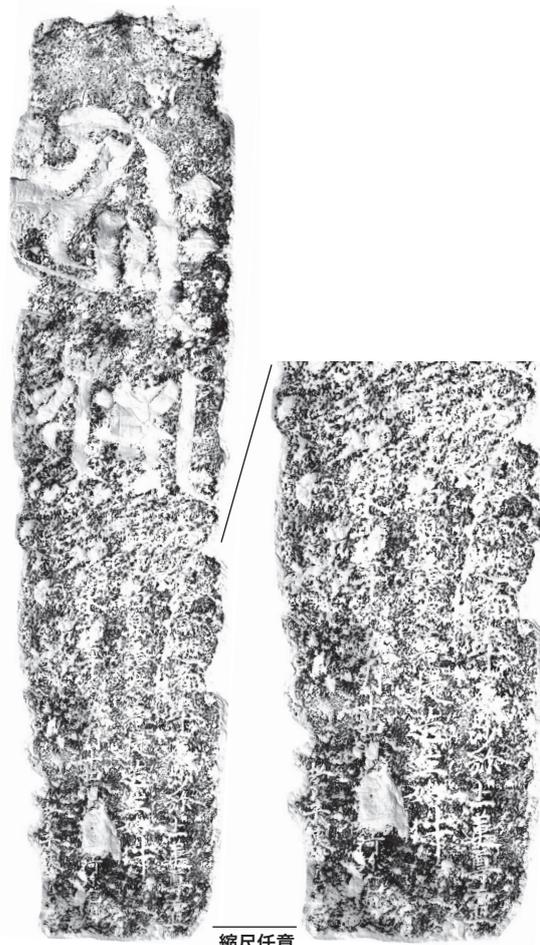
第 10 図 石積基壇検出状況図



第 11 図 石積基壇基礎部確認図及び蔵骨器出土状況図



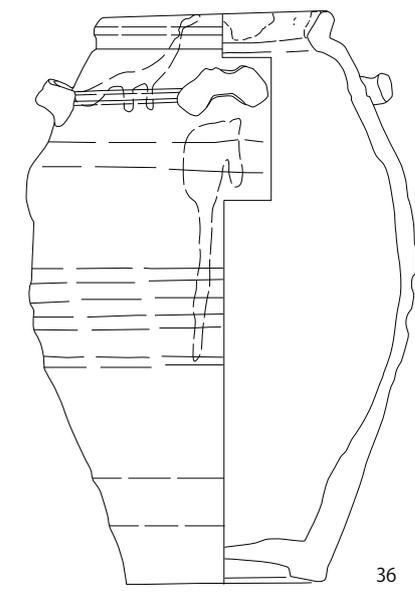
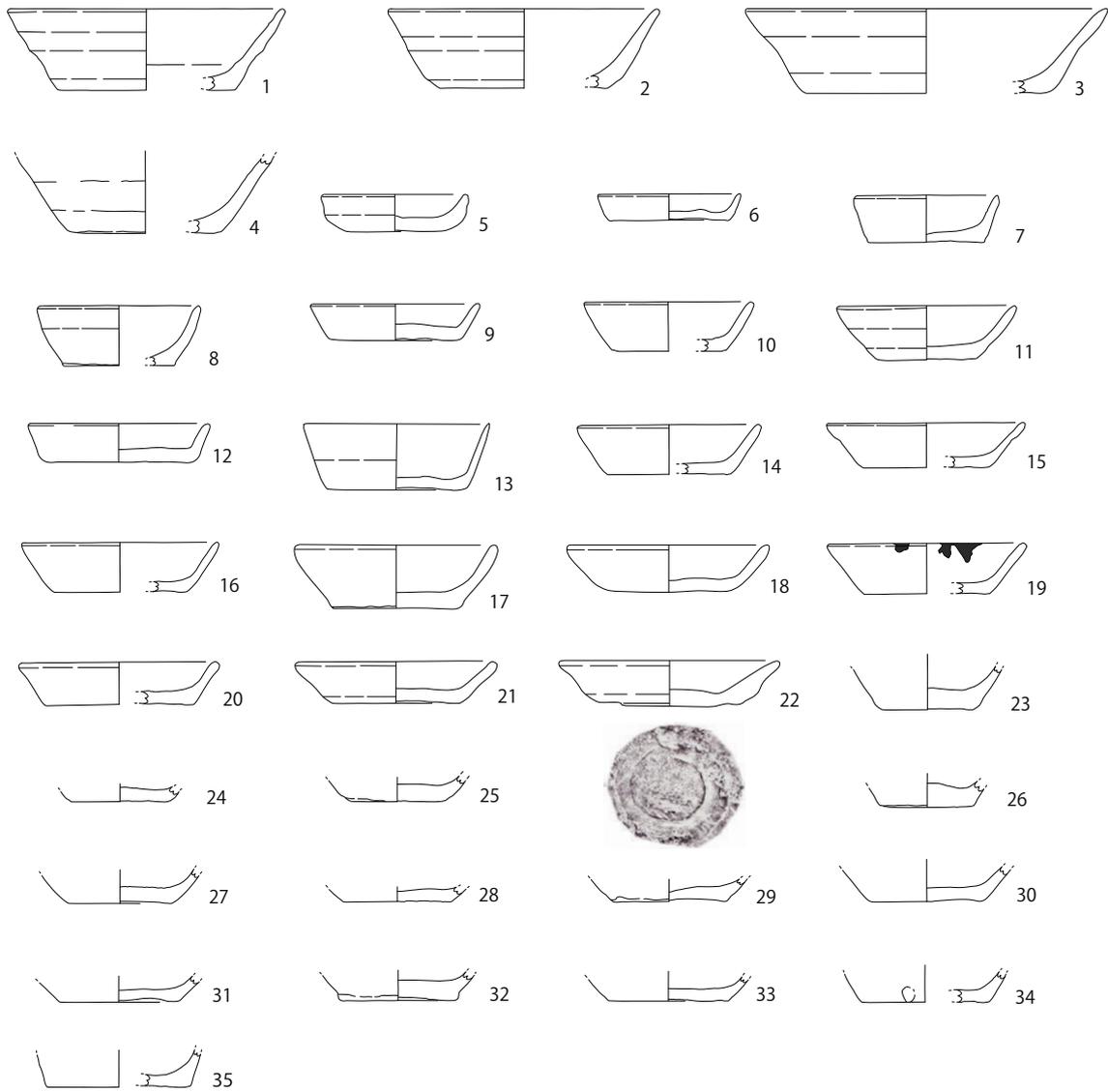
0 (1:25) 50cm



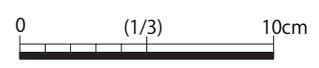
第 12 図 石積基壇上に配置された石造物実測図

No.	地輪			水輪						火輪						風輪			空輪			塔高 c+h+o+s+w	紀年銘	石材		
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u				v	w
報告23号	52	52	38	0	33	42.7	31	31	-	20	56.5	56.5	7.5	10	32.5	2	24.5	-	9.5	1	20.6	18	19.5	6	130.5	加久藤
報告25号	52	52	37	0	-	42.6	-	31	-	20	56	56	8	10	32	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	加久藤 頼仲 〔追刻〕
報告20号	53	53	40	0	34	47	33	31	19	20	55.5	55.5	7	9	31	9	25	18	10	2	22	16	18	6	130.0	加久藤
報告21号	52	52	39	0	-	46	34	31.5	19	20	56	56.5	7	9	32	-	25	17	10	1	22	16	19	6	131.5	加久藤
報告22号	53	53	40	0	-	47.5	35	31.5	19	20	56	56	8	9	33	1	25	17	10.5	1	22	16	19	8	134.0	加久藤 頼忠 〔追刻〕
報告24号	51	51	39	0	-	48	30	32.5	21	21	56	56	8	10	33	1	26	17	10	0.5	22.5	19	19	6	133.5	加久藤
報告26号	52.5	52.5	38	0	-	50.5	33	34.5	21	19	57	57	8	8	31	-	24	18	11	0.5	22	18	21	7	135.5	加久藤
報告27号	38	39	33	0.5	-	38	-	31	23	19.5	41	40	13	16	30	3	22	17.5	9.5	1	22	19	13	8.5	116.5	加久藤 弘治3年(1557)
報告28号	30	31	25	0	-	30	20	22.5	18	17	41	41	6	-	22.5	3	18	14	6.5	3.5	19	10	17	7	93.5	加久藤 弘治3年(1557)
報告29号	53.5	53.5	36	0	-	56	-	35	23	20	61	-	7	-	35	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	加久藤
報告30号	52	52	35	0	-	48	32	33	21	22	56	55	7	9	35.5	4	23.5	16	10	1	23.5	15.5	19	6	132.5	加久藤
報告31号	51	51	36	0	-	46	30	30.5	18	19	54.5	54.5	7	9	31	2	24	17	10.5	0.5	22	14	17	5	125	加久藤
報告34号	45	45	32	0	-	42.5	31	29	20	18	48	48	9.5	10	32.5	3	21.5	17	9.5	1	21.5	15.5	17	6	120	加久藤 頼氏 〔追刻〕
報告35号	44	45	32	0	36	42.5	32	29	21	18	50	51	7	7	32	3	20	14	8	1	21.5	16	17	5	118.0	加久藤 頼宗 〔追刻〕
報告37号	53	53	42	0.5	49	35	32.5	21	24	62	60	9	10	36.5	1	28	20	12.5	1	24.5	20	20	7	143.5	加久藤 建武3年甲戌 甲戌は建武元年 (1337-1336)	

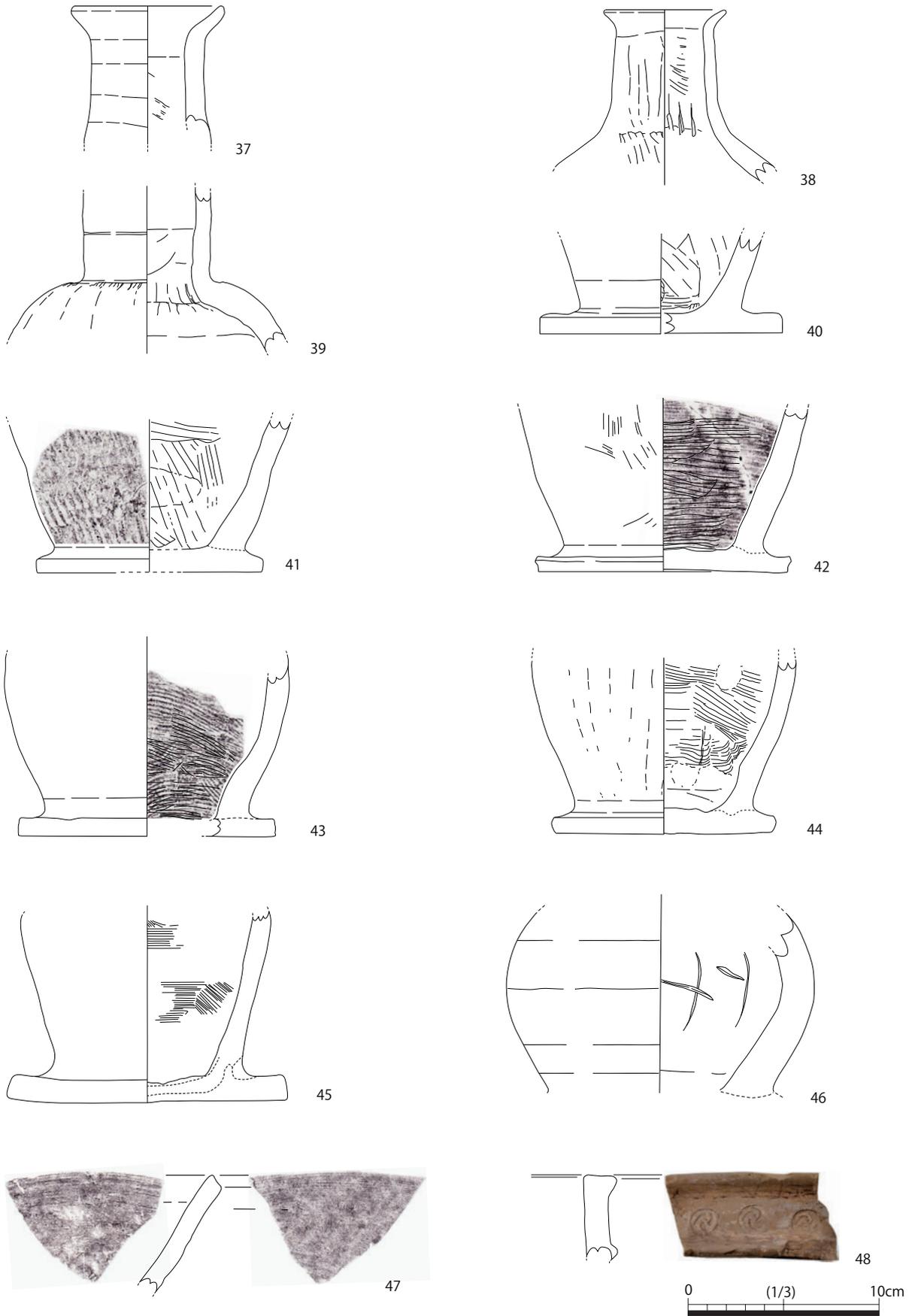
第3表 石積基壇上五輪塔計測表



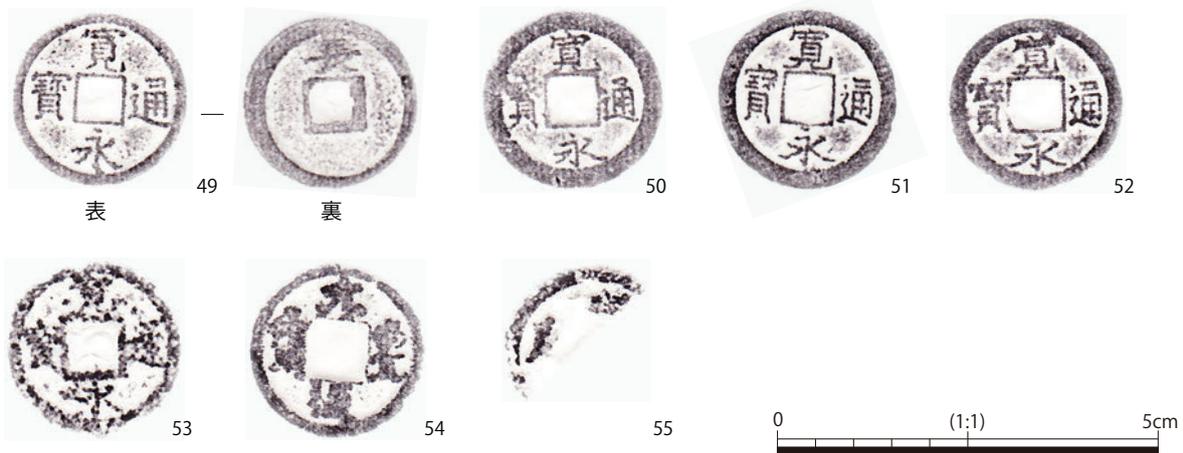
藏骨器実測図



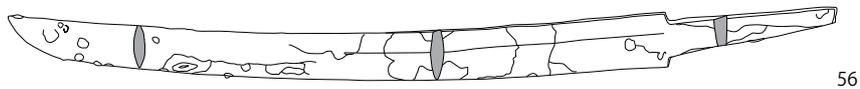
第 13 図 石積基壇出土遺物 (1)



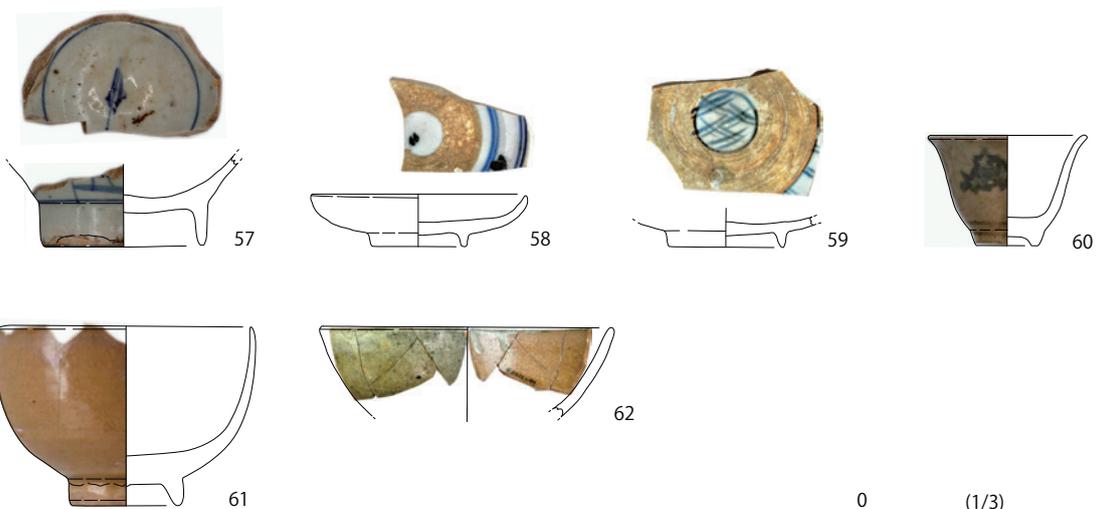
第 14 図 石積基壇出土遺物 (2)



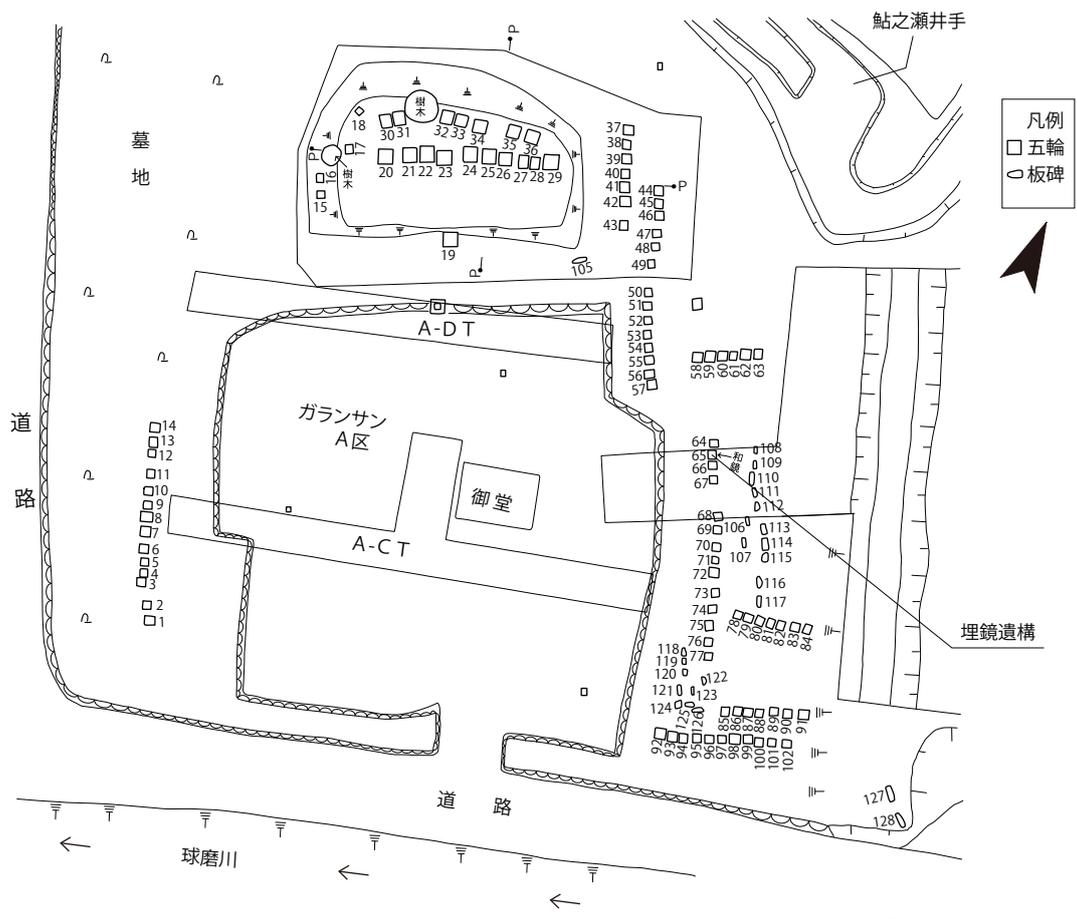
挿図 番号	出土地区	種別	材質	法量 (cm)		残存度	備考
				長さ	厚み		
49	A区石積基壇	古銭	銅製	2.3	0.01	完形	寛永通宝
50	A区石積基壇	古銭	銅製	2.4	0.01	完形	寛永通宝
51	A区石積基壇	古銭	銅製	2.4	0.015	完形	寛永通宝
52	A区石積基壇	古銭	銅製	2.3	0.01	完形	寛永通宝
53	A区石積基壇	古銭	銅製	2.4	0.015	完形	寛永通宝
54	A区石積基壇	古銭	銅製	2.3	0.01	完形	元豊通宝
55	A区石積基壇	古銭	銅製	2.2	0.01	1/5	祥符元宝or祥符通宝



挿図 番号	出土地区	種別	器種	備考
56	A区石積基壇	鉄器	短刀	全長32.3cm 刃渡り25.8cm 反り8mm

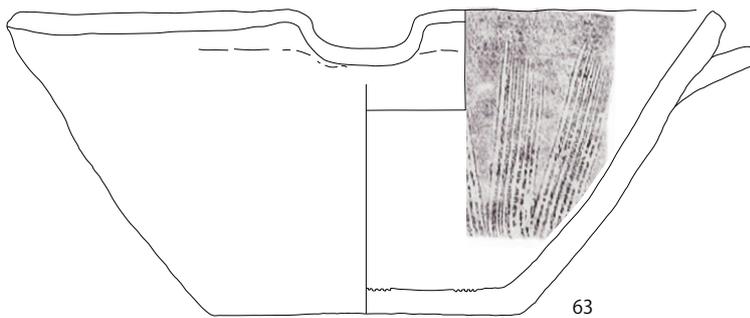
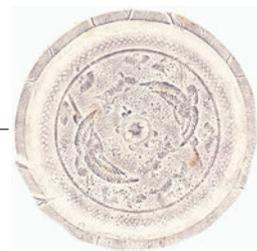


第 15 図 石積基壇出土遺物 (3)



A区古塔碑群配置図

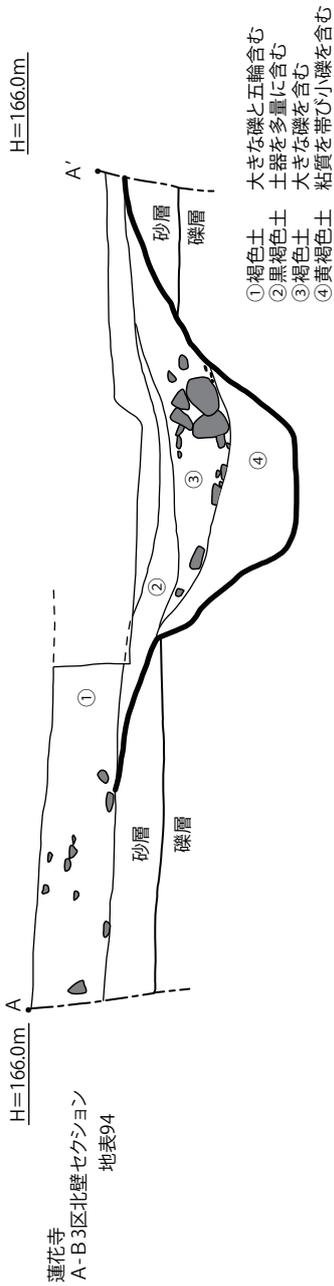
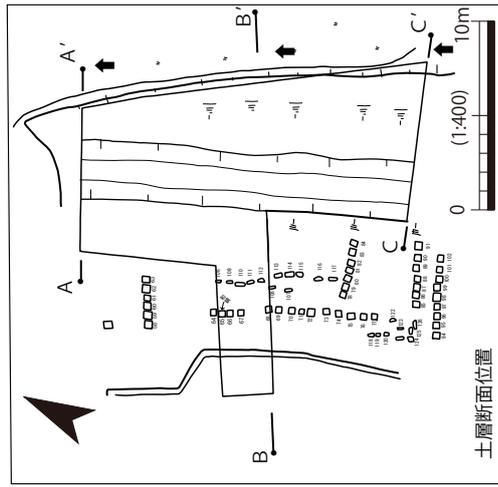
0 (1:600) 20m



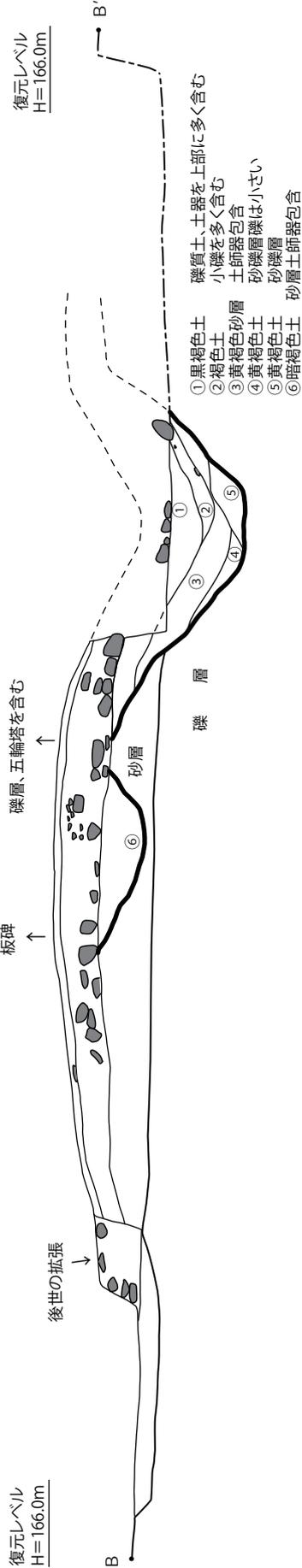
64

0 (1/3) 10cm

第 16 図 A 区埋鏡遺構及び石造物位置図・埋鏡遺構出土遺物



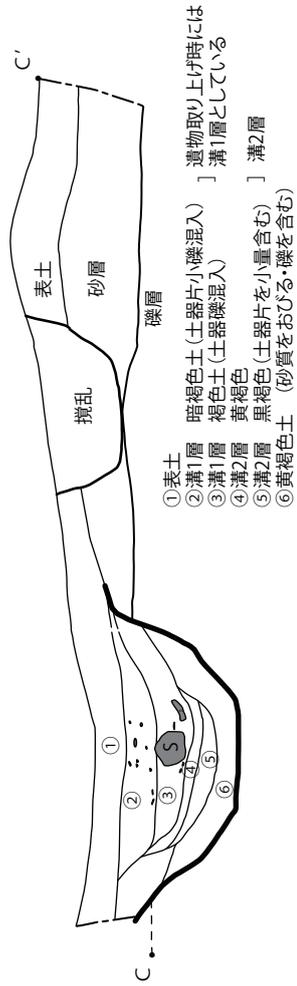
蓮花寺
A-B2区南側セクション



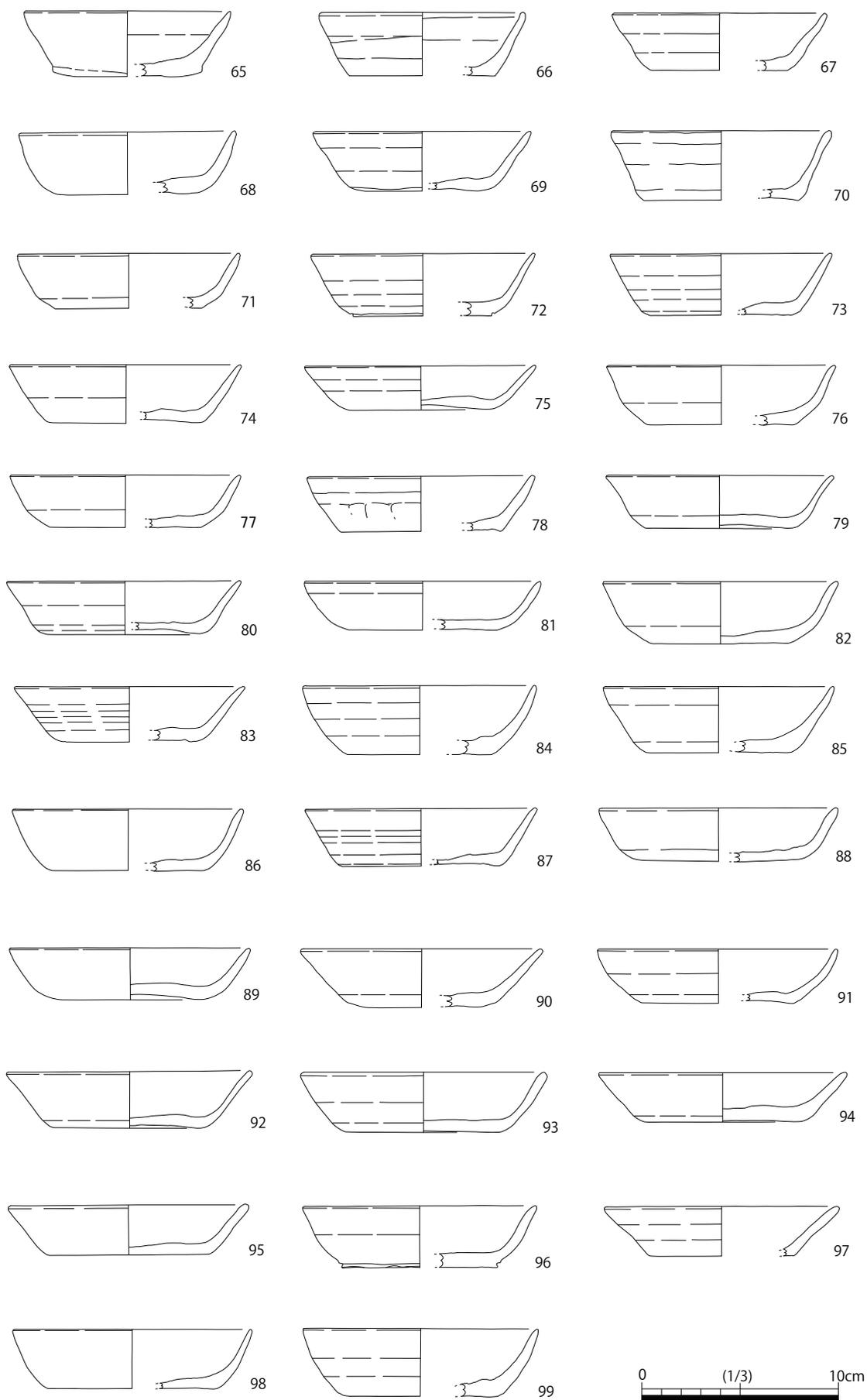
H=166.0m

H=166.0m

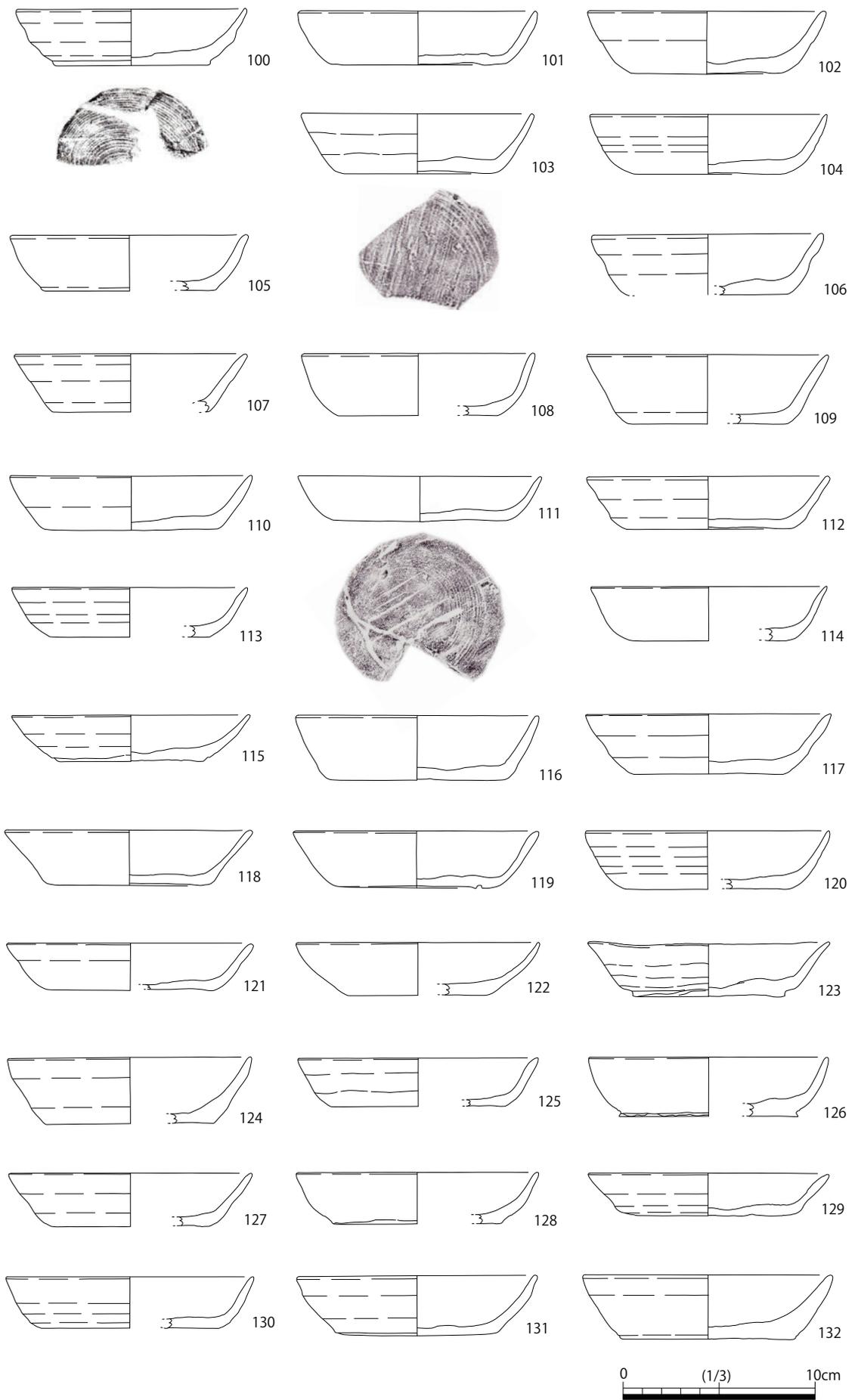
蓮花寺
A-B1区 南側セクション
(※元図を反転して作成)



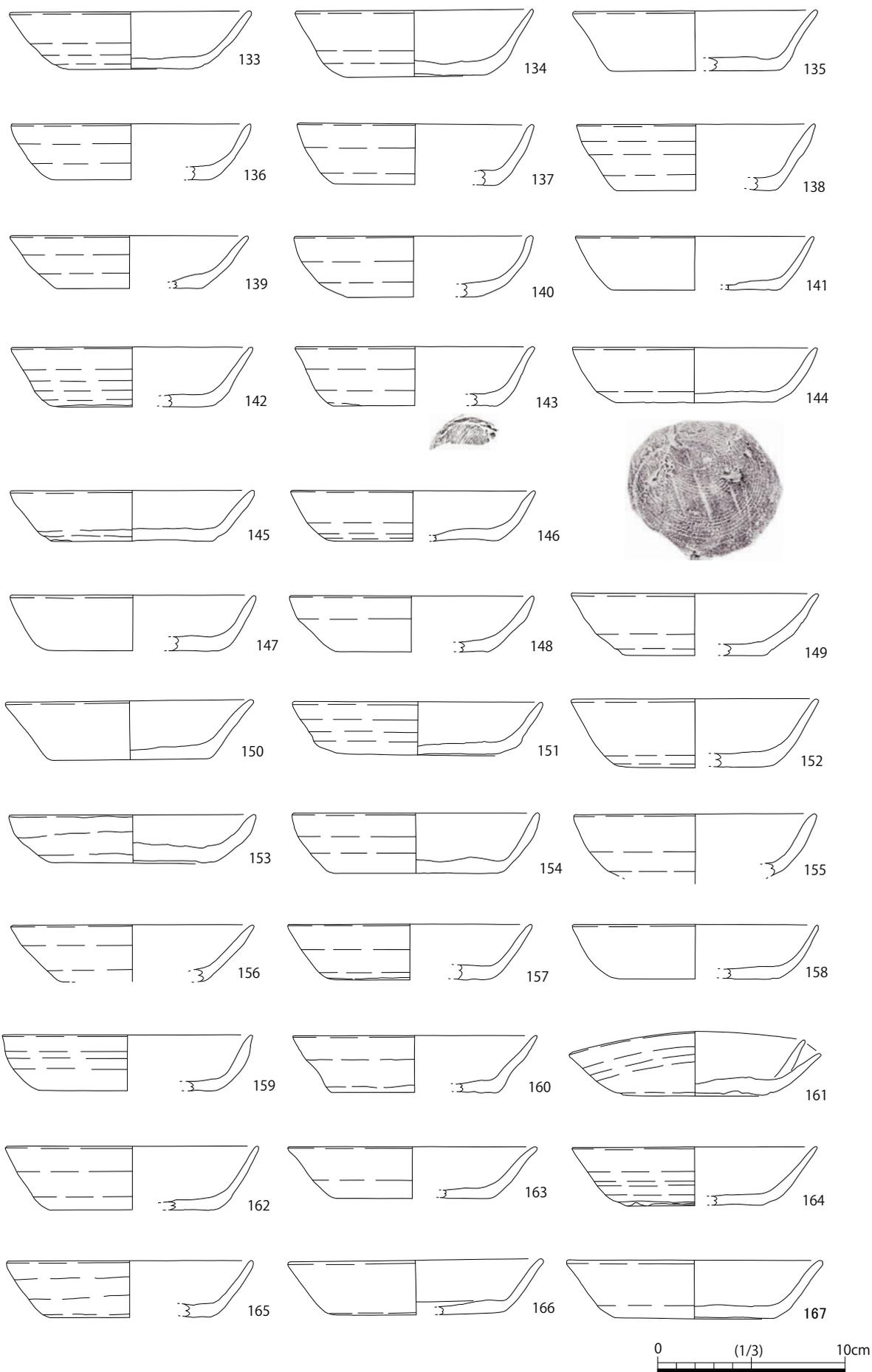
第17図 A区溝土層断面図



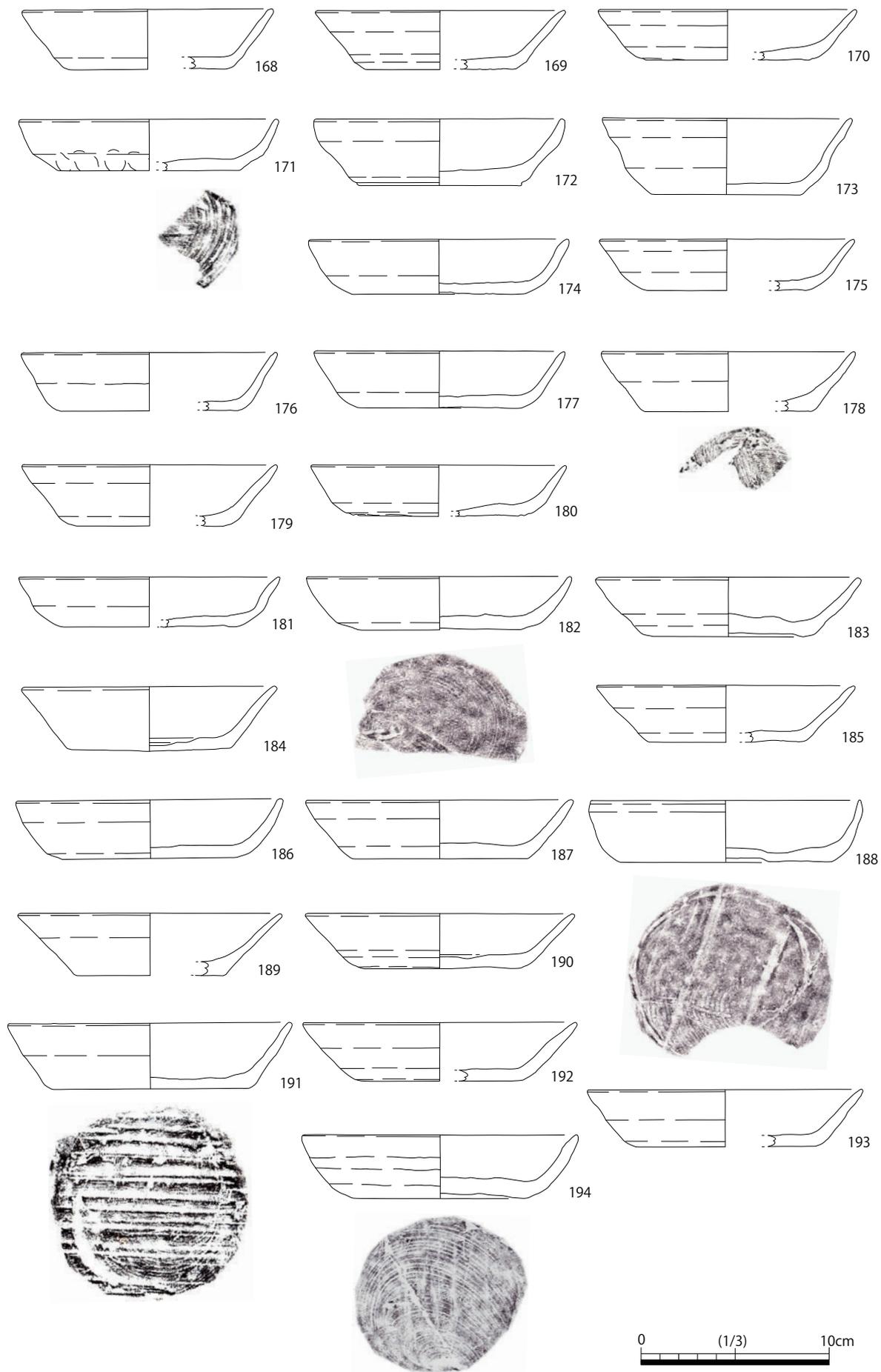
第18图 A区沟出土遗物(1)



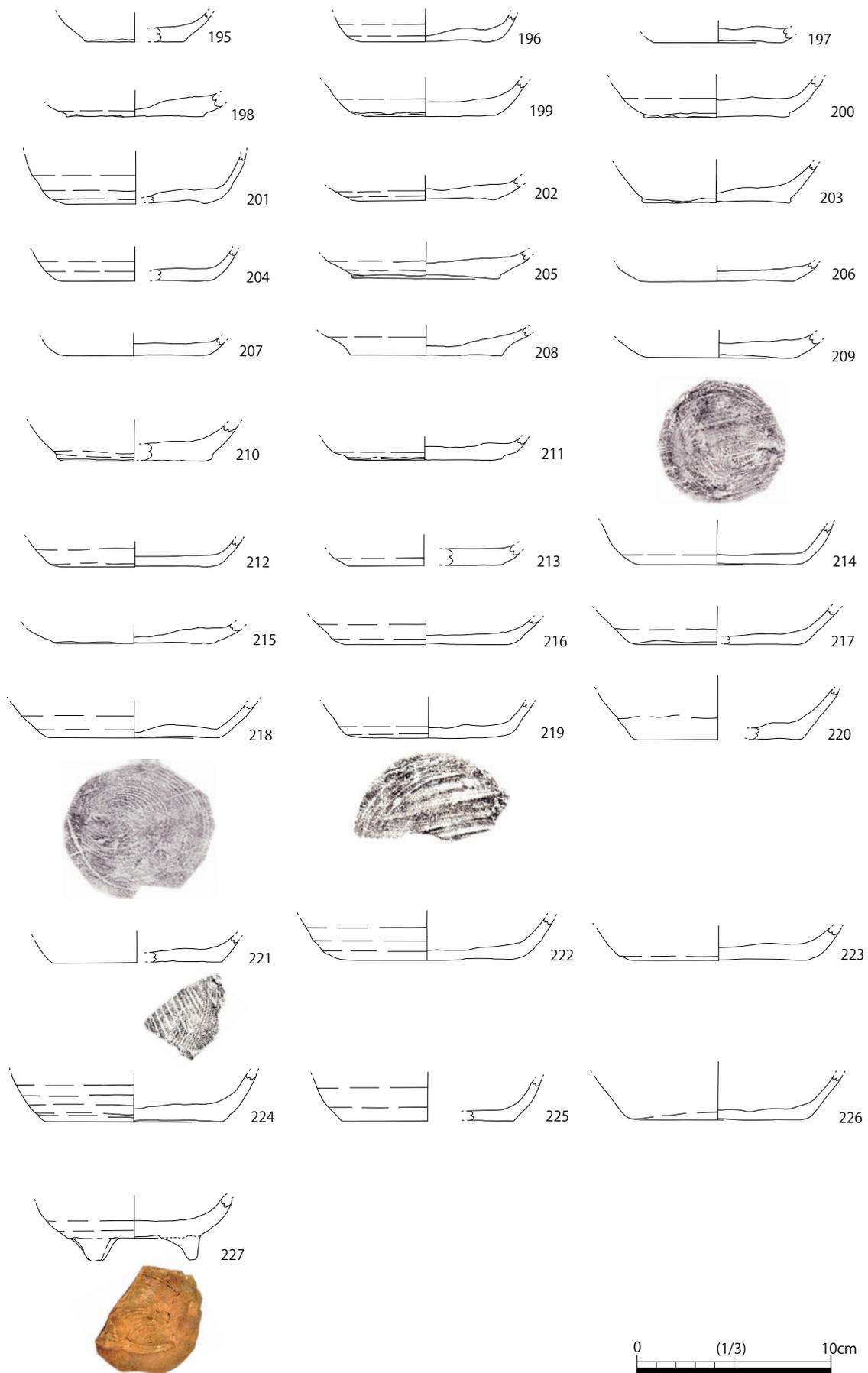
第 19 图 A 区沟出土遗物 (2)



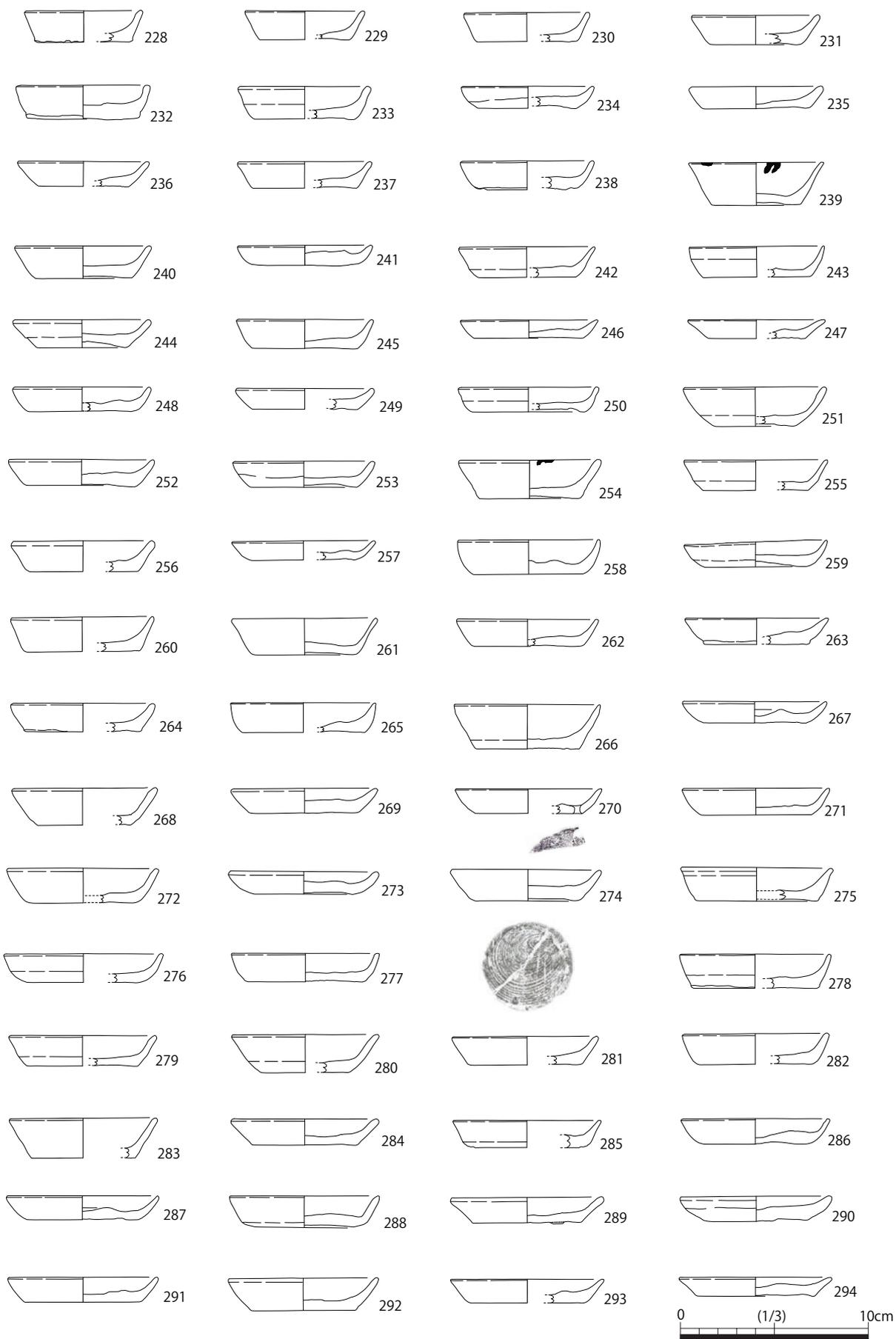
第 20 图 A区沟出土遗物 (3)



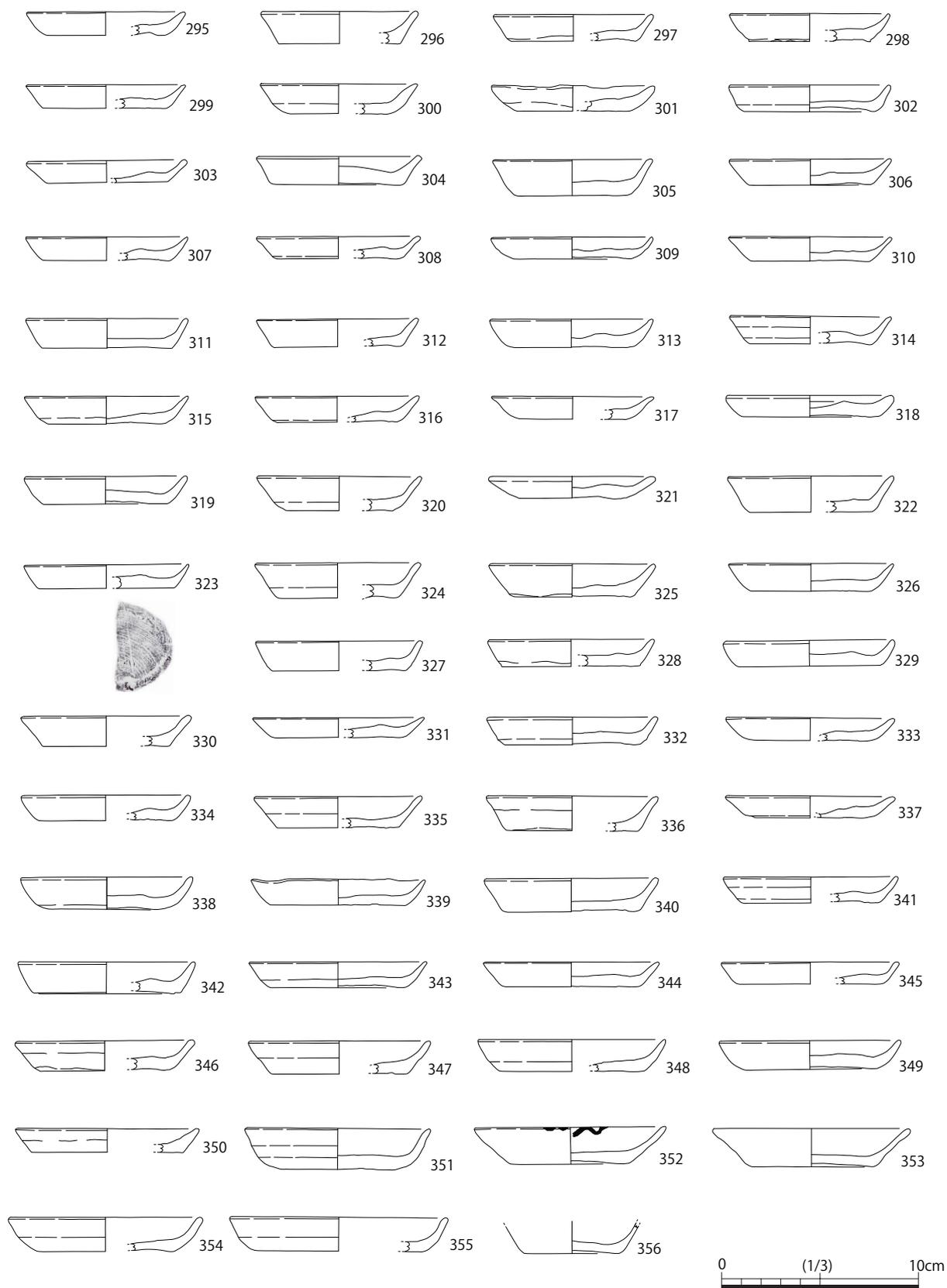
第 21 图 A区沟出土遗物 (4)



第 22 图 A区沟出土遗物 (5)



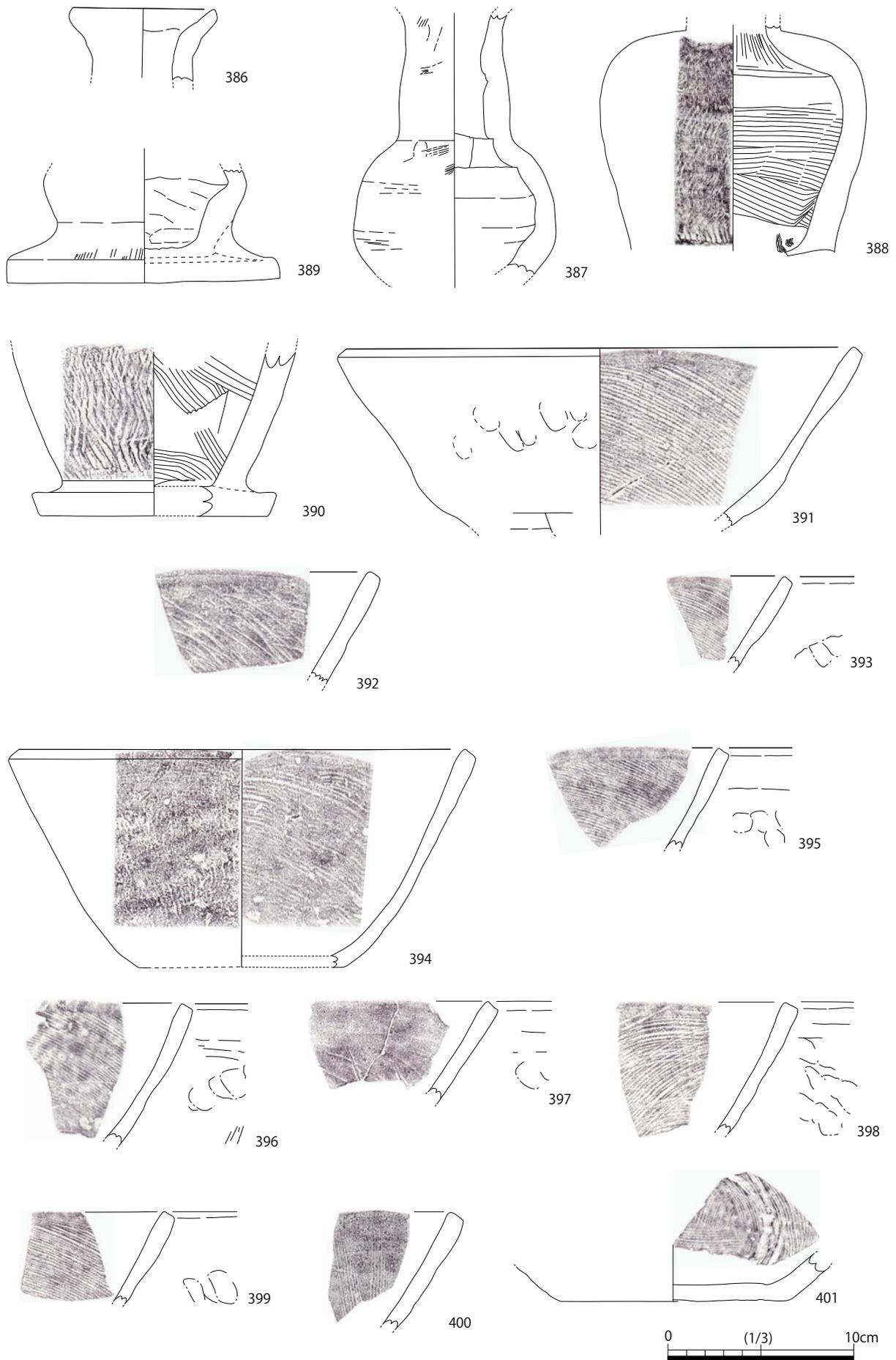
第 23 图 A区溝出土遺物 (6)



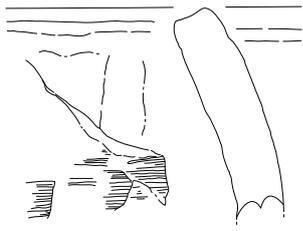
第 24 图 A区溝出土遺物 (7)



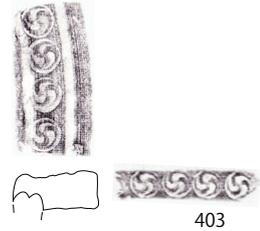
第 25 图 A区沟出土遗物 (8)



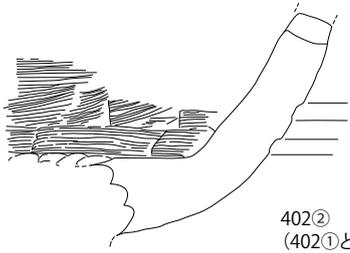
第 26 图 A区沟出土遗物 (9)



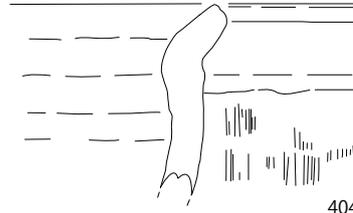
402①



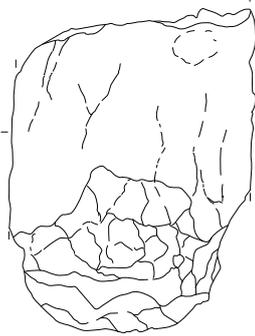
403



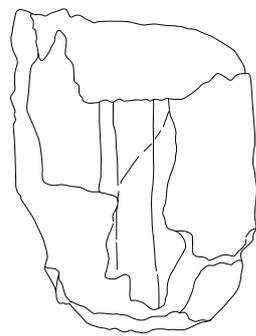
402②
(402①と同じ個体)



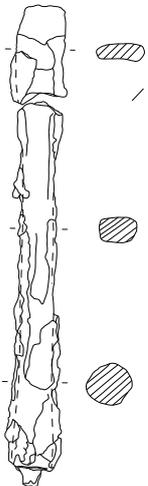
404



405



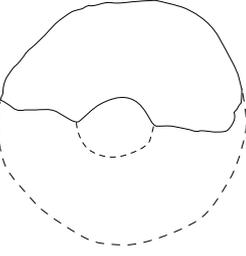
20図



407



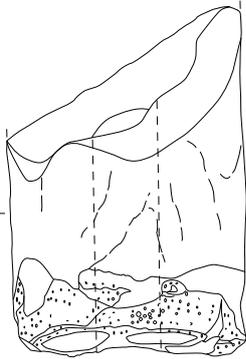
408



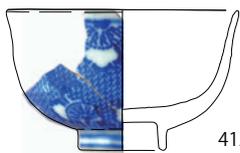
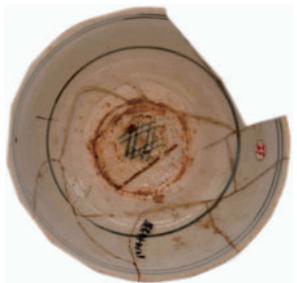
409



410



406



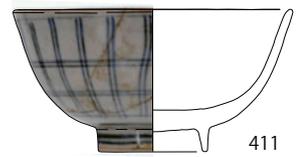
412



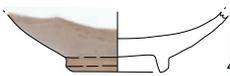
413



414

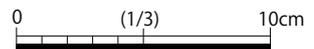


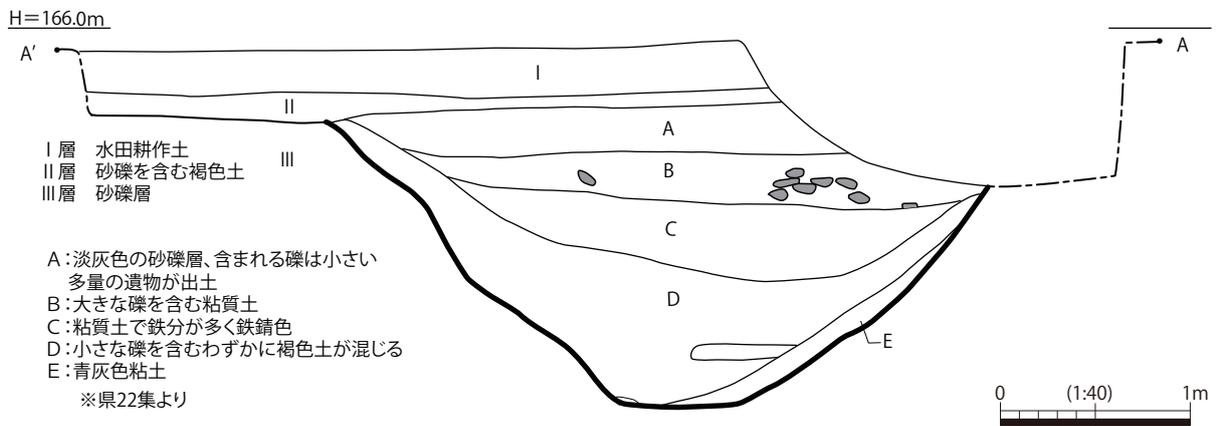
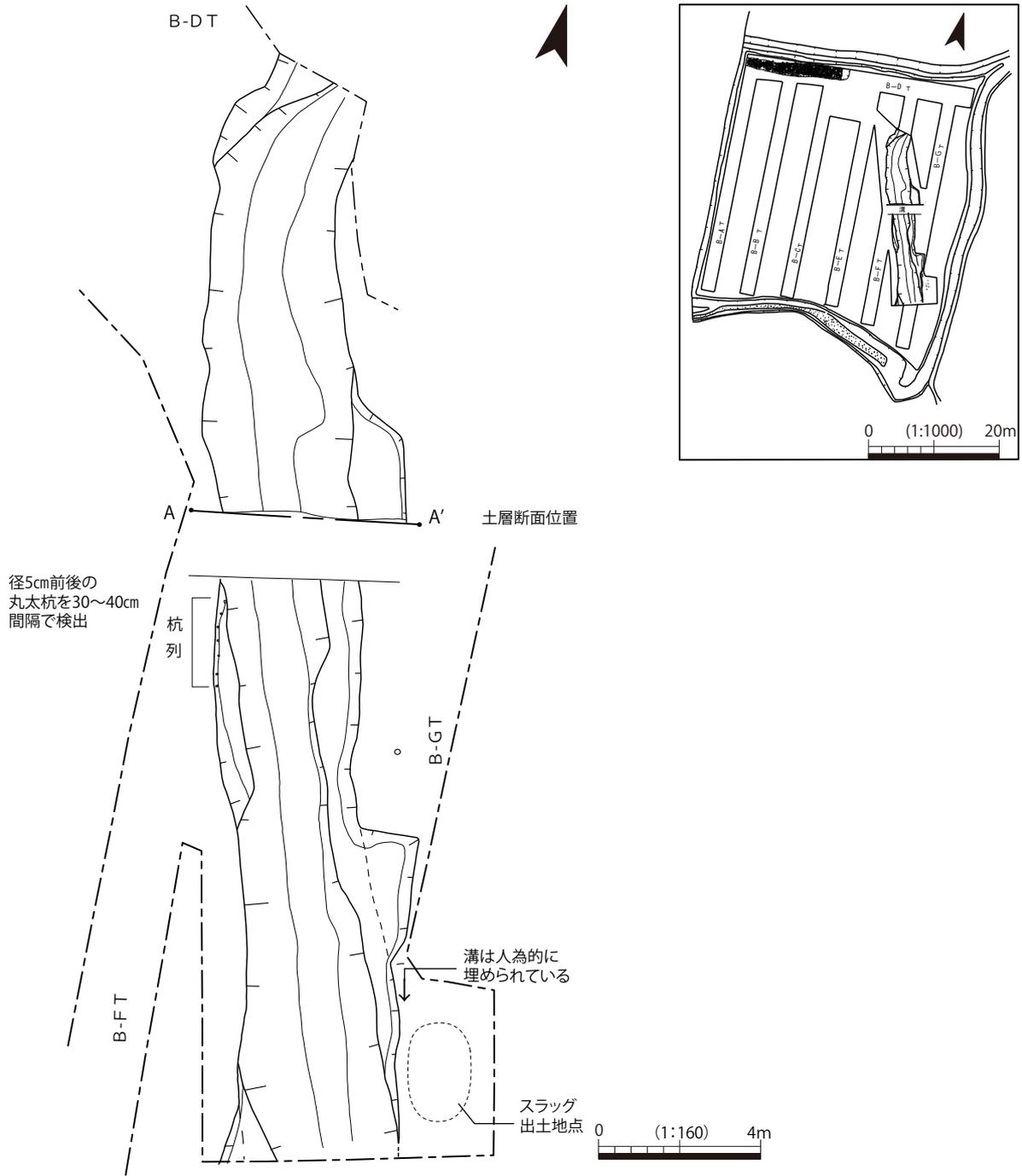
411



415

第 27 図 A区溝出土遺物 (10)

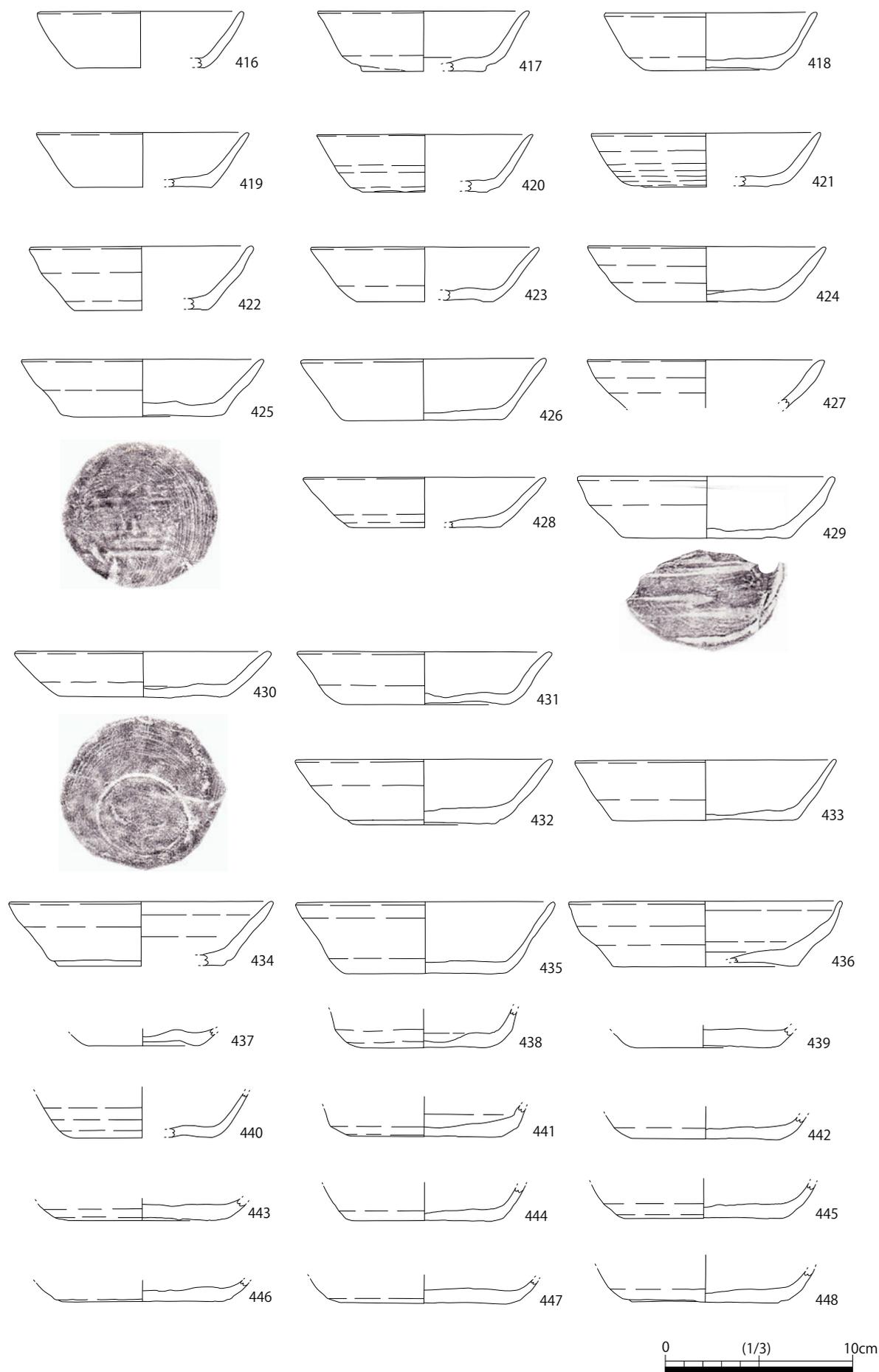




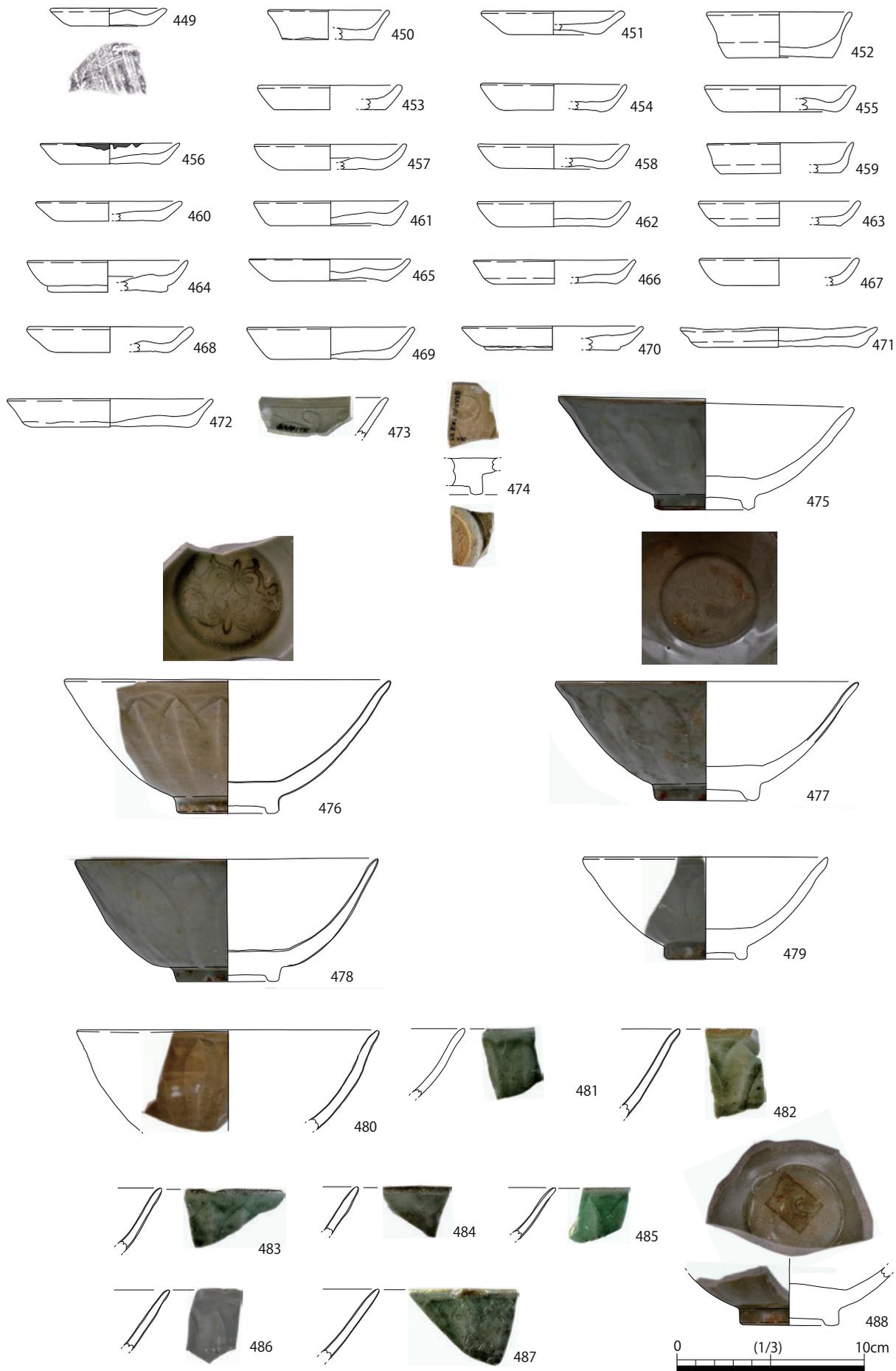
- A: 淡灰色の砂礫層、含まれる礫は小さい
多量の遺物が出土
- B: 大きな礫を含む粘質土
- C: 粘質土で鉄分が多く鉄錆色
- D: 小さな礫を含むわずかに褐色土が混じる
- E: 青灰色粘土

※県22集より

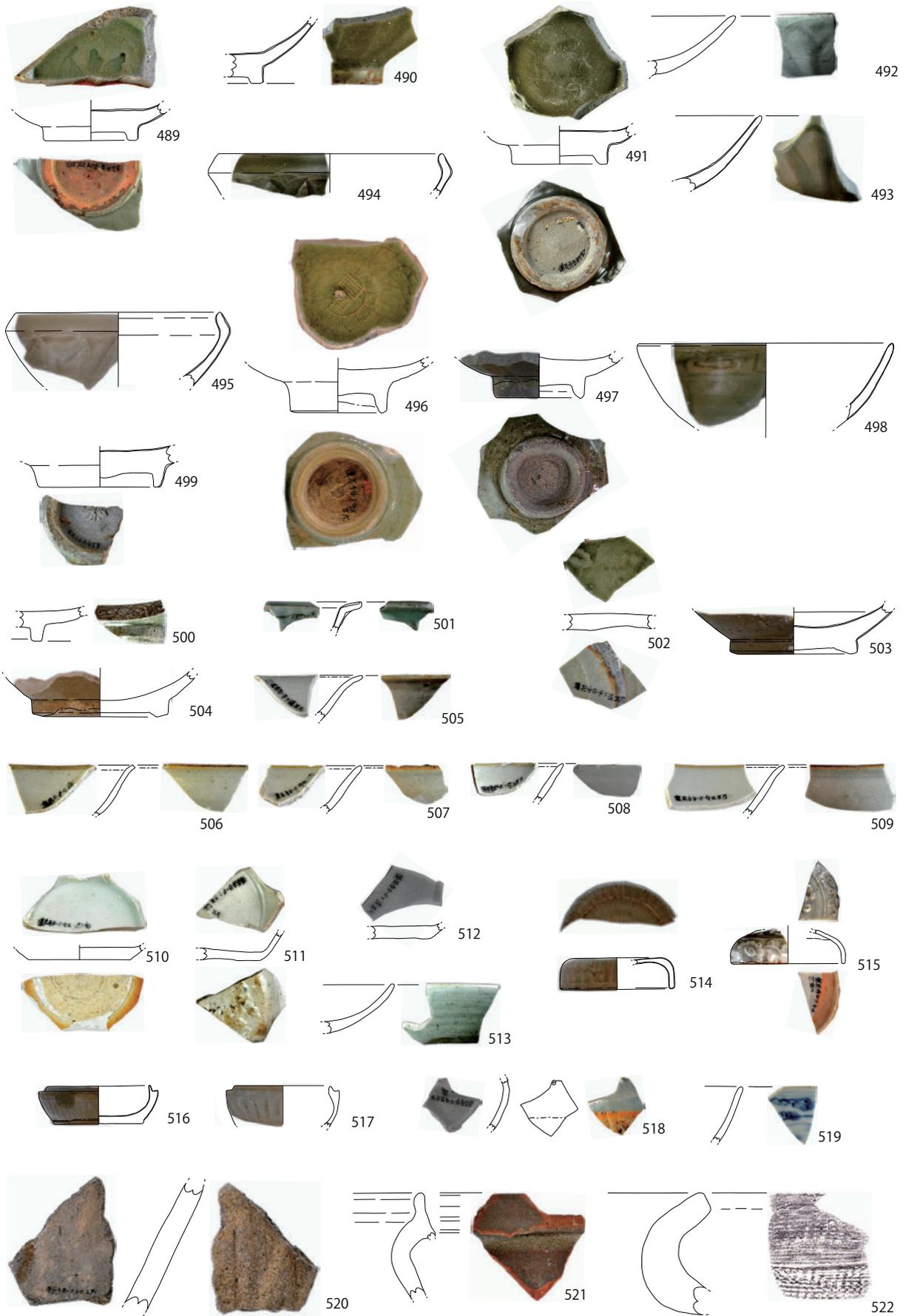
第 28 図 B 区溝及び土層断面図



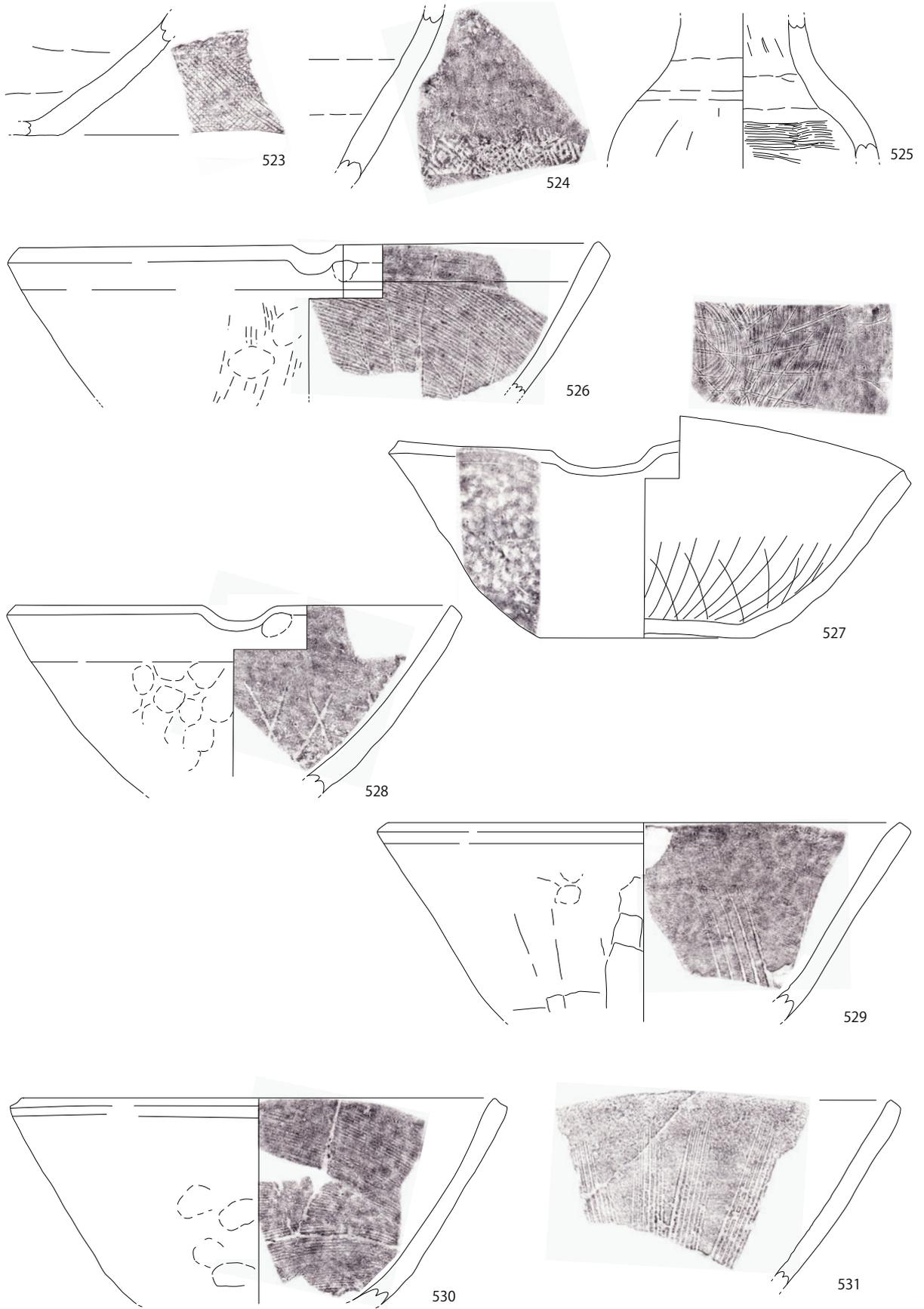
第 29 图 B 区沟出土遗物 (1)



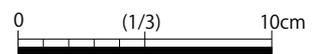
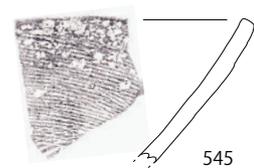
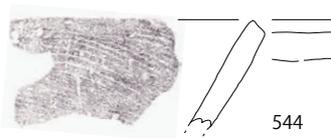
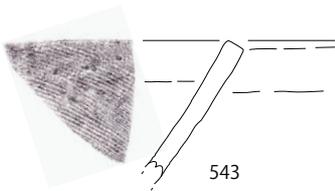
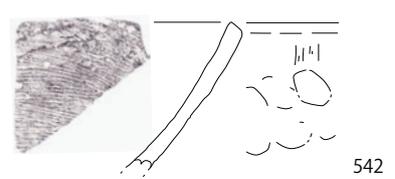
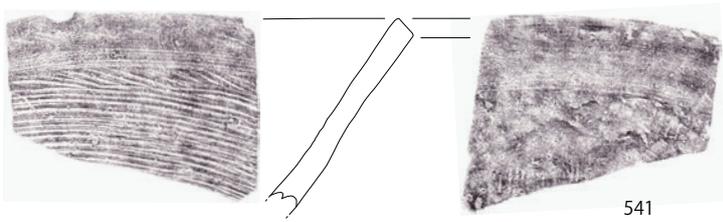
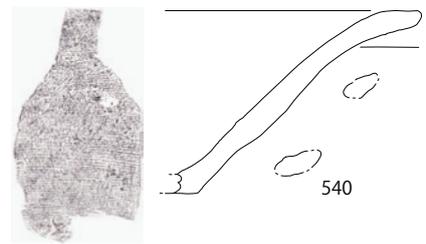
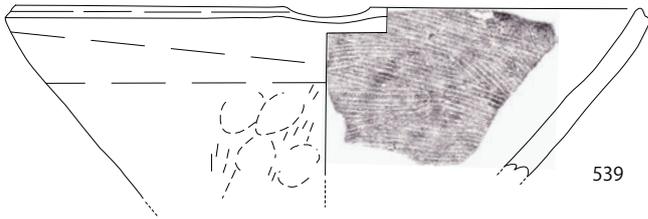
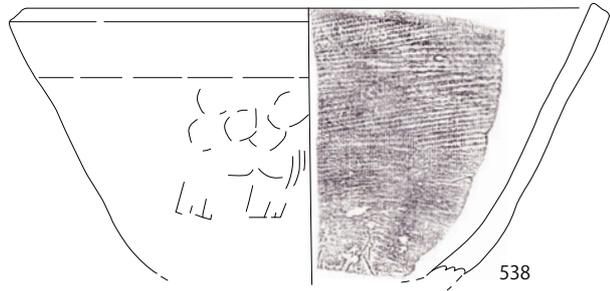
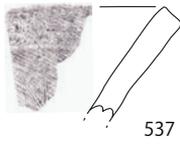
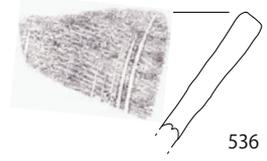
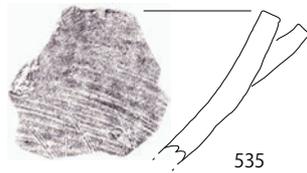
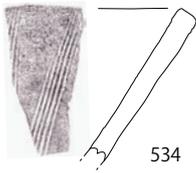
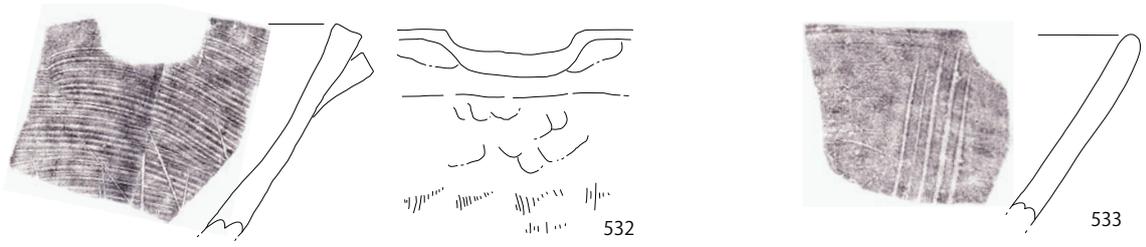
第 30 图 B 区沟出土遗物 (2)



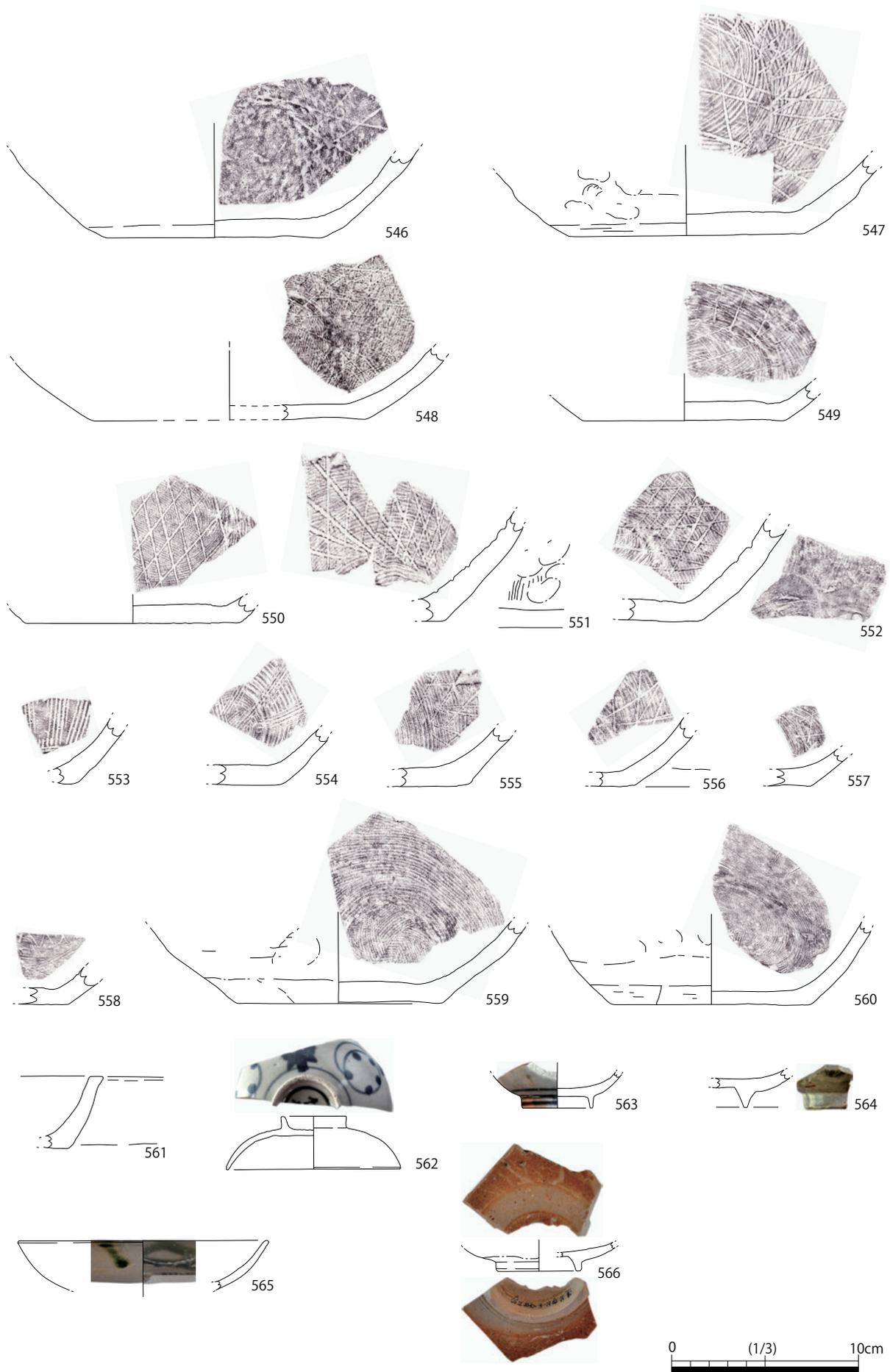
第 31 图 B 区沟出土遗物 (3)



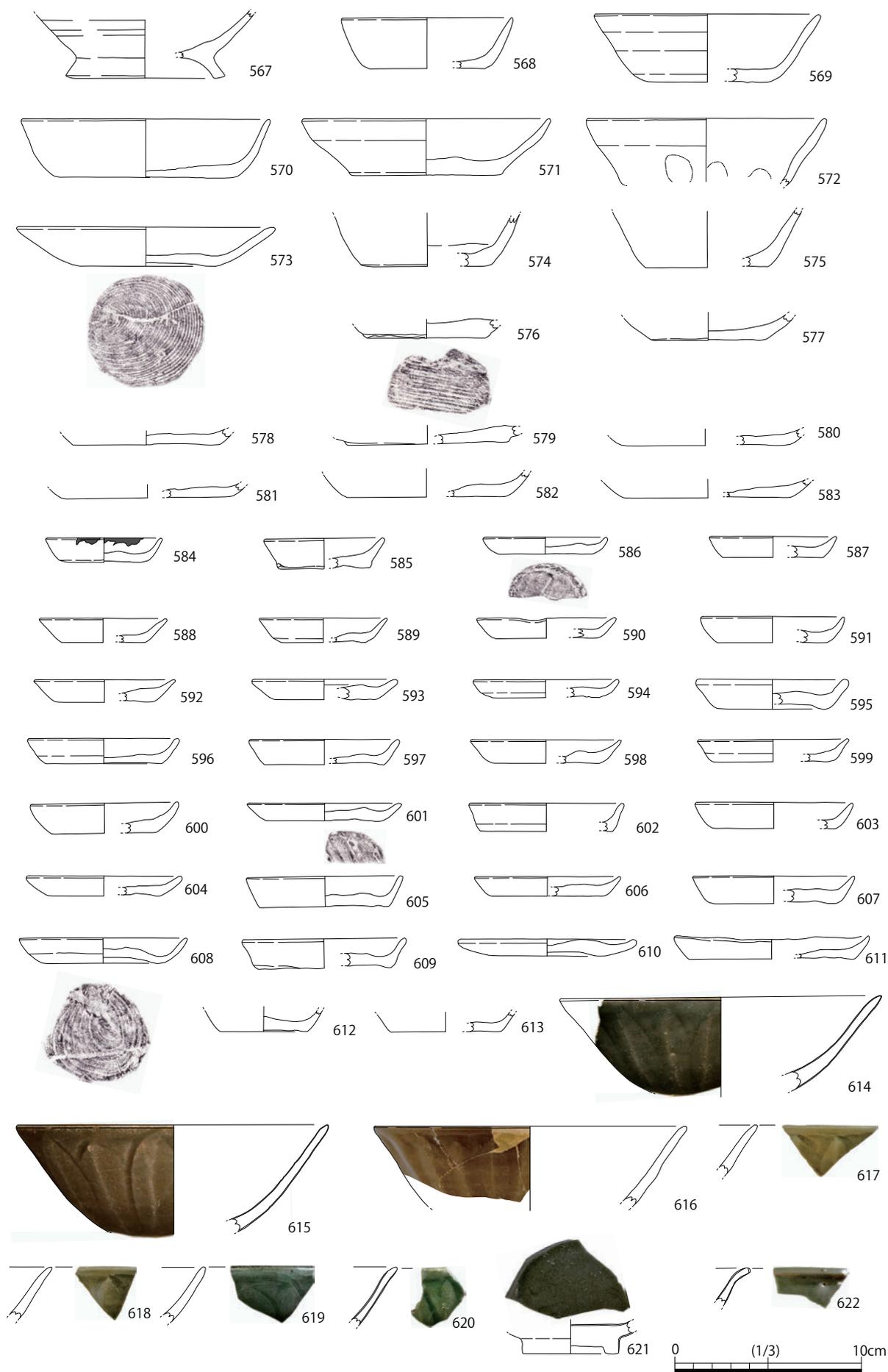
第 32 图 B 区沟出土遗物 (4)



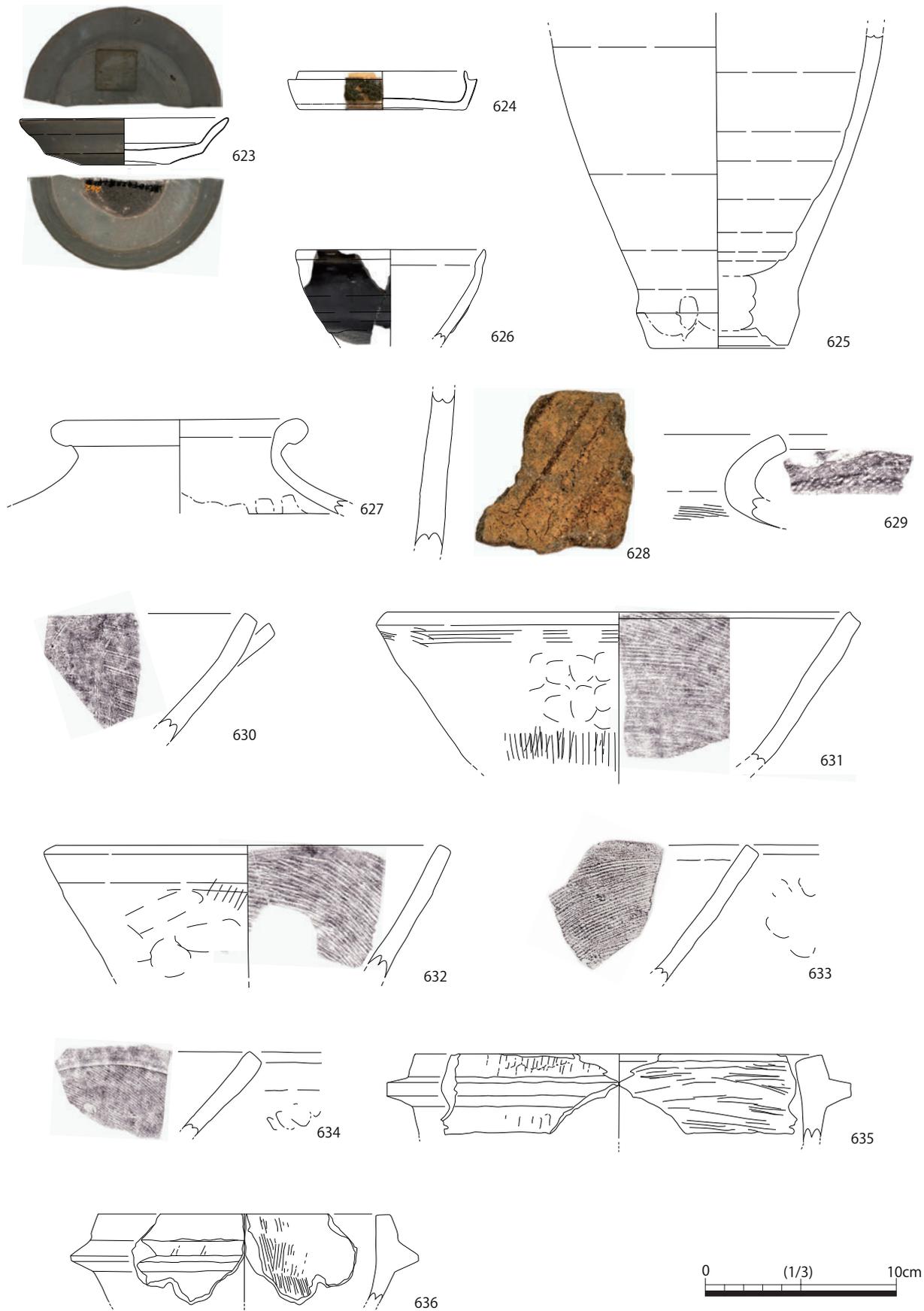
第 33 图 B 区沟出土遗物 (5)



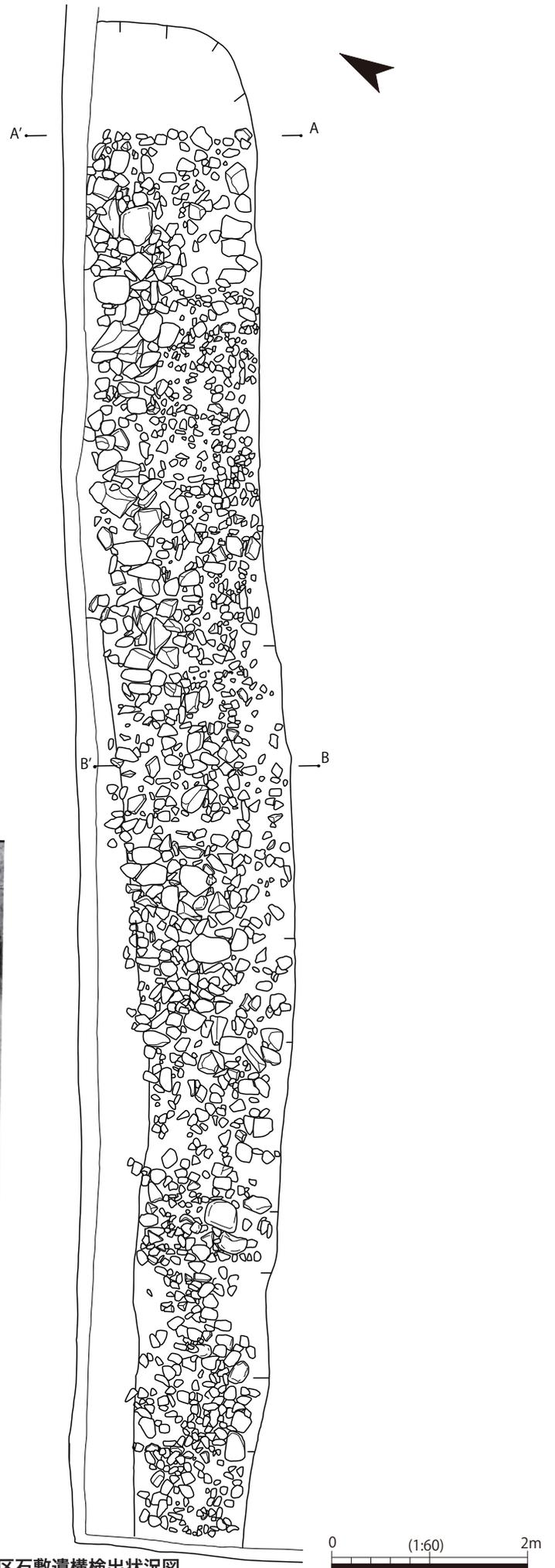
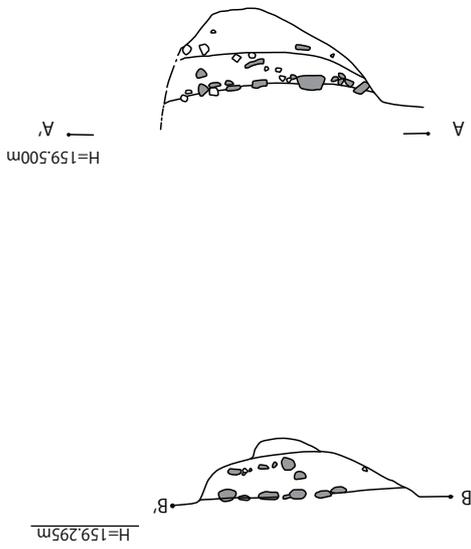
第 34 图 B 区沟出土遗物 (6)



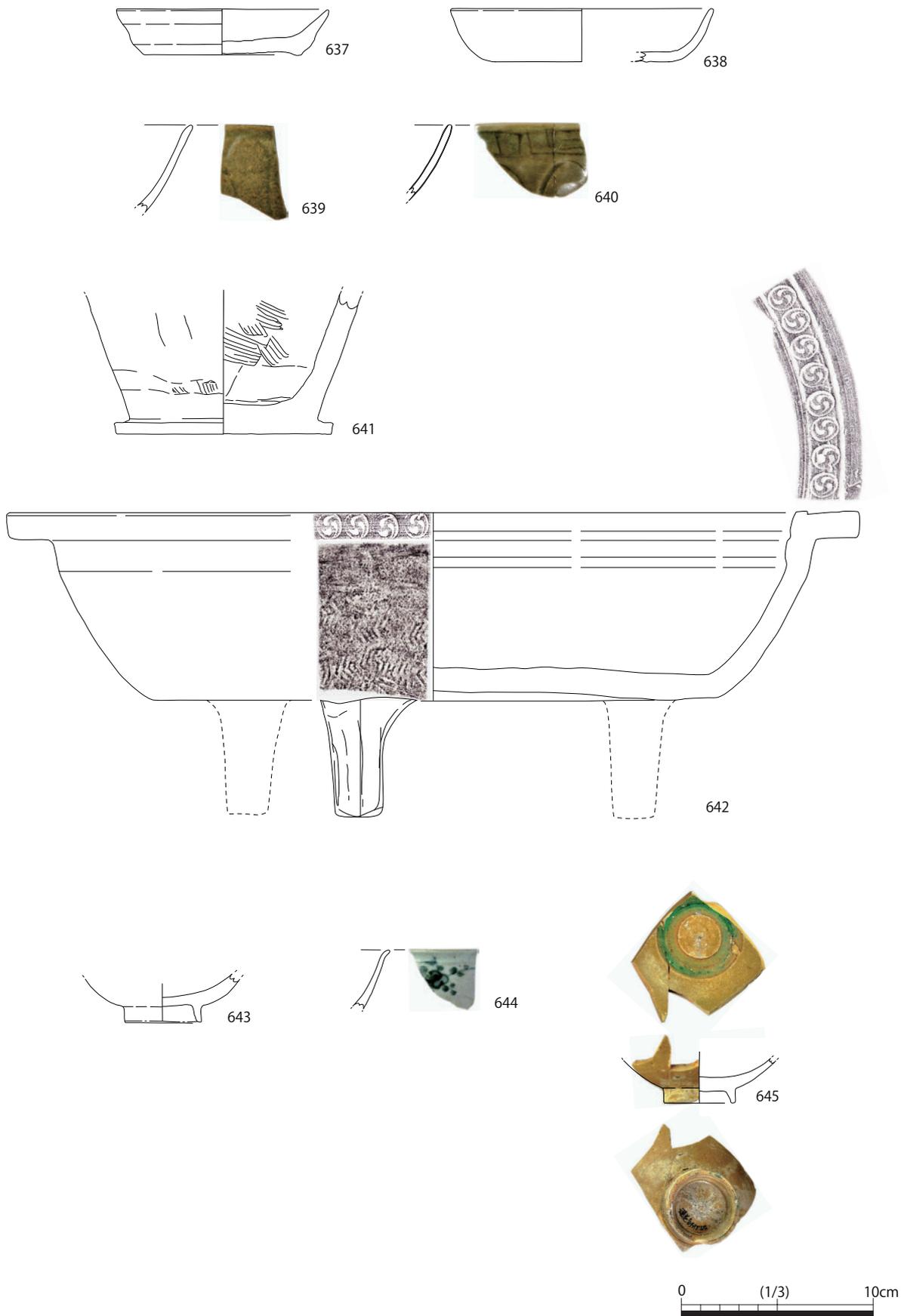
第 35 图 B 区沟下層出土遺物 (1)



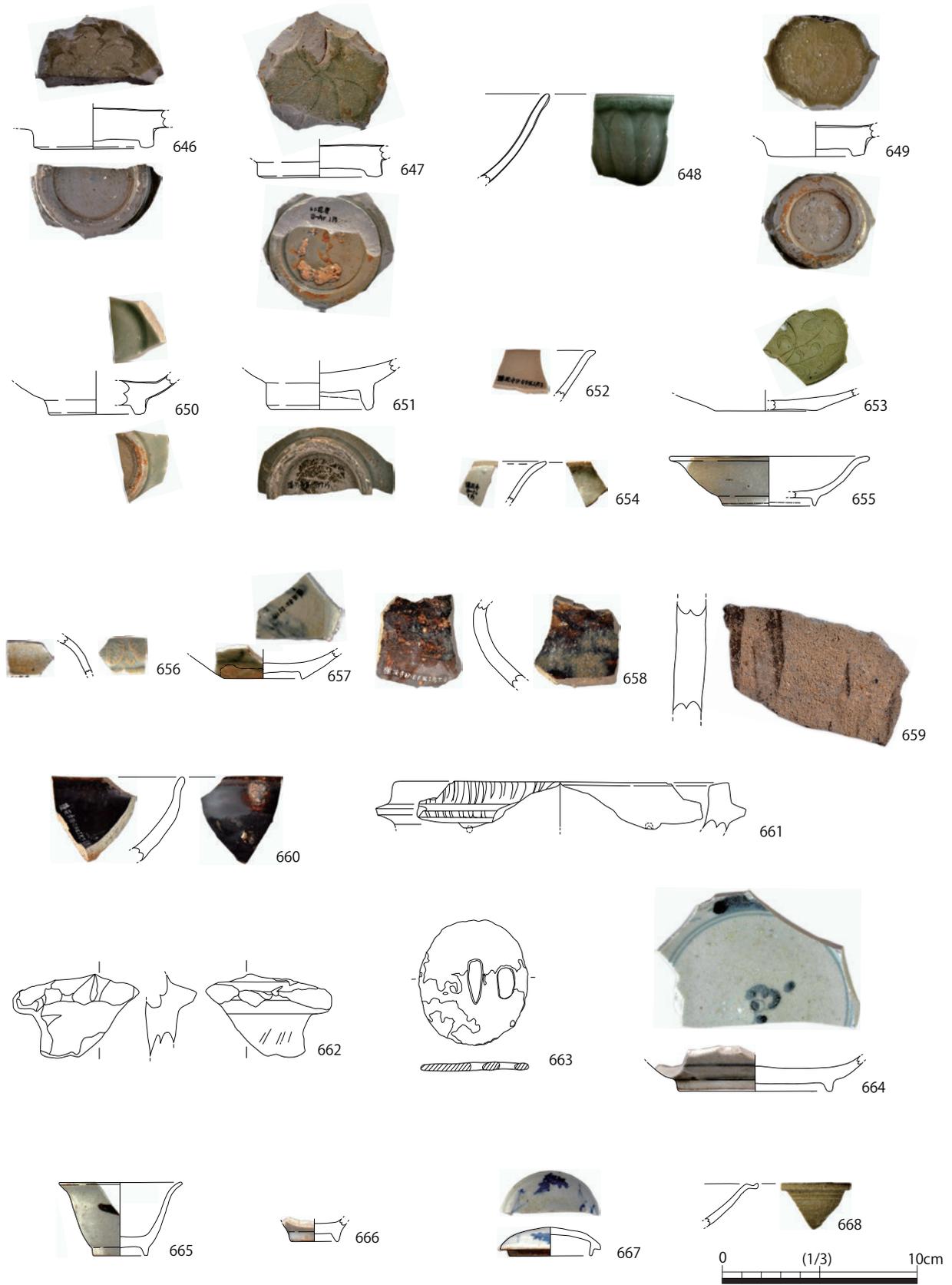
第 36 图 B 区沟下層出土遺物 (2)



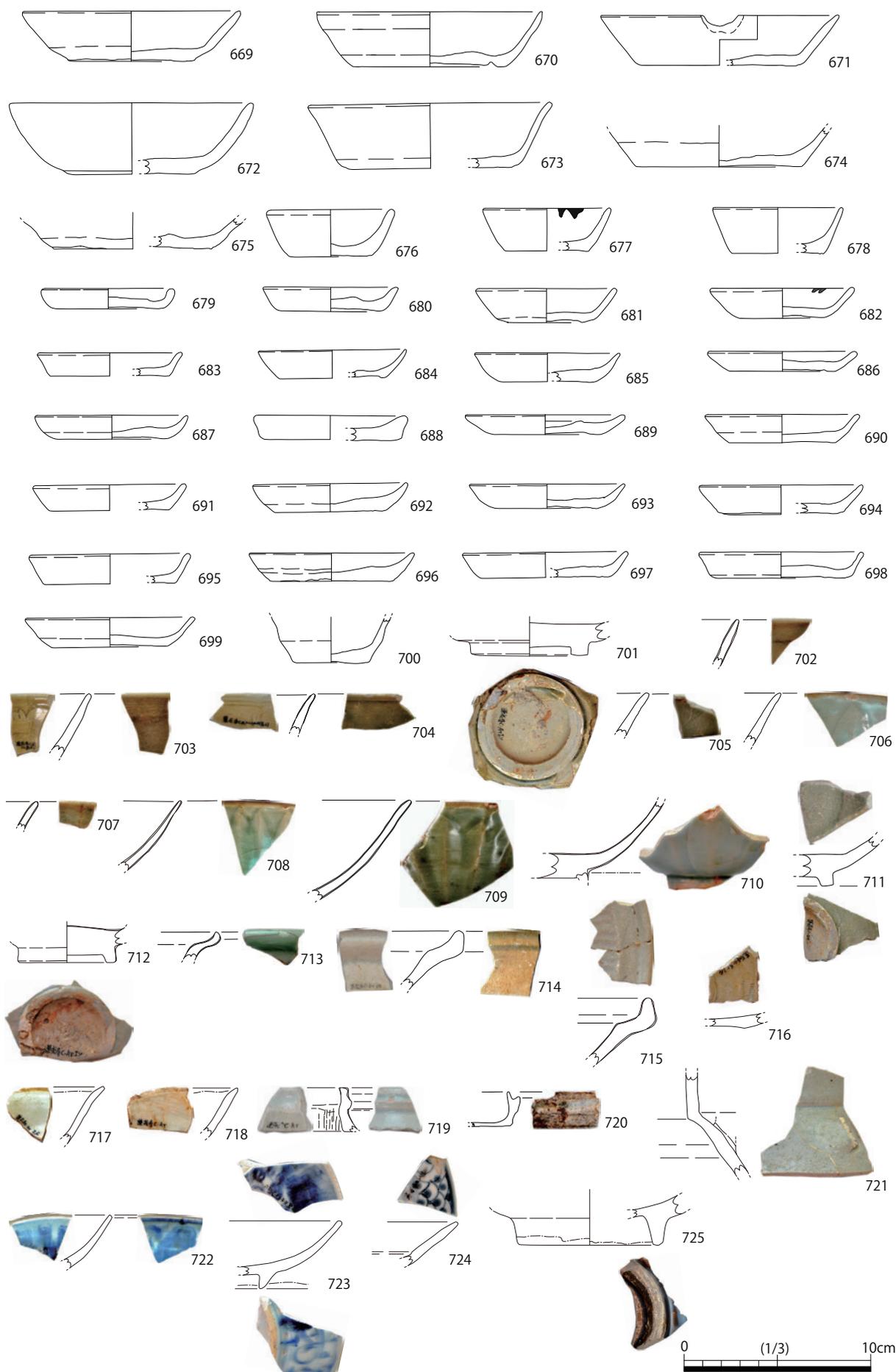
第 37 图 B 区石敷遺構検出状況図



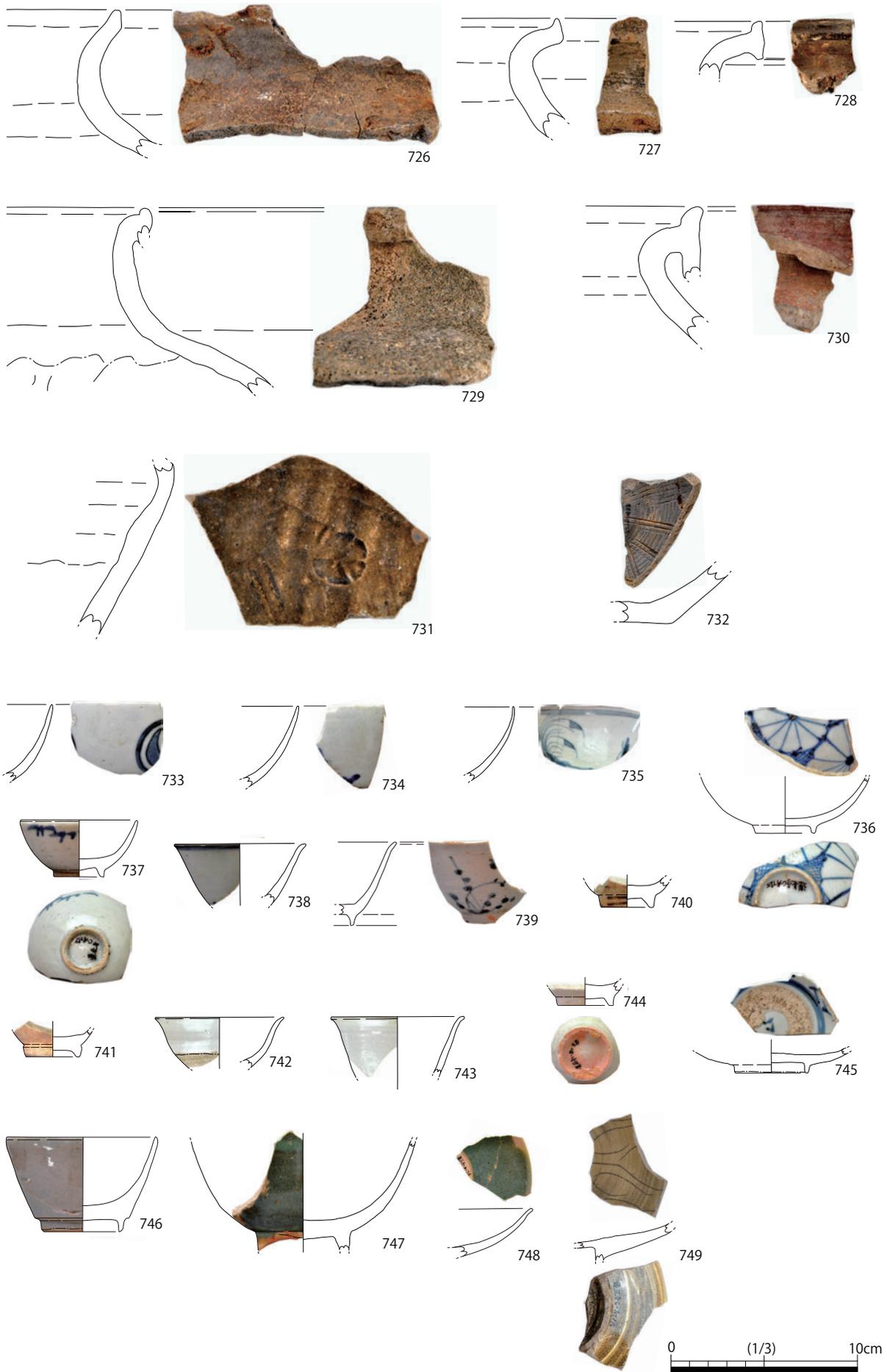
第 38 图 A 区出土遺物



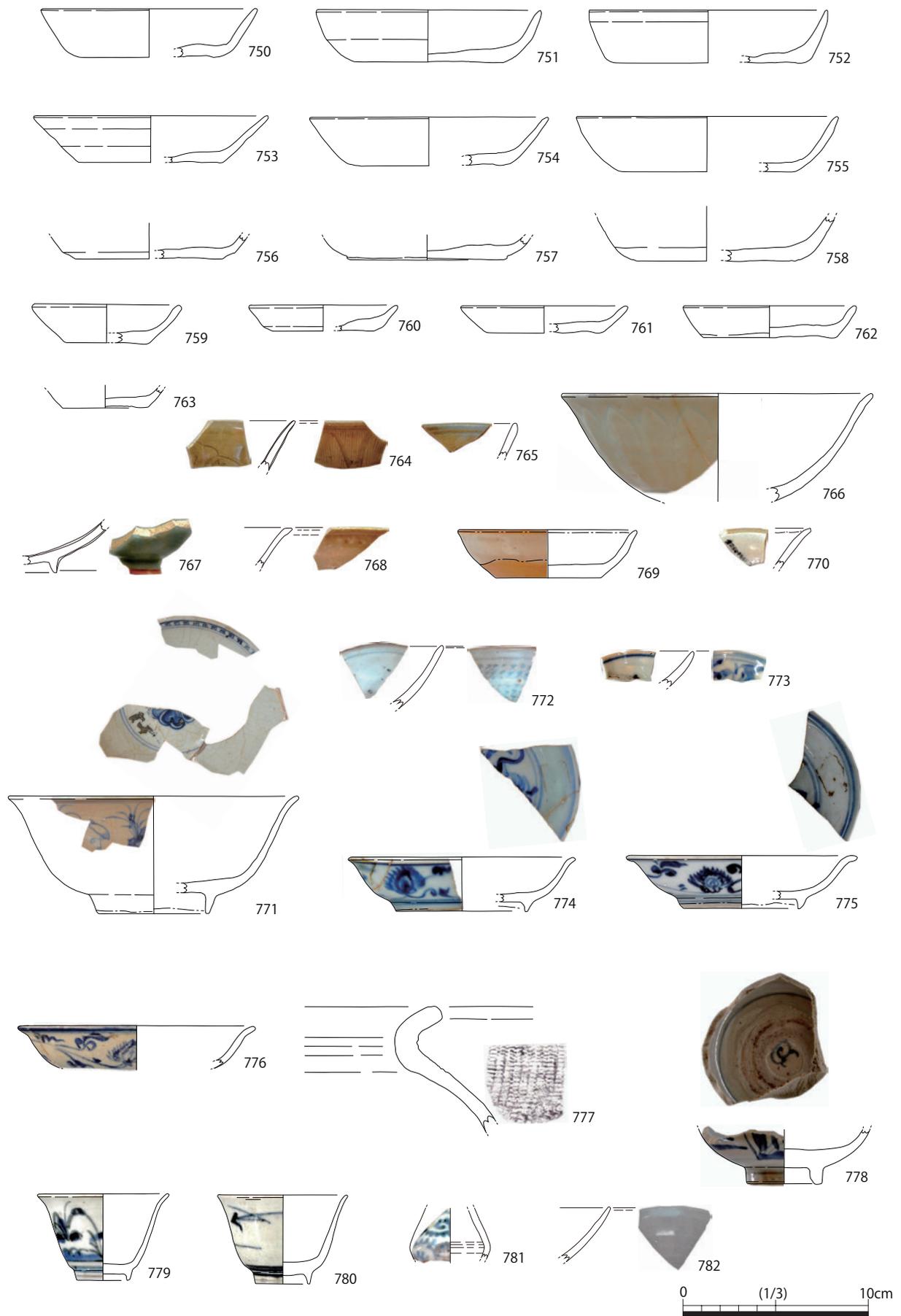
第 39 图 B 区出土遗物



第40图 C区出土遗物(1)



第 41 图 C 区出土遗物 (2)



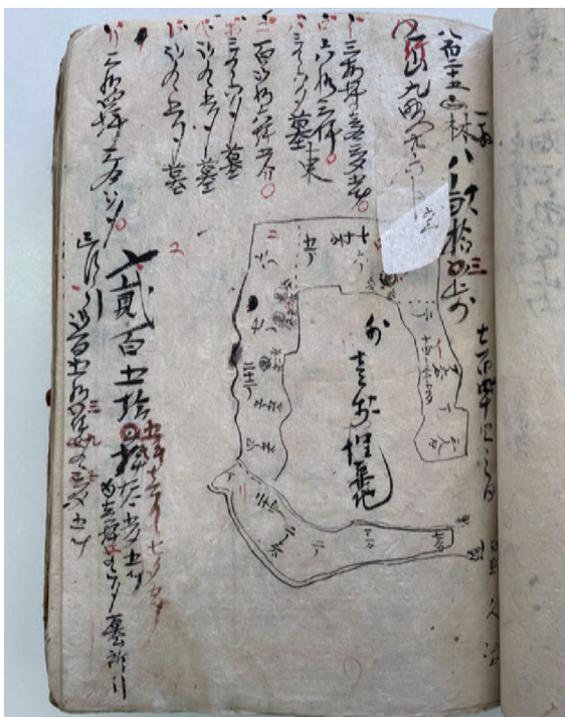
第 42 図 注記不明遺物

第3節 相良頼景館跡の再整理の成果

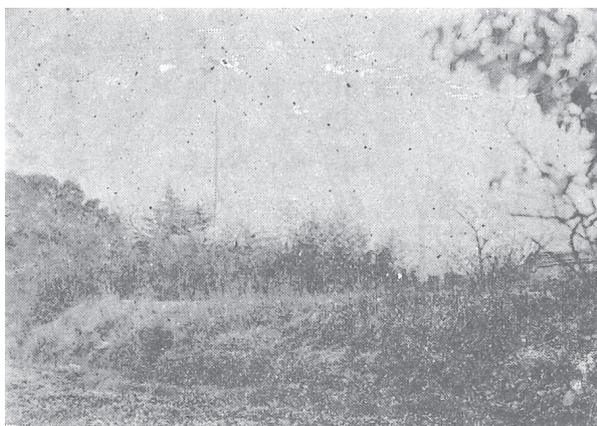
1. 相良頼景館跡の概要 (第43図)

相良家史である『南藤蔓綿録』『歴代私鑑』『御当家聞書』『嗣誠独集覧』や『球磨絵図』のいずれも「蓮花寺ノ上」「東ノ前」が相良頼景の館とする。

相良頼景館跡が所在する土地は、多良木町税務課が保管する土地台帳の記録では、土地所有者履歴を明治23年まで遡ることができる。明治23年9月16日、個人間の買得が最も古い記録である。竿図帳(黒肥地村役場保管)には土塁上に墓の記載があり、県22集の掲載されている「宮元氏によるとB4試掘抗の北側に大正の頃まで、五輪塔約30基が在り(県22集66頁)」と状況が合致する。昭和26年10月のルーズ台風の際には球磨川が氾濫、球磨川右岸堤防が決壊し、その決壊部分の補強のために東側土塁の一部を壊し、土塁構築土を蛇籠にして対処したそうである(県22集65～66頁)。



竿図帳



球磨郡誌より

昭和25年、土塁内を畑地から水田へと開田する際に、椎葉今朝雄氏によって白磁の完形品(遺物No.1293)と完形の青磁皿が1点ずつ採集され、宮元尚氏が保管していた。

昭和50年時点の鮎之瀬井手からの用水は、土塁北西部にて、北側土塁の外側を西から東へと流れ、東側土塁の外側を沿うように流れて球磨川に排水されていた。県調査当時の土地利用は、土塁内側の北側は宅地・畑地・放牧地であり、南側は水田であった。

2. 熊本県文化課調査の概要と資料の整合

県調査は、東外濠と西外濠の間をB区、B区西側(下流側)をA区、B区東側(上流側)をC区に、土塁内B区北側をD区とし、調査を実施している。

(1) 座標及び標高の補正



補正位置図

令和3～4年度調査と県調査当時の測量データの確認を行った。座標系については、県調査当時は座標系を用いていないので、県調査当時に存在し、現在に残る構造物をもとに測量図に座標値を与えた。

標高は約40cmの誤差を確認した。本報告では、県調査当時の標高値をそのまま掲載しているため、現在の標高への補正が必要である。

標高測定地点	標高値	誤差
熊本県調査(昭和49.50年) 黒川氏宅前	160.450 m	-0.414 m
令和3.4年の調査 黒川氏宅前	160.864 m	0.0 m

(2) 層序の整理

県調査では、各地区にて層序を付与されているため整理する。

【B区切落しより上段面の層序】

第I層：水田の耕作土(約20cm)

第II層：酸化鉄の集積した鉄分集積層(約10～20cm)

第III層：褐色土層(約30cm)

第IV層：砂礫層

【B区切落しより下段面の層序】

第I層：耕作土

第II層：鉄分集積層

第III層：褐色土層

第IV層：黄灰色砂層

第V層：砂礫層

【A区（西側）層序】

第I層：耕作土

第II層：鉄分集積層

第III層：褐色土層

第IV層：黄灰色砂層

第V層：砂礫層

【C区（東側）層序】

第I層：水田の耕作土（約20cm）

第II層：酸化鉄の集積した鉄分集積層（約10～20cm）

第III層：褐色土層（約30cm）

第IV層：砂礫層

これらを整理すると、基本層順は次のとおりである。

【基本土層】

第1層：耕作土

第2層：鉄分集積層

第3層：褐色土（近世の盛土・B区盛土）

第4層：黄灰色砂層

第5層：砂礫層

となる。

（3）遺構の整理

相良頼景館跡で検出された遺構は次のとおりである。

東外濠：区画する東側の堀跡

西外濠：区画する西側の堀跡

柱 穴：B区上段面にて確認された柱穴群

溝：B区上段面にて確認された溝跡

排水溝：B区上段面にて確認された水田用溝

土器溜め：B区上段面にて確認された土器溜め

盛 土：B区上段面にて確認された整地層

広 場：B区下段面にて確認された敷石遺構

堤 防：B区下段面の南側にて確認された石積護岸

切落し：B区の上段と下段を区切る基面整形

本報告においても、県22集の遺構名を用い説明を加える。

3. 遺構及び出土遺物

（1）東外濠（第44図）

東外濠は館跡東側にて検出された区画濠で、検出面は上段面第IV層上面（砂礫層）である。濠の上面幅は6.3m、

濠底幅は約2m、検出面から濠底面まで2mである。東側の掘り方形状は二段で、底面はゆるやかな皿状となる。

東外濠の覆土は、①黄灰色砂層、②灰色砂層、③暗褐色砂層「濠底に向かって傾斜しながら濠底近くまで堆積」、④黄灰色粘質土「濠底が水をたたえていたことを示す現象」、⑤暗褐色土「濠底に向かって傾斜して堆積」であった。

東外濠の下段部（切落しから南側）は、石組を用いて濠が延長されていた。この石組は、下段部第IV層（黄灰色砂層）を基礎面とする。石組の長さは南北3.5m、幅1～1.5mであった。石組構成礫は約0.2～0.5mの川原石で4～5段に野面に積み、その高さは約0.8mであった。東外濠の南端の基底面は砂礫層に達していた。

「球磨川の流路は、切落し下面あたりと考えられるので、1m前後の水濠であったと考えられるし、また濠は南側が高く北へ行くにしたがい低くなっているので球磨川から取り入れた水は北流し、調査地外であった北側土塁北側の濠を流れて西外濠を巡って、再び球磨川に流れ出るのではなかろうか」との記載が県22集にある。

【出土遺物】（第45・46図）

783～786は土師器坏である。783は器高が高い。787～791は土師器小皿である。792は土師質の土錘である。

793～796は龍泉窯系A類の青磁碗である。794は口縁内面に白胎線が巡る。797は龍泉窯系B類の青磁碗である。798は同安窯系の青磁皿である。799は白磁V類碗、800は白磁IX類碗、801～805は白磁IX類皿である。806は白磁四耳壺である。807は瀬戸前期様式の卸皿である。

808・809は中世須恵器の胴部片である。810は山形タタキ痕を残す底部片である。811～816は中世須恵器の挿鉢・鉢である。817は瓦質の花菱文スタンプをもつ風炉である。818は加久藤溶結凝灰岩製の鞆羽口である。819は肥前の染付碗、820は肥前の筒型碗、821・822は一勝地の碗と猪口である。

（2）西外濠（第44図）

西外濠の東側は、道路下であるため未調査である。上段面第IV層（砂礫層）にて検出された。覆土は①暗褐色粘質土、②堀底は礫を含む褐色粘質土である。礫は全面に混入しているのではなく、東側から西側へ斜めに傾斜して混入している。堀底までの深さは、検出面より1.8～2.0mであった。

出土遺物は、上段面第III層より近代陶器、①暗褐色粘質土及び②褐色粘質土中より土師器、青磁が出土している。

【出土遺物】(第 47～49 図)

823 は土師器坏で底面に板目圧痕が残る。824～826 は土師器小皿である。827 は土師質の土錘である。

828～830 は龍泉窯系 A 類の青磁碗である。831～840 は龍泉窯系 B 類の青磁碗である。841～844 は龍泉窯系 B0 類の青磁碗である。844 は無文である。845 は線刻蓮弁文の青磁碗である。846・847 は同安窯系の青磁碗である。848～851 は龍泉窯系 D 類の青磁碗である。852 は龍泉窯系青磁の大皿である。853～856 は折縁皿である。857 は内湾皿である。858 は青磁筒型香炉である。

859 は白磁 V 類碗、860 は白磁 VII 類碗、861・862 は白磁 IX 類碗である。863・864 は白磁 IX 類皿である。865 は白磁皿 C1 群である。866 は白磁の梅瓶である。

867・868 は染付皿 C 群、869 は染付皿 F 群である。870 は漳州窯系の大鉢である。871・872 はかけ流された釉痕が残る大型甕である。872 の内面には同心円の当て具痕が残る。

873・874 は瀬戸の瓶子で、873 の肩部に沈線が 2 重巡る。875 は中世須恵器の瓶である。876 は鏝付きの瓦質の火鉢で、鏝上面に巴文を施す。

877 は滑石製石鍋からの転用で温石である。878・879 は砂岩製の砥石である。

880・881 は肥前の碗である。882・883・884 は肥前の小坏である。885 は肥前の陶器碗である。886・887 は肥前の天目碗である。888・889 は一勝地の碗である。890 は京焼風陶器皿である。891 は肥前見込み蛇の目釉剥ぎ、砂目、白化粧土による刷毛目文の皿である。892 は灰釉葉の皿、893・894 は 17 世紀後半の肥前の皿で、内底に目痕が 3ヶ所残る。895 は内底の鉄釉を渦状に掻きとっている。

(3) 切落し (第 52～54 図)

B 区上段と下段を区切る基面整形である。地山である砂礫層を人工的に整形した遺構である。

切落しは、東西の外濠間(B区)にわたって確認された。C区(B区北側)は未調査のため不明である。A区の A7 試掘坑まで切落しの痕跡は確認されている。県 22 集では、切落しの延長を東西 103 mほどと解釈している。

この切落しから石積堤防まで間は、B-10・11Tr の土層図を確認したところ、砂層・粘土層・黄灰色砂層が堆積しており、遺物は出土していない。

(4) 柱穴と溝と排水溝 (第 50・51 図)

B 区にて検出された柱穴群と溝である。

柱穴は 203 基検出された。「西側及び東側土塁の延長を推定すると、柱穴 No. 1～No. 29 までは西側土塁下であり、同じく No. 200～No. 203 は、東側土塁下にあったこ

とになる」と報告されている。

下段面の第 IV 層(黄灰色砂層) 上面では No. 38～41、48～59、69～75、87 が検出された。

上段面の第 III 層(盛土:褐色土) 中に検出された柱穴の底には、根固めをしたものも認められた。建築物の配置や規模は明らかでない。

溝 I～III および排水溝は、B 区西側にて検出された。溝 I～III は第 III 層(盛土:褐色土) 上面での検出である。溝 I は西側土塁の延長上に位置している。

溝 II は東西 7 m、幅 1.1 m である。「溝底は盛土の褐色土上面」であり、西端の深さは 40cm を測り、排水溝南端へ傾斜し、排水溝南端溝底上面に溝 II の東端が位置していた。

溝 III は、東西 2.5 m、幅 1～1.3 m、深さ 15～20cm で、柱穴 No. 23、24 を切っており、溝東端は排水溝の上面に位置していた。

排水溝は、褐色土(盛土) 面で検出、第 IV 層(砂礫層) まで達し、柱穴 No. 22、27、28、30～37 を切っていた。

【出土遺物】(第 55・56 図)

896～907 は柱 No. 1 の出土遺物である。896～900 は土師器坏で、897 の底面には簾状圧痕が、898・899 には板目圧痕が残る。901～905 は土師器小皿である。906・907 は龍泉窯系 B 類の青磁碗である。

908 は柱穴 No. 3 の出土遺物で、龍泉窯系 B 類の青磁碗である。

909～918 は柱穴 No. 4 の出土遺物である。909～912 は土師器小皿である。913 は龍泉窯系 A 類の青磁碗である。914・915 は龍泉窯系 B 類の青磁碗である。916 は龍泉窯系 B0 類の青磁碗である。917 は龍泉窯系 D 類の青磁碗である。918 は、肥前現川の製品と思われる。

919～921 は柱穴 No. 6 の出土遺物である。919・920 は土師器坏、921 は板目圧痕を残す小皿である。

922 は柱穴 No. 7 の出土遺物で龍泉窯系の折縁盤である。

923～926 は柱穴 No. 8 からの出土遺物で土師器坏である。924・925 の底面に板目圧痕が残る。925 には板目圧痕とともに紐痕が残る。

927 は柱穴 No. 9 からの出土遺物で、底面に板目圧痕が残る土師器坏である。

928 は柱穴 No. 12 からの出土遺物で黄釉洗である。

929 は柱穴 No. 13 からの出土遺物で土師器小皿である。

930 は柱穴 No. 14 からの出土遺物で土師器坏である。

931・932 は柱穴 No. 15 からの出土遺物で、931 は白磁碗 IV 類、932 は白磁皿 III 類と思われる。

933・934 は柱穴 No. 17 からの出土遺物で、933 は土師器小皿、934 は中世須恵器の播鉢である。

935 は柱穴 No. 21 からの出土遺物で内野山窯の碗であ

る。

936 は柱穴No. 22 からの出土遺物で龍泉窯系 B 類の青磁碗である。

937～941 は柱穴No. 26 からの出土遺物である。937 は土師質の土錘である。938 は龍泉窯系 B 類の青磁碗である。939 は肥前の染付碗、940 は肥前の灰釉の陶器皿である。941 は内野山窯の皿である。

942 は柱穴No. 30 からの出土遺物で龍泉窯系 B 類の青磁碗である。

943～952 は柱穴No. 31 からの出土遺物である。943・944 は龍泉窯系 A 類の青磁碗である。945・946 は龍泉窯系 B 類の青磁碗である。947 は中世須恵器の胴部片である。948 は肥前染付の仏飯である。949 は内野山窯の碗である。950 は肥前の皿で内底に砂目痕が残る。951 は砂岩製の砥石である。952 は土師質の風炉である。

953～955 は柱穴No. 33 からの出土遺物で、953 は土師器小皿、954 は土師質の土錘である。955 は白磁Ⅸ類皿である。

956・957 は柱穴No. 34 からの出土遺物で、956 は龍泉窯系 A 類の青磁碗、957 は肥前染付の小坏である。

958 は柱穴No. 39 からの出土遺物で白磁Ⅵ類皿である。

959 は柱穴No. 41 からの出土遺物で龍泉窯系 B 0 類の青磁碗である。

960～964 は柱穴No. 42 からの出土遺物で、960 は土師器坏、961・962 は土師器小皿である。963 は白磁Ⅸ類皿、964 は体部外面に山形タタキ痕を残す中世須恵器である。

965 は柱穴No. 48 からの出土遺物で体部外面に山形タタキを残す中世須恵器である。

966 は柱穴No. 50 からの出土遺物で龍泉窯系 B 類の青磁碗である。

967 は柱穴No. 51 からの出土遺物で 6a 型式の常滑焼の甕である。

968 は柱穴からの出土遺物で土師器小皿である。



土器溜検出状況

(5) 土器溜

B 区上段面の南側、第Ⅲ層（褐色土）上面にて検出された。その規模は、東西 2.7 m、南北 1.9 m、深さは 0.25 m であった。覆土は黒褐色土で、底面から上面まで土師器が廃棄された状態で検出された。底面に 2 個の柱穴が検出された。

【出土遺物】（第 57 図）

969～981 は土師器坏である。982～1010 は土師器小皿である。1011 は龍泉窯系 A 類の青磁碗である。1012 は東播系の中世須恵器の鉢である。

(6) B 区Ⅲ層（褐色土・盛土）（第 58～60 図）

上段面第Ⅲ層が褐色土（盛土）である。この上面で柱穴と土器溜が重複し確認されている。この褐色土は、整地層と考えられる。県 22 集 142 頁にこの褐色土の範囲が示されており、B 区上段面の西側を中心に広がっている。

【出土遺物】（第 58 図）

1013～1023 は土師器坏である。1024～1038 は土師器小皿である。1039・1040 は土師器土錘である。

1041～1043 は龍泉窯系 A 類の青磁碗である。1044～1056 は龍泉窯系 B 類の青磁碗である。1057～1061 は龍泉窯系 B0 類の青磁碗である。1062 は龍泉窯系 C3 類の青磁碗である。1063・1064 は同安窯系の青磁皿である。1065・1066 は折縁皿である。1067 は高麗象嵌の青磁鉢である。

1068 は白磁四耳壺である。1069 は白磁Ⅴ類碗、1070・1071 は白磁Ⅸ類碗である。1072～1075 は白磁Ⅵ類皿である。1076 は白磁Ⅷ類皿、1077・1078 は白磁Ⅸ類皿である。1079 は型成型の合子蓋、1080 も型成型の合子身である。1081 は白磁四耳壺である。1082 は白磁梅瓶の底部である。1083 は青白磁の蕾座小壺である。

1084 は染付碗 E 群。1085・1086 は染付皿 C 群。1087 は瀬戸の卸皿。1088 は山形タタキ痕を残す中世須恵器の壺である。1089～1092 は中世須恵器の挿鉢である。

1093～1098 は肥前系の染付碗。1099 は肥前の染付碗で、1700～1750 年代。1100・1101 は肥前染付の組皿で、17 世紀前半に位置付けられる。1102 は獣脚の皿。1103 は内底蛇の目釉剥ぎの染付皿。1104 は畳付露胎の皿。1105 は型成型の近代の小皿。1106 は肥前染付小坏、1107 は肥前の猪口である。1108 は 17 世紀後半の染付瓶、1109 は染付の蓋付鉢の身である。1110・1112 は球磨郡産の碗、1111 は肥前内野山窯の碗である。1113・1114 は肥前の碗、1115 は肥前の皿で 17 世紀前半、1116 は肥前の大鉢である。1117 は八代高田の製品である。

(7) 広場

県 22 集では、「広場とは川原石を人工的に配石した集石状もしくは石敷状遺構」と報告されている。B 区下段面にて確認された石敷遺構を含む空間である。また、「広場東側は、東外濠南端から西へ約 10 m のところ、西側は、BM の南方延長線あたりである。この範囲の全面に集石がみられるのではなく、ブロック状に検出された。切落し面より下段の土層層序は前述したが、若干説明を加えると、切落し面より上段に第二期の建築物が構築される際、砂礫層を切断して南側に傾斜した切落しを構築した。この切落し面より南側は球磨川で、第二期頃は、川原が川床であったであろう。球磨川の洪水・氾濫によって、砂礫層上に黄灰色砂層が切落し上面ぎりぎりのところまで堆積した。この黄灰色砂層の堆積後、球磨川は流路を南側寄りに変え、流水は南へ迂回することになる。このことにより切落し南面は、土地の増加がはかられることになる」と記載されている。この黄色灰砂層が石積堤防や東外濠延長部の石組の基礎土となっていた。

黄灰色砂層の層厚は、0.68～2.15 m である。黄灰色砂層中からの遺物の出土はない。集石状遺構は川原石の上面は、第 IV 層（黄灰色砂層）上面、あるいは第 III 層（褐色土層）下面にて検出されている。径 10～20 cm の川原石一石並べた集石状遺構は、北側から南側の堤防寄りの方向にやや傾斜し、堤防の上面より約 30 cm 下にある。

石敷状遺構は、堤防と同レベルで、西端及び北端は、径 30～50 cm の比較的大きな川原石を用いている。集石状遺構、もしくは石敷状遺構の検出された切落し面より下段と堤防間からは柱穴の検出はなかった。

集石状遺構の上面、あるいは B 区下段面の第 III 層から遺物が出土している。

【出土遺物】(第 63 図)

1118 は土師器坏である。1119 は土師器小皿である。

1120 は龍泉窯系 A 類の青磁碗である。1121～1127 は龍泉窯系 B 類の青磁碗である。1128・1129 は龍泉窯系 D 類の青磁碗である。1130 は白磁 IV 類皿である。1131 は染付皿 B 群。1132 は 7 型式の常滑焼の甕である。1133 は常滑焼の甕底部である。1134 は瓦質の釜である。1135 は瓦質の火鉢である。1136 は滑石製の石鍋である。

(8) 堤防 (第 61・62 図)

堤防は広場の南側および東外濠南端から東側、西外濠南端から西側に東西に検出され、現球磨川とほぼ並行する石積護岸である。

人為的な石積として認識できる範囲は、東側は C 2 試掘坑、西側は A 4 試掘坑までであった。C 3・A 5 試掘坑では検出されていない。石積護岸の全長は、約 165 m であった。

東端から館中央付近の南方あたりまで比較的丁寧な積み方をしていた。この範囲内で、堤防の内側及び外側(球磨川)に野面積みが認められたのは、東外濠南端から東側へ約 10 m のところであった。

内外に野面積みが検出された堤防部分の立面図でも判るように、外側の球磨川側は、基礎面に約 30～50 cm の川原石を横位に用いている。その上段を 3～5 段積みしている。その中には凝灰岩がわずかではあるが確認された。石積の高さは 1 m 前後であった。内外石積が施工されている部分の護岸の幅は、2 m 前後であった。

J-J' 部分絵は石積を撤去して、基礎構造を確認されており、基礎面及び石積内から土師器・瓦質土器、青磁片が出土している。

東外濠南端から東側の石積の構造をみると、黄灰色砂層中に構築され、上面及び内部は径 20～30 cm の川原石を 3～4 段乱積みしていた。外側の球磨川側は、ゆるやかな傾斜をもち、上面から傾斜面基礎部までの高さは約 1 m 前後であった。内側は 2～3 段の乱積みであった。

【出土遺物】(第 63 図)

1137～1140 は龍泉窯系 B 類の青磁碗である。1141 は折縁皿である。1142・1143 は白磁 IX 類皿である。1144 は中世須恵器の播鉢である。

(9) B 区出土遺物 (第 64～68 図)

B 区の I・II 層から出土した遺物である。

1145～1158 は土師器坏である。1159～1173 は土師器小皿である。1174 は器高の高い土師器小皿として報告する。1175～1180 は土師質の土錘である。1181 は土師質の火鉢で口縁帯に菊花のスタンプがある。1182 は土師質の羽釜である。

1183 は加久藤溶結凝灰岩製の鞆羽口である。

1184～1186 は龍泉窯系 A 類の青磁碗である。1187～1196 は龍泉窯系 B 類の青磁碗である。1197 は同安窯系の青磁皿である。1198 は折縁皿、1199 は折縁盤である。1200・1201 は白磁 IX 類皿、1202 は白磁水注の把手である。1203 は白磁四耳壺もしくは白磁水注の一部と思われる。1204 は白磁型成型の合子蓋である。1205 は白磁合子の身である。1206 は染付皿 B1 群。1207・1208 は黄釉鉄絵洗である。1209・1210 は釉流し掛けが残る大型の甕で、1210 の内面には同心円のあて具痕が残る。1211 は古瀬戸の皿、1212 は 6a 型式の常滑甕である。

1213～1221 は中世須恵器である。1213・1214 は山形タタキ痕を残す壺である。1215 は頸部が直に立ち上がる壺である。1220 は菱形の押型を残す。1221 は仏具の瓶である。1224 は突帯を持つ釜である。1222・1223・1225～1229 は中世須恵器の鉢である。1225 は樺番城窯製品の可能性がある。1230 は瓦質の火鉢脚

部である。

1231 は滑石製品を転用した温石である。1232 は滑石製石鍋である。

1233 は肥前染付の小坏である。1234 は肥前の色絵碗である。1235・1236 は肥前染付の碗である。1237 は肥前青磁染付の皿である。1238 は一勝地の碗である。1239 は京焼風陶器碗である。1240 は肥前の天目碗である。1241 は肥前現川の皿と思われる。1242 は肥前内野山窯の皿である。

(10) A区出土遺物 (第69図)

A区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層から出土した遺物である。

1243～1245 は土師器坏である。1246～1249 は土師器小皿である。1246 は顕著な上げ底となる。1250 は土師器土錘である。

1251 は龍泉窯系A類の青磁碗である。1252・1253 は龍泉窯系B類の青磁碗である。1254 は龍泉窯系D類の青磁碗である。1255 は同安窯系の青磁皿である。1256 は内湾する大皿である。1257 は折縁皿Ⅲ類である。1258 は折縁腰折皿である。1259 は筒型香炉の腰部である。1260 は緑釉洗である。1261 は瀬戸の梅瓶である。

1262 は中世須恵器の瓶で仏具である。1263 は中世須恵器の播鉢である。1264 は肥前染付の碗である。1265 は肥前型成型の猪口である。1266 は波佐見の雪輪文皿、1267 は肥前内野山の碗である。1268 は肥前の青磁碗である。1269 は肥前の青磁大皿である。1270～1272 は肥前の陶器皿である。

(11) C区出土遺物 (第70図)

C区Ⅰ・Ⅱ層から出土した遺物である。

1273 は土師器坏、1274 は土師器小皿である。1275 は龍泉窯系B類の青磁碗である。1276 は古瀬戸の卸皿である。1277 は陶器の瓶と思われる。1278～1280 は中世須恵器の壺である。1281～1286 が中世須恵器の鉢である。1287 は滑石製石鍋からの転用の温石である。1288・1289 は肥前天目の碗である。

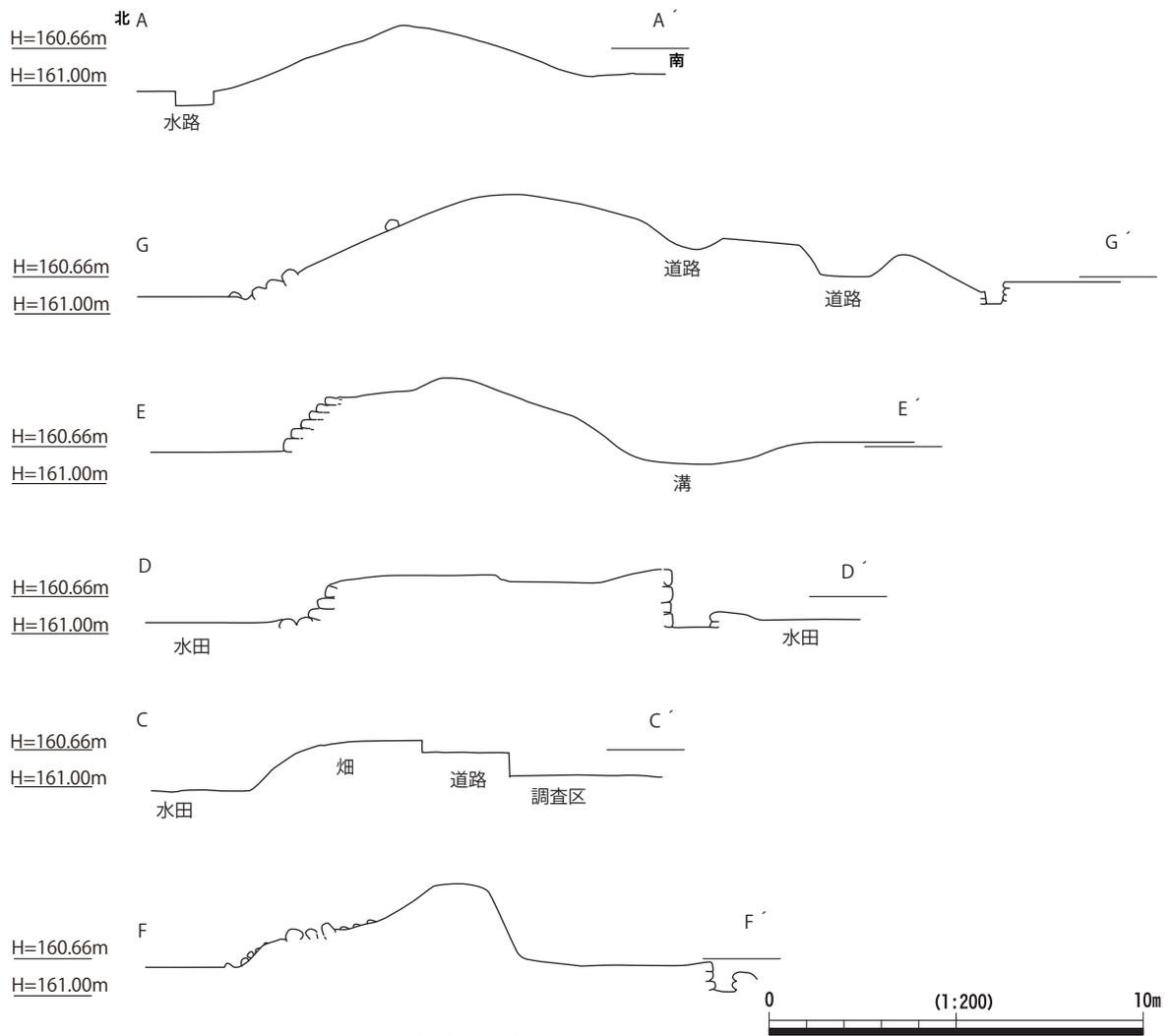
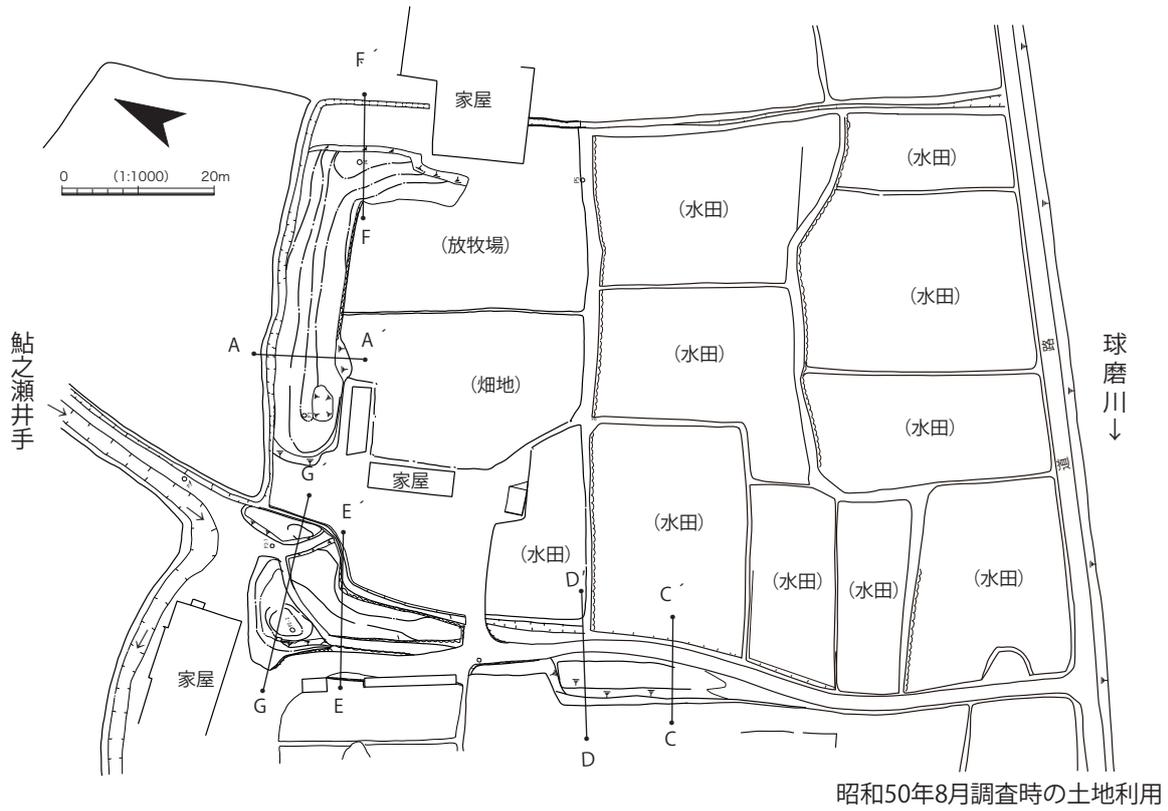
(12) D区出土遺物 (第70・71図)

D区から出土した遺物である。

1290・1291 は土師器小皿である。1292 は龍泉窯系B類の青磁碗で内底に印文がある。1293 は宮元尚氏から寄贈された白磁Ⅴ類の碗である。1294 は白磁梅瓶である。1295 は6b型式の常滑甕である。1296 は中世須恵器の壺である。1297・1298 は中世須恵器の播鉢・鉢である。1299 は瓦質の火鉢で、鏝上面に巴文が残る。1300・1302 は肥前内野山の碗である。1301 は肥前の陶胎染付の碗である。1303・1304 は肥前の紅皿である。

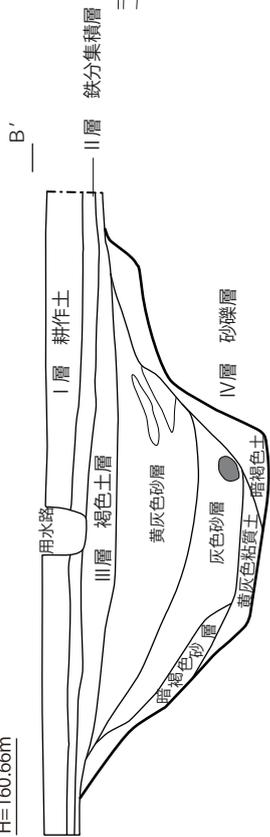
(13) 出土地点不明出土遺物 (第71図)

1305・1306 は土師器坏である。1307 は土師器小皿である。1308 は龍泉窯系A類の青磁碗である。1309～1312 は龍泉窯系B類の青磁碗である。1313・1314 は龍泉窯系B0類の青磁碗である。1315 は白磁Ⅸ類皿である。1316 は枢府系白磁である。1317 は肥前系の染付碗、1318 は一勝地の碗である。

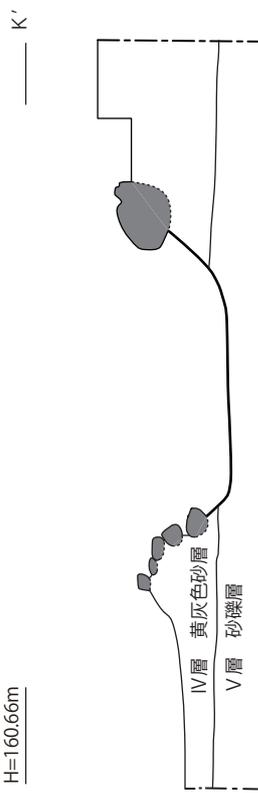


第 43 図 相良頼景館跡旧地形図及び土塁断面図

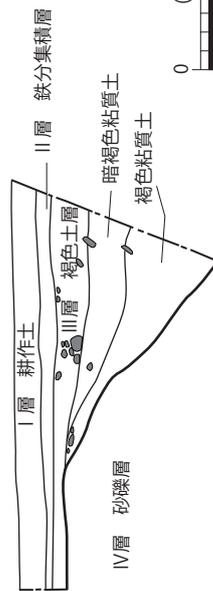
東外濠美測区
B H=160.66m



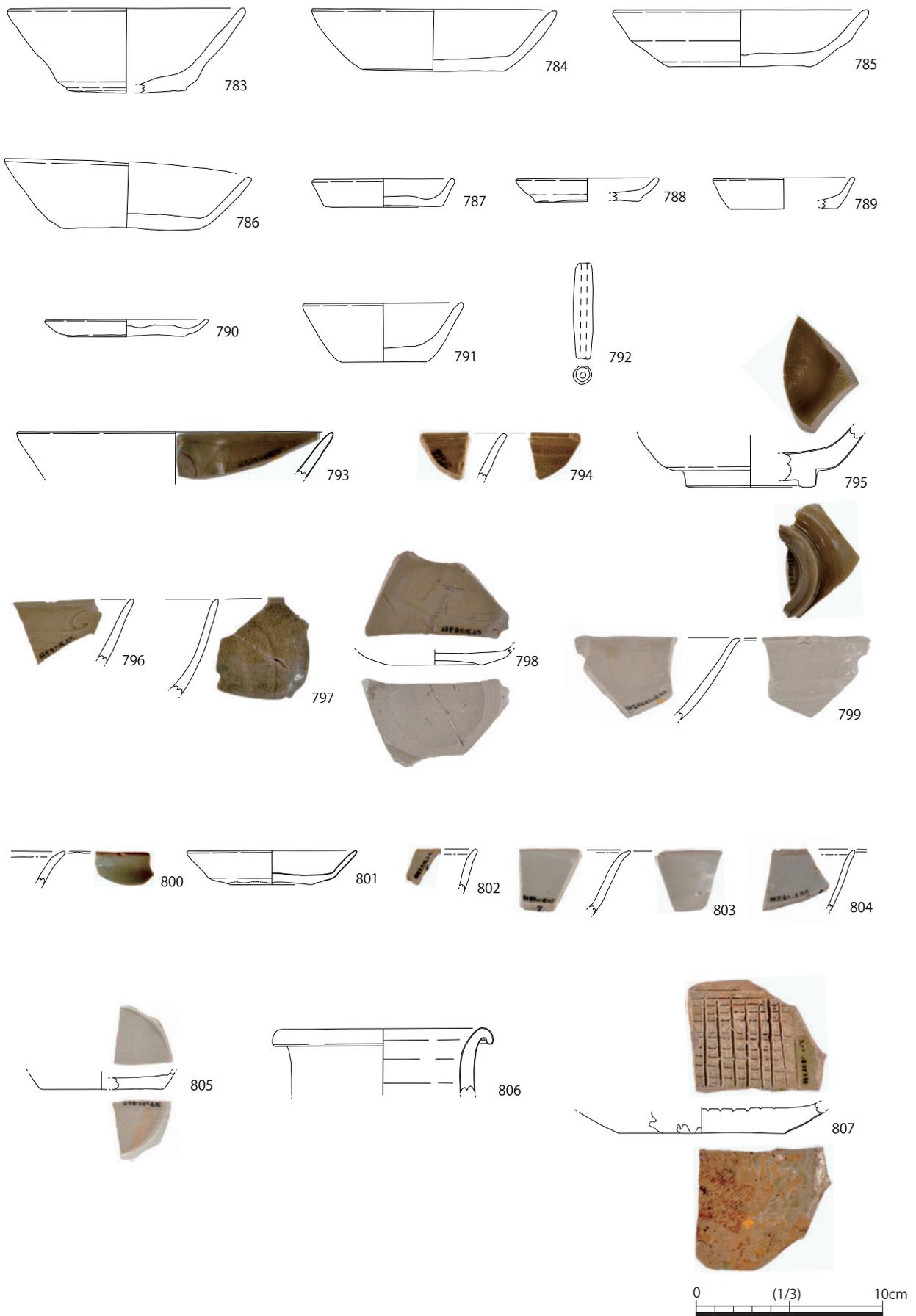
東外濠美測区
K H=160.66m



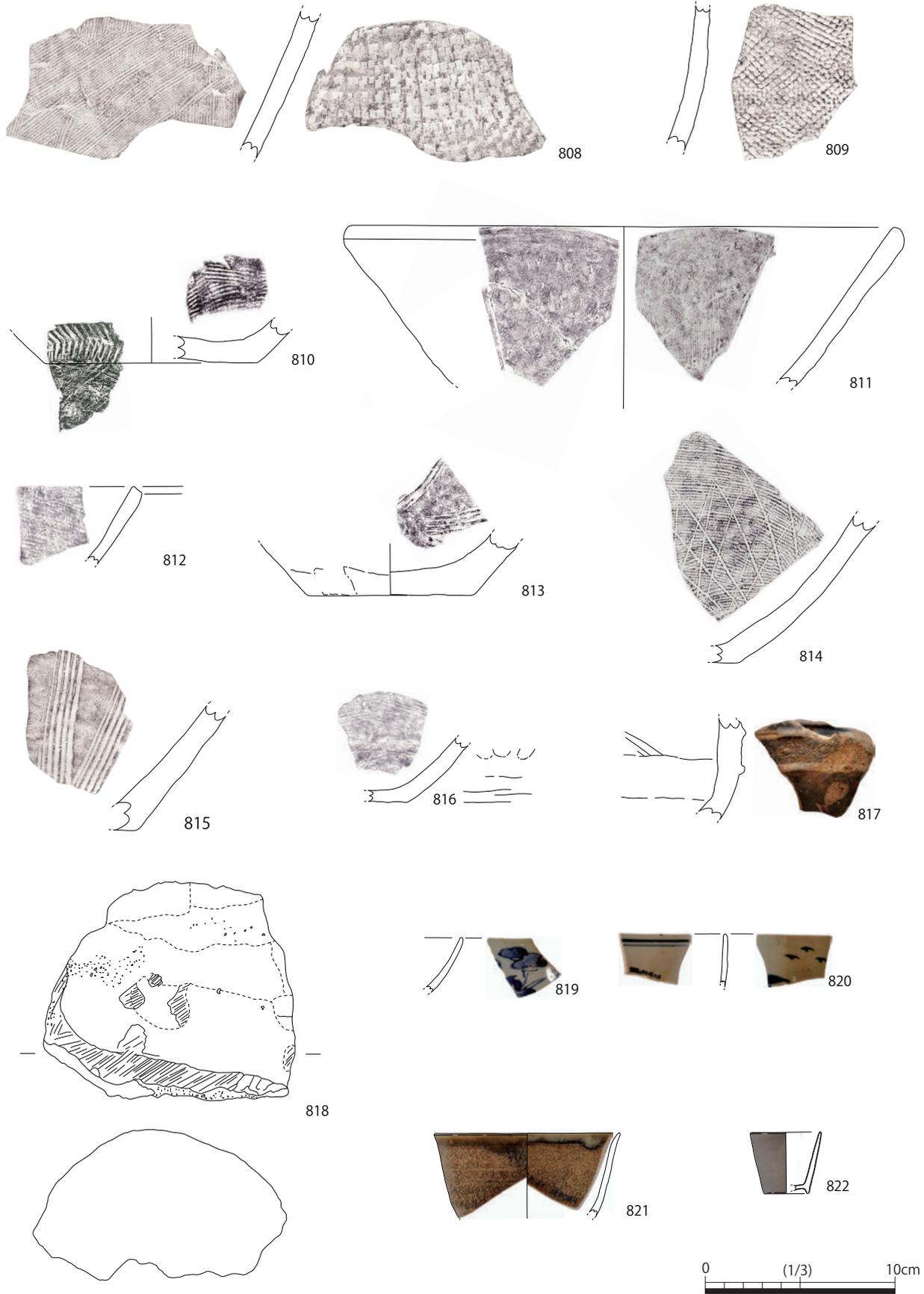
西外濠美測区
I H=160.66m



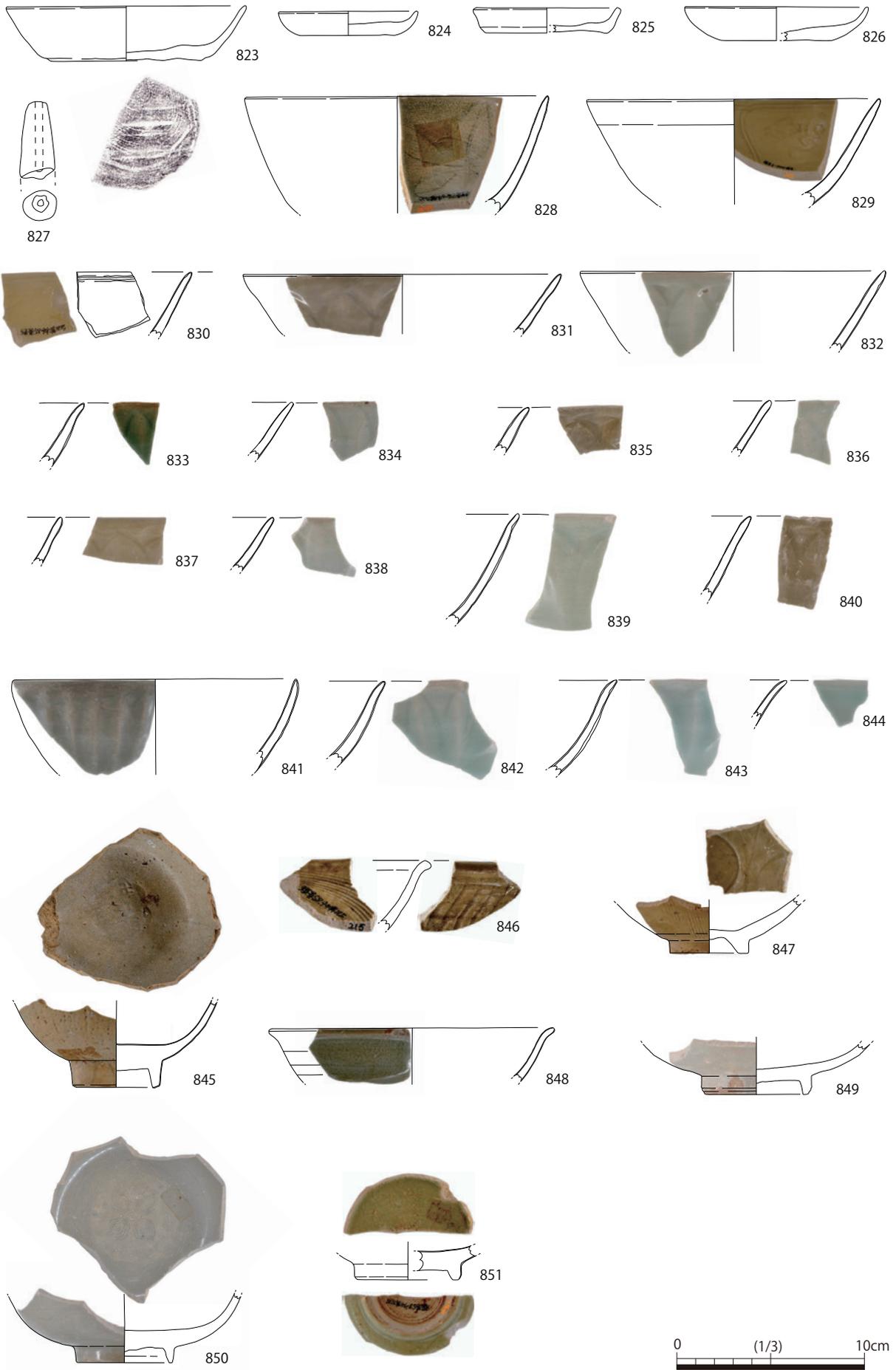
第 44 図 相良類景館跡遺構配置図及び土層断面図



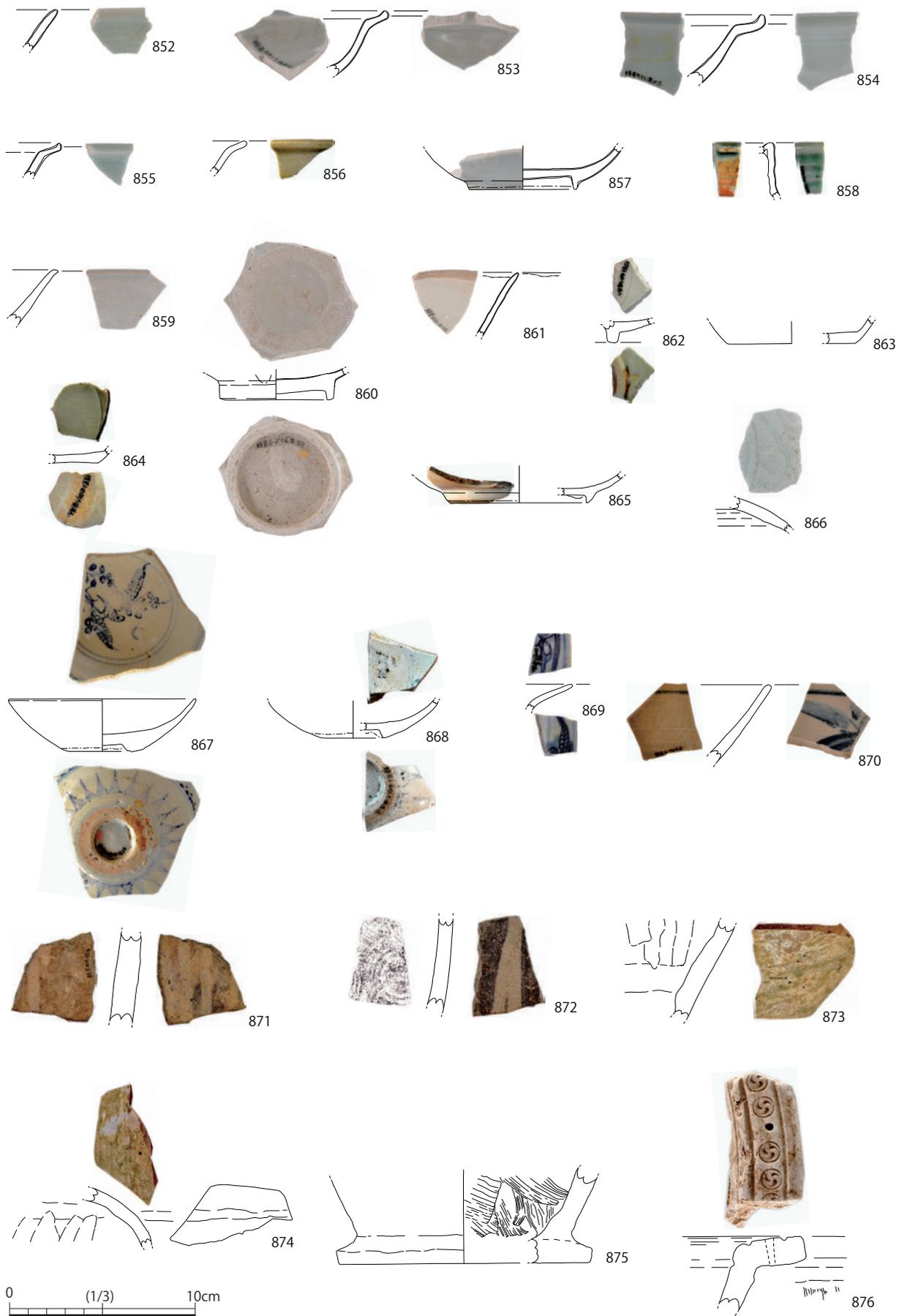
第45図 東外濠出土遺物(1)



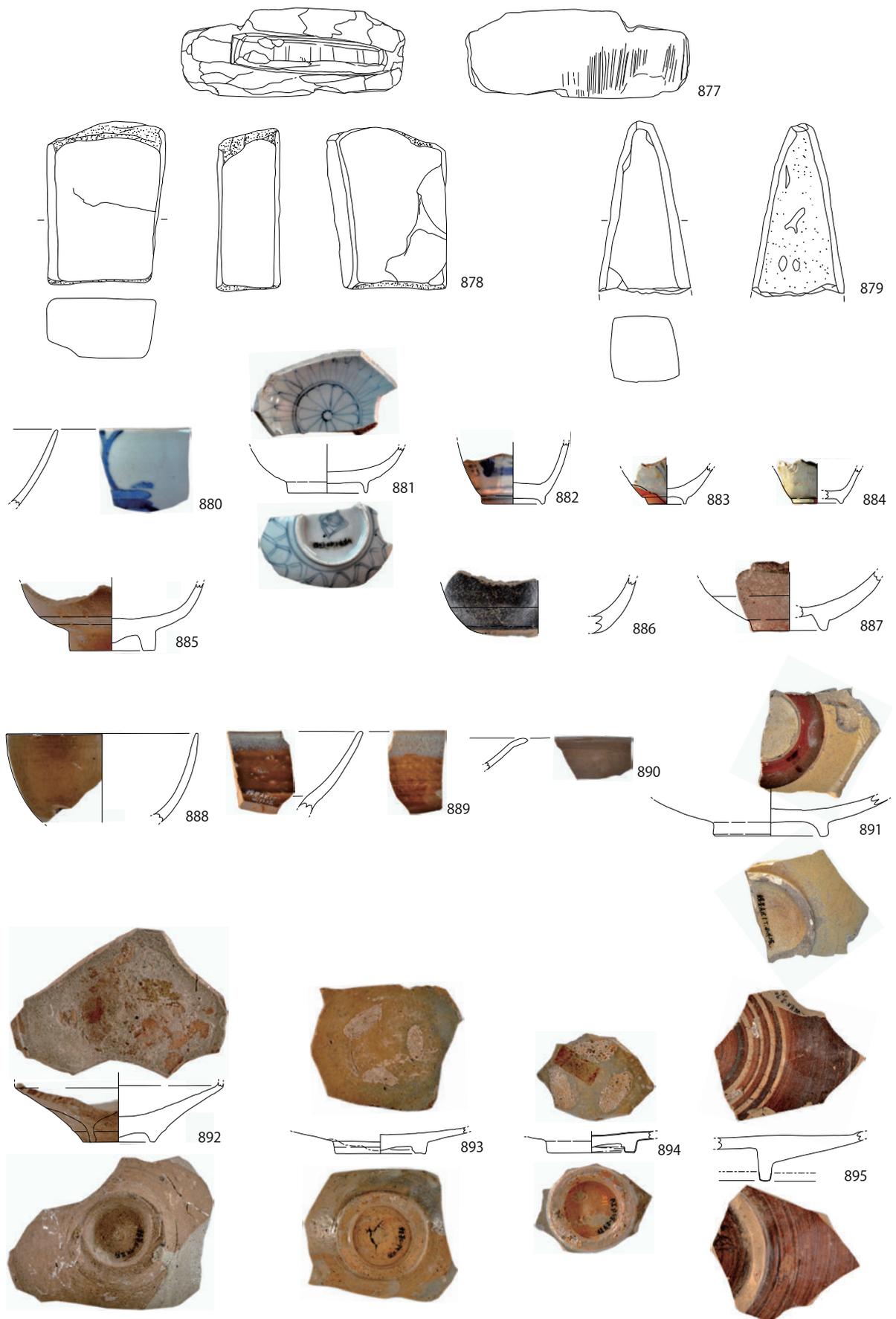
第 46 图 東外濠出土遺物 (2)



第47図 西外濠出土遺物(1)

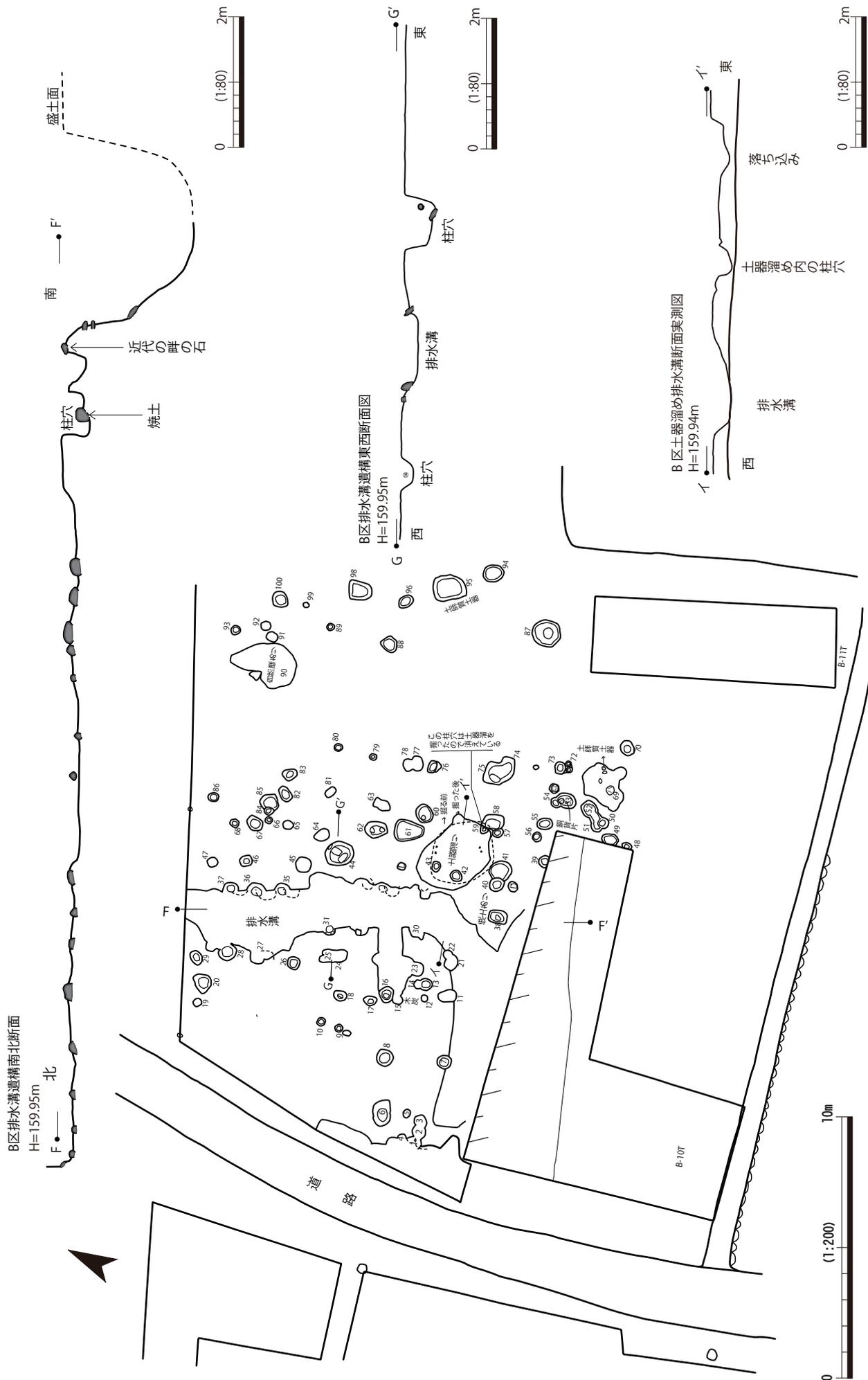


第 48 图 西外濠出土遺物 (2)



第49図 西外濠出土遺物(3)

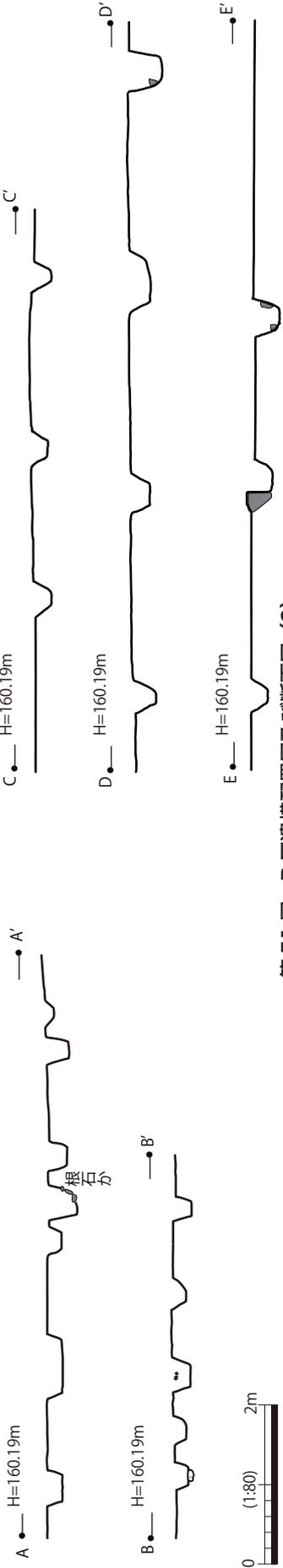
0 (1/3) 10cm



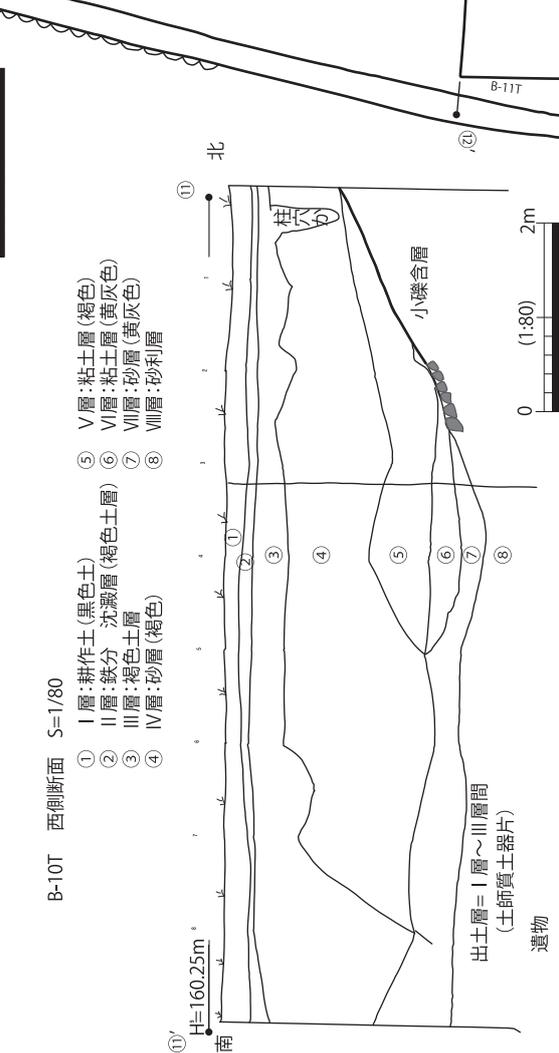
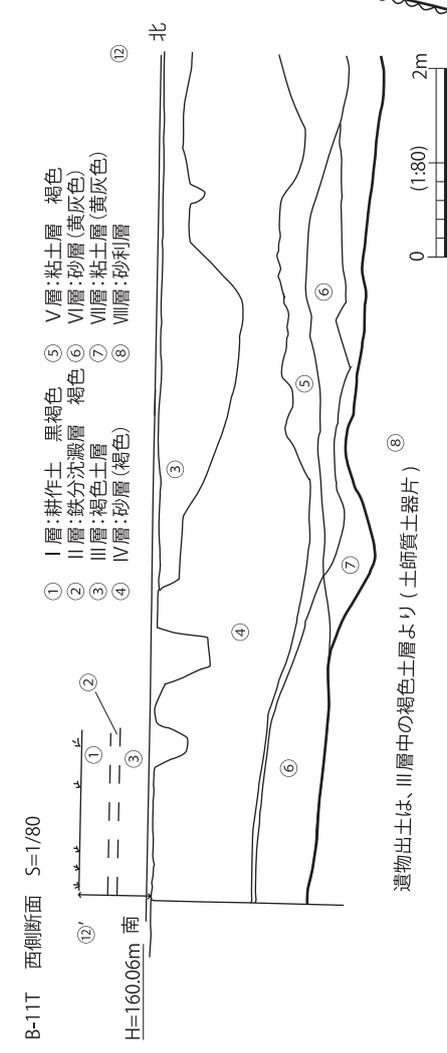
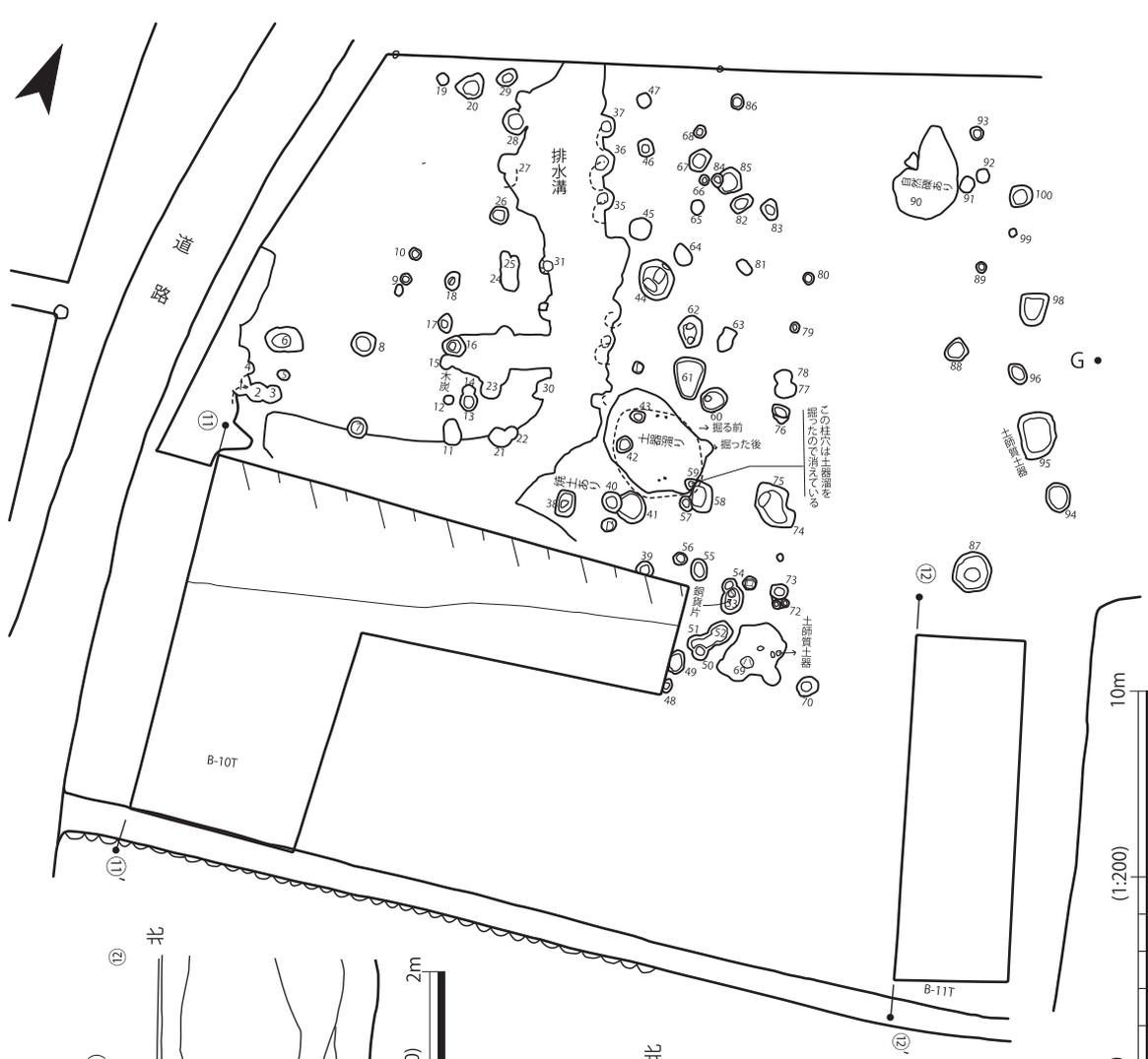
第50図 B区遺構配置図及び断面図(1)



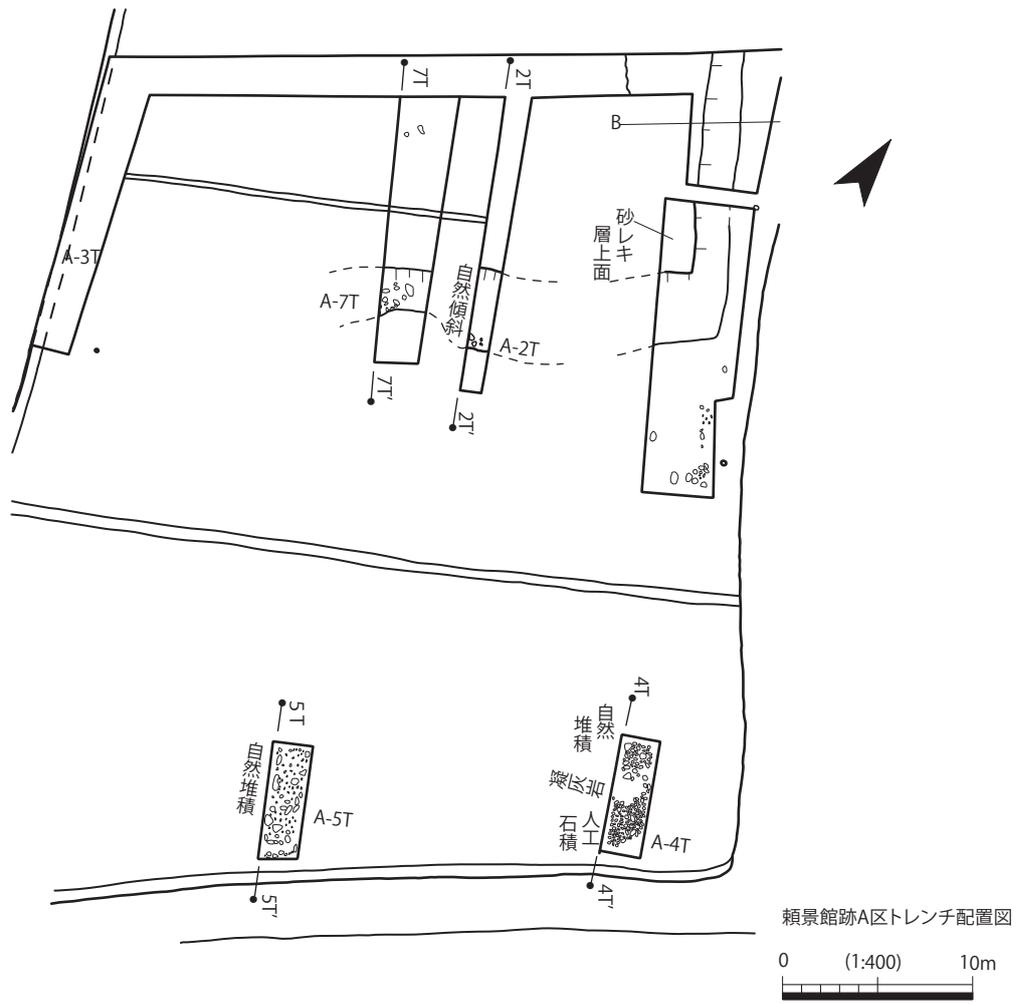
B区柱穴断面実測図 (A-A')



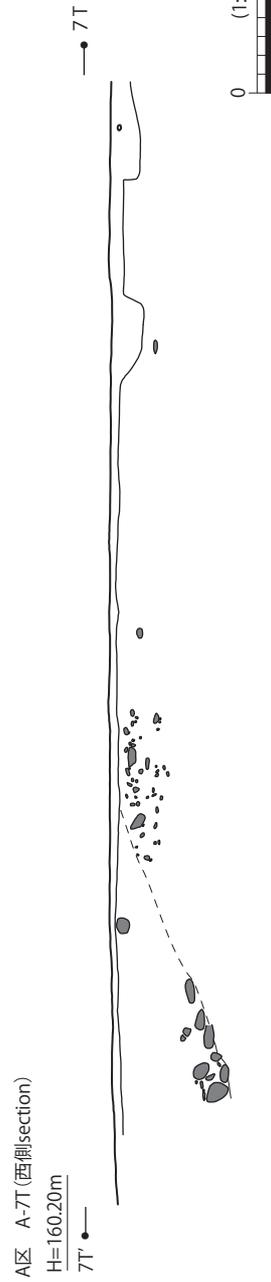
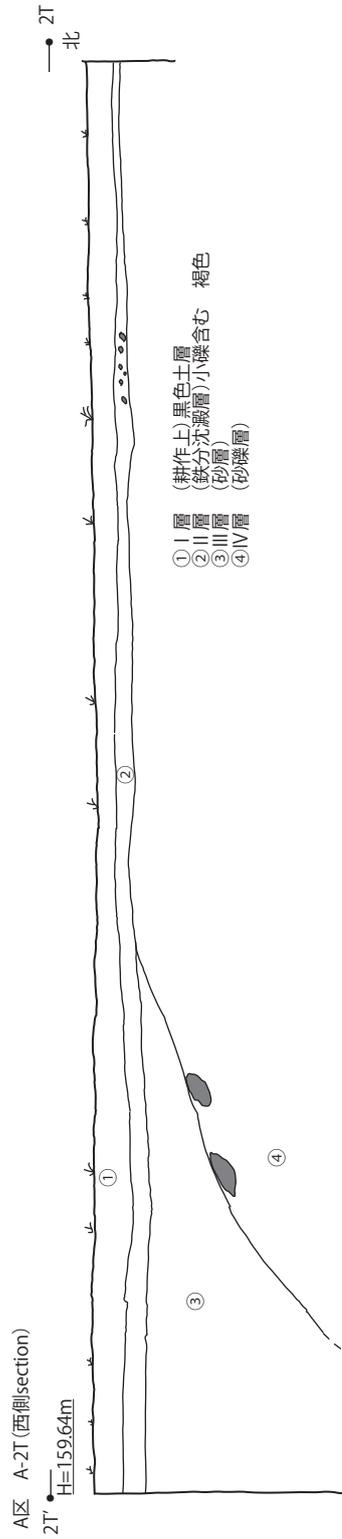
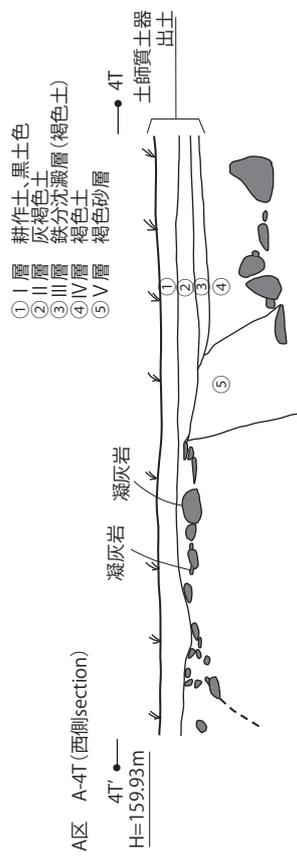
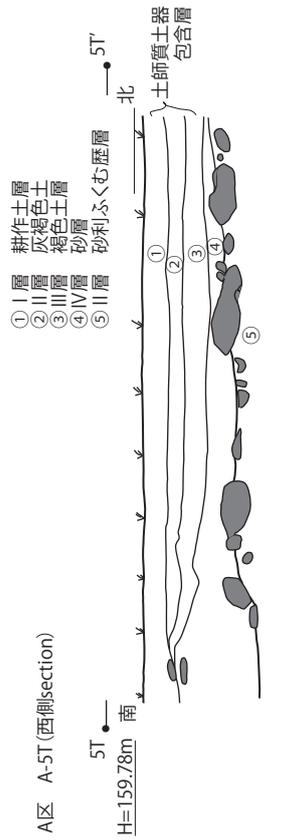
第51図 B区遺構配置図及び断面図 (2)



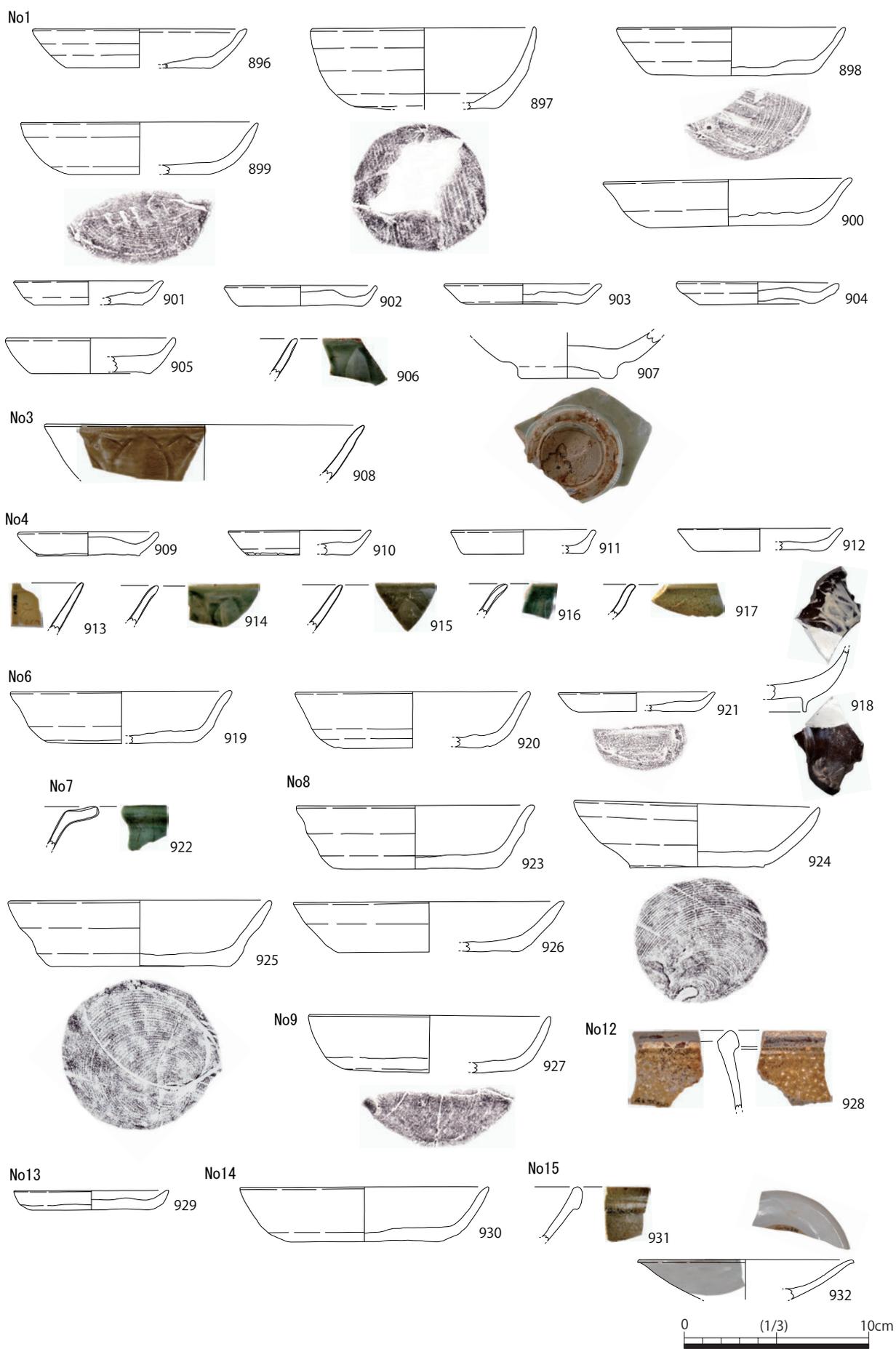
第52図 B区遺構配置図及び断面図(3)



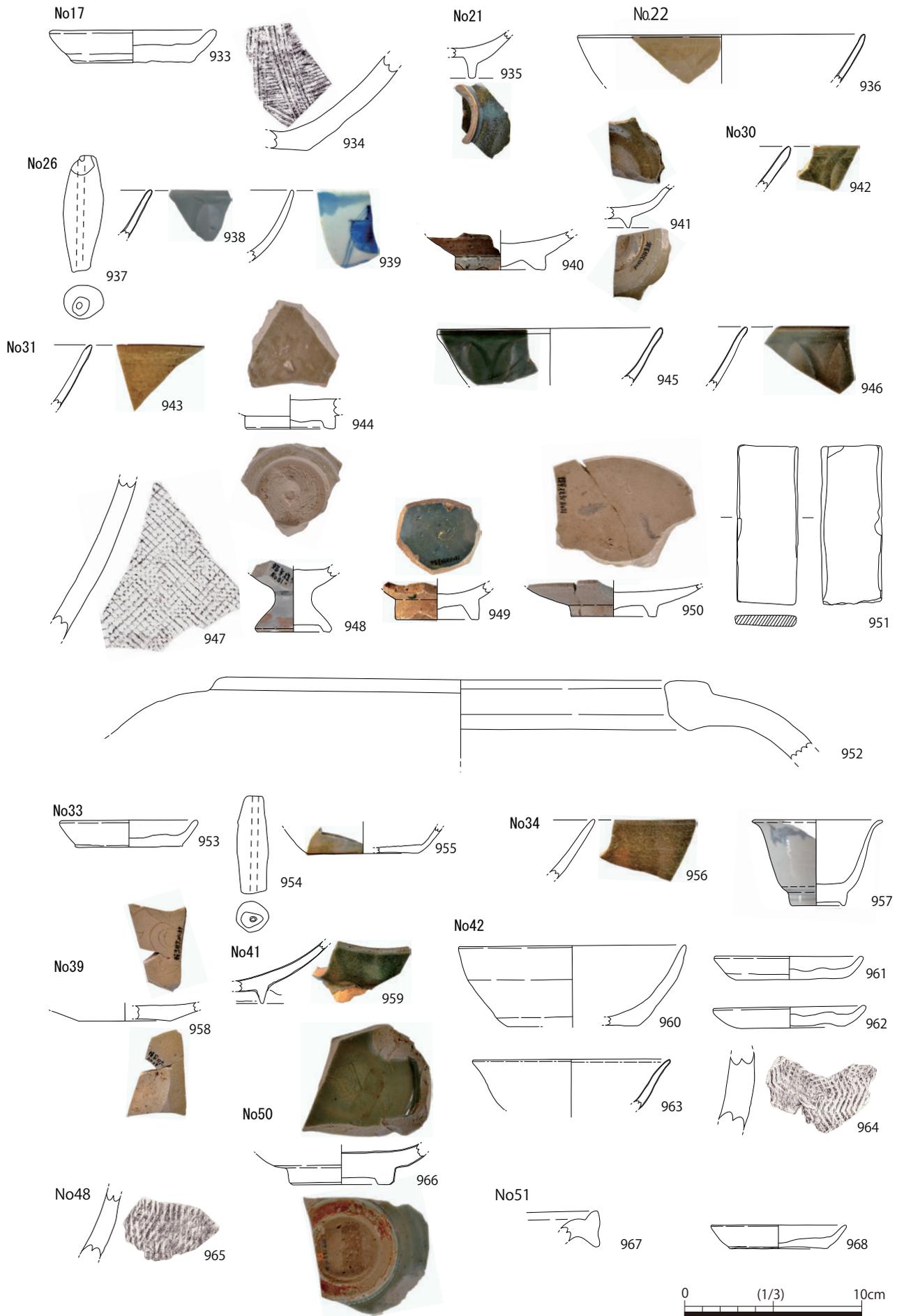
第53図 A区遺構配置図



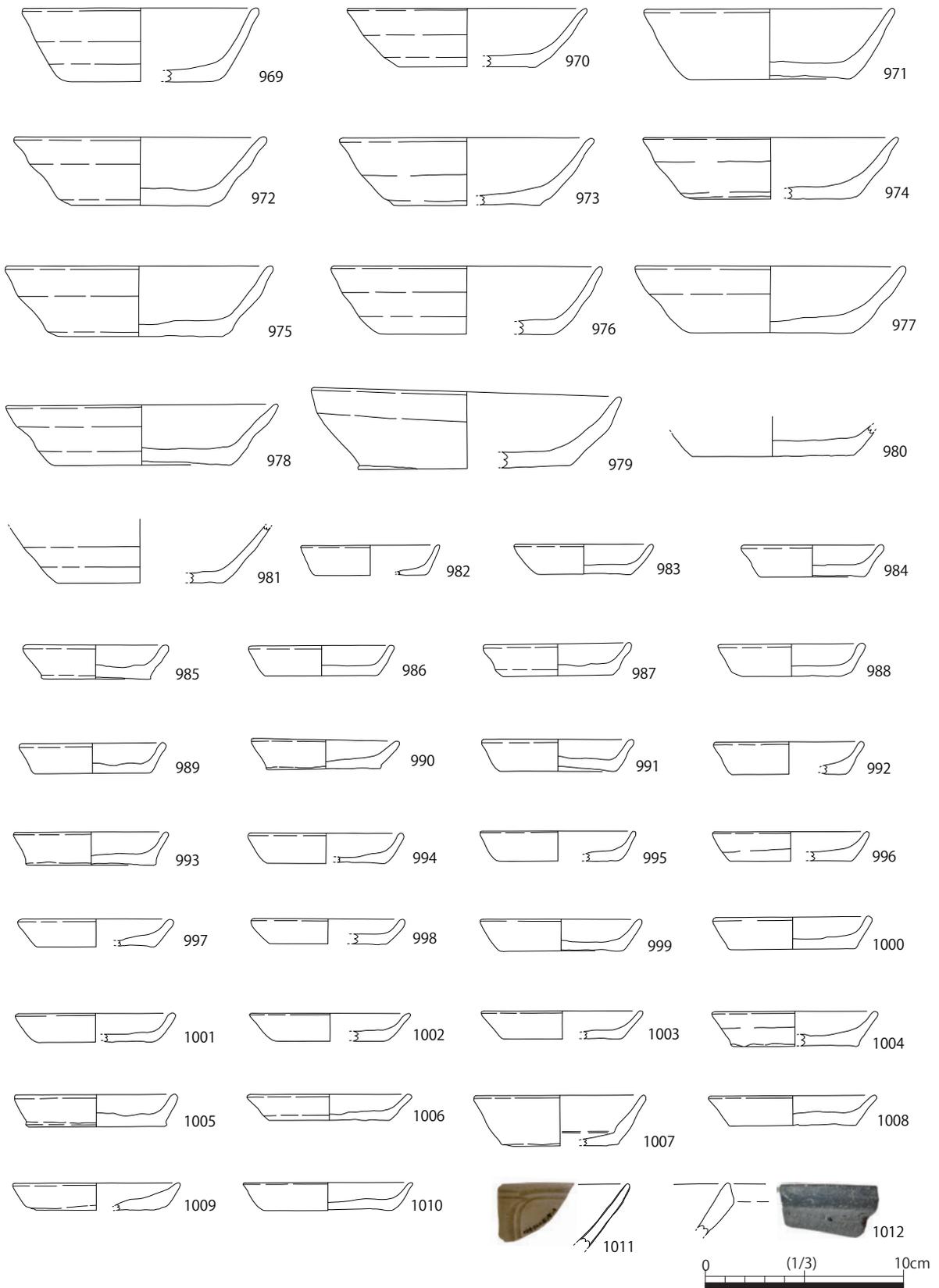
第 54 図 A 区断面図



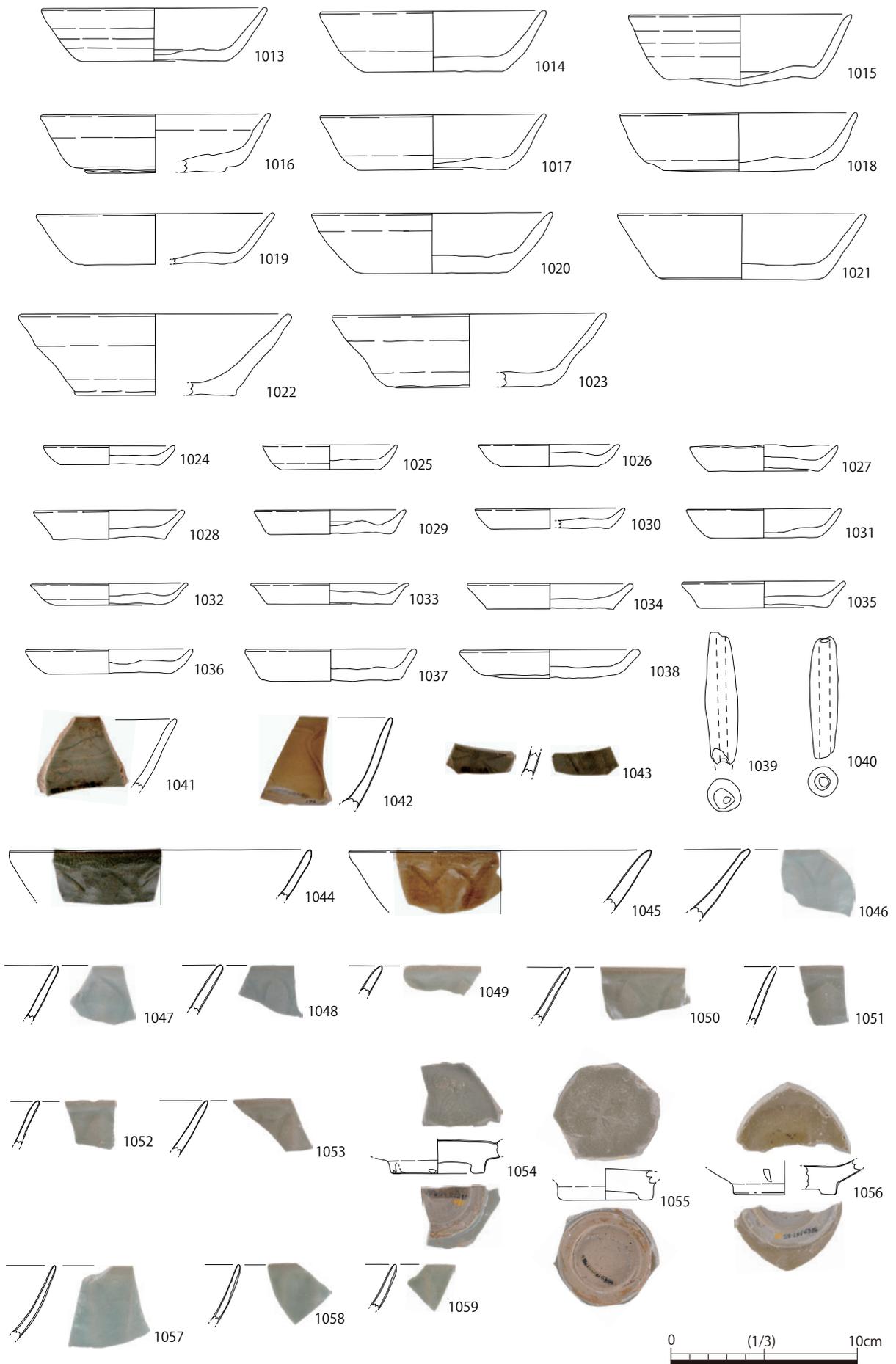
第 55 图 柱穴出土遺物 (1)



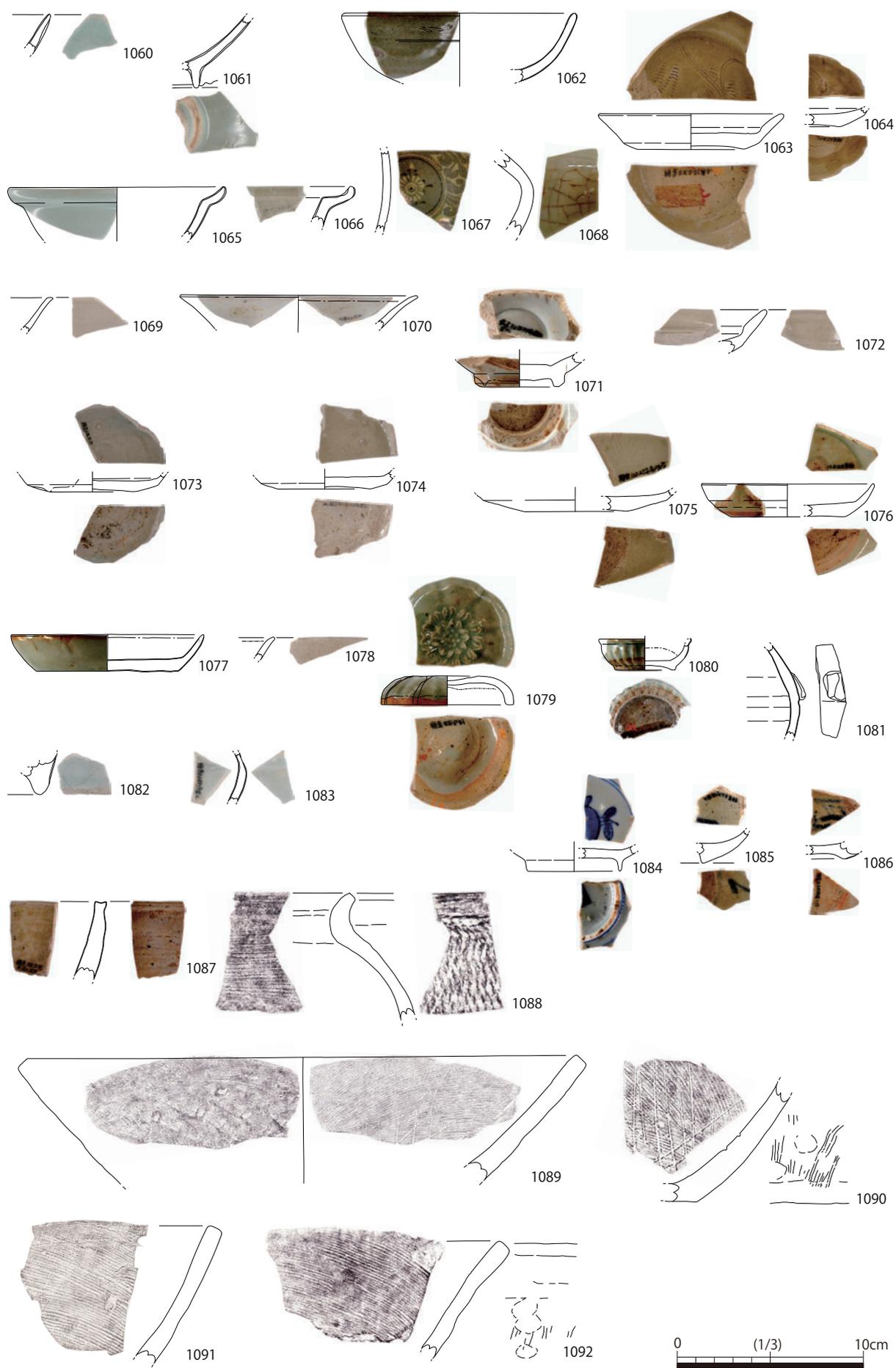
第 56 図 柱穴出土遺物 (2)



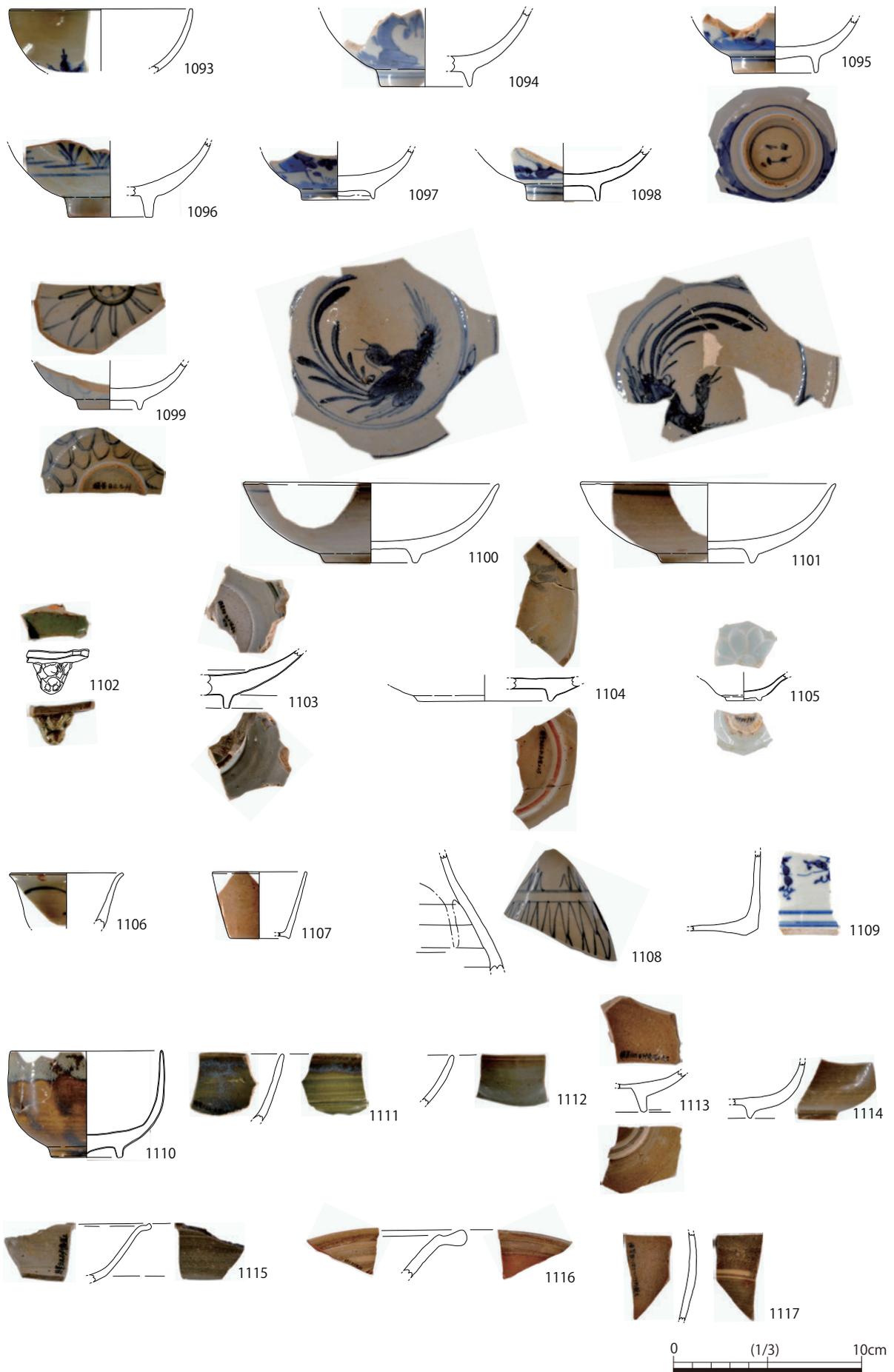
第 57 图 B 区土器溜出土遺物



第 58 图 B区III層 (褐色土・盛土) 出土遺物 (1)



第 59 图 B区III層 (褐色土・盛土) 出土遺物 (2)



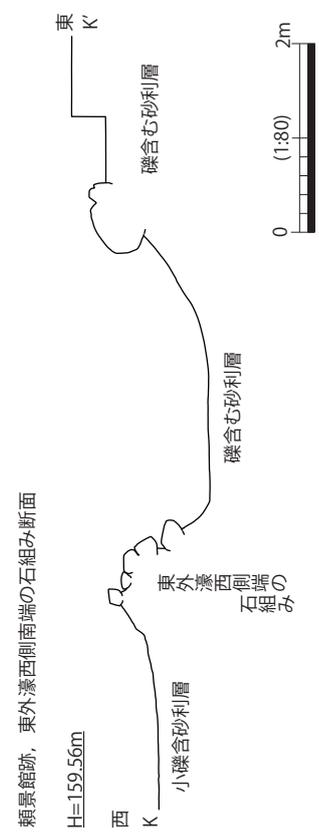
第 60 图 B 区 III 层 (褐色土·盛土) 出土遺物 (3)



石積護岸J-J'断面図

北 H=159.56m

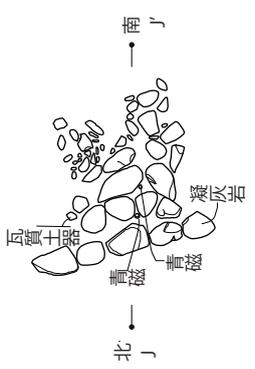
1/200



頼景館跡，東外濠西側南端の石組み断面

H=159.56m

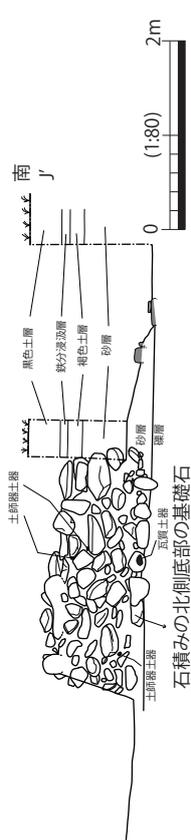
石積（堤防），野面積部分
(J-J' を中心に東西1.5m) の堤防基礎部の平面



H=159.56m

北 H=158.56m

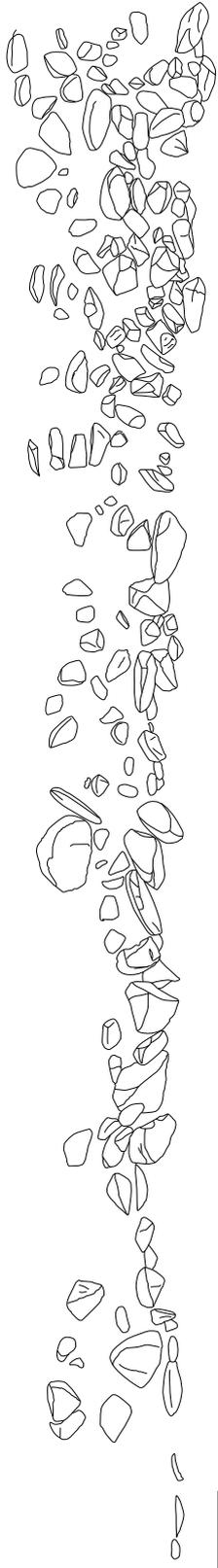
頼景館跡，石積（堤防），野面積み部分
(J-J' を中心に東西，5m) の堤防基礎部の断面



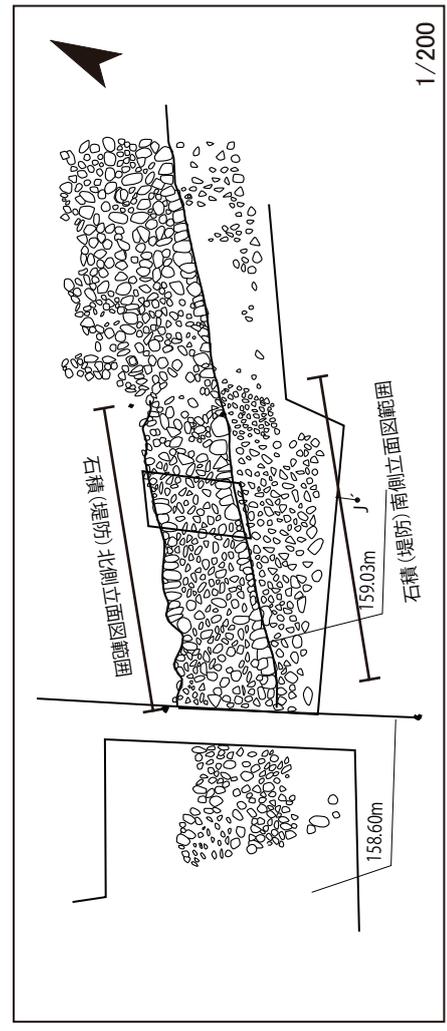
石組みの北側底部の基礎石
石積（堤防）

第61図 石積堤防詳細図

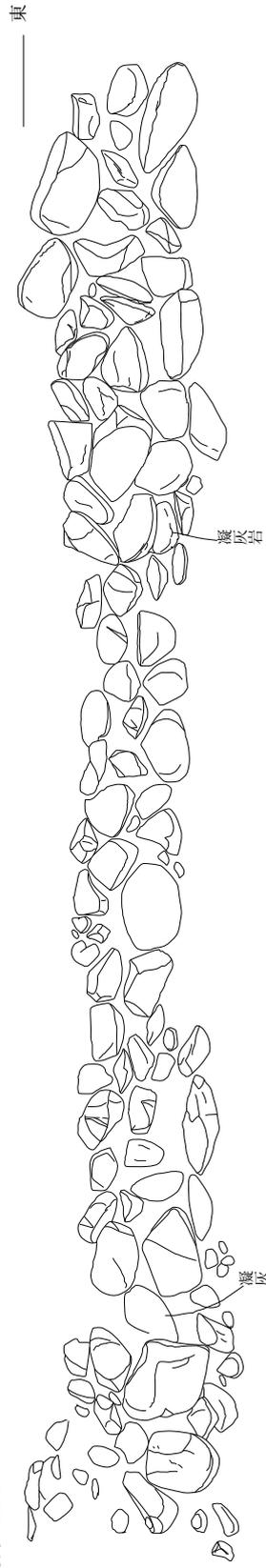
東
石槽 (堤防) 北側立面圖
H=159.42m



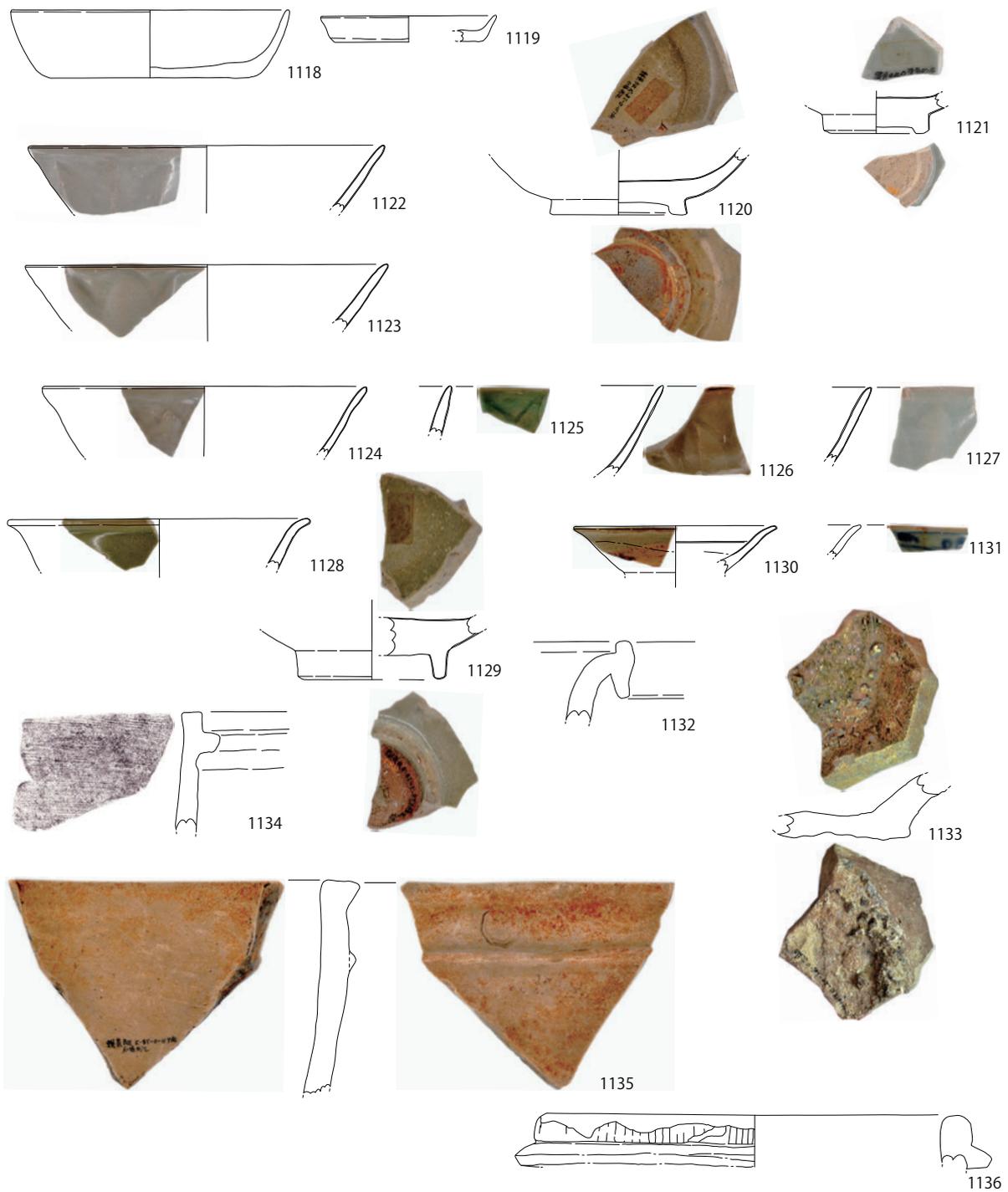
西



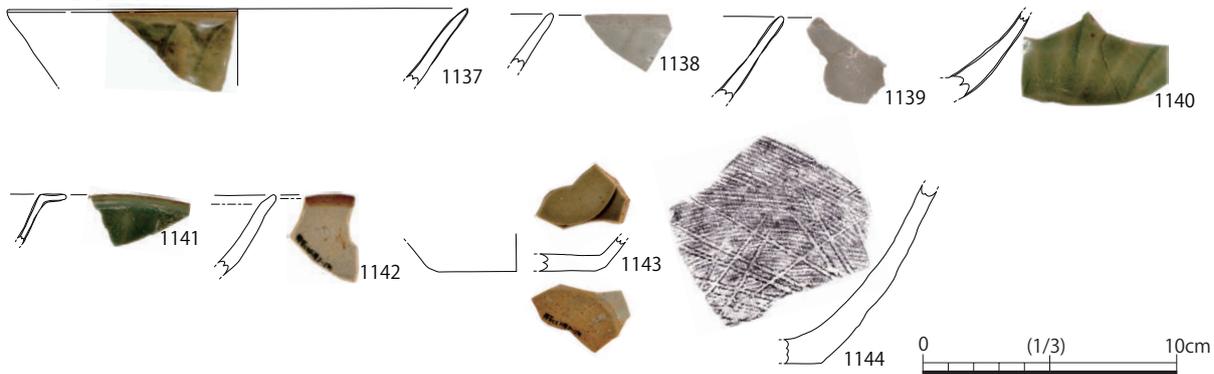
石槽 (堤防) 南側立面圖
H=159.42m



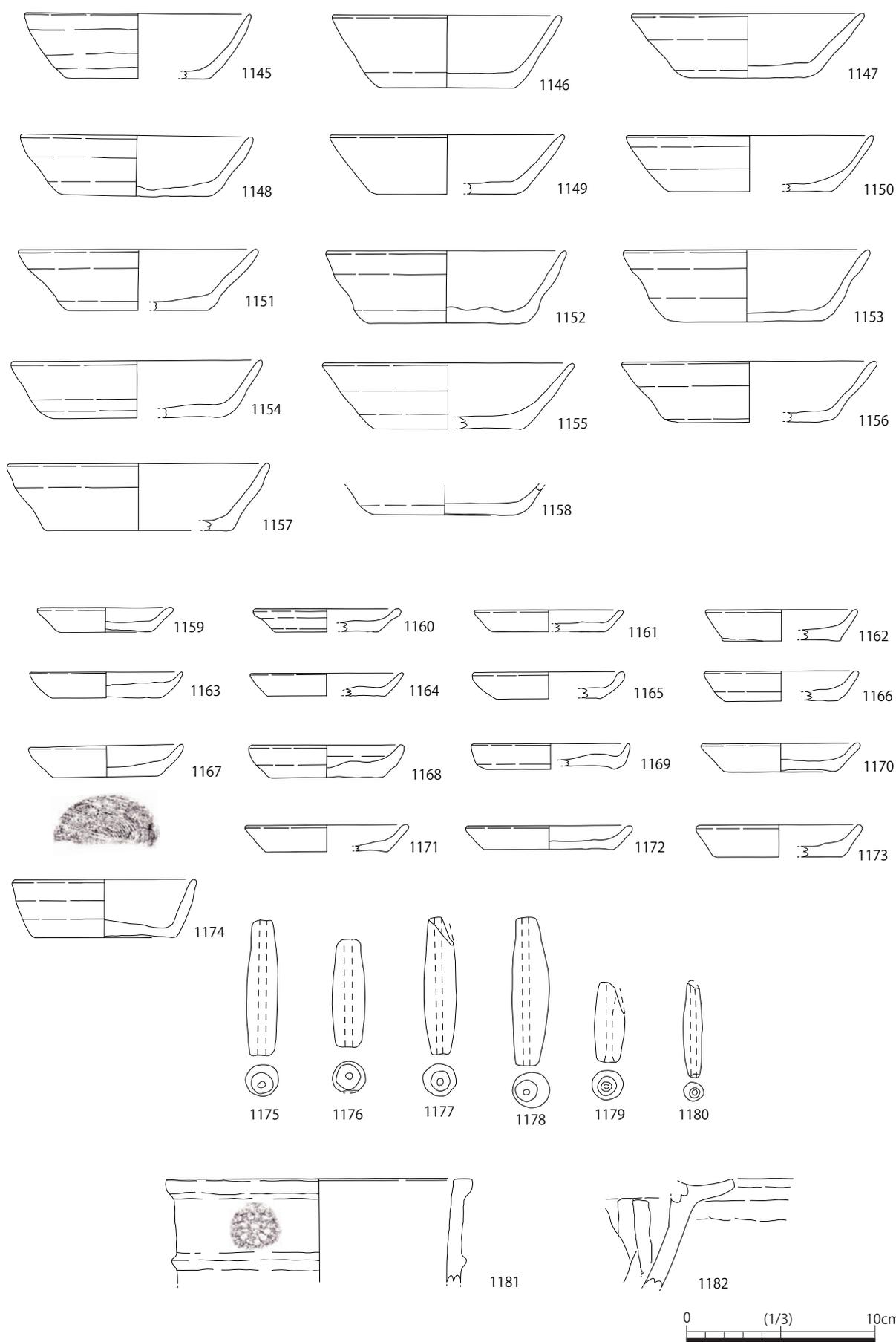
第 62 圖 石槽堤防立面圖



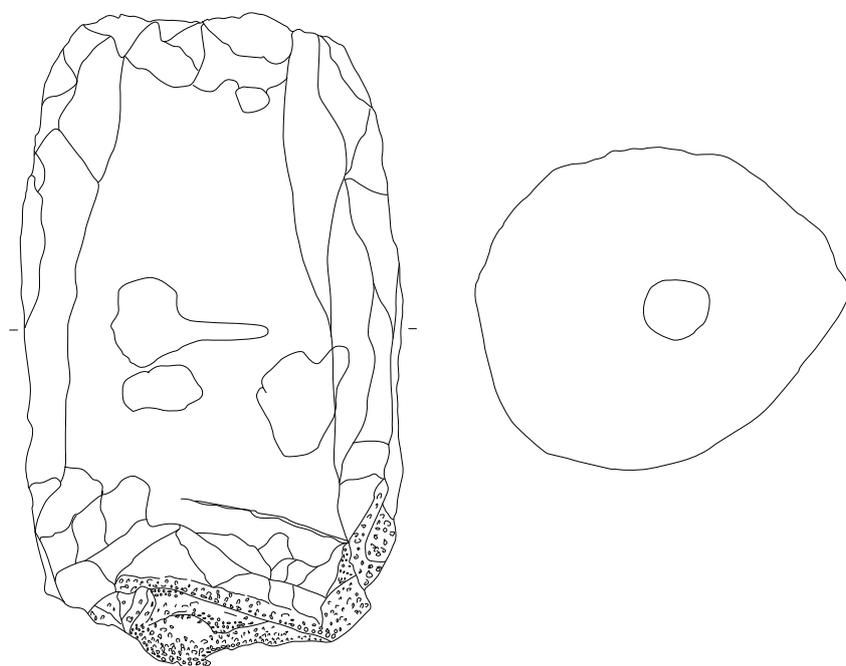
石積堤防基底部



第 63 図 広場出土遺物及び石積堤防基底部出土遺物

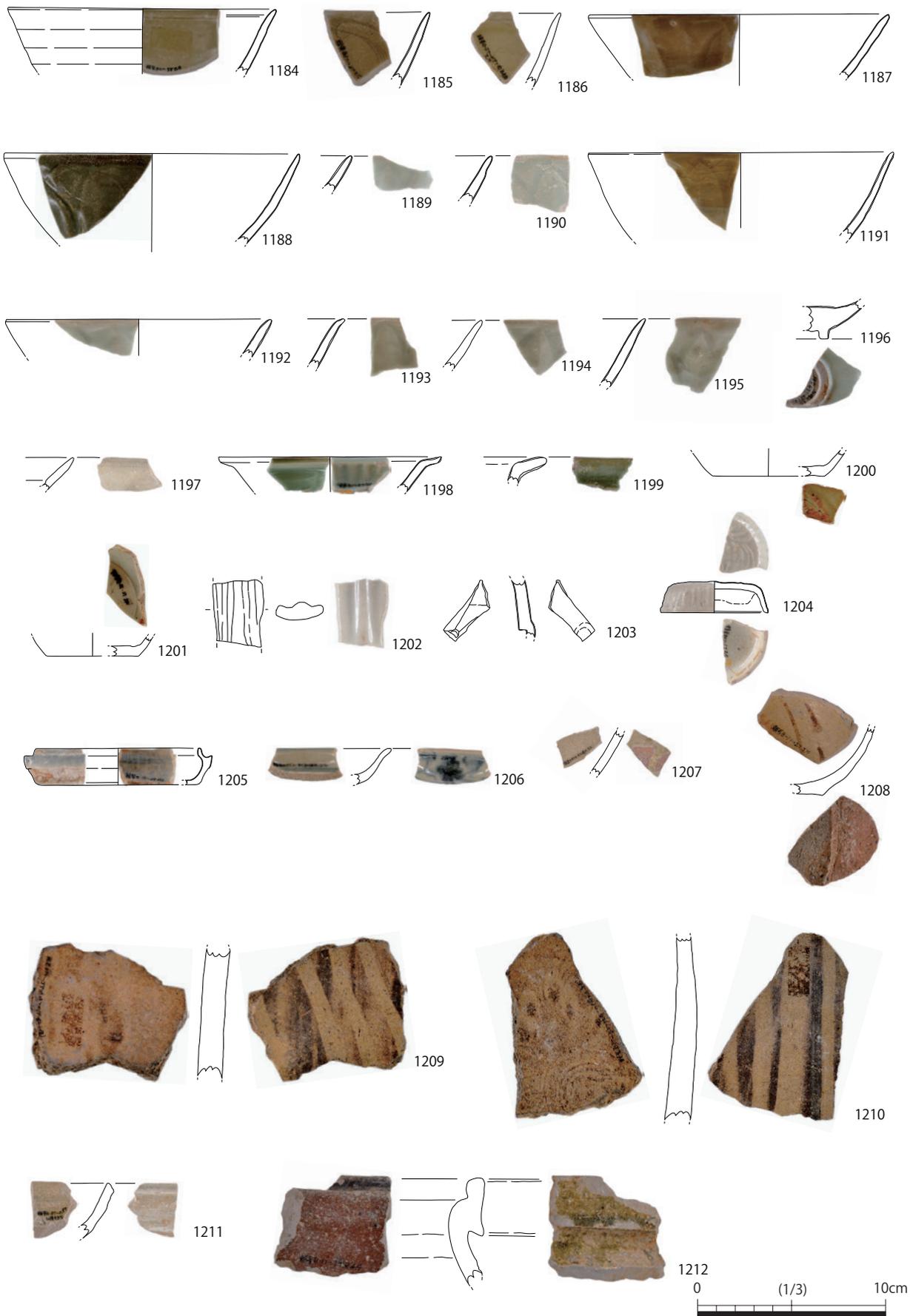


第 64 图 B 区出土遗物 (1)

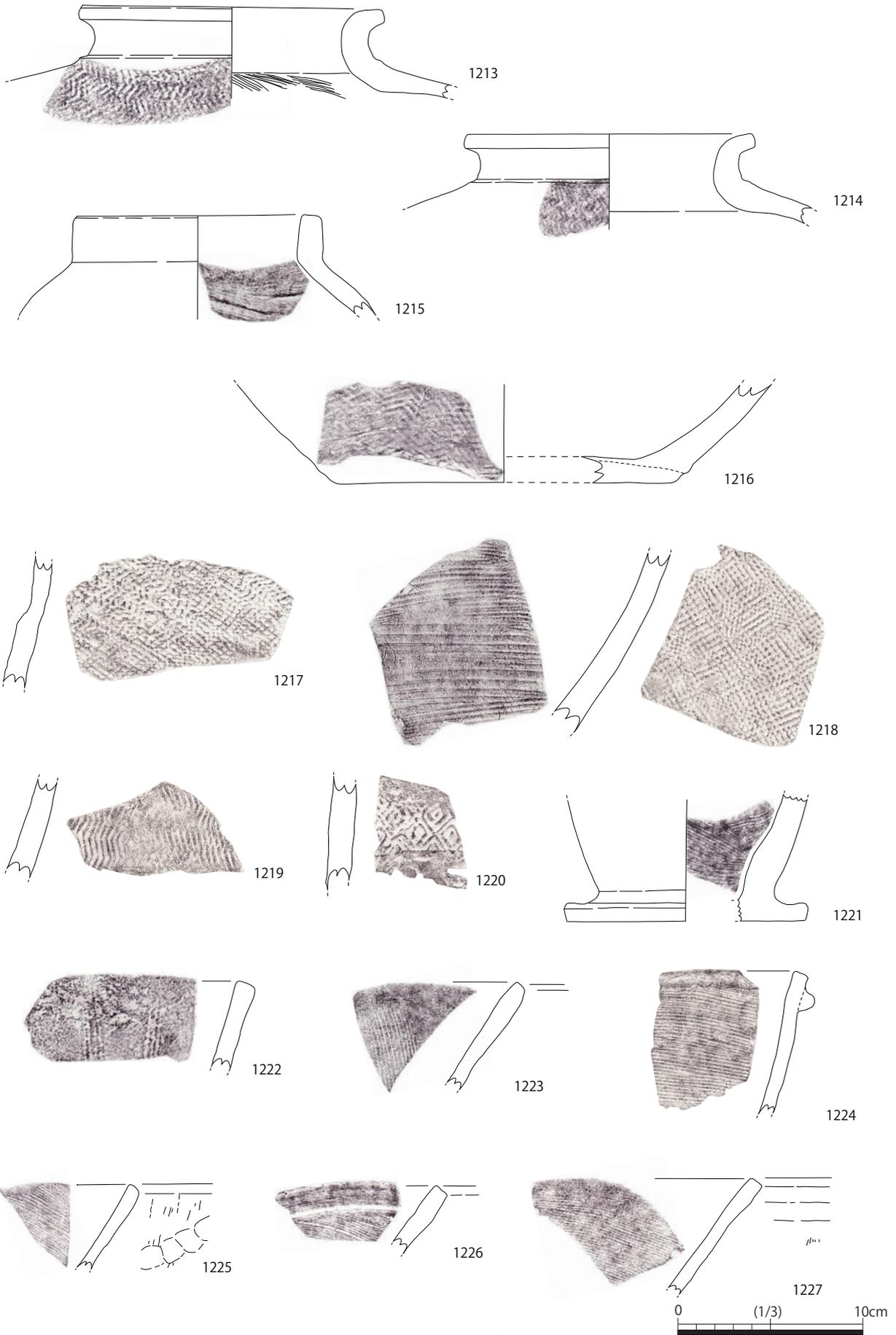


1183

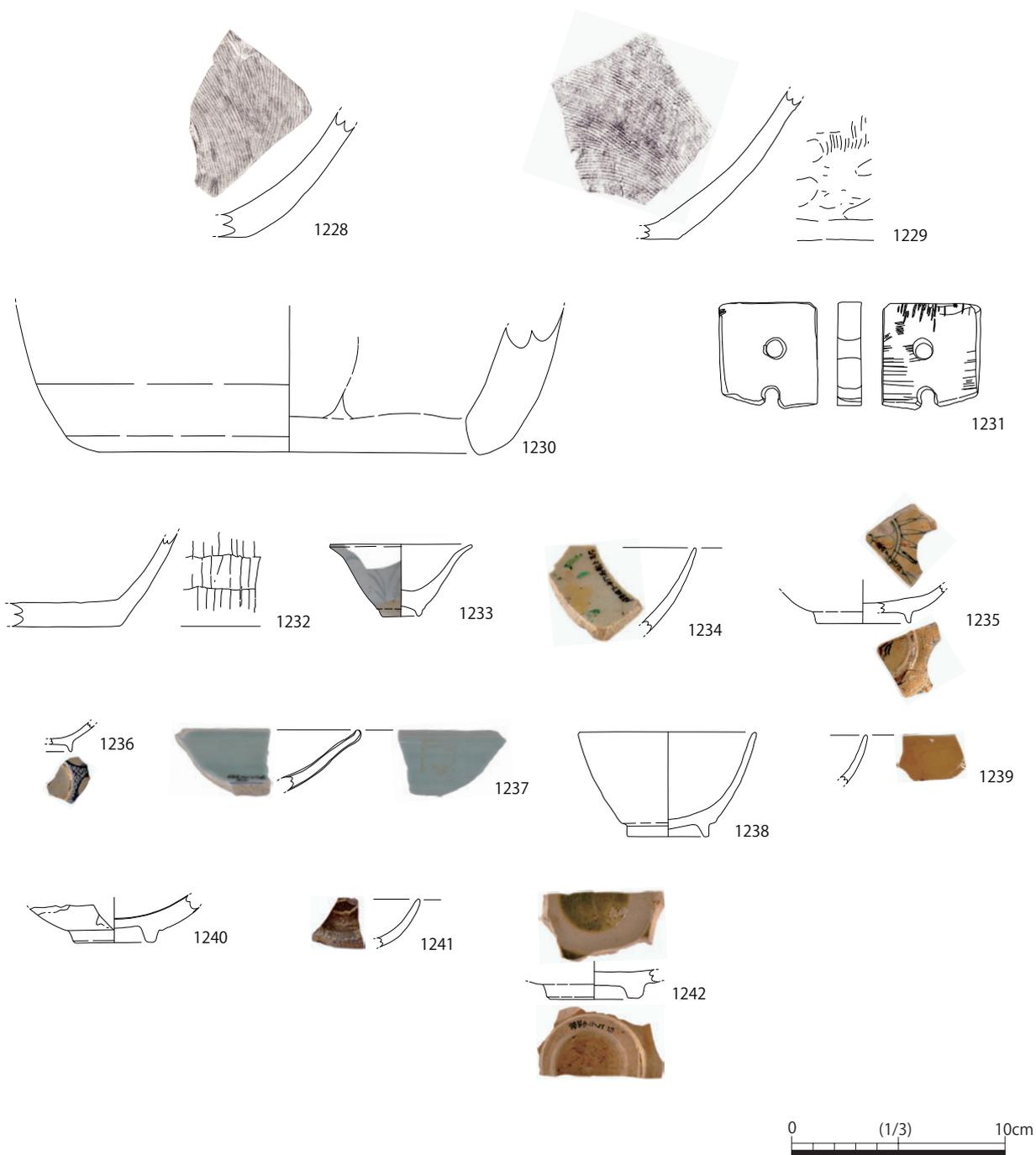
第 65 图 B 区出土遺物 (2)



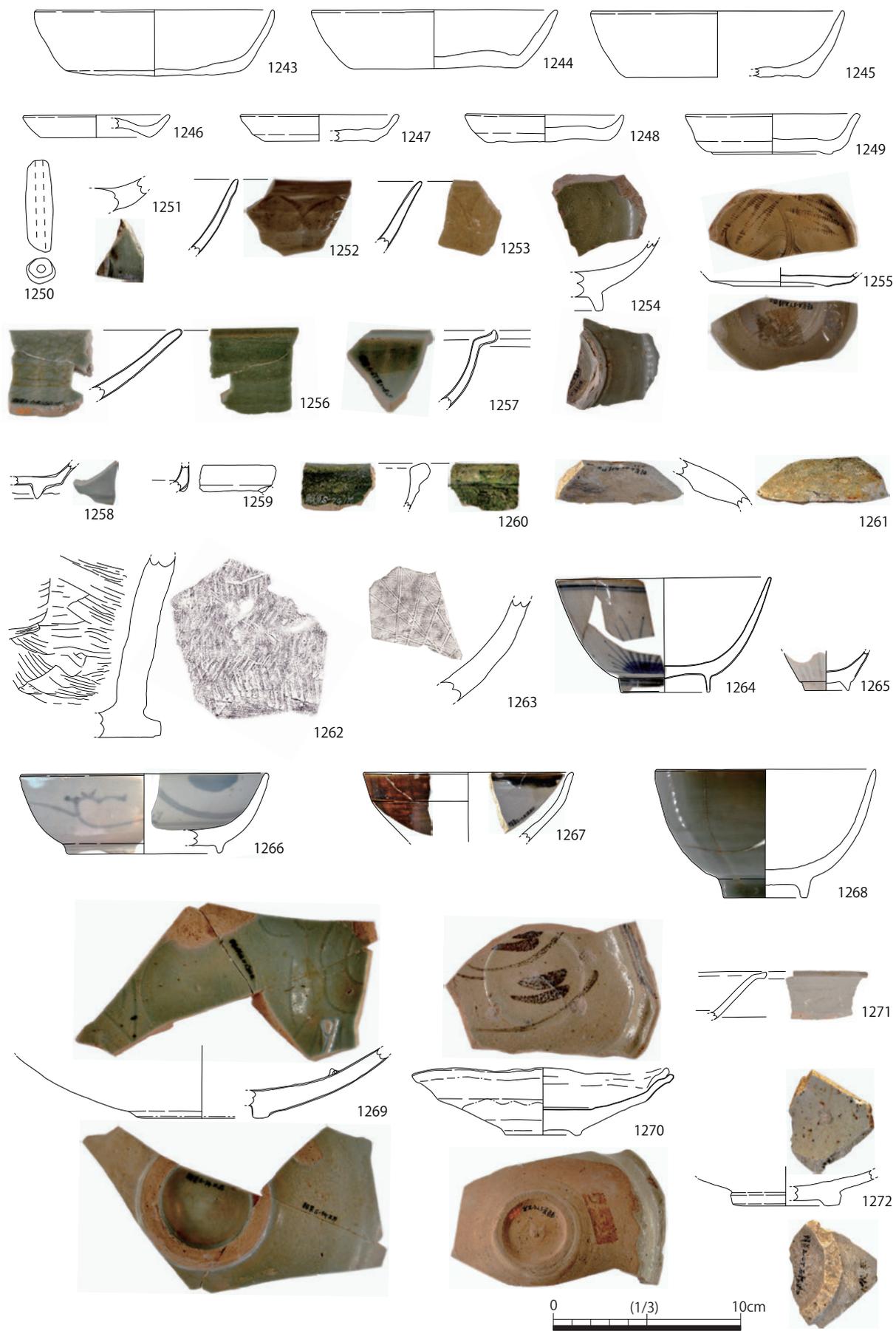
第 66 图 B 区出土遺物 (3)



第 67 图 B 区出土遗物 (4)

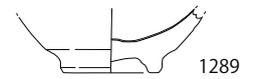
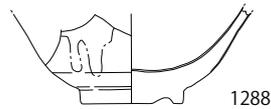
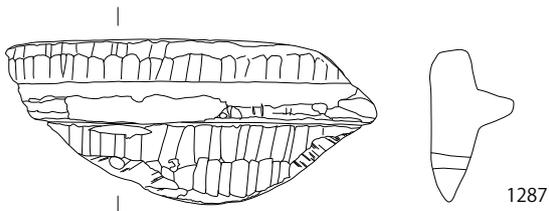
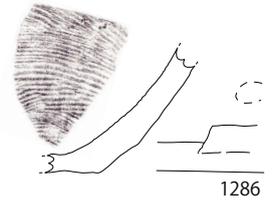
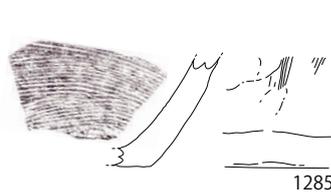
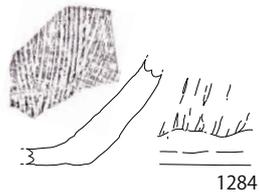
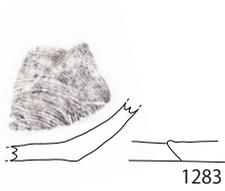
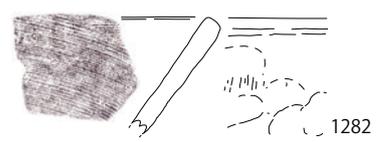
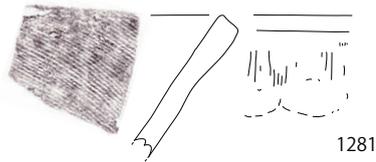
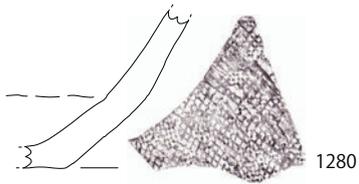
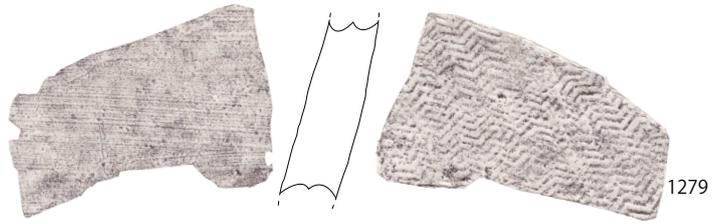
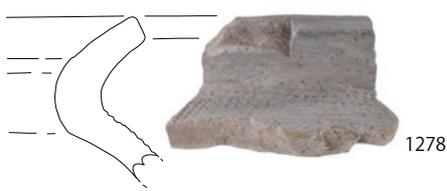
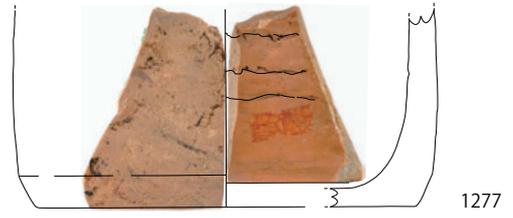
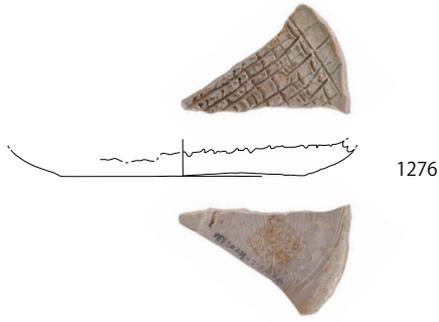
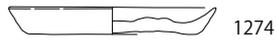
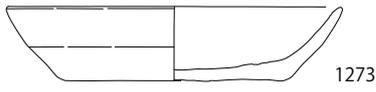


第 68 图 B 区出土遺物 (5)

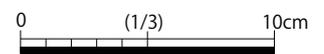
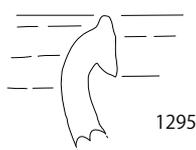
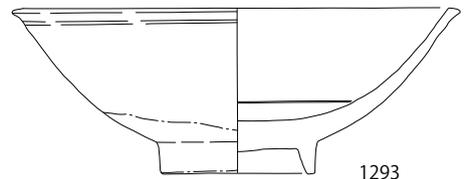
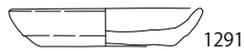


第 69 图 A 区出土遗物

C区

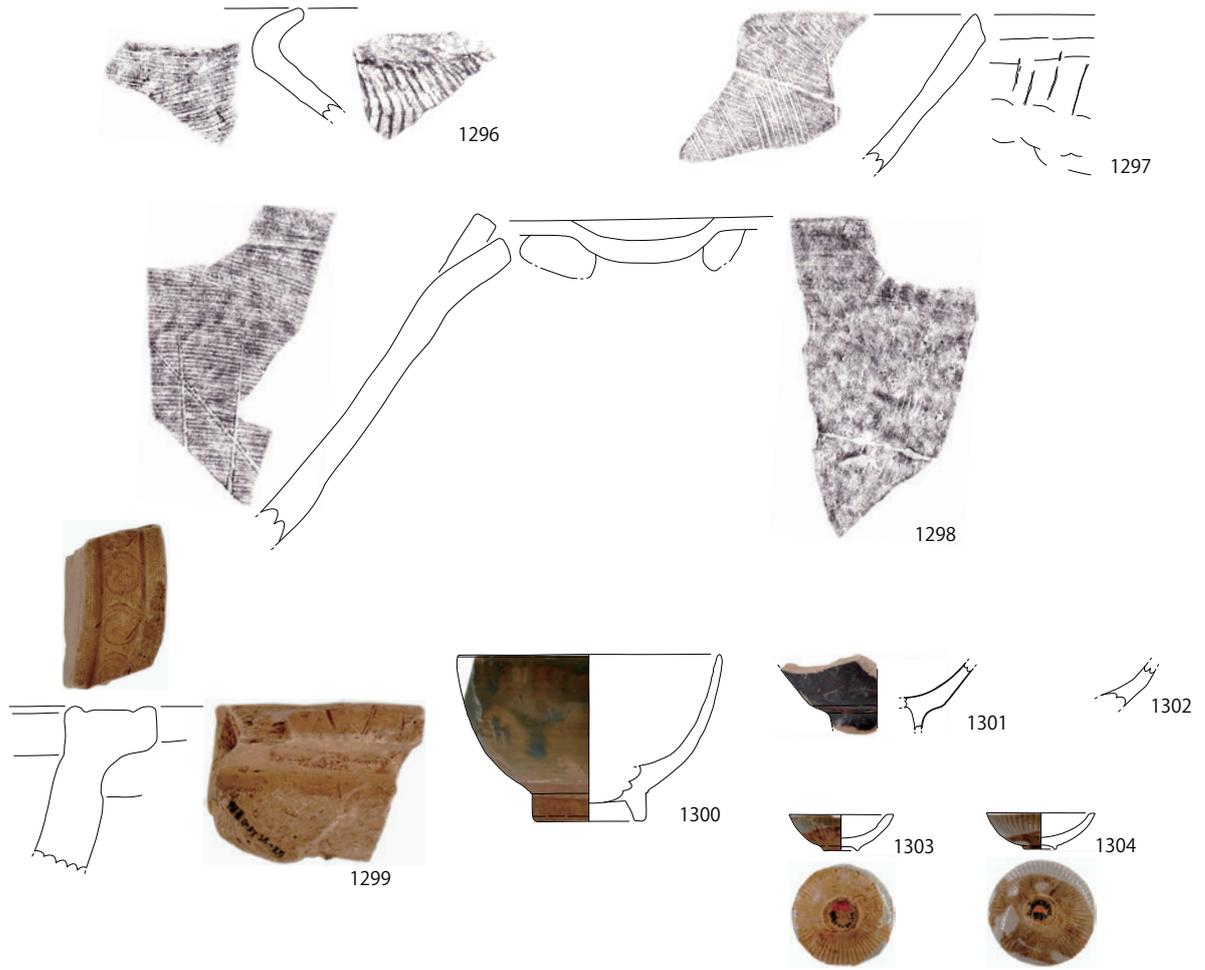


D区

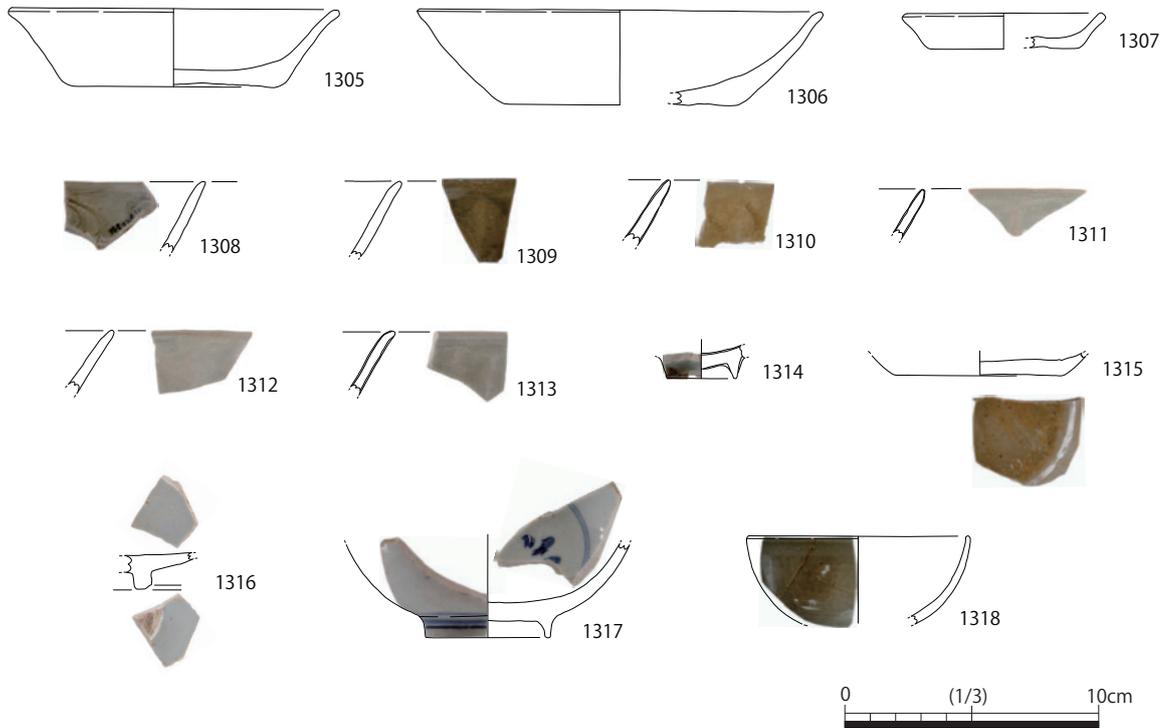


第70图 C·D区出土遗物

D区



注記不明



0 (1/3) 10cm

第 71 図 D 区・注記不明遺物

第IV章 相良頼景館跡の調査

第1節 調査の方法(第72図)

熊本県調査により相良頼景館跡は、東・西側は濠によって区画、南側は開放され球磨川に面し石積堤防が構築されていたことがわかっている。

令和3～4年度にかけての相良頼景館跡の調査は、館跡北側の堀の有無の確認、遺跡の範囲確認、遺跡の変遷確認を目的とした。

令和3年度の調査では、北側土塁及び堀想定部分とが1本の断面で観察できるようにトレンチを設定した。土塁への影響を最小限にとどめるため、地権者により開削された箇所トレンチを設けた。

地権者によれば土塁開削は、県調査後に行なったもので、北側土塁外側の水田にトラクターを通すために開削したとのことだった。その際、土塁の内側から重機を使用して開削したとすることで、発生土は開削部分の両側に振り分けたという。また、北側土塁の外側に積まれた石積も、昭和50年以降に地権者が積み上げたものであった。

多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会では、令和3年度のトレンチ調査結果をもとに、北側堀の走行方向の確認の必要性や、土塁と堀の堆積状況が連続して観察できる部分で、新旧関係を把握する必要があるとの意見があがり、令和4年度の調査方針が検討された。その結果、令和4年度の調査は、東側土塁及び堀想定部分(東側トレンチ)、北西部の土塁が遺存しない部分(北西側トレンチ)、北側堀部分(北側トレンチ)にてトレンチ調査を行うことになった。東側トレンチでは土塁と堀の新旧関係の確認、北西側トレンチでは出入口の確認、北側トレンチでは北側堀の走行方向の確認を目的としている。

第2節 調査の成果

1. 令和3年度の調査成果

(1) 北側土塁トレンチ(第73図)

土塁トレンチ掘削時に、整形石材が直角に立てかけるように確認された。地権者による土塁開削後の土留め材である。これらの石材の撤去後には、近世陶磁器が出土した。

北側土塁の構築面はD-18層上面である。D-18層上面は、僅かながらグライ化した水性堆積層を部分的に確認し、これをD-17層とした。その上に土塁構成土であるD-14～16により土塁は造成されている。土塁構成土の土の流れは北側からである。土塁構成土の土質は、水性堆積物と地山層と礫が混ざった砂質土でありはさほどない。明確な層界があるわけではないが、土の流れ・包含する砂礫の大きさによって分層した。

D-11層は、砂利層である。D-5～7層は県調査

当時で確認されている石積に伴う覆土である。D-8～10層・12層は昭和50年～60年代の盛土である。D-13層は昭和50年代の石積に伴う裏込め土で、D-2・3層も昭和50年以降の盛土である。D-4層は、地権者による土塁開削時の発生土である。

地山であるD-24層(礫層)は北側土塁付近で最高位となり、そこから南北へ向けゆるやかに傾斜していくことから自然堤防と思われる。D-24層の直上に堆積しているのが水性堆積物であるD-23層である。

D-22層は、D-23層の風化土であり、粘性を帯びるとともに赤味を帯びる。その上に水性堆積物であるD-21層が堆積する。水性堆積層はともに無遺物層である。D-19・20層は、土師器の小片やカーボンを含んでおり、館跡内部の整地土と考えられる。

【出土遺物】(第75図)

1319・1320はD-16層(土塁構成土)からの出土遺物である。1319は底部糸切り離しの土師器杯、1320は瓦質の鍔付き鉢で、内面にハケメ調整が残り、鍔に有孔がある。

1321～1327は土塁直下のD-18層(整地層)からの出土遺物である。1321は土師器杯、1322～1325は土師器小皿である。1326は龍泉窯系B0類の折縁大皿である。1327は中世須恵器の鉢である。

1328～1331はD-5.6.7層からの出土遺物である。1328・1329は常滑焼の甕。1330は染付碗、1331は肥前の広東碗。

1332～1335は表土からの出土遺物である。1332は湯飲碗である。1333は土師質の土錘である。1334は龍泉窯系B類の青磁碗である。1335は一勝地の碗である。

(2) 北側堀跡トレンチ(第74図)

土塁と堀の新旧関係を確認したかったが、昭和50年以降の石積構築により削平されており、確認できなかった。今回のトレンチ調査は、県調査当時の土塁断面図(第43図A-A'断面)付近であり、当時の土塁断面図が参考になった。

表土から約40cm下で北側堀跡の南側の掘り方を確認した。掘り込み面は礫層上面(D-24層)である。北側堀跡の北側掘り方は表土から約100cm下で確認した。

H-1～19層は、近・現代の水田耕作に伴う堆積土である。H-9・10・11・13層が県調査当時に確認された溝である。H-14層は畦畔跡である。H-15～17層は旧耕作土、H-18・19層は鉄分沈殿の水田床

土層である。

土層断面から北堀は2時期あることを確認した。当初の北堀を北堀1、後の時期のものを北堀2とし、説明を加える。

北堀1は堀幅約6m、深さ約1.8m、堀底幅約0.5mの薬研堀である。北堀1覆土はH-21～30層である。北堀1の鍵層となるのがH-27層である。H-27層から青磁碗2点が出土した。H-27層は明褐色粘土層で、その上下層とは土質が明確に異なる。H-27層の上にはH-21～26層が堆積するが、これらは礫を伴う褐色シルトで人為的な埋戻し土である。H-27層下位のH-28～30層も礫を伴う褐色シルト層である。

北堀2は堀幅約3.2m、深さ約1.3mの薬研堀である。北堀2の覆土がH-20層である。径5～50cmの礫を多量に含む、その空隙に褐色粘土が混じっている。人為的に礫によって埋め戻されていることがわかる。

【出土遺物】(第75図)

1336・1337は北堀1のH-27層からの出土遺物である。1336は龍泉窯系B類の青磁碗の底部で、内底に印花文が残る。意図的に体部は打ち欠けられている。1337は龍泉窯系D1類の端反碗底部である。外底を輪状に釉を掻き取っている。1338～1340は北堀2覆土からの出土遺物で、土師器坏である。1341～1344は耕作土・表土からの出土遺物である。1341は土師器小皿。1342は龍泉窯系B類の青磁碗である。1343は中世須恵器の胴部片。1344は肥前の染付皿である。

2. 令和4年度の調査成果

(1) 北側トレンチ(第76図)

北側堀の走行する予想地点にトレンチを設定した。

北堀南側の掘り方を表土から約50cm下で確認した。地山面礫層からの掘り込みである。令和3年度のトレンチ調査で北堀1・2が確認されたため、北側トレンチにおいても、その確認を行った。

確認できた北堀1の堀幅は約5.6mである。覆土は18・19層で粗礫を含む暗褐色シルトである。

北堀2は北堀1の北側にて確認した。堀幅は3.8mである。北側に人為的な礫の廃棄を確認した。覆土である16層は炭化物の散在層である。

【出土遺物】(第78図)

1345～1349は北堀1からの出土遺物である。1345は土師器小皿。1346は土師器坏で、底部に厚みをもつ。1347は常滑焼の甕である。1348・1349は中世須恵器で体部に山形タタキ痕が残る。

1350～1353は北堀2からの出土遺物である。1350～1353は土師器坏である。1354は北堀2覆土直上の水田床土からの出土遺物で、白磁C1群の皿である。

1355は瓦質の釜である。

(2) 北西側トレンチ(第77図)

表土(1・2・3層)を除去したところで、トレンチ中央に浅い掘り方を確認し、これをS-1とした。浅い溝と思われる。幅は2.1m、深さは0.3mである。覆土下位に礫が敷かれるように検出した。

トレンチ北側にて石積を検出した。これをS-2とした。S-2は北側が面で、石積前面の堆積層は人為的に埋め戻されている。7層がS-2の裏込め土となる。

水性堆積層である9層上面にて遺構掘り方を確認した。これをS-3とした。S-3覆土(8層)は北堀1覆土に似る。

【出土遺物】(第78図)

1356は8層からの出土遺物で、土師器坏である。1357は9層上面にて出土した常滑焼の甕である。1358～1361は石積前面の6層からの出土遺物である。1358は肥前の筒型碗、1359は肥前系の小坏、1360は近代の瀬戸の坏である。1361は肥前の蛸唐草文の皿である。1362は肥前の蛇の目釉剥ぎの皿である。1363は陶器の甕である。

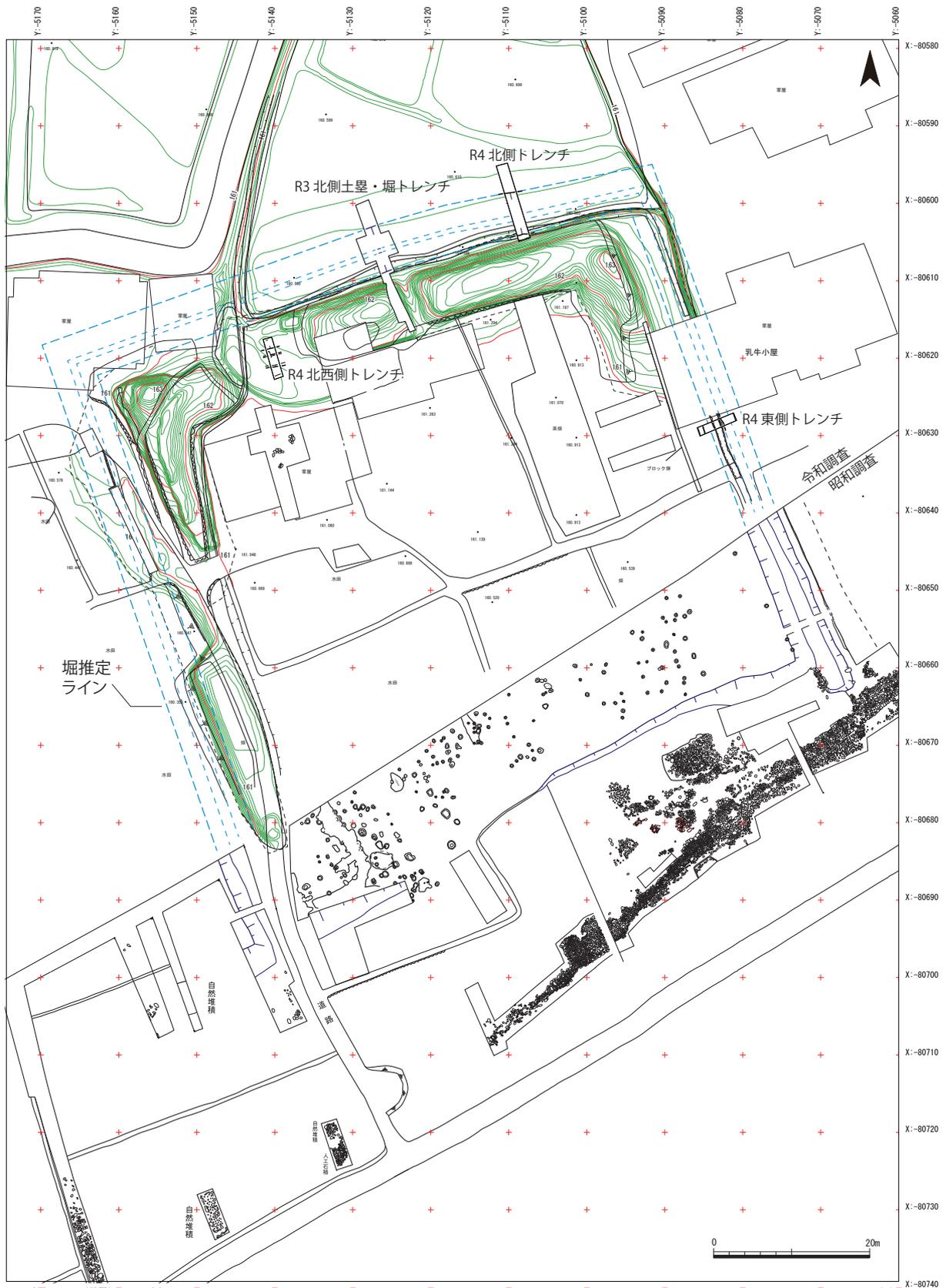
(3) 東側トレンチ(第77図)

1層表土の直下に硬化層(2層)を確認した。2層は現建築物に伴う硬化層である。6層の水性堆積層(砂層)上面にて東側堀跡の掘り方を確認した。堀の覆土(5層)は黒褐色シルトで粘性を帯びる。

東堀覆土内にて近代の暗渠排水路の掘り方を確認した。

【出土遺物】(第78図)

1364は近代暗渠掘り方から出土した土師器の鉢である。1365は表採品で中世須恵器の胴部片である。



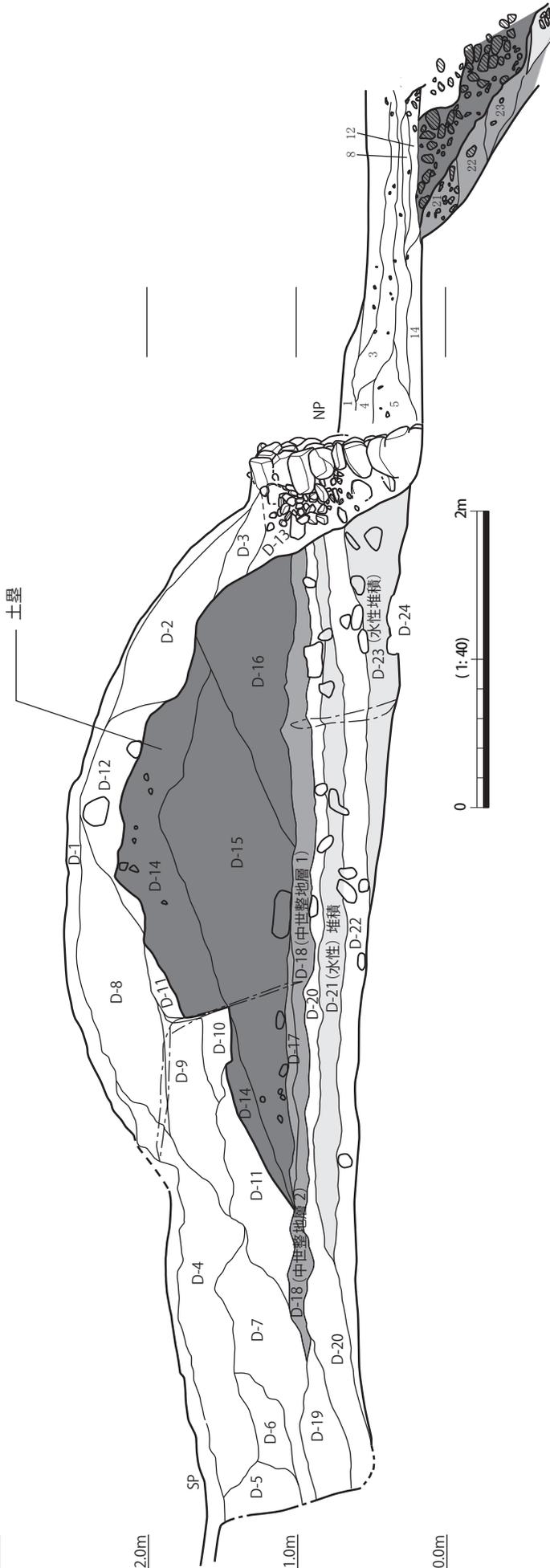
第 72 図 相良頼景館跡地形図及びトレンチ配置図

H=163.0m

H=162.0m

H=161.0m

H=160.0m

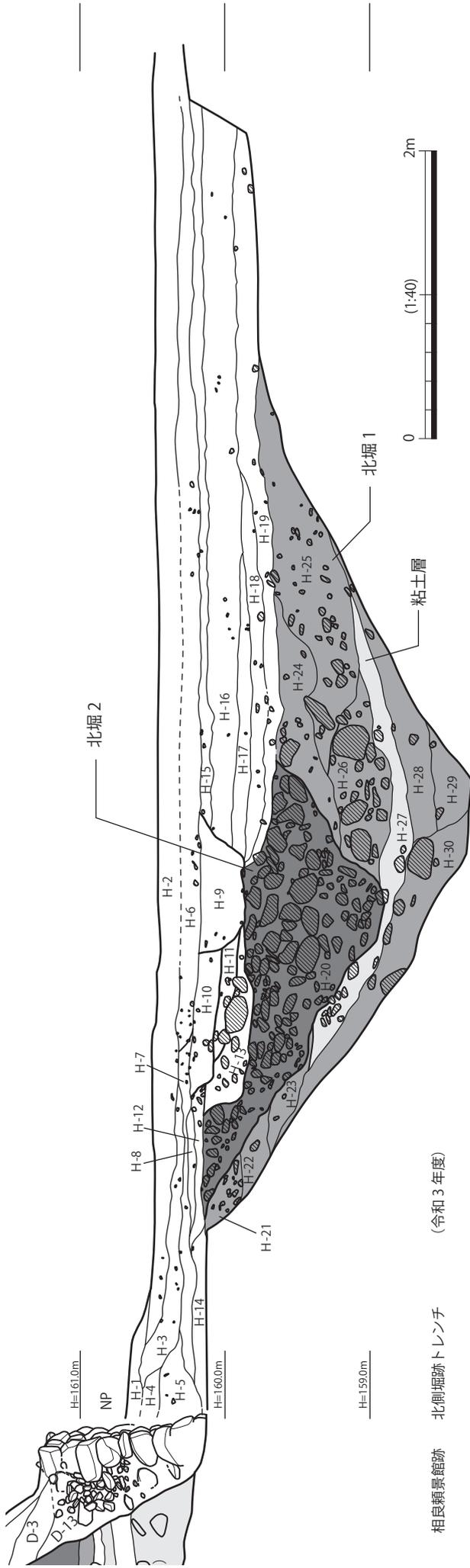


相良親景館跡 北側土塁トレンチ

- D-1 表土 10YR4/6 褐色シルト しまりなし 径 2～10 cmの礫を少量含む
- D-2 盛土 7.5YR4/6 褐色シルト しまりなし 径 2～10 cmの礫を中量含む
- D-3 盛土 7.5YR4/6 褐色シルト ややしまりあり 径 2～10 cmの礫を少量含む
- D-4 盛土 7.5YR4/6 褐色シルト しまりなし 径 1～2 cmの中礫を多量、径 2～5 cmの粗礫を少量含む
- D-5 石積裏込 径 5～15 cmの円礫の層、土は含まず
- D-6 石積構築土 7.5YR4/6 褐色シルトを基本とし、細砂と粗砂を多量、細礫～中礫を中量含む しまりなし
- D-7 礫混じり 7.5YR4/6 褐色シルト ややしまりあり 径 3～30 cmの礫を多量含む
- D-8 盛土 7.5YR4/6 褐色シルト しまりなし 細礫を多量、径 3～10 cmの礫を中量含む
- D-9 盛土 7.5YR4/4 褐色シルト しまりなし 中礫を中量含む D-8層よりも色調暗い
- D-10 黒土 7.5YR3/4 暗褐色シルト しまりなし やや粘性あり 中砂を少量含む
- D-11 礫層 細礫～粗石による礫層 シルトは含まない
- D-12 盛土 7.5YR4/6 褐色シルト しまりなし 細礫を多量に含む 径 3～10 cmの礫を中量含む
- D-13 石積裏込 7.5YR4/6 褐色シルト しまりなし 径 3～10 cmの礫を多量含む
- D-14 土塁 7.5YR4/6 褐色シルト ややしまりあり 細砂を多量に含む 中礫～粗礫を中量含む
- D-15 土塁 7.5YR4/6 褐色シルト ややしまりあり 細砂を中量に含む D-14層よりも中礫は少ない

- D-16 土塁 7.5YR4/6 褐色シルト ややしまりあり 細砂を中量に含む 径 1～5 cm (中礫～粗礫) を多量含む
- D-17 整地層① 整地層① (科学分析層順)
土塁下位層 7.5YR3/4 暗褐色シルト しまりあり やや粘性あり
カーボンを少量含む 鉄分を斑状に混じりグライ化している
- D-18 整地層① 整地層① (科学分析層順)
土塁下位層 7.5YR3/4 暗褐色シルト しまりあり やや粘性あり カーボン・焼土粒・土器細片を中量含む
- D-19 整地層 7.5YR4/4 褐色シルト しまりあり やや粘性あり カーボン・焼土粒を少量含む
- D-20 土塁下位層 7.5YR3/4 暗褐色シルト しまりあり やや粘性あり カーボンを少量含む 全体的にD-21層が混じっている
- D-21 水性堆積 7.5YR4/6 褐色シルト しまりなし やや粘性あり 堆積構造が確認できないため短期間による水性堆積物
- D-22 粘土層 7.5YR4/4 少し赤味がある褐色シルト しまりなし やや粘性あり 粗砂を中量、径 10～20 cmの礫を少量含む
- D-23 水性堆積 7.5YR4/6 褐色シルト しまりなし やや粘性あり 堆積構造が確認できないため短期間による水性堆積物
- D-24 地山礫層 細礫を基本とするが細砂～粗礫を多量に含む礫層

第73図 令和3年度調査 北側土塁断面図

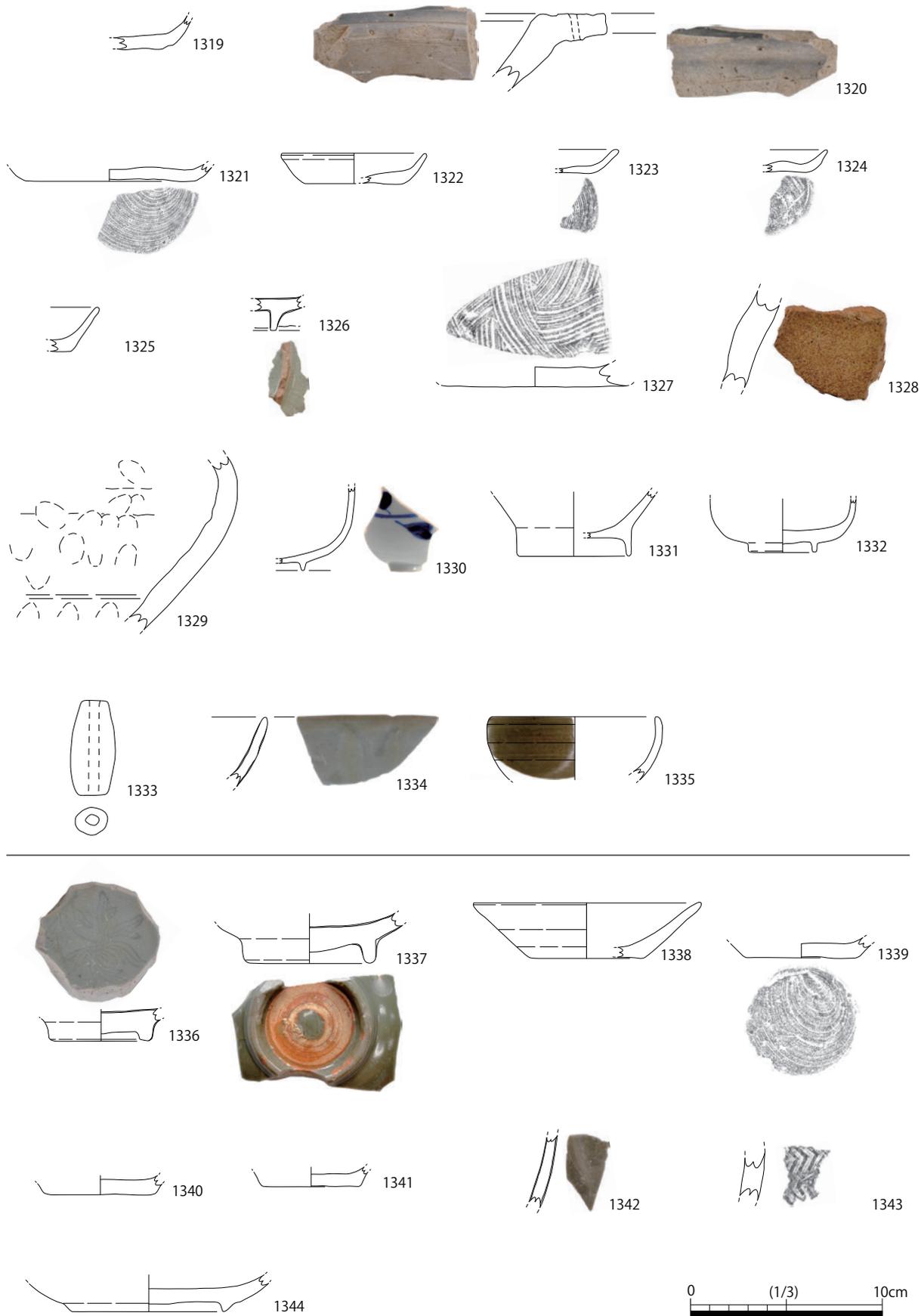


相良頼景館跡 北側掘跡トレンチ (令和3年度)

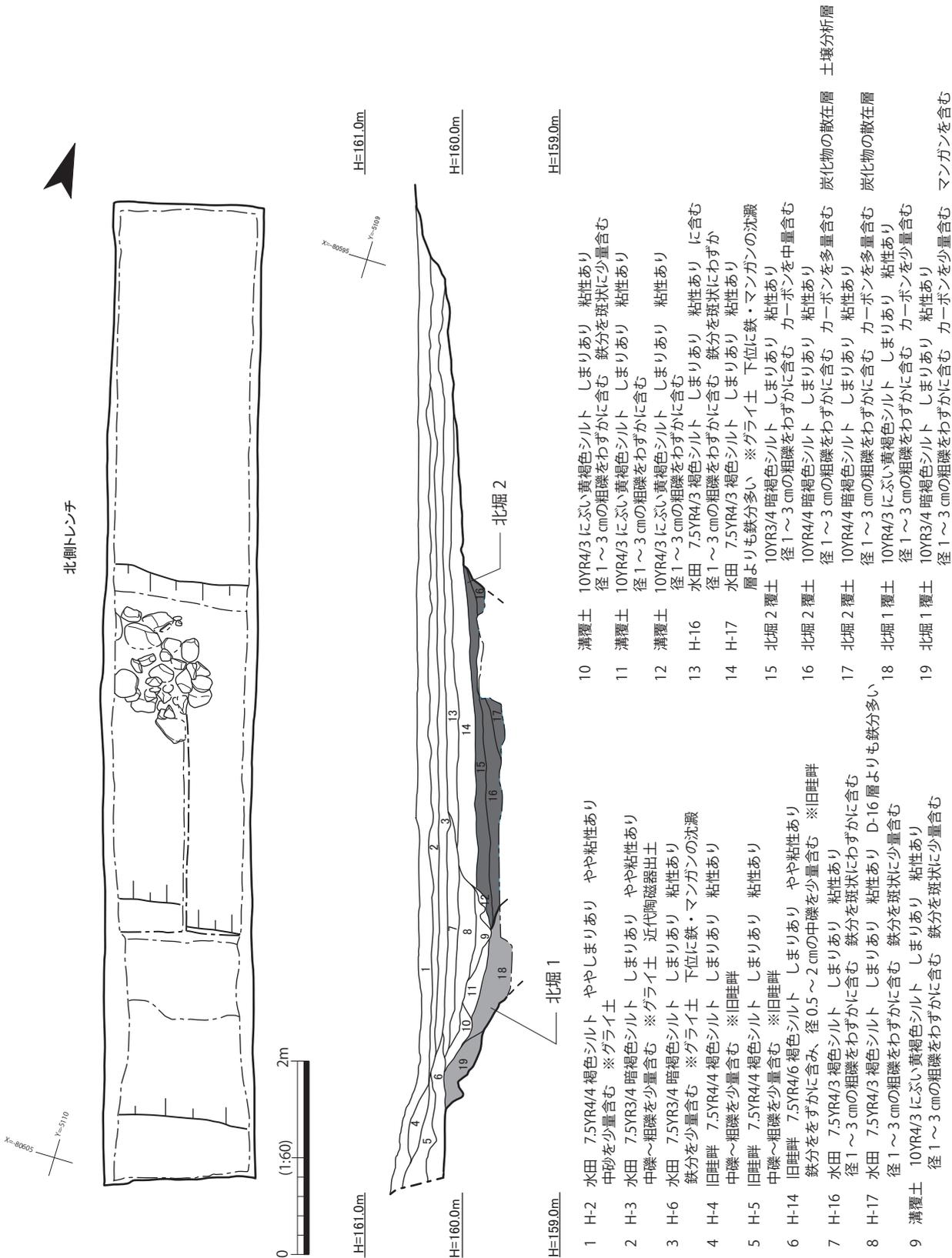
H-1	表土	7.5YR3/4 暗褐色シルト	ややしまりあり	やや粘性あり	
H-2	水田	7.5YR4/4 褐色シルト	ややしまりあり	やや粘性あり	中砂を少量含む ※グライト
H-3	水田	7.5YR3/4 暗褐色シルト	しまりあり	やや粘性あり	中礫～粗礫を少量含む ※グライト 近代陶磁器出土
H-4	旧畦畔	7.5YR4/4 褐色シルト	しまりあり	粘性あり	中礫～粗礫を少量含む ※旧畦畔
H-5	旧畦畔	7.5YR4/4 褐色シルト	しまりあり	粘性あり	中礫～粗礫を少量含む ※旧畦畔
H-6	水田	7.5YR3/4 暗褐色シルト	しまりあり	粘性あり	鉄分を少量含む ※グライト
H-7	水田	7.5YR3/4 暗褐色シルト	しまりあり	やや粘性あり	中礫～粗礫を少量含む ※グライト
H-8	水田	7.5YR3/4 暗褐色シルト	しまりあり	やや粘性あり	中礫～粗礫を少量含む ※グライト
H-9	旧溝覆土	7.5YR3/4 暗褐色シルト	しまりあり	やや粘性あり	鉄分を少量含む ※グライト
H-10	旧溝覆土	7.5YR3/4 暗褐色シルト	しまりあり	やや粘性あり	上位層との境に鉄分沈澱がみられる ※グライト
H-11	旧溝覆土	7.5YR3/4 暗褐色シルト	ややしまりあり	やや粘性あり	鉄分を少量含む ※グライト
H-12	水田	7.5YR3/4 褐色シルト	しまりあり	やや粘性あり	中礫～粗礫を少量含む ※グライト
H-13	旧溝覆土	7.5YR3/4 暗褐色シルト	しまりあり	粘性あり	鉄分を少量含む ※グライト
H-14	旧畦畔	7.5YR4/6 褐色シルト	しまりあり	やや粘性あり	鉄分を少量含む ※旧畦畔
H-15	水田床土	7.5YR4/4 褐色シルト	しまりあり	粘性あり	鉄分を少量含む ※旧畦畔
H-16	水田	7.5YR4/3 褐色シルト	しまりあり	粘性あり	鉄分を少量含む ※グライト
H-17	水田	7.5YR4/3 褐色シルト	しまりあり	粘性あり	鉄分を少量含む ※グライト

H-18	床土	7.5YR4/3 褐色シルト	ややしまりあり	粘性あり	径1～3cmの粗礫を少量含む
H-19	床土鉄分	7.5YR4/3 褐色シルト	ややしまりあり	粘性あり	径1～3cmの粗礫を中量含む
H-20	北堀2 覆土	7.5YR4/6 灰色がかかった褐色粘土	しまりあり	粘性あり	径5～50cmの礫を多量含む、その間に褐色粘土が堆積している。
H-21	北堀1 覆土	7.5YR4/6 褐色シルト	しまりあり	やや粘性あり	径1～3cmの粗礫を少量含む 鉄分を少量含む
H-22	北堀1 覆土	7.5YR4/6 褐色シルト	しまりあり	やや粘性あり	径1～3cmの粗礫をわずかに含む 鉄分を少量含む
H-23	北堀1 覆土	7.5YR4/6 褐色シルト	しまりあり	粘性強い	径1～3cmの粗礫を少量含む
H-24	北堀1 覆土	7.5YR4/6 褐色シルト	ややしまりあり	やや粘性あり	径3～5cmの礫をわずかに含む 鉄分を少量含む カーボンを含む
H-25	北堀1 覆土	7.5YR4/6 褐色シルト	ややしまりあり	やや粘性あり	径3～20cmの礫を少量含む カーボンをわずかに含む
H-26	北堀1 覆土	7.5YR4/6 褐色粘土	しまりあり	粘性あり	径3～30cmの礫を中量含む 鉄分を少量含む カーボンをわずかに含む
H-27	北堀1 覆土	粘土層			(科学分析層順)
H-28	北堀1 覆土	最下層			(科学分析層順)
H-29	北堀1 覆土	最下層			(科学分析層順)
H-30	北堀1 覆土	最下層			(科学分析層順)

第74図 令和3年度調査 北側掘断面図



第 75 図 令和 3 年度調査時の出土遺物



北側トレンチ

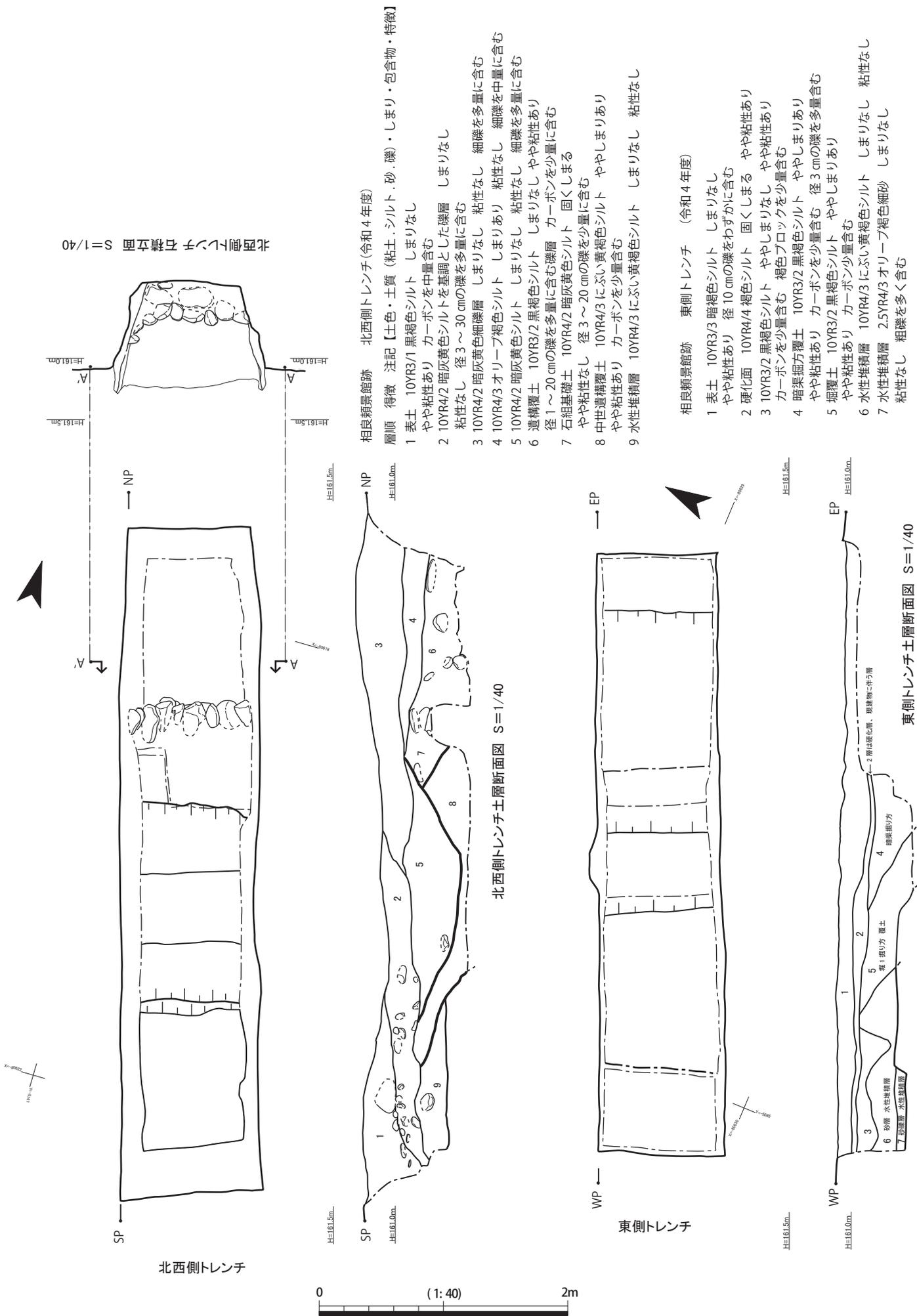
北側掘断面図

令和4年度調査

第76図

- | | |
|--|--|
| <p>1 H-2 水田 7.5YR4/4 褐色シルト ややしりあり やや粘性あり
中砂を少量含む ※グライト</p> <p>2 H-3 水田 7.5YR3/4 暗褐色シルト しまりあり やや粘性あり
中礫～粗礫を少量含む ※グライト 近代陶磁器出土</p> <p>3 H-6 水田 7.5YR3/4 暗褐色シルト しまりあり 粘性あり
鉄分を少量含む ※グライト 下に鉄・マンガンの沈殿</p> <p>4 H-4 旧畦畔 7.5YR4/4 褐色シルト しまりあり 粘性あり
中礫～粗礫を少量含む ※旧畦畔</p> <p>5 H-5 旧畦畔 7.5YR4/4 褐色シルト しまりあり 粘性あり
中礫～粗礫を少量含む ※旧畦畔</p> <p>6 H-14 旧畦畔 7.5YR4/6 褐色シルト しまりあり やや粘性あり
鉄分をわずかに含む、径0.5～2 cmの中礫を少量含む ※旧畦畔</p> <p>7 H-16 水田 7.5YR4/3 褐色シルト しまりあり 粘性あり
径1～3 cmの粗礫をわずかに含む 鉄分を斑状にわずかに含む</p> <p>8 H-17 水田 7.5YR4/3 褐色シルト しまりあり 粘性あり D-16層よりも鉄分多い
径1～3 cmの粗礫をわずかに含む 鉄分を斑状に少量含む</p> <p>9 溝覆土 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性あり
径1～3 cmの粗礫をわずかに含む 鉄分を斑状に少量含む</p> | <p>10 溝覆土 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性あり
径1～3 cmの粗礫をわずかに含む 鉄分を斑状に少量含む</p> <p>11 溝覆土 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性あり
径1～3 cmの粗礫をわずかに含む</p> <p>12 溝覆土 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性あり
径1～3 cmの粗礫をわずかに含む</p> <p>13 H-16 水田 7.5YR4/3 褐色シルト しまりあり 粘性あり にご含む
径1～3 cmの粗礫をわずかに含む 鉄分を斑状にわずかに含む</p> <p>14 H-17 水田 7.5YR4/3 褐色シルト しまりあり 粘性あり
層よりも鉄分多い ※グライト 下に鉄・マンガンの沈殿</p> <p>15 北堀2 覆土 10YR3/4 暗褐色シルト しまりあり 粘性あり
径1～3 cmの粗礫をわずかに含む カーボンを中量含む</p> <p>16 北堀2 覆土 10YR4/4 暗褐色シルト しまりあり 粘性あり
径1～3 cmの粗礫をわずかに含む カーボンを多量含む</p> <p>17 北堀2 覆土 10YR4/4 暗褐色シルト しまりあり 粘性あり
径1～3 cmの粗礫をわずかに含む カーボンを多量含む</p> <p>18 北堀1 覆土 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりあり 粘性あり
径1～3 cmの粗礫をわずかに含む カーボンを少量含む</p> <p>19 北堀1 覆土 10YR3/4 暗褐色シルト しまりあり 粘性あり
径1～3 cmの粗礫をわずかに含む カーボンを少量含む</p> |
|--|--|

炭化物の散在層
炭化物の散在層
炭化物の散在層
土壌分析層



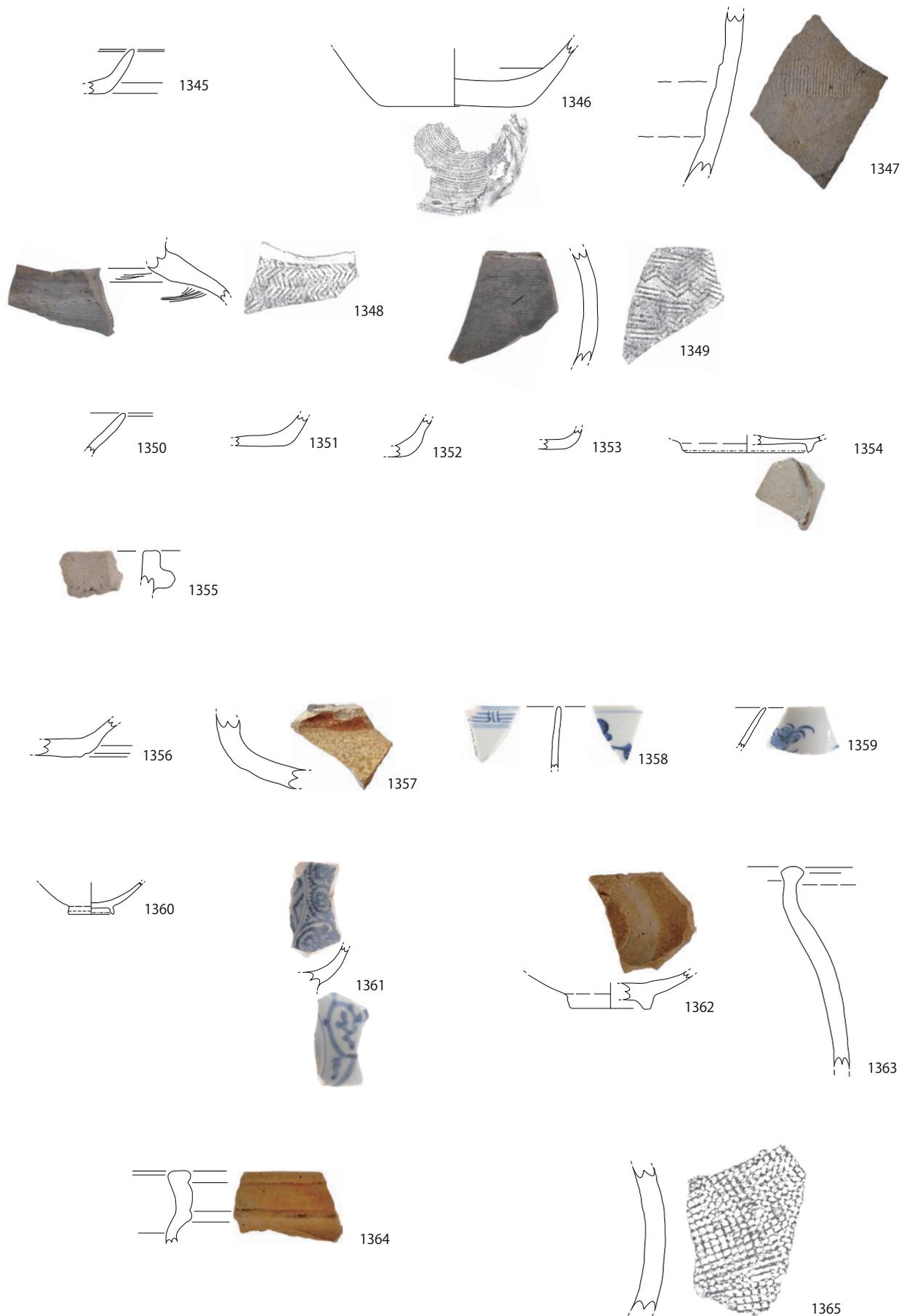
相良頼景館跡 北西側トレンチ(令和4年度)
 層順 得徴 注記【土色・土質(粘土・シルト・砂・礫)・しまり・包合物・特徴】

- 1 表土 10YR3/1 黒褐色シルト しまりなし
 やや粘性あり カーボンを中量含む
- 2 10YR4/2 暗灰黄色シルトを基調とした礫層 しまりなし
 粘性なし 径3~30cmの礫を多量に含む
- 3 10YR4/2 暗灰黄色細礫層 しまりなし 粘性なし 細礫を多量に含む
- 4 10YR4/3 オリーブ褐色シルト しまりあり 粘性なし 細礫を中量に含む
- 5 10YR4/2 暗灰黄色シルト しまりなし 粘性なし 細礫を中量に含む
- 6 遺構覆土 10YR3/2 黒褐色シルト しまりなし やや粘性あり
 径1~20cmの礫を多量に含む礫層 カーボンを少量に含む
- 7 石組基礎土 10YR4/2 暗灰黄色シルト 固くしまる
 やや粘性なし 径3~20cmの礫を少量に含む
- 8 中世遺構覆土 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト ややしまりあり
 やや粘性あり カーボンを少量含む
- 9 水性堆積層 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりなし 粘性なし

相良頼景館跡 東側トレンチ (令和4年度)

- 1 表土 10YR3/3 暗褐色シルト しまりなし
 やや粘性あり 径10cmの礫をわずかに含む
- 2 硬化面 10YR4/4 褐色シルト 固くしまる やや粘性あり
- 3 10YR3/2 黒褐色シルト ややしまりなし やや粘性あり
 カーボンを少量含む 褐色ブロックを少量含む
- 4 暗渠掘方覆土 10YR3/2 黒褐色シルト ややしまりあり
 やや粘性あり カーボンを少量含む 径3cmの礫を多量含む
- 5 掘覆土 10YR3/2 黒褐色シルト ややしまりあり
 やや粘性あり カーボン少量含む
- 6 水性堆積層 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト しまりなし 粘性なし
- 7 水性堆積層 2.5YR4/3 オリーブ褐色細砂 しまりなし
 粘性なし 細礫を多く含む

第77図 令和4年度調査 北西側トレンチ・東側トレンチ



第 78 図 令和 4 年度調査時の出土遺物

第V章 青蓮寺境内の調査

第1節 遺跡の概要

1. 遺跡の概要

青蓮寺は多良木町大字黒肥地字北山下に所在する真言宗智山派の寺院であり、その境内に青蓮寺阿弥陀堂がある。青蓮寺阿弥陀堂は、大正2年4月14日（内務省告示第24号）にて、特別保護建造物の指定を受け、その後、昭和32年6月18日（文化財保護委員会告示第32号）付けて、棟札2枚が附指定となっている。また、阿弥陀堂内に安置されている木造阿弥陀如来及両脇侍立像は大正元年9月3日に重要文化財指定を受けている。

『歴代嗣誠独集覧』『南藤蔓綿録』『求麻外史』には、青蓮寺は鎮西相良氏の祖である相良頼景の後室とされる青蓮尼の位牌所として、永仁6年（1298）に多良木家の相良頼宗によって草創されたと伝えられる。また、青蓮寺が草創される3年前の永仁3年（1295）に多良木家の相良頼宗が相良頼景の廟を建て、阿弥陀三尊を祀ったとの記載がある。堂内に安置された阿弥陀三尊像の両脇侍の足の柄には永仁3年（1295）の銘があり、これを証左する。阿弥陀三尊は院派仏師である法印院玄の作である。

青蓮寺境内地には、阿弥陀堂の北側斜面に県指定史跡である「青蓮寺古塔碑群」が所在する。



（昭和30年代宮元尚氏撮影）

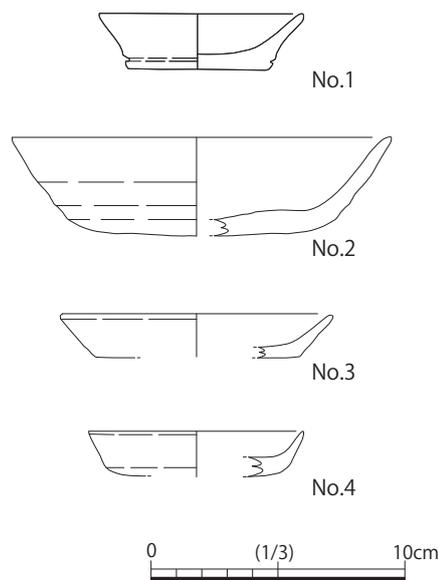
2. 青蓮寺阿弥陀堂の履歴（建築学的見地での履歴表）

平成6年度から平成8年度にかけて、青蓮寺阿弥陀堂の解体修理が実施された。その際の調査結果を次に記す。

天文11年修理時の棟札裏面には、「嘉吉3年」「天文11年」と、ともに「再興」との記述が認められている。建築学的見地から、現在の阿弥陀堂の建立年代としては、嘉吉3年（1443）が妥当であると考えられている。しかし、『歴代嗣誠独集覧』に記載ある阿弥陀三尊を祀る廟の痕跡として、須弥壇の部材に転用部材である正面と東面の上框・中框、上段の束、格狭間板と盲連子板が転用されている。これらは鎌倉時代後期の様式である。ま

た、寺に保管されてあった須弥壇高欄の通櫓も、その様式から、鎌倉時代後期のものと解釈されている。建築学的見地からの青蓮寺阿弥陀堂の変遷過程は、第4表の通りである。

この解体修理時の基礎工事根切りに伴い確認調査が行われ、土師器が出土している。修理報告書では、土師器の坏1点、小皿3点が掲載されている。今回、報告書をもとに再編集し、参考資料として次に掲載する。



青蓮寺出土土器

No.	口径	底径	器高	色調	底部
No.1	7.8cm	4.8cm	1.8cm	淡茶褐色	糸切
No.2	12.8cm	7.0cm	3.8cm	淡茶褐色	糸切
No.3	9.5cm	6.8cm	1.4cm	淡茶褐色	糸切
No.4	7.1cm	5.5cm	1.5cm	淡茶褐色	糸切

【参考文献】

宗教法人青蓮寺 文化財建造物保存技術協会編 1996『重要文化財青蓮寺阿弥陀堂保存修理工事報告書』

3. 平成25年度下水道再設置時の調査

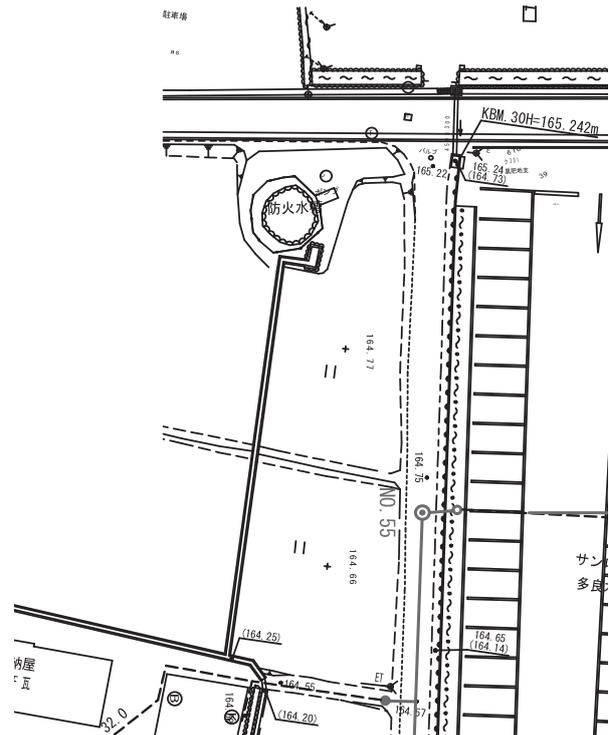
平成25年7月11日、下水道工事に伴い立会している。県道44号線（人吉水上線）に埋設された下水道管の更新工事である。包含層などへの影響は無かった。本工事の掘削に伴い、土層の状況を確認した。その結果、青蓮寺阿弥陀堂の中軸線（参道）から西側へ15.5mのところで南北方向に走る溝を表土から約80cm下で確認した。溝幅は約2m、深さ1mである。

4. 平成27年度下水道設置工事時の調査

平成27年9月8日、マンホール設置に伴い立会している。現在の道路から約70cm下に旧路面を確認した。旧路面は暗褐色シルトで、硬くしまっている。



平成25年度下水道再設置時の調査



平成27年度下水道設置工事時の調査

5. 平成28年度の青蓮寺阿彌陀堂保存修理事業に伴う確認調査

平成28年8月1日付け28青蓮寺第6号にて法93条の埋蔵文化財の届出があった。耐震・耐風対策のため、アンカーウェイトの増設部分にて確認調査を行った。

確認した基本層序は次のとおりである。

【基本層序】

I層：表土

II-1層：黒色シルト Hue7.5YR2/1 5mmの石礫を少量含む 粘性あり しまりややあり

II-2層：黒色シルト Hue7.5YR2/1 粘性あり しまりややあり

II-3層：黒褐色シルト Hue7.5YR2/2 1cm～2cmのアカホヤブロックを少量含む 粘性あり しまりややあり

III層：アカホヤ 黄褐色シルト Hue10YR5/8 2cm大の黒いブロックを少量含む 粘性あり しまりややあり

IV層：黒褐色シルト Hue10YR2/2 1mm大のアカホヤ粒子を極少含む 粘性ややあり しまりややあり

V層：黒褐色シルト Hue10YR3/2 1cm大の黒いブロックを少量含む 粘性ややあり しまりややあり

VI層：シラスの二次堆積 におい黄澄シルト Hue10YR5/4 5mm大の礫を少量含む 粘性ややあり しまりややあり

VII層：シラスの二次堆積 におい黄澄シルト

Hue10YR6/4 1cm～2cm大の礫を少量含む 粘性ややあり しまりややあり

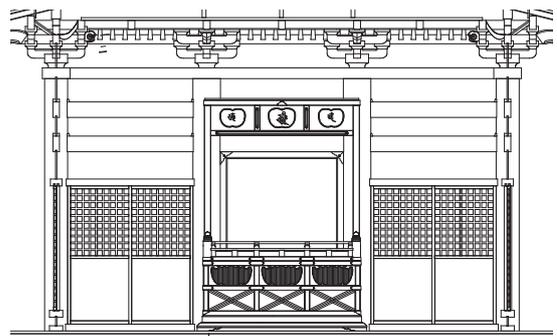
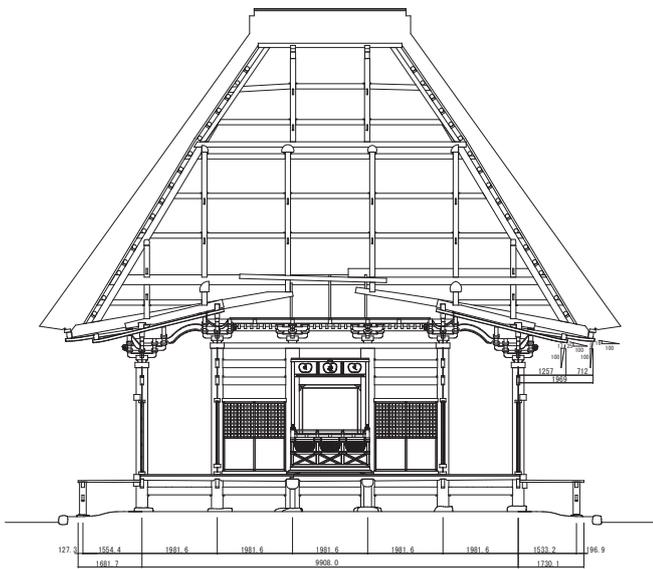
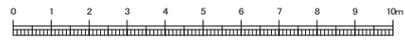
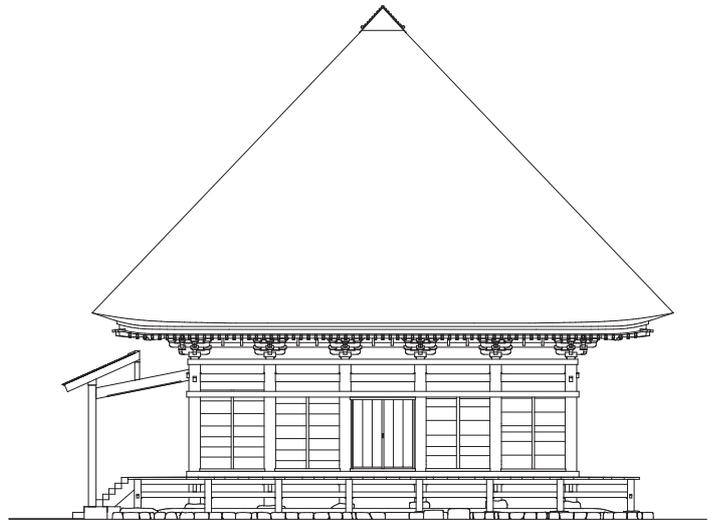
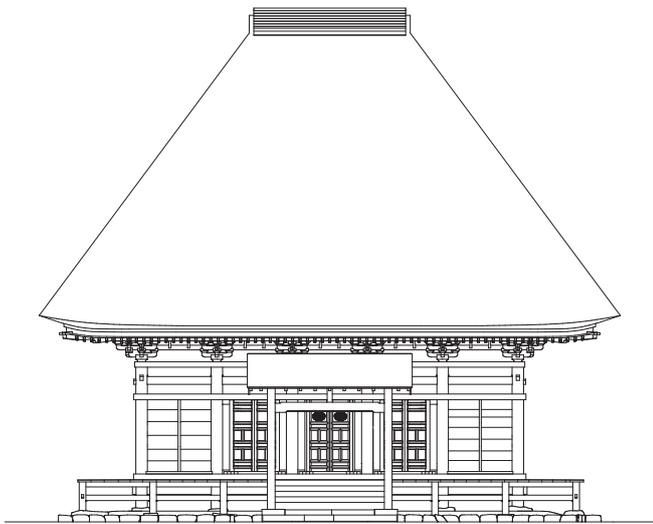
VIII層：河川の二次堆積 におい黄澄シルト

Hue10YR6/4 1cm～5cm大の礫を多く含む 粘性ややあり しまりややあり

アンカーウェイト設置場所(A)では、III層(アカホヤ層)上面からピット1基を確認した。遺物の出土は無かった。ピット覆土はII-3層である。アンカーウェイト設置場所(B)では、III層(アカホヤ層)上面からピット1基を確認した。遺物の出土は無かった。このピット覆土はII-3層である。アンカーウェイト設置場所(C)では、III層(アカホヤ層)上面からピット1基を確認した。遺物の出土は無かった。アンカーウェイト設置場所(D)では、遺構・遺物ともに無かった。



第 79 図 青蓮寺境内地形図

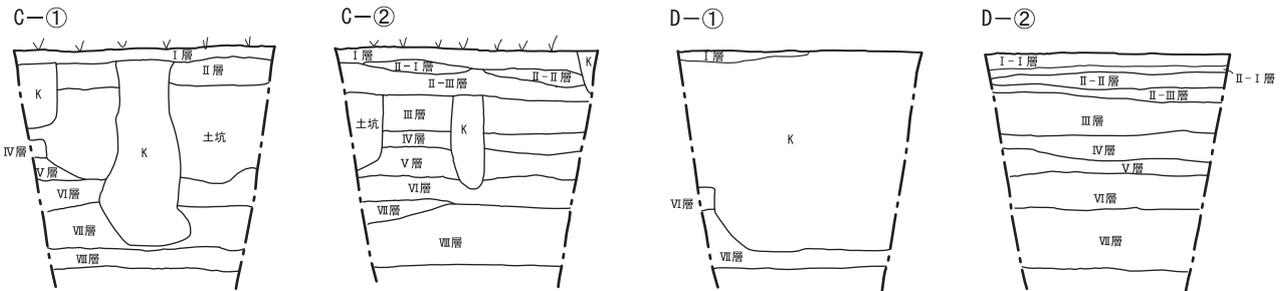
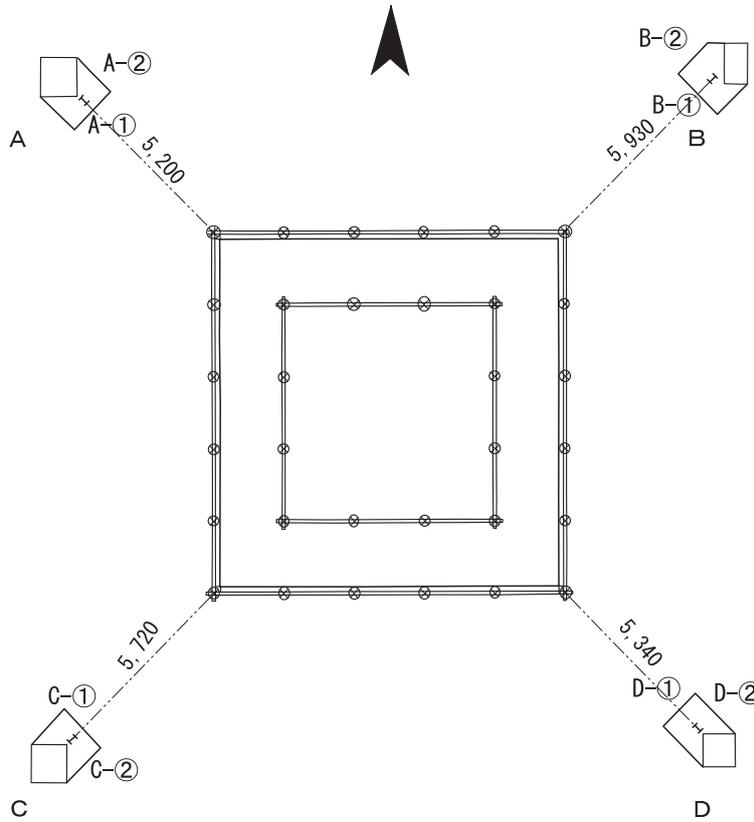
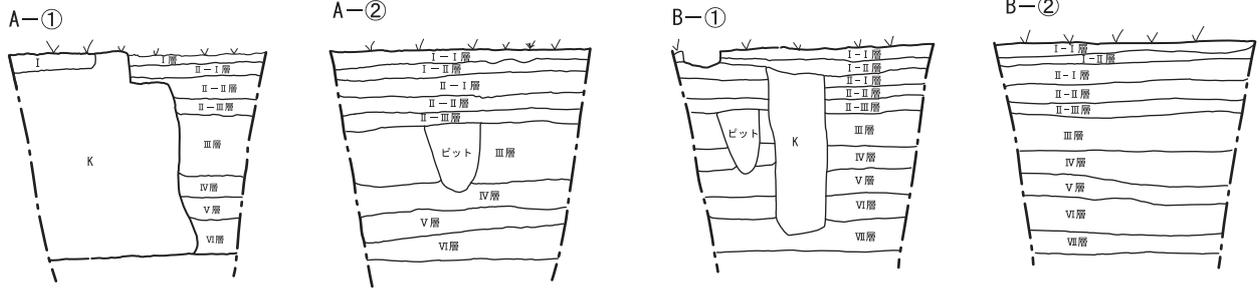


第 80 图 青蓮寺阿弥陀堂立面图

第4表 青蓮寺阿弥陀堂変遷表

面所	屋根	小屋組	軒廻り・組物	軸部	向拝	縁・木階	床組	須弥壇	間仕切・建具・造作	備考
年代 永仁 3 (1295)										歴代副誠祖集覧 南藤盛綱録 求麻外史 天文11年棟札裏面
相良頼景の廟										
嘉吉 3 (1443) 現在の阿弥陀堂の 建立 永仁 + 148	・茅葺	・投首組	・2軒 ・1間 (6.54尺) 12支 ・軒支輪 3支に1本 ・化粧隅木1木造 ・出組 (廻り内部側は二手先)	・柱、足固貫、切目長押、内法貫、飛貫、右輪 ・5間4面全て等間 ・柱足元礎石に光り付け	・なし	・切目縁、正面木階付 ・縁束 (7寸角)、水貫、縁葛、縁板掛 ・欄板貫、縁板	・大引 (身舎中央足固貫造り出し)、根太、床版	・前身建物のものを転用 ・地覆を2段追加 ・取替材、新補材に漆塗り	・御廻り正面中央3間棧唐戸間開き2枚建て？ ・御面中央間板戸引違い2枚建て？ ・背面中央間板戸間開き2枚建て？ ・内外棟境中央間格子戸嵌め殺し1枚建て？ ・中央間脇間格子戸引違い2枚建て？ ・内側脇間格子戸引違い2枚建て？ ・内側後陣境 ・腰付格子戸引違い2枚建て？ ・脇陣後陣境 ・格子戸引違い2枚建て？	・天文11年棟札裏面追記
永正 7 (1510) 永仁 + 215 喜吉 + 67	・屋根葺替 (2回目?)			・御廻り外部、正面内 部側内法長押設置						※歴代副誠祖集覧 正面御廻り 内部御内法 長押下端に 「永正11年」の墨書 棟札
天文 11 (1542) 永仁 + 247 喜吉 + 99 永正 + 32 万治 元 (1658) 永仁 + 363 喜吉 + 215 天文 + 116 元禄 2 (1689) 永仁 + 394 喜吉 + 246 天文 + 147 万治 + 31	・屋根葺替 (3回目?) ・屋根葺替 (6回目?) ・屋根葺替 (7回目?)	・小屋組補修? ・小屋組補修? ・小屋組補修?	・背面丸桁取り替え ・背面大斗取り替え ・軒廻り小修理?	・縁束、縁葛取り替え ・縁廻り補修?				・厨子設置須弥壇を現状の高にしました? ・厨子設置須弥壇を現状の高にしました?	・壁板取替、板押さえを設置 ・壁板取替・補修? ・壁板取替・補修?	※天文11年 棟札裏面追記
元禄 元 (1741) 永仁 + 446 喜吉 + 298 天文 + 199 元禄 + 52 宝暦 4 (1754) 喜吉 + 311 天文 + 212 万治 + 96 元禄 + 65 宝暦 + 13 明治 15 (1882) 永仁 + 587 喜吉 + 439 宝暦 + 128	・屋根葺替 (9回目?) ・屋根葺替 (10回目?) ・屋根葺替 (14回目?)	・投首組から小屋 組に変更 ・小屋組補修?	・丸桁、地垂木、木負、 飛檐垂木、茅負、真甲、 化粧隅木、軒支輪裏 板取替、軒支輪補修	・柱根継・足固貫一部取 替 ・内法長押、切目長押背 面を除き取替 ・修理では往傾斜を是正 していない	・向拝新設 ・屋根葺替	・縁廻り改修縁束を等間に配置障子 首を使わず縁板掛を縁葛まで伸ばす 縁束、縁束貫、縁葛縁板掛取替 と配置換え	・根太の 一部取替 と配置換え	・須弥壇天端に 段を付けた ・厨子の正面羽 目板を3枚に し、格子戸的な 建具を撤去	・御廻り正面中央3間を棧唐戸間開き2枚建 てとした ・板壁取替、補修 ・北東隅に仏壇新設 ・御廻り背面西端間に窓を設け、板戸引違い 2枚建てとした	※向拝梁架の墨書 ※宝暦4年棟札、墨書 解体調査の結果

年代	箇所	屋根	小屋組	軒廻り・組物	軸部	向拝	縁・木階	床組	須弥壇	間仕切・建具・造作	備考
明治中期 ～後期		・屋根葺替 (15回目?)								・正面御廻り両端の板壁に格子窓を設け取り外し式の板戸を入れた ・御廻り御前中央間の板戸を取り替えた ・御廻り西面北端間に窓を開け上げ下げ式の板戸を入れた ・御廻り背面西端間の窓に格子を設けた ・背面入側中央3間を梁屋として間仕切り畳敷きにして、床に砂を切る	※明治16年の記録解体調査の結果
大正年間									・高欄取替		※智海住職談
昭和 24 (1949)										・正面御廻り 中央3間棧唐戸 内側に引違腰付 明窓子設置 ・背面入側に位牌段新設	※智海住職談
永仁 +654 喜吉 +506 宝暦 +195 昭和 27 (1952)											
喜吉 509 宝暦 +198											
昭和 30 (1955)		・屋根葺替 (17回目?)		・裏甲修理						・敷・鴨居一部取替、 補修(無目取居、幕 板含む)	※国庫補助事業 工事主任 岩崎久太郎
永仁 +660 喜吉 +512 天文 +413 宝暦 +201 明治 15+73											
昭和 44 (1969)		・避雷針設置	・スボット感知器 設置	・空気管付設	・空気管付設	・空気管付設					※国庫補助事業
昭和 57 (1982)						・向拝屋根 葺替 土居葺を ルーフィング に変更 ・軒先野地 板、垂木 葺先修理					※智海住職談
喜吉 +539 寛保 +241 宝暦 +228 明治 15+100											
平成 6 (1994)											※国庫補助事業 解体修理
永仁 +699 喜吉 +551 寛保 +253 宝暦 +240											
平成 28 (2016)		・屋根葺替 (19回目?) ・耐震補強									※国庫補助事業
永仁 +721 喜吉 +573 寛保 +275 宝暦 +262											※国庫補助事業
令和 2 (2020)		・屋根部分 修理									※町補助事業
永仁 +725 喜吉 +577 寛保 +279 宝暦 +266											



第 81 図 アンカーウエイト掘削時の土層図

第2節 青蓮寺古塔碑群の調査

1. 石造物の調査（第82図・第5表）

青蓮寺古塔碑群は、熊本県の史跡指定（昭和44年3月20日）を受けている。青蓮寺古塔碑群は『多良木町史（昭和55年刊行）』編纂時に、町史編纂委員会による悉皆調査が行われている。今回、『多良木町史』を基礎資料とし、再度、石造物の個別調書を作成した。

古塔碑群の中心には壇上積基壇が配置され、その周囲に石造物が並ぶ。壇上積基壇の上には五輪塔が7基配置されている。昭和37年に熊本県警察本部警務部教養課が編集・発行した『管内実態調査書一城南篇一』には「八基の五輪塔が一区画をなし・・・後列右側の一基に蓮寂の二字が深く刻まれ、上相良初代頼景の墓標であることが認められる。八基は頼景より頼氏・頼宗・経頼・頼仲・頼久・頼観の墓標が認められる」との記載がある。このことから、7基の五輪塔は多良木家歴代の当主のものと伝えられていたことがわかる。

五輪塔の規模・形態・梵字の様子から見て、鎌倉後期まで遡ると思われるのは伝頼景塔である。空風輪は後補である。火輪・水輪・地輪には基準線を縦に刻み、面に対し梵字を薬研に大きく刻んでいる。火輪の軒は強く反る。

壇上積基壇に近い西側に、永留長統・為統らの五輪塔が並び、それらの西側に戦国期～江戸初期の相良氏当主などの五輪塔が配置されている。

2. 壇上積基壇の調査

阿弥陀堂裏の南向き傾斜面に段造成を行い、そこに壇上積基壇が設置されている。阿弥陀堂の中軸線上に配置され、堂裏側から石段を登った正面である。石段はその構成石材に残る矢穴から江戸期の整備と考えられる。

昭和16年に刊行された『球磨郡誌』の掲載写真と、昭和30年代に宮元尚氏（元多良木町長）が撮影した写真、現在の状況を比較しても大きな変化はない。

今回の調査は、掘削を伴うものではないため、現状観察の結果を記載する。

基壇北面は完全に埋もれ、東・西面は半分埋もれている。基壇を構成する石材は、すべて加久藤溶結凝灰岩である。

地覆石・東石・羽目石はほぼ完存している。基壇は、東西3間で2.9m、南北3間で2.3mの規模である。地覆石は南面のみ露出している。南面で確認できる中央と左側の羽目石は、幅67cm、高さ59cm、厚さ12cmである。右側の羽目石は2石で、幅78cm、厚さ22cmで、規格が中央と左側と比べ異なる。基壇西面の羽目石は幅45cmである。羽目石の両側面には継手構造はない。東石は隅と内部では仕口構造が異なる。南面の両隅の東石は、25.5cm角、長さは59cmである。羽目石との継手は、

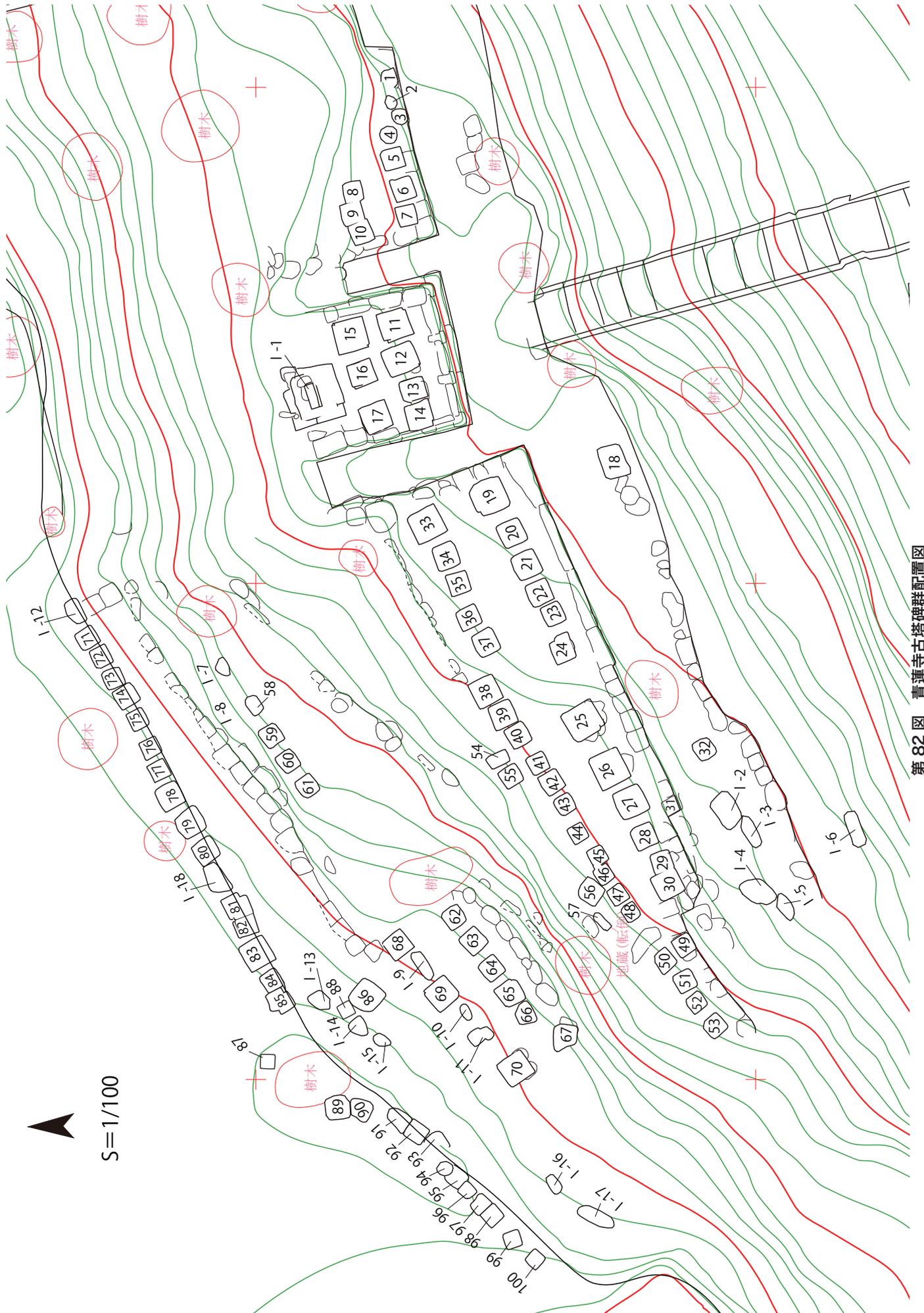
2段の段形となり、この段に羽目石が組まれる。隅東以外の東石は、断面が「T」字形で、正面幅25cm、高さ59cm、厚さ（奥行）33cmである。両側で羽目石が組まれる。葛石と思われるのは基壇上の南東部に遺残しているものと考えられる。敷石はなく、現在の五輪塔は玉石の上に設置されている。



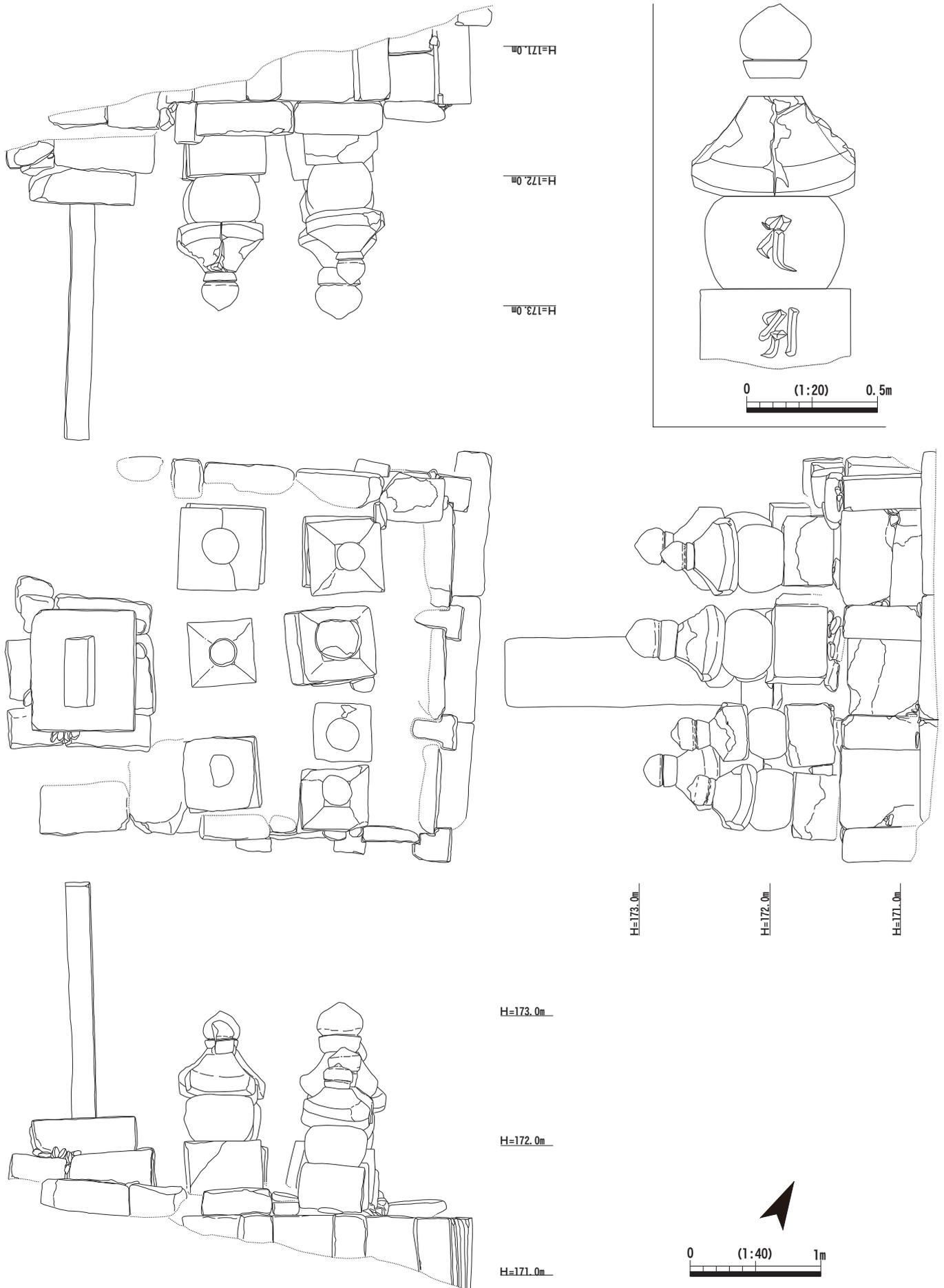
（球磨郡誌より）



（昭和30年代 宮元尚氏撮影）



第 82 图 青蓮寺古塔碑群配置图



第 83 図 壇上積基壇実測図及びび頼景塔実測図

第5表 青蓮寺古塔碑群一覧表

No.	年代等	地輪	水輪	火輪	空風輪	紀年銘等		備考
						部位	紀年銘	
1	不明	-	○	○	-		火輪の上に水輪	
2	不明	-	○	○	-		火輪の上に水輪	
3	不明	○	○	-	○		うしろに火輪有り	
4	天文21年(1552)	○	○	-	○	正面に梵字(アー) 右に「奉爲運香禪 □」左に「天文廿一年壬子八月十日□」	地輪	総高97cm 地輪高23.5cm 幅30.5cm
5		○	○	○	○			総高110.5cm 地輪高24cm 幅35cm
6		○	○	○	○			総高119.5cm 地輪高25cm 幅35cm ※水輪に欠損有り
7		○	○	○	○			総高100.5cm 地輪高24cm 幅36cm
8		○	○	○	○			総高97cm 地輪高26cm 幅36cm ※空風輪に欠損有り
9	享祿3年(1530)	○	○	○	○	正面右に「□」左に「享祿三年庚寅正 □」	地輪	総高96cm 地輪高28cm 幅36cm
10		○	○	○	○	正面中央下「孝子□□」右に「□義禪尼」左に「□五月二十□日」	地輪	総高95.5cm 地輪高29.5cm 幅35cm
11	壇上積基壇上の設置	○	○	○	○	五大種子の四軀		総高134.5cm 地輪高37cm 幅54cm
12	壇上積基壇上の設置	○	○	○	○			総高151cm 地輪高40cm 幅54.5cm
13	壇上積基壇上の設置	○	○	○	○			総高122cm 地輪高33cm 幅47cm
14	壇上積基壇上の設置 伝頼景塔	○	○	○	○	五大種子の四軀		総高114cm 地輪高34cm 幅49.5cm ※火輪に欠損有り、空風輪は後補
15	壇上積基壇上の設置	○	○	○	○	地輪中央に梵字(阿克)の 右に「蓮寂」と追刻。五大種子の四軀	地輪	「蓮寂」は鎮西相良氏の祖・相良頼景
16	壇上積基壇上の設置	○	○	○	○	五大種子の四軀		総高120cm 地輪高33cm 幅44.5cm
17	壇上積基壇上の設置	○	○	○	○	五大種子の四軀		総高131.5cm 地輪高40cm 幅54cm
18	大永3年(1523)	○	-	○	○	正面中央に梵字(アー) 右に「逆修勢懸」左に、「大永三年未癸八月十五日」	地輪	欠損部分大 地輪側に水輪1個、火輪2個がある
19	応仁2年(1468) 伝長統塔	○	○	○	○	正面中央に梵字(アー) 右に「□ 大禪定□」左に、應仁二戊子二月廿三日」	地輪	伝永留長統塔 総高150.5cm 地輪高43cm 幅55cm
20	大永3年(1523)	○	○	○	○	正面中央に梵字(アー) 右に「重悦妙壽大姉」左に「大永三天癸未六月十五日」	地輪	総高109.5cm 地輪高30cm 幅42cm ※水輪に欠損有り
21		○	○	○	○	正面中央に梵字(アー) 右に「奉天林昌運 □」左に「□ 年□丙十一月廿□」	地輪	総高119.0cm 地輪高30cm 幅45cm
22	享祿2年(1529)	○	○	○	○	正面中央に梵字(アー) 右に「奉修永天 □」左に「享祿二己丑六月四日」	地輪	総高107.5cm 地輪高26cm 幅38cm
23		○	○	○	○			総高112.5cm 地輪高29cm 幅34cm
24	天文9年(1540)	○	○	○	○	正面中央に梵字(アー) 右に「運實禪定門」左に「天文九年庚子三月十日□」	地輪	総高108cm 地輪高31cm 幅41cm
25	寛永13年(1636)	○	○	○	○	正面中央に梵字(アー) 右に「器祥院臨高武儀」左に「天徳玄高大居士」 右側面中央に梵字(ア) 右に「於東関江戸幕下」左に「入寂六十三歳」 左側面中央に梵字(アン) 右に「寛永十三丙子載」左に「六月十三日」 五大種子の四軀	地輪	総高154cm 地輪高44cm 幅57cm 人吉藩主・相良頼寛の供養塔 頼寛は、寛文七年六月廿九日入吉城に於て逝去、願成寺廟所に葬られている。有暹とは青蓮寺20代住職の事 ※運華座を備え、その上に五輪塔が建つ
26	寛文7年(1667)	○	○	○	○	正面中央に梵字(アー) 右に「天真院殿」左に「本源女性大居士」 裏面(北方)中央下に「青蓮寺有暹多良木衆中」と二行に刻し、右に「寛文七年丁未、左に「六月廿九日」 五大種子の四軀	地輪	総高156.5cm 地輪高11cm 幅49cm 人吉藩主・相良頼寛の供養塔 頼寛は、寛文七年六月廿九日入吉城に於て逝去、願成寺廟所に葬られている。有暹とは青蓮寺20代住職の事 ※運華座を備え、その上に五輪塔が建つ
27	天正11年(1583)	○	○	○	○	正面中央に梵字(アー) 右に「奉爲越江運芳居士」左に「天正十一年癸未七月十日」 五大種子の四軀	地輪	総高162cm 地輪高43cm 幅46cm 相良義陽の供養塔 義陽は、天正九年十二月二日響野原に甲斐宗運と戦って死す

No	年代等	地輪	水輪	火輪	空風輪	部位	紀年銘等		備考
							紀年銘		
28	永正11年(1514)	○	○	○	○	地輪	正面中央に梵字(ア一) 右に「歸空哉徳妙善禪定尼 □」 左に「于時永正十一年甲戌三月廿三日」	総高130cm 地輪高28cm 幅30.5cm	
29		○	○	○	○				総高107.5cm 地輪高29cm 幅40cm 左側に地藏菩薩(首無し)がある
30	天正18年(1590)	○	○	○	○	地輪	正面中央に梵字(ア一) 右に「地盛運容居士」 左に「天正十八年卯月日」	総高120.5cm 地輪高36cm 幅43cm	
31	天文8年(1539)	○	-	-	-	地輪	正面中央に梵字(ア一) 右に「奉為 精窓□□禪定門」 左に「天文八己亥孝子」		
32		○	-	-	-				
33	明応9年(1500)	○	○	○	○	地輪	正面中央に梵字(ア一) 右に「西華運船大禪定門」 左に「于時明應九年庚申六月四日」	総高144cm 地輪高35.5cm 幅58.5cm 相良為統の供養塔「求麻外史」に「明應九年六月四日に薨す、無量壽院に葬る」とある	
34	明応9年(1500)	○	○	○	○	地輪	正面中央に梵字(ア一) 右に「□ 響運祐 □」 左に「明應九年庚申十月廿四日」 五大種子の四版	総高110cm 地輪高38cm 幅45cm	
35	天文4年(1535)	○	○	○	○	地輪	正面中央に梵字(ア一) 右に「太谷運世大禪定門」 左に「天文四年乙未八月廿八日」	総高101cm 地輪高27cm 幅34.5cm 相良長祇の供養塔「求麻外史」に、「大永五年一月八日自殺 梅花筒口宝壽寺に葬る」とある	
36	弘治2年(1556)	○	○	○	○	地輪	正面中央に梵字(ア一) 右に「奉爲了徳永幸公」 左に「弘治二年七月日」	総高103cm 地輪高31cm 幅41cm 相良義滋の供養塔「求麻外史」に「天文十五年八月廿五日鷹峰城に薨す八代運乗院に葬る」とある	
37	弘治2年(1556)	○	○	○	○	地輪	正面中央に梵字(ア一) 右に「奉爲兆山運慶」 左に「弘治二天六月日」	総高106cm 地輪高41cm 相良晴広の供養塔「求麻外史」に「弘治元年八月十二日、鷹峰城に薨す」とある	
38	文明19年(1487)	○	○	○	○	地輪	正面中央に梵字(ア一) 右に「威風上虎」 左に「文明十九年丁未六月三十日」	総高139cm 地輪高39.5cm 幅53.5cm 相良長統の四男・頼泰の供養塔	
39	文明19年(1487)	○	○	○	○	地輪	正面中央に梵字(ア一) 右に「賀呈道慶」 左に「文明十九年丁未六月三十日」	総高130cm 地輪高35.5cm 幅44.5cm 頼泰長男・長泰(15才)の供養塔	
40	室町時代と推定	○	○	○	○	地輪	正面中央に梵字(ア一) 右に「敬白、奉造立□輪 □、□也」 左に「敬白、□ 十一日」	総高102.5cm 地輪高31cm 幅41cm	※父と共に誅せられる
41		○	○	○	○		銘文なし	総高92cm 地輪高26cm 幅44cm	
42		○	○	○	○			総高78cm 地輪高14.5cm 幅35.5cm	
43		○	○	○	○			総高77.5cm 地輪高15.5cm 幅40.5cm	
44		○	○	○	○			総高70.5cm 地輪高20cm 幅37cm	
45	永正9年(1512)	○	○	○	○	地輪	正面右に「□月長善禪定□」 左に「永正九年壬申八月□」	総高80cm 地輪高19.5cm 幅39.5cm	
46	大永3年(1523)	○	○	○	○	地輪	正面中央に梵字(ア一) 右方に銘あるも磨滅し判読し難い 左に「大永三年癸未三月廿三日」		左側に地藏菩薩像(首なし)を安置
47		○	-	-	-			地輪高24cm 幅32cm 首なし地藏が乗る	
48		○	-	-	-				
49		○	○	○	○			総高98cm 地輪高24.5cm 幅33.5cm	
50		○	○	○	○			総高87cm 地輪高20.5cm 幅32cm	
51		○	○	○	○			総高93cm 地輪高25cm 幅34cm	
52		○	○	○	○			総高75.5cm 地輪高17.5cm 幅40cm	
53		○	○	○	-			地輪高19cm 幅38cm	
54		○	○	○	○			総高98.5cm 地輪高23.5cm 幅38cm ※欠損部分大	
55		○	○	○	○			総高84cm 地輪高20.5cm 幅37cm	
56		-	-	○	-				別の首なし地藏が転がる
57		-	-	○	-				前に首なし地藏が転がる

No.	年代等	地輪	水輪	火輪	空風輪	紀年銘等		備考
						部位	紀年銘	
58		○	○	○	○			総高 77cm 地輪高 20cm 幅 36cm
59		○	○	○	○			総高 80.5cm 地輪高 21cm 幅 36cm
60	永禄5年(1562)	○	○	○	○		正面中央に梵字(ア一) 右に「敬白、奉造立五輪 □、逆修善根□」と三行に刻み 左に「奉為 □、永禄五 □」と二行に刻む	総高 101.5cm 地輪高 28.5cm 幅 33cm
61	永禄5年(1562)?	○	○	○	○		正面中央に梵字(ア一) 右に「敬白、奉造立五輪 □、逆修善根□」と三行に刻み 左に「奉為 □、永禄 □」と二行に刻む ※欠損の為永禄のみ解読不可	総高 95.5cm 地輪高 25.5cm 幅 33cm ※銘文の様式から №67 と同年月に造立したものとと思われる 地輪欠損有り
62		○	○	○	○			総高 83.5cm 地輪高 16cm 幅 29cm ※空風輪の欠損大
63	室町時代と推定	○	○	○	○		正面中央に梵字(ア一) 右に「敬白□□□」 左の銘名は摩滅し判読不可	総高 84.4cm 地輪高 15.5cm 幅 39cm ※水輪、火輪が逆転
64	地輪 天正年代(1573~1591) 水輪 永禄12年(1569)	○	○	○	○		地輪 正面中央に梵字(ア一) 右に「花山林忠禪□□」 左に「天正 □□」 水輪 正面中央に梵字(バ一) 右に「奉為賢[運]□□禪定門」 左に「永禄十二己巳六月吉日 施主 敬白」	総高 96cm 地輪高 24.5cm 幅 36cm
65		○	○	○	○			総高 100cm 地輪高 25cm 幅 40cm
66		-	-	○	-			全体の欠損が大き
67		-	-	○	-			
68		○	○	○	○			総高 90cm 地輪高 20cm 幅 49cm ※欠損部大
69		○	○	○	○			総高 135cm 地輪高 34cm 幅 48cm ※空輪欠
70		○	-	○	○			総高 114cm 地輪高 34cm 幅 54cm ※水輪欠
71	文明14年(1482)	○	○	○	○		正面の右に「朝賢阿闍梨」 左に「文明十二二年四月九日」	総高 94.5cm 地輪高 29.5cm 幅 36cm ※朝賢は青蓮寺九代住職
72		○	○	○	○			総高 91cm 地輪高 28cm 幅 39cm ※空風地輪欠損部大
73	応仁2年(1468)	○	○	○	○		正面中央に梵字(ア一) 右に「□ 常香禪 □」 左に「應仁二年戊子三月 □□」	総高 112.5cm 地輪高 28cm 幅 34cm ※五輪塔には基礎を備える
74		○	○	○	○			総高 98cm 地輪高 25cm 幅 40.5cm ※各輪欠損部大
75		○	○	○	○			総高 83.5cm 地輪高 19.5cm 幅 35cm
76		○	○	○	○			総高 80.5cm 地輪高 18cm 幅 36.5cm
77	正保4年(1647)	○	○	○	○		正面中央に梵字(ア一) 右に「正保第四年、預修寛福善根主」と二行に刻み 左に「當院主法印政有、十月十八日」と二行にする	総高 89cm 地輪高 26cm 幅 37cm ※政有は青蓮寺 16代住職
78	天文13年(1544)	○	○	○	○		正面中央に梵字(ア一) 右に「傳燈權大僧都朝海」 左に「天文十三年庚辰十二月□□」	総高 129cm 地輪高 32cm 幅 41cm ※朝海は青蓮寺 11代住職
79	天文23年(1554)	○	○	○	○		正面中央に梵字(ア一) 右に「奉為權大僧都法 □□」 左に「天文廿三年八月十七日 □□」	総高 118cm 地輪高 32cm 幅 46cm
80	元和2年(1616)	○	○	○	-		正面中央に梵字(ア一) 右に「傳燈權大僧都」 左に「法印政舜逆修 裏面(北方)の中心に梵字(ア一) 右に「元和第二次丙辰」 左に「十月十八日造立」	総高 105cm 地輪高 28cm 幅 34cm ※政舜は青蓮寺 15代住職
81	慶安年間(1648~1651)	○	○	○	-		正面中央に梵字(ア一) 右に「十六代先師」 左に「勢祐大僧都」 背面(北方)の中心に梵字(ア一) 右に「慶安九年」 左に「十月初四日」と町史にあるが、現在は見えない	総高 107cm 地輪高 26cm 幅 36cm ※1 勢祐は青蓮寺 18代住職
82		○	○	○	○		正面中央に梵字(ア一) 右に「青蓮寺法印堯筭」と町史にあるが、現在は見えない 左に「住寺十七代逆修」	総高 100.5cm 地輪高 26.5cm 幅 32cm ※堯筭は青蓮寺 19代住職
83		○	○	○	○			総高 123.5cm 地輪高 30.5cm 幅 41.5cm ※空風輪欠損大

No	年代等	地輪	水輪	火輪	空風輪	部位	紀年銘等		備考
							紀年銘		
84		○	○	○	-	水輪	水輪のなかに修行門の梵字(パー) 右に「敬白、[奉] 造立五輪一基」と町史にあるが敬白部分が現在見えない 左に「爲奉□□慶天姫□」	総高 104.5cm 地輪高 23cm 幅 35cm	
85		-	-	○	-			総高 70cm 地輪高 23cm 幅 31.5cm	
86		-	-	○	-				
87		-	-	○	-				
88		○	-	-	-				
89		○	-	-	-				
90		○	-	-	-				
91		○	-	-	-				
92		○	-	-	-				
93		-	-	○	-				
94		○	-	-	-	空輪が風輪がどちらかが乗っている			
95		-	-	○	-				
96		-	-	○	-				
97		-	-	○	-				
98		-	-	○	-				
99		-	-	○	-				
100		-	-	○	-				

No.	年代	紀年銘等	備考
I-1	明治21年(1888)	左側面：亀田山青蓮寺四十五代 大法印有敬 石工大村永田吉村□□ 表面：大職冠鎌足藤原中臣二十二代後□藤原 頂部に胎藏界大日如來の種子(アーシク)を刻み、その下に「奉爲秋月明知禪定尼靈位」 その右と左に「寛文十三年七月□四日敬白」	地上高174cm 地上高131.5cm 上部幅31.5cm 中央幅59cm 下部幅61cm 厚み21.5cm 地上高140cm 上部幅35cm 中央幅54cm 下部幅62cm 厚み29cm 地上高145cm 上部幅33cm 中央幅46cm 下部幅50cm 厚み26cm 地上高116.5cm 上部幅42.5cm 中央幅46cm 下部幅49cm 厚み9.3cm 地上高181.7cm 上部幅29cm 中央幅52cm 下部幅59cm 厚み14cm 地上高68cm 下部幅37cm 厚み15cm 地上高36cm 下部幅27cm 厚み16cm 地上高85cm 下部幅61cm 厚み19cm 地上高105.5cm 上部幅24cm 中央幅29cm 下部幅31cm 厚み10cm 地上高91cm 上部幅20cm 下部幅20cm 厚み18cm 総高146.5cm 上部幅43cm 中央幅44cm 下部幅46.5cm 厚み17cm ※頭部形状は三角形 地上高117.5cm 上部幅28cm 中央幅35cm 下部幅40cm 厚み27cm 地上高64cm 上部幅20cm 中央幅37cm 下部幅43cm 地上高52cm 上部幅12cm 中央幅17cm 下部幅36cm 地上高78cm 上部幅30cm 中央幅46cm 下部幅34.5cm 厚み11cm 地上高79cm 幅80cm 厚み17.5cm 冢形石塔婆
I-2	寛文13年(1673)	頂部に胎藏界大日如來の種子(アーシク)を刻み、その下に「奉爲法月善教禪定門菩提也」 右に「寛文四年孝子」左に「三月十九日敬白」	
I-3	寛文4年(1664)	頂部に胎藏界大日如來の種子(アーシク)を刻み、その下に「奉爲法月善教禪定門菩提也」 右に「寛文四年孝子」左に「三月十九日敬白」	
I-4	寛文4年(1664)	頂部に胎藏界大日如來の種子(アーシク)を刻み、その下に「奉爲法月善教禪定門菩提也」 右に「寛文四年孝子」左に「三月十九日敬白」	
I-5	元禄3年(1690)	頂部に胎藏界大日如來の種子(ア)を刻み、その下に「爲泰聖久安信士菩提也」 右に「元禄三庚午年」左に「四月吉日愛女敬白」	
I-6	明暦2年(1656)	頂部に阿弥陀如來の種子(キリーク)を刻み、その下に「奉爲月香常桂禪定門菩提也」 右に「明暦二年孝子」左に「二月十八日敬白」	
I-7		無銘	
I-8		無銘	
I-9		頂部の月輪のなかに虚空藏菩薩の種子(タラーク)を刻み、その下に「奉爲宗喜禪門」	
I-10	寛永(1624～1643)	頂部の月輪の下に二条の切り込み、その下に「奉爲妙慶禪□□」右に「寛永 □ □」 左の銘文不明の墨書銘を記す ※頭部月輪も墨で書いてある	
I-11		無銘	
I-12	天和2年(1682)	頂部の月輪のなかに胎藏界大日如來の種子(アーシク)を刻み、下部に蓮華を彫る 正面中央に「法印權大僧都有通逆修」右に「于時天和二年戊」左に「十月二日拾八代也」	
I-13		頂部に月輪を刻む 墨で書いてある。	
I-14		無銘	
I-15		無銘	
I-16		無銘	
I-17		正面中央に「逆修善根主」右に月輪を刻み、その下に「道本禪門」 左にも同じ月輪を刻み、その下に「善袋禪尼」	
I-18	寛永14年(1637)	頂部月輪(径38cm)のなかに金剛界(ア)・胎藏界・蘇悉地の種子、(パン)、中央に「奉爲十萬三世六道四生法界平等 利益 各靈位頓證菩提」左下に「權大僧都 □ 壽大和尚位、權少 □ 住、寛永十四年丁丑、中 □ 二月時正」 伽童子、月蓮道光、壽月妙長、松屋道清、如傳妙道、「麻香、妙金、願主敬白」と三段にするす	

第VI章 東光寺磨崖梵字の調査

第1節 遺跡の概要

東光寺は、多良木町大字黒肥地字東光寺に所在し、青蓮寺の北北東 1.9kmに位置する。東光寺地域には、磨崖梵字の他にも東光寺薬師堂・東光寺八幡神社・東光寺経筒出土地があり、宗教施設が数多く所在する。また、域内の小字名は東光寺（トウコウジ）と祓川（ハライゴウ）という。

東光寺八幡神社は、宇佐八幡と同体で草創年紀不明。現在の東光寺八幡神社の拝殿は旧本殿からの転用で、建造物調査の結果（「熊本県文化財調査報告書第 277 集」、2012）、明応 2 年（1493）の建造物である。

相良家史によれば、東光寺は文応元年（1260）に相良頼氏により再興と記され、現在は薬師堂のみ残っている。伝承によれば、東光寺主体は磨崖梵字から南東 150 m 地点の愛宕山の麓にあったという。

現在の薬師堂内には薬師三尊が安置され、主尊である薬師如来坐像は平安時代末期の仏像で、銘文によれば秘仏とされている。天正 9 年（1581）に相良義陽による補修がなされている。脇侍の日光菩薩及び月光菩薩は鎌倉時代末期、十二神将は南北朝期の作とされている。

寛元元年（1243）の「関東下知状」（相 5 号）に、東光寺村がみえる。この史料から窺える東光寺村の権益関係は次のようになる。建久 4 年（1193）東光寺を含む多良木村の領知を相良頼景がはじめ、建保 2 年（1214）頼景が庶子・宗頼に東光寺村を譲渡する。宗頼死去後は宗頼の子・頼重に譲渡されたが、相良長頼が東光寺村を押領する。長頼の東光寺村押領の根拠は、安貞 2 年（1228）8 月に相良頼景から東光寺村を長頼に譲渡する旨の譲状を得ていたこと、更に同年 12 月に長頼は安堵状を得ていたことである。寛元元年（1243）の裁許により、東光寺村は長頼が領掌することになる。

東光寺薬師堂から見て東側の斜面に町史跡である東光寺磨崖梵字は所在する。加久藤溶結凝灰岩の南向きの岩壁に彫刻され、彫刻面の東側に石窟がある。また、磨崖面の西側にも空洞が確認できるが、開口部が崩落土に埋まっているため、構造は確認できなかった。

第2節 東光寺出土の経筒

1. 経筒発見の経緯の整理

東光寺出土の経筒は、文永 10 年（1273）に多良木家とその近親者や縁者とみられる人物たちによって東光寺の東方台地の斜面の経塚に埋納されていたものである。

昭和 11 年（1936）2 月、黒肥地村（現、多良木町大字黒肥地）の野尻良平氏が通称愛宕山の麓（祓川 4940 の 1）、東光寺跡の一角で開墾の最中に偶然発見した。『多良木町史』によれば、経筒のほかは銭貨 27 枚、白磁の

下蕪花いけ 1 個、肥後鋏形の鋏 1 個が確認されている。

経筒側面に相良頼氏をはじめ、奉納者名や埋納年月、埋納趣旨などの銘文があり、類例の少ない考古資料として、昭和 44 年 3 月 20 日付で熊本県指定の重要文化財に指定されている。現在は多良木町埋蔵文化財等センターにて展示している。

2. 経筒の出土状況（『九州日日新聞の記事から』）

昭和 11 年 8 月 10 日、坂本経堯氏らによる現地調査が行われ、その記録を昭和 11 年 8 月 31 日の「九州日日新聞」に掲載されている。出土状況の記載箇所を引用する。

「・・・東光寺の石切場の立石を見て経筒発掘者、野尻良平氏を訪ねたのは昼近いころであった。野尻氏は養蚕の忙しい折にも関わらず喜んで現地に案内し発掘状態に就て詳細な説明をして下さった。

東光寺から北方赤木へ小流に添って新道が通って行くこと約六百米にして薬師堂がある。ガッチリした茅葺屋根の堂で内陣の扉を開くと薄暗い光線の中に主佛如来像を中央に二軀の明王、数体の天部像等が濃厚な近代採色に一層奇怪な姿を雑然と押並べてゐる。

正面に懸った鰐口には「干天文十七年甲戌八月一日、東光寺薬師如来鰐口」の銘が刻まれ合祀の「愛宕山東光寺佛」は木素彫の山法師像で脊銘に「天文廿一・（略）・・・」とある。勿論東光寺の主佛ではない。境内の片隅には附近出土の板碑、五輪塔石が数多く積ねられて中には「明暦三年」の銘もある。

この薬師堂は東光寺の一祠堂で愛宕山東光寺の本堂は東側山裾に存したと云ふ。寺跡の後は切り立てた岩壁で刻した雄渾な大梵字の一部が残ってゐる。其の右側洞穴は横穴古墳の形式を存しこゝにも佛が祀りてあったと云ふ。岩間から冷水が滾々と湧出して谷間の風光と共に幽邃な聖域である。今は全く開墾されて曾ての堂塔の配置など知る由もない。

問題の経筒は寺跡の北側を区切る山裾の中腹に當る所に存した積石塚から掘り出されたものであった。野尻氏が村有東光寺跡の小作権を得て昨冬来開墾を進めたが本年 2 月の雪の降る日の夕刻積み重なった川原石を取除け中たまたま平たい一枚の石を除けて其の下に六つの経筒を発見したのが初めである。野尻氏は珍しいものなので注意深く敬虔な心で翌日にかけて八箇の経筒、二十四文の孔銭を採取したのであった。勿論学術的な発掘ではなかったが記憶ははっきりしてゐて其大要を知るを得た。山裾の中腹を経約四、五尺、深さ約二尺五寸位掘り下げ井筒形に石垣を周し内部の地固めをして敷板？を敷き孔

銭を並べ経筒を前に六個、後に二個並べ其の周囲には清浄な山土を以て埋め経筒の上に径一尺五寸、巾八寸五分と径一尺五寸、巾九寸五分との二個のやゝ平たい川原石を蓋として置き其の上に百に余る川原石を積み重ね封土を小高く盛ったものゝ様である。私は他の出土例によって次のことを聞いて見た。

- 経筒の下には敷石はなかったのか
 - 経筒の周囲には木炭或は小石が詰めてはなかったか
 - 孔銭二十四文は経筒一筒に三つの割で下敷としてあったのではないか
 - 他に近くから出たものはないか
- 答へは「そう云ふ風ではなかった附近から口の付いた徳利様のものが出たが割って仕舞った」との事私共は現地の繁茂した陸稲の畑から次のものを採取した。
- 祀部土器○甕胴部破片
 - 高麗磁と見える皿、注口付徳利、土師器等の破片数点前者は横穴古墳に属し後者は経筒が東光寺に添うものであると思ふ。」

この記事から、昭和11年時点で磨崖面に梵字の一部が確認され、すでに梵字が崩落していたことがわかる。石窟もすでにあり、伝承として仏を祀っていた空間であった。

発見された経筒は、現在は多良木町の所有となり、多良木町埋蔵文化財等センターに保管している。銅特有の金属劣化や錆などが進行し、経筒の銘文が以前ほど明瞭に判読できなくなっていた。また、經典の文字についても、ほとんど消失してしまっていた現状であったことから、保存対策として供伴した銭貨を含めて経筒の保存修復を別府大学文化財研究所に委託し、保存修理を行った。

3. 経筒出土地点の特定

多良木町教育委員会に保管されていた経筒収納箱の蓋裏に「発掘場所 祓川四九四〇ノ一 発掘年月日 昭和十一年三月十二日 発掘者 野尻良平」と記録されている。

今回、多良木町税務課・法務局に照会し、この地番の特定に努めた。『球磨郡黒肥地村土地台帳』によれば四九四〇番・四八九〇番ノ1合併という筆となっており、「明治31年法律第32号に依り増徴地租」での所有者は黒肥地村で地目は山林となっている。履歴は次のようになる。

昭和5年3月12日字図訂正
昭和25年3月30日受付 自作農創設特別措置法第30条により 農林省が買上げ 球磨郡黒肥地村字祓川四八九〇番四九四〇番ノ一 山林寺町八反歩右登記ス 昭和25年3月30日受付 附第404号 農林省ノ為所有権ヲ登記ス
所有権移転 昭和52年11月28日受付(登記) 第6822号 原因 同44年8月10日売払 所有者 多良木町
昭和53年5月24日閉鎖 四九三九番に合筆のため 昭和54年11月13日 四九三九番が一ないし四まで分筆

旧字図を確認した際、四九四〇番・四八九〇番ノ一合併だった土地の場所は、四九三九番一及び四九三九番三に分かれており、経筒の発掘場所は、現在では四九三九番となっている。東光寺磨崖梵字は四九三九の三番地であり、磨崖梵字に近くであることは間違いない。

『九州日日新聞』の記述から「問題の経筒は寺跡の北側を区切る山裾の中腹にあたる所に存した積石塚から掘り出されたもの」とある。坂本氏の「寺跡」の認識は「この薬師堂は東光寺の一祠堂で愛宕山東光寺の本堂は東側山裾に存したという。寺跡の跡は切り立てた岸壁で刻した雄渾な大梵字の一部が残っている」であり、磨崖梵字が所在する場所も含め「寺跡」として認識している。地域の話では、東光寺跡は現在の豊永氏宅といわれ、東光寺磨崖梵字の南側である。よって、「問題の経筒は寺跡の北側を区切る山裾の中腹」とは、東光寺磨崖梵字の南側の迫地付近であったと考えられる。

第3節 調査の成果

1. 調査の方法

昭和55年刊行の『多良木町史』では、東光寺磨崖梵字として掲載され、以後、磨崖梵字として一般的に認識されてきた。

その後、平成26年(2014)6月25日(水)の奥球磨セミナーで前川清一氏は、東光寺磨崖板碑であると説明し、また『中世相良氏の展開と地域社会』(稲葉継陽・小川弘和編、2020)では、文永10年(1273)頃の碑伝型板碑を模した東光寺磨崖板碑として記載している。

今回は、磨崖面の調査、磨崖面前面でのトレンチ調査、磨崖面右側の石窟の調査を行った。

磨崖面の調査では、彫刻痕跡の確認や梵字痕跡の確認を行った。トレンチ調査では、祭祀痕跡の確認や堆積層の確認を行った。石窟の調査では、東国に見られる「ヤ

グラ」の可能性を視野にいれ、調査を行った。

磨崖面は三次元点群測量を行った。三次元点群測量は、UAV・地上写真測量等・地上レーザスキャナ計測等を用いて、計測データの取得を行った。UAV・地上写真測量等・地上レーザスキャナ計測等は、公共測量作業規定される性能を有する機材を用いた。

UAV・地上写真測量等については SfM/MVS(structure from motion/multi view stereo) 技術を用いた方法で行い、標定点及び検証点は GNSS・トータルステーション等によって測量を行い、4 級基準点と同等程度の精度を有するものとした。

2. 調査の成果

(1) 地形測量及び磨崖面の図化 (第 86・87 図)

愛宕山から北方向へ向かって尾根線が走り、その後、尾根線は東西方向へと分かれて伸びる。その尾根線を境に、北側の斜面は旧石切場である。磨崖面は、尾根線の南側斜面に所在する。磨崖面は南西方向を向いており、その右側に石窟が隣接する。磨崖面の左側にも石窟らしき空洞を確認したが、土砂により埋まっているため調査は行っていない。磨崖面石材は加久藤溶結凝灰岩である。

磨崖面に板碑形を彫刻し、葉研に梵字を刻む。オリジナル残存部位は梵字周辺のみで、平坦に磨いている。その他は経年劣化により表皮が剥落している状態である。板碑の山形や二条線の表皮は剥落しているが、レリーフのフォルムは残っている。

山形や二条線及び額縁は陽刻である。板碑痕跡の形状加工は、山形頂点から下に 417cm のところまでである。そこから 10cm ほど前面に緩やかに張り出した後、垂直に地表面へと続く。張り出し部分には円形に柄穴が穿ってある。山形の頂点・アークの空点、柄穴はほぼ 1 直線上に並ぶ。山形頂点から柄穴までの距離は 420cm を測る。

山形の幅は 149cm、二条線幅は 140cm、額幅は 145cm を測る。梵字周辺のオリジナル部分は研磨されている。

調査において、繁茂していた地衣類を除去した結果、柄穴の上位に梵字痕跡を確認した。よって、刻まれた梵字は複数あることが判明した。

「アーク (āṃḥ)・バーンク (vāṃḥ)・ウーン (hum) : (胎蔵界大日・金剛界大日・蘇悉地)」の可能性を視野にいれ、梵字の復元を行ったが、上位の「アーク (āṃḥ)」にて確認できる梵字幅は 95cm の規模であり、これをもとに復元すると梵字一文字の大きさは 100cm を超える。これを基準に三文字並べることはできない。よって、下位の梵字への接続を予想すると、梵字 2 文字が適当であると考えられる。

以上のことから、磨崖板碑に刻まれた梵字は、五点具

足の胎蔵界大日如来 (āṃḥ)、五点具足の金剛界大日如来 (vāṃḥ) である可能性が高い。

(2) 令和 3 年度のトレンチ調査 (第 88 図)

磨崖面前にて 1 × 4 m のトレンチ調査を行った。

表土は竹根にとにかく乱をうけている。その下位に暗褐色シルト (2 層) を確認した。それより下位の層はすべて客土である。3・4 層の下位には鉄分の沈殿があり、固くしまっていた。その面を検出する際に、龍泉窯系青磁碗 B 1 類が 1 点出土した。5～9 層は溶結凝灰岩が風化した灰色ブロックを含んでいる客土である。

10 層から土師器の甕が出土している。13 層はグライ化した土壤ブロックが混ざっている。ここから土師器の杯が出土した。

【出土遺物】 (第 89 図)

1366～1368 は 2 層からの出土遺物である。1366 は土師器小皿、1367 は中世須恵器の播鉢、1368 は陶器の端反碗である。1369～1379 は 3～4 層からの出土遺物である。1369 は厚みのある底部をもつ土師器坏である。1370 は底部糸切り離し後に脚を張り付けている。1371～1374 は土師器坏である。1375・1376 は土師器小皿である。1377 は龍泉窯系 B 類の青磁碗である。1378・1379 は中世須恵器の甕で体部に山形タタキ痕を残す。1380～1385 は 10・11・12 層からの出土遺物である。1380 は土師器坏、1381 は脚をもつ土師器坏である。1382～1384 は土師器小皿である。1385 は瓦質の甕で、口縁の下位に小さな突帯が巡る。

(3) 令和 4 年度の調査 (第 90 図)

令和 4 年 7 月の調査指導委員会において、磨崖面の東側に開口している石窟が「ヤグラ」ではないかとの指摘を受けた。石窟は昭和 11 年新聞記事から、防空壕ではない。横穴墓の転用の可能性があるため、町内の横穴墓との比較を行った結果、規模・形態が異なるため横穴墓からの転用でもない。

調査前は、開口部及び内部は崩落土により埋没していた。調査はその崩落土除去から始め、石窟内部及び前庭部の調査を行った。石窟内部の堆積土は持ち帰り、骨片の有無を精査したが、確認されなかった。

石窟内部は西側のみ掘削した。東側半分は未掘である。

この石窟開口部の上位に、断面「V」字状の切り込みが水平横位に 140cm 走る。その幅は 36cm で、深さ 8cm を測る。庇受けと思われる。

開口方向は西南西で、開口幅 215cm、開口高 160cm を測る。開口部下位には加久藤溶結凝灰岩の巨礫を 3 石確認した。石窟の縦断面は、崖面から石窟に入り、水平に奥まで入り、奥壁から奥床までは緩やかに奥に広がり、

奥床からやや水性に石窟中央にまで達し、中央付近で高低差 33cm の段差がある。その段差を降り、削り出しのステップを経て、下方へと傾斜する形状である。中央付近の段差部分には、その段差に沿ってトンネル状の湧水路があり、そのトンネルは磨崖面脇の空洞に抜ける。

石窟内部は段差により、奥床と下段部に分かれる。下段部の天井高は 160cm、奥床の天井高は 150cm である。奥床は幅 190 ～ 215cm、奥行きが 130cm の隅丸方形で床面には凹凸がある。下段部の中央に島状にケズり出しの突起がある。奥床へのステップと考えられる。

石窟中央の段差部分の西側に 15cm×12cm、深さ 2cm の浅い柄穴を確認した。その柄穴に対応するように左側壁に幅 18cm の柄穴が、右側壁に幅 24cm の柄穴が配置されている。木材を嵌め込むための柄穴で、入口構造を持っていたと考えられる。

天井、右側壁には、加工痕が確認できた。

奥床の右側壁には、東側へと延びる高さ 90cm、幅 80cm の開口があり、先細りとなる空洞がある。確認できた奥行きは 400cm で、この空洞奥から湧水がある。その湧水は右側壁脇に設けられた水路を通り、中央部分の段差で落ち、段差に沿うトンネルへと抜ける。空洞床面には土師器が多数散在していた。

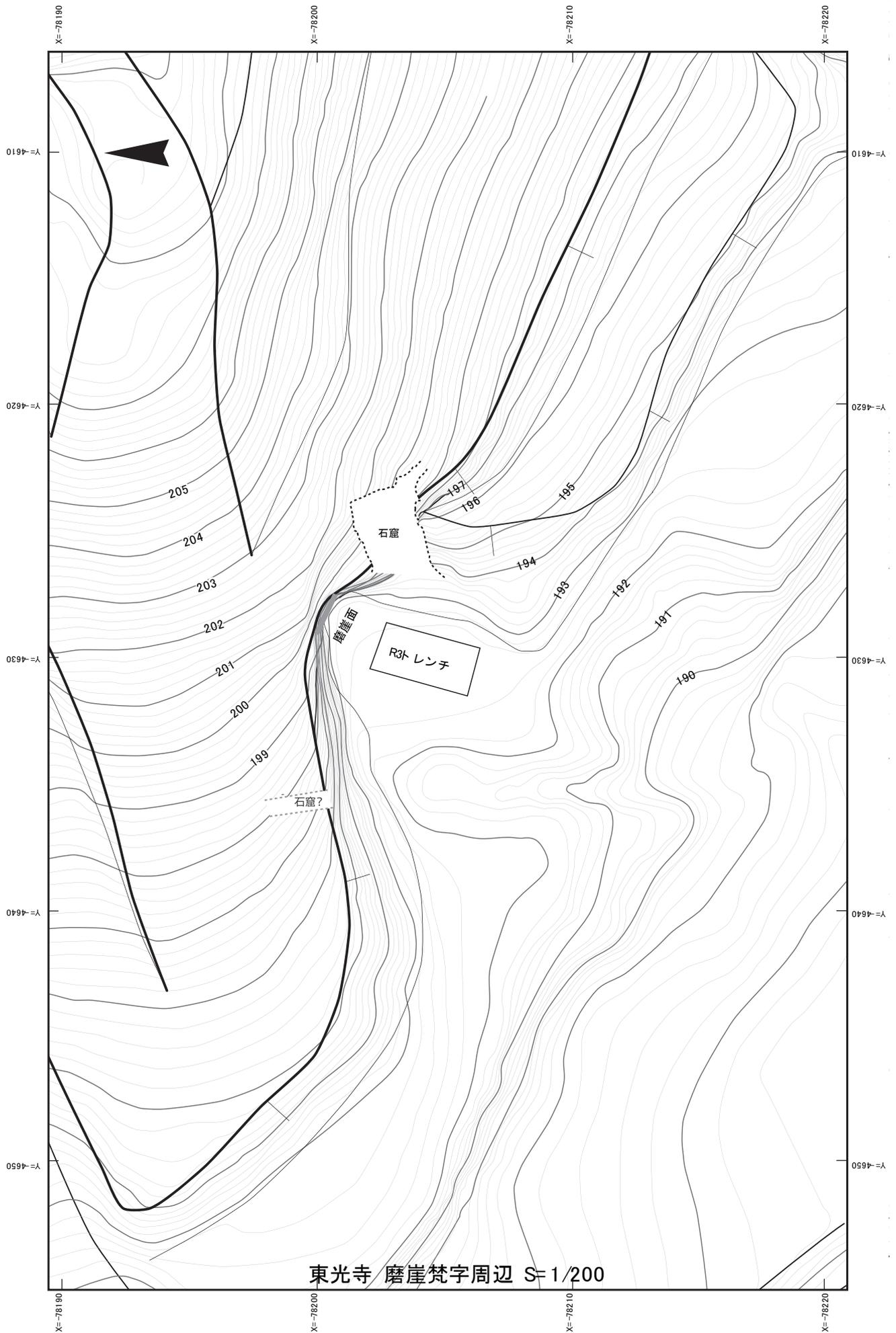
【出土遺物】(第 91 図)

1386 は石窟段差部トンネル内出土の土師器坏である。1387 ～ 1389 は石窟右側壁から奥へと続く空洞からの出土遺物で土師器坏である。1388 の口縁端部は内外面とも凹状に調整している。1390 は石窟前庭部トレンチから出土した土師器坏である。1391・1392 は右側壁から奥へと続く空洞からの出土遺物で土師器小皿である。1393 は石窟内堆積 7 層から出土した中世須恵器の播鉢である。

(4) 科学分析

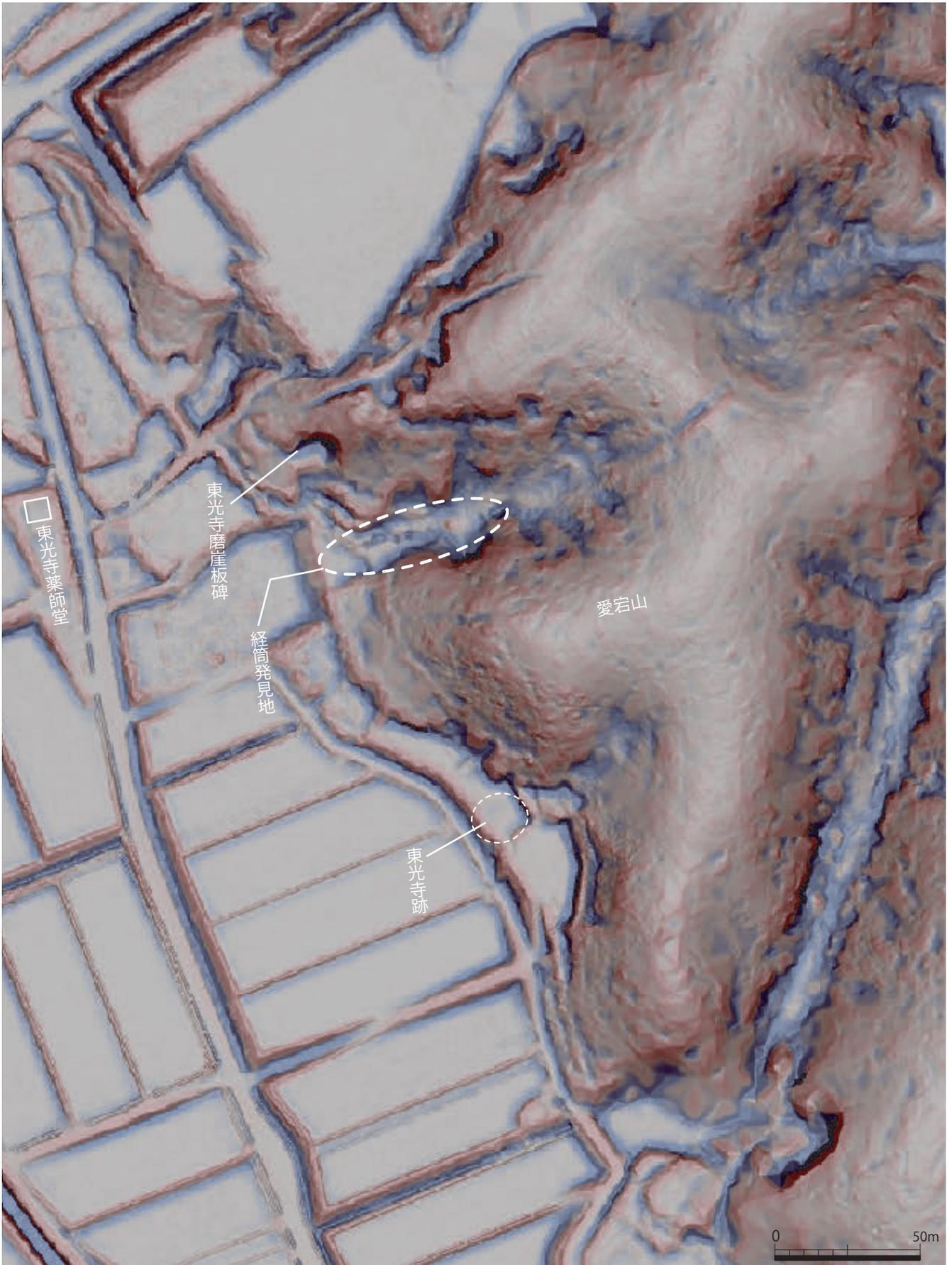
東光寺磨崖板碑の梵字面のみ、黒色物質が付着している。このように梵字内のみが黒く見える石造物は人吉盆地の各所に見られる。

今回、九州国立博物館の協力を得て、蛍光 X 線分析を行った。その結果は、第七章に掲載している。

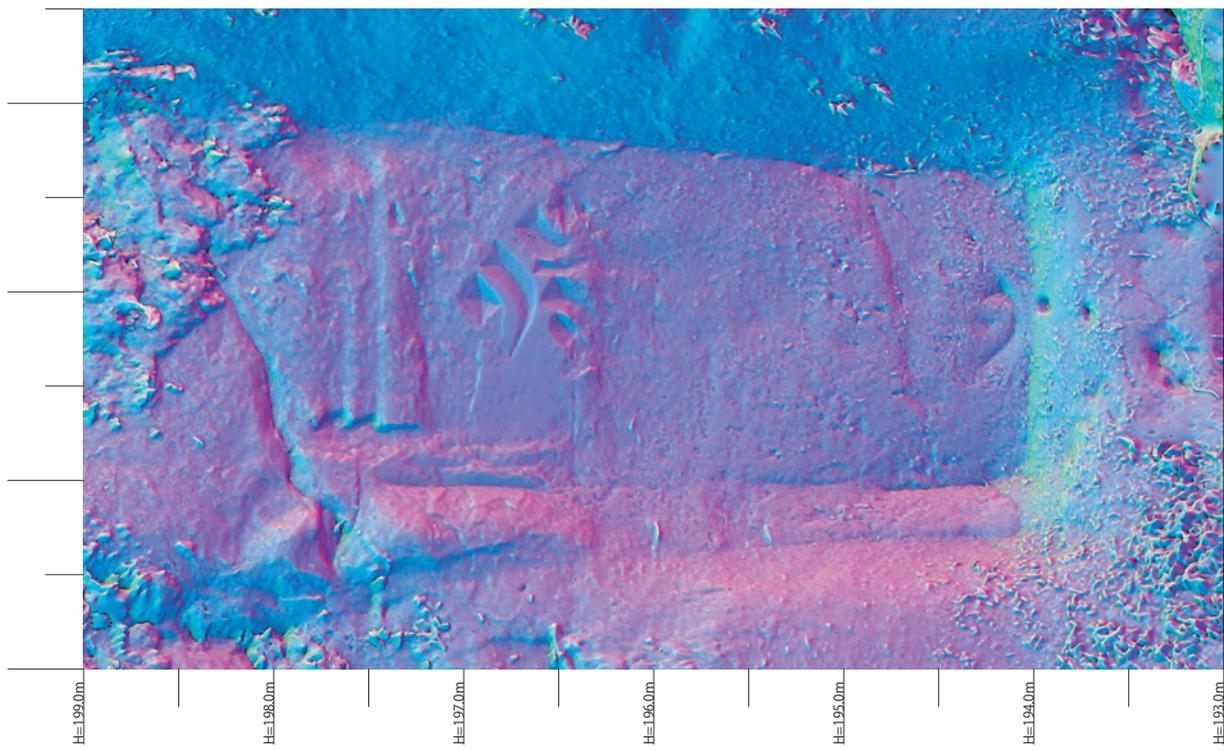


東光寺 磨崖梵字周辺 S=1/200

第 84 図 東光寺磨崖梵字地形測量図



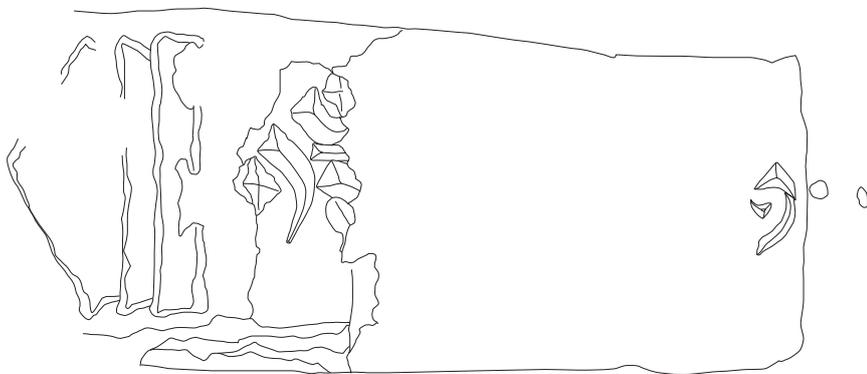
第 85 図 東光寺地区 CS 立体図



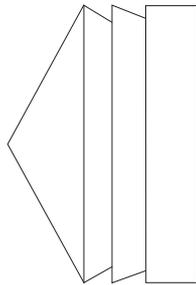
東光寺磨崖梵字法線マップ



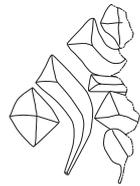
第 86 図 東光寺磨崖梵字法線マップ及び実測図



磨崖碑実測図 S=1:40



H=198.0m



H=197.0m

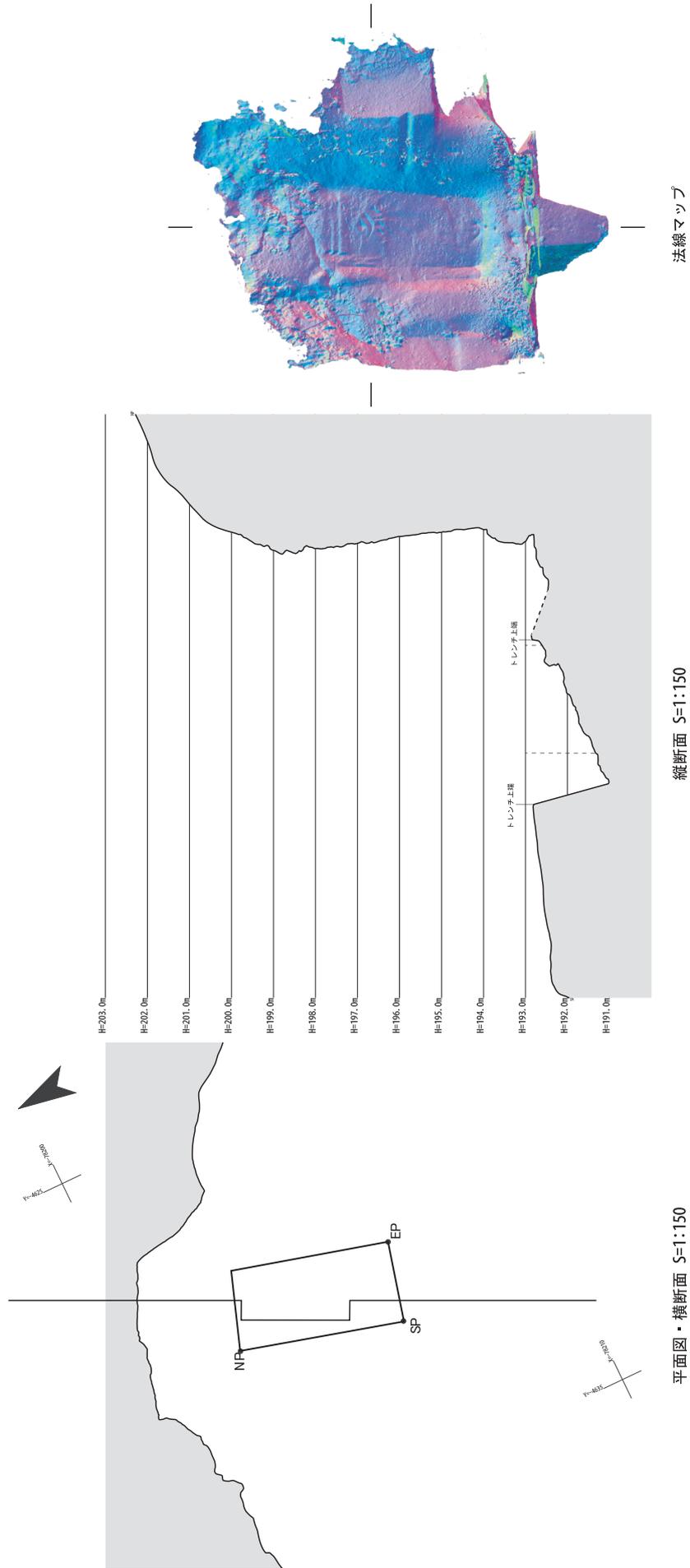
H=196.0m

H=195.0m

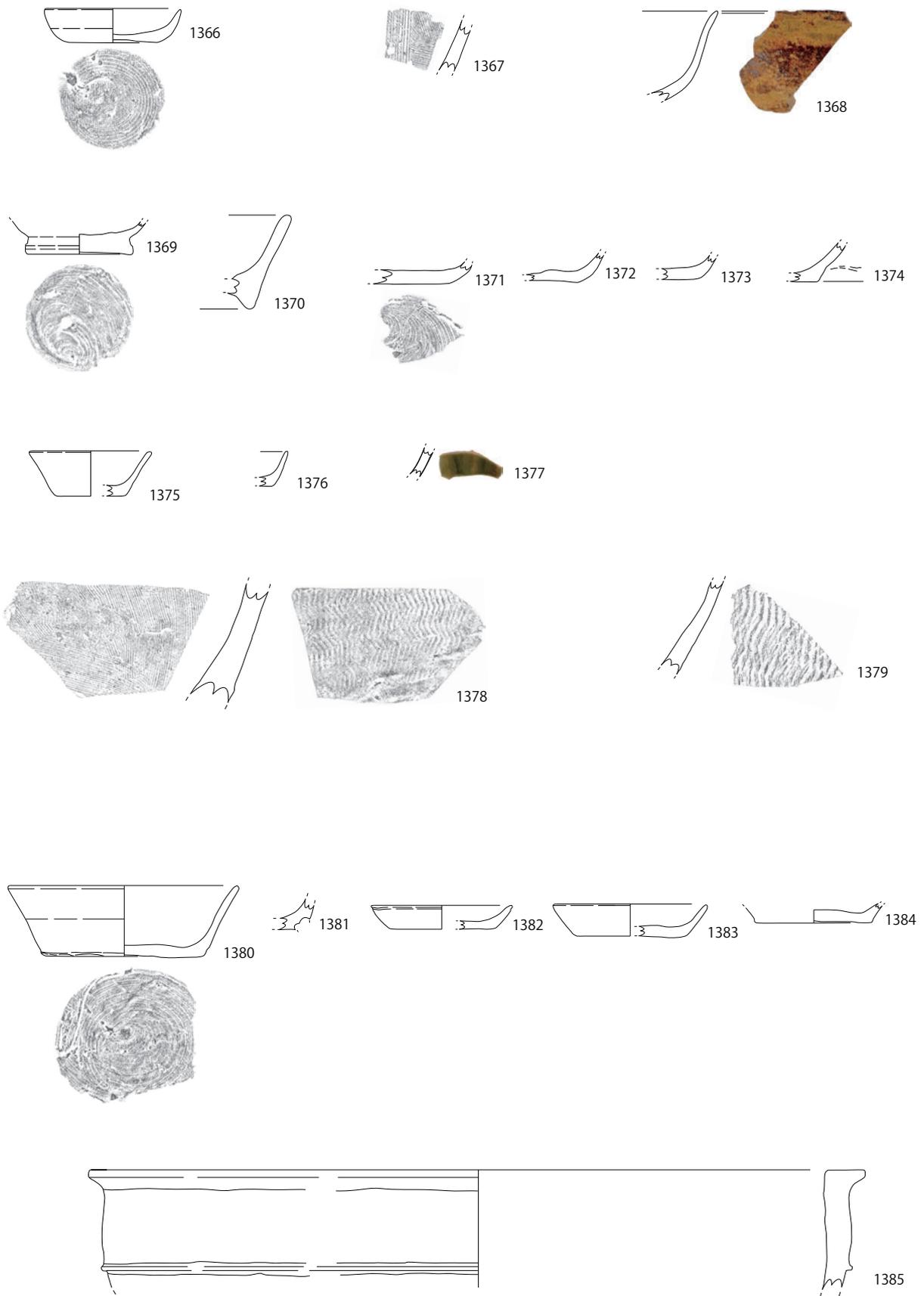


H=194.0m

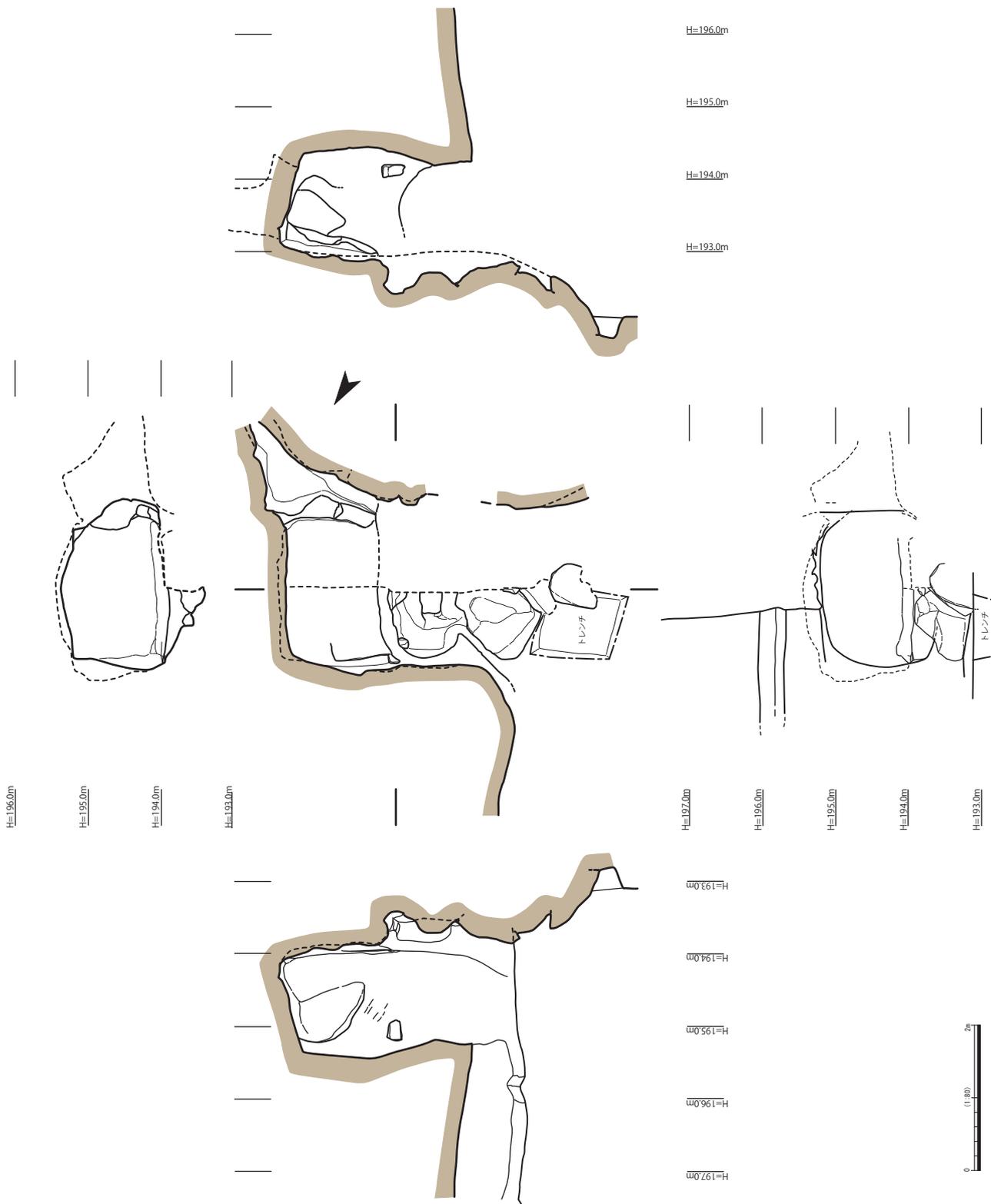
磨崖碑復元図 S=1:40



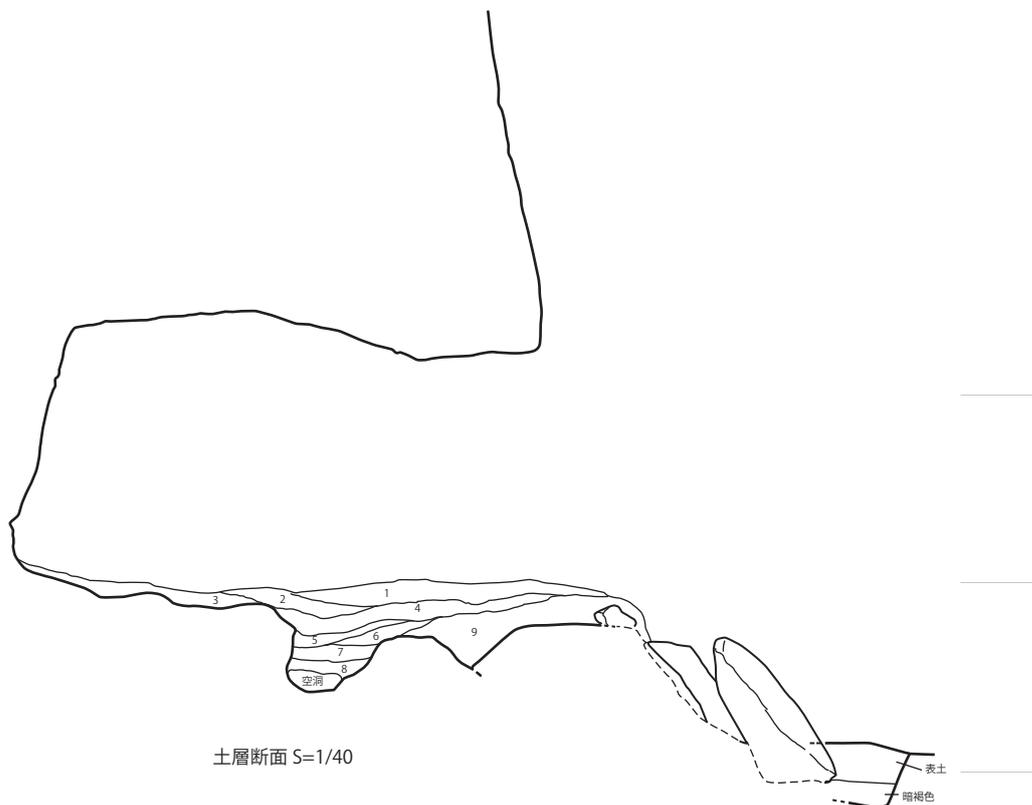
第 87 図 磨崖面横断及び縦断面図



第 89 図 令和 3 年度調査時の出土遺物



第 90 図 石窟展開図

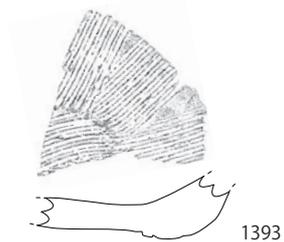
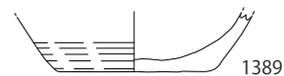
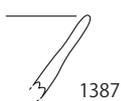
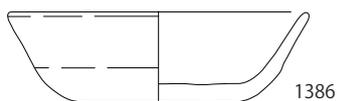


土層断面 S=1/40

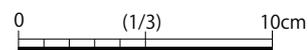
東光寺土層（石窟内堆積状況）（令和4年度）



- 1 Hue7.5YR5/6 橙色シルト しまりなし 粘性なし 崖上からの崩落土
- 2 Hue7.5YR3/3 暗褐色シルト しまりなし やや粘性あり カーボンを少量含む
- 3 Hue10YR7/2 にぶい黄色褐色シルト しまりなし やや粘性あり 凝灰岩の風化土が混じる カーボン少量含む 奥床堆積物
- 4 Hue10YR6/3 にぶい黄色褐色シルト しまりなし やや粘性あり 灰色ブロックを含む カーボン少量含む
- 5 Hue10YR4/3 にぶい黄色褐色シルト しまりなし やや粘性あり カーボン少量含む
- 6 Hue10YR6/3 にぶい黄色褐色シルト しまりなし やや粘性あり カーボン少量含む
- 7 Hue10YR4/3 にぶい黄色褐色シルト しまりなし やや粘性あり カーボン少量含む
- 8 Hue10YR4/3 にぶい黄色褐色シルト しまりなし やや粘性あり カーボン少量含む
- 9 Hue10YR6/3 にぶい黄色褐色シルト しまりなし やや粘性あり カーボン少量含む



1338 口唇部の調整



第 91 図 石窟土層断面図及び令和4年度調査時の出土遺物

第Ⅶ章 科学分析

1. 相良頼景館跡の自然科学分析

令和3年度 多良木相良氏関連遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析（年代測定）業務（No. 29011-1）

令和3年度 多良木相良氏関連遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析業務（No. 29011-2）

令和4年度 多良木相良氏関連遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析業務委託（No. 32993）

2. 東光寺の自然科学分析

令和3年度 東光寺磨崖梵字の自然科学分析業務（No. 31326）

令和4年度 多良木相良氏関連遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析業務委託（No. 32993）

3. 人吉盆地に分布する石塔に用いられた黒色物資の材質調査

はじめに

熊本県多良木町に所在する相良頼景館跡は、人吉盆地の北東部、球磨川右岸の沖積低地上に位置する。おそらく館は球磨川右岸の自然堤防に由来する微高地を選んで建てられたと考えられる。これまでの発掘調査により、館を取り囲む土塁やその外側に構築された堀などが確認されている。

本分析調査では、北側土塁を構成する土壌および堀を埋積する土壌を対象として、微化石分析、種実遺体分析および抽出された炭化種実と炭化材の年代測定を実施し、土塁の構築時期や堀の埋没時期、周辺環境、植物利用等に関する資料を作成する。

1. 試料

試料は、令和3年度調査で作成された北側土塁トレンチの土層断面および北側堀跡トレンチの土層断面より採取された土壌試料と、北側トレンチの堀2覆土2層炭化物層より採取された土壌試料である。各トレンチにおける試料採取位置を図1、2に示す。なお、整地層①直上と堀2覆土2層炭化物層は多良木町教育委員会が採取したため、図には反映していない。

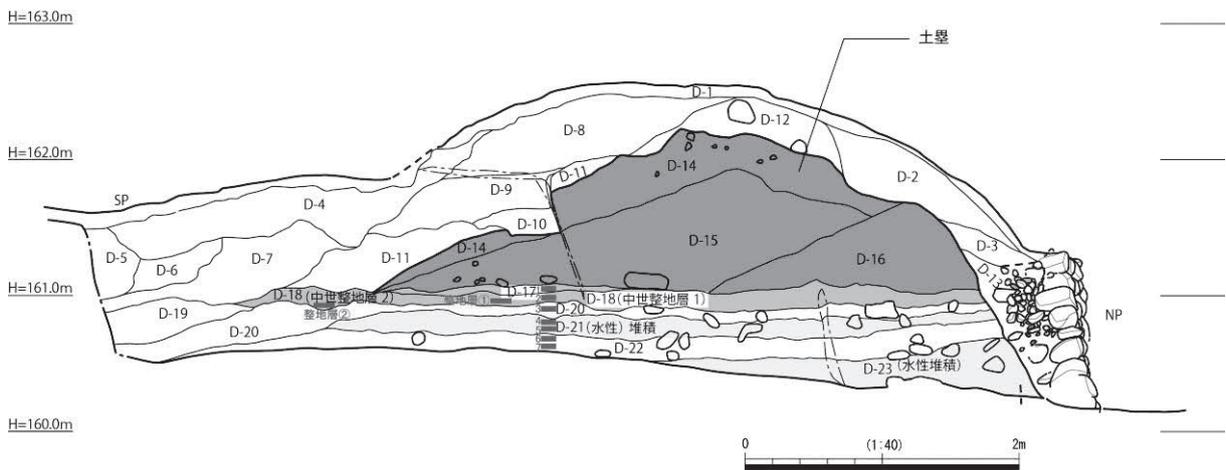


図1 相良頼景館跡北側土塁トレンチの試料採取位置

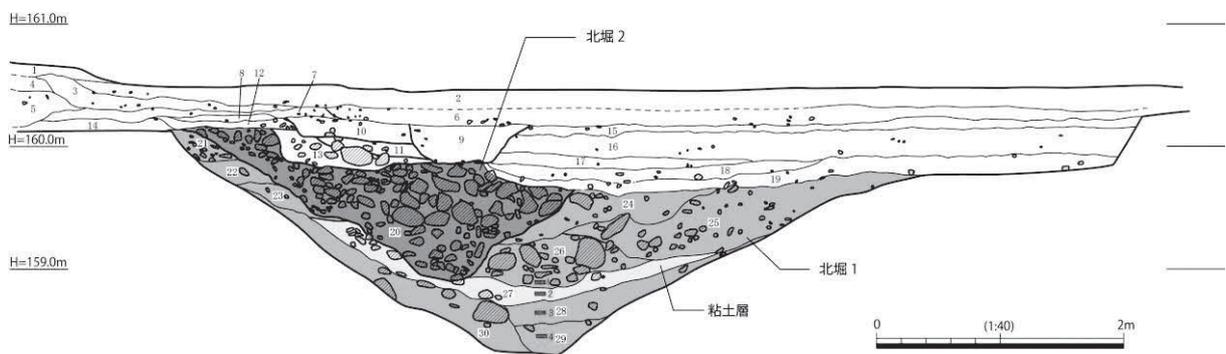


図2 相良頼景館跡北側堀跡トレンチの試料採取位置

2.分析方法

火山灰分析と珪藻、花粉、植物珪酸体の各微化石分析、種実遺体分析、抽出した炭化材の樹種同定および炭化種実と炭化材の放射性炭素年代測定を実施した。なお、火山灰、微化石および種実遺体の各分析については対象物の産出に乏しいことが予測されたため、まず産状を確認するのみの概査を行い、産状の比較的良好な植物珪酸体については、通常の分析を実施した。各分析の処理過程を以下に述べる。

(1)火山灰分析

北側土壘トレンチの試料番号 1(D-17)、2(D-18)、3(D-20)、4(D-21)、5(D-21)、6(D-22)、7(D-22)の 7 点と、北側掘跡トレンチの試料番号 1(H-26)、2(H-27)、3(H-28)、4(H-29)の 4 点の、計 11 点の試料を対象とした。

試料約 20g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

(2)珪藻分析

北側土壘トレンチの試料番号 1(D-17)、2(D-18)、3(D-20)の 3 点と、北側掘跡トレンチの試料番号 2(H-27)、3(H-28)の 2 点の、計 5 点の試料を対象とした。

湿重約 5g をビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリユウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

(3)花粉分析

上述の珪藻分析に選択した試料と同一の計 5 点の試料を対象とした。

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重 2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリス(無水酢酸 9:濃硫酸 1 の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製する。

(4)植物珪酸体分析

上述の珪藻・花粉分析に選択した試料と同一の計 5 点の試料と、北側土壘トレンチの整地層①(D-18)、整地層②(D-18)の、計 7 点を対象とした。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山,2000;2009)。以下に処理過程を述べる。

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1)試料を105°Cで24時間乾燥(絶乾)
- 2)試料約 1g に対し直径約 40 μ m のガラスビーズを約 0.02g 添加(0.1mg の精度で秤量)
- 3)電気炉灰化法(550°C・6時間)による脱有機物処理
- 4)超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散

5)沈底法による20 μ m以下の微粒子除去

6)封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成

7)検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山,2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

(5)種実遺体分析

北側土壘トレンチの整地層①直上(D-17)、整地層①(D-18)、整地層②(D-18)、北側堀跡トレンチの試料番号1(H-26)、試料番号2(H-27)、試料番号3(H-28)、試料番号4(H-29)、北側トレンチ堀2覆土2層炭化物層の、計8点の試料を対象とした。

北側堀跡トレンチの試料は、水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。北側土壘トレンチ、北側トレンチ堀2覆土2層炭化物層の試料は、常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。

水洗後、水に浮いた試料(炭化物主体)と水に沈んだ試料(岩片主体)を、粒径別に常温乾燥させる。乾燥後の試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実遺体の他、主に4mm以上の炭化材や土器片などの遺物をピンセットで抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本や椿坂(1993)、中山ほか(2010)、鈴木ほか(2018)等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。また、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。炭化材は重量と最大径、炭化材主体、岩片主体は重量、土器片は個数と重量、最大径を一覧表に併記する。

分析後は、一部の炭化種実と炭化材を年代測定および炭化材同定に供する。他は分類群別に容器に入れて保管する。他の抽出物と残渣は容器に入れて保管する。

(6)炭化材同定

種実遺体分析で抽出された炭化材のうち、北側土壘トレンチの整地層①(D-18)、整地層②(D-18)の大型炭化材各5点と、北側トレンチの堀2覆土2層(炭化物層)の大型炭化材4点の、計14点の試料を対象とする。

木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の各割片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。年代測定用試料は、調整を行う際に、3断面を双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。木材組織特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

(7)放射性炭素年代測定

種実遺体分析で抽出された炭化種実・炭化材のうち、北側土壘トレンチ整地層①-1(D-18)の炭化材(アカガシ亜属)、整地層①-2(D-18)の炭化材(アカガシ亜属)、整地層②-1(D-18)の炭化材(アカガシ亜属)、整地層②-2(D-18)の炭化種実(コムギ)、整地層①(D-18)の炭化種実(イネ)、北側トレンチ堀2覆土2層炭化物層の炭化

種実(イネ)、炭化種実(オオムギ)、北側掘跡トレンチ試料番号 1(H-26)から試料番号 4(H-29) までの炭化材の細片を集めたもの(樹種同定不能)の、計 7 点の試料を測定対象とする。

試料の表面に付着した泥などの不純物をできるだけ取り除いた後、塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L である。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置(NEC 社製)を用いて、¹⁴C の計数、¹³C 濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度(¹⁴C/¹²C)を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ¹³C 濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正は、大気中の ¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ¹⁴C 濃度の変動、その後訂正された半減期(¹⁴C の半減期 5730±40 年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4(Bronk,2009)、較正曲線は IntCal20 (Reimer et al.,2020)である。

3.結果

(1)火山灰・珪藻・花粉分析

各分析概査結果を表 1 に示す。いずれの分析も産状は不良であり、十分な解析を行えるものではなかった。

表1 相良頼景館跡の各分析概査結果

分類群・部位	北側土壘トレンチ										北側堀トレンチ				備考
	D-18	D-18	D-17	D-18	D-20	D-21	D-21	D-22	D-22	H-26	H-27	H-28	H-29		
	整地層 ①	整地層 ②	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4		
火山灰分析(概査)															
軽石およびスコリア			×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
火山ガラス			+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	K-Ah由来,微量または極めて微量	
珪藻分析(概査)			×	×	×						×	×		珪藻検出されず	
花粉分析(概査)			×	×	×						×	×		花粉産出悪い・保存状態悪い	
マツ属			+	-	-						-	-		保存状態悪い	
ツガ属			-	-	+						-	-		保存状態悪い	
コナラ属アカガシ亜属			-	-	+						-	-		保存状態悪い	
クワ科			-	-	+						-	-		保存状態悪い	
タンポポ亜科			-	-	+						-	-		保存状態悪い	
キク亜科			-	+	-						+	+		保存状態悪い	
シダ類			+	+	+						+	+		保存状態悪い	
植物珪酸体分析(概査)			△	△	△						△	△			
イネ属			-	-	-						-	+			
			+	+	+						-	-			
			+	-	-						-	-			
タケ亜科			+	+	+						○	○			
ヨシ属			+	+	-								+		
ススキ属			-	-	+						+	-			

注)×:検出されず、+:微量、△:少量、○中量、空欄:概査非実施。

表2 相良頼景館跡の植物珪酸体分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群	学名	北側土塁トレンチ					北側堀トレンチ	
		D-18	D-18	D-17	D-18	D-20	H-27	H-28
		整地層 ①	整地層 ②	1	2	3	2	3
イネ科	Gramineae							
イネ	<i>Oryza sativa</i>	34	41	20	15	21	16	15
ムギ類(穎の表皮細胞)	<i>Hordeum-Triticum</i> (husk Phytolith)			5				
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	5	5		5			5
キビ族型	Paniceae type	5	5	5	5	5	5	5
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	34	26	10	5	5	5	5
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	25	15	10	21	5	11	15
タケ亜科	Bambusoideae							
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	25	20	20	15	16	16	5
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	93	51	25	41	10	42	10
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	10	10	10	5	5	11	10
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	5			5	10	5	5
マダケ属型	<i>Phyllostachys</i>	39	46	30	46	21	11	10
未分類等	Others	29	51	40	26	26	21	25
その他のイネ科	Others							
表皮毛起源	Husk hair origin	5	10	5	5	5	11	15
棒状珪酸体	Rod-shaped	79	77	60	62	42	16	56
未分類等	Others	128	92	94	83	73	53	56
樹木起源	Arboreal							
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>	5	5	5	5			5
クスノキ科	Lauraceae				5	5		
マンサク科(イスノキ属)	<i>Distylium</i>				5	5	5	5
その他	Others	10	20	10	5	10	11	20
植物珪酸体総数	Total	530	475	348	361	268	236	268

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²・cm): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.01	1.20	0.58	0.46	0.62	0.46	0.45
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.31	0.32		0.33			0.32
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.43	0.32	0.12	0.06	0.07	0.07	0.06
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.28	0.24	0.23	0.18	0.18	0.18	0.06
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.45	0.25	0.12	0.20	0.05	0.20	0.05
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.07	0.08	0.07	0.04	0.04	0.08	0.08
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.01			0.02	0.03	0.02	0.02

タケ亜科の比率(%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	35	42	54	42	60	38	30
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	55	44	28	46	17	42	24
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	9	14	18	9	13	16	38
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	2			4	10	3	8
メダケ率	Medake ratio	89	86	82	87	77	80	54

(2)植物珪酸体分析

概査結果を表1に、通常分析結果を表2に示す。検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、結果を表2、図3に示す。主要な分類群について顕微鏡写真を示す(図版1)。

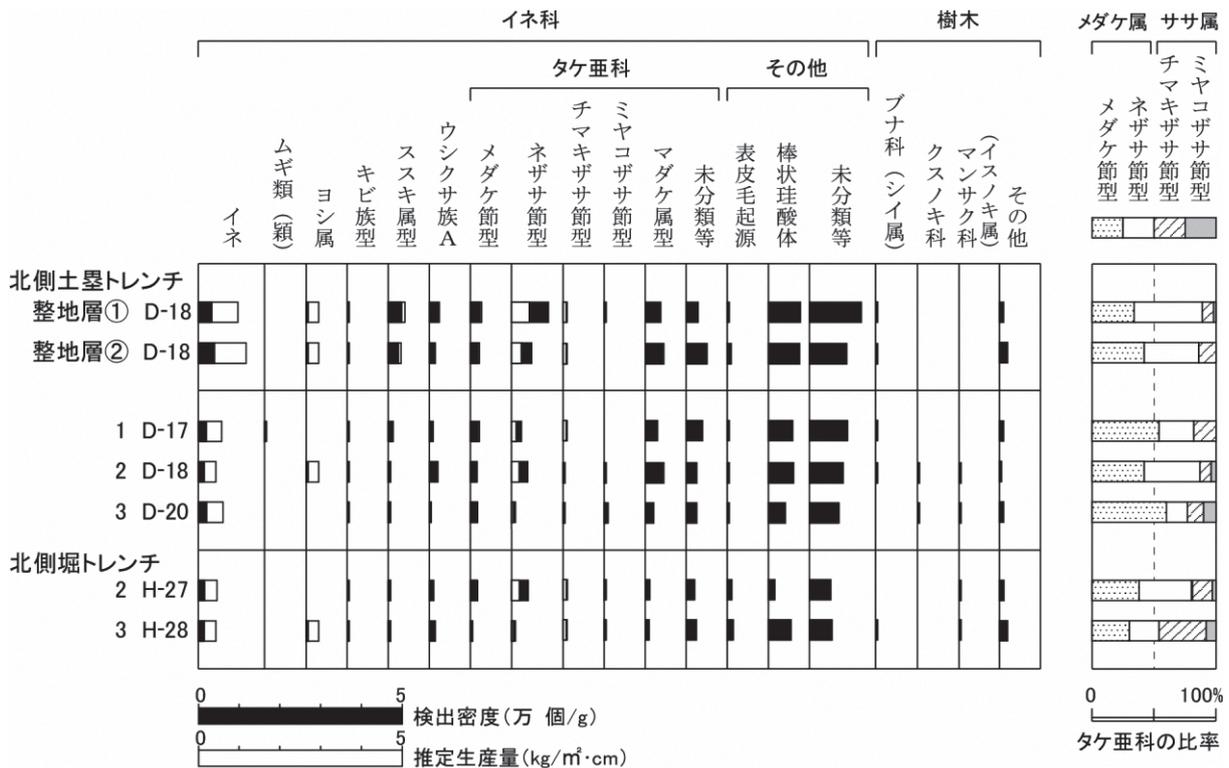


図3 相良頼景館跡の植物珪酸体分析結果

・イネ科

イネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ族A(チガヤ属など)

・イネ科—タケ亜科

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節など)、マダケ属型(マダケ属、ホウライチク属)、未分類等

・イネ科—その他

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、未分類等

・樹木

ブナ科(シイ属)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)、その他

植物珪酸体の検出状況は以下の通りである。

北側土塁トレンチの整地層①(D-18)と整地層②(D-18)では、イネが比較的多く検出され、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、マダケ属型、および樹木(照葉樹)のブナ科(シイ属)なども認められた。イネの密度は、整地層①では3,400個/g、整地層②では4,100個/gと比較的高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/g(状況により3,000個/gとする場合もある)に近い。おもな分類群の推定生産量によると、両試料ともイネが優勢となっている。

北側土塁トレンチの試料番号1(D-17)、2(D-18)、3(D-20)および北側堀跡トレンチの試料番号2(H-27)、3(H-28)でも、おおむね同様の結果であり、すべての試料からイネが検出された。イネの密度は1,500~2,100個/gと比較的低い値である。また、北側土塁トレンチの試料番号1(D-17)ではムギ類(穎の表皮細胞)が検出された。

密度は500個/gと低い値であるが、穎(籾殻)が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でも過大に評価する必要がある。また、部分的に樹木(照葉樹)のブナ科(シイ属)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)が認められた。

(3)種実遺体分析

結果を表3に示す。8試料合計10.36kgを洗い出した結果、炭化種実、炭化材、土器片、植物片、種実等が検出された。なお、炭化していない種実や植物片は後代の混入と判断されるため、考察より除外する。

北側土壘トレンチの整地層①直上(D-17)(試料800g)は、炭化種実9個、炭化材0.64g(最大1.1cm)、炭化材主体1.06g、岩片主体59.14g、土器片4個5.92g(最大3.3cm)、植物片0.05gが検出された。炭化種実は、栽培植物のイネ籾(基部)7個、草本のイヌタデ近似種1個、イヌコウジュ属1個に同定された。

整地層①(D-18)(試料2100g)は、炭化種実35個、不明炭化物2個(残存径3.9mm)、炭化材1.15g(最大0.9cm)、炭化材主体2.06g、岩片主体148.97g、土器片1個2.06g(最大2.9cm)、植物片0.11g、種実2個(草本のザクロソウ)が検出された。炭化種実は、栽培植物のアワの果実1個、イネ籾(基部)15個、籾片2個、玄米8個と、草本のイネ科1個、タデ属2個に同定された。6個は保存状態不良の破片で不明としたが、穀類片の可能性がある。

整地層②(D-18)(試料1275g)は、炭化種実8個、炭化材0.85g(最大1.0cm)、炭化材主体2.14g、岩片主体73.12g、土器片3個3.32g(最大2.0cm)、植物片0.06g、種実1個(草本のメシバ近似種)が検出された。炭化種実は、栽培植物の栽培植物のアワの穎果1個、イネ籾(基部)2個、玄米1個、コムギ2個、草本のタデ属2個に同定された。

北側堀跡トレンチは、試料番号1(H-26)、2(H-27)、3(H-28)、4(H-29)の計4点(2915cc5.31kg)より、炭化材0.001g未満(最大2.9mm)、岩片主体341.16g、植物片0.01g、植物片主体0.26gが検出された。

北側トレンチ堀2覆土2層炭化物層(試料872g)は、炭化種実10個、炭化材0.84g(最大1.4cm)、炭化材主体1.45g、岩片主体42.09g、植物片0.03g、種実1個(草本のカヤツリグサ属)が検出された。炭化種実は、栽培植物のイネ籾(基部)1個、籾・玄米1個、穎果(玄米)5個、オオムギ1個、ソバ種子2個に同定された。

以下、炭化種実各分類群の形態的特徴等を記す。

・アワ(*Setaria italica* (L.) P.Beauv.) イネ科エノコログサ属

果実は径 1.7mm、穎果は径 1.2 mm の半偏球体で背面は丸みがあり腹面は平ら。穎果は基部正中線上に馬蹄形の胚の凹みがある。表面に残る果皮片は薄く、表面には横方向に目立つ微細な顆粒状突起が配列する。

・イネ(*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

籾(内外穎)は完形ならば長さ 6~7.5mm、幅 3~4mm、厚さ 2~3mm 程度の扁平な長楕円体。基部に大きさ 1mm 程度の斜切状円柱形の果実序柄(小穂軸)と 1 対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は 5 脈、内穎は 3 脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや扁平な長楕円形の稲籾を構成する。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が縦列する。出土籾 1 個は基部(小穂軸)であり、残存長 1.0mm を測る。

玄米(炭化米、穎果)はやや扁平な長楕円体、基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で内外穎の縫合部痕の縦隆条がある。炭化米の計測値は、整地層①が長さ 3.74mm、幅 2.54mm、厚さ 1.86mm、堀 2 が長さ 4.05mm、幅 2.57mm、厚さ 1.71mm である。佐藤(1988)による炭化米の「粒大(長さ×幅)」、「粒形(長さ/幅)」は、整地層①が粒大 9.50、粒形 1.47、堀 2 が粒大 10.41、粒形 1.58 となり、2 個とも短粒極小型に該当する。

・オオムギ(*Hordeum vulgare* L.) イネ科オオムギ属

穎果は残存長 4.66mm、残存厚 2.47mm のやや扁平な紡錘状長楕円体、両端は尖るが基部を欠損する。腹面正中線上にやや深く深い縦溝があり、背面基部正中線上の胚の痕跡を欠損する。表面は粗面で微細な縦筋がある。

表3 相良頼景館跡の種実遺体分析・炭化材同定結果

分類群・部位・状態・粒径	北側土壘トレンチ			北側堀跡トレンチ				北側トレンチ	備考	
	D-17	D-18	D-18	H-26	H-27	H-28	H-29	堀2		
	整地層①直上	整地層①	整地層②	1	2	3	4	覆土2層炭化物層		
炭化種実										
アワ	果実	完形未満	-	1	-	-	-	-	(個)状態不良	
	穎果	完形未満	-	-	1	-	-	-	(個)状態不良	
イネ	籾(基部)	破片	7	15	2	-	-	-	1(個)	
	籾	破片	-	2	-	-	-	-	(個)	
	籾・玄米	破片	-	-	-	-	-	-	1(個)堀2覆土2層玄米6個合計0.02g	
	玄米(穎果)	完形	-	1	-	-	-	-	1(個)整地層①長さ3.74mm,幅2.54mm,厚さ1.86mm	
		完形未満	-	2	-	-	-	-	4(個)堀2:長さ4.05mm,幅2.57mm,厚さ1.71mm	
		破片	-	5	1	-	-	-	(個)	
オオムギ	穎果	完形未満	-	-	-	-	-	-	1(個)<0.01g,残存長4.66mm,残存厚2.47mm	
コムギ	穎果	完形未満	-	-	1	-	-	-	(個)状態不良残存長2.41,幅1.99,厚さ1.59mm	
		破片	-	-	1	-	-	-	(個)残存長2.59mm	
イネ科	穎果	完形	-	1	-	-	-	-	(個)野生種の可能性	
イヌタデ近似種	果実	完形	1	-	-	-	-	-	(個)	
タデ属	果実	完形未満	-	2	-	-	-	-	(個)2面体,左右非対称	
		破片	-	-	2	-	-	-	(個)	
ソバ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	1(個)ソバ2個合計0.01g,長さ3.25mm,径2.28mm	
		完形未満	-	-	-	-	-	-	1(個)長さ3.26,径2.21mm	
イヌコウジュ属	果実	完形	1	-	-	-	-	-	(個)	
不明(穀類)	穎果	破片	-	6	-	-	-	-	(個)状態不良	
不明炭化物		破片	-	2	-	-	-	-	(個)残存径3.88mm	
炭化材										
アカガシ亜属			-	5	5	-	-	-	4(個)	
炭化材			10.77	9.14	9.63	-	1.92	2.94	2.73	13.52 最大径(mm)
	>4mm		0.33	0.12	0.06	-	-	-	-	0.36 乾重(g),一部樹種同定・年代測定
	4-2mm		0.31	1.03	0.78	-	-	-	-	0.48 乾重(g)
炭化材主体	2-1mm		0.61	0.96	1.04	-	-	<0.001	-	0.68 乾重(g)
	1-0.5mm		0.45	1.10	1.10	-	<0.001	<0.001	-	0.77 乾重(g)
岩片主体	>4mm		22.56	56.69	18.21	30.32	12.18	37.37	41.87	20.68 乾重(g)
	4-2mm		6.25	19.26	10.03	3.84	7.25	21.30	20.53	5.59 乾重(g)
	2-1mm		12.38	29.55	18.19	3.79	7.79	21.98	25.31	7.09 乾重(g)
	1-0.5mm		17.95	43.48	26.70	5.75	13.33	35.16	53.39	8.73 乾重(g)
土器片			5.92	2.06	3.32	-	-	-	-	乾重(g)
			33.00	28.57	20.39	-	-	-	-	最大径(mm)
			4	1	3	-	-	-	-	(個)
非炭化種実										混入の可能性
メヒシバ近似種	果実	完形	-	-	1	-	-	-	-	(個)<0.01g
カヤツリグサ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	1(個)<0.01g
ザクロソウ	種子	完形	-	2	-	-	-	-	-	(個)<0.01g
植物片			0.05	0.11	0.06	<0.001	<0.001	<0.001	0.01	0.03 乾重(g),混入の可能性
植物片主体			-	-	-	<0.001	0.12	0.11	0.04	乾重(g),混入の可能性
分析量			800	2100	1275	450	920	740	805	容積(cc)
						805	1557	1390	1558	872 湿重(g)

・コムギ(*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

穎果は長さ3.0~4.0mm、幅2.1~3.0mm、厚さ1.8~2.3mmの丸みを帯びた楕円体。整地層②出土穎果は残存長2.41mm、幅1.99mm、厚さ1.59mmと、残存長2.59mmを測る。腹面正中線上にやや深く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり長径1mm程度丸く窪む。表面には微細な粒状模様が縦列する。

・イネ科(Gramineae)

穎果は長さ0.9mm、幅0.7mm程度のやや扁平な長楕円体。背面基部正中線上に長さ0.4mm程度の楕円形の胚の痕跡がある。表面は粗面で微細な縦筋がある。アワの成熟個体とは区別され、野生種の可能性がある。

・ソバ(*Fagopyrum esculentum* Moench) タデ科ソバ属

種子は長さ3.25mm、径2.28mmと長さ3.26mm、径2.21mmの三稜状広卵体。頂部はやや尖り、基部は切形。

(4)炭化材同定

結果を表3に示す。北側土壘トレンチの整地層①(D-18)、整地層②(D-18)の各5点と、北側トレンチの堀2覆土2層炭化物層の4点の、計14点は、全て常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属に同定された。一方、北側堀跡トレンチの炭化材は微小な細片で同定ができない大きさであった。以下、植物解剖学的所見を記す。

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有す。放射組織は同性、単列で1~15細胞高のものと、複合放射組織とがある。

表4 相良頼景館跡の放射性炭素年代測定結果

試料	性状	分析方法	測定年代 (暦年較正用) yrBP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代						Code No.			
					年代値								確率 %	
					σ	cal AD	1277 -	cal AD	1291	673 -	660 cal BP	68.3		
北側土壘 トレンチ 整地層①-1	炭化材 (アカガシ 亜属)	AAA (1M)	710±15 (710±17)	-27.75 ±0.17	σ	cal AD	1277 -	cal AD	1291	673 -	660 cal BP	68.3	-	PLD- 46491
					2σ	cal AD	1272 -	cal AD	1300	679 -	651 cal BP	95.4		
北側土壘 トレンチ 整地層①-2	炭化材 (アカガシ 亜属)	AAA (1M)	740±20 (742±20)	-28.74 ±0.27	σ	cal AD	1269 -	cal AD	1282	682 -	668 cal BP	68.3	-	YU- 16034
					2σ	cal AD	1230 -	cal AD	1243	720 -	707 cal BP	4.0		
					2σ	cal AD	1257 -	cal AD	1293	693 -	657 cal BP	91.5		
北側土壘 トレンチ 整地層 ②-1	炭化材 (アカガシ 亜属)	AAA (1M)	600±15 (601±17)	-26.56 ±0.19	σ	cal AD	1319 -	cal AD	1359	632 -	591 cal BP	56.6	-	PLD- 46493
					2σ	cal AD	1305 -	cal AD	1365	645 -	585 cal BP	76.3		
					2σ	cal AD	1383 -	cal AD	1402	567 -	549 cal BP	19.1		
北側土壘 トレンチ 整地層 ②-2	炭化種実 (コムギ)	AAA (1M)	600±15 (602±17)	-24.13 ±0.25	σ	cal AD	1320 -	cal AD	1359	633 -	591 cal BP	56.5	-	PLD- 46492
					2σ	cal AD	1389 -	cal AD	1397	562 -	554 cal BP	11.8		
					2σ	cal AD	1305 -	cal AD	1365	645 -	585 cal BP	76.6		
北側土壘 トレンチ 整地層①	炭化種実 (イネ)	AAA (1M)	555±15 (553±17)	-24.82 ±0.14	σ	cal AD	1329 -	cal AD	1336	621 -	615 cal BP	8.9	-	PLD- 46490
					2σ	cal AD	1396 -	cal AD	1419	554 -	532 cal BP	59.4		
					2σ	cal AD	1326 -	cal AD	1352	625 -	599 cal BP	27.0		
北側 トレンチ 堀2 覆土2層 炭化物層	炭化種実 (イネ)	AAA (1M)	425±20 (423±20)	-30.77 ±0.23	σ	cal AD	1443 -	cal AD	1466	507 -	485 cal BP	68.3	pal-	PLD- 49539
					2σ	cal AD	1434 -	cal AD	1485	516 -	465 cal BP	95.4		
	炭化種実 (オオムギ)	AAA (1M)	395±20 (395±19)	-29.93 ±0.20	σ	cal AD	1452 -	cal AD	1490	499 -	460 cal BP	68.3	pal-	PLD- 49540
2σ					cal AD	1446 -	cal AD	1508	505 -	442 cal BP	82.2			
北側堀跡 トレンチ 1~4	炭化材 (細片のた め 樹種同定 不能)	AAA (1M)	1400±20 (1400±18)	-24.45 ±0.27	σ	cal AD	611 -	cal AD	617	1340 -	1333 cal BP	9.5	-	PLD- 46494
					2σ	cal AD	640 -	cal AD	658	1310 -	1292 cal BP	58.7		
					2σ	cal AD	605 -	cal AD	629	1345 -	1321 cal BP	25.3		
2σ	cal AD	634 -	cal AD	662	1316 -	1288 cal BP	70.1							

- 1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4)AAAは、酸・アルカリ・酸処理、AaAはアルカリの濃度を下げたことを示す。
- 5)暦年の計算には、OxCal v4.4を使用
- 6)暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
- 7)較正データセットは、IntCal20を使用。
- 8)較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9)統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.3%、 2σ が95.4%である

(5)放射性炭素年代測定

結果を表 4、図 4 に示す。今回は加速器質量分析計による年代測定に必要な炭素量は十分回収できている。

同位体補正を行った各試料の年代値は、北側土壘トレンチの整地層①-1(D-18)(アカガシ亜属)が 710±15BP、整地層①-2(D-18)(アカガシ亜属)が 740±20BP、整地層②-1(D-18)(アカガシ亜属)と整地層②-2(D-18)(コムギ)がともに 600±15BP、整地層①(D-18)(イネ)が 555±15BP、北側トレンチの堀 2 覆土 2 層炭化物層(イネ)が 425±20BP、堀 2 覆土 2 層炭化物層(オオムギ)が 395±20BP、北側堀跡トレンチの試料番号 1~4(H-26~29)の炭化材(細片を集めたもの)が 1400±20BP である。

測定誤差 2σ の暦年代は、整地層①-1 が calAD1272~1300、整地層①-2 が calAD1230~1293、整地層②-1 が calAD1305~1402、整地層②-2 が calAD1305~1401、整地層①が calAD1326~1423、堀 2 覆土 2 層炭化物層のイネが calAD1434~1485、オオムギが calAD1446~1619、北側堀跡が calAD 605~662 である。

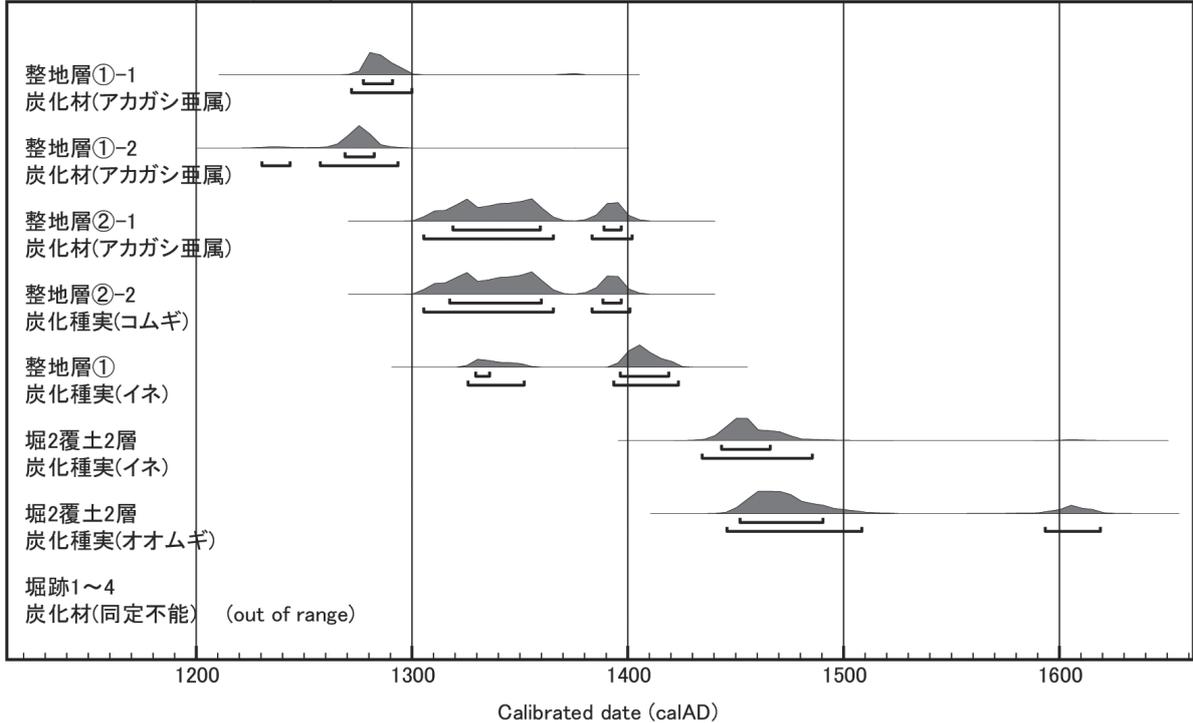


図4 相良頼景館跡の暦年較正結果

4.考察

概査分析の結果、整地層も堀跡堆積物も火山灰の産状は不良であった。これは多良木町の地理的位置が第一の理由として挙げられる。九州地方南部における比較的新しい時代(例えばシラスの噴出した3万年前以降)に活発な噴火活動のあった火山は、霧島火山、桜島火山、開聞岳火山であるが、これら火山を給源とする火山灰の分布は、火山から東方あるいは北東方を軸としており、これら火山のほぼ真北に位置する人吉盆地にはほとんど火山灰の降灰がなかったことが推定される。特に霧島火山は距離的にも多良木町に近く、中世に比較的大規模なテフラの噴出(AD1235年の霧島御鉢高原テフラ:Kr-Th)もあったが、長岡ほか(2010)などの記載を参照すれば、上述したようにその位置的関係により、多良木町は分布範囲外である可能性が高い。なお、テフラを構成する碎屑物も下記の珪藻や植物珪酸体と同様に珪酸分を主体とする碎屑物であり、堆積後の環境によっては分解消失する可能性はある。しかし、その場合でもKr-Thの主な構成物であるスコリアが完全に消失することは考えにくく、風化変質したスコリアの残片などが認められることが考えられる。今回の分析ではそのような碎屑物も全く認められなかったことから、Kr-Th自体の降下堆積がなかった可能性が高いと考えられる。

また、植物珪酸体を除いた珪藻や花粉の産状も不良であり、堀跡堆積物では種実や木材の産状も不良であった。珪藻や植物珪酸体はガラス化した珪酸分から成る。比較的分解に強いが、乾湿を繰り返す場所や、水質が塩基性もしくは水温が高い状態では、溶解しやすいことが知られている。花粉や種実の主成分はセルロース等の有機物である。これらは好気的環境下では細菌等により分解しやすい。以上のことから、当時の地表面など好気的で乾湿を繰り返すような状態と考えられ、化石が残りにくかった可能性がある。

種実遺体分析の結果、北側土塁トレンチの整地層①直上(D-17)、整地層①(D-18)、整地層②(D-18)、北側トレンチ堀2覆土2層炭化物層からは、炭化種実の他、炭化材、土器片などの遺物が確認された。

炭化種実には、栽培植物のイネの籾や短粒極小型を含む炭化米、アワ、オオムギ、コムギ、ソバと、草本のイネ科、イヌタデ近似種、タデ属、イヌコウジュ属が確認され、整地層①のイネが14世紀前半～15世紀前半、整地層②のコムギが14世紀初頭～15世紀初頭、堀2覆土2層炭化物層のイネが15世紀前半～後半、オオムギが15世紀半ば～17世紀前半の暦年代を示した。オオムギは年代幅が広がっているが、これは当該期の較正曲線が波打っていることに由来する。

穀類のイネ、アワ、オオムギ、コムギ、ソバは、相良頼景館跡近辺で栽培されたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食糧と示唆され、火を受けたとみなされる。また、一部のイネ、アワの炭化穀粒表面に果皮(籾)が残ることから、脱粃(だっぴ; 籾殻を取り去る)前の段階で火を受けたと推測される。

栽培植物を除いた分類群は、草本で中生植物のイネ科、イヌタデ近似種、タデ属、イヌコウジュ属は、調査区周辺の明るく開けた草地に生育していたと考えられ、火を受けたとみなされる。

種実遺体分析で検出された炭化材は、一部の樹種同定と年代測定の結果、全て常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属に同定され、整地層①-1が13世紀後半～末、整地層①-2が13世紀前半～末、整地層②が14世紀初頭～15世紀初頭の暦年代を示した。

アカガシ亜属は、現在でも遺跡周辺の自然度の高い場所に自生する。アカガシ亜属は、常緑広葉樹林の主要な構成種であり、当時の山野にも普通に生育していたと考えられる。アカガシ亜属は非常に重堅な木材で、古くから農耕具として用いられるほか、火持ちが良いため薪炭材としても有用である。なお、アカガシ亜属の炭化材は堅牢であるため、土壌を水洗した場合でも壊れにくい。本分析調査でアカガシ亜属のみが同定されたのは、当時の植物利用を反映しているということではなく、堅牢という木材の性質によると考えられる。

また、これらの炭化穀類やアカガシ亜属炭化材から得られた年代は、文献資料等から推定された相良氏の中世期の館の存続年代を含んでおり、館の存続年代を示す科学的な証拠となり得るものとして評価することができる。

一方、北側堀跡トレンチの H-26～29 からは、種実の確認されず、炭化材がわずかに検出されるのみであった。さらに炭化材の細片を集めたものが、館の構築年代よりもはるかに古い 7 世紀初頭～中頃の暦年代を示した。これは、試料が抽出された土層の堀内における堆積年代を示すものではなく、土壌が堀内に流れ込む前に、周辺の地表で土壌が形成された頃に混入した古い時代の炭化材に由来する年代であると考えられる。

植物珪酸体分析の結果、北側土壘トレンチの整地層①(D-18)、整地層②(D-18)、D-17、18、20)、北側堀跡トレンチのH-27、28の全ての試料からイネが検出され、一部の試料でムギ類(穎の表皮細胞)も認められた。北側土壘トレンチ整地層①や整地層②からはイネやコムギ、アワ、堀2覆土2層炭化物層からはイネやオオムギの炭化種実も検出されていることも考慮すれば、当時は調査区周辺でイネやムギ類の栽培が行われていたと考えられ、その土壌(耕作土)が遺構構築の際に利用されたと推定される。

各層準の堆積当時は、周辺にススキ属、ウシクサ族(チガヤ属など)、キビ族などのイネ科草本類、マダケ属(おもにネザサ節)、マダケ属・ホウライチク属などの竹笹類が生育しており、部分的にヨシ属が生育するような湿潤なところも存在していたと考えられる。また、周辺地域にはシイ属、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

全ての試料から検出されたマダケ属型には、マダケ属とホウライチク属が含まれている(杉山・藤原,1986; 杉山,1987)。このうち、マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものも多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高い。また、ホウライチク属は生け垣や編み細工などに利用され、稈の繊維は火縄銃の火縄に利用された。植物珪酸体分析でマダケ属型が確認されるのは、おおむね中世以降であり、一般的に見られるようになるのは近世以降である。

引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*,51,337-360.
- 藤原宏志,1976,プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法―. *考古学と自然科学*,9,15-29.
- 藤原宏志・杉山真二,1984,プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―. *考古学と自然科学*,17,73-85.
- 林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. *木材研究・資料*,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. *木材研究・資料*,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. *木材研究・資料*,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. *木材研究・資料*,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. *木材研究・資料*,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社,449p.
- 長岡信治・新井房夫・檀原 徹,2010,宮崎平野に分布するテフラから推定される過去60万年間の霧島火山の爆発的噴火史. *地学雑誌*,119,121-152.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑(2010年改訂版). 東北大学出版会,678p.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62,1-33..
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 佐藤敏也,1988,弥生のイネ. 弥生文化の研究 2 生業,金関 怨・佐原 真編,雄山閣,97-111.
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.
- Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.
- 杉山真二・藤原宏志,1986,機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定―古環境推定の基礎資料として―. *考古学と自然科学*,19,69-84.
- 杉山真二,1987,タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告,31,70-83.
- 杉山真二,1999,植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史. 第四紀研究,38,109-123.
- 杉山真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール). *考古学と植物学*. 同成社,189-213.
- 杉山真二,2009,植物珪酸体と古生態. 人と植物の関わりあい④. 大地と森の中で―縄文時代の古生態系―. 縄文の考古学Ⅲ. 小杉康ほか編. 同成社,105-114.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2018,草木の種子と果実―形態や大きさが一目でわかる734種 増補改訂―. ネ

イチャーウォッチングガイドブック,誠文堂新光社,303p.

椿坂恭代,1993,アワ・ヒエ・キビの同定.吉崎昌一先生還暦記念論集「先史学と関連科学」,261-281.

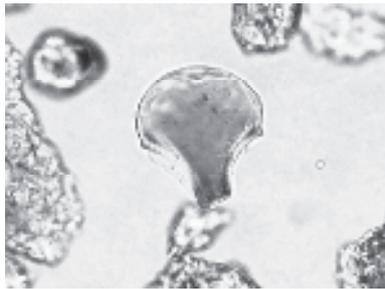
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

令和3年度 多良木相良氏関連遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析(年代測定)業務(No. 29011-1)

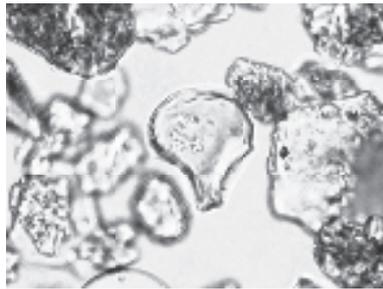
令和3年度 多良木相良氏関連遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析業務(No. 29011-2)

令和4年度 多良木相良氏関連遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析業務委託(No. 32993)

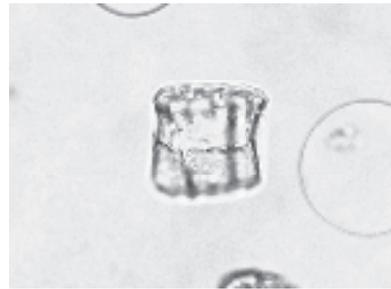
図版1 相良頼景館跡の植物珪酸体



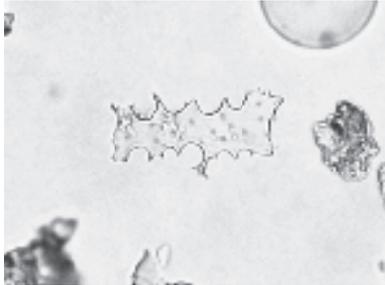
イネ
整地層①



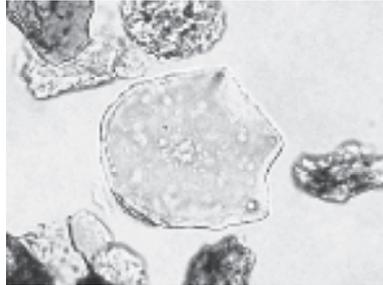
イネ
北側土塁 3



イネ(側面)
整地層①



ムギ類(穎の表皮細胞)
北側土塁 1



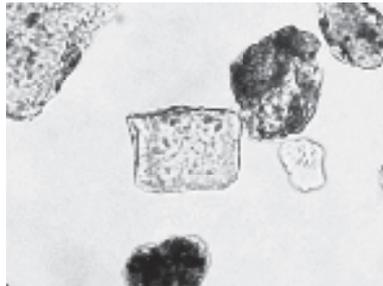
ヨシ属
整地層①



キビ族型
北側土塁 1



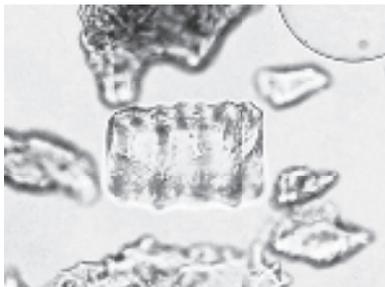
ススキ属型
整地層①



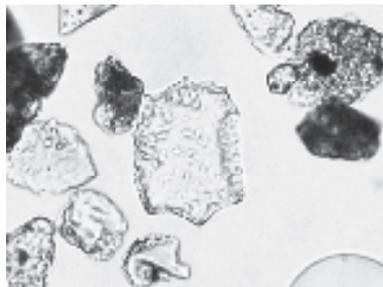
ウシクサ族A
北側土塁 1



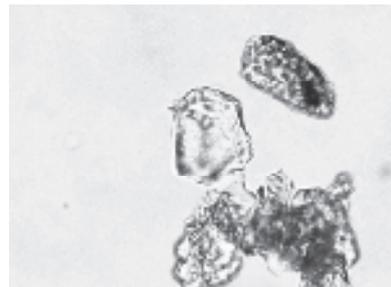
メダケ節型
北側土塁 2



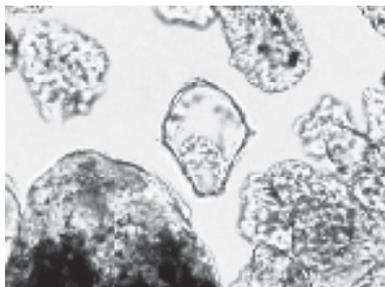
ネザサ節型
北側堀 2



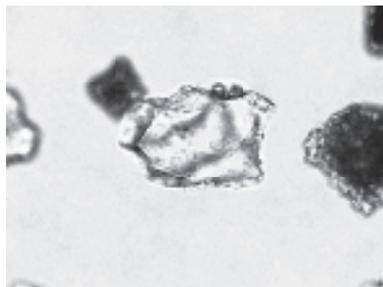
チマキザサ節型
北側堀 3



ミヤコザサ節型
北側土塁 2



マダケ属型
北側土塁 3



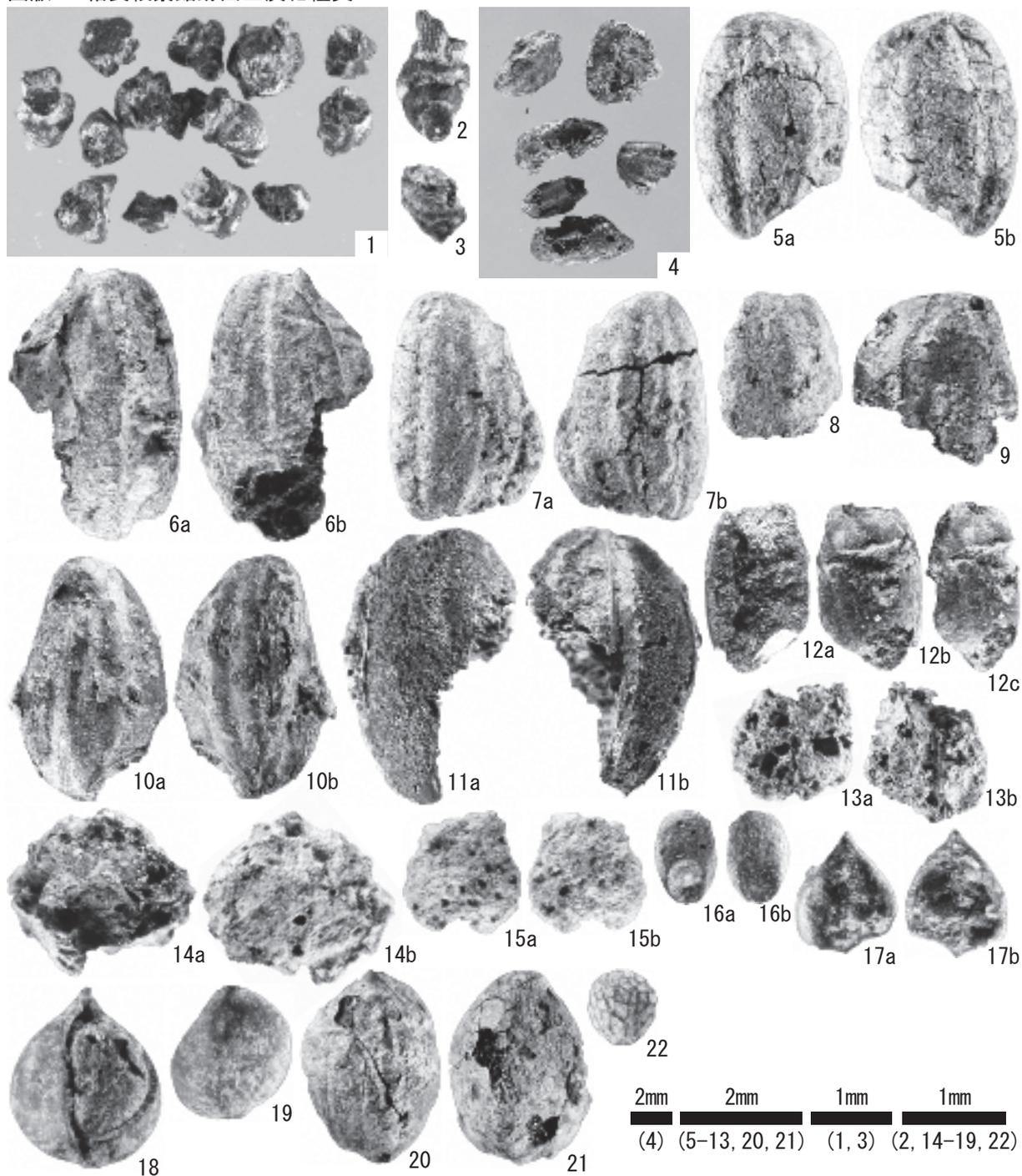
ブナ科(シイ属)
北側土塁 2



マンサク科(イスノキ属)
北側堀 3

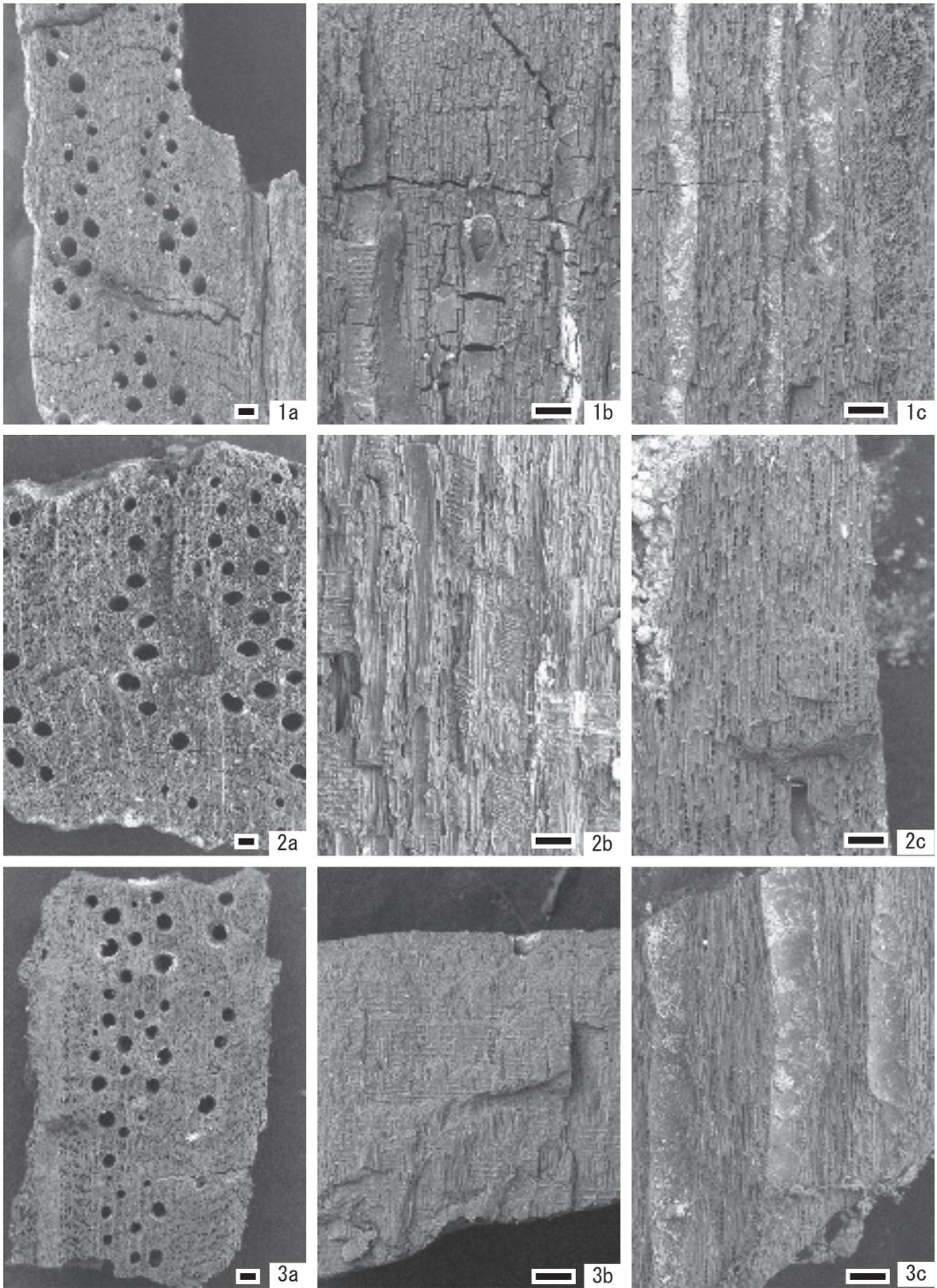
50 μm

図版2 相良頼景館跡出土炭化種実



- | | |
|------------------------------------|--------------------------------------|
| 1. イネ 粃(基部) (北側土壘; 整地層①) | 2. イネ 粃(基部) (北側土壘; 整地層①) |
| 3. イネ 粃(基部) (北側トレンチ 堀2 覆土2層; 炭化物層) | 4. イネ 粃・玄米(北側トレンチ 堀2 覆土2層; 炭化物層) |
| 5. イネ 玄米(北側土壘; 整地層①) | 6. イネ 玄米(北側土壘; 整地層①) |
| 7. イネ 玄米(北側土壘; 整地層①) | 8. イネ 玄米(北側土壘; 整地層②) |
| 9. イネ 粃・玄米(北側トレンチ 堀2 覆土2層; 炭化物層) | 10. イネ 玄米(穎果) (北側トレンチ 堀2 覆土2層; 炭化物層) |
| 11. オオムギ 穎果(北側トレンチ 堀2 覆土2層; 炭化物層) | 12. コムギ 穎果(北側土壘; 整地層②) |
| 13. コムギ 穎果(北側土壘; 整地層②) | 14. アワ 果実(北側土壘; 整地層①) |
| 15. アワ 穎果(北側土壘; 整地層②) | 16. イネ科 穎果(北側土壘; 整地層①) |
| 17. イヌタデ近似種 果実(北側土壘; 整地層①) | 18. タデ属 果実(北側土壘; 整地層①) |
| 19. タデ属 果実(北側土壘; 整地層①) | 20. ソバ 種子(北側トレンチ 堀2 覆土2層; 炭化物層) |
| 21. ソバ 種子(北側トレンチ 堀2 覆土2層; 炭化物層) | 22. イヌコウジュ近似種 果実(北側土壘; 整地層①) |

図版3 相良頼景館跡出土炭化材



1. アカガシ亜属(北側土塁トレンチ; 整地層①)
2. アカガシ亜属(北側土塁トレンチ; 整地層②)
3. アカガシ亜属(北側トレンチ 堀2 覆土2層; 炭化物層)

a: 木口 b: 柱目 c: 板目
スケールは100 μ m

はじめに

本分析調査では、東光寺の磨崖梵字内黒色付着物の材質を検討するために、電子顕微鏡観察を実施する。また、磨崖梵字の崖線下の岩盤直上の堆積層であるグライ化した層を構成する土壌と、石窟奥壁付近の土壌を対象として、種実遺体や炭化材等の微細遺物の洗い出し抽出・同定および放射性炭素年代測定を実施し、時期や周辺環境、植物利用に関する資料を作成する。

I. 梵字付着物電子顕微鏡観察

1. 試料

試料は、崖線を構成する岩石に彫られた梵字内の黒色付着物 1 点である。

2. 分析方法

崖線を構成する岩石に彫られた梵字内部の黒色付着物を、カーボン両面テープを用いて剥がす。デジタルマイクロスコープや双眼実体顕微鏡下で、柄付き針等を用いて、両面テープ上の付着物を採取、新しいカーボン両面テープに裏返して貼り付ける(岩石に付着部分が表になっているため、反転させる)。これを電子顕微鏡で観察する。

3. 結果

図版1に電子顕微鏡写真を示す。付着物は脆く、両面テープからから移し替える際に、注意深く作業しないと簡単に崩れる。電子顕微鏡観察の結果、1~2 μ m程度の不定形の物質が多数吸着しているように見える。漆などの塗料表面は基本的に平滑で、このような形状にならない。また、墨粒子(0.1~0.2 μ m)とも大きさの点で区別される。これらは、空中を漂っている1~2 μ m程度の塵と考えられる。細かな塵は、窪みの中では風雨による影響を受けにくいいため、徐々に溜まって黒ずんでみえるようになったと考えられる。

II. 岩盤直上(12 層)・石窟奥壁付近の分析

1. 試料

試料は、岩盤直上のグライ土層(12 層)より採取された土壌 1 点と、石窟奥壁付近より採取された土壌 1 点の、計 2 点である。調査所見によれば、岩盤直上(12 層)は、崖線下の現表土から 1.6m 下にグライ化した層が確認されている。この堆積層の年代と磨崖梵字作成の年代とは異なるものとされているが、具体的な年代は不明とされる。

2. 分析方法

(1) 種実遺体分析

岩盤直上(12 層)試料は水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。石窟奥壁付近試料は、常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径 0.5mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す。残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。

水洗後、水に浮いた試料(炭化物主体)と水に沈んだ試料(岩片主体)を、粒径別に常温乾燥させる。乾燥後

の試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体の他、主に 4mm 以上の炭化材をピンセットで抽出する。種実遺体の同定は、現生標本や中山ほか(2010)、鈴木ほか(2018)等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。炭化材は重量と最大径、炭化材主体、岩片主体、植物片は重量を一覧表に併記する。

分析後は、一部の炭化材を同定と年代測定に供する。他の抽出物と残渣は容器に入れて保管する。

(2)炭化材同定

試料は、種実遺体分析で得られた炭化材のうち、大きなもの各 2 点の、計 4 点を対象とする。炭化材は微小で年代測定用と樹種同定用に分割できないため、年代測定用試料調製を行う際に木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の 3 断面を作成し、双眼実体顕微鏡で観察する。分割した試料も含め、全てを年代測定用試料とする。木材組織特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

(3)放射性炭素年代測定

試料 4 点は、炭化材同定試料と同一である。試料の表面に付着した泥などの不純物をできるだけ取り除いた後、塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L である。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置(NEC 社製)を用いて、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4(Bronk,2009)、較正曲線は IntCal20 (Reimer et al.,2020)、Bomb21 NH2(Hua et. al.,2021)である。

3.結果

(1)種実遺体分析

結果を表 1 に示す。岩盤直上(12 層)は、試料 600cc(1kg)より、炭化材 0.23g(最大 0.9cm)、炭化材主体 0.63g、岩片主体 119.17g、植物片 0.12g、種実 5 個(広葉樹のヒサカキ属、アカメガシワ、スノキ属?)が検出された。

石窟奥壁付近は、試料 1023g より、炭化材 26 個 0.26g(最大 1.1cm)、炭化材主体 0.05g、軽石主体(岩片含む)22.84g、火山ガラス主体(植物片含む)72.70g、植物片 0.77g、種実 44 個(広葉樹のコナラ属、ヒサカキ属、フユイチゴ類、キイチゴ属、タラノキ、草本のアキギリ属)が検出された。

表1. 東光寺の種実遺体分析・炭化材同定結果

分類群・部位・状態・粒径	岩盤直上の グライ土層 (12層)	石窟 奥壁付近	備考
炭化材			
スギ?	1	-	(個),年代測定
アカガシ亜属	-	2	(個),年代測定
アカガシ亜属?	1	-	(個),年代測定
炭化材	8.99	10.94	最大径(mm)
>4mm	0.05	0.13	乾重(g),一部樹種同定・年代測定
4-2mm	0.18	0.14	乾重(g),23個
炭化材主体	2-1mm	0.14	乾重(g)
	1-0.5mm	0.48	乾重(g)
岩片主体	>4mm	38.52	- 乾重(g)
	4-2mm	16.20	- 乾重(g)
	2-1mm	14.43	- 乾重(g)
	1-0.5mm	50.01	- 乾重(g)
軽石主体	>4mm	-	15.46 乾重(g),岩片含む
	4-2mm	-	7.38 乾重(g),岩片含む
火山ガラス主体	2-1mm	-	25.25 乾重(g),植物片含む
	1-0.5mm	-	47.45 乾重(g),植物片含む
植物片		0.12	0.77 乾重(g)
種実			
コナラ属 果実 破片	-	1	(個)
ヒサカキ属 種子 完形	1	31	(個)
	-	4	(個)
フユイチゴ類 核 完形	-	1	(個)
キイチゴ属 核 完形	-	2	(個)
	-	3	(個)
アカメガシワ 種子 破片	1	-	(個)
タラノキ 核 完形	-	1	(個)
スノキ属? 種子 完形	3	-	(個)
アキギリ属 果実 完形	-	1	(個)
分析量	600	-	容積(cc)
	1000	1023	湿重(g)

なお、炭化していない植物片、種実は、後代の混入と判断されるため、考察より除外する。炭化材は、岩盤直上(12層)より2点、石窟奥壁付近より2点の、計4点を炭化材同定と年代測定試料に供した。

(2)炭化材同定

結果を表1に示す。炭化材は全てを年代測定に用いたため、電子顕微鏡用の試料を作成できなかった(電子顕微鏡観察にはカーボンテープ等で試料を導通させる必要があり、これが年代測定用に影響する可能性がある)。双眼実体顕微鏡観察では、岩盤直上(12層)が常緑針葉樹のスギ?と常緑広葉樹のアカガシ亜属?、石窟奥壁付近が2点ともアカガシ亜属に同定された。以下、植物解剖学的所見を記す。

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don)? スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急である。晩材部の幅は比較的広く、細胞壁は厚い。分野壁孔はスギ型で、1分野に2個が多い。放射組織は単列、1~10細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有す。放射組織は同性、単列で1~15細胞高のものと、複合放射組織とがある。

表2. 東光寺の放射性炭素年代測定結果

試料	種別/ 性状	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代				Code No.		
					年代値			確率%			
					σ	2σ					
石窟 奥壁付近	-	炭化材 (アカガシ 亜属)	AAA (1M)	F14C: 1.0207±0.0028	-32.64 ±0.23	cal AD 1956 - cal AD 1956	5.9	pa - 14662	PLD- 49460		
						cal AD 2014 - cal AD 2016	62.4				
						cal AD 1955 - cal AD 1956	12.6				
	cal AD 2014 - cal AD 2018	82.8									
	cal AD 1698 - cal AD 1723	23.0									
	cal AD 1814 - cal AD 1835	20.6									
-	炭化材 (アカガシ 亜属)	AAA (1M)	90±20 (92±21)	-25.95 ±0.24	cal AD 1884 - cal AD 1910	24.7	pa - 14663	PLD- 49461			
					cal AD 1693 - cal AD 1726	26.3					
					cal AD 1811 - cal AD 1918	69.1					
cal AD 1053 - cal AD 1076	29.6										
cal AD 1156 - cal AD 1176	30.9										
cal AD 1194 - cal AD 1201	7.7										
岩盤直上の グライ土層 (12層)	No.1	炭化材 (スギ?)	AAA (1M)	900±15 (901±16)	-26.25 ±0.13	cal AD 1076 898 - 874 cal BP	29.6	-	PLD- 46495		
						cal AD 1176 794 - 774 cal BP	30.9				
						cal AD 1201 757 - 750 cal BP	7.7				
						cal AD 1084 904 - 867 cal BP	34.9				
						cal AD 1139 821 - 811 cal BP	2.1				
	cal AD 1149 - cal AD 1216	58.5									
	No.2	炭化材 (アカガシ 亜属?)	AAA (1M)	830±20 (832±18)	-29.30 ±0.18	cal AD 1233 738 - 717 cal BP	40.1			-	PLD- 46496
						cal AD 1260 711 - 690 cal BP	28.2				
						cal AD 1176 - cal AD 1265	95.4				
						cal AD 1076 898 - 874 cal BP	29.6				
cal AD 1176 794 - 774 cal BP						30.9					

- 1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4)AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。
- 5)暦年の計算には、Oxcal v4.4を使用
- 6)暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
- 7)1桁目を丸めるのが慣例だが、較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 8)統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である

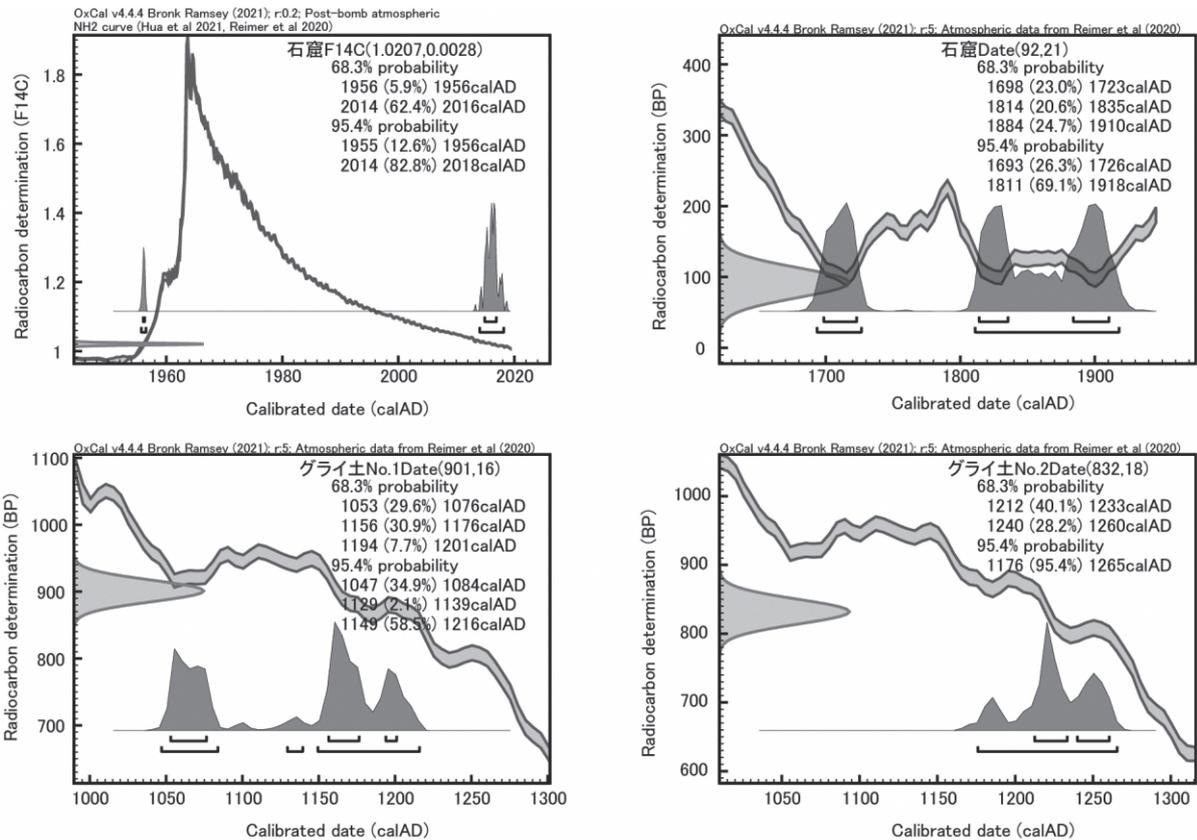


図1 東光寺の暦年較正結果

(3)放射性炭素年代測定

結果を表 2、図 1 に示す。いずれの試料も測定に必要なグラファイトが得られた。

同位体補正を行った値は、岩盤直上(12 層)の No.1(スギ?)が $900 \pm 15\text{BP}$ 、No.2(アカガシ亜属?)が $830 \pm 20\text{BP}$ 、石窟奥壁付近の pal-14662(アカガシ亜属)が現代、pal-14663(アカガシ亜属)が $90 \pm 20\text{BP}$ である。

暦年代(2 σ)は、No.1(スギ?)が calAD1047~1216、No.2(アカガシ亜属?)が calAD1176~1265、pal-14662(アカガシ亜属)が calAD1955~1956、2014~2018、pal-14663(アカガシ亜属)が calAD1693~1918 である。

4.考察

(1)岩盤直上(12 層)

岩盤直上のグライ土層(12層)から抽出された炭化材2点は、年代値が近接しており、暦年代でNo.1(スギ?)が11世紀半ば~13世紀前半、No.2(アカガシ亜属?)が12世紀後半~13世紀後半を示している。発掘調査資料によれば、磨崖梵字に係るとされる東光寺は平安時代創建の寺院とされていることから、今回の年代測定された炭化材は、東光寺創建以降の周辺での人間活動に伴うものである可能性がある。

グライ土層検出の種実遺体はいずれも炭化しておらず、保存状態がよいことから後代の混入物であるが、一方の炭化材は測定年代が示す当時に堆積した植物質遺物に由来すると考えられる。検出された種類は、常緑広葉樹のアカガシ亜属と常緑針葉樹のスギである。アカガシ亜属は、現在でも遺跡周辺の自然度の高い場所に自生する。また、常緑広葉樹林の主要な構成種であり、当時の山野にも普通に生育していたと考えられる。アカガシ亜属は、非常に重堅な木材で、古くから農耕具として用いられるほか、火持ちが良いため薪炭材としても有用である。スギも現在の遺跡周辺に多く分布しているが、これらは植林である。しかし、スギは温暖で多湿な環境を好むことから、かつては谷沿いや低地などに分布していたと考えられ、入手しやすい木材であったと考えられる。スギは太くてまっすぐな木材が得やすいこと、軽軟で加工が容易であること、水湿に強いことから、建築材をはじめ様々な用途に古くから利用されてきた木材である。今回検出されたアカガシ亜属やスギは当時利用されていた木材が火熱を受けて炭化し、残存したものと考えられる。

(2)石窟奥壁付近

種実遺体はいずれも炭化しておらず、保存状態がよいことから後代の混入物と考えられる。アカガシ亜属に同定された炭化材の年代値も、1点は現代、もう1点は約90年前を示す。アカガシ亜属は常緑広葉樹林の主要な構成種であり、極相林を構成する高木である。アカガシ亜属は長寿であり、樹齢が100年以上の樹木も珍しくない。このことから、樹心に近い部分であれば、100年前の年代値を示す可能性がある。このことから、炭化材も種実と同様、後代の混入物である可能性が高い。

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*,51,337-360.

林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

Hua Q., Turnbull J. C., Santos G. M., Rakowski A. Z., Ancapichún S., De Pol-Holz R., Hammer S., Lehman S. J., Levin I., Miller J. B., Palmer, J. G., & Turney C. S. M.,2021, Atmospheric Radiocarbon For The Period 1950-2019. *Radiocarbon*,63,1-23.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.

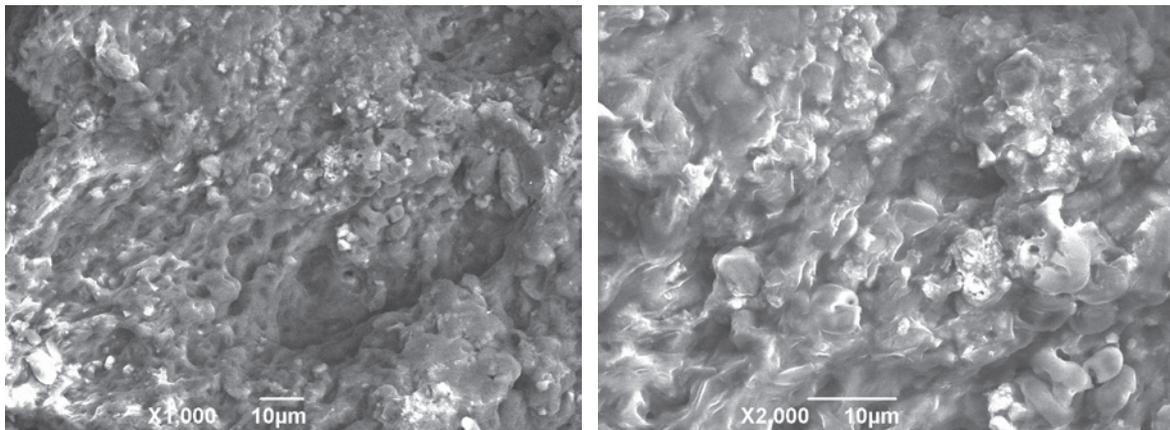
伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,449p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑(2010年改訂版).東北大学出版会,678p.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62,1-33.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p.[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2018,草木の種子と果実ー形態や大きさが一目でわかる734種 増補改訂ー.ネイチャーウォッチングガイドブック,誠文堂新光社,303p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

令和3年度 東光寺磨崖梵字の自然科学分析業務(No. 31326)

令和4年度 多良木相良氏関連遺跡群発掘調査に伴う自然科学分析業務委託(No. 32993)

図版1 東光寺の電子顕微鏡写真



梵字内付着物

人吉盆地に分布する石塔に用いられた黒色物質の材質調査

九州国立博物館 志賀 智史

はじめに

熊本県の人吉盆地には、中世の相良氏に関わる五輪塔、層塔、磨崖板碑などの石塔が数多く分布している。石塔のほとんどは凝灰岩製で、刻まれた梵字等の掘り込み内には黒色物質が塗布されているものが多い。今回、多良木町教育委員会からの依頼より、この黒色物質の材質調査を行ったので、その結果を報告する。

1. 調査資料

下記7基の石塔を調査対象とした。①～⑤は多良木町に、⑥と⑦は人吉市にある。

- ①東光寺磨崖板碑
- ②青蓮寺伝頼景塔
- ③蓮花寺跡 23 号塔
- ④蓮花寺跡 35 号塔
- ⑤多良木小隣接墓地層塔
- ⑥永国寺層塔
- ⑦大柿地区伝平重盛塔

2. 調査方法

多良木町企画観光課の永井孝宏氏の立ち合いのもと、現地において実体顕微鏡および蛍光 X 線分析を用い、非破壊、非接触にて調査を行った。調査風景を写真 1 に示す。

最初に、黒色物質等の付着状況を確認するため、実体顕微鏡観察を行った。観察には、ニコン小型双眼実体顕微鏡ファールブル（20 倍）と白色 LED ライトを用いた。

次に、黒色物質等の主成分元素を知るため、蛍光 X 線分析を行った。測定には、EVIDENT（旧 Olympus）社 DELTA Standard を用い、X 線管球 Rh（ロジウム）、検出器 SDD、測定径約 9 mm、大気、手持ち、Mining plus モード（管電圧 10kV および 40kV、測定時間各 15 秒の計 30 秒）の条件で行った。検出可能な元素は、Mg（マグネシウム）～U（ウラン）である。10kV での測定は、軽元素の検出を目的とした。測定は、資料ごとに 1 回～複数回行った。

蛍光 X 線分析は、多くの元素の測定が可能であるが、一部の元素はピークが重なり、そのどちらの元素かや混在の判断が難しいものがある。また、測定に用いる X 線は、ある程度の深さ方向まで到達するため、測定結果にも深さ方向の元素情報が含まれる。



写真 1 調査風景（蛍光 X 線分析）

3. 調査結果

文化財に用いられた黒色物質には、古代以降では墨が最も良く知られている。古墳時代の九州に分布する装飾古墳では、炭素（墨以外）や黒色マンガン鉱物の使用が知られている（山崎 1987）。漆なども候補となるかもしれない。また、石塔は伝世品であることから、後世に補われた材料が存在する可能性も十分考えられる。

実体顕微鏡による観察の結果、黒色物質は明瞭に黒く良く残っており、明らかに塗布されているように見える。顕著な粒子感はなく、炭素やマンガンなどの使用は想定しがたい。表面には樹脂状光沢や

漆特有の縮みも認められないことから、漆が使用された可能性は低い。その他、塗布を思わせる人工的な付着物は認められなかった。

蛍光X線分析の結果(スペクトル)を図1～10に示す。軽元素主体の10kVのスペクトルは省略した。複数個所の測定を行った資料については、代表的なスペクトルのみを示した。

①～③(図1～6)では、石塔ごとに黒色物質塗布部分と黒色物質が塗布されていない部分の測定を行った。前者に後者よりも高いピークが認められれば、その元素が黒色物質に由来するものと判断できるが、いずれも顕著な違いは認められなかった。

図中の「(Rh)」(ロジウム)と「(散乱)」は、測定機器由来のピークと考えられる。Ni(ニッケル)、Cu(銅)、Zn(亜鉛)などの低いピークも通常確認されるため、測定機器由来と考えられる。

ある程度以上の高さのピークを持つFe(鉄)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)、Zr(ジルコニウム)等は岩石に一般的に含まれており、黒色物質塗布の有無に関わらず各資料とも類似した状況でもあり、基本的には全て石材由来と考えられる。

低いピークを持つ元素の評価は大変難しいが、ほとんどは石材由来と考えられる。Au(金)やPb(鉛)の検出は気になるが、両元素は石材からも検出されており、少なくとも黒色物質に由来するものとは考え難い。

また、Ba(バリウム)とTi(チタン)のピークのうち4.5keV付近にあるものは、ほぼ同じ位置にピークがあり、ピークが低いこともあってどちらの元素が含まれているのか、また両方の元素が含まれているのか判断が難しい。ただ、①の黒色物質塗布部分には、32keV付近や36.5keV付近にもBaの低いピークが確認されるため、Baが含まれている可能性は考えられる。Tiは岩石や土壤に含まれる元素として一般的である。一方、Baは弥生時代の鉛バリウムガラス以外、江戸時代以前の文化財ではほとんど使用されていない。良く知られているものとしては、近代以降の塗料の増量剤や増粘剤等として用いられる無色透明(粉末では白色)の化合物であるBaSO₄(硫酸バリウム、重晶石)がある。この同定には、結晶構造や分子構造の調査が必要である。

なお、墨や炭素であれば、C(炭素)が検出される。しかし、Cは軽元素であり、今回の測定条件では検出することができない。

④、⑤、⑦(図7、8、12)では、黒色物質塗布部分のみの測定を行った。いずれも①～③と同様な結果で、黒色物質に由来すると思われる元素は検出されなかった。

⑥(図9～11)では、黒色物質だけでなく赤色物質や白色物質も塗布されており、それぞれ測定を行った。黒色物質塗布部分は、①～⑤、⑦と同様な結果で、黒色物質に由来すると思われる元素は検出されなかった。赤色物質塗布部分は、Fe(鉄)の高いピークが認められるため、ベンガラなどの鉄を含む赤色顔料が使用されている可能性がある。白色物質塗布部分は、Caの高いピークが認められるため、胡粉などのカルシウムを含む白色顔料が使用されている可能性がある。

おわりに

黒色物質の材料として蛍光X線分析では顕著なピークは認められなかったため、消去法的には今回の測定機器では検出できない元素であるCに由来する墨の使用が最も考えやすい。しかし、低いピークながら①の黒色物質塗布部分でのBaの検出を考えると、近代以降の材料が含まれている可能性も考えなければならない。これら未解明な点を明らかにするためには、今回の調査結果を念頭に置いた上で、再度の詳細な観察、元素の面的な分布状況の把握、X線回折やラマン分光による結晶構造や分子構造の調査等を行う必要がある。今後の更なる調査に期待したい。

参考文献

山崎一雄 1987 「装飾古墳の顔料」『古文化財の科学』同朋舎
(初出：1951 「装飾古墳の化学的研究」『古文化財の化学』2)

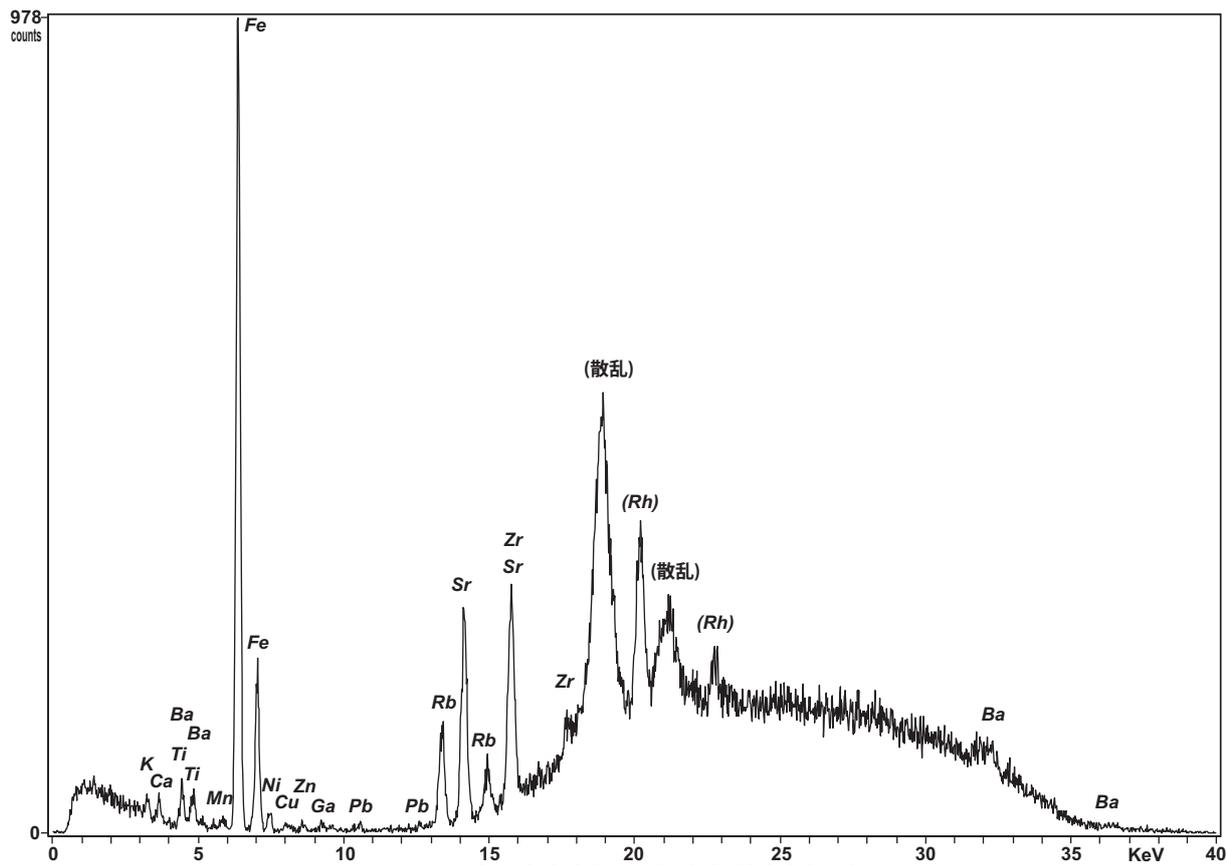


图1 ①東光寺磨崖板碑（黑色物質塗布部分）

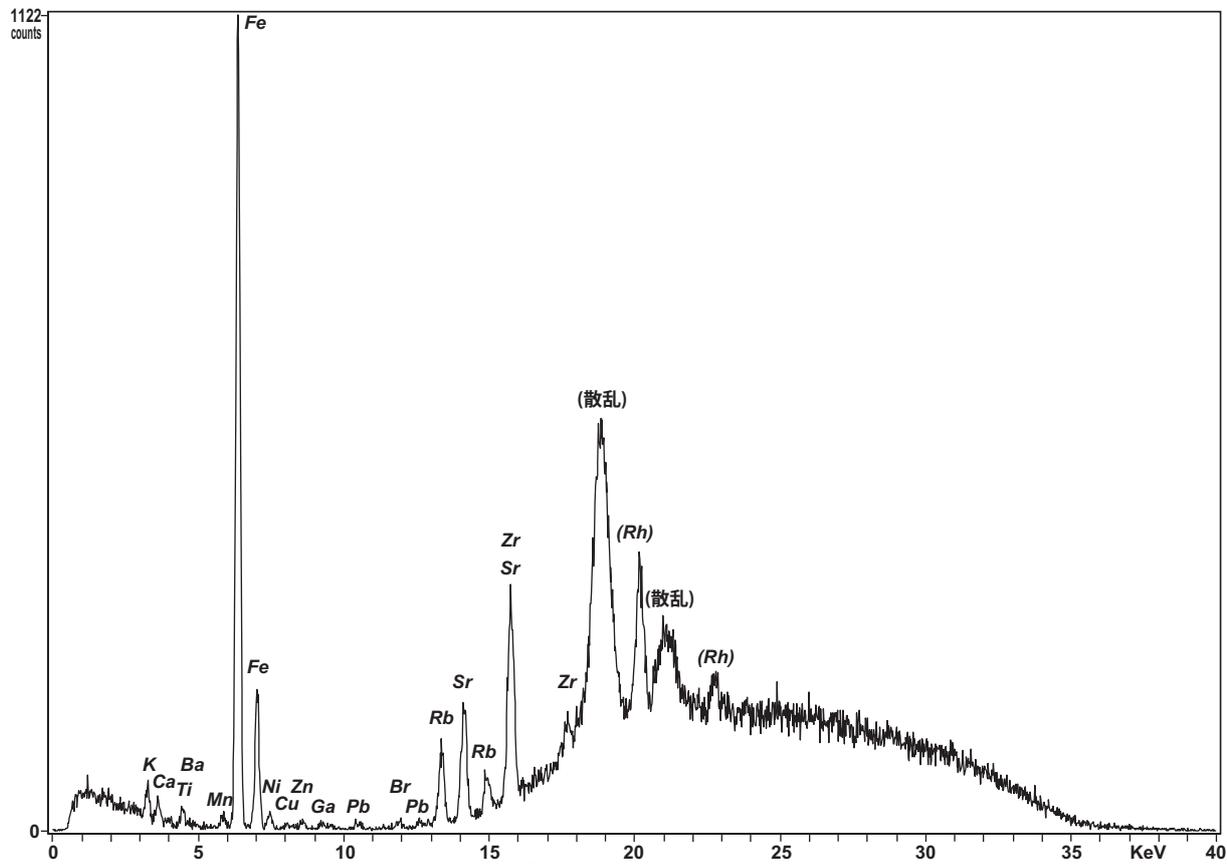


图2 ①東光寺磨崖板碑（石材）

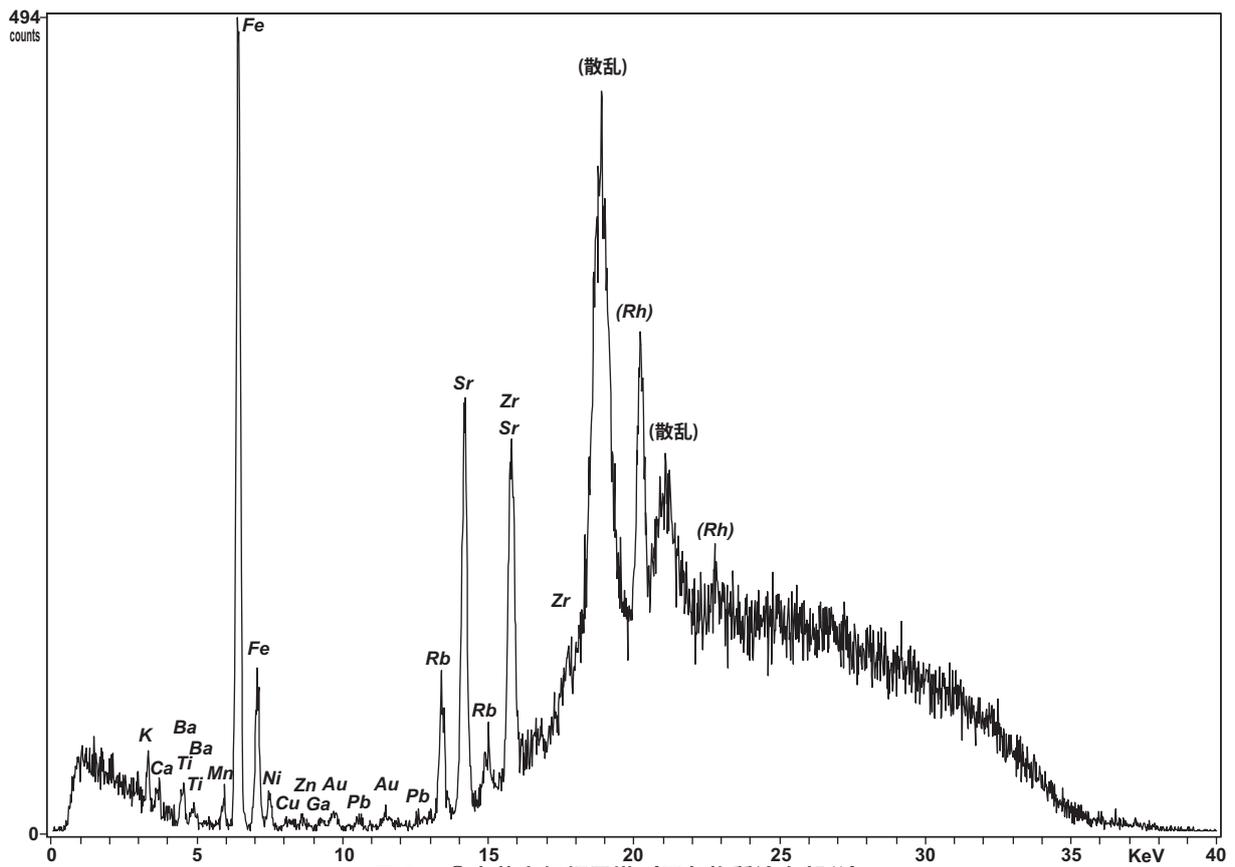


图3 ②青蓮寺伝頼景塔（黑色物質塗布部分）

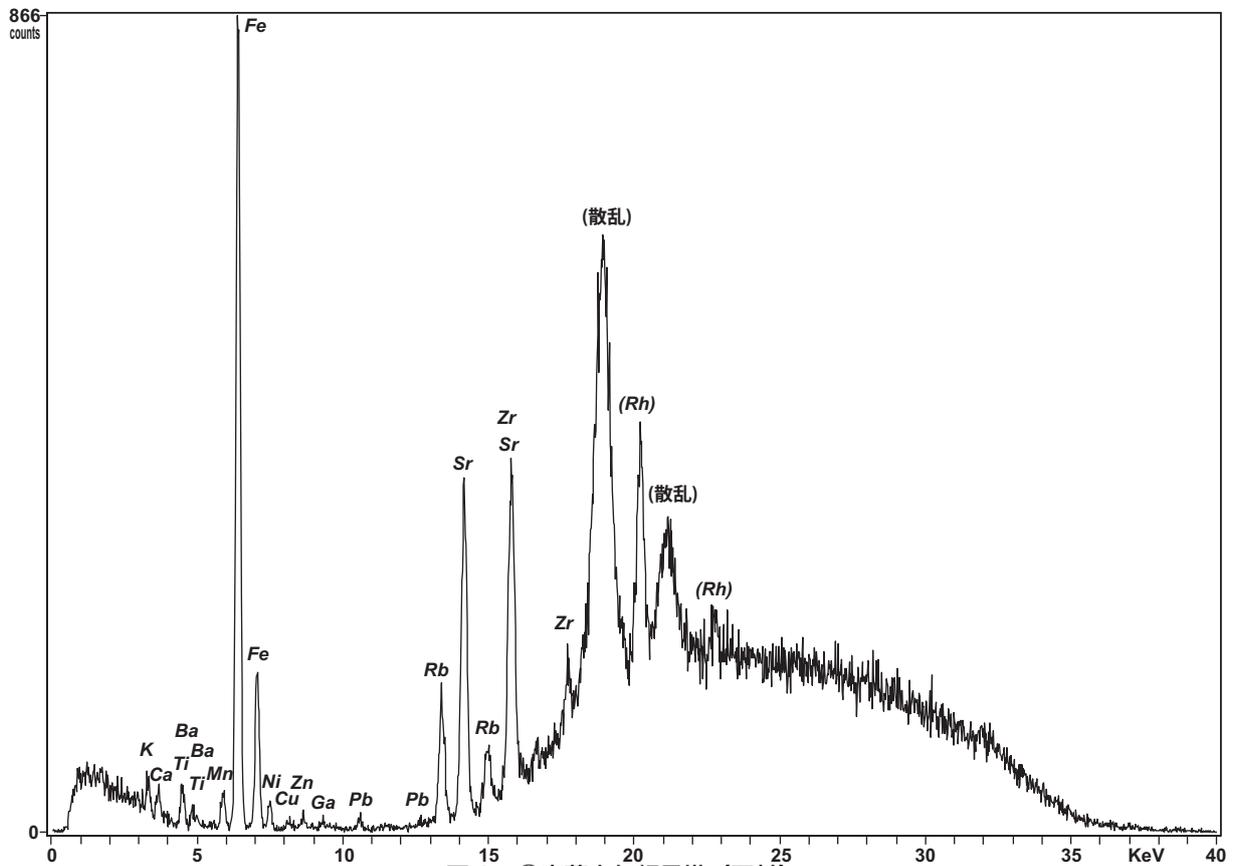
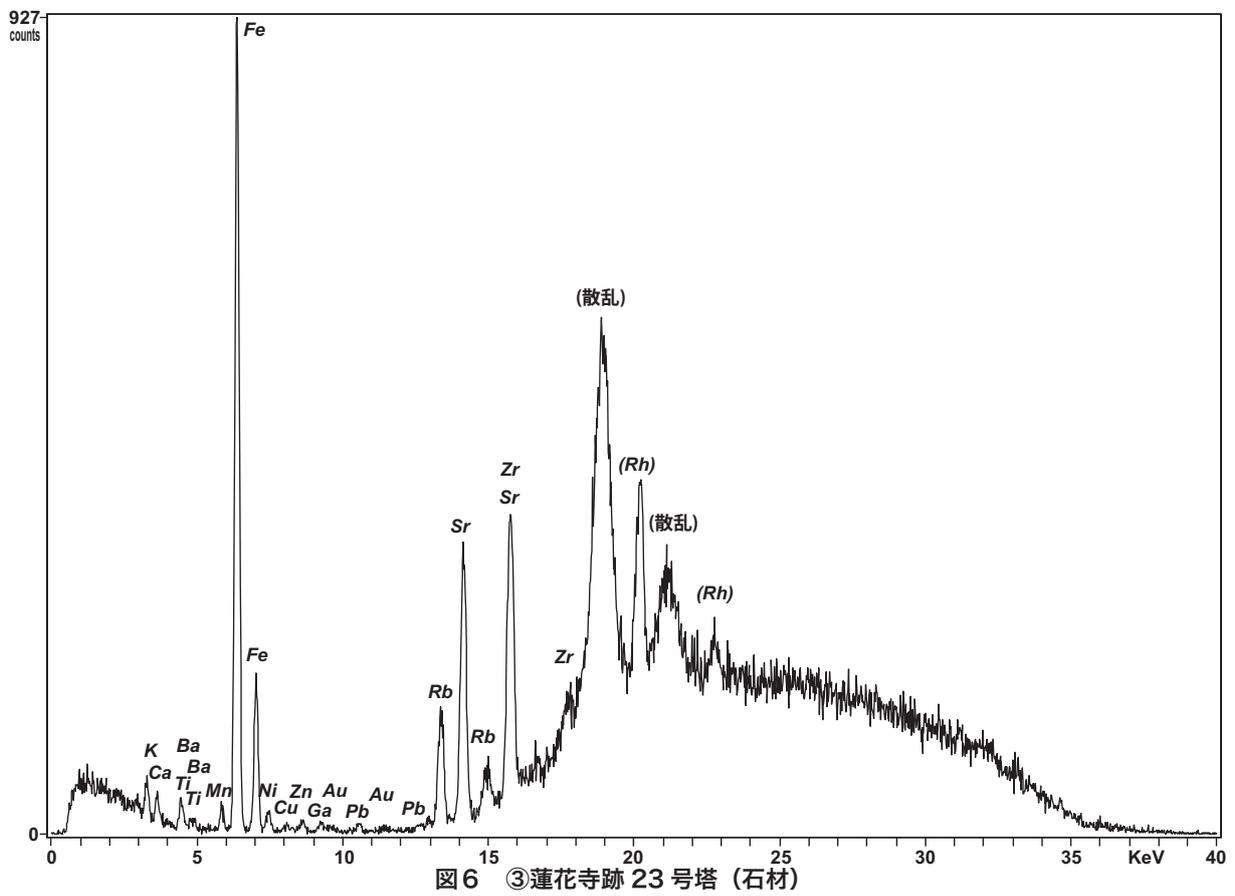
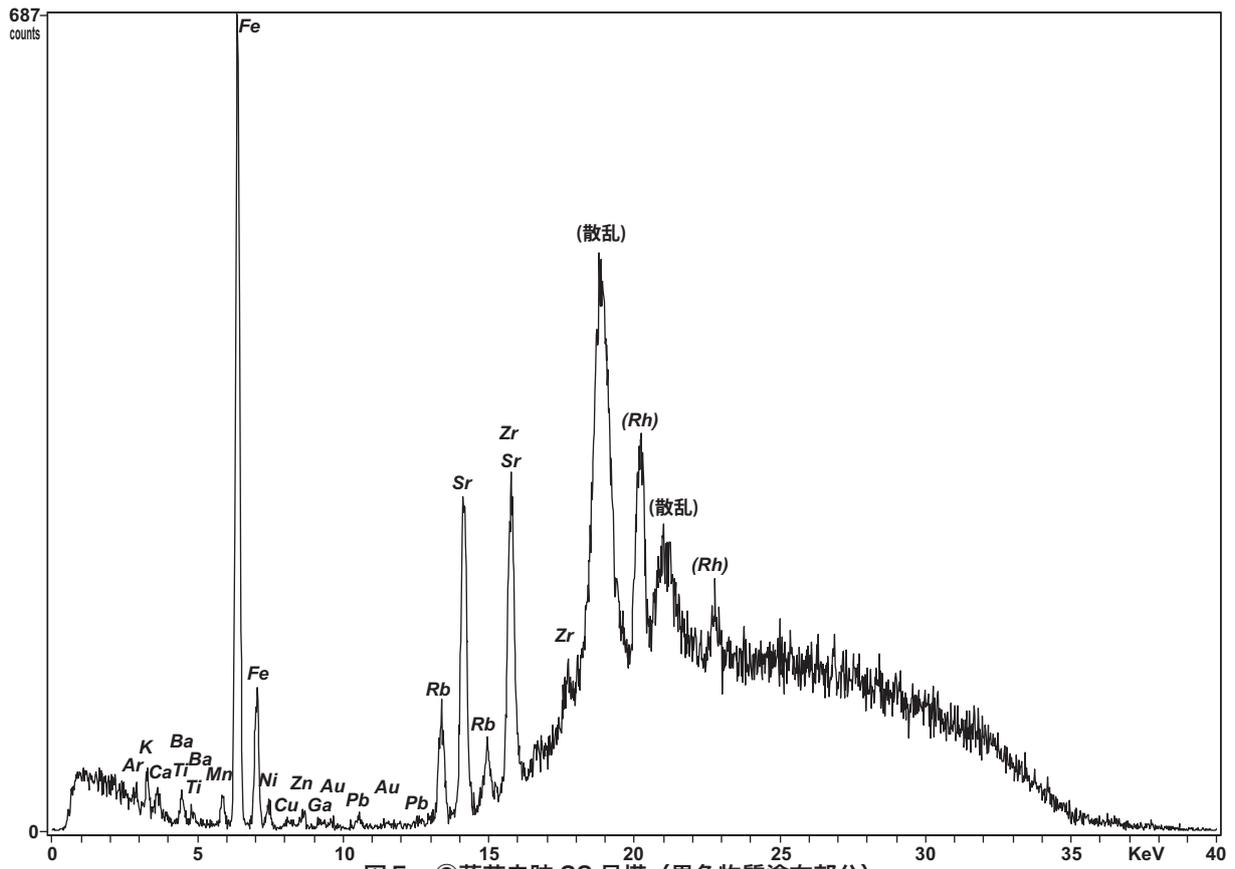


图4 ②青蓮寺伝頼景塔（石材）



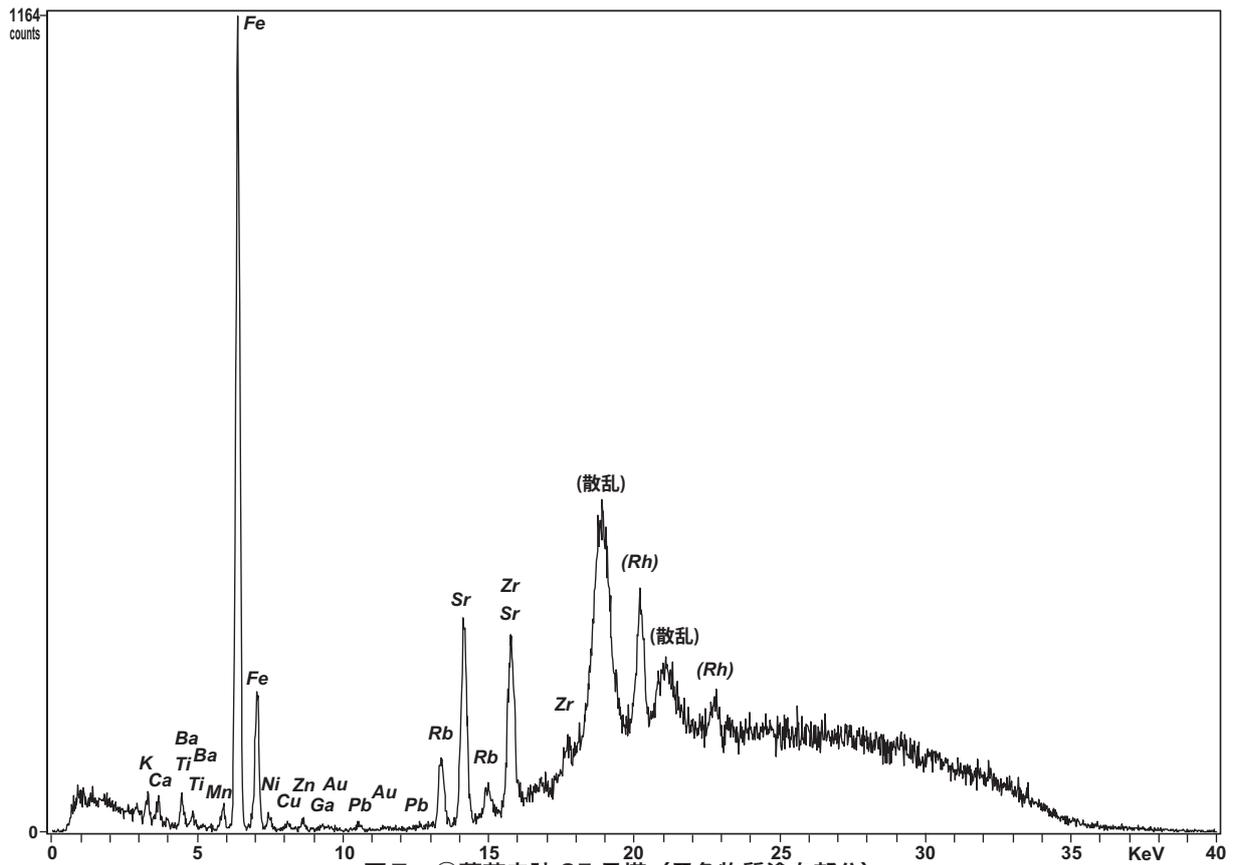


图7 ④莲花寺迹 35号塔 (黑色物质涂布部分)

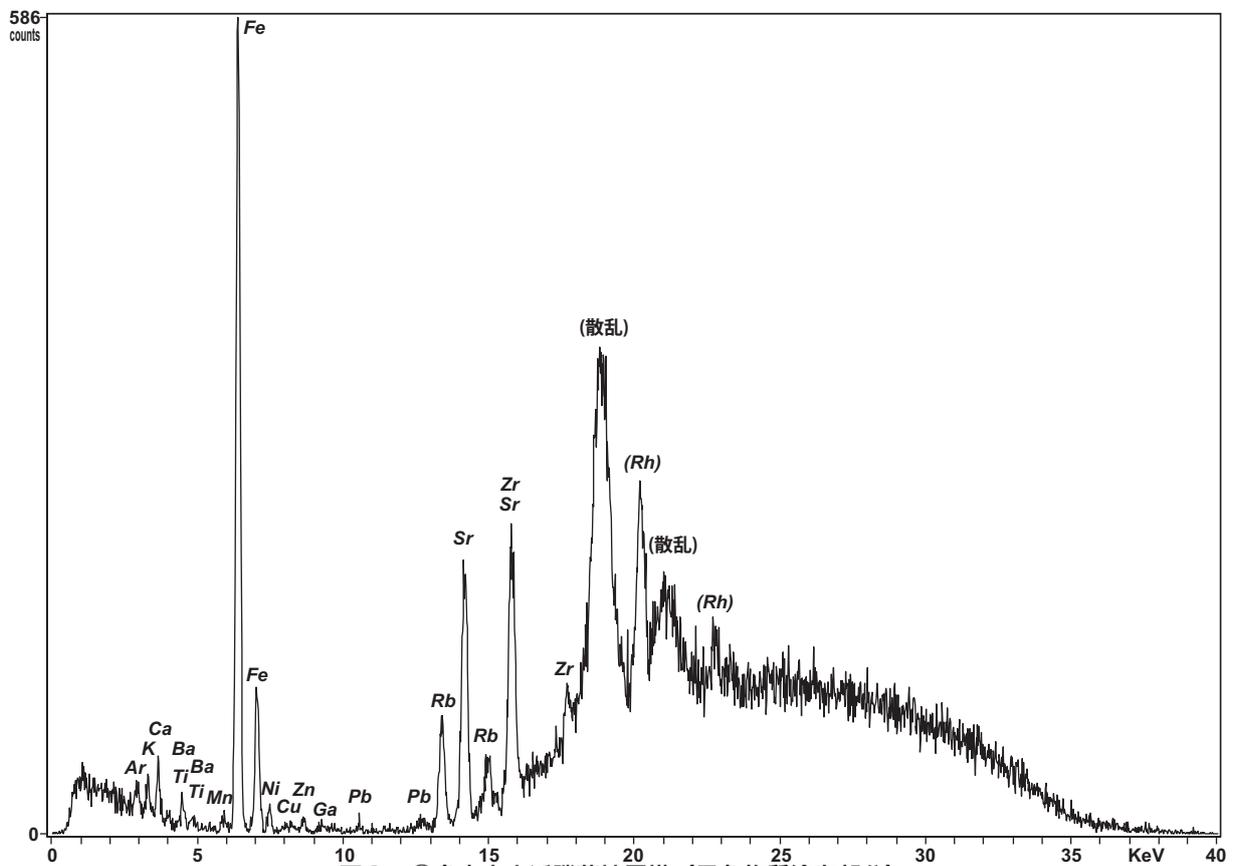
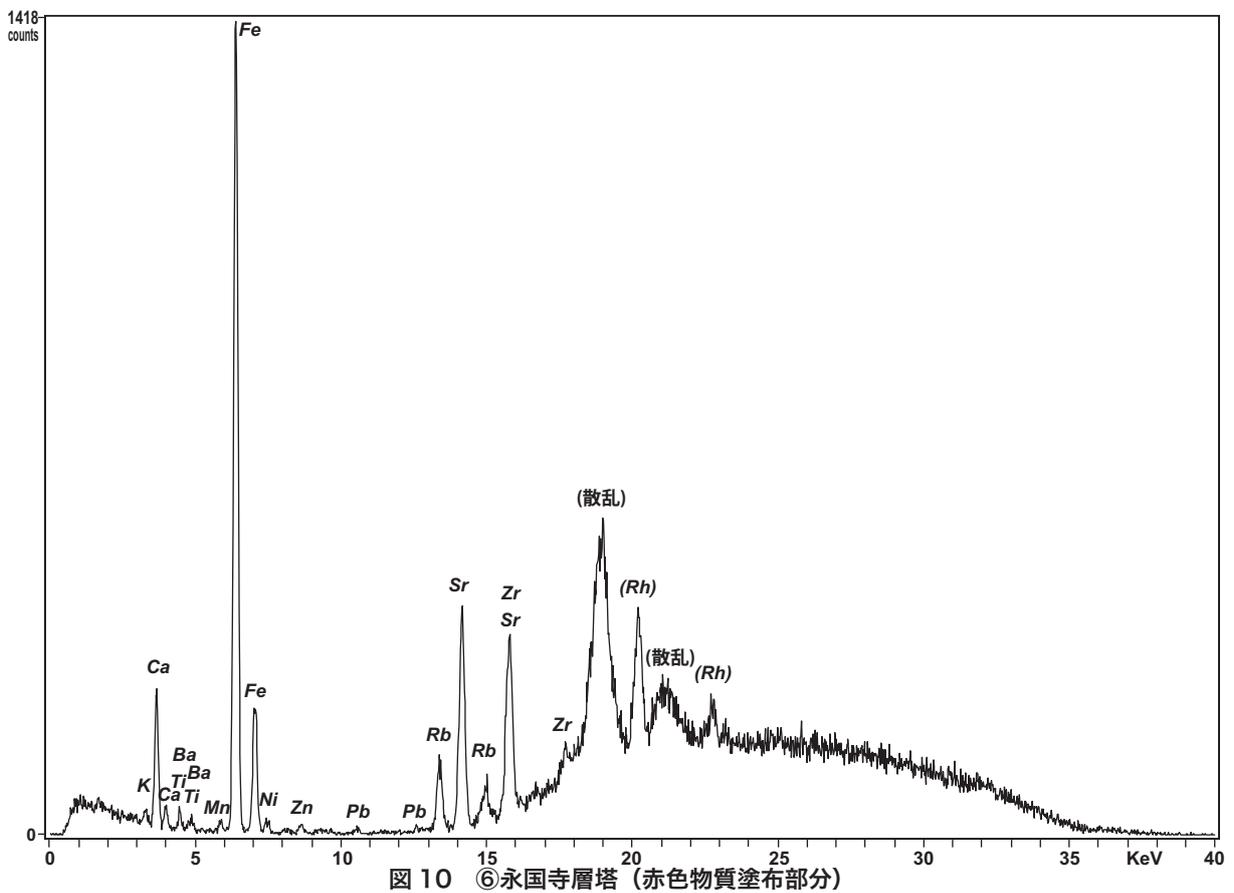
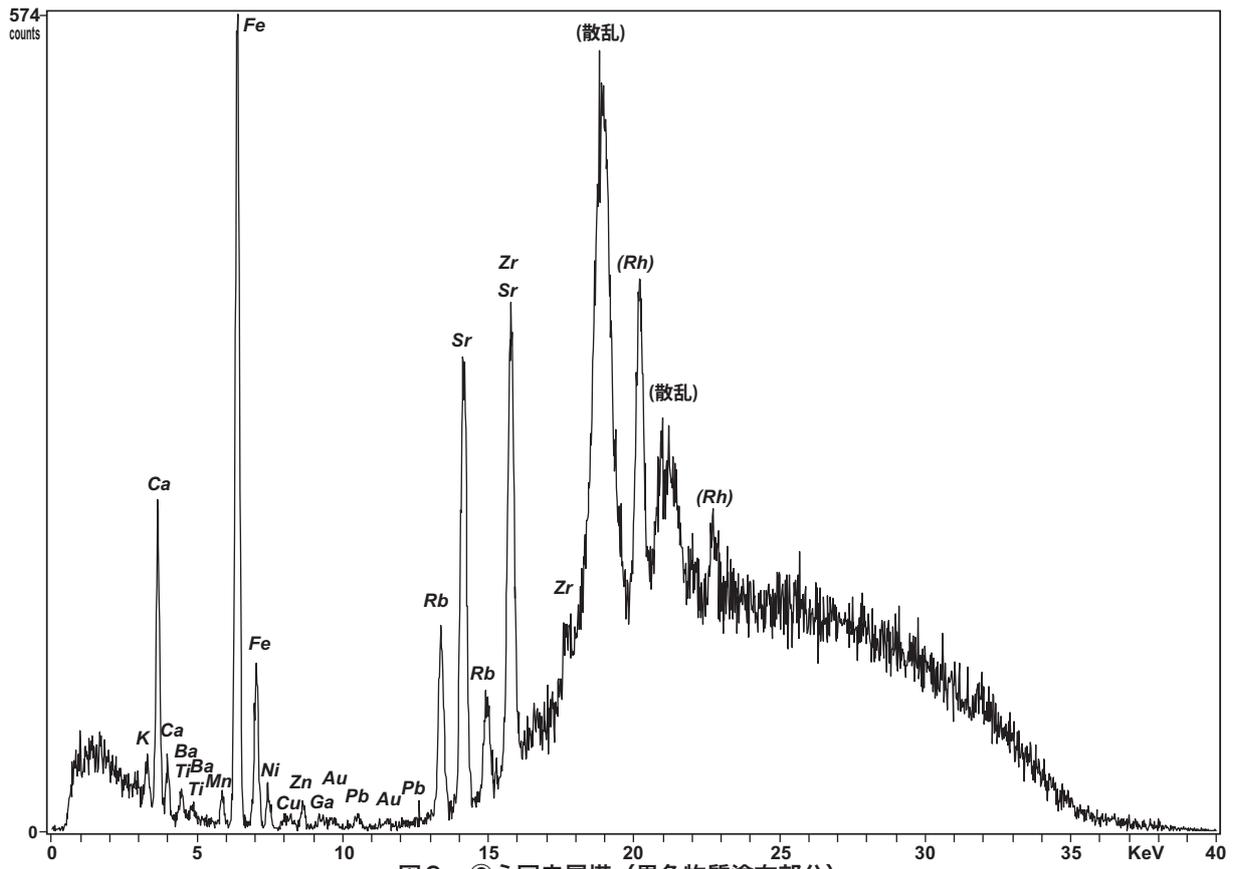


图8 ⑤多良木小近隣墓地層塔 (黑色物质涂布部分)



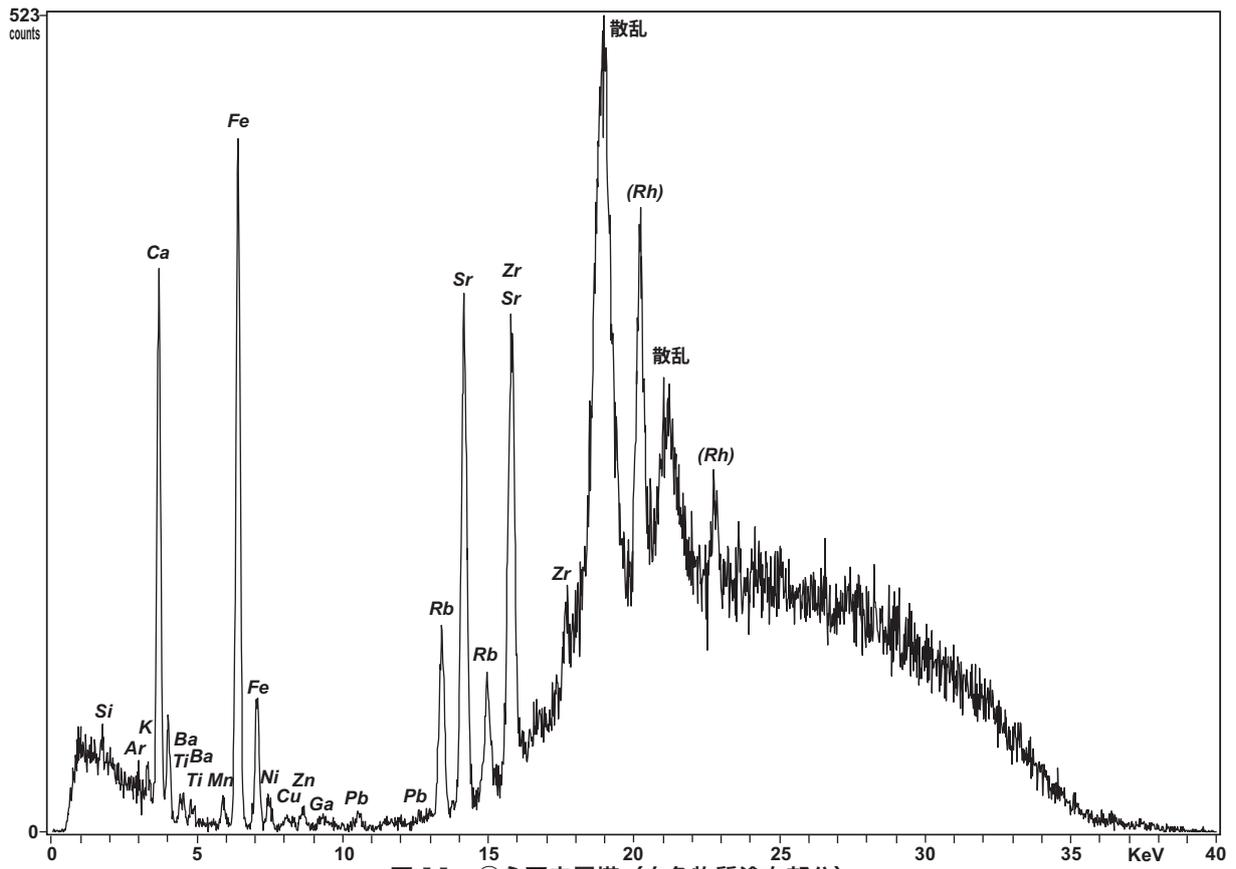


图 11 ⑥永国寺層塔 (白色物質塗布部分)

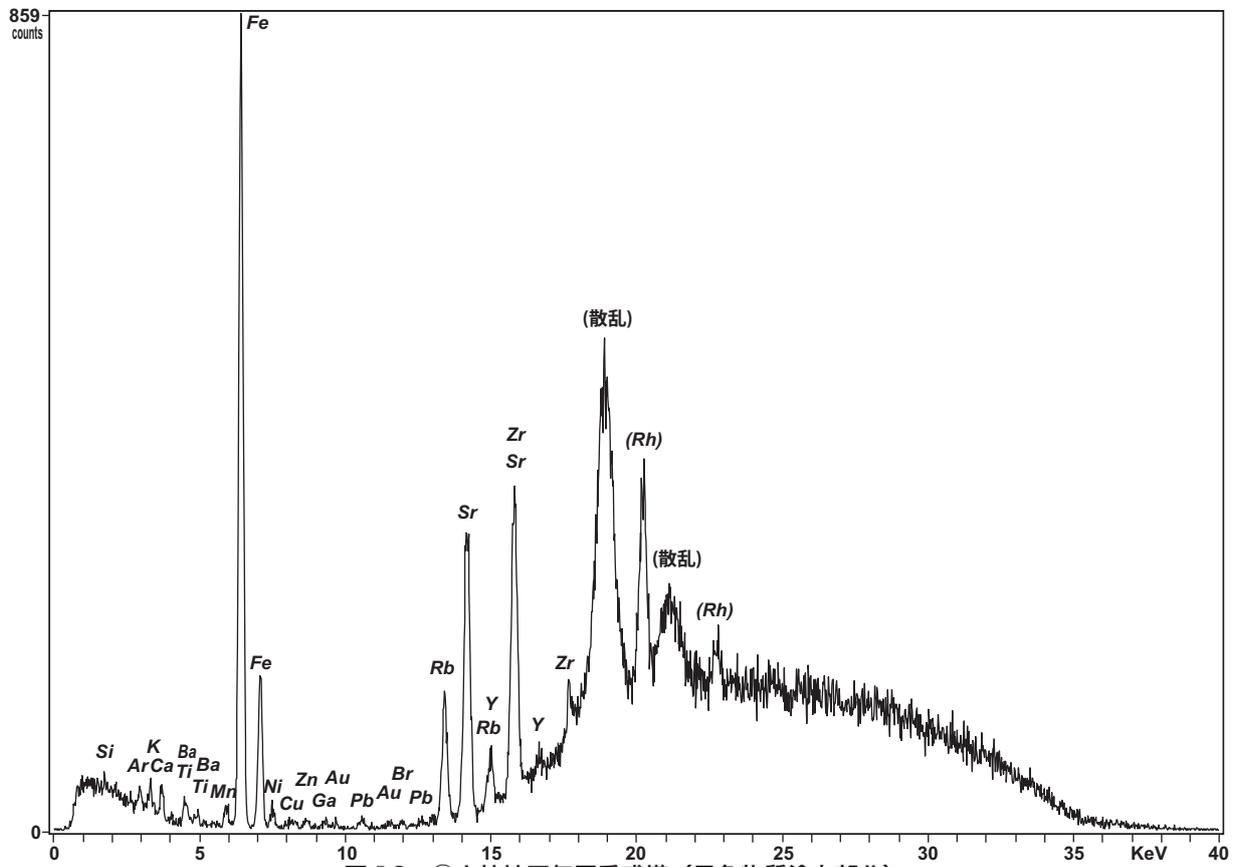


图 12 ⑦大柘地区伝平重盛塔 (黑色物質塗布部分)

第Ⅷ章 総括

第1節 多良木相良氏研究の諸論

文献・陶磁器など関係する史資料をとおした視点から、多良木相良氏の地域社会での展開を追究する必要があるため、以下の論稿を掲載する。

稲葉継陽（熊本大学 永青文庫研究センター長）

「文献史料から見た多良木相良氏家・相良氏」

小野正敏（国立歴史民俗博物館 名誉教授）

「蓮花寺・伝相良頼景館跡と相良氏関連遺跡出土の貿易陶磁器調査」

狭川真一（大阪大谷大学 文学部歴史文化学科教授）

「青蓮寺壇上積基壇の系譜」

「東光寺磨崖梵字の系譜」

鶴嶋俊彦（元人吉城歴史館長）

「多良木相良氏の城館遺跡」

有木芳隆（公益財団法人 永青文庫副館長）

「中世多良木の仏像と多良木相良氏」

村木二郎（国立歴史民俗博物館 准教授）

「東光寺経塚と出土資料について」

文献史料からみた多良木相良家・相良氏

稲葉 継陽

はじめに

(1) 文献史料をめぐる状況

遠江国相良荘を本領とし、鎌倉時代初期に球磨郡多良木村および人吉荘地頭職を得て、13世紀中葉までに球磨郡を本拠として在地に定着した鎮西相良氏に関する文献史料は、近世大名相良家のもとに伝来した文書群＝「相良家文書」に恵まれている。同文書群は、すでに大正6・7年の段階で東京帝国大学史料編纂掛編『大日本古文書 家わけ第五』として刊本化され、ひろく利用されてきた。

「多良木相良氏」は、中世多良木村を本領として相伝した「多良木相良家」を核に、上球磨地域に一揆の権力を保持した武士団である（小川・2018）。じつは近世大名相良家は、15世紀中葉にこの多良木相良家・相良氏＝正統相良氏を滅ぼして球磨郡内を統一した永富相良家（本拠地は下球磨の山田）に出自をもつ。こうした、相良氏の長い歴史に孕まれた断層は、多良木相良氏の研究に以下のような制約条件を付与することになった。

第一に、多良木相良家の家伝文書群の大半が、おそらく15世紀中葉に失われたことである。「相良家文書」は、鎌倉～室町前期の相良氏の動向、わけても多良木相良家の動向については、鎮西相良氏の嫡流であったにもかかわらず、多くを語らない。

第二に、傍流のため正統性をもたなかった永富相良家＝大名相良家では、すでに16世紀中葉段階から、鎮西相良氏初代の頼景以来一貫した大名相良家の歴史叙述が試みられた（天文5〔1536〕年「沙弥洞然長状」『大日本古文書 家わけ第五 相良家文書之一』319号。以下、相319のように略記）。それは多良木相良家・相良氏の歴史に一定の改変を施して相良長統以降の事績と接続させ、近世後期の相良家における家史『歴代嗣誠独集覧』『南藤蔓綿録』『求麻外史』へと引き継がれて、定説化することになった。その結果、永富相良長統による人吉相良家や多良木相良家の実力による抹殺という歴史を隠蔽し、大名相良家の歴史を頼景以来の正統性を誇るものとする、いわば“正史”が定着することになった。この問題が明確に指摘され、“正史”が自覚的に批判されるには、じつに1980年まで待たねばならなかった（服部・1980）。

その後の相良氏研究は、中世球磨郡の荘園公領制秩序の形成過程と、相良氏の球磨郡への定着の事情を追究した工藤敬一の研究（工藤・1992）を媒介に、2015年の熊本県立美術館特別展「日本遺産記念展 ほとけの里と相良の名宝 人吉球磨の歴史と美」の図録に結実した学際共同研究へと発展し、その成果は稲葉継陽・小川弘和編『中世相良氏の展開と地域社会』（戎光祥出版、2020年）にまとめられた。特別展準備の過程では、現在慶應義塾図書館に所蔵されている「相良家文書」のうちから、永富相良家による操作が加えられる以前の相良氏系図（相良・工藤系図）が発見されるなど、多良木相良氏に関する研究も大きく進展する可能性が示された。

(2) 多良木相良家と多良木相良氏

なお、相良頼景を始祖とし、13世紀前期から15世紀中葉まで上球磨のうちの多良木村を領有する主体（「惣領」）は、限られた中世史料と相良・工藤系図の記載によれば、次のように変遷すると考えられる。

頼景—長頼（蓮仏）—頼氏（浄蓮）—頼宗—経頼…頼忠…頼久

本稿では、13世紀段階には相良氏「惣領」とされ、多良木の領主として上球磨地域の在地領主層の結合の核となり、15世紀中葉の頼久期に永富相良長統に滅ぼされた上記の家筋を、「多良木相良家」と呼ぶ。そして、その周辺に分出された一族庶子・庶子家をも含めた多良木相良一族の総体を、「多良木相良氏」と呼ぶことにする。

(3) 球磨郡の荘園公領制と相良氏

多良木相良家・相良氏の歴史を限られた中世史料から復元するに際しては、まず、工藤敬一・小川弘和によって明らかにされた中世球磨郡の荘園公領制的秩序（工藤・1992、小川・2015、2016）について確認する必要がある。

前提となるのは、平安最末期における蓮華王院領（領家は八条女院）「球磨御領」と呼ばれる半不輸の一郡荘園の立荘と、それを在地側から支えた郡司の須恵氏や、中球磨に本拠をもち須恵氏と対立・協同を繰り返す平河氏といった有力在地領主が存在したことである。

しかし元暦2（1185）年に平家が滅亡すると、九州は幕府の内乱後処理政策にさらされ、球磨御領は没官されて建久3（1192）年頃に領域的に再編成（「片寄」）をうけ、一郡2,000町が蓮華王院＝八条院領人吉荘600町、鎌倉殿御領500町、公田900町に三分割された。それを具体的に示すのが建久8（1197）年閏6月の球磨郡田数領主等目録（相2）であり、図示したのが工藤の作図と小川の修正にかかる図1である。

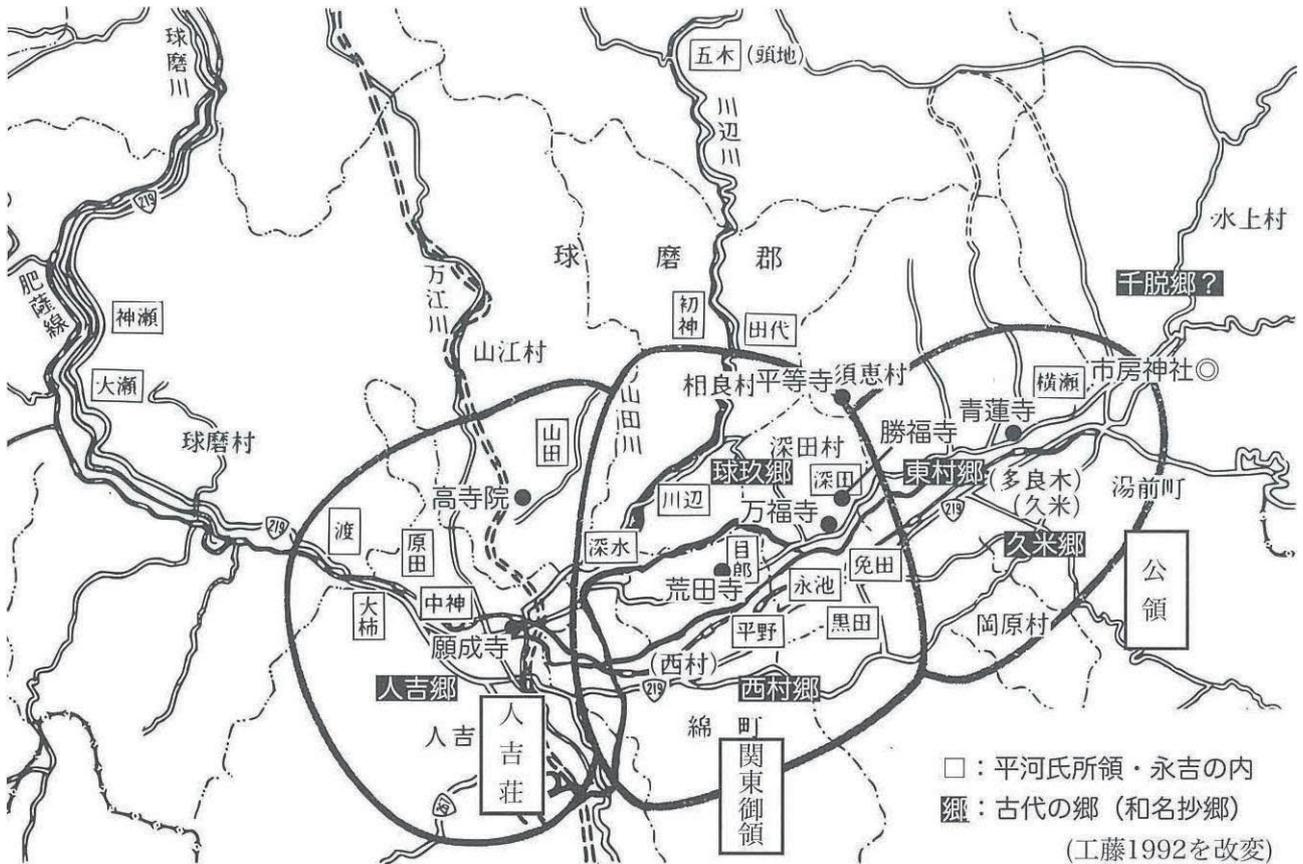


図1 中世球磨郡の荘園公領制（小川2015・2016）

工藤によれば片寄の眼目は、半不輸領であった球磨御領からの得分取得権として設定されていた平家領を、関東御領として郡衙のある中球磨で領域化し、平家のもとで組織されていた在地社会の中枢に「関東のくさび」を打ち込むことであった。そして球磨御領に対する国衙支配権は上球磨の公田に、蓮華王院＝八条院のそれは下球磨の人吉荘へと集約・領域化された。

田数領主等目録によれば、上球磨＝公田の内部は大きく「豊富五百丁」と「豊永四百丁」とに区分されており、後者の内部単位的所領として「多良木村百丁 没官領」と記載されている。さらに多良木村を領有する主体として「伊勢弥次郎 不知実名」との名が記されている。球磨郡ないし肥後国に伊勢氏の存在はこれ以外知られないことから、伊勢弥次郎はこの平家没官領の地頭職を新恩として給与され関東から送り込まれた者であったと考えられている（松本・1977）。そして伊勢氏の跡をうけ、関東による上球磨支配の尖兵に採用されたのが、球磨御領と同じく蓮華王院＝八条院領であった遠江国相良荘を本貫地とする相良頼景であり、頼景の子息頼頼は、やはり蓮華王院＝八条院の一円所領となった人吉

荘の地頭職をも得ることになるのである。

(4) 本稿の主題

本稿では、戦国・近世大名相良家が由緒づくりのために多良木相良家・相良氏の歴史を操作して叙述した家史類のストーリーを可能な限り排して、近年のすぐれた研究によりながら、「相良家文書」をはじめとする一次文献史料、相良氏造立にかかる石造物の銘文、同じく仏神像の銘文などを分析して、多良木相良家・相良氏の実像にせまりたい。1では鎌倉前期、2では鎌倉後期、それに3では14世紀内乱期から多良木相良家・相良氏の滅亡をみる15世紀中葉までの諸史料を検討し、おわりに文献史料からみた多良木相良家・相良氏の歴史における数次の画期を指摘する。

1. 鎌倉前期の文献史料

前述した天文5（1536）年「沙弥洞然長状」（相319）以来、相良家史では、相良氏の鎮西への定着は相良頼景が建久4～6年頃に球磨郡に下向したのをその始原とするものとされてきた。しかし、建久8（1197）年の球磨郡田数領主等目録には相良氏はまったくみえず、頼景の球磨郡における事績も確認することができない。この問題について、相良氏の氏寺・願成寺が人吉荘内に建立されたのが嘉禎3（1237）年頃であること（『熊本県史料中世篇3』所収「願成寺文書」1・2号）等を重視した小川弘和は、相良氏が球磨郡に拠点を選んだのが1230年代であった可能性を指摘している（小川・2015、2020）。

以下、この点を念頭に鎌倉前期の文献史料を検討する。人名については「相良家文書」および「相良・工藤系図」から作成した図2を参照されたい。

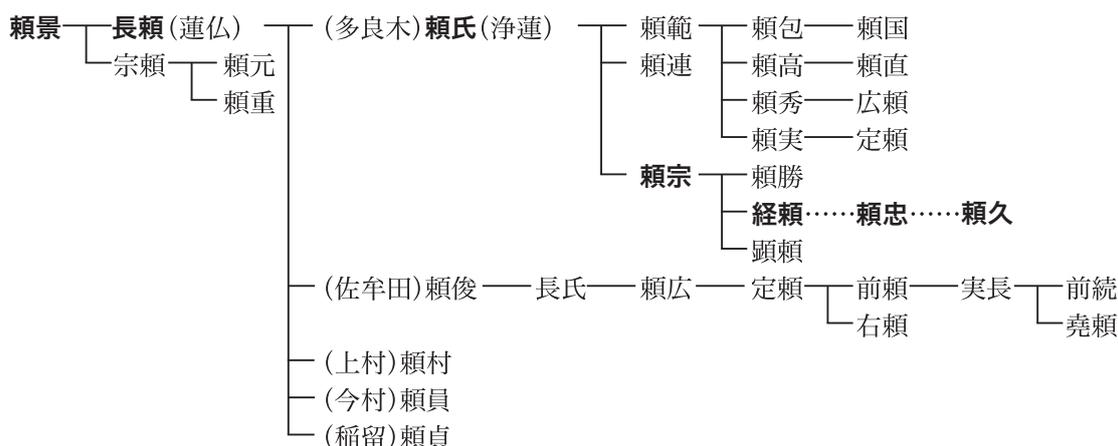


図2 多良木相良氏・人吉（佐牟田）相良家略系図 ※ゴシックは多良木相良家の惣領

(1) 相良頼景—12世紀末～13世紀初期、多良木相良氏の始原—

頼景の一次文献史料上の初見は、寛元元（1243）年に、頼景の子息相良長頼（蓮仏）と長頼の甥にあたる頼重との所領相論に対して、執権北条経時が発給した下知状（相5）である。本相論で両者は、以下の4つの物件をめぐって対立した。

- ①「肥後国（山鹿郡）泉新庄内山井名」
- ②「（肥後国玉名郡）高橋内作田参町 早瀬 小中嶋両所畠拾余町」
- ③「多良木内 古多良 竹脇 伊久佐上 東光寺以上四箇村」
- ④「京地綾小路京極」

このうち頼景の所領であったと認められるのは①③④である。

①について、頼重は、山井名は祖父頼景法師の所領であったものを父の宗頼が譲りを得て40余年知行してきたところ、嘉祿3（1227）年3月に宗頼は譲状等を書き置いて死去し、自分はその旨に任せて山井名を伝領したとする。一方、相論相手の惣領長頼は、宗頼は遺領の処分をせぬまま死去したの

で、頼景が孫の頼重・頼元に宗頼の遺領を配分した。そのときには自分も譲状に加判し、そこには、頼元・頼重不和の場合には遺領を悔い返して長頼が知行すべきだと記載されていると主張している。両者ともに、①の本主が頼景であることに異論は唱えていない。頼景の肥後国での所領獲得が平家滅亡後の12世紀末であったことは確実である。

次に④について、頼重は、頼景が京女房に譲与し、その女房が出挙の質に入れて置いて流れそうになったとき、宗頼が請け出して知行したものを自分が伝領したと主張する。一方の長頼は、くだんの敷地は自分が親父の頼景から米30石で買徳したのであって、頼重の主張を虚言だとする。頼景は本領から都にのぼって番役をつとめる関東御家人の典型であった。

そして③について、頼重は「件四箇村并田地四十町」は建保2（1214）年に頼景自筆の譲状でもって宗頼に譲与されたが、宗頼は頼景に先立って死去した。そのため頼景のもとに戻り、一期の後は頼重が伝領するはずであった。ところが長頼が押領したと主張している。一方の長頼は、四箇村は宗頼には譲られておらず、自分が譲りを得て「安堵御下文」を給わっていること。そして頼景が宗頼に所領を譲与する際に安堵の御下文を申請したときには、問題の四箇村は対象外だったはずだと主張している。幕府は、長頼が提出した安貞2（1228）年の頼景譲状等関係文書3通を証拠に、長頼の主張を認めている。

すでに多くの研究が指摘しているように、相良氏本領の相良荘には「相良堀内」があり（相33）、頼景自身が内乱初期に遠江国に在地していたことも『吾妻鏡』治承5（1181）年3月13・14日条に明らかである。頼景が12世紀末に①③の所領を獲得していたことは事実だが、頼景自身が球磨郡へ下向した事実を窺わせる一次史料を見いだすことはできない。

ここでは④「多良木村」が鎮西相良氏の12世紀末以来の根本所領であった事実、そこに今次の調査対象である東光寺のあった東光寺村が含まれていることが重要である。なお、本報告書収録の鶴嶋俊彦「多良木相良氏の城館遺跡」によれば、4村の地名から、中世所領「多良木村」の範囲は近世多良木村・黒肥地村の範囲に比定される。また「古多良」村は現多良木町東部の字「古多良木」に比定され、付近には横馬場、地藏堂、宮床、馬場田、門田といった在地領主制にまつわる字名がのこる（松本・1977）。

(2) 相良長頼（蓮仏）—13世紀前期、多良木相良家の成立—

このように、頼景の子息にして彼の遺領である多良木村等を相伝し、甥の頼重と争った長頼（蓮仏）は、元久2（1205）年に人吉荘地頭職を獲得した人物である。

下 肥後国球磨郡内人吉庄

補任 地頭職事

藤原永頼

右庄為平家没官領之間、可被補地頭之由依申、殊施軍功之故、以永頼可令為彼職之、但至有限之御年貢以下雜事者、地頭全不致違亂、可存公平之状、依鎌倉殿御下知如件、

元久二年七月廿五日 遠江守平朝臣御判

（奥裏書）

「此御下文、正文者、多良木殿令帶持給候之間、為申安堵、頼廣令借用、令持參候、下向之時者、可返進候、仍其間案文書留候焉、

元弘三年八月廿一日 頼廣（花押）」（相3）

長頼はもとの「球磨御領」の蓮華王院＝八条女院徳分を実体化した人吉荘が「平家没官領」であることを理由に地頭職を望み、補任されている。この背景に、相良氏の本領である相良荘が蓮華王院領であったという事情が存したとみられることは、前述したとおりである（小川・2015）。

なお奥裏書によれば、本下文の正文は「多良木殿」（相良経頼）が所持していたものを、元弘3（1333）年に人吉（佐牟田）相良家の頼広（人吉荘北方の還付（後述））を申請するに際して、借用して書写したものであることがわかる。長頼代に人吉荘は多良木村とならんで相良氏の根本所領となったのであった。長頼について、以下の点が注目される。

第一に長頼は人吉荘内に菩提寺として願成寺を建立するに際して、嘉禎3（1237）年に人吉荘稲富

名の田地五町余を免田として寄進しているが、これは「蓮仏開発之余田」であった（『熊本県史料中世篇3』所収「願成寺文書」1・2号）。さらに仁治2（1241）年には、願成寺の掃除用途として荒野2か所を寄進し寺家の開発に委ねるとの旨を記した寄進状を施入している（同前4号）。相良荘、京、鎌倉、そして鎮西の所領を行き来して活動していた相良氏の惣領が、球磨郡に基盤を置いた活動を開始したのは、まさに長頼（蓮仏）代の1230年代であったとみられる。

しかし第二に、寛元元（1243）年にいたり、長頼は前述の頼重との相論にかかる①の山井名の押領と狼藉の科を問われて、人吉荘地頭職の半分を幕府に没収されてしまう（相5）。これに伴い長頼は、幕府方の「当給人之御代官調所七郎忠康」とともに人吉荘の「田畠苧桑在家并山野江河狩倉等」を南北に中分し（相6）、南方を地頭として支配し、領家に対する貢納を請け負うことになった。

そして第三に、人吉（佐牟田）相良家の分出である。すなわち長頼は寛元4（1246）年、人吉荘南方のうちの名田、在家、桑木等を分割し、庶子の六郎頼利（頼俊）、九郎頼員、藤二永綱それぞれに譲る（相7・8・9）。このうち最も多くの荘田を譲られた頼俊の系統が人吉（佐牟田）相良家となる。一方、多良木家は長頼から頼俊の兄頼氏へと継承される。

このように長頼期は、多良木村と人吉荘南方を根本所領として氏寺・願成寺を擁する鎮西相良氏のベースが確立された時期であり、それは相良氏惣領としての多良木相良家と下球磨人吉荘南方に本拠をもつ人吉（佐牟田）相良家とを二本の柱とするものであった。

2. 鎌倉後期の文献史料—相良頼氏（浄蓮）・頼宗・経頼—

多良木相良家を長頼から継承した頼氏、そしてその後継者頼宗さらに経頼の時代には、多良木村支配が深化するとともに、モンゴル襲来への対応とも絡みながら、多良木相良氏の惣領制的な結合と一族紛争とが展開された。

(1) 蓮花寺の建立

まず注目すべきは、モンゴル襲来期における頼氏・頼宗の宗教的活動である。

近世相良家史のひとつ『歴代嗣誠獨集覽』では、嘉禎元（1235）年に頼氏が蓮花寺を造立したとされる。こうした説との関係で重要なのは、蓮花寺跡の五輪塔群の中にある笠塔婆（高さ108cm）の次の銘文である（多良木町史編纂会・1980）。

右石塔志趣者奉為沙弥上蓮尊靈往生極樂證大菩提造立如件

文永六年己巳七月十四日 比丘尼妙阿弥陀仏敬白 孝子藤原□□敬白

文永6（1269）年7月、蓮花寺では「沙弥上蓮」すなわち相良頼氏の極樂往生を祈念する生前供養が営まれていた。願主の比丘尼は頼氏の妻、孝子は頼宗であろう。対モンゴル外交の危機が高まる中で、蓮花寺は多良木相良氏惣領の供養所として、相良一族の氏寺＝菩提寺である人吉荘内願成寺とは別に多良木の地に設けられたとものと推察される。

(2) 東光寺の祭祀

頼氏代の史料として特記されるべきは、多良木黒肥地の東光寺跡にある磨崖板碑前の経塚から発掘された文永10（1273）年11月4日銘の銅製経筒8個である。前述のように「東光寺」はすでに相良頼景の所領であった時代の多良木村にその名がみえるが、経筒の一つには次の銘文がある（多良木町史編纂会・1980）。

奉納 如法書写妙法蓮花經一部銅筒一

右志者為藤原頼氏現世安穩後生善所乃至法界平等利益也仍供養奉納如件

文永十年癸酉十一月四日 藤原頼氏敬白

また、他の7個の経筒のうち6個にも、同様の銘文とともに「藤原氏女」「藤原頼□」「比丘尼如阿弥陀仏」「比丘尼阿弥陀仏」「大秦□清」「幡摩氏女」「大神宗氏」といった願主の名が、それぞれ刻まれている（多良木町史編纂会・1980）。伝承では、東光寺には頼氏が八幡宮を勧請したとされ、経筒にみえる大神宗氏は八幡宮社家と推測されている（松本・1977）。

モンゴル帝国の東への拡大によって対外的危機が高まり、異国警固体制が構築されるまさにその最

中、頼氏は多良木相良家当主として東光寺で現世と来世の安穩を願う法会を家族らとともに催し、書写した法華経を埋納して祈りを捧げた。そして、後に経塚背後の磨崖には、多良木相良家の祭祀の象徴として板碑が彫り込まれることになるのである。

(3) 多良木村の開発

当該期における本領多良木村の水田開発の進展を示唆するのが、黒肥地の字溝ノ口で球磨川から取水し、球磨川北側一帯を灌漑する「鮎ノ瀬井手」の存在である。取水口脇にある近世の石碑には、「鮎ノ瀬井手碑 永仁三年五月 領主 相良頼宗建」とある。石碑自体は近世の造立であるけれども、鮎ノ瀬井手の灌漑用水の一路は現在も黒肥地の伝相良頼景館跡の至近を通り、また蓮花寺跡の発掘調査では、13世紀の遺物を伴う溝が検出されているのである。石碑は、13世紀における多良木相良家による多良木村の開発事実の伝承化の上に立って、近世に鮎ノ瀬井手の由緒来歴を公示するために造立されたのであろう。

このように、確立されたばかりの多良木相良家は、東アジア情勢の激動に起因する異国警固の軍事動員に対応する必要から、本領多良木村の開発を進展させるとともに、独自の濃密な宗教空間をも創出していたのであった。

(4) 多良木相良氏の惣領制

次いで正応6（1293）7月20日、頼氏は「多良木田畠在家」をはじめとする所領を、嫡子となった頼宗だけでなく、頼宗の甥（頼氏の孫）にあたる頼包、頼高、頼秀、頼実の「兄弟四人」に分割相続させる旨を記した譲状を作成した（相32、33、36）。このうち多良木村の在家12宇および田地15町を譲与された彦三郎頼秀に宛てた譲状（相32）に、頼氏はこう記している。

右件田地在家畠、所譲与彦三郎頼秀実也、但、至 公家・関東御公事、異国警固番役者、随惣領所勘可致沙汰、仍譲状如件、

庶子も所領を譲られはする（分割相続）が、朝廷・武家に対する「御公事」や、博多での「異国警固番役」といった御家人役については、惣領の「所勘」すなわち指揮・管理下で勤仕せねばならないとする。典型的な惣領制の一族編成である。

東光寺、蓮花寺とならんで頼氏以来の多良木相良家が信仰したのが、黒肥地字是居の球磨川畔に鎮座する王宮社である。同社の延享元（1744）年の棟札（往古の棟札を一札に写したもの）には、①文応2（1261）年に「大旦那藤原頼氏御宝殿造営」、②永仁6（1298）年に「大旦那藤原牛房丸（経頼）御神殿造営」、③応永3（1396）年に「大旦那藤原頼忠御宝殿修造」、そして④同23（1416）年に「大旦那弥沙大蓮（頼忠）同遠江守頼久神殿八棟作仁而拜殿御供所迄新仁造営 同年頼久楼門建立」と記されている（多良木町史編纂会・1980）。すなわち王宮社は、多良木相良氏の歴代惣領＝多良木相良家歴代当主によって造営・修造されたのであり、それは多良木における惣領権の脈々とした継承を目にみえるかたちで内外に示す事業であったと考えられる。

(5) 青蓮寺の建立

青蓮寺は永仁6（1298）年に相良頼宗によって頼景とその後室青蓮尼の菩提を弔うために建立されたと伝えられる。

同寺の伽藍は頼景墓と阿弥陀堂を中心に配した象徴的な構成をとっている。13世紀末に多良木における惣領制が展開されるに際して、多良木相良氏としての一族結合を強化する必要が生じ、人吉荘内願成寺や蓮花寺とは別の、頼景の独自の廟所と青蓮尼の位牌所が求められ、頼宗による建立につながったものと推察される。

この点に関して小川弘和は、多良木相良氏が13世紀後期の段階から一族内紛争を繰り返していく一方で、人吉相良家は単独相続制に移行して結束を強めていたと指摘し、青蓮寺の建立は多良木相良家が人吉相良家等も含む一族全体に対する惣領権を主張したものと位置づけている（小川・2015）。

(6) 惣領相良経頼と一族内紛争

小川が指摘するように、青蓮寺の建立や王宮社の相次ぐ造営・修造の背景には、多良木相良氏内における惣領・庶子間の領主権をめぐる紛争、すなわち惣領制からの独立をめざす庶子家の運動が展開し

ていた。

正安4（1302）年6月、多良木村地頭相良牛房丸（頼宗の子息で惣領の経頼）代の左衛門尉資氏は、頼氏の孫にあたる庶子頼包、頼高、頼秀、頼実を相手に、頼氏譲与の外の所領の押領・濫妨そして惣領経頼への不服従を停止するよう六波羅に訴え出た。その際に作成された申状案（相36）によれば、惣領と頼包らの対立はすでに何年か前にも訴訟沙汰へと発展し、そのときは頼包らから和与を望み、和与状が作成されたが、頼包らはまたも所領押領・濫妨・対捍に及んだとされる。惣領への不服従の具体的内容としては、検断物の略奪（「濫妨検断」）、守護方への役負担（「国方済物」）を惣領を通さずに行い、あるいは異国警固番役以下の用途負担を拒否するといった対捍行為であった。

さらに惣領経頼と庶子頼秀とは延慶2（1309）年にも訴訟沙汰となっており（相38）、経頼側は頼秀が「国方済物并関東御公事者、属惣領可弁勤」との頼氏譲状（前引の相32）に違背して、異国警固番役も含めて「別勤」を望んでおり、「惣領敵対」の咎は逃れがたい、と主張している。典型的な庶子の独立運動であった。

このように、鎌倉時代後期の多良木相良氏は、惣領家＝多良木相良家と庶子家との深刻な対立を抱えていた。しかしそれは多良木相良氏のみならず、この時代の在地領主階級に共通する状況であった。むしろ、一族紛争を抑止凍結するために、多良木の地に多くの宗教施設が整備された事実注目すべきである。

すなわち、頼氏の供養所・蓮花寺、多良木相良家の供養所・東光寺、氏神としての王宮社、そして頼景以来の正統相良家としての多良木相良家を象徴する青蓮寺。これらの祭祀を紐帯として、多良木相良氏は一族結合を維持した。さらに多良木相良氏は、上球磨一帯の在地領主層と連携しながら、惣領相良経頼のもとで14世紀の内乱へと突入していくのである。

3. 14・15世紀の文献史料

球磨郡における14世紀内乱は、おおよそ多良木相良氏が宮方、人吉相良氏が武家方に属して激しく対立する過程であった。そこでは、多良木相良家・相良氏を中核とした在地領主層の地域的な結合態が文献史料上に明確な姿をあらわし、上球磨・中球磨地域における中世的秩序の到達点が示される。だが、15世紀中葉には人吉（佐牟田）相良家そして永富相良長統の権力によって圧倒され、上球磨＝多良木地域は戦国大名相良家の分郡領域支配へと包摂されていき、球磨郡の中世史は新段階を迎えることになる。

(1) 14世紀内乱期の文献史料

前引の相3の裏書に明記されているように、鎌倉幕府滅亡の時点では、多良木相良経頼と人吉（佐牟田）相良頼広は協力して人吉荘北方の還付を新政権に申請していたが、結果的に建武5（1338）年にいって人吉相良家が独占的に還付を受けることになる（相79～82）。建武5年8月日付の人吉相良定頼申状案（相82）は、その間の事情を次のように描く。

自分は足利尊氏に属して建武3年の上洛にも供奉したが、同年には球磨郡で「相良孫三郎経頼、須恵、永里、岡本、奥野、橘佐渡八郎以下凶徒等」が宮方の菊地武敏らと「同心」して「大勢」で挙兵した。これに対して自分は「山田城」（現山江村山田）に「親類若党等」を「籠置」いて防戦し、凶徒を退散させた。山田城は球磨郡の「無雙城郭」で宮方凶徒に占拠されるわけにはいかなかった。自分はこのような忠勤を重ねてきた。それが上聞に達し、一色殿から「本領北方半分地頭職」を返付していただいた（もう半分は祖父の長氏に返付、相80・81）。さらに軍忠を注進させていただき、恩賞の不足分については「一族経頼并庶子等跡」を預け給わりたい。

ここからは、以下の3点が読み取れる。

第一に、多良木相良経頼を統率者とした球磨郡宮方の軍勢が、上球磨から中球磨東部一帯の在地領主層によって構成されていたことである。すでにみたように、惣領経頼のもとには多良木相良氏庶家一族が存在していた。その周辺に地域の在地領主たちが結集するという二重構造が、14世紀の上球磨・中球磨地域における秩序の特質であった。

第二に、内乱最初期における人吉勢と多良木勢の奪い合いの地が山田城であった点である、山田の

地は中球磨と下球磨の境界にあたる要地で、人吉相良氏と多良木相良氏が球磨盆地内の領域支配を争うという、内乱の地域展開の構図が読み取れる。

第三に、人吉相良定頼が恩賞として多良木相良氏の所領を希望していることである。これは、人吉荘北方地頭職を手中にした人吉（佐牟田）相良家が、多良木相良家の保持する頼景以来の正統性を奪取し、球磨郡の一円支配を志向しはじめたのが、14世紀内乱の初期であった事実を示している。

小川弘和が指摘するように、人吉（佐牟田）相良家は人吉荘内の田地を庶子および平河氏・須恵氏などの中球磨の在地領主に知行として配分し、「人吉庄一分地頭」として編成していく（小川・2015）。そして1340年代の主戦場は原田、西村、東方など中球磨の奪い合いへと展開し（相108）、さらに上球磨の久米郷木原（相112・113）へ、そしてついに50年代には「球磨郡内所々」（相142）へと拡散していくのである。

こうして、現存する一次文献史料をみると、人吉（佐牟田）相良家勢力の軍事的優位のもとで球磨郡における14世紀内乱の幕が引かれたかに見えるが、永和3（1377）年10月、内乱終結とともに結ばれた著名な南九州国人一揆の契約状案（「禰寝文書」）には、その時点での球磨郡内における在地領主の存在が示されていて貴重である。すなわち、契約状への署判者61名のうち、球磨郡内の者は以下のとおりである。上球磨は多良木相良頼忠、宮原橘公冬、永里武綱、久米為頼、奥野助景。中球磨は平河師門、須恵重宗、岡本頼季。そして下球磨は相良前頼・右頼の兄弟のみであった。

つまり、上球磨では多良木相良家を核とした建武以来の一揆二重構造はいまだ健在で、伝統的在地領主らが温存されている中球磨を挟んで、人吉（佐牟田）相良氏へと権力一元化を遂げた下球磨勢力と対峙していた。これが球磨郡の室町期的地域秩序の骨格であり、それは両者が南九州国人一揆のメンバーとして実力行使を相互に停止している限りにおいて維持されるものであった。元中8（1391）年に人吉（佐牟田）相良前頼（立阿）が多良木相良家の孫五郎に宛てた次の契約状は、その点をよく示している。

契約申候、右之意趣者、於多良木競望之事不可有候、此旨偽申候者、奉仰候、阿蘇十二宮大明神之御罰ヲ至子々孫々可罷蒙候也、

元中八年二月十八日

立阿（花押）

相良孫五郎殿（相186）

前頼は多良木相良家に対して、多良木支配を実現するための実力行使や訴訟を留保する旨、誓約している。多良木相良家・相良氏の存続は、人吉（佐牟田）相良家が多良木に対する権利主張を主体的に凍結することによって保障され、また、正統相良家の本領としての多良木の歴史的地位も保全されたのである。これが内乱を経た14世紀末における現実であった。

(2) 15世紀中葉の文献史料

前述のように人吉（佐牟田）相良家は内乱期に獲得した所領を原資にして、中球磨の在地領主層をも主従制のもとに組織していき、多良木相良氏への圧迫を強めていったと推察される。14世紀末から15世紀前期にいたるまでの状況を示す一次文献史料は途絶えてしまうが、最近、鶴嶋俊彦が注目した次の相良為統置文（『熊本県史料中世篇3』所収「願成寺文書」16号）には、貴重な情報が書き込まれている（鶴嶋・2015）。

（端裏書）「願成寺江参」

肥後国求麻郡久米郷多良木村之内、当家先祖長頼法名蓮仏彼御方御寄進願成寺之田地、三四代自多良木致押領候、然者多良木之事、近江守前頼令退治之時、願成寺江如本文書被至寄進候、其以後前頼・堯頼依無子孫、多良木遠江守頼久令蜂起、郡内人々過半属彼手候処、当家如順次、親候長続当郡知行之時、裏里之人依忠節、先彼領地被宛行給分候歟、今年如前代、彼三町願成寺并供僧様之御中江付進之候坪付在別紙、如前代御知行可目出候、当家於御祈念者弥奉憑候、京都国役等、又者弓矢向可隙入時節者、如諸寺家御心得可然候、仍所定如件、

文明十九年丁未七月十日

左衛門尉藤原朝臣為統（花押）

発給者の為統は、15世紀中期に多良木相良氏を滅亡させて戦国期の球磨郡領域支配を確立した永富相良長続の後継者である。為統は文明19（1487）年に多良木村内田地三町を前代の如く相良家祈念料として願成寺・供僧中へ寄進するとし、それに際して鎌倉時代以来の経緯を以下のように説明して、次

代に伝えようとしたのである。

①当該の田地3町は、相良家の先祖長頼が願成寺に寄進したが、3・4代のあいだ多良木相良家から「押領」され、願成寺は知行できなかつた。

②人吉（佐牟田）相良近江守前統が多良木を「退治」したとき、前統は長頼代のおりの寄進状を作成して願成寺にこれを納めた。なお、この前統は前頼の孫にあたり、人吉（佐牟田）相良家家督であったのは応永24（1417）年から嘉吉3（1443）年までであった（鶴嶋・2015）。

③ところがその後、佐牟田前統と弟の堯頼には「子孫」がおらず、多良木遠江守頼久の蜂起を呼び起こすことになり、「郡内人々過半」が多良木方に付き、球磨郡は混乱におちいった。

④そこで為統の父永富長統は、人吉相良家を継承する順序に従ってその地位につき、混乱を収束させて球磨郡の「知行」を実現した。このとき味方した郡内全域の衆への恩賞に願成寺の3町をも充当せざるを得なかつたが、今年にいたって改めて寄進することにした。

従来の研究において④は文安5（1448）年であることがほぼ確定されているので（服部・1980、新名・2015）、本置文の執筆はその39年後のこととなり、出自の明確でない永富家出身の為統が統一相良家督としての自己の正統性を強調する意図をもって脚色した可能性がないとはいえない。しかしここには、近世相良家史にはみられない記述が含まれている。

それは第一に②で、すでに15世紀前期の段階で人吉（佐牟田）相良長統による「多良木退治」がなされていたとすること。第二に③で、「多良木退治」の後の佐牟田家の混乱が多良木相良頼久の「蜂起」を誘発し、それに郡内在地領主の過半が味方したとすること。そして④で、勝利した永富相良長統が莫大な恩賞を費やしつ、郡内一円で主従制的支配を構築したことである。

(3) 15世紀中葉の仏神像銘文史料にみる永富長統の活動

このような事情により、永富長統は文安5（1448）年の統一以降、頼景・長頼以来の正統相良家＝多良木相良家の由緒をわがものにして、一郡支配を安定化するための活動に取り組まざるを得なかつた。具体的には、長統のもとにいたと考えられる「慧麟」という仏師が長禄4（1460）年～文明元（1469）年に、上球磨で集中的に仏神像を製作しているのが注目される。中西真美子の研究によれば、現在確認される9体（表）のうち5体（表No.1・4・5・6・8）の銘文に、多良木相良家を制圧した本人である相良長統の名がみえることが確認されるのである（中西・2020）。

中西によれば、慧麟の造像活動の特徴は、次のようにまとめられる。

第一に、9体のうち8体までが、長統によって滅ぼされた多良木相良氏の勢力圏だった上球磨に造

表 慧麟作 仏神像一覧

No.	名称	所蔵	現所在地	制作年月日
1	木造釈迦如来立像	熊野神社	あさぎり町	長禄4年（1460）11月29日
2	木造千手観音菩薩立像	熊野神社	あさぎり町	寛正2年（1461）6月2日
3	木造大辯功德天立像	龍泉寺	水上村	寛正3年（1462）3月18日
4	木造婆藪仙人立像	龍泉寺	水上村	寛正3年（1462）3月18日
5	木造虚空蔵菩薩坐像	小林虚空蔵堂	多良木町	寛正6年（1465）4月26日
6-1	木造薬師如来立像	八日薬師堂	多良木町	寛正7年（1466）2月20日
6-2	木造菩薩形立像	八日薬師堂	多良木町	文正2年（1467）か
6-3	木造菩薩形立像	八日薬師堂	多良木町	文正2年（1467）か
7	木造男神坐像	永岡大王神社	湯前町	文正2年（1467）2月15日
8	木造十一面観音菩薩立像	城山観音堂	山江村	応仁3年（1469）8月6日か
9	木造女神坐像	某神社	水上村	文明元年（1469）10月24日

出典 中西真美子「仏師僧慧麟の造像活動と相良長統」の「表1」から作成

立されていて、慧麟の造像活動は長統の球磨郡統一をうけて始まり、長統の死とともに終わるとみられること。

第二に、像の作風は素朴であり、作風・技法・図像に対する姿勢から、慧麟は中央の仏師について伝統的な技法を深く学んだ仏師ではない、在地の仏師であること。

第三に、慧麟作の仏神像の大きな特徴は銘文で、光背背面、台座背面を書面のように使って、完成後も視認可能なところに長文を記し、そこに「長統」の名が書き込まれること。かつこれらは、かつて

の多良木相良家の支配領域にいる各地の領主層が造営主体となり、永富相良長統の統治への賛意とともに地域の安泰を祈願する文言となっていること。

このように慧麟作仏神像の銘文は、永富長統の上球磨支配の特質を示す文献史料として貴重なものである。柳田快明の研究（柳田・2020）も参考としながら、2点の銘文を具体的にみよう。

まず、表No.5の黒肥地寺虚空蔵坐像の墨書銘である。

右、奉造立虚空蔵者、正陸僧依為先祖相傳之三蔵、手於借佛師慧麟僧、寛正六年二月廿一日始之、為光金輪上皇天長地久、殊者當郡主相良之長統、嫡子為統、同多良木殿頼泰□□□、別者千里内子孫□□□□此時籌也、其外結縁之一味同心之志、作天人師虚空満願之故也、於黒肥地寺住持恵雄、佛法無退転、世法實富貴者勿如此、諸佛擁護加護蒙日々衆生利益□志者、遂末代乃至法界平等利益而已、

寛正乙酉卯月廿五日

大願主族峯 道号 正陸僧

黒肥地寺當住恵雄

□之大壇那千里内幸統子息幸□

佛師慧麟書作之

虚空蔵坐像造立の大願主正陸僧については未詳だが、造立に関与した恵雄が住職をつとめる「黒肥地寺」は、かつて青蓮寺から西に1kmの位置にあった。本像は同寺の本尊と推察される。次に大壇那の千里内幸統父子は、柳田が指摘するように黒肥地の山間部にある千里内を苗字の地とする土豪とみられる。

以上を確認した上で、第一に注目すべきは、本坐像が正陸や千里内らによって「當郡主相良之長統」と「嫡子為統」、それに相良「多良木殿頼泰」のために造立されていることだ。頼泰は、表No.6—1の銘文に「大旦那相良長統並三男多良木殿頼泰為息災延命子孫繁昌」とあることから、長統の庶子だとわかる。すなわち長統は「郡主」という直截的な称号を冠してかつての多良木相良氏の本拠に父子で君臨し、かつ、庶子に「多良木殿」と名乗らせて、頼景以来の歴史的象徴性を帯びた多良木の地域支配を担当させ、その事実を多良木の土豪である千里内らから承認・安泰祈願されることで、一郡支配の枠組みとともに在地的正統性をも獲得せんとした事情が浮かび上がるのである。

第二に、本坐像が大願主・大壇那のみならず、「其外結縁之一味同心之志」をもって造像されていることである。「一味同心の志」というからには、相互の結び付きもない単なる結縁＝奉加者の集合ではなく、黒肥地や多良木といった特定地域において社会的関係を保持する住民らの一揆の集団が造像を支えたとみねばなるまい。

次に注目したいのが表No.4の球磨郡岩野善土寺観音像脇侍の台座背面墨書銘である。

右奉造立縛婆仙人者（中略）天下太平国土豊饒、殊者藤原氏相良長統老幼繁昌、別者代官湯前殿松前氏政久子息政山并岩野殿宗朝子息吉宗富貴英雄之祈禱、住持長堅所願成辨之砌也、乃至法界平等利益耳、寛正三年壬午三月十八日 敬白 大願主住持長堅 仏師慧麟

大願主の住持長堅について詳細は不明だが、同時作の表No.3の銘文でも「妙意女」とともに大願主となっており、岩野善土寺の住持であったことがわかる。その長堅が、「天下泰平国土豊饒」とともに、相良長統と「代官湯前殿松前氏政子息政山」「岩野殿宗朝子息吉宗」の繁盛・富貴英雄を祈禱しているのである。湯前殿松前氏は同地域の湯前に設定された長統直轄領の代官に任命されたとみられる。岩野殿は善土寺が存在した（現在は廃寺）岩野の殿原（土豪）と考えられる。湯前と岩野は上球磨で隣り合った地域で、わけても湯前は日向国と接する境目でもあった。

柳田も指摘するように、長統は湯前のような郡内の要地を代官支配の直轄領とし、前出の千里内氏と同様に、郡内の地名を苗字とする殿原層を被官・給人化していったものと考えられるのである。

以上、これら銘文からは、「郡主」と郡内要地支配者（多良木殿・湯前殿等）および直轄領代官によって構成される分郡支配の上部構造の枠組みの設定と、郡内各地域における「結縁之一味同心之志」によって、永富相良長統の地域支配事実が正当化され得た事情を読み取り得るのである。

なお、15世紀中葉における永富相良長統の活動との関係で、青蓮寺の現況は興味深い。

すなわち、現在の青蓮寺阿弥陀堂は嘉吉3（1443）年の阿弥陀堂が原型であり、その造営時期は、まさに佐牟田相良前統による「多良木退治」から文安5年までの間にあたる。天文11（1542）年の阿弥陀堂棟札の追記部分によれば、この再興は佐牟田相良堯頼によるものとされているのである（鶴嶋・2015）。

それに加えて、頼景墓の壇上積基壇の西側という象徴的場所には、永富長統・為統の供養塔や戦国・江戸期の五輪塔が配置されている。総じて阿弥陀堂の裏の墓所にある五輪塔の形式は15世紀後半以降のものである。すなわち、青蓮寺の墓所は多良木相良家滅亡後に永富家の支配のもとで開放され、性格を変えたものと考えられる。長統・為統は、自身と頼景とを結び付けて一郡支配の正統性とするため、青蓮寺に手を入れたのであろう。

さらに、伝相良頼景館跡の北側の堀は15世紀中頃に埋め戻されて再度掘り直された遺構であり、土塁もそれに伴って造成されたことが今回の調査によって判明している。これも、多良木相良家・相良氏の滅亡と永富長統・為統による新たな多良木支配体制の構築に伴う改変であった可能性が指摘できよう。

おわりに—多良木相良家・相良氏の歴史とその画期—

12世紀末から15世紀中葉にいたるまでの多良木相良家・相良氏の展開を、文献史料をはじめとする一次的文字史料によって概観してきた。そこから明確になった同家・同氏と多良木地域史についての画期は、以下の三つとなろう。

第一の画期は、頼景から多良木村を相伝し、人吉荘地頭職を獲得した相良長頼（蓮仏）が、人吉荘内に氏寺・願成寺を建立し、開墾田を寄進した1230年代である。遠江国相良荘、京、鎌倉、そして鎮西の所領を行き来していた相良氏の惣領が、球磨郡に基盤を置いた活動を開始した時期である。

第二の画期は、1270年代から90年代にかけて、惣領制の展開と異国警固番役の賦課という経済的・政治的変動に直面した多良木相良家が、一族紛争を抑止凍結するために、多良木の地に多くの宗教施設を整備していった時期である。頼氏の供養所・蓮花寺、多良木相良家の供養所・東光寺、氏神としての王宮社、そして頼景以来の正統相良家としての多良木相良家を象徴する青蓮寺であり、多良木における相良氏関係史跡群の全容が整った時期として重要である。

第三の画期は15世紀中葉である。人吉（佐牟田）相良前統による「多良木退治」から多良木相良頼久の蜂起、そして郡内を二分する地域紛争に勝利した永富長統による上球磨統治体制の構築という、一連の政治変動であった。わけても長統の上球磨地域に対する政策は、頼景以来の正統性を手に入れるために上球磨の要所の寺社で結縁造像し、多良木相良家の継承者としてのみずからの地位をアピールするという積極性を伴うものであり、第二画期以来の寺社や伝相良頼景館跡などの史跡には、この時期に長統らによって改変が加えられている可能性が高いことを指摘しておきたい。

【参考文献】

- 小川弘和・2015「総論 中世球磨郡の形成と展開」『日本遺産記念展 ほとけの里と相良の名宝 人吉球磨の歴史と美』熊本県立美術館
- 小川弘和・2016「平安時代の球磨郡と造寺・造仏」小川弘和『中世的九州の形成』高志書院
- 小川弘和・2018「鎮西相良氏の惣領制と一揆」『歴史』130 東北史学会
- 小川弘和・2020「相良・工藤系図とその周辺」稲葉継陽・小川弘和編『中世相良氏の展開と地域社会』戎光祥出版
- 工藤敬一・1992「肥後球磨の荘園公領制と人吉荘」工藤敬一『荘園公領制の成立と内乱』思文閣出版
- 多良木町史編纂会・1980『多良木町史』熊本県球磨郡多良木町
- 鶴嶋俊彦・2015「文安五年相良家政変の実像」服部英雄・貴田潔編『歴史を歩く・時代を歩く』九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室
- 中西真美子・2020「仏師僧慧麟の造像活動と相良長頼」稲葉継陽・小川弘和編『中世相良氏の展開と地域社会』戎光祥出版
- 新名一仁・2015『室町期島津氏領国の政治構造』戎光祥出版
- 服部英雄・1980「戦国相良氏の誕生」『日本歴史』388 日本歴史学会
- 松本寿三郎・1977「相良氏の球磨下向と多良木支配」『熊本県文化財調査報告 第22集 蓮花寺跡・相良頼景館跡』熊本県教育委員会
- 柳田快明・2020『文安五年の政変』前後の相良氏支配と球磨郡地域社会—上球磨地方を中心に— 稲葉継陽・小川弘和編『中世相良氏の展開と地域社会』戎光祥出版

蓮花寺・伝相良頼景館跡と相良氏関連遺跡出土の貿易陶磁器調査

小野 正敏

I 悉皆調査による数値化

1) 目的と方法

蓮花寺、伝相良頼景館跡を評価、検証する方法のひとつとして、出土陶磁器の分析があり、今回関係者の協力を得て、この2遺跡並びに関連する灰塚遺跡、山田城、高城、相良頼俊館（佐牟田館）、奥野城、矢黒城、中世人吉城の上原城と中原城の8遺跡から発掘された出土陶磁器のうち貿易陶磁について全点の分類と計数を行った。

遺跡から出土した陶磁器は、その遺跡の年代、継続のあり方など、遺跡の特長を復元するための遺構と並ぶ必須の資料である。だが多くの報告書では実測図として掲載される復元可能な破片や日用品の碗皿ではない陶磁研究で注目される特殊な器種などが選択的に記載され、出土陶磁器の全体像がわかる形で報告されることは少ない。これには小さな破片の分類が難しいことや、大量の出土品があるときには、その全量を調査、把握する困難さが伴うことがその原因である。しかし、消費された陶磁器からその遺跡の年代変遷や器種組成に反映された遺跡の性格等を推定するためには、小破片を含むすべての出土陶磁器の分類とその数値化を基礎資料とすることが有効で、これにより豊かな歴史像復元が可能となると考える。

こうした視点から、列島規模で、または一定の地域、あるいは同じような性格の遺跡の比較のために、出土陶磁の悉皆調査による数値化を行い、これまでも静岡県域の全発掘遺跡の数値化をはじめ、貿易陶磁に限定した悉皆調査を沖縄県、島根県益田地区など各地で実施してきた（小野 2005、池谷他 2021 など）。悉皆調査で求められるのは、多くの遺跡について出土陶磁器数の多少や破片の大小による分類の差を吸収することであり、そのために精緻な分類ではなく、大分類を用いてより多くの遺跡で同じ基準で数値化することの有効性を選択している。

また、本来その目的のためには、小野・藤沢編 2005 で実施したように、貿易陶磁のみならず、同じ機能をもつ瀬戸美濃をはじめ、焼締陶器の壺甕鉢、地元産陶器、土器なども数値化をするのが望ましいが、力量上そこまではできていない。

2) 貿易陶磁の分類と年代

この調査で準拠した分類は、菊川町教委 2000 の分類を継承し改訂した国立歴史民俗博物館 2021 の分類である。この分類は、上記の目的のために用意した大分類を採用しており、それまでの大宰府編年や上田、森田、小野による詳細な分類編年案との対応関係などに関してはそれに拠られたい。

遺跡における青磁、白磁、染付の分類編年によって大まかな時期設定をすると、それらの共存関係から消費段階の群として捉えることが可能である。その視点から、どこの遺跡でも普遍的な碗と皿を目安にして I～VI 期にまとめた。I 期は、白磁碗 II、IV、V など白磁を主体とする 11 世紀後葉～12 世紀後葉、II 期は、龍泉窯系青磁碗 A、同安窯系碗など青磁が主体となり、白磁碗 VIII などが残る 12 世紀後葉～13 世紀前葉、III 期は、青磁碗 B 1、B 0 と白磁皿 IX などを主体とする 13 世紀中葉～14 世紀初頭、IV a 期は、青磁碗 D1 などを主体とする 14 世紀前葉～14 世紀後葉、IV b 期は、青磁碗 D2 と少し遅れて白磁皿 B などが加わる 14 世紀後葉～15 世紀中葉、V 期は、青磁碗 B 4、青磁稜花皿と染付碗皿 B、C、白磁皿 C などを主体とする 15 世紀後葉～16 世紀前葉、VI 期は、染付碗皿 E や菊皿などを主体とする 16 世紀中葉～後葉に設定する。各型式の年代幅は、モデル的なものであり、特に継続する遺跡ではより後まで使用されたと考えられる。

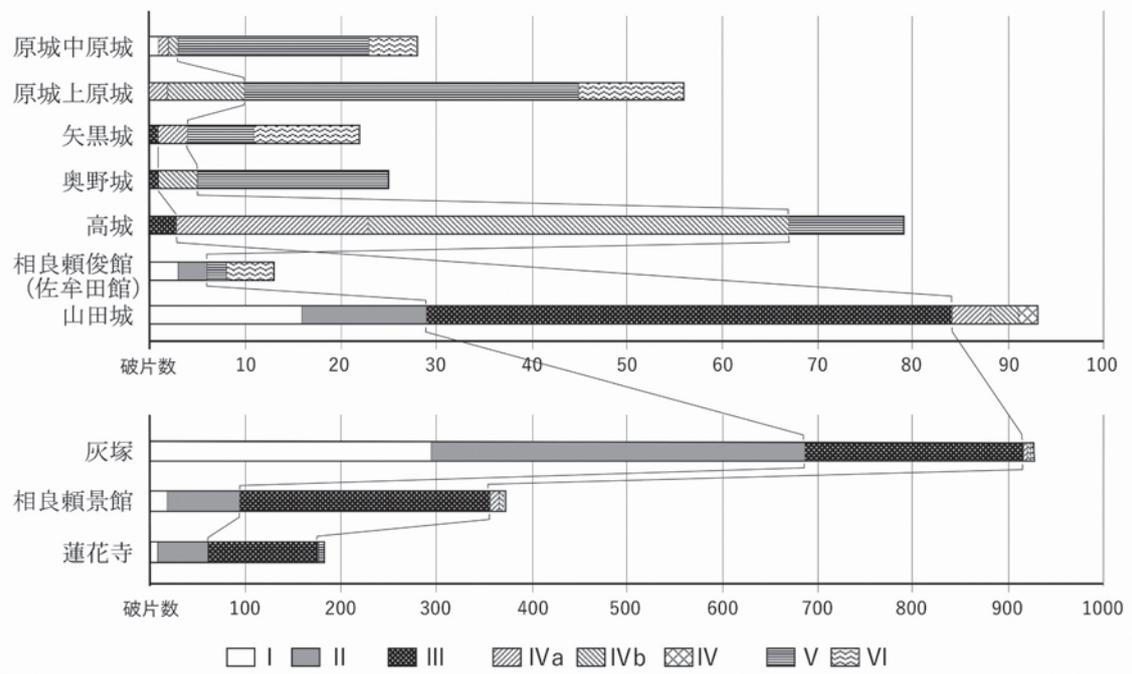


図1 時期別陶磁器組成

II 貿易陶磁からみた遺跡の年代と特徴

1) 遺跡と存続年代の検討

各遺跡について、種別、器種、型式分類の点数をまとめたのが基礎資料の表1, 2である。さらに、この中から特殊な器種を避けて伝世的な使用がほとんどないと考える日用品碗皿鉢の破片数をI～VI期にまとめたグラフが図1である。グラフでは、分類できた点数100点を境にスケールを変えて表示した。

このグラフの年代構成の特徴からは、大きく3つのあり方をもつ遺跡群として指摘できる。

- I、II期から主体があり、III期にも継続する遺跡で、相良頼景館、蓮花寺、灰塚遺跡、山田城である。I、II期に注目すれば、灰塚と相良頼景館、蓮花寺との量的差が大きい。さらにIII期より後に注目すれば、IV期以降が急激に減少する相良頼景館、蓮花寺、灰塚と、IV期が一定量認められる山田城との差異がある。またこれらの遺跡群では、山田城も含めてV、VI期がないことも特徴的である。
- III期から確認される遺跡で、高城、奥野城、矢黒城などである。このうちIV期に主体がある高城とV、VI期に主体が確認できる奥野城、矢黒城の差異があるが、いずれもV、VI期に使われることで共通する。
- V、VI期に主体があることに注目すると中世人吉城、奥野城、矢黒城、相良頼俊館が共通する。一方、遺跡の開始をみると、奥野城、矢黒城はIII期から、相良頼俊館はI、II期から、中原城でも少量ながらI、IV a期の破片が確認される。これにより本来はI、II、III期など中世前期から使われた可能性がある。中世人吉城もそうした前段階があり、V期になると上原城や中原城を中核の曲輪群とする、東国にみる実城—中城—外城のような階層構造を持ったひとつの城として大きく整備されたという想定もできよう。逆に人吉地区のV、VI期の遺跡は、いずれも既にIII期あるいはIV a期に前身があり、それが継承されるという言い方ができるのかもしれない。残念ながら現時点では、これら分類資料数が100点以下の遺跡については不確実性が強く、今後の調査によってその位置づけが変更されることもあるといえよう。

Ⅲ 貿易陶磁からみた相良頼景館と蓮花寺遺跡の位置づけ

貿易陶磁の悉皆調査による数値情報の結果から、これまでの先行研究による相良氏関連の各遺跡の評価を再確認、各遺跡の位置づけを考えてみたい。

相良氏関連の遺跡については、既に多くの成果があるが、特に出合宏光 2020 年「相良氏の拠点」（『九州の中世Ⅱ 武士の拠点鎌倉・室町時代』）には、今回扱った遺跡を含む相良氏関係の多くの先行研究の成果と客観的な視点からの要点がまとめられており、原典を再確認できず孫引き的であるが参考とすることを寛容願いたい。

1) 陶磁器の年代変遷から

今回の貿易陶磁からみた遺跡の年代変遷を、これまでの文献史学による指摘と関係づけて評価する際に、次の事象が注目される。

- ①建久 2 年（1191）「永峯師高所領譲状」には永吉庄之内横瀬、山田
- ②建久 8 年（1197）「肥後国球磨郡田数領主等目録写」には、須恵氏、人吉氏、平河氏、久米氏の在り領主のみで、相良氏なし
- ③元久 2 年（1205）（人吉）長頼、人吉庄補任
- ④安貞 2 年（1228）（多良木）頼景から長頼へ多良木村譲状
- ⑤嘉禎元年（1235）（多良木）頼氏、蓮花寺創建
文永 6 年（1269）（多良木）頼宗、蓮花寺に笠塔婆
- ⑥文永 10 年（1273）頼氏、東光寺に経塚
- ⑦永仁 6 年（1298）頼宗、青蓮寺阿弥陀堂創建
- ⑧興国元年・暦応 3 年（1340）（多良木）経頼、山田城に陣
- ⑨文安 5 年（1448）山田城永富長統が人吉城頼観を多良木へ退去させ、
多良木を侵攻し、多良木相良氏滅亡。球磨郡統一
- ⑩長祿 4 年（1460）人吉城永富長統、守護菊池為邦から芦北郡安堵

伝相良頼景館、蓮花寺の成立期の状況は、a) の時期的な変遷の特徴に反映されていると思われる。この 2 遺跡は、Ⅲ期に最盛期があり、蓮花寺の嘉禎元年（1235）創建など⑤、④～⑦によってもこの時期に相良氏の本拠として多良木の整備が急速に進展したことが確認される。一方、その前段階のⅠ、Ⅱ期についてみると、相良氏の存在を確認できるのが 13 世紀初頭の③や④であり、逆に①、②からは平河氏や須恵氏、人吉氏、久米氏といった在り領主の存在感が大きい。①では多良木の横瀬、人吉の山田も平河氏の所領と記される。山田城や須恵氏本拠とされる灰塚遺跡のⅠ、Ⅱ期の状況がそれを反映したものとなっている。また、伝相良頼景館、蓮花寺にもⅠ期段階の陶磁器が一定量確認されることも相良氏の本拠化が進む以前からの施設があったことを示している。①、②からはそれが平河氏に関わるものとするのが自然であろう。そのことは、球磨川の川湊、用水堰口の開発とどのように関わるかについても議論の余地が残されている。

伝相良頼景館、蓮花寺、灰塚遺跡の陶磁器変遷は、共通して 14 世紀Ⅳ a 期以降になると急激に減少している。多良木相良氏関連の拠点がいずれもそれまでの本拠としての機能を失ったことを暗示している。この変化は、この時期が、相良氏のみならず、九州全域が南北朝の戦乱の影響を受けた結果であり、奥野城をはじめ内城、鍋城など、館から山城へと拠点の機能が変化していったものと考えられる。現時点では、発掘されたⅣ期の遺跡は、人吉地区に偏っているが、b) に指摘したように、いずれの遺跡もⅤ、Ⅵ期へと継続、その時期が主体となっており、戦国の城への変化を語っている。中世人吉城の陶磁器変遷はそれをよく示す例である。

令和 4 年（2022）の伝相良頼景館北堀のトレンチ調査では、堀が新旧 2 時期あり、旧堀は 13 世紀中頃以降に掘られ、15 世紀中頃以前に人為的に埋められ、新堀は 15 世紀前葉以降に同じ位置に規模を縮小して新たに土塁を伴い再整備されたことが判明した。この改変はⅣ期の陶磁器急減からⅤ期にかけての時期に相当し、先の変化と連動する可能性が指摘できよう。伝相良頼景館については、館内部の

発掘がいまだになく、今後の発掘による解明が期待される。

一方、同じ山江地区で近距離にある山田城と高城の変遷は、各々異なる個性を示しており、興味深い。山田城は、中世前期Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ期が主体であり、Ⅳa、Ⅳb期には減少して戦国期Ⅴ期には継続しない。高城では、前段階のⅢ期はあるものの少なく、Ⅳa、Ⅳb期を主体としてⅤ期へと継続する。山田城は、⑧南北朝期に人吉地区の北朝方の拠点として知られ、またその後、戦国期Ⅴ期にむけて、多良木相良氏を滅亡させ、久米、平河、須恵、岡本、永里氏などの有力国人を排除して人吉城に入り、球磨郡を統一した永富長統の本拠としても知られる。これに対して高城は記録に見えない、分布調査で確認された城とされる。この両者の陶磁器変遷をみると、Ⅰ～Ⅲ期を主体としてⅣ期に終わる山田城がおそらく平河氏の本拠とした山田城であり、Ⅳ期を主体としてⅤ期に継続する高城が、人吉相良氏庶流永富長統氏の本拠であった可能性が高い。文献史料にいう「山田」の城は山田にある城という意味の記載だと考えると二つの城が山田城と呼ばれたことに矛盾はない。既に鶴嶋2013が高城を永富長統の拠点と指摘したことに異論はなく、この陶磁器変遷からも肯首される。

現状で確認できた各遺跡の陶磁器の変遷を地域構造のなかで概観すると、多良木地区に中心があった鎌倉期から、南北朝期を経て、その拠点が戦国期には人吉地区へと移り、さらに近世へと継続したと評価できよう。

2) 非日用的陶磁器の所有から

前項まで碗皿を主とした数量的な変遷から遺跡の特長を考えてきた。もうひとつの比較がどの遺跡にも共通する日用品ではない、表1, 2で「その他」とした特殊な器種の所有である。青磁の酒会壺、花瓶、白磁四耳壺・水注、梅瓶、陶器では華南三彩の緑釉洗、黄釉洗、高麗象嵌青磁瓶などが注目される。これらの時期はいずれもⅢ期、Ⅳa期の鎌倉時代のものである。蓮花寺、伝相良頼景館、灰塚ともに、特に白磁四耳壺・水注、梅瓶、華南三彩の緑釉洗、黄釉洗などが複数個確認されている。

これらは、鎌倉や東国の御家人クラス、あるいはそれに準ずる館からも出土するセットで、特に華南三彩洗は緑釉が好まれ限定されているのが特徴である。東光寺では、大型の磨崖武蔵型板碑やそれに伴う鎌倉のやぐらに似た岩窟のセットが注目された。どちらも相良氏の本領遠江にはないものであり、西遷御家人として肥後の地で鎌倉御家人としてのアイデンティティを主張する装置としてあえて作られたと評価された。この陶磁器セットは、館クラスの所有品としては相応しいものと評価できるが、灰塚でも同じ状況であることを考慮すると、さらに踏み込んで、新たな地方で所領を得た御家人たちが、鎌倉とのつながりを誇示、階層意識を表現する手段となったというには、消極的にならざるを得ない。今後、さらに発掘例を集めることで考えてみたい。

陶磁器の分類計数調査には、浅野晴樹、上村麻妃、佐々木健策、鈴木康之、中島圭一、永井孝宏、村木二郎の各氏が参加した。

引用文献

熊本県教委 1977 「蓮花寺跡・相良頼景館跡」 熊本県文化財調査報告第22集

熊本県教委 1988 「高城跡」 熊本県文化財調査報告第95集

熊本県教委 1989 「山田城跡」 熊本県文化財調査報告第102集

熊本県教委 1990 「山田城跡Ⅱ・Ⅲ」 熊本県文化財調査報告第112集

菊川町教委 2000 「横地城総合調査報告書 資料編」

熊本県教委 2001 「灰塚遺跡Ⅱ」 熊本県文化財調査報告第197集

小野正敏 2005 「貿易陶磁と中世陶磁組成」 『中世の伊豆・駿河・遠江一出土遺物が語る社会』

鶴嶋俊彦 2013 「肥後球磨郡の群郭式城郭の登場と展開」 『平成25年度南九州城郭談話会・北部九州中近世城郭研究会合同研究大会資料集』

出合宏光 2020 「相良氏の拠点」 『九州の中世Ⅱ 武士の拠点鎌倉・室町時代』

池谷初恵他 2021 「中世琉球における貿易陶磁調査Ⅰ」 『国立歴史民俗博物館研究報告第226集』

種類	器種	分類	遺跡名	蓮花寺	頼景館	灰塚	奥野城	山田城	高城	上原原	中原城	相良頼俊館	矢黒城	
青磁	碗	同安窯系B	II	6	12	39			32			3		
		A1	II	3	1	2								
		A2	II	10	14	7		1	7					
		A4	II	3	13	4		3	1					
		A6	II	0	2	5								
		A不明	II	32	33	247		6	11					
		A輪花	II			1		1	1					
		B0	III	3	3	14		4						
		B1	III	87	210	200	1	35	2			16	1	
		B1か	III					1						
		B3	V	1										
		B4	V	5	1	1	16	2	43	7	6		2	
		C1	IVa							1				
		C2	IVa	1	1		2		10	1			2	
		C2か	IVb							1				
		蓮弁 C2相当	IVb							1				
		C3	VI		1					1	1			
		D1	IVa			8	12	2	5	34	1	1		2
		D1相当	IVa	5										
		D2	IVb	5	2	1	9	2	50	4				8
		D2 蓮弁文	IVb							1	1			
		E1	V				1	4	1	2	1			
		不明 D2相当	IVb											
		不明		13	10	83	1		47	5	3	4	5	
		小碗	B0相当	III	1									
			不明											1
	皿	同安窯系	II	5	9	63			1	9				
		劃花文系(A類)	II			6			1	1				
		折縁皿	IV						1					
		折縁皿 D2相当	IVb				1		1					
		折縁皿 D1orD2相当	IV	5		3			1					
		折縁皿 B0相当	III		15	4		1						
		折縁皿 14C	IVa						1					
		腰折皿	IVb						1					
		腰折皿 D2相当	IVb						1					
		内彎皿	IVb		3				1					
		内彎皿 D2相当	IVb					1	1					
端反皿		IVb								1				
端反皿 D1相当		IVa							2			3		
端反皿 D2相当		IVb				1	1	7	1					
稜花皿		V				5		9	2	1		1		
菊皿		VI							1					
大皿				1					1					
不明 D1相当		IVa						2	3					
不明 D2相当	IVb						1	1						
不明		2						1						
盤類	折縁盤 無文	III、IV	1	6					11	2		9		
	折縁稜花盤	III、IV										3		
	内彎系盤	III、IV							2					
	盤 B0相当	III					1							
	盤 D2相当	IVb			3			1						
不明								4	2		2			
鉢	小鉢B0相当	III			2									
	深鉢							1						
杯	大鉢								1			1		
	杯 B0相当	III			3									
	不遊環壺											1		
	浄瓶									1				
その他	型作象形袋物											1		
	袋物											1		
	香炉		1	4					2	1				
	酒会壺		1											
器種不明	花瓶		1					1	1					
	大型品の部品													
								1						
		青磁計		191	349	700	39	78	305	32	14	23	43	

表-1

種類	器種	分類	遺跡名	蓮花寺	頼景館	灰塚	奥野城	山田城	高城	上原原	中原城	相良頼俊館	矢黒城	
白磁	碗	I類	I			1								
		II類	I			2								
		III類	I			6								
		IV類	I	1	3	68		6	3			1	3	
		V類	I	5	6	212		8	42					
		VI類	I			1		1						
		VかVIII	I、II			2								
		IX類	III	2	4	6		2	2				2	
		ピロースクI	II			1								
		ピロースクII	III											
		ピロースクIII	IVa			2				12				
		ピロースク不明		1										
		不明12	I	1		2								
		不明		3	8	29				2				
	小碗	枢府系	IVa						1					
	皿	II類	I											
		III類	I		2	5				1				
		VI類	I					1						
		VIII類	II		1	17								
		VI類	I	1	7									
		IX類	III	20	31	1		11	1				3	
		ピロースクIII	IVa						1					
		B群	IVb	1			2		14	1			8	
		B群(腰折)	IVb							3				
		C1群	V	2			4		2	6	1	2	4	
		腰折皿 14C	IVa			2		2						
		端反皿 漳州窯	V									1		
		枢府皿	IVa		1									
		不明				3				1				
その他	面取杯	IVb							4					
	小杯	IVb										1		
	小杯 B群	IVb							2			2		
	合子		7	8	14							1		
	四耳壺	III、IVa	7	17	65		3	1						
	播座小壺			1										
	壺			4										
	梅瓶	III	2	4	7									
	水注			1	2									
	線刻文付花瓶 13C	III					20							
	白磁計				53	98	448	6	54	92	7	3	11	15
青白磁	合子							1	1					
	口禿小壺					2								
	口禿皿	III						1						
	口禿腰折れ皿	III			1									
	口禿碗	III			1									
	型押し皿				2									
	口禿器種不明	III						1						
青白磁計				0	0	6	0	3	1	0	0	0		
染付	碗	B	V	1					1	1	2			
		C	V	3			4			10	2	2		
		C 漳州窯系	VI				1			2	1	1	3	
		D	V											
		E	VI					1		2	3		6	
		漳州窯系	VI				1							
	皿	B1	V							2	6	7	1	1
		B2	VI											2
		C	V	1	5	3				7	1			
		C 漳州窯系	VI					1			2		2	
		E	VI					1		2			1	
		F	VI		1					2				
		F 漳州窯系	VI										1	
	大皿 不明										1			
その他	面取壺 16C後半	VI							1					
染付計				5	12	6	8	1	3	35	17	6	14	
総計(陶器除く)				249	459	1160	53	136	401	74	34	40	72	
陶器 -参考-	天目茶碗			3		1		4	5					
	茶入					1		1						
	褐釉壺							1						
	黒褐釉壺							1	7					
	緑釉洗	III			2	6								
	黄釉洗	III	2	4	3									
	華南三彩四耳壺	VI			1									
高麗青磁象嵌瓶	III			2										
朝鮮叩瓶	V									1				

表-2

青蓮寺壇上積基壇の系譜

狭川 真一

青蓮寺本堂の背後は低い丘陵となり、その中腹に中世の石塔が並べられている。その中央部で本堂の真後ろ、本堂の中軸線を北へ伸ばした位置に1基の壇上積基壇がある。かなり傷んでおり、部材の入れ替わりも著しいが、当初はかなり立派な基壇であったことを思わせる。

1. 基壇の現状

まず現状を整理しておこう(第83図)。基壇は加久藤凝灰岩製の地覆石・東石・羽目石・葛石の各部材から成る壇上積基壇で、南面のみほぼ全容を知ることができる。南面両隅の東石外辺間の距離は2.96mを測り、内側に2個の東石を立てて南面を3区分している。中央と西の東石間はほぼ0.55mを測るが、東の1間のみ0.72mとやや広い。これは、羽目石に別材が用いられていることに起因し、本来は中央間と同じ幅で作られたのであろう。地覆石は3石から成るとみられ、各0.93m前後で、幅0.28m、高さ0.23mを測るが、西端は埋もれていて観察できない。

東石と羽目石はすべて別石で作られており、東石の幅0.25m前後、高さ0.56～0.59mで、中央の2個は横断面凸形を呈し、羽目石との段差は約0.10m、凸部の長さは0.22～0.25mを測る。両隅の東石も内側を切り込んで、羽目石端部を受けている。西隅の東石上面に直系5.7cm、深さ3.5cmの浅い窪みがあるが、他の東石にはなく柄穴とは断定できない。羽目石は幅0.65～0.67m、高さ0.595m(西側)で、東石の段差に左右4～7cmずつが嵌まり込んでいる。東の区画では別材を用いており、やや幅の広いものを2段に積んでいる。葛石は南面が全部失われているため情報がないが、東側面北寄りに2個残存しており、長さ66.0～69.9cm、高さ24.0～24.8cmで、幅は内側が埋没していて不明である。

基壇上面には現在7基の五輪塔が並び、最奥部に石碑が建てられている。各五輪塔の部材は混在しており、これが当初の姿でないことは明らかだが、現状ではどの塔が中心に座っていたのか断定は難しく、また塔以外のものも候補に考えておく必要があるので、基壇内の調査を待つ必要がある。

2. 基壇の復原と類例

これをもとに復元を試みる。当該基壇の平面形状が正方形であるとする、東石部での全幅は約2.65m、東石間は約0.55m、地覆石基部から葛石上面までの高さは推定で約1.1mとなる。葛石・地覆石ともに正確な数値は得られないが、全幅は概ね9尺、高さは3.5尺目安で造られたと推定される(図1)。

さて、この少ない情報から特色を拾わねばならないが、東石と羽目石がすべて別材で作られていることは大きな特徴である。近畿地方の事例ながら14世紀にかかる石塔の壇上積基壇は、各辺1枚の石材を彫成してそこに東石と羽目石を彫り出し、4枚を組み合わせて作るものが主流である(組み合わせ方は、狭川・鈴間2011)。これに対して各部材を別石で構成する事例はあまり多くないが、やや古手の資料に見受けられる。

香川県白峰寺十三重石塔東塔<弘安三年/1280>(岩下ほか1963)

2基のうちの東塔が花崗岩製の壇上積基壇を持っている。解体修理された時の簡易な報告書があり、概要は理解できる。基壇正面は3間とし、両端東石の外辺間の長さは1.96mで、東石と羽目石の構造は青蓮寺基壇と同一である。地覆石、葛石ともに残存しており、基壇高は約53cmを測る。銘文は初層軸部東面の梵字の両脇に陰刻される。

奈良県西大寺叡尊墓<正応三年/1290>(狭川2003)

西大寺中興・叡尊の墓は西大寺奥之院に現存し、巨大な壇上積基壇の上に安置されている。基壇の

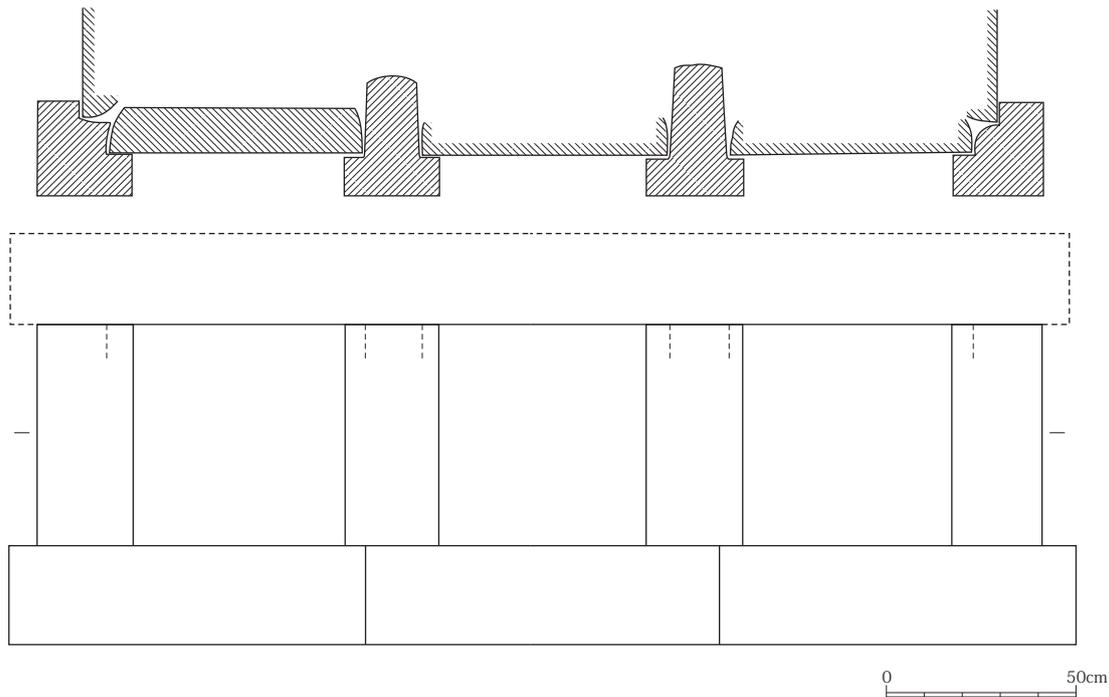


図1 青蓮寺壇上積基壇復元図

幅 6.47m、高さ約 0.90m を測り、解体は行われていないが束石と羽目石が別石で作られていることは明らかである。葛石は下面に小さな段を設けており、各面横方向に 3 石と向かって右端に側面の葛石の小口面が見えており、各面同じパターンで組み上げられる。地覆石は正面 3 石となるよう調整されている。

石塔に銘文は確認されていないが、「西大寺叡尊上人遷化之記」（奈文研 1956）によるとこの地を茶毘所とし、その上に五輪塔を造立したものであることが分かり、没年（1290 年）からあまり時間を経ない建造とみられる。

石塔に伴う各部別材の壇上積基壇で、ある程度の情報が知られるのは以上の 2 点である。この他、京都市神護寺文覚上人墓と性仁親王墓（五輪塔は鎌倉時代中期頃）も束石・羽目石を別材とする壇上積基壇であるが、詳細な情報を得にくいため割愛する。石塔関係ではこれら以外に管見に及ばないが、近接する時期の建築遺構にも若干確認することができるので紹介しておく。

神奈川県極楽寺本堂跡（大三輪ほか 1980）

1979 年度の調査で基壇遺構（第一基壇）が 23.6m に及び確認された。壇上積基壇で、地覆石、羽目石、束石を残すが、葛石は確認できていない。束石と羽目石はそれぞれ別材を組合せて構築されている。極楽寺は忍性が正元元年（1259）に創建したとされ、建治元年（1275）の火災を受けるが、その段階でこの基壇は存在していたとみられている。

奈良市春日大社若宮基壇、本殿回廊基壇（狭川 2022）

若宮社西面の基壇は、束石が隅部分と石段基部にしかなく、正式な壇上積基壇とは言えないかも知れないが、それ以外は地覆石、羽目石、葛石で構成されており、作り方は同じものである。この基壇は「中臣祐定記」寛喜四年（1232）閏九月一三日の項に「若宮御前水垣四面壇南北ヲ唐人之作石ニ天、壇カツラヲタ、ミ、壁石ヲ立（以下略）」（『春日社記録一』）と見えるものに該当するとみられ、唐人が製作したと記されている。時代的な背景を考えると、東大寺復興で渡来した「宋人石工四人」（『東大寺造立供養記』）の系譜上にある工人とみられる。東大寺の復興が完了し、周辺の社寺にも修復の手が及び、彼らの活躍の場が用意されたとみられる。

また、同社本殿を囲う回廊の基壇は、束石・羽目石を別材で組み上げる壇上積基壇であり、宋人石工による一連の仕事ではないかとみている。



香川県白峯寺東塔基壇



奈良県西大寺奥之院叡尊塔と基壇



奈良県春日若宮社基壇



奈良県春日大社回廊基壇



神奈川県極楽寺第1基壇（報告書より）



京都二尊院空公上人行状碑と基壇

写真 各地の壇上積基壇の諸例

極楽寺以外の写真は、すべて狭川撮影分を使用した。

3. まとめ—青蓮寺壇上積基壇の年代—

これらの事例をみると、石塔では13世紀中頃から後半の事例にみられるといえ、ここでは紹介していないが、14世紀にかかる多くの事例はすべて、東石と羽目石を一体として加工したものばかりである。もちろんこれより古い古代寺院の基壇には多く確認されているが、中世の資料で管見に及んだ限りでは、13世紀末から14世紀初頭頃を境に構築法が変化しているようであり、それを当てはめるならば、青蓮寺基壇遺構は13世紀後半頃の所産とみなすことができよう¹。

ここで注目すべきは青蓮寺本堂及び本尊の造営年代である。本堂の阿弥陀堂は、多良木家相良頼宗が曾祖父頼景の廟所として永仁三年（1295）に建立したもので、現在の堂は嘉吉三年（1443）再興のものを宝暦四年（1754）に大改修したものである。しかし、現存する阿弥陀三尊の脇侍・観音菩薩像

の足柄に「永仁三」の紀年銘を朱漆で記載している（久野編 1985）ことから、当初の本尊であることは疑いない。また遺構の配置も本堂の中軸線を北（山側）へ延長したところに、ほぼ正しく当該基壇が設計されていることを思うと、本堂の造営と時を同じくして基壇も設置された可能性が高い。この点から現在の本堂は、当初の位置や規模を正しく踏襲して再興されたものと言え、石造基壇の造営年代も永仁三（1295）年頃に絞り込めると言えるだろう。

そうすると、基壇の中には相良頼景が眠っているのか、最も気になるところであるが、この点については将来の調査を待つこととしたい。

註

1. 13世紀に遡るとされる壇上積基壇遺構として、京都市二尊院の法然上人廟堂内に空公行状碑（建長五年／1253）を乗せる基壇が知られている。基壇は見事な壇上積基壇であるが、地覆石・羽目石・東石を一石で作出したもの4枚で構成されたものであり、壇上の反花座と葛石は一石で作られるなど高い技術を窺わせるものである。しかし、基壇と反花座の石材は同一とみられるものの、その上の碑本体とは異なるものである。岡本智子はこれを同時期とみなしているが、山川均は反花座を後補とみている。筆者も石材の違いと当該時期の壇上積基壇の造り方が異なる点を踏まえると、山川の意見に賛同する立場をとりたい。

なお、空公行状碑・基壇・堂はそれぞれ時期が異なるが、本堂背後の丘陵上にあり、この堂の左右には墓所が広がっている風景は、青蓮寺の基壇周辺を思わせるものである。

参考文献

- 岩下敏也ほか 1963 『重要文化財白峯寺十三重塔修理工事報告書』白峰寺
大三輪龍彦ほか 1980 『極楽寺旧境内遺跡』極楽寺旧境内遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会
岡本智子 2012 「日本国内の宋風石造物」『寧波と宋風石造文化』汲古書院
久野健編 1985 『造像銘記集成』東京堂出版
狭川真一 2003 「西大寺奥ノ院五輪塔実測記」『元興寺文化財研究所研究報告 2002』元興寺文化財研究所
狭川真一・鈴間智子 2011 「奈良県山添村所在五輪塔実測記」『元興寺文化財研究所研究報告 2009・2010』元興寺文化財研究所
狭川真一 2022 「春日大社若宮神社の石造基壇」（春日大社の石造物⑥）『春日』108号、春日大社
奈良国立文化財研究所 1956 『西大寺叡尊傳記集成』（奈良国立文化財研究所史料第2冊）
山川均 2007 「重源と宋人石工」『論集 鎌倉期の東大寺復興—重源上人とその周辺—』東大寺

謝辞

鎌倉極楽寺資料については、鎌倉市教育委員会 鈴木弘太氏のご協力を得た。記して感謝申し上げる。

東光寺磨崖梵字の系譜

狭川 真一

東光寺磨崖梵字という名称で指定を受けているが、詳細な測量調査を経た結果、板碑形の輪郭が描かれた中に大きな梵字仏を配置したものであることが判明した。本稿ではまず磨崖梵字の調査結果を整理して特徴を列記し、本来の形状を明らかにしたうえで簡単な検討を加えることとする。

1. 東光寺磨崖梵字の概要と特徴

東から西へ派生する舌状尾根の南面部分を、東西約 23m の範囲で北側へ 9m ほど U 字形に掘削して岩盤を出し、最奥部を調整して幅 2m 前後、高さ 5m 以上の平坦面を作り出し、その面に梵字仏を刻んでいる。梵字仏は板碑形に浮き彫りされた中心上位に大きく葉研彫りされ、文字内は黒くなっており墨入れしたらしい。まずその板碑形部分について整理する（以下、磨崖梵字を磨崖碑と記す場合がある）。

多くの部分が剥落しており、上半部のみ当初の面を残している。岩盤は加久藤溶結凝灰岩で、平滑に調整された面は暗青褐色を呈しており、他の面は剥落しているため凝灰岩の風化面となり、混入する礫石の凹凸が著しく、色調も異なるものである。さて板碑形の形状の示すと、頂部を山形とし、その下に 2 条線を入れ、その側面は羽刻みとする。二条線下位から頂部までの高さは約 75cm、羽刻みの上部幅約 1.42m 下部幅約 1.3m で、上方へ開いている。この形状はまさに板碑の頭部に一致する。二条線の下には幅 1.4m 前後、高さ 15cm ほどの額部を作り出し、以下は大きな梵字（アーンク）を葉研彫りする平坦面となる。磨崖碑として特徴的なことは、この二条線や額部などのある面は基盤面から 4cm ほど浮き出るように彫刻され、レリーフ状を呈している（図 1）。ただし、この平坦面は上から約 80cm が残存するだけで、それ以下の大半は剥落して当初の面を残していない。ただ額部下辺から下へ 2.8m ほどのところに梵字の一部らしきものがみられ、その直下は横方向の段差となっている。この段差から山形頂部までの高さは約 4.1m、幅は 1.5 ～ 1.65m を測る。その下位には小穴が穿たれている。

なお、上部の梵字は「アーンク」とみられ、その下位にも同規模の梵字を想定することができ、痕跡から「バーンク」ではないかとされている。両者をあわせて金胎両部の世界を表現する壮大なものであることが理解できる。

以上のように、磨崖碑ではあるもののレリーフ状に浮き彫りにする点を考えると、通常の板碑を製作している意識が強いのではないかと推測する。さらに暗青褐色を呈している点も関東地方に多い青石使用の板碑をイメージしてしまう。しかも、わざわざ磨崖仏として製作している点も気になる。板碑であれば近在にも類似のものは存在するし、それを造立する技術が無かったとは考えられない。以下では、近在の磨崖梵字仏や磨崖碑という観点から事例を観察してみる。

2. 近在の磨崖梵字仏

熊本県内では山鹿市青木磨崖梵字仏が知られる。基本的には巨大な月輪内に梵字を葉研彫りするもので、巨石の壁面に多数の梵字仏がみられる。梵字を記載するための平滑面を求めるために石材を刻み込んだ結果、それが光背風にみえるものもあるが、基本的には梵字群のみの彫刻にとどまる。

鹿児島県南九州市清水磨崖仏群も著名な磨崖梵字仏群である（齋藤 1997）が、やはり巨大な梵字は月輪内に納まっているのみでそれ以上の輪郭線はみられない。また室町時代まで下ると板碑形の周囲をやや深めに彫り窪めるものが登場するが、時間的な差も含めて東光寺磨崖梵字の系譜上にあるとは言えない。

少し離れるが福岡県太宰府市の宝満山中に磨崖梵字仏が知られる（狭川 1998）。金胎両部の巨大な梵字を記す点では共通するが、月輪に納まる梵字を左右に並列させただけのものである。この他にも本地仏を示したとみられる梵字仏を散見するが、板碑様の輪郭を持つものはない。

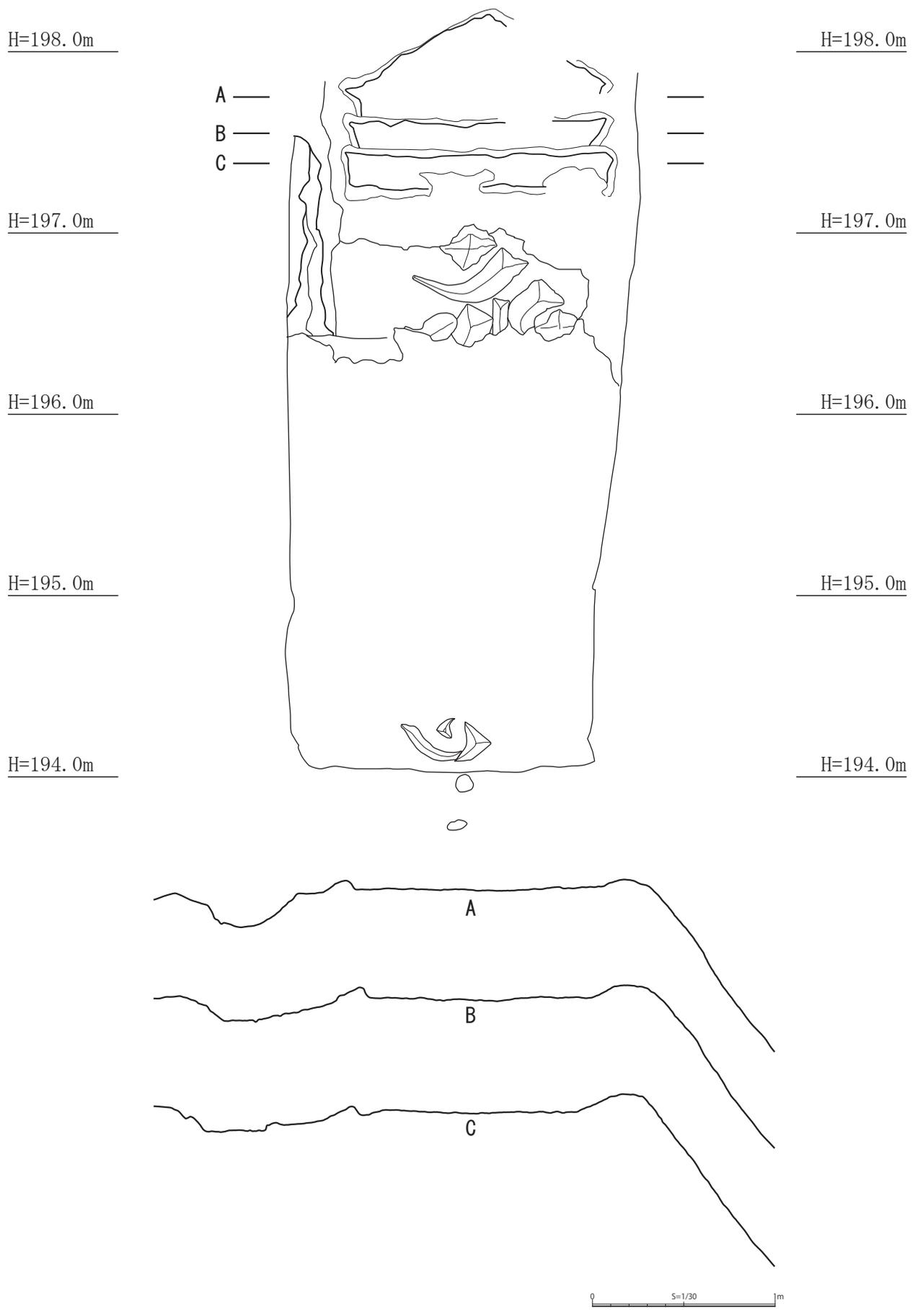


図1 東光寺磨崖板碑頭部の断面形状 (1/30)

もその初期の段階から認められる普遍化した形態と言えそうだが、13世紀前半期の資料では梵字を刻まず像容とするものが中心である（川越市勝福寺板碑、富士見市慈光院跡板碑）。13世紀半ばのものには梵字を刻む資料が確認できるが、頭部の山形が高めに作られていることや二条線の間隔も狭く、東光寺磨崖碑と一致する形状とは言えない。

また、武蔵型板碑が東国武士のステータスシンボリックな存在と仮定して、それをこの地で写すためには、磨崖仏で表示するのが最も形態的に似せることができるのではないかと考えてみた。しかしこの点では、多良木町一帯を支配したのは相良氏でその故地は遠江である。当該地方に武蔵型板碑は伝播しておらず、相良氏が武蔵型板碑をステータスシンボルに用いるという理由が見いだせない。さらに武蔵地域から九州に来た小代氏を例にとると、彼らの墓地（荒尾市浄業寺／多田隈 1978）は阿蘇系の凝灰岩を用いた地元の五輪塔が主流であり、武蔵型板碑を意識した墓標は存在しない。

また板碑の多くは個人の墓塔あるいは供養碑、特定の集団の供養碑などが中心で下半部に銘文を刻む空間を設けており、実際に多彩な銘文が残されている。これに対し東光寺磨崖碑では、上下に大きく梵字を刻むだけで細かな銘文を刻む空間は残されていないと言え、一般の板碑とは用途が異なるという点は重要であろうと思われる。

これらの点から東光寺磨崖碑は、武蔵型板碑そのものを写したとは断定できないが、広く九州を眺めても同一形態になる磨崖碑や板碑も確認できないことから、形態の点からみたその位置づけはかなり難しいというほかない。

4. 石窟との関係

磨崖碑に向かって右下に1基の石窟が存在する。壁面には構造材をはめ込んだ形跡があり、扉などの施設を木造で作っていた可能性が高い。窟内の空間は一定の広さがあり、内部に何かを保管する、あるいは人が短期間籠ることも不可能ではなさそうである。さらに窟の奥には、清水が湧き出すような小窟が附属している。

この石窟の評価は、現在まで露出していた点から新しく穿たれたものとみる可能性も残されており、磨崖碑と関連していると断定するのは注意しなければならないが、ここでは両者に何らかの関係があるのではないかと推測を試みる。

磨崖碑は金剛界大日如来と胎藏界大日如来を示す大きな梵字で、両尊つまり金胎両部の主尊を主体的に拝することを目的として造営された密教系のもと考えられ、墓標や追善供養碑などとは性格が異なると理解しておきたい。おそらく、隣接する東光寺の行場的な位置づけが最も妥当ではないだろうか。

そのように考えると、脇に穿たれた石窟も修行に伴う施設として理解することも可能となるであろう。石仏の脇に小窟を構えるような構成は、奈良県地獄谷聖人窟（奈良時代～鎌倉時代）が知られるところであり、何らかの行場の可能性が推定されている。東光寺磨崖碑のあるこの場所を、そうした修行の場として整備した可能性は十分に考えられるところである。

参考文献

磯野治司 2009 「初発期板碑の系譜と様相」『板碑が語る中世—造立とその背景—』「板碑が語る中世」シンポジウム実行委員会

多田隈豊秋 1978 『九州の石塔 下巻』西日本文化協会

齋藤彦松 1997 『清水磨崖仏群』（川辺町文化財調査報告4）川辺町教育委員会

狭川真一 1998 「太宰府の中世石造物」『太宰府市史—建築・美術工芸編—』太宰府市

多良木相良氏の城館遺跡

鶴嶋 俊彦

はじめに

相良氏の政治・軍事動向から得られる政治的時期区分としての最大の画期は、15世紀半ばの人吉の相良前統による多良木相良家討伐と、これに続く永留長統による相良惣領家篡奪である¹。本稿はその画期までに形成された多良木相良家に関わる城館を検討する。

多良木相良家の城館については、1978年の熊本県教育委員会編『熊本県の中世城跡』や翌年の『日本城郭大系第18巻（福岡・熊本・鹿児島）』、1980年の多良木町史編纂会編『多良木町史』、同年の熊本県教育委員会編『里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群調査報告書』に論及がある。とくに「里の城遺跡」の調査報告は、多良木周辺の城跡に関して綿密な聞き取り調査や測量調査が実施されるなど、極めて有益な報告で参考となる。

1. 史料に登場する城館

多良木相良家第1期 初代の頼景・長頼・頼氏・頼宗（人吉相良家では長頼三男頼俊・長氏・頼廣）の時代で、ほぼ鎌倉時代に相当する。相良家惣領で人吉庄惣地頭でもあった相良長頼は、寛元元（1243）年の訴訟で人吉庄の北方地頭職を没収されるが〔相5、関東下知状〕、球磨郡内の多良木や人吉庄に所領をもつ球磨郡を代表する武士として成長していた。人吉庄地頭の後継となり佐牟田家を興した頼俊は、寛元二年の下地中分によって失われていた「佐牟田堀内」（の地頭居館）を、建長6（1254）年の「相博」によって奪還した〔相14、鎌倉将軍家政所下文〕。堀内は私有権が強く認められた領主経営の本拠で、次の南北朝期の暦応3（1340）年には「当城」として城郭化した〔相87、相良蓮道譲状〕とみられる。

この時期の後半、頼氏は多良木の頼宗に本貫地遠江国相良庄の「堀内」を譲与した〔相33、相良上蓮譲状〕。その遺跡は東中館跡（静岡県牧之原市相良町大江字箱瀬）とされ、発掘調査の結果、12世紀代に成立し13世紀初頭までの存続が確認されている²。

多良木相良家第2期 経頼・頼仲・頼忠（佐牟田相良家の定頼・前頼）の時代で、南北朝内乱期に相当する。内乱期の当初は永吉庄の領有をめぐる少弐氏＋佐牟田相良家・庶氏連合と多良木相良家＋「球磨上郡人々」連合との対立となり、戦場は永吉庄内の木枝城や山田城などの少弐氏からの「御預城」の争奪戦が中心となる。興国元（1340）年に多良木相良に同心した人吉の相良祐長は、籠城していた山田城を引退した後に「経頼一所城」に楯籠っている〔相108、相良祐長軍忠状案〕。

その後の多良木家と佐牟田家の両家は、内乱期を通して一揆（「球磨郡一同之義」）と離反を繰り返すことになる。康永2（1343）年には少弐頼尚から「当城寄宿一族他人」の面々の本領を認める奉書を獲得した経頼が、定頼宛に北朝方となったことを伝えている〔相115、少弐頼尚奉書案・相116、相良経頼書状〕。元中8（1391）年に佐牟田家前頼が「（多良木）相良孫五郎」宛てに「多良木競望之事不可有」という多良木領の不可侵契約を結び〔相186、相良立阿契状〕郡内での内乱が収束した。

多良木相良家第3期 頼久・頼観（佐牟田相良家の實長・前統・堯頼）の時代で室町時代中頃にあたる。両相良氏の平和条約が維持され、正史上も郡内が平穏な期間となる。一方、応永年間には佐牟田相良家は隣接する薩摩・大隅への積極的な派兵を繰り返す。前統時代（の応永29（1422）年頃カ）には薩摩国山門院350町を知行する〔相231、相良氏山門知行以下由緒書〕。

その後、年不詳だが両相良家の平和条約が破綻し前統による多良木家「退治」（頼久没年とされる正長元（1428）年頃と推定）があり〔願成寺文書「相良為統置文」〕、頼久は肥地岡・鍋倉・古多良木の武士たちと五木経由で国中に立ち退く事件が伝わる〔『御当家聞書』〕。『南藤蔓綿録』所収「多良木家御系図」によれば、肥地岡・鍋倉二名は経頼の弟を出自とする庶子に確認され、古多良木も一族であろう。

相良家正史³では、嘉吉3（1443）年に前統が逝去して虎寿丸（堯頼）が11歳で家督を継いだとする。同年は虎寿丸が青蓮寺阿弥陀堂を再興した年でもある〔青蓮寺棟札・天文11年棟札の裏面追記〕。現

青蓮寺にある阿弥陀堂は相良家初代惣領の頼景菩提のための堂で球磨郡支配の象徴的場所であった。虎寿丸を惣領後継者として仰ぐ佐牟田家支持の武士たちは、相良家統一を果たした前統を中興の祖として崇拝する意味も込めて阿弥陀堂が再興された可能性が考えられる。

その後、相良家正史では堯頼が菱刈へ逃亡し、一族の永留長統が惣領を継承し、多良木家の頼観・頼仙の二人を討伐して球磨郡内を統一したとするが、これを裏付ける同時代史料は一切存在しない。その頃の戦乱を記録した唯一の一次史料「犬童重国軍忠状案写」〔三村講介 2016〕によれば、文安 5 (1448) 年 4 月の①薩摩瀬村上戸之尾での合戦、②同年 5 月の人吉勢による永里之山城攻め、③同年 5 月の真幸の北原勢の「上村之城」攻めでの防戦、④同年 7 月 15 日の「水面ノ城」に牧四郎左衛門とともに寄せ合い小田但馬を打ち取った合戦などが記載される。これらは正史に見えない戦で、軍忠状に登場する武士たちは正史にある頼観・頼仙らを打ち取った長統による「多良木討伐」に参陣した武将名と多くが重なる。

天文 5 (1536) 年成立の「沙彌洞然長状」に始まる相良家正史の作成過程で犬童重国軍忠状が引用されたことは『南藤蔓綿録』などに確認でき、永留長統による相良家統一という正史編纂の目的から、犬童重国軍忠状案写にある一連の軍事行動は長統の多良木討伐にすり替えられ、相良家統一のストーリーが作り上げられたと推測できる。

因みに統一後の多良木は、長統の譲りによって、その四男頼泰が知行し「多良木殿」と呼ばれた。文明 3 (1471) 年に頼泰は讒言によって知行を解かれ、13 年後の文明 16 年 12 月に為統は頼泰に多良木村を進上し、翌年 3 月に頼泰は嫡子らとともに「先例に任せて」多良木村に入部し「鍋倉城」において祝儀を行った〔相 233、相良頼泰置文〕。しかし、頼泰は 3 年後の長享元 (1487) 年 6 月 13 日に再び謀反の疑いをかけられて「人吉下原宿所」で生害となる〔八代日記・嗣誠独集覧〕。多良木は再び為統の直轄領となり「多良木役人」を置いて上球磨の支配が行われ、天文 14 年 (1545) 7 月 13 日に頼泰の孫である相良治頼が「多良木之城ニ打入」二ヵ月にわたり占拠した〔八代日記〕。永禄 2 (1559) 年の瀬野原合戦では岩崎加賀が城番を務める人吉勢の前線拠点となっていて、8 月 15 日夜半に湯前勢が押寄せる合戦があった〔嗣誠独集覧〕。

2. 多良木村の範囲

先ず多良木相良氏所領として一次史料に現れる「多良木」の地理的な位置を確認する。建久 8 (1197) 年の肥後國球磨郡田数領主等目録写〔相 2〕には、人吉庄 600 丁・永吉 300 丁・公田 900 丁・豊富 500 丁・豊永 400 丁と並んで、「多良木村百丁没官領 伊勢弥次良実名不知」とあり、この多良木村がやがて相良頼景の所領となる。また、寛元元 (1243) 年の関東下知状〔相 5〕の 3 条目事書には、「多良木内古多良 竹脇 伊久佐上 東光寺以上四箇村事」とある。この四箇村の田地が 40 丁で、多良木村はおよそ 10 箇村程度の小村から構成されていたと推量される。古多良は大字多良木に古多良木の字があり、伊久佐上と東光寺は大字黒肥地に「軍野」「東光寺」という字が所在する。また、正応 6 (1293) 年の相良上蓮(頼氏)讓状〔相 32〕にみえる在家のうち「う志ま」(牛島)は大字多良木の球磨川南岸に、「まかと」(馬門)はその対岸に字として確認でき、さらに延慶 2 年 (1309) の肥後國多良木村地頭代陳状案〔相 38〕に見える「八岡名」は、大字多良木の球磨川北岸に八日の集落名や字八日原に地名として遺る。

これらから鎌倉時代に多良木相良家が所領とした多良木村は、近世の多良木村と黒肥地村を合わせた部分に比定できる。なお、現在の町内にある近世の久米村・奥野村は、豊富庄に含まれる久米郷の内、黒肥地村は、延宝 4 年 (1676) の多良木村からの分村である〔多良木町史〕。

3. 城館遺跡の比定

鎌倉時代の多良木村は相良家惣領頼景の所領地で、その居館は正史では大字黒肥地の字東の前の球磨川河畔の「相良頼景館」が伝承地となるが、これを裏付ける同時代の一次史料はない。この遺跡については、本報告書本文で詳細に報告されるため本稿では割愛する。

南北朝時代になると、「経頼一所城」や経頼が一族らと寄宿した「当城」を見い出すが、具体的な地

名がなく、その比定には経頼拠点の解明が必要となる。

『嗣誠独集覽』の「上相良相良多良木連続之次第」には、「第八(代)、左衛門尉頼観頼久御嫡子也、文安五年戊辰八月四日御忌日也、法名蓮珍古多良木ニ居住、今ノ城林ト云是也、伝記曰、頼氏ヨリ頼忠迄五代鍋ノ城居住、頼久・頼観二代ハ内城ニ居城ノ由、今ノ里城トハ御仮屋ノ屋敷ニテ御座候由」と伝えている。

また、同書には第二代頼氏が建永2年(1207)に北野天神を鍋城に勧請し、これは今の里ノ城天神でその遷座は正保3(1640)年のことで、里ノ城鍋倉諏訪元屋敷は鍋倉天神とも称したという。このほか文応2(1261)年には鍋城に長運寺が再興され貞治6(1367)年に焼亡したが、永徳年中(1381～1384)に黒肥地永野に移され、今の長野長運寺薬師堂の釈迦如来が長運寺本尊とする記事もある。

ところで現長運寺境内にある西光寺厨子銘文には、人吉相良の長輔(長毎)が大檀那として「当所城内諸侍諸生男女子孫繁昌」などを祈願して明応10(1501)年に厨子を修造した旨が記され、里城弓削田家の氏神堂の御正体墨書名には「多良木鍋城西光寺八王社壇始奉建立、本地御正體千手千眼一輪、長祿四(1460)年三月十五日、住持弘辨七十四歳」とある〔『多良木町史』資料編〕。すなわち西光寺厨子銘文の「当所城内」とは鍋城のことで、明応10年には侍や諸人が住む城郭であったことになる。

江戸時代、「上相良相良多良木連続之次第」のように第2代頼氏から第6代頼忠(13世紀初頭から15世紀前期頃)までは鍋城を居城とし、頼久・頼観の代(15世紀中ごろまで)に内城に移ったという伝承が形成されていた。しかし、鍋城は統一後の相良氏の城として16世紀初頭の長毎時代まで存続していたことになり、相良家正史の利用には慎重さが必要となる。

また、一次史料に出る「経頼一所城」や経頼の「当城」は、伝承では鍋城跡となるが、南北朝初期の人吉相良氏は平地館の佐牟田堀内を「当城」と呼んで城郭化していた可能性があり〔相87、相良蓮道讓状〕、「経頼一所城」や経頼の「当城」が例えば伝相良頼景館や後述の東城跡のような平地館であった可能性も考えておく必要がある。

一方、内城は大字黒肥地字土屋の段丘北西端が伝承地で、仮屋だったという里ノ城も大字多良木に里城という字として伝承されている。

ところで室町時代中期に頼久とともに出郡したという肥地岡・鍋倉・古多良木の庶子一族も名字の地に館を構えていたとみられる。そのうちの鍋倉氏の館は、字里城の一角には「なべくら」の屋号を遺す宅地があり里城に比定できる。また、このことから相良家統一後に登場する多良木殿頼泰の「鍋倉城」の比定地も里城となる。なお、鎌倉時代末期の元応2(1320)年の相良頼資申状案〔相46〕によれば、心蓮(相良頼秀)が館を置き八岡名と称したところを乗心は鍋倉名と名付けて横領していると頼資が訴えていて、八岡名と鍋倉名が隣接した名であったことを指している⁴。

肥地岡氏の館は、江戸時代後期の「球磨絵図」〔西重美氏所蔵〕に里城西隣の小村として「肥地岡」の記載があり、字馬門付近の台地上に推定できる。また古多良木氏の館は、字古多良木地内に該当するような遺跡はないが、柳橋川を挟んだ北隣の字東の河岸段丘に「城山」という小名をもつ鎌倉時代の遺跡が候補地となる。

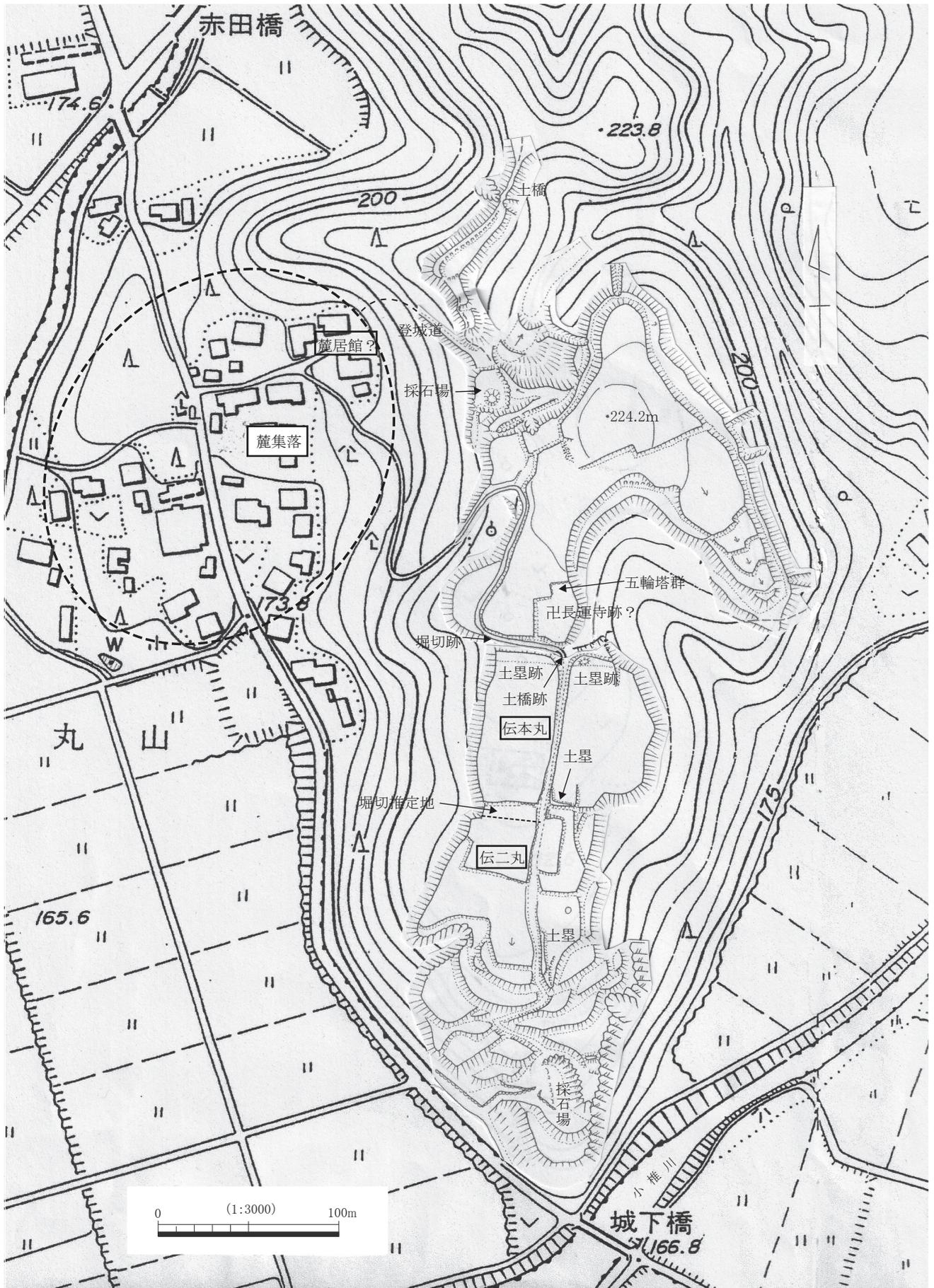
4. 多良木相良氏関係城郭の構造

(1) 鍋城跡(大字黒肥地字鍋城)

遺跡は、標高224m、比高差60mの加久藤溶結凝灰岩を基盤とする台地で、周囲には浸食崖が発達する。台地北端に東方からの浸食による迫地が野首を形成しており独立



第1図 鍋城絵図(熊本県立図書館蔵)



第2図 鍋城跡縄張り図

的な地形となる。台地面は南北 400 m、東西で最大 150 mの規模があり、台地周りの切り立った加久藤溶結凝灰岩の崖を要害に利用する。

近代初期の「球磨郡村図附属図」では、台地中央に土橋と見られる通路をもつ東西方向の堀切が描かれる。堀切の南側台地は大きく描かれ「本丸」「二丸」と記入された畑があり、一方の北側は小さくデフォルメして描き城外として意識しているように見える。台地面は北端部を除いて耕地として開墾されており、現在は放置され藪となった部分が多い。1980 年刊行の「里の城遺跡」調査報告書に鍋城跡での間取りや踏査の貴重な記録があり、これを準用しながら縄張りを考察する。

現在の堀切部分は農道で、現状は長さ 45 m、幅 3 m、深さ 1 m 弱の凹道であるが、1980 年頃は幅 5～7 m 長さ 50 m、深さ 1.4 m～2.3 mの規模があり、堀切東部の南側には長さ 10 m・幅 5 mの土塁が残っていたというので、堀切南の伝本丸側に土塁を備えていたらしい。

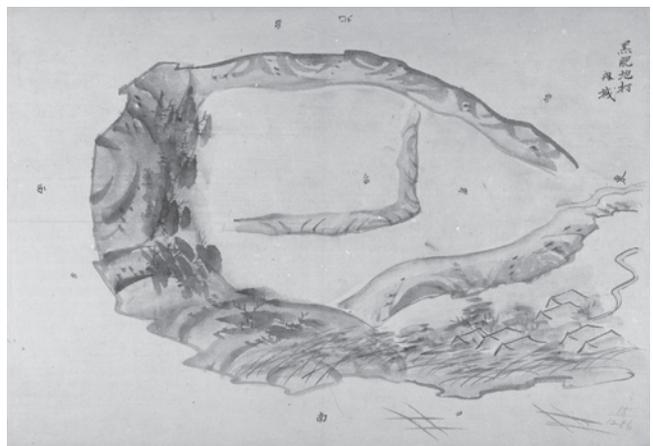
この農道は南側台地を縦断して南端のつづら折れの坂道へと続くが、伝本丸と描かれた畑の南部は台地のクビレ部となり、1.2 mの段落ちで伝二丸となる。クビレ部の農道東側には幅 6 m、長さ 10 mの東西方向の窪みが残存し、直上の畑南縁には高さ 0.6 mほどの L 字状の土塁跡がある。以上から、クビレ部分に台地を東西に貫く堀切があった可能性が指摘できる。なお、農道西側には道路に沿って野面積みの石垣があり、二丸下の畑の東部には井戸跡があるが年代不明である。また、つづら折れの坂道の中途にある複数の削平段が曲輪跡か耕作地跡か判断に苦しむが、岩壁が露出した箇所は凝灰岩の石切場跡である。

一方、堀切の北部では、すぐ北東の畑（8056 番）の奥に五輪塔群（火輪 2、地輪 4）を確認しており、上述した長運寺か西光寺の跡の可能性が考えられる。台地北端近くの栗林は標高 224.2 mの最高地点で、北端の北側と北西側斜面に幅 4m 深さ 1 m 長さ 15 m～20 mの堅堀がある。また、この北部台地の北縁から東縁下には高さ 2.5～5 mの切岸があり幅 3～6 mの帯曲輪状の地形となっている。しかし、南東部ではその幅が 1 m 程度となり斜面を下る山道に接続するので後世のものかもしれない。

北部台地の北側には「古城堀」と呼ばれる自然の迫地があり、北方丘陵との鞍部に丸山集落からの登城道が取り付く。村田修三氏が「カニばさみ状の土塁」とした地点があるが⁵、この土塁は石切場の残存部である。北側の尾根筋の二段の削平段を登ると北側縁部に高さ 0.7 mの土塁をもつ長さ 50mの狭小な平場があり、その北東基部に両側が堅堀で土橋となった虎口空間がある。ここから先は幅 2～3 m 長さ 25 mの通路となった細尾根で北方丘陵本体に接続する。ここが城域の北端であろう。

『多良木町史』には、「城の東方に馬場を回らし、その下に古城堀と称する掘割」、「岩風呂と称する泉」、「城の一隅から当時の遺物である多数の糸切文底の土師器と、中国の南宋時代の青磁片が出土」といった記載がある。また、168 頁には「鍋城望楼址」と題された複数の柱穴ないしは礎石跡らしい遺構を描いた図面が掲載されている。昭和 47 年 12 月下旬に実施された発掘調査であるが、これに関する記述はなく発掘調査箇所や遺構・遺物の詳細は不明である。

以上、鍋城は独立地形に近い溶結凝灰岩台地の周辺に発達する急崖を天然の要害として築城され、その立地や構造は南北朝内乱期の史料に見える「木枝城」に比定される岩城跡（錦町大字木上字岩城）に類似し、同時代の「経頼一所城」や経頼が一族らと寄宿した「当城」に比定しても矛盾はない。ただし、伝本丸部分は台地を二つの堀切で分断して方 80 m 程度の主郭を形成していた可能性がある。そうであれば、その使用（修築）年代は統一相良時代まで下降するかもしれない⁶。なお、丸山集落は宮ヶ野川左岸の段丘上のまとまった地形に立地しており、麓集落や居館に相応しい位置にあり、往時の登城道は丸山集落背後からのルートであろう。



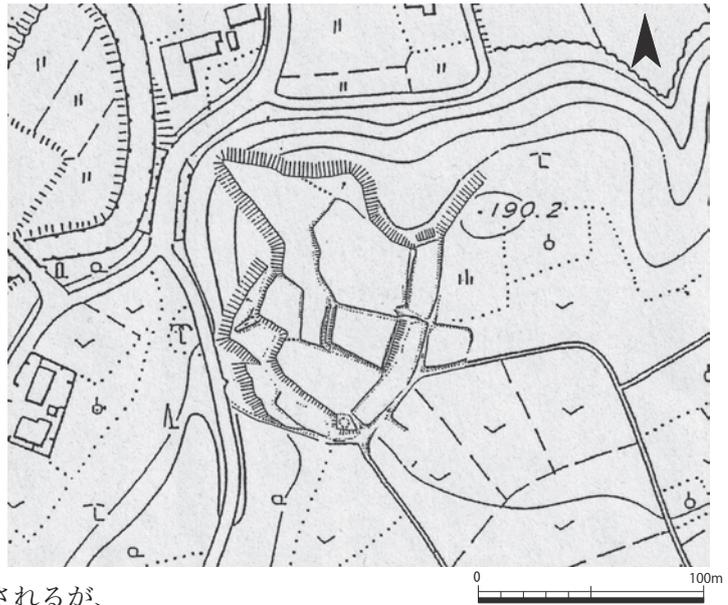
第 3 図 内城絵図（熊本県立図書館蔵）

(2) 内城跡(球磨郡多良木町黒肥地字土屋)

室町時代中期(15世紀前半)の相良頼久・頼観の館城とされる内城跡は、相良氏菩提寺であった青蓮寺の北側にある標高190m比高約30mの台地北西端に位置し、「ウチジョウヤマ」と呼ばれる。

「球磨郡村図附属図」では、鉤型の曲輪縁や堀切と推定される書き込みがあるが正確性に欠ける。現地で縄張りを踏査すると、幅13mの堀切を設けて台地本体から切り離して城域を画し、北・西・南は自然の崖面を利用したシンプルな縄張りであることがわかる。

測量調査報告(『里の城調査報告書』所収)によれば城内は四区画に分れるとされるが、切岸の連続性や高低差、配置からすると堀際に土塁をもつ北東部分が主郭で、その西側の一段下がった部分に副郭の曲輪群、さらに高さ4.5mの切岸下にある崖際の腰曲輪群から構成される。主郭の東側に推定される堀切の埋没状態が不明で、土橋が存在したのか現状では即断できず後世の農道の可能性もある。縄張りとしては南端の農道付近を出入り口とみたほうが妥当だが、これも確証はない。



第4図 内城跡



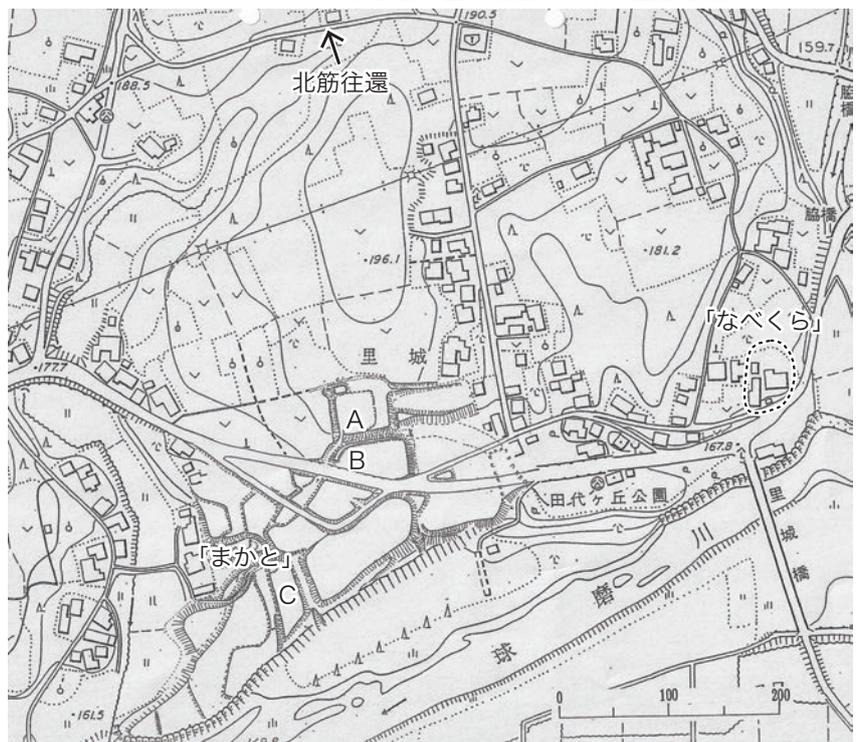
第5図 里城絵図(熊本県立図書館蔵)

(3) 里城跡(大字多良木字里城・九鹿・馬門)

「球磨郡村図附属図」では、北筋往還の南側の里城台地一帯を描いているが、城郭の構造に関するものは一切描いていない。

この絵図のちょうど中央あたりに推定される箇所に『里の城調査報告書』所収の「九鹿地内の城跡」が確認されているが、筆者はその南の球磨川右岸段丘上にも連続する曲輪群を確認している。

この城跡は里城と馬門の集落の中間の標高190mほどの丘陵頂部にあり、鍋倉氏館・鍋倉城・多良木之城の比定地でもあるが、肥地岡氏館が存在した可能性も秘めている。そのため遺跡名として地名を



第6図 里城跡

採り里城跡と呼称することにする。

「九鹿地内の城跡」は遺跡の北端 A にあり、西・南・北に横堀を廻し、東を土塁で囲繞したと推定される方 50m 規模の方形居館である⁷。

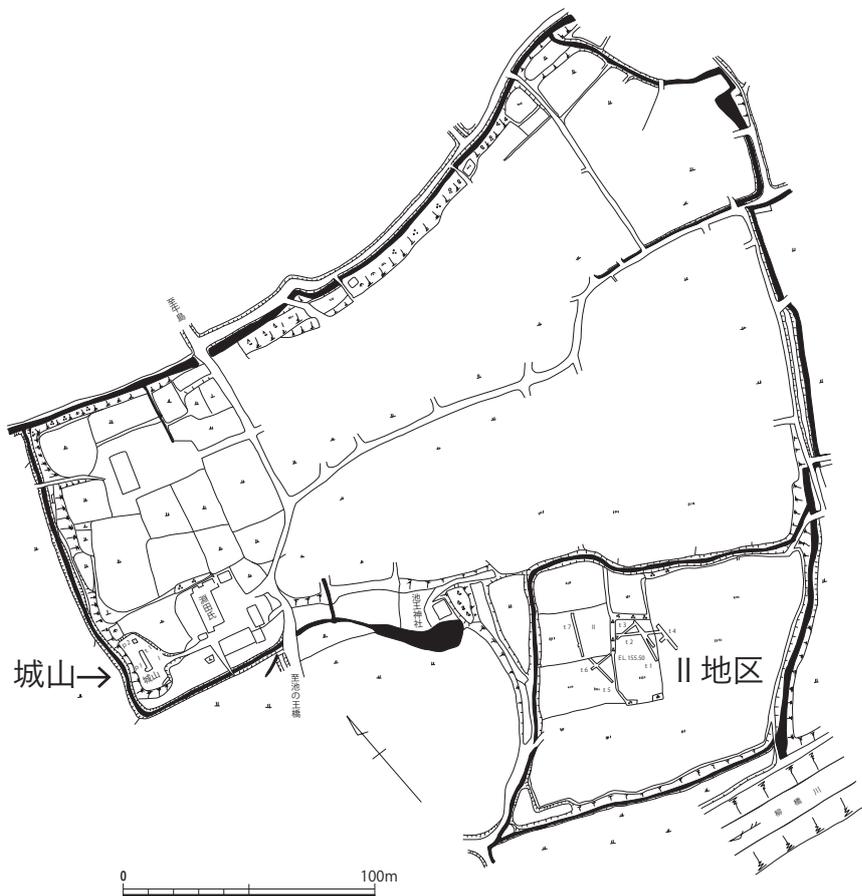
その南堀に接して北辺に土塁をもつ曲輪 B が展開する。この曲輪は新旧の県道によって分断されているが、長軸 150m 短軸 100m の曲輪に復原され、さらに球磨川右岸側丘陵上となる南西側にも堀切で仕切られた南北 70m 東西 20m の曲輪 C がある。また、県道工事前には東側の旧田代公園との間には「里城の堀」と呼ばれた帯状窪地が「九鹿地内の城跡」の南側堀に続いていたという〔『里の城調査報告書』〕ので、一段下がった東部にも附属曲輪があった可能性がある。

(4) 東城跡（大字多良木字東）

標高 155m の球磨川低地に突出した比高 5m の河岸段丘上にある。所在地は古多良木とは柳橋川を挟んだ北岸にあり、古多良氏館の可能性をもつ。この遺跡は多良木町史編纂関係で古代の球磨郡東郷の想定地とされ、段丘先端の「城山」部分と段丘基部のⅡ地区で発掘調査が行われている。大型の鎬蓮弁の青磁や白磁、天目、糸切底土師器、瓦質の播鉢などの破片が出土し、同時に出土した焼米の C14 測定の結果は 1215 年±80 年とされ、町史では平安後期から鎌倉前期にかけての居館があったと結論している。

現在、その出土遺物を実見することが出来ないが、町史掲載の図面を見る限り、土師器は 13 世紀後半以降で、白磁はよくわからないが、青磁は同安窯で劃画文、蓮弁文があり、瓦質土器は頼景館でよく見る播鉢、瓦器は中世須恵器の破片とみられ、年代観は 13 世紀後半～14 世紀くらいという年代観が妥当である⁸。

段丘先端に土塁などの遺構は確認できないが、方形基調の段丘形状や道路、地割・水路から、西端には東西 90 m 南北 120 m の居館が推定され、出土品からも鎌倉時代の多良木氏関係の館である蓋然性は高い。ただし、15 世紀中ごろの相良頼観の頃まで遺跡年代が下降するのかは今後の調査による検討が必要である。



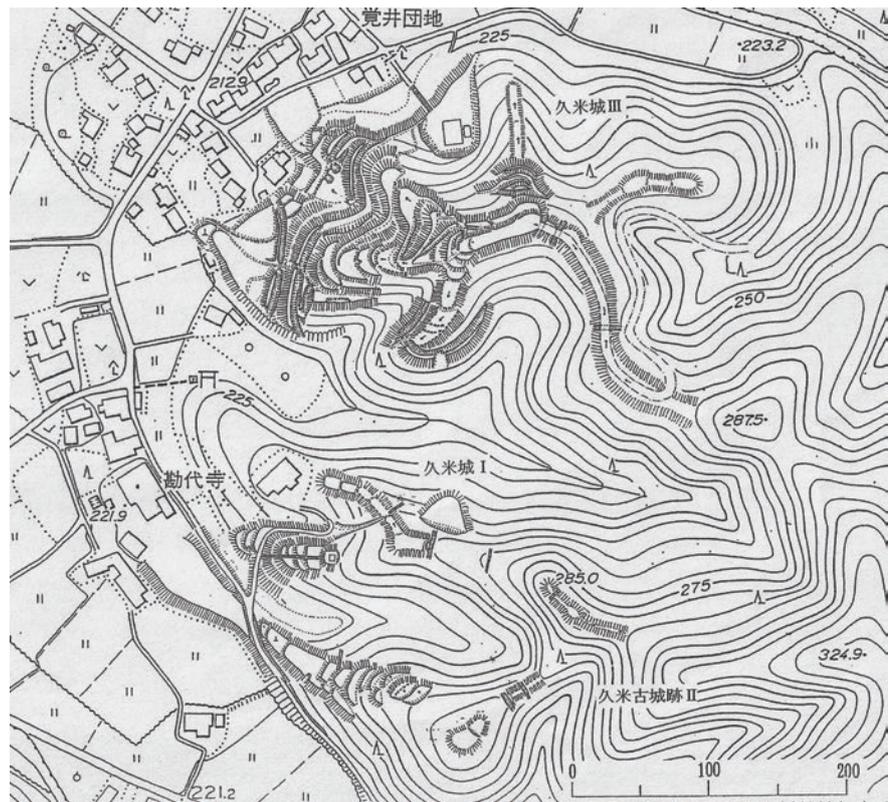
第7図 多良木町東城山付近図（『多良木町史』所収）

(5) 久米城跡 (球磨郡多良木町久米字古城・天神宇土・今山)

文安5年の内訌時、久米城は多良木の相良頼観の持城で、源島某が在番という(『南藤蔓綿録』)。久米には北尾根・中央尾根・南尾根それぞれに城郭を確認しているが、構造上の特徴からそれぞれを戦国時代・南北朝時代・室町時代に推定しており、南尾根の城跡が内訌期使用の久米城に該当する。

中央尾根から派生した尾根筋の鞍部に2本の堀切を入れて遮断して城郭化したもので、主郭相当箇所は北東半分が削平されているだけでほとんど加工されてい

ない。北西に下降する尾根上には削平地が曲輪なのか耕作地なのか判断に迷うが、尾根筋を断ち切っている町道部分に堀切があった可能性がある。勘代寺がある麓の字古城(フジジョウ)が当時の城代の屋敷の想定地となる。



第8図 久米城跡

5. まとめ

これまで多良木相良氏の歴史は相良家正史となる編纂物を参考として語られることが多かった。その滅亡による相良家の統一は、一次史料により15世紀前半代の人吉佐牟田相良家の前統時代の「多良木討伐」にあり、文安5年とされる永留長統による頼観・頼仙の討伐による多良木家滅亡のシナリオは、改めて吟味する必要性が生じてきた。

関係する城館についても相良家正史に始まる伝承を根拠に比定されてきたが、鍋城跡については、主郭が台地を堀切で分断して造成した縄張り構造の可能性があり、その存続も寺社関係銘文から16世紀初頭まで下降し、統一相良氏によって使用されていたと解釈されることを指摘した。南北朝時代の史料にある経頼の城が鍋城に該当する可能性はあるが、構造も含めて発掘調査による究明が必要であろう。

内城跡は正史の伝承しか根拠がなく、堀切や虎口の構造や出土品による解明がされないと、頼久・頼観時代の城という確信をもつには至らなかった。

里城跡北端には「九鹿地内の城跡」と命名された土塁囲みの単郭城館が立地し、それは鍋倉氏ないしは肥地岡氏の館跡であった可能性がある。その南側の丘陵に連続して曲輪が展開する城郭部分は群郭式構造で、永留長統の居城に推定される山江村高城跡に類似する。長統の四男相良頼泰の鍋倉城、それを踏襲した統一相良氏の多良木之城に比定しても矛盾がないことを指摘しておきたい。

古多良木は最後の多良木相良家当主とされる頼観が居住していたという伝承があるが、その隣接地となる東城跡は出土遺物が鎌倉時代のもので、沖積平野に大きく突き出た立地や方形基調の地形・地割などを勘案すると、多良木相良氏の初期拠点形成に係わる居館である可能性が濃厚である。また伝承どおり室町中期に頼観の出自となる館があったとすれば、多良木相良氏一族の中での「古多良木」氏の位置づけや名字の由来など、今後検討すべき事項も浮かび上がってくる注目しておきたい遺跡である。

参考文献

- 梅山無一軒著牛島盛光監修 1977 『南藤蔓綿録』 青潮社
- 熊本県教育委員会編 1977 『蓮花寺跡・相良頼景館跡』 熊本県文化財調査報告第 22 集 熊本県教育委員会
- 熊本県教育委員会編 1978 『熊本県の中世城跡』 熊本県文化財調査報告第 30 集 熊本県教育委員会
- 熊本県教育委員会編 1980 『里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群調査帆国書』 熊本県教育委員会
- 熊本中世史研究会 1980 『八代日記』 青潮社
- 相良村誌編纂委員会編 1995 『嗣誠独集覧』 相良村誌資料編 2 相良村
- 田代政融著堂屋敷竹次郎訳 1972 『求麻外史』 青潮社
- 多良木町史編纂会編 1980 『多良木町史』 多良木町
- 東京大学史料編纂所編 『大日本古文書 家わけ五ノ一 相良家文書之一』 東京大学出版会 1970
- 人吉市教育委員会編著 1991 『願成寺文書』 人吉市教育委員会
- 人吉市教育委員会編 2014 『人吉史料叢書 第 1 巻 御当家聞書』 人吉市教育委員会
- 三村講介 2016 「犬童重国軍忠状案の近世期写について」 『ひとよし歴史研究』 第 19 号 人吉市教育委員会

註

1. 鶴嶋俊彦 2015 「文安五年相良家政変の実像」 服部英雄他編 『歴史を歩く・時代を歩く』 九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室
2. 小野真一他 1993 『相良町東中館跡』 相良町教育員会
3. 相良家正史とは、天文 5 年の沙彌洞燃長状に始まり、江戸時代に編纂された 『南藤蔓綿録』 『嗣誠独集覧』 『求麻外史』 などの相良家通史をさす。
4. 松本寿三郎 1980 「上相良多良木連続之次第」 上記参考文献 『里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群調査報告』 所収の付論
5. 村田修三 1987 「鍋城」 村田修三編 『図説中世城郭事典』 第 3 巻 新人物往来社
6. 村田修三氏は註 5 において、台地南部を当初の城域、台地北部を後世の拡張部分とする。
7. 「九鹿地内の城跡」報告では、その北 53m に丘陵を東西に横断する幅 7m 全長 85m の帯状窪地を堀切(3)としている。縄張り上、「九鹿地内の城跡」との関係が説明しにくく、丘陵を東西に横断する道路痕跡の可能性も指摘しておきたい。
8. 多良木町文化財担当職員永井孝宏氏の教示による。

中世多良木の仏像と多良木相良氏

有木 芳隆

はじめに

本稿は、平安時代から室町時代におよぶ中世多良木地域の仏像の様相を概観し、その製作に関わるいくつかの問題について考察することを目的とする。

以下の考察を進めるにあたっては三つの視点に留意したい。一つは「多良木」という一地域社会における仏像製作のあり方、具体的には製作の主体（発願主、施主、勧進僧など）がいかなる人々であり、いかにして仏像製作にいたったか、それら担い手が時代の変遷によっていかに変化していったかを検討する地域史に関わる視点である。二番目は、本報告書の主旨に関わる多良木相良氏とその造像活動の問題である。三番目は、多良木地域を含む球磨地域という日本国の南辺境に位置する地域の仏像のあり方が他地域の仏像と異なった様相をもつのか、また製作者（仏師）がいかなる技術的系譜にあるのかという彫刻史的視点である。いずれも、多良木の仏像と仏像製作を考える上で相互に関連する重要な視点と思われ、その検討作業は多良木という地域社会の一側面を明らかにするだけでなく、「中央」に対する「地方」の仏像製作のあり方を浮彫にする、彫刻史的にも重要な材料を提供できるのではないと思われる。

始めに、平安時代9世紀末～10世紀ころの本地域の最古とみられる仏像から、室町時代にいたる主な仏像作例について概観をこころみる。次に第2章では、とくに注目すべき重要作例について個別に考察する。これらの作業を経て、第3章では多良木相良家（氏）¹と青蓮寺阿弥陀三尊像の関係について考察する。そして最後に多良木地域の中世仏像のいくつかの問題についての私見をまとめてみたい。

なお、本稿をまとめるにあたっては、戦後に限っただけでも上村重次氏や多良木町、九州大学文学部、熊本県立美術館等の先学や諸機関の貴重な仏像調査の成果に負っていることを注記しておきたい²。

一、中世多良木の仏像概観

以下、中世多良木地域の仏像について時代ごとに概観する（表1、2参照³）。

【平安時代】

球磨地域において仏像がまつられ、あるいは製作されるようになったのはいつ頃であろうか。中球磨地域の免田や上村（いずれも現あさぎり町）では9世紀頃の「骨蔵器」が出土しており、仏教の葬送儀礼である火葬がこの地で採用されていたことがわかる。とくに上村の西小原遺跡出土の骨蔵器の場合には、官人の帯装飾品である石製丸軛が相伴していて、官人たちやおそらく有力豪族たちにも仏教が浸透していたことを教えてくれる。平安時代初期までには仏教が信仰され、それとともに仏像もまつられるようになっていたであろう。

今のところ多良木最古であり、球磨地域でも最古とみられる仏像は、中山観音堂の《木造観音菩薩立像》（図-1 像高153.0cm）である。本像の、胸下で胴を絞った腰高の体型と頭頂の大きな髻や、頭部と共木で彫られた山型三面宝冠などは平安時代前期風の古様な作柄である。製作されたのは9世紀末～10世紀頃とみられる。

本像は、この地域の官人や有力者たちに仏教が広がった時期に、すでに仏像もまつられていたことを示す貴重な存在である。本像についての詳細は次章にゆずるが、この頃には多良木にも寺院が建てられていたとみられ、それを外護したのは地域の有力豪族であったと想像される。

その後、10～11世紀前半頃までの平安時代中期の作例は今のところ確か

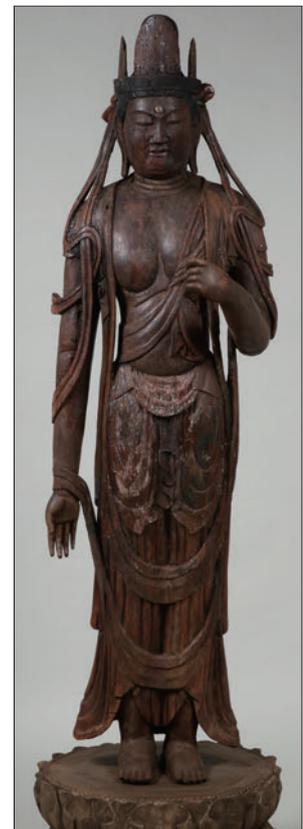


図-1

められていないが、11世紀半ばに完成された平安時代後期の「定朝様」の仏像は複数存在している。

かつての多良木には、この時代の重要な紀年銘作例が2例伝えられていた。現在は熊本市内の個人蔵となっている《木造釈迦如来坐像》(図-2)と《木造薬師如来坐像》である。両像はかつて鍋城の長運寺あるいは西光寺にまつられていたとされ、いずれも大治5年(1130)に造立された熊本県内最古の在銘像である。像内銘記には「大治五年十一月五日／造立檀主僧快暹(釈迦如来像)」「大治五年十一月五日／造立檀越僧快暹(薬師如来像)」とあり、釈迦像はヒノキ材製で、頭体幹部を一材で彫出し、それを前後に割矧いで内割りする「割矧造」の技法で造られている。現状の像容は、後補彩色のためそれぞれ異なっているようにみえるが、両像の耳の形状は酷似しており、同一の作者(仏師)によって造られたものであろう。本像は、この地域の須恵氏や平河氏、久米氏など有力在地領主を発願主として製作されたと想定されるが、具体的にはわかっていない。「檀主快暹」もその関係者の可能性があるが不詳で、同じ大治5年銘の大分県国東の長安寺・太郎天立像の銘文にも快暹の名がみえるが、同一人物か定かでない。



図-2

黒肥地・東光寺跡薬師堂の《木造薬師如来坐像》(図-3)も注目される「定朝様」の仏像である。像高35.4cmと小振りながら、本格的な優れた作柄の仏像。材質はカヤ材とみられ、頭体の幹部を一材で造る一木造の構造で、おそらく平安時代後期12世紀の作とみられる。なお、本像の背面板は後の補作で、天正9年(1581)に「大檀那相良朝臣藤原義陽」を檀那として、「作者常州之住権大僧都頼賀七十五歳」により補作されたことが銘により判明する。



図-3

この薬師如来坐像が注目されるのは、12世紀末に相良頼景が獲得していたとみられる「多良木内古多良 竹脇 伊久佐上 東光寺以上四箇村」(『相良家文書』5号)のうちに東光寺村が存し、本像と頼景はほぼ同時代と考えられることである。本像が当初から東光寺にまつられていたものか明らかでないが、もし当初から東光寺ないしその周辺にゆかりの仏像であったのなら、相良頼景との何らかの関係も想像しうるであろう。

つぎに、この時代の記念碑的な作例が、栖山観音堂の《木造千手観音菩薩立像》(図-4)である。本像は像高280.0cmで球磨地域随一の巨像。材質はクス材で、頭体の幹部を巨木の一枚で彫出している。後補の彩色のため面貌も表情がわかりにくくなっているが、修復のため彩色を除去した際のお顔は(図-4(2))、面長で頬が豊かで伏し目がちの「定朝様」の顔立ちである。

注目されるのは、本像の頭部額に着けた「天冠台」の形が、「紐二条+列弁帯」形になっており、この形式は10世紀後半から11世紀前半頃までの仏像作例によくみられるもので、天喜元年(1053)平等院鳳凰堂・雲中供養菩薩像の天冠台で、列弁帯のう上に花形が表現されるようになって以降は、その形式が天冠台の主流となるという⁴。浅く控えめに彫られた面貌や動きの少ない体軀からみて本像が製作されたのは、おそらく12世紀と思われるが、より古い天冠台形式を残していることがわかる。製作にあたった仏師の技術的系譜が、一時代前の様式に属していたことを示しているものか。地方で仏像製作にあたった仏師たちは、造像様式や技術的に一時代古いものをベースにしているが、同時代の様式や技術を習得しアップデートしながら造像していたことをうかがわせる。

本像を本尊像とする栖山観音堂には、本像を守護する毘沙門天立像(像高162.0cm)など3軀の神将形立像もまつられており、いずれも像高160~178cmの大型の像である。巨像を取り囲むように大型の毘沙門天立像などを配するのは、あさぎり町・勝福寺跡毘沙門堂の本尊木造毘沙門天立像(像高237cm)

を囲むように、神将形立像3軀をまつっていることを想起させる。勝福寺毘沙門天立像は、銘文から久寿3年(1156)に球磨地域最大の在地領主であった須恵氏によって造立されたことがわかっており、栖山観音堂諸像もおそらく有力な在地領主によって造像されたものと想像されるが、銘文等は発見されておらず造立の経緯や願主、作者は不明である。

栖山観音堂の他にも平安時代後期12世紀の大型の仏像が注目される。中山観音堂の《木造四天王像》も平安時代後期の作柄の優れた仏像であり重要な作例であるが、詳細は第2章の解説にゆずる。

馬門薬師堂の《木造薬師如来坐像》は、像高138.0cmで材質はカヤ材とみられ、頭体部の幹部を一材で造っている。後頭部と背面から内削りを施しており、膝前部と両肘先などは後補に代わっている。素朴な作柄ながら平安時代後期の様式であり、やはり12世紀ころの作と思われる。

平安時代後期の多良木地域には、様式的に判断して11世紀後半～12世紀作と思われる仏神像が、現在管見の限りだけでも29軀ほど残されており、これは一町内としては九州全体でみても破格の分布密度といえる。多良木のみでなく球磨地域全体でみても80軀以上の平安時代の仏神像がまつられており、他に比べてその密度は分厚い。また、当地を含む球磨地域では毘沙門天像、四天王像なども数多くみられる。どのような理由により、多良木および球磨地域に平安期の仏神像が数多く存在しているのか重要な問題であるが、その理由は次章以降で考察していきたい。

【鎌倉時代】

12世紀の第4四半期ころになると、奈良仏師の康慶・運慶父子を中核とする慶派がそれまでと異なる新様式の仏像を造立しはじめた。柔軟で張りのある肉取りや、自由な衣文構成など実人的写実的な姿の仏像が登場し、とくに治承4年(1180)の南都焼き討ち事件後の東大寺・興福寺復興造営は、慶派仏師が台頭し活躍する大きな契機となった。

一方、球磨地域各地では、12世紀までは数多くの仏神像が造立されていたが、13世紀の鎌倉時代様式の仏像は、じつは寥々たる様相である。たしかに球磨地域でも湯前町・城泉寺阿弥陀堂の寛喜元年(1229)銘《木造阿弥陀三尊像》のように、都の仏師による鎌倉様式の美しい仏像がもたらされるようにはなったが、それは本像のみにとどまっている。鎌倉新様式を学んで仏像製作をおこなったと思われる、地域性の強い仏師の作例もみられるが(例えば山江村高寺院の仏師源覚が製作した承久2年銘(1220)《木造勢至菩薩立像》)、それも数少ない。

多良木地域でも、今のところ13世紀前半の仏像は見当たらず、在銘像としては青蓮寺の正応元年(1288)銘《木造地藏菩薩立像》(図-5)がもっとも古い。本像は像高156.0cm、ヒノキ材の一木造で後頭部と背面から内削りを施し、後頭部には蓋板を当てる。もとはあさぎり町勝福寺跡毘沙門堂にまつられていた仏像で、明治3年に勝福寺が廃寺となった後、青蓮寺に移されたと伝わる。作風と構造は、鎌倉時代後期の像としては古風かつ素朴。

勝福寺跡毘沙門堂には久寿3年(1156)銘や久安3年(1147)銘の毘沙門天立像がまつられており、平安時代末期に須恵氏の拠点寺院として大型の毘沙門天像が造立されたことが銘文から知られる。鎌倉後期にはす



図-4



図-4 (2)



図-5

に相良氏の勢力下にあったと想像されるが、この地藏菩薩像も相良氏あるいは須恵氏によって地域性の強い仏師を採用して造像されたのであろう。

一方、同じ青蓮寺永仁3年(1295)銘《**木造阿弥陀三尊像**》(図一6)は、足柄の銘記から京都の院派仏師・法印院玄によって造立されたことがわかる。院玄は京都蓮華王院三十三間堂の千体千手観音菩薩像のうち7軀を造立したことが知られ、僧綱位も最高位の「法印」を帯びた当代一流の仏師の一人であった。中尊の阿弥陀如来立像は像高98.9cm、ヒノキ材の寄木造。表面の仕上げも彩色や切金文様、金泥塗りで、都の中心にあって活躍した院派仏師の作らしいまことに美しい仏像である。本像についての詳細も第2章で詳しく述べたい。



図一6

この他、銘文のない作例も含めて、多良木には13世紀～14世紀初めの仏像は見当たらない。鎌倉時代の仏教文化財としても、王宮神社旧蔵と伝える文永12年(1275)銘銅造聖観音懸仏と、東光寺経塚発見の多良木相良家二代・相良頼氏とその家族一族を願主とする、文永10年(1273)銘銅造経筒(8口)などがみられる程度である。何故、このように前時代に比較して急激に仏像造立が下火になったのか明らかな理由はわかっていない。さらに次章以下で考察したい。

【南北朝～室町時代】

他の地域と同様に、南北朝時代14世紀後半になると多良木でも仏神像の造立が一気に増加する。これまでの調査で知られているだけで、懸仏などまで含めると約100軀の仏像や神像等がまつられている。

主な在銘像では、まず応永19年(1412)銘、槻木大師堂の《**木造弘法大師坐像**》(図一7)。像高56.1cm、ヒノキ材製一木造で、右手を胸前に挙げて五鈷杵を執り左手は膝上で数珠を持つ、鎌倉時代以来、通例の大師像。銘によれば、多良木相良家第八代・相良頼仙とみられる「金剛資頼仙」を願主に製作されたことがわかる。惜しまれることに仏師名は判読できないが、引き締まった実人的な顔立ちと柔軟な体軀など、同時代の地域性のつよい仏師とは一線を画す優れた技術を持つ仏師である。

室町時代の仏像でもっとも注目されるのは、寛正6年(1465)銘小林虚空蔵堂の《**木造虚空蔵菩薩坐像**》(図一8)と、同7年(1466)銘八日薬師堂の《**木造薬師三尊像**》の2軀。両像は「仏師僧慧麟」という人物によって造立されているが、この慧麟は長禄4年(1460)から文明元年(1469)までのわずか10年間に9軀の仏像を造立しており、うち5軀に相良家庶流の永富相良家から出て人吉相良家を継承し、多良木家をも倒した相良長統の名がみえるのである。また、慧麟の仏像が伝えられているのは球磨郡内だけであり、中西真美子氏の研究によれば⁵、9軀のうち8軀までが多良木相良家(氏)の旧地に造立されていること、光背や台座背面など視認可能なところに長文の銘記と「長統」の名前とその繁栄を祈る願文が記されていることと、各地域の小領主層がそれぞれの造像主体になっていることが指摘されている。



図一7

虚空蔵菩薩像の銘文には「當郡主相良之長續、嫡子為統、同多良木殿頼泰(以下略)」のために、近隣の小領主とみられる「千里内幸

続父子」を大檀那として、「其外結縁之一味同心之志」をもって本像が造像された旨が記されている。稲葉継陽氏は、大願主や大檀那のみならず「一味同心の志」を持ち、特定地域で社会的関係を有する一揆的集団が造像を支えていたのではないかと指摘しており⁶、この時代の仏像製作や地域社会のあり方を示す史料としても重要である。

15～16世紀になると仏像の作風は慧麟の場合のように素朴となり、仏師の活動範囲も限られた地域となる場合が多い。ただ一方で、某八幡宮の永禄9年（1566）銘《木造女神像》を製作した「日高民部少輔藤原秀永」は、自らを「山城国京四条之内」と名のつており、室町時代末期になると仕事を求めて畿内から進出してきた仏師もあったことが知られる。この日高民部は、錦町新宮寺の六観音像の内《木造千手観音菩薩坐像》を天正6年（1578）に製作し、槻木大師堂の《弘法大師像》を天正13年（1585）に修復したことも知られる。郡内でほぼ20年間におよぶ活動歴があり、当地に定着して造仏していたようだ。



図-8

室町時代は仏神像造立がそれ以前より飛躍的に増加した時代である。仏師慧麟の造像の場合でも知られるように、この時代の造像の主たる担い手は多良木相良家のような大領主ではなく、その下位に位置する領主層やさらに下位の村落の小領主たちになってくる⁷。多良木においても同様の状況が広がっていたといえるだろう。

二、重要作例について

(1) 中山観音堂の木造観音菩薩立像

本章では多良木地域の平安～鎌倉時代における重要な仏像について、彫刻史的に詳しくみてみたい。

本像(図-1)は球磨郡に現存する最古級の仏像。像高153.0cmで、右肩先部(除・手首)と左肩先部(除・肘先)を含む頭部部を、カツラ材の一材から彫出した一木造。かつては足首と台座まで同一材で造られていたと想像されるが、後世、前後に割削いで内削りを施し、両手先・両脚部等が後補されている。つまり、当初は内削りのない丸彫り像だったようだ。

形状は頭頂の髻を球状とし、天冠台は紐一条に列弁帯をめぐらす。三面宝冠をかぶり左右に二条の冠繪をあらわす。体部には天衣と条帛をつけ、天衣の遊離部は本体から彫り出す。下半身に裙と腰布をまとう。積年の損傷により尊容を損なっていたが、平成25年度の解体修理によって見事に甦った⁸。

頭頂の大きな髻や本体材から彫出した三面宝冠、胸下で胴を絞った腰高な体型と肩を大きく後ろに引いた姿勢、もとは台座まで内削りなしで造立するなど著しく古様な作風である。北部九州には福岡市荘厳寺・木造観音菩薩立像などの類似点をもつ作例も存するが、今のところ中～南部九州では例を見ない。宝冠の横から左右に垂下する「冠繪」二条の内、一条はまっすぐに垂下し、もう一条はゆるくS字状にカーブして上腕部にかかっている。このような形状は唐招提寺の唐風の仏像にもみられるが、山形宝積院の十一面観音菩薩立像(9世紀半ばころ)や大阪長円寺の十一面観音菩薩立像(9世紀後半ころ)にもあらわれており、足元の裙の裾が台座にかからず足首をみせる表現は山形吉祥院の観音菩薩立像(10世紀初めころ)などにみられる。これらの像との対比から、制作時期についてはなお精査を要するが、9世紀後半～10世紀初めころか。

本像のような作風の淵源としては、同時代の南都の仏像様式からの直接の影響の他にも、天福寺奥の院(宇佐市)の木彫群(約80軀)の存在が想起される。この木彫群には、作風から奈良時代(8世紀後半)にさかのぼるものが存し、宇佐という枢要な地域にあることから、九州の多様な平安初期彫刻の起点のひとつとなったであろう。

(2) 中山観音堂の木造四天王立像

中山観音堂四天王像は、像高もほぼ同大であり作風と構造もよく似ていて当初から一具の四天王像として制作されたとみられる。

仮に左手を挙げて戟を執る像を（その1、図一9）とし、右手を挙げる像を（その2、図一10）、右手を挙げて鉾^{ほこ}を執る像を（その3、図一11）、左手に塔を捧げ持つ多聞天像を（その4、図一12）とすると、（その1）は像高132.0cmでクス材の一木造。頭体幹部を一材で造り背面から内削りを施して背板を当てる構造である。（その2）は像高131.6cm、カヤ材の一木造で（その1）と同じように背面から内削りを施し、背板を当てる構造。（その3）は像高132.6cmでクス材の一木造。構造も1、2の像と同工である。（その4）多聞天像は像高130.5cm、同じくクス材の一木造で同様に背中から内削りして背板を当てている。

四天王像は通常、本尊像を中心にして「持国天」（向かって右前方）「増長天」（向かって左前方）「広目天」（向かって左後方）「多聞天」（向かって右後方）と配置される。しかし、「宝塔」を捧げ持つ像容に固定されている多聞天像（単独造立の場合、毘沙門天と称する）以外は、像容と組み合わせがじつに多様であるため、それぞれの像の原配置と名称を想定することが課題となる。

中山観音堂四天王像は、2 軀が左手・右手のいずれかを挙げて「戟」をもち、もう1 軀は右手を挙げて剣をもっている（残り1 軀は多聞天）。

この組み合わせの場合（2 軀相称形タイプ）は、例えば山口・国分寺四天王像にみられるように、相称形の2 軀が前方に置かれる（持国天・増長天）ことが多い。2 軀が相称形の場合も、本尊側（内側）の手を挙げるものと、外側の手を挙げる両方があるが、それぞれが「開口」するものと「閉口」するものに分かれる場合は、開口像が向かって左側に置かれることが多い。

以上を総合すると、中山観音堂像の場合は、（その1）像が**持国天像**、（その2）像が**増長天像**、（その3）像が**広目天像**、宝塔をもつ（その4）像は**多聞天像**と想定できるのである。令和元年度からの修理事業で造像当初の銘文が発見されなかったので、名称等を断定することはできないが、現在のところ上記の想定がもっとも蓋然性の高いものと考えられる。

つぎに本四天王像の像容をみると、動きを抑えた重量感のある体型、ほかの時代の四天王像に比べて誇張の少ない端正な面貌表現などが特徴である。平安後期の造像様式は、京都を中心にみると11世紀前半の仏師康尚時代→11世紀半ばの仏師定朝時代→仏師長勢ら定朝第二世代→12世紀の院政期、などへと変化していく。毘沙門天など天王像の場合も、京都広隆寺・十二神将像（長勢作、1064年）のように頭部が小さく長身軽快な作風から、重量感が増し目鼻立ちを顔の中央に集めた作風の京都頂法寺・毘沙門天像（1100年ころ）、さらに12世紀半ばから後半になると、大きく腰を捻り動勢を強調した像容へと展開していく。中山観音堂の四天王像のうち（その1）（その2）は、大きく腰を捻って動勢を



図一11（その3）



図一12（その4）



図一10（その2）



図一9（その1）

強調した像容であり、この時期の像容に近い。このような点をみると、中山観音堂四天王像はおそらく12世紀前半ごろに京都で成立した作風の影響を受けて制作されたと推定され、制作された時期については12世紀半ば～12世紀後半にかけてころを想定してよいと思われる。

また、中山観音堂四天王像は、作風から二組に区分されるものとみられる。(その1)像(その2)像は、前述のように大きく腰を捻って動勢を強調した体型である。一方、(その3)像(その4)多聞天像は、やや直立に近い体勢で前者とは作風がやや異なっている。材質が(その2)像はカヤ材製で、他の3軀はクス材製であることも注目される。

仏像の材料としてのクス材は、中世においては九州でのみ使用されていたもので、カヤ材は平安時代前半頃まで全国で用いられ、それ以降はヒノキ材が主流となる。例えば球磨郡においては、阿蘇釈迦堂・二天像では、より優れた作風の毘沙門天像(仁平2年銘・1152年)はヒノキ材製、より素朴な作風の天王像はクス材製であり、系統の異なる仏師がそれぞれを担当したものとみられる。現在進んでいる修理事業の知見⁹をもとに今後の精査が必要であるが、中山観音堂四天王像の場合も(その2)像が畿内などの外部から招かれた指導的な仏師の作で、その他の3像がクス材を使うことに慣熟した、地方を中心とした比較的狭い地域で活動した仏師の作である可能性もあり得よう。今後の大きな課題は、これら仏像製作を担った仏師たちの技術的な系譜が何処に求められるのか、彼らがどこから来たのか等にあると思われる。

平安時代九州の仏師工房についての史料は皆無にちかく実態がわかりにくいだが、この時代の仏像制作のあり方を検討する上でも本四天王像は重要な作例といえるであろう。

(3) 青蓮寺の木造阿弥陀三尊像

亀田山青蓮寺(真言宗智山派)の本尊阿弥陀三尊像。中尊の阿弥陀如来立像は、像高98.9cm、ヒノキ材の寄木造で玉眼を嵌入。肉髻珠・白毫相には水晶嵌入。両足爪には銅板嵌め込みのうえ、鍍銀。螺髪は別材を貼り付け。

構造は、頭体幹部を耳の後ろを通る線で前後の二材から彫出し、内削りの上、三道下で割首する。また、体部膝以下の裙部分は前後二材から彫出し、体幹部の納衣と裙の境で短く。両足柄も別材で両足首(別材)を差し込む。両肩部以下は袖外側を含む別材で造り、両腕の袖内側にも複数の別材を短く。両肘先、両手首先、各短ぎ付け。像表面は頭髪及び足柄を除いて、錆下地丹地に金泥塗り。所々に布貼りあり。

左脇侍(向かって右側)の観音菩薩立像は、ヒノキ材の寄木造で玉眼を嵌入している。頭体幹部は背面半ばの高さで前後二材から彫出し、内削りの上、三道下で割首する。頭部は耳の後ろを通る線で前後に割短ぎ、面部はさらに一材を短く。像表面は頭髪及び足柄を除いて、錆下地丹地に金泥塗りとする。右脇侍の勢至菩薩立像は、材質構造とも観音菩薩立像に準じ、表面は錆下地丹地に金泥塗り。

両脇侍像の足柄に、朱漆と陰刻で銘文が記され「永(求カ)阿弥陀佛」「奉行/龜田/□」「永仁三」「院玄作」とある。この銘記により、本三尊像は永仁3年(1295)に仏師・法印院玄が製作したものとわかる。院玄は、文永3年(1266)完成の京都妙法院三十三間堂の千体千手観音菩薩立像再興像のうち7軀にその名を記した銘があり、いずれも自作と考えられている京都の「院派仏師」である。それらの三十三間堂千手観音像の銘記には僧綱位は併記されておらず、文永から永仁までの間に最高位の法印に昇階したことがわかる。平安時代以来の院派、円派、慶派の主流仏師たちのなかで、院玄は当時の院派最高位の仏師であった。

この中尊・阿弥陀如来立像でとくに注目される点は、足指に銅製鍍銀(蛍光X線調査では銀板の可能性も)の爪を装着し、手指にも同様の工作を施した痕跡が残されていることである。奥健夫氏によれば、手足指爪に異材を嵌める、あるいは異材製の歯相や仏足文をあらわすことは、平安時代末期以来流行した「生身信仰」にもとづいて像に付与されたと考えられ、この種の工作は鎌倉時代の阿弥陀如来像について50例近くが知られているという¹⁰。奥氏は異材製の歯・髪・爪等に、いわば疑似聖遺物としての性格を想定されているが、同氏によれば、爪を銅製鍍銀とするのは三重専修寺の阿弥陀如来像(13世紀前半)、山形本山慈恩寺の阿弥陀如来像(13世紀末)など本像も含めて3例程度である。

三、多良木相良家（氏）の造像—青蓮寺阿弥陀三尊像をめぐる—

1、2章で中世多良木の仏像を概観し、重要作例について詳しく考察してきたが、ここで改めて多良木相良家（氏）の造像について考察してみたい。

すでに述べたように、多良木地域では平安時代後期（11世紀後半から12世紀）の仏像が管見の限りでも29軀ほど知られており、これは一町内としては驚くべき数多さである。ところが、13世紀になると減少し、鎌倉時代を通じて仏神像合わせでも15例に満たない。在銘像としては青蓮寺の正応元年（1288）銘《木造地藏菩薩立像》（図一7）がもっとも古いものだが、本像は近代にあさぎり町勝福寺跡毘沙門堂から移座された地藏像である。多良木相良家（氏）による鎌倉時代の在銘仏像としては、青蓮寺本尊の永仁3年（1295）《木造阿弥陀三尊像》をまたなければならないのだ。

相良氏と球磨郡の関係は、相良頼景が上球磨の没官領・多良木村百丁を得たことにはじまった（「肥後国球磨郡田数領主等目録写」『相良家文書』2号）。元久2年（1205）頼景の嫡子長頼は人吉荘地頭職に任じられ多良木も相続して球磨相良氏の祖となる。その長頼の子、頼氏は多良木を継承して嫡流多良木相良家の祖となった。しかし13世紀第3四半期までの多良木には、明らかに頼氏ら多良木家が関わったとみられる仏像などは見当たらない。頼氏は文応元年（1260）東光寺を再興し、弘長元年（1261）王宮神社宝殿を造営したと伝えられ、蓮華寺跡古塔碑群のなかの文永6年（1269）石塔婆銘には「沙弥上蓮（頼氏）」の名がみえるが、現存する同家ゆかりの仏教文化財の嚆矢は、東光寺経塚から出土した文永10年（1273）銘《銅造経筒（八口）》である。これらの経筒は、頼氏とその家族らが現世安穩後生善処を祈って埋納したもので、当地と多良木家の結びつきが「もの」として確認されるのである。

稲葉継陽氏によれば、京都・鎌倉・相良荘・鎮西の所領を行き来していた相良氏惣領が、球磨郡に基盤を置いた活動を始めたのは、相良長頼代の1230年代であったとされている¹¹。加えて《東光寺経筒》や《青蓮寺阿弥陀三尊像》など「もの」からの視点では、頼氏、頼宗らの多良木相良家（氏）は東光寺経塚埋納の頃から、在地との結びつきを一段と深めていったのではないだろうか。

そして、この多良木相良家（氏）が残したもっとも記念碑的な仏像が、亀田山青蓮寺の永仁3年（1295）《木造阿弥陀三尊像》（図一6）である。多良木相良家三代の相良頼宗は、永仁3年（1295）曾祖父頼景と後妻青蓮尼の菩提を弔うために廟堂を建立し、同6年廟側に青蓮寺を建立したと伝えられている¹²。先に述べたように本像は、慶派仏師等とともに都を代表し、院や貴族の造像を請け負っていた院派仏師の当時の最高位「法印院玄」が製作した仏像である。青蓮寺は多良木相良家（氏）の一族結集の場、寺院であり、創建にあたって人吉荘の荘園領主蓮華王院との関係を通じて、京都の仏師院玄に本尊像造立が委託されたのだろう。そして、法印院玄という仏師選択には、頼宗と多良木家（氏）の本像と青蓮寺にかける想いが感得される。

本像は当時最新流行の美しい来迎形の阿弥陀三尊で、とくに各像の表面仕上げは精巧美麗、像の肉身部は白色（鉛白）下地に金泥塗りを施しており、柔らかく上品な光を放つ山吹色。袈裟や裙などの着衣には切金（截金）で蓮華唐草文、卍繋ぎ文や麻葉繋ぎ入り格子文などが精細華麗にあらわされている。また、中尊阿弥陀如来立像の足指には「銅製鍍銀の爪」が装着されていて、手指にも同様の工作を施していたらしい。これは当時盛んであった仏像に生身性を付与する「生身信仰」に基づく工作で、球磨郡では他にみられず、先述のように全国的にも本像を含めて3例程度である¹⁰。

このように本像は、現在もまことに美しい仏像であるが、造立当初は拝観する者たちが息をのむほど輝かしい姿であったと思われる。最高位の仏師の手になる最上質の仕上げと、手足指爪を鍍銀とするなど特別な性格（生身性）をも付与された仏像であった。ここには、青蓮寺を建立するにあたって、京都でも最上級の作行きで、おそらくたいへん高価であった本尊像を迎えようとした、多良木相良家（氏）のある意図が込められていると思われる。それはひとつには、在地の小領主や荘民たちに対して、西遷して当地に入部した彼らの持つ京都との強い繋がり＝文化的・政治的な力と権威を示すためではなかったか。今ひとつは、人吉相良氏との関係である。頼氏の父相良長統が天福元年（1233）に「竹御所」の菩提のため建立した人吉願成寺は相良一族の氏寺的な寺院であったが、次第に人吉系の影響が強

くなっていったようだ。正応6年(1293)の相良頼氏と目される「沙弥某」の置文¹³には、沙弥某が願成寺の経営について意見を述べ、訴訟等が発生した場合には多良木家が援助する旨が記されており、池田公一氏はここに人吉相良氏の同寺への影響力を牽制する意図が存すると指摘している¹⁴。そして頼氏を継いだ頼宗の時代には、人吉系が影響を強める願成寺と並び立つような多良木相良家(氏)独自の寺院が必要と考えられるようになったのではないか。長頼が開創した願成寺に対して、青蓮寺がその父頼景の菩提のための寺であることも示唆的である。近世の史料ながら願成寺の当初の本尊像は「長頼等身」の阿弥陀如来像であったと伝えられているが¹⁵、この本尊像は惜しくも大永6年(1526)戦乱によって焼失し、現在の本尊像は近世になって移座されたものである。おそらく当初の願成寺本尊阿弥陀如来像は、京都の仏師の手になり、相良氏の文化的・政治的勢威を示す美麗で当代最先端の作風の仏像であったと想像される。願成寺本尊像に勝るとも劣らない仏像として青蓮寺阿弥陀三尊像は構想され、製作を京都に依頼されたと考えられるのである。

現在、多良木相良家(氏)家の関与が明らかである仏像は青蓮寺阿弥陀三尊像だけであり、前時代のように在地領主が担い手となった地域性の強い仏像も見当たらない。おそらく多良木家にとっての造像活動は、本三尊像だけで充分であったのではないか。平安時代の在地領主たちと相良氏の文化的な感性の違いが、ここに存するように思われる。

おわりに

本稿では、平安時代から室町時代に至る多良木の中世仏像を概観し、そのいくつかについて詳細に考察し、さらに多良木相良家(氏)の仏像製作について検討した。本稿での考察をまとめるとともに、今後の課題について述べてみたい。

平安時代前期の仏像では、中山観音堂の《木造観音菩薩立像》(9世紀末～10世紀初めころ)が球磨地域内でも最古級の仏像である。この観音菩薩立像は同時代の仏像造像様式をよく取り入れており、南都(奈良)の仏像からの直接の影響や、天福寺奥の院木彫群など宇佐の仏像からの影響も想定できるだろう。中球磨の免田や上村では、9世紀頃の骨蔵器がみつかっていて、郡内に仏教が受容され始めた頃には仏像も造立あるいは畿内や宇佐などから請来されていたことがわかる。仏像様式の地方展開と球磨における仏教文化の受容を考えるうえでも本像の存在は重要である。

平安時代後期では《中山観音堂四天王像》(図—9～12)、栖山観音堂の《千手観音菩薩立像、毘沙門天像》(図—4)など3軀の神将像が双壁であり、造像の担い手は球磨郡全域に勢力をもっていた須恵氏、上球磨を拠点する久米氏等の在地領主たちが想定されるであろう。また、黒肥地東光寺跡薬師堂の《木造薬師如来坐像》(図—3)も「定朝様」の仏像で、平安時代後期12世紀の作。造られた当初から東光寺村周辺にゆかりある仏像であったのなら、相良頼景との関係も視野に入ってくる。

多良木地域には11世紀後半～12世紀の作とみられる仏神像が、現在管見の限りでも29例ほどみつかっており、これは一町内としては九州全体でみても破格の分布密度である。球磨全体でみても80軀以上の仏神像が残されていて、特異な集中度といえよう。加えて、球磨郡以外の地域と比べると、当地で毘沙門天像と四天王像など神将形像が多いことは、注目すべき事象である(球磨の他地域も同じ傾向がみられる)。その明示的な理由ははっきりしないが、当地が大隅薩摩日向など南九州辺境と境を接していることと何らかの関係があったのではないだろうか。かつて論じたように¹⁶、毘沙門天像や四天王像等の神将形像の持つ霊的な威力によって、大隅や日向等との国境に位置する球磨郡の境界を護ると同時に、各在地領主たちの領域を護ろうとした祈念のあらわれとする想定も可能だろう。

しかし、平安時代にあれほど豊かに処々で制作され祀られていた仏像が、鎌倉時代13世紀になると急速に製作されなくなるのは何故か、という次の問題があらわれる。13世紀の多良木には青蓮寺阿弥陀三尊像を別にして、今のところ少数の神像彫刻や懸仏等が知られている程度である。この傾向は球磨の他地域でもおおむね同じで、その理由は明示できないのだが、12世紀末から13世紀初めにかけての地域社会の大きな変動が反映している可能性も想定できるであろう¹⁷。それまでの造像の担い手であった須恵氏ら在地領主の力が削がれて、もはや仏像製作に傾注できなくなったのであろうか。あるいは

は、仏像製作以外の信仰活動に意を向けるようになったのだろうか。

一方、鎌倉時代に球磨に入部した相良氏一族の内、多良木相良家（氏）は、青蓮寺の本尊像として精巧美麗でモニュメンタルな、京都仏師院玄作の木造阿弥陀三尊像を造立した。本像を製作させた意図と構想には、在地の小領主たちや荘民たちに多良木家の京都との強い繋がり＝文化的政治的な力を示すことや、人吉相良氏に対抗する意味が含まれていたと思われる。そして、平安時代の在地領主たちは、地域性の強い仏師を起用してさかんに造像を行ったが、多良木相良家（氏）の場合には、彼らが日々礼拝する仏像は「京の」仏像であることが求められたのではないだろうか。青蓮寺阿弥陀三尊像には、多良木相良家（氏）の仏像、仏教文化に対する志向性もあらわれているといえるだろう。

南北朝室町時代になると、他の地域と同様に多良木でも仏神像の造立が一気に増加した（表1, 2）。管見の限りではこの時代には無銘の像も含めると110躯以上の仏神像が残されており、仏神像制作の主たる担い手は大領主層から地域の小領主たちとなり、室町時代後期になると地域の有力者と地域住民たちが結縁して仏像製作にあたった事例も認められる。その代表的な事例が長祿4年（1460）から文明元年（1469）までの10年間に9躯の仏像を郡内に造立した仏師慧麟である。

以上のように、本稿では多良木の中世仏像について概観を試み、いくつかの彫刻史的な課題を取り上げたが、残された大きな課題のひとつは中世神像彫刻についてである。球磨地域では平安時代10世紀ころに製作された木造神像をはじめに、中世から近世まで数多くの神像彫刻が造られていたことが近年の調査で判明しつつある。多良木地域にも多くの神像彫刻が祀られているが、信仰上の理由もあってほとんどその存在を知られていない。各地域の神像の伝存状況の把握と、その造立経緯の検討も今後の課題である。

註

1. 「多良木相良氏」と「多良木相良家」の使い分けは稲葉継陽「文献史料からみた多良木相良家・相良氏」（本報告書、2024年）を参考とした。
2. 上村重次『改訂増補 九州相良の寺院資料』（新潮社、1986年、原本は1965年金輝堂刊）、『多良木町史』（多良木町史編纂会、1979年）、『九州の中世美術—熊本・球磨地方美術調査概報—』（昭和56～58年度科学研究費補助金研究成果報告書、代表者平田寛、1983年）、『県内主要寺院歴史資料調査報告書（3）人吉球磨・芦北水俣地区』（熊本県立美術館編、1983年）、平成21～22年度多良木町仏像調査（熊本県立美術館）など。
3. 「表1 中世球磨地域の在銘仏神像彫刻一覧」は、拙稿「総論 中世球磨の仏像—人吉球磨の人々と造像」（熊本県立美術館編『日本遺産認定記念 ほとけの里と相良の名宝—人吉球磨の歴史と美展図録』（2015年）中、「別表 人吉球磨地域中世紀年銘彫刻一覧」をもとに編集した。表2はこれより多良木の在銘仏神像を抜粋したもの。
4. 武笠朗「西大寺四王堂十一面観音像について」（『美術史』120号、1986年）、佐々木あすか「平安時代末期から鎌倉時代中期の天冠台形式について—奈良仏師・慶派仏師作例を中心に—」（『MUSEUM』624号、2010年）
5. 中西真美子「仏師僧慧麟の造像活動と相良長續」（稲葉継陽・小川弘和編『中世相良氏の展開と地域社会』（戎光祥出版、2020年）
6. 稲葉継陽「室町期守護菊池氏の権力とその拠点」（『熊本史学』103号、2023年）、同「文献史料からみた多良木相良家・相良氏」（本報告書、2024年）
7. 有木芳隆「中世球磨郡の仏像制作と京都—『京都造像様式』の受容と地域社会」（中世学研究会編『中世学研究 I 幻想の京都モデル』高志書院、2018年）
8. 『文化財修理解説書 中山観音堂 木造観音菩薩立像』（浦仏刻所（福岡県糸島市）、2014年）
9. 『文化財修理解説書 中山観音堂 木造天部形立像①②③』（浦仏刻所（福岡県糸島市）、2021～2023年）
10. 奥健夫「生身仏像論」（長岡龍作編『造形の場』、『講座日本美術史4』所収、東大出版会、2005年）、同「歯相、仏足文などを備える阿弥陀如来像」（奥健夫『仏教彫像の制作と受容—平安時代を中心に—』中央公論美術出版、2019年）
11. 稲葉継陽「文献史料からみた多良木相良家・相良氏」（『本報告書』、2024年）
12. 『歴代私鑑』『歴代嗣誠独集覧』『南藤蔓綿録』等による。
13. 願成寺文書1－11号、『熊本県史料中世編第3』所収、（願成寺文書10号）

14. 池田公一「人吉願成寺小考—西遷御家人相良氏の族的結合に関連して—」(秀村選三編『西南地域史研究第十三輯』文献出版、2001年)
15. 宝永二年(1705)「願成寺本堂草創之記録」(『九州の寺社シリーズ15 肥後人吉 願成寺』九州歴史資料館、1996年、所収)
16. 有木芳隆「勝福寺毘沙門堂の仏像群について」(『あさぎり町文化財調査報告書第三集 あさぎり町の仏像彫刻修理報告書』あさぎり町教育委員会、2014年)、有木芳隆「九州球磨郡の平安後期・仏師動向と在地領主の造像活動—在銘の天王像を中心に—」、(津田徹英編『仏教美術論集6 組織論—制作した人々』竹林舎、2016年)
17. 小川弘和「平安時代の球磨郡と造寺・造仏」(『中世的九州の形成』高志書院、2016年)、同「中世球磨郡の在来領主と相良氏」(『熊本学園大学論集 総合科学』23—1, 2号、2018年)

表1 球磨地域在銘仏神像一覧(鰐口等を除く)

No.	年号	名称	願主など	仏師など	所在地・所蔵者(管理者)
1	大治5年11月5日(1130)	木造薬師如来坐像	造立檀越僧快暹		熊本市・個人
2	大治5年11月5日(1130)	木造釈迦如来坐像	造立檀越僧快暹		熊本市・個人
3	保延7年2月14日(1141)	木造釈迦如来坐像	天台僧林与		錦町・荒田観音堂
4	久安3年11月4日(1147)	木造毘沙門天立像	僧経覺		あさぎり町・勝福寺跡毘沙門堂
5	仁平2年4月2日(1152)	木造毘沙門天立像	藤原家實并良峯氏		あさぎり町・阿蘇釈迦堂
6	久寿3年4月6日(1156)	木造毘沙門天立像	当郷領主藤原家永并藤原氏、勸進僧源与	仏師僧経助	あさぎり町・勝福寺跡毘沙門堂
7	建元元年(1190)10月日	銅造孔雀文磬	常福寺		願成寺旧蔵、相良氏が遠江国から持来したと伝承
8	建保6年7月19日(1218)	銅造山王十社垂迹神像懸仏	阿蘇谷預所院主惣公文阿蘇谷領主平景俊		奈良市・奈良国立博物館
9	承久2年6月11日(1220)	木造勢至菩薩立像		仏師源覚	山江村・高寺院
10	承久2年8月15日(1220)	銅造十二尊像懸仏	平景俊		あさぎり町・某神社
11	嘉禄2年9月1日(1226)	銅造山王九社本地仏像懸仏	院(主)惣公文平景俊		大阪府・個人
12	寛喜元年4月(1229)	木造観音菩薩立像(阿弥陀三尊像)	日本国 匠 僧実明		湯前町・城泉寺阿弥陀堂
13	寛喜元年5月6日(1229)	銅造十二尊像懸仏	阿蘇谷預所并院主惣公文平景俊		熊本市・個人
14	文永12年(1275)正月	銅造聖観音菩薩懸仏	内蔵金弘(施入)		多良木町・王宮社旧蔵という
15	正応元年8月13日(1288)	木造地藏菩薩立像	蓮光房		多良木町・青蓮寺
16	永仁3年(1295)	木造観音・勢至菩薩立像(阿弥陀三尊像)		院玄	多良木町・青蓮寺
17	嘉元2年12月4日(1304)	木造文殊菩薩坐像(騎獅像)	大願主院主円尔、再興当院主法印良誉		あさぎり町・阿蘇釈迦堂
18	嘉暦2年9月(1327)	銅造十一面観音菩薩懸仏			人吉市・青井阿蘇神社
19	暦応4年1月14日(1341)	木造毘沙門天立像(修理)	地頭藤原重連、当院主金剛仏子祐鏝、阿蘇山平等寺之院主圓盛		あさぎり町・勝福寺跡毘沙門堂
20	文和2年(1353)	木造女神像(2軀)	いぬたう□□(ろうカ)	ふし(仏師)和(は)みなもとのさいも二良そ(カ)ふつ	球磨村・某阿蘇神社
21	延文3年8月(1358)	銅造薬師如来懸仏			あさぎり町・某神社
22	正平25年(1370)	木造男神坐像		ふし(仏師カ)大かきつハふ(カ)リ	人吉市・某神社
23	応永4年(1397)	木造男神像		大かきのハふり	球磨村・某阿蘇神社
24	応永7年4月21日(1400)	木造弘法大師坐像	願主金剛仏師長院、大宰府山井弘成、(再興)四条内秀永	仏師祐全、(再興)仏師日高民部少輔	湯前町・下里大師堂
25	応永13年(1406)	木造男女神像(2軀)			人吉市・某権現社
26	応永16年10月(1409)	不動明王・毘沙門天脇侍懸仏	願主五郎大夫妙徳		人吉市・青井阿蘇神社
27	応永19年6月15日(1412)	木造弘法大師坐像	大願主金剛資頼仙、再興之願主権大僧都法印真源、厨子再興之院主堯辰		多良木町・槻木大師堂
28	永享8年(1436)	木造男女神像(6軀)	願主正祝、犬夜叉女、弥三郎、藤四郎、正祝		錦町・某地藏堂
29	永享8年(1436)	木造地藏菩薩坐像	願主院主金剛資祐慶		錦町・某地藏堂
30	永享9年(1437)	木造薬師如来坐像		作者穂積僧	山江村・某薬師堂

31	永享10年(1438)	木造男神坐像(阿形)	大檀那藤原相良三河守貴頼、勅進三郎衛門近重		あさぎり町・某神社
32	永享12年(1440)	木造伝観音菩薩坐像	大願主宗心居士		人吉市・某観音堂
33	嘉吉3年(1443)	木造女神坐像		作者正繼	錦町・某八幡宮
34	康正2年11月28日(1456)	木造阿弥陀如来立像	大願主蓑毛重勝		あさぎり町・某神社
35	康正2年11月6日(1456)	木造毘沙門天立像(修理)	藤原(相良)長統、代官藤原儀信、当院主金剛仏子弘鏝		あさぎり町・勝福寺跡毘沙門堂
36	長祿4年11月(1460)	木造薬師如来立像	大願主蓑毛備後守重房、長統	仏師慧麟書記	あさぎり町・某神社
37	長祿4年(1460)	木造女神坐像		(再興銘カ)彩色常州賀咩	湯前町・某大師堂
38	長祿4年カ(1460)	木造男女神坐像(3軀)			湯前町・某大師堂
39	寛正2年6月(1461)	木造千手観音菩薩立像	蓑毛藤原重満	作者慧麟	あさぎり町・某神社
40	寛正3年3月18日(1462)	木造大辯功德天(大弁功德天)・婆藪仙人立像(2軀)	大願主住持長堅并妙意女	仏師恵麟	水上村・龍泉寺
41	寛正6年(1465)	木造男神坐像	願主彦左衛門并氏女		あさぎり町・某神社
42	寛正6年4月25日(1465)	木造虚空蔵菩薩坐像	大願主族峯正睦僧、当郡主相良之[],妙心尼公妙口禪尼	仏師慧麟	多良木町・某虚空蔵堂
43	寛正7年2月20日(1466)	木造薬師如来立像	住持金剛仏子朝賢上人	仏師慧麟	多良木町・某薬師堂
44	文正2年2月(1467)	木造男神坐像	大願主長岡左景政吉	仏師慧麟	湯前町・某大王社
45	応仁元年(1467)	板絵十一面観音坐像御正体	永吉庄深田村住人願主日下部貞守		あさぎり町・某阿蘇社
46	応仁3年(1469)	木造十一面観音菩薩立像(2軀)	相良能長統、大檀那山田太山酒掃	大仏師慧麟	山江村・某観音堂
47	文明元年(1469)	木造女神坐像	大願主上(黒白カ)九良左衛門	仏師慧麟	水上村・某神社
48	文明9年10月(1477)	木造女神坐像		上村権現祝子清宇作之	相良村・某阿蘇社
49	文明11年(1479)	木造阿弥陀如来立像		権現院(カ)子衛口正口作	山江村・某阿弥陀堂
50	文明12年8月(1480)	木造如来形坐像			あさぎり町・某薬師堂
51	文明14年(1482)	木造男神像(2軀)	願主勢二郎正親		あさぎり町・某神社
52	文明17年(1485)	銅造十尊懸仏	ミやつかさ田部当縄		多良木町・某神社
53	文明17年(1485)	木造地藏菩薩立像		権現祝子大神氏口口惟口作也	球磨村・某地藏堂
54	文明年間(1469~1487)	木造男女神坐像(2軀)			山江村・某神社
55	延徳2年4月7日(1490)	木造勢至菩薩立像・木造観音菩薩立像		大仏師七条(中御門カ)仏所	湯前町・八聖寺
56	明応元年(1492)	木造天神坐像	藤原頼貞公御代		人吉市・某神社
57	明応7年閏10月18日(1498)	木造十二神将立像	大願主藤原実冬		錦町・某薬師堂
58	永正2年9月26日(1505)	銅造十一面観音菩薩坐像懸仏	願主公慶		山江村・某阿弥陀堂
59	永正8年10月18日(1511)	木造十一面観音菩薩坐像	入鴨但馬守重次、嶽村掃部重正、同為光、重定		五木村・某観音堂
60	永正10年9月29日(1513)	木造菩薩形立像(2軀)	願主重泉僧		山江村・某薬師堂
61	永正10年9月29日(1513)	木造隨身倚像(阿形・吽形)	願主中嶋新右衛門尉、藤原重孝	脇田十郎之作	人吉市・某神社
62	永正11年8月(1514)	木造如来形立像	大旦那藤原長每并満乘丸、当寺院大願主秀導		多良木町・某阿弥陀堂
63	永正13年(1516)	木造男女神坐像(7軀)	願主助兵衛、藤原長松、阿邊之貞(助七カ)、刻(カ)左衛門		多良木町・某神社
64	永正15年(1518)	銅造十一面観音菩薩坐像懸仏	旦那小野公慶、沙門玖(カ)淵重泉僧願主		山江村・某阿弥陀堂
65	大永2年(1522)	木造男神立像			人吉市・某阿蘇神社
66	大永3年(1523)	木造神面(吽形)	大神惟延		あさぎり町・某神社
67	大永7年(1527)5月	木造天神坐像		権律師有鏝作	あさぎり町・某天満宮
68	享祿2年(1529)	木造男神坐像			人吉市・某神社
69	享祿2年カ(1529)	木造隨身倚像(吽形)			水上村・某神社
70	享祿5年9月(1532)	木造弥勒菩薩坐像	大檀那清原朝臣成房	仏師慶薫僧、作者二見住慶薫公	錦町・某弥勒堂
71	天文元年(1532)	木造薬師如来坐像	大願主聡芳知蔵禪師、檀那藤原朝臣兼秀	仏作慶薫	錦町・某薬師堂
72	天文2年(1533)	木造男神坐像			錦町・某神社

73	天文2年9月(1533)	木造男神坐像(10軀)	大檀那藤原朝臣長唯、平等寺天台沙門律師舜澄、平等寺権律師圓海、主正祝橘実栄、願主橘実栄、当代官藤原武秀、当城人躰千代松丸		葦北郡芦北町・某神社
74	天文8年(1539)	木造役行者像		作者鏡運	相良村・某権現
75	天文8年10月15日(1539)	木造薬師如来坐像	大願主伴木殊□□□		錦町・某薬師堂
76	天文9年2月25日(1540)	木造如来形坐像	大檀那藤原朝臣長唯并長為、大願主当院主権少都舜義	作者大仏師教慶、教圓房	あさぎり町・某観音堂
77	天文9年(1540)3月13日	木造男神坐像			山江村・某大明神
78	天文11年(1542)	木造山伏ヶ像			相良村・某神社
79	天文11年(1542)	木造隨身倚像(阿形、吽形)	大檀那藤原長唯同為晴、座主真盛、大檀那藤原義陽公、同亀千丸、座主権大僧都源誉	建立作者鏡運房、作者常州賀吽坊	水上村・某神宮
80	天文11年9月8日(1542)	木造女神坐像	住僧権律師(カ)勢瑜		多良木町・東光寺
81	天文11年9月8日(1542)	木造男神坐像	権律師勢瑜		多良木町・東光寺
82	天文14年(1545)	木造男神坐像	大願主藤原頼堅、藤原頼興並頼孝	作者金剛仏子鏡運	あさぎり町・某神社
83	天文14年(1545)	木造菩薩形立像			あさぎり町・福元寺
84	天文16年(1547)	木造男神坐像		作者権少僧都栄堅、金剛仏子鏡運	水上村・某神社
85	天文16年10月1日(1547)	木造脇侍菩薩立像	大檀那藤原之晴広之御代、大願主権少僧都栄堅		人吉市・長福寺
86	天文16年10月1日(1547)	木造脇侍菩薩立像	大檀那藤原(相良)之晴広		人吉市・長福寺
87	天文17年(1548)	木造菩薩形立像(右脇侍)			錦町・某薬師堂
88	天文17年3月(1548)	木造因達羅大將像(十二神将12軀の内)	院主善斉		錦町・某薬師堂
89	天文18年10月6日(1549)	銅造如来形坐像懸仏			錦町・某薬師堂
90	天文20年(1551)	木造男神坐像(2軀)	権大僧都栄堅	作者鏡運房	あさぎり町・某神社
91	天文21年(1552)	木造男女神坐像(2軀)	大檀那藤原晴広并興頼須恵人躰大宮詞(??)再興、願主藤原聖房丸、導師平等寺当住持権大僧都法印長快		あさぎり町・某神社
92	天文23年(1554)	木造阿弥陀如来坐像			相良村・某仏堂
93	永禄2年(1559)	木造僧形神坐像		作者鏡運	水上村・某神社
94	永禄3年11月2日(1560)	木造阿弥陀如来坐像	大壇那藤原頼房公		多良木町・某八幡宮
95	永禄5年(1562)	銅造阿弥陀如来坐像・十一面観音坐像・薬師如来坐像懸仏(3軀)	藤原頼房、権大僧都法院慶閣		相良村・某権現
96	永禄9年4月28日(1566)	木造阿弥陀如来立像	権大僧都頼賀	常州住賀吽権大僧都□□□作	多良木村・某阿弥陀堂
97	永禄9年4月8日(1566)	木造女神坐像	願主西光寺権大僧都永春	仏師山城国京四条之内日高民部少輔藤原秀永并肥後内多良木之住龍泉庵壽清僧	多良木町・某八幡宮
98	元龜2年11月18日(1571)	木造如来形坐像	権律師真瑜靈位		多良木町・東光寺
99	天正3年ヶ(1575)	木造阿弥陀如来坐像	座光作者壽清僧		水上村・生善院
100	天正5年(1577)	木造十一面観音坐像(木造六観音菩薩坐像)	当郡都督藤原義陽等、檀那清原頼忠、願主沙門珠芳并乘英	大隈宮内之住大仏師源廻月	錦町・新宮寺
101	天正5年(1577)	木造男神坐像	相良千葉祐藤原頼統		あさぎり町・某神社
102	天正5年4月(1577)	木造大日如来坐像		大仏師廻月	錦町・某大日堂
103	天正6年4月(1578)	木造千手観音・如意輪観音坐像(2軀、木造六観音菩薩坐像)	村山掃部助藤原長重、宮原右京進、藤原頼直、藤原義陽并亀千代并女大施主所主戊女等各々	金剛仏師日高民部少輔秀永、同等鱗、同次良太郎	錦町・新宮寺
104	天正7年(1579)	木造男女神坐像(2軀)	檀那東加賀守藤原頼秀	清作彩色常州賀吽房	多良木町・某神社
105	天正8年10月16日(1580)	木造狛犬(阿形・吽形)(2軀)	願主北崎正市助初製婆女	作者賀吽(カ)	多良木町・某神社
106	天正9年6月(1581)	木造多聞天立像		関東常州住居権大僧都頼賀作者賀吽	あさぎり町・正伝寺
107	天正9年6月(1581)	木造地藏菩薩立像		作者真秀	五木村・某観音堂
108	天正11年ヶ(1583)	木造菩薩立像(右脇侍像・持蓮華、2軀)	大願主西光寺住持権大僧都法印朝尊	作者大山田藤太良	水上村・生善院

109	天正 11 年 (1583)	木造男神坐像		仏師日高民部少輔秀永	人吉市・観音院
110	天正 14 年 (1586) 10 月	木造准胝観音坐像 (木造六観音菩薩坐像)	藤原氏相良常陸介長用	仏師日州之住人大神氏金策老之 (カ)	錦町・新宮寺
111	天正 16 年 (1588)	木造男神立像 (2 軀)			山江村・某祇園堂
112	天正 16 年 8 月 (1588)	木造天神坐像	施主藤原実方	作者麻生主水助	人吉市・某神社
113	天正 18 年 (1590)	木造男神像 (2 軀)	願主彦三郎	細工者緒方藤右衛門	あさぎり町・某神社
114	天正 19 年 (1591)	木造男神坐像 (5 軀)	園田豊前守、山神権太右衛門尉、同源右衛門尉、神主山神紀伊守	作者麻生主水助	人吉市・某阿蘇神社

表2 中世多良木の在銘仏神像一覧 (表1より抜粋)

No.	年号	名称	願主など	仏師など	所在地・所蔵者 (管理者)
1	正応元年 8 月 13 日 (1288)	木造地藏菩薩立像	蓮光房		多良木町・青蓮寺
2	永仁 3 年 (1295)	木造観音・勢至菩薩立像 (阿弥陀三尊像)		院玄	多良木町・青蓮寺
3	応永 7 年 (1400) 9 月 20 日	銅造罽口	金剛佛子印秀		多良木町・某業師堂
4	応永 19 年 6 月 15 日 (1412)	木造弘法大師坐像	大願主金剛資頼仙、再興之願主権大僧都法印真源、厨子再興之院主堯辰		多良木町・槻木大師堂
5	応永 20 年 (1413) 4 月 5 日	銅造罽口			多良木町・某業師堂 (応永 10 年とも判読している)
6	寛正 6 年 4 月 25 日 (1465)	木造虚空蔵菩薩坐像	大願主族峯正陸僧、当郡主相良之 [、妙心尼公妙□禪尼	仏師慧麟	多良木町・某虚空蔵堂
7	寛正 7 年 2 月 20 日 (1466)	木造業師如来立像	住持金剛仏子朝賢上人	仏師慧麟	多良木町・某業師堂
8	文明 17 年 (1485)	銅造十尊懸仏	ミやつかさ田部当縄		多良木町・某神社
9	永正 11 年 8 月 (1514)	木造如来形立像	大旦那藤原長每并満乗丸、当寺院大願主秀導		多良木町・某阿弥陀堂
10	永正 13 年 (1516)	木造男神坐像 (7 軀)	願主助兵衛、藤原長松、阿邊之貞 (助七カ)、刻 (カ) 左衛門		多良木町・某神社
11	天文 4 年 (1535) 2 月	銅造罽口	二宮大明神罽口願主須田二郎右衛門尉		多良木町・某業師堂
12	天文 11 年 9 月 8 日 (1542)	木造女神坐像	住僧権律師 (カ) 勢瑜		多良木町・東光寺
13	天文 11 年 9 月 8 日 (1542)	木造男神坐像	権律師勢瑜		多良木町・東光寺
14	永禄 3 年 11 月 2 日 (1560)	木造阿弥陀如来坐像	大壇那藤原頼房公		多良木町・某八幡宮
15	永禄 9 年 4 月 28 日 (1566)	木造阿弥陀如来立像	権大僧都頼賀	常州住賀咩権大僧都□□□作	多良木町・某阿弥陀堂
16	永禄 9 年 4 月 8 日 (1566)	木造女神坐像	願主西光寺権大僧都永春	仏師山城国京四条之内日高民部少輔藤原秀永并肥後内多良木之住龍泉庵壽清僧	多良木町・某八幡宮
17	元亀元年 (1570) 12 月	板絵十一面観音菩薩御正体	願主旦那源義盛古多良木新兵衛尉 旦那平高柳礪次良丸		多良木町・某神社
18	元亀 2 年 11 月 18 日 (1571)	木造如来形坐像	権律師真瑜靈位		多良木町・東光寺
19	天正 7 年 (1579)	木造男神坐像 (2 軀)	檀那東加賀守藤原頼秀	清作彩色常州賀咩房	多良木町・某神社
20	天正 8 年 10 月 16 日 (1580)	木造狛犬 (阿形・咩形) (2 軀)	願主北崎正市助初袈婆女	作者賀咩 (カ)	多良木町・某神社

東光寺経塚と出土資料について

村木二郎

仏教的世紀末思想である末法思想が平安時代の中頃から流行すると、浄土教が広まっていった。仏教は因果応報を説いており、来世で浄土に生まれるためには、現世で功德を積まねばならない。仏教的作善業は功德が大きく、釈迦の教えである經典を書写することが大きな善業であることは法華經のなかでも強調されている。そうして日本で案出されたのが、法華經を主とする經卷を写し、それを埋納して後世まで伝える、經塚の造営であった。

本稿で述べる東光寺経塚については、既にいくつかの論考がある。なかでも山川公見子氏の研究（山川2004）は先行研究を検証したうえで詳細な検討をおこなっており、本稿はそれを超えるものではない。ただ、經筒・銅錢ともに保存修復作業をおこなったことで新しい知見も加わったため、ここに改めて東光寺経塚について拙文を認めることとする。なお、所蔵機関が資料番号を改訂したため、山川論稿と本稿とでは番号が異なる。また、經筒に関しては筒身と蓋のセット関係も変わっている（表1）。

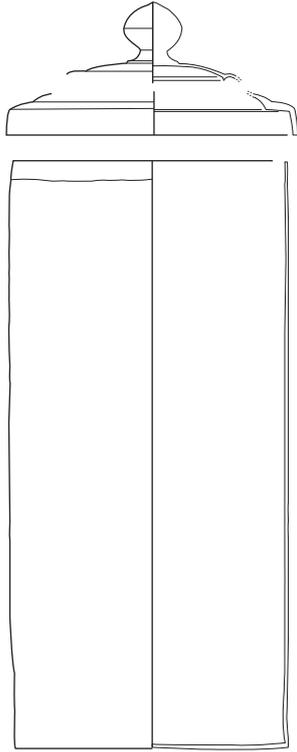
表1 經筒資料番号の新旧対照表（本稿＝新、山川＝旧）

本稿	山川筒身	山川蓋	筒身高	口径	底径	厚	蓋高	蓋径	鈕高
1号	I	VI	15.6	7.2	7.1	0.1		7.7	1.6
2号	II	IV	15.6	7.1～7.2	7.1	0.1		7.5～7.6	
3号	III	V	15.6	7.2～7.3	7.0～7.1	0.1		7.4～7.6	
4号	VI	III	15.5	7.2～7.3	7.2	0.1		7.6	
5号	V	I	15.5	7.2～7.3	7.2	0.1	3.1	7.5～7.6	1.6
6号	VII	II	15.6	7.2～7.3	7.2	0.1			1.6
7号	IV	VII	15.6	7.2	7.2	0.1		7.7	
8号	VIII	VIII	15.5～15.6	7.2～7.4	7.2	0.1	(3.0)	7.5～7.6	1.6

(数値の単位はcm)



写真1 東光寺経塚出土經筒

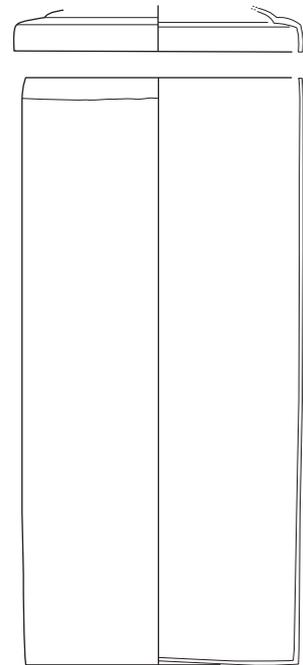


1号経筒

奉納
 如法書寫妙法蓮花經一部銅筒一
 右志者為藤原賴氏現世安穩
 後生善所乃至法界平等
 利益也仍供養奉□□

文永十年_{癸酉}十一月四日

藤原賴氏
 白敬



2号経筒

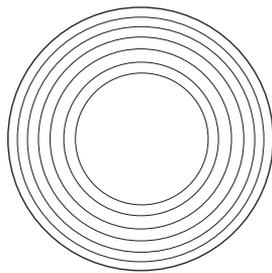
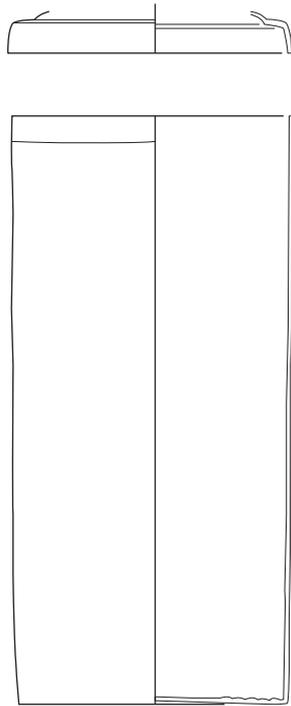
奉納
 如法書寫妙法蓮花經一部銅筒一
 右志者為藤原氏慈父尊靈
 往生極樂證大菩提乃至法界
 平等利益也仍供養奉納
 如件

文永十年_{癸酉}十一月□□

□原氏女
 白敬

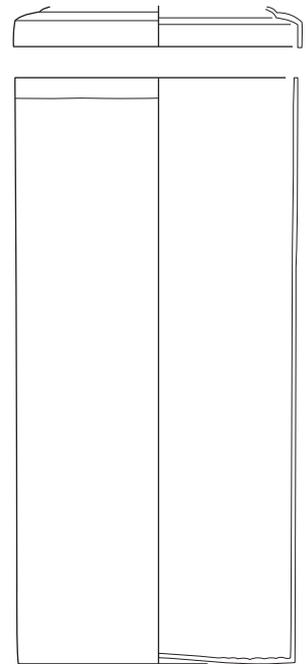


图1 東光寺経塚出土経筒 (1)



3号経筒（下は内底面、以下同）

奉納
 如法□□□法蓮花經一部銅筒一
 (藤)
 □□原
 □□□
 □□十年□十一月四日
 西□
 藤□□隆
 □□氏女
 白敬白敬



4号経筒

奉納
 如法書寫妙法蓮花經一部銅筒一
 右志者為比丘尼如阿弥陀佛
 往生極樂證大菩提乃至法
 界平等利益也仍供養奉
 納如件
 文永十年西癸十一月四日
 比丘□□阿弥陀佛
 白敬

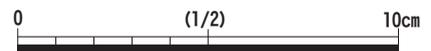
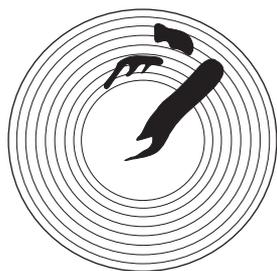
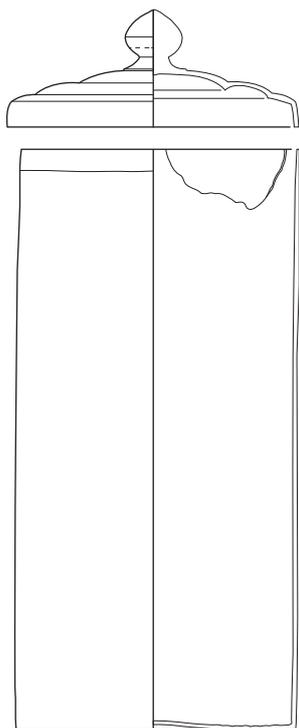
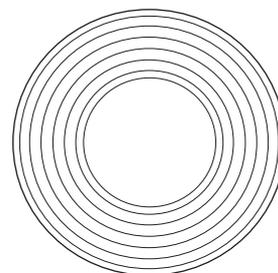
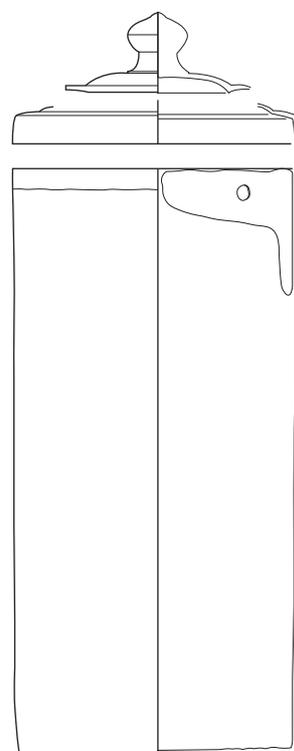


図2 東光寺経塚出土経筒(2)



5号經筒

奉納
 蓮花經一部銅筒一
 右志者為
 彌陀佛
 七世恩所往生極樂證大菩提
 自他法界平等利益也仍供養
 奉納如件
 文永十年癸十一月四日
 阿彌陀佛白敬



6号經筒

奉(納)
 右
 麼氏女現世安
 善所
 乃至法界平等利益也
 仍供養奉納
 件
 文
 西十一月四日
 大秦
 清
 播氏女敬白

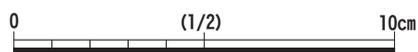


图3 東光寺經塚出土經筒 (3)

奉納

如法書寫妙法蓮花經一部銅筒一

右志者為大神宗氏現世安

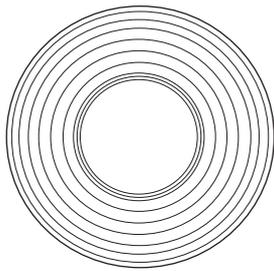
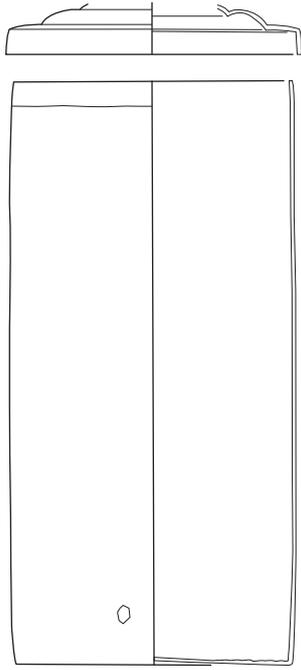
穩後生善所乃至法界平

等利益也仍供養奉納

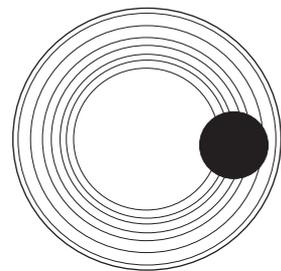
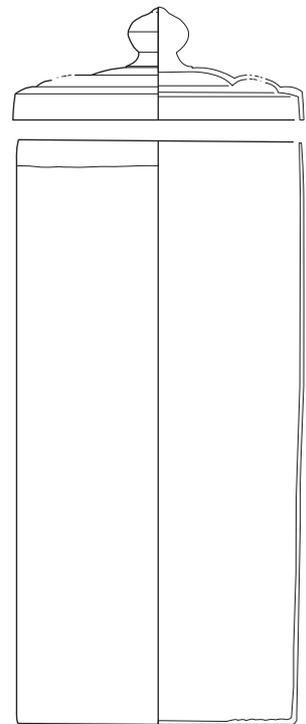
如件

文永十年 癸酉十一月四日

大神宗氏 白敬



7号経筒



8号経筒

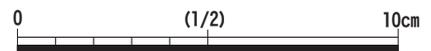


図4 東光寺経塚出土経筒(4)

多良木町黒肥地に所在する東光寺経塚は、東光寺跡背後の愛宕山中腹において、1936年に開墾の際に発見された。発見から半年後の聞き取り調査によると、径約120～150×深さ約75cmの土坑内に石囲いを設けて中に敷板(?)を敷き、青銅製経筒を前に6点、後ろに2点置いて、銅銭24枚を並べてあった。この土坑は、約45×25cm、約45×30cmの2枚の平石で蓋をしてあり、さらにその上に100個余りの川原石を積んで塚をなしていた、という(坂本1936)。現在確認できる遺物は、青銅鑄造製経筒8点と銅銭23枚である(写真1)。

経筒は8点ともほぼ同形同大である(図1～4)。3段の甲盛をもった天井の頂部に宝珠形の鈕を据える蓋と、無文円筒の筒身からなる、三段盛上式経筒である。筒身の高さは15.5～15.6cm、口径は7.1～7.4cm、底径は7.0～7.2cm、器壁の厚さは0.1cmで、蓋の高さは5号経筒から3.1cm、外径は7.4～7.7cm、鈕高は1.6cmである。ただし、2～4、7号経筒は蓋の天井部が欠損している。また、その他の蓋も鈕+天井部と、蓋受け+天井部とが破損により分断しており、1、6号については接合もできず、5、8号についても接合修復しているものの歪になっており、図面では補正をしている。これは、天井部のとくに2段目の盛上り箇所厚さが0.1cm弱と非常に薄い作りであり、土圧等に耐えられず歪曲、破損したためと思われる。

経筒は筒身の底と身を一体に鑄造する一鑄式で、これが本経筒の重要な特徴である。12世紀代に盛行する九州の経筒の多くは底板に銅板を嵌め込む別作りであり、それらの系統とは製作技法が異なる。一鑄式経筒は東日本の太平洋側ではしばしば見られるもので、分厚い筒身の底部に湯口痕が残る。ほかには播磨地域に見られる三段笠蓋式経筒が一鑄式で、薄作りのうえ湯口痕が残らないよう丁寧に仕上げ整形を施す。東光寺経筒は底部外面に丁寧なロクロ磨きの痕跡が残っており、湯口の痕が消されている。技法的には三段笠蓋式経筒の系統であるが、時期的に100年以上も隔たっているため、直接的な影響を考える必要はなからう。

底部内面には4号経筒に8巻分の経巻痕跡が明瞭に残っている。銘文にも各経筒に法華経1部を納めた旨が刻まれており、実際に法華経1部8巻が経筒に入れられたことがわかる。また、その経巻痕のさらに下には同心円状の微妙な凹凸が確認できる。これは鑄型の中子を作る際に使った挽き型の痕跡が小口面に残り、それが鑄造した経筒の内底面に転写したものと考えられる。

全体に丁寧な仕上げ調整をしている一方で、8号経筒のみは異なる。蓋、筒身ともに鑄造の際の湯まわりが悪かったようで鬆が目立つ。ほかの経筒は蓋の天井部にロクロ磨きをかけて整えるが、8号経筒はそれを施さず粗放である。筒身部も鑄放ちのように粗いままであるためか、この経筒のみは銘文が刻まれていない。

東光寺経筒は相良氏に関する銘文を有する資料として注目されてきた。筒身に刻まれた銘文は必ずしも鮮明ではなく、報告者によって判読が異なる。本稿では多良木町教育委員会が提案する銘文に従うこととする。銘文が刻まれているのは1～7号経筒で、1号経筒が藤原(相良)頼氏の名を刻むものである。銘文は類型化されており、

奉納

如法書寫妙法蓮花經一部銅筒一

右志者為(人名A)(願意)也仍供養奉納如件

文永十年(癸酉)十一月四日

(人名B)〈敬/白〉

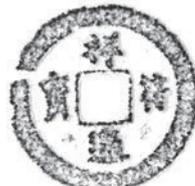
となる。人名AとBが同じで自らを供養したものが1、4～7号の5点、人名AとBが異なり人名Aに「藤原氏慈父尊霊」と亡父を追善供養したものが2号の1点である。3号は判読不明箇所が多く詳細はわからない。願意には、「現世安穩後生善所乃至法界平等利益」(1、6、7号)、「往生極樂證大菩提乃至法界平等利益」(2、4号)、「七世恩所往生極樂證大菩提自他法界平等利益」(5号)とある。現世安穩を願うものもあるが、後生善所・往生極樂といずれも死後の往生を願う浄土信仰の所産である。人名を特定できないものがほとんどであるが、相良頼氏が中心となり、多良木相良氏の本拠地で大規模な埋経供養をおこなったことが想定される。



9. 開元通寶



10. 開元通寶



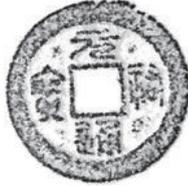
11. 祥符通寶



12. 祥符通寶



13. 天禧通寶



14. 元祐通寶



15. 皇宋通寶



16. 景德元寶



17. 熙寧元寶



18. 熙寧元寶



19. 紹熙元寶



20. 元豐通寶



21. 元祐通寶



22. 紹聖元寶



23. 紹聖元寶



24. 崇寧通寶



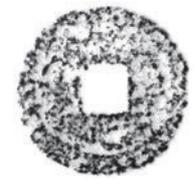
25. 大觀通寶



26. 熙寧元寶



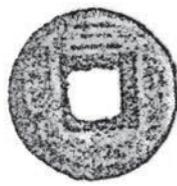
27. 元符通寶



28. 不明



29. 景定元寶



29. 背面



30. 聖宋元寶



31. 天禧通寶

圖 5 東光寺經塚出土銅錢 (原寸大)

銅銭は24枚出土したとされるが、現存するのは23枚である(図5)。多良木町教育委員会の再整理で、東光寺経塚出土銅銭はNo.9～31の番号が振り直された。内訳は初鑄年順に挙げると、開元通宝2枚(9、10)、景德元宝1枚(16)、祥符通宝2枚(11、12)、天禧通宝2枚(13、31)、皇宋通宝1枚(15)、熙寧元宝3枚(17、18、26)、元豊通宝1枚(20)、元祐通宝2枚(14、21)、紹聖元宝2枚(22、23)、元符通宝1枚(27)、聖宋元宝1枚(30)、崇寧通宝当十銭1枚(24)、大観通宝1枚(25)、紹熙元宝1枚(19)、景定元宝〈背三〉1枚(29)、銭文不明1枚(28)である。銭文不明の1枚は下の文字が「元」と認められる。最新銭は景定元宝で裏文字が「三」なので、景定三年(1262)鑄造である。

銅銭のなかで注目されるのは崇寧通宝当十銭すなわち大銭が含まれることである。日本中世社会では中国で鑄造された銅銭が通貨として使用されたが、銅銭はすべて1枚1文として通用した。そのため1枚で3文、5文、10文とみなされる大銭は日本列島では使われなかったとするのが通説である。それは各地で見つかる14世紀以降の大量埋蔵銭のなかに大銭が含まれないこと、含まれる場合には大型である大銭の周囲を削って通常の銅銭と同じ大きさに加工していることが証左となっている。博多や堺など海外との窓口である港湾遺跡では大銭が出土するが、それは大銭が数文の価値で通用する国際港ならではと考えられる。ところが、経塚に埋納された銅銭のなかに大銭が含まれている事例が散見される。山城・花背別所第5経塚、摂津・滝ノ奥経塚、紀伊・高尾山第1経塚、伊予・村山神社経塚、肥前・古蘭経塚などで、西日本に限られるとはいえ広範囲で確認される。経塚は12世紀代を中心に造営されており、銅銭が日本で使用されるようになってまだ浅い時期である。そうした初期段階においては、大銭は本来の数文の価値で通用していたとみなれば、このように各地で出土することはなかろう(村木2010)。東光寺経塚からも大銭が出土したということは、13世紀後半でもまだ大銭が通用していた可能性を示唆するものであり、この1枚は非常に重要な意味をもつ。

経筒に刻まれた銘文の初めには「如法書写」と書かれているように、埋納された法華経は厳格な作法に基づいて書写された如法経である。宗快により嘉禎二年(1236)に撰述された『如法経現修作法』によると、前方便・正懺悔にはじまる作法は料紙迎、水迎と清浄な紙・水を調べ、写経者は手袋・覆面のうえ筆立(写経)し、筒奉納、供養(十種供養)をおこなったうえで奉納(埋経)に至る。『法然上人絵伝』によるとその過程は大勢の人びとの目にするところであり、一族や近親者のみならず衆目のもとで実施することで、周辺住民をも交えた多くの人びとを結縁させることに、この埋経供養の意義があったと思われる。

埋納された経巻は釈迦の教えであり、「法身之舍利」と呼ばれて釈迦の骨である肉舍利に擬された。すなわち経塚は舍利を埋納したストゥーパ(仏塔)であり、そこは聖なる地として人びとの信仰の対象となる。東光寺経塚がつくられた愛宕山中腹から指呼の間には、胎蔵界大日如来の種子「アーンク」を葉研彫りで刻んだ4mを超える巨大な磨崖板碑が存在する。13世紀末から14世紀前半頃につくられたと考えられており、経塚とあわせてこの一帯は聖なる空間を形成している。経塚は日本各地に見られるが、なかでも九州地方には11世紀末という早い時期から集中的につくられ、全国的に流行する12世紀半ば過ぎには、逆に急激に造営数が減るという特徴がある。そのような流れとは別の論理で、東光寺経塚は文永十年(1273)にこの地につくられた。それは多良木相良氏がこの地を領し治めるにあたって、一族および地域住民の結集核となる信仰拠点を新たに設けるための装置として必要とされたためと考えられる。

参考文献

- 坂本経堯 1936 「球磨郡黒肥地村出土文永十年在銘経筒に就て(上)」『九州日日新聞 昭和11年8月31日朝刊』
村木二郎 2010 「経塚出土銭からみた大銭の利用」『遠古登攀 遠山昭登君追悼考古学論集』(『遠古 登攀』刊行会)
山川公見子 2004 「東国御家人の埋経—熊本県球磨郡多良木町所在東光寺経筒について—」『肥後考古』12

第VIII章 総括

第2節 総括

(1) 相良頼景館跡

相良家史によれば、鎮西相良氏の祖である相良頼景の館跡は「蓮花寺ノ上」「東ノ前」とされる。現在、館跡は球磨川に面し、東・西・北側には土塁が残っている。昭和49年～50年、熊本県文化課による発掘調査が行われ、館跡の東西に濠跡、球磨川に沿って石積護岸が確認された。この調査結果から、土塁と濠を併せ持つ方形居館であるとともに、川湊として価値付けられ、報告者は相良頼景の館跡と評価している。

今回のトレンチ調査の結果、北側の堀は2時期あることを確認した。当初の堀を北堀1、掘り直しの新しい堀を北堀2とし説明を加える。

北堀1は13世紀後半に幅6m、深さ2mの規模で薬研に開削され、県調査で確認されている東西外濠とともに館跡を方形に区画するものであった。北堀1の覆土下位には明褐色粘質土(H-27層)の堆積があり、この層から15世紀中頃の青磁が出土した。この明褐色粘質土(H-27層)の科学分析の結果、花粉・珪藻は非常に保存状態が悪い状況で、微化石が遺存し難い環境であったことがわかった。微化石の破壊は、乾湿を繰り返したことが原因である。微化石が残り難い環境でありながら、イネなどの珪酸体は多分に検出された。このことは、遺跡周辺に水田が広がっていたことを示すものである。発掘調査と科学分析の結果から、当初の北堀1は区画堀とともに灌漑機能も兼ねていたことがわかった。

この明褐色粘質土(H-27層)に対応すると考えられるのが、土質が似ている県調査東外濠の下層に堆積する黄灰色粘質土である。

鎌倉時代に多良木相良氏が開発したとされる河川灌漑「鮎之瀬井手」は、館跡から上流約450mの場所で取水され、館跡及び蓮花寺跡の北側を流れている。蓮花寺跡で確認されたA/B区溝跡は、県調査当時の「鮎之瀬井手」の流路方向と重複していることから(第9図)、「鮎之瀬井手」の一部であったと考えられる。B区溝最下層から出土した遺物(第35・36図)は概ね13世紀後半のもので、その頃には灌漑用水は機能していたといえる。以上のことから、北堀1や東外濠への水の供給源は「鮎之瀬井手」であったと考えられる。

その後、北堀1は15世紀中頃に人為的に埋め戻され、再度、規模を小さくした北堀2が掘り直されている。北堀2の覆土の堆積状況からみて、開削から廃棄まで短い期間に機能した堀である。北堀2は、幅3.2m、深さ1.1mの規模で薬研に開削され、人為的に礫でもって埋め戻されている。北堀2の人為的埋め戻しは、覆土上位層から検出した炭化物散在層のC14分析の結果、15世紀後

半～16世紀前葉である。

次に、北側土塁は残存幅4.6m・高さ1.2mの規模で確認できた。土塁直下に炭化物を多量に含む整地層を確認した。土塁は版築構造もなく、北側からの発生土による盛土であることを堆積状況は示している。整地層よりも下位には2枚の水性堆積層があり、ともに無遺物層である。その下が地山である礫層である。旧地形は土塁部分が最高所で、旧自然堤防付近に当たるとと思われる。

整地層で採取した炭化物のC14分析の結果、測定誤差の2σ暦年代は、整地層①-1がcalAD1272～1300、整地層①-2がcalAD1230～1293、整地層②-1がcalAD1305～1402、整地層②-2がcalAD1305～1401、整地層③がcalAD1326～1423である。よって、土塁造成は15世紀前葉以降である。しかし、館跡は13世紀後半からは確実に機能していたことが年代測定結果から分かる。北側堀の開削も併せて土塁造成の時期を総合的に勘案すると、土塁造成は北堀1でなく北堀2に伴うものである。

熊本県調査資料の再整理の結果は次のとおりである。特徴的な陶磁器を挙げると、相良頼景館跡では、白磁四耳壺・瀬戸卸皿・青磁香炉・白磁梅瓶・瀬戸瓶子・白磁合子・高麗象嵌鉢・緑釉洗・黄釉鉄絵洗・枢府系白磁・白磁水注が出土しており、館として遜色ない高級品を備えている。一方、中世期のコンテナ容器として使用された中国産の大型甕も出土しており、流通拠点に相応しい製品も合わせてもつのが特徴といえる。国産陶器の常滑焼は4型式から7型式で、13世紀から14世紀の年代観である。隣接する蓮花寺跡からは酒海壺蓋・元様式の青磁瓶・白磁合子・白磁梅瓶・白磁蓄座壺・中国天目・瀬戸天目・白磁四耳壺が出土している。土師器の形態や、陶磁器の年代から見て、遺跡の形成は蓮花寺跡が先行する。

遺構の形成過程や出土遺物とその量から見て、蓮花寺跡・相良頼景館跡は13世紀中頃から徐々に形成されはじめ、13世紀後半から15世紀中頃にかけてピークを迎え、それ以降は衰微する傾向にある。

相良頼景館跡は領主居館としては小規模である。一般に居館であれば堀で四周を囲むが、川側を開放していることから館と断定できない要素も認められる。出土している陶磁器は高級品もあり、有力者の拠点あるいは港湾施設等の流通拠点を示すものである。熊本県調査で確認された石積堤防へと続く石敷遺構の広場は古代～中世の港湾によく見られる構造である。

相良頼景館跡の西側に隣接する蓮花寺は、相良頼氏が創建した多良木相良氏の供養所である。文永6年(1269)銘の多良木相良氏による笠塔婆の造塔、当初の石組墓に

接続し拡大する石積基壇、その上に配置された五輪塔は、多良木相良氏と蓮花寺との強い関係を示すものである。また、検出された溝は「鮎之瀬井手」の流路の一部で、溝の廃棄は用水の延長と考えられ、それは灌漑域の拡大を意図したものと評価できる。

これらの要素から相良頼景館跡は、多良木相良氏に関連する川湊関連施設か居館の可能性のある遺跡であり、出土遺物から多良木相良氏が大陸や半島の優品を入手できるだけの立場を有するとともに、球磨川という流通経路を確保していたと推定される。西遷御家人の経済活動・地域支配の在り方を示す遺跡と評価できる。

(2) 青蓮寺境内

相良家史によれば、青蓮寺は鎮西相良氏の祖である相良頼景の後室とされる青蓮尼の位牌所として、永仁6年(1298)に多良木家の相良頼宗によって草創されたと伝えられる。また、青蓮寺が草創される3年前の永仁3年(1295)に多良木家の相良頼宗が祖・頼景の廟を建て、阿弥陀三尊を祀ったとの記載がある。堂内に安置された阿弥陀三尊像の両脇侍の足の柄には、永仁3年の銘がありこれを証左する。阿弥陀三尊像は、京都の蓮華王院三十三間堂の観音像を7軀手掛けた法印院玄の作である。

現在の須弥壇の格狭間などの一部は鎌倉時代後期の当初材で、これを転用し使用されている。現青蓮寺阿弥陀堂は嘉吉3年(1443)の阿弥陀堂が原型で、宝暦4年(1754)の大規模改修をうけた姿である。また、青蓮寺境内には、阿弥陀堂の北側斜面に県指定史跡である「青蓮寺古塔碑群」が所在する。

阿弥陀堂裏の南向き傾斜面の段造成部分に、古塔碑群が並ぶ、その中心に壇上積基壇が設置されている。壇上積基壇は阿弥陀堂の中軸線上で、計画的な配置といえる。壇上積基壇の構築時期は、その形状や青蓮寺阿弥陀堂の変遷から考慮すると、永仁期の廟所整備の時期が最も整合する。

青蓮寺境内の当初の姿を復元すると、廟所の中に阿弥陀三尊が安置され、その背後中軸線上に、壇上積基壇を設け、その上に五輪塔がのるという景観が復元できる。このような墓所景観は、個人の墓所ではなく、一族の墓所として機能していたと思われる。惣領家の役割として、相伝文書・鎧・旗の管理とともに、一族の墓所整備及び管理という重要な役割を多良木家は果たしていたことがわかる。

壇上積基壇の周囲に残る石造物群の紀年銘と配置状況を確認すると、基壇西側に多良木家・佐牟田家を統一し、相良本宗家を継承した永留長統・為統の五輪塔や、戦国時期・江戸期の相良氏当主の五輪塔が配置されている。このことから、墓所開放は多良木家が滅亡して、永富家

による多良木村の直轄支配期からである。鎮西相良氏の祖・頼景を祀る壇上積基壇に最も近い位置に長統とその嫡子・為統の五輪塔が配置されているのは、壇上積基壇及びその上の伝頼景供養塔に支配の正当性を求めたからといえる。戦国期・江戸期の相良氏当主の五輪塔が青蓮寺境内に造営され続けたのは、このような論理が背景にあったからである。

また、青蓮寺阿弥陀堂は数度の修繕がされている。天文11年(1542)の棟札によれば、この時の大檀那は相良氏当主の相良長唯である。このことから多良木相良氏滅亡後においても祖・相良頼景を祀る青蓮寺は、相良氏支配の正当性を示す場所であり続けた。

(3) 東光寺磨崖梵字

東光寺磨崖梵字は磨崖板碑であることがわかった。

磨崖板碑に刻まれた梵字は、五点具足の胎蔵界大日如来(āṃḥ)と五点具足の金剛界大日如来(vāṃḥ)である可能性が極めて高い。造営時期は武蔵型板碑の隆盛時期を考慮すると、13世紀末から14世紀前半と考えられる。

磨崖面前面のトレンチ調査によって、磨崖面前面は人為的な造成土であることがわかった。この造成土から13世紀後半～14世紀前半の土師器や13世紀後半の青磁碗が出土している。

磨崖面の右側に開口した石窟は、木造部材をはめ込んだ入口構造を備えることが分かった。右側壁奥には東側へと延びる先細りの空洞があり、空洞床面には土師器片が散在していた。この湧水は石窟内部での宗教行為を構成する一部と考えられる。

中世の「多良木村」の中には東光寺村が含まれ、建久4年(1193)から相良頼景が領知していた〔相5号〕。寛元元年(1243)の裁許により東光寺村は頼景の嫡子・長頼が領掌し、長頼死去後は頼氏が領知することになる。文応元年(1260)の東光寺再興も頼氏によるものとされ、多良木相良氏との関係性は深い。文永10年(1273)11月4日銘の経筒は、モンゴル帝国との対外的な緊張の最中、多良木家の頼氏が一族の現世安穏後生善処を祈願したものである。

このような一族結合の場である東光寺に磨崖板碑は造営される。磨崖板碑の造営は、初代・頼景からみて孫(頼氏)・曾孫(頼宗)の世代の時期である。板碑の形態を採用したのは、東国御家人に出自を持つ多良木相良氏の意図が働いたと考えられる。また、磨崖板碑のその大きさから当時のランドマークであったといえ、地域社会への権威付けの機能もあつたと考えられる。

(4) 遺跡の評価

多良木相良氏遺跡は、豊富な中世文書や建造物、石造

物とともに、西遷御家人による地域開発や本拠形成の様子が具体的にわかる事例である。

相良氏入部以前、多良木の地は平安仏の存在等から京都などとの交流が認められるなど、物流の拠点に当たると考えられる。多良木相良氏は、平安時代以来の伝統的な交易ルートを掌握するだけでなく、当時の対外交易の窓口と考えられる葦北や坊津などと球磨川水運や陸路でつながっていたことを想起させる。

その交易ルートの拠点である多良木村に灌漑を整備し、その灌漑域に供養所である蓮花寺や、居館もしくは川湊関連施設という拠点施設を整備している。また用水の出水口には多良木相良氏の庇護を受けた王宮神社を配置している。史料に「河梶取」とあるように、多良木村は球磨川水運の最上流地点であった。

灌漑域の北側の河岸段丘上に一族の氏寺である青蓮寺境内があり、青蓮寺境内地の鬼門方向に東光寺磨崖板碑や東光寺薬師堂といった宗教施設が設けられている。

今回の調査で、多良木相良氏による計画的な地域開発の様子が状況証拠により具体化された。中世の寺院等が残るだけでなく、用水の確保や管理といった耕地開発の在り方がわかる。中世の景観を色濃く留めるなど、西遷御家人の本拠形成とともに地域開発・支配を推定することができる事例である。

第6表 多良木相良氏に関係する資料目録

番号	和暦	西暦	史料名	トピック	出典	刊本
1	建久2年5月3日	1191	良峯師高所領譚状案	平河良峯師高の嫡子・師員への所領の譚与。約20ヶ村のその所領は、球磨川・川辺川沿いにひろく分布することを示す。うち、多良木村は「永吉之庄内横瀬」。	平河文書	熊本県史料中世編第3
2	建久8年3月23日	1197	源頼朝善光寺参詣随兵日記	源頼朝の善光寺参詣に「相良四郎」がお供している。別紙に「相良四郎」についての記載あり。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書1号
3	建久8年閏6月	1197	肥後國球磨郡田敷領主等目録写	球磨郡の領有状況と豪族たちが記載される。「多良木村百丁 没官領 伊勢弥次良不知実名」とあり。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書2号
4	元久2年7月25日	1205	鎌倉将軍家(源実朝)下文案	相良長頼、人吉荘地頭職に任命。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書3号
5	寛元元年12月23日	1243	関東下知状	相良頼重と伯父・長頼、肥後泉新荘内山井名などをめぐって争い、長頼に人吉荘半分没収の裁決が下る。多良木村地名に、古多良、竹脇、伊久佐上、東光寺かみえる。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書5号
6	寛元3年8月16日	1245	寛元三年八月十六日条	鶴岡八幡宮の流鏑馬・競馬の神事において、競馬を「相良弥五郎」が務めたとする。「相良弥五郎」は相良頼氏。	伏見版 吾妻鏡 卷 36	
7	建長4年3月25日	1252	人吉荘南方真岡名地頭職相伝系図	人吉荘北方没収後の南方・真岡名の地頭職相伝系図。相良長頼の外孫・女子阿夜を訴人とする。	平河文書	熊本県史料中世編第3
8	建長5年11月5日	1253	沙弥観阿(平河師良)譚状案	平河師良の子息・良円への田地譚与。	平河文書	熊本県史料中世編第3
9	弘安6年7月3日	1283	関東下知状案	平河良貞とその弟師時が、永吉荘地頭職ならびに名主職のことを鎌倉幕府に越訴したことに対する裁許状。	平河文書	熊本県史料中世編第3
10	正應元年11月21日	1288	関東所領安堵下知状案	異国合戦の恩賞として、久米郷東方が肥前長島荘の橘薩摩氏に宛行われる。	小鹿島文書	
11	正應6年7月17日	1293	沙弥某(相良頼氏)置文	願成寺の供僧・時衆らに宛てた置文。4箇条の規定と事実書で構成。人吉相良勢と願成寺僧の關係について述べられている。	願成寺文書	熊本県史料中世編第3
12	正應6年7月20日	1293	相良上進(頼氏)譚状	頼氏、所領を勘取りの頼宗ほか、頼包、頼高、頼秀、頼実に分割して譲り与えた。これは、多良木の在家12字、田地15町を庶子の彦三郎頼秀に譲り与えたことが分かるもの。「公家関東御公事、異国警固番役」は、惣領・頼宗の指揮のもとに庶子らが一体となって務めるよう命じられている。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書32号
13	正應6年7月20日	1293	相良上進(頼氏)譚状写	六郎頼宗に遠江国相良堀内以下を譲る。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書33号
14	正安4年6月	1302	肥後國多良木村地頭代申状案	家臣左衛門資氏、多良木村地頭相良牛房丸(経頼)代として、庶子らの押領対捍を鎌倉に訴える。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書36号
15	延慶2年11月	1309	肥後國多良木村地頭代陳情案	経頼地頭代左衛門助助氏の弁明。分家である頼秀一族は、亡くなった本家の父の遺言状に従わない。しかも、本家の経頼の土地を勝手に押領しているため、罪科は分家の頼秀側にある。「八岡名」(八日)の初見。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書38号
16	正和2年12月21日	1313	尼しんれん譚状	土地の相続をめぐる遺言書。肥後国久米郷とあり。	新編会津風土記卷之3	
17	正和2年12月28日	1313	尼しんねん譚状	土地の相続をめぐる遺言書。肥後国久米郷とあり。	三池文書	熊本県史料中世編第4
18			平河道照申状	預所「備前々司入道殿」との收訴相論の越訴状。	平河文書	熊本県史料中世編第3

番号	和暦	西暦	史料名	トピック	出典	刊本
19			相良頼資申状案	正応6年謙状に交名が付けていないにもかかわらず、八岡名と鎌倉名を名編成。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 46号
20	元弘2年6月16日	1332	運道(相良長氏)文書箱預伏案	証文の入った箱を預かっていることについて。	願成寺文書	熊本県史料中世編第3
21	元弘3年12月10日	1333	相良経頼証文	人吉庄御下文3通、受取忘失	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 61号
22	元弘3年12月20日	1333	相良経頼契約状	経頼が、回復後の北方4分の1の獲得を条件に、下文原本の貸与(相良家文書3号)と訴訟費用4分の1負担を引き受けるとともに、回復成就の際には、下文原本の返却を求めて、頼広に宛てたもの。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 62号
23	元弘3年12月20日	1333	相良経頼契約状	人吉庄北方回復のために訴訟費用4分の1の負担を引き受けけるもの。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 63号
24	建武3年9月10日	1336	一色範氏軍勢催促状	佐渡公好を遣わし、相良経頼等を打つ旨。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 74号
25	建武5年8月	1338	相良定頼申状案	定頼が南朝方経頼の兵を木枝城に追い込んだ旨。「奥野」の初見。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 82号
26	暦應2年12月17日	1339	一色範氏地頭職充行状	定頼「多良木村田地参拾町」を宛行われる。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 85号
27	暦應2年12月17日	1339	一色範氏地頭職充行状	景宗「多良木村田地参町」を宛行われる。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 86号
28	暦應3年卯月25日	1340	相良運道(長氏)諱状	長氏、嫡孫定頼に人吉庄北方地頭職を譲る。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 87号
29	暦應3年6月19日	1340	少貳頼尚軍勢催促状	相良定長を遣わし、経頼内河彦三郎義真等を打つ旨。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 88号
30	暦應3年6月19日	1340	少貳頼尚軍勢催促状	税所景宗を遣わし、経頼内河彦三郎義真等を打つ旨。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 89号
31	暦應3年6月24日	1340	一色範氏軍勢催促状	長氏を遣わし、祐長、経頼等を打つ旨。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 90号
32	暦應3年6月25日	1340	妙雲書状	経頼内河彦三郎等の拳兵。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 91号
33	暦應4年正月17日	1341	税所宗圓宛諸證文案	凶徒相良孫三郎経頼等退治のこと。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 93号
34	暦應3年8月6日	1340	筑後経尚遵行状	景宗を遣わし、経頼を祐長等を打つ旨。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 94号
35	暦應3年8月11日	1340	相良長坊軍忠状	経頼ならびに伊藤八郎等と築地原に戦う。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 95号
36	暦應3年8月11日	1340	良峯氏女代廣安軍忠状	相良助広、築地原に戦死。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 96号
37	暦應3年8月28日	1340	税所宗圓軍忠状	相良家文書102号と同内容。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 99号
38	暦應3年9月28日	1340	相良定長軍忠状	暦應3年(1340)8月に山田城に陣取る相良経頼を攻めて、本拠の多良木村まで追い込んだ合戦についてのもの。経頼の軍勢には、佐牟田家經頼・定頼の叔父、祐長も加わる。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 102号
39	暦應3月9月	1340	相良景宗軍忠状	相良家文書102号と同内容。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 103号
40	暦應3年12月10日	1340	少貳頼尚春書	定長の功を賞し、経頼の再出に備える。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 104号
41	暦應3年12月10日	1340	少貳頼尚春書	景宗の功を賞し、経頼の再出に備える。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 105号

番号	和暦	西暦	史料名	トピック	出典	刊本
42	暦應4年正月17日	1341	少貳頼尚施行状	定長に経頼退治の命を伝える。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書106号
43	暦應4年正月17日	1341	少貳頼尚施行状	景宗に経頼退治の命を伝える。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書107号
44	興国2年4月28日	1341	相良祐長軍忠状案	定頼、祐長の本頼を押頼。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書108号
45	康永元年9月29日	1342	税所宗圓軍忠状	肥後国久米郷木原合戦について。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書112号
46	康永元年10月16日	1342	一色範氏感状	久米郷木原合戦の税所宗圓の軍忠を賞する。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書113号
47	康永2年7月20日	1343	少貳頼尚奉書案	頼尚、経頼を招く。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書115号
48	康永2年8月4日	1343	相良経頼書状	頼尚、経頼に奉書を下す。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書116号
49	康永4年11月	1345	税所宗圓申状案	宗圓、祐長と所々に戦う。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書120号
50	貞和4年7月11日	1348	一色直氏軍勢催促状	多良木氏に、少輔四郎に属して肥後南党を打つよう催促。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書130号
51	貞和7年2月29日	1351	足利直冬御教書	橘遠江入道、肥後国久米郷西方上村にて、濫妨致す事。	新編会津風土記卷之3	
52	観應2年7月18日	1351	一色範氏地頭職充行状	相良定長、三地親元跡の地頭職を賜る。「久米郷西方下村内田地拾五町」	相良家文書	大日本古文書 相良家文書140号
53	観應2年7月18日	1351	一色範氏地頭職充行状	相良孫五郎、三地親元跡の地頭職を賜る。「久米郷西方下村内田地拾五町」	相良家文書	大日本古文書 相良家文書141号
54	観應2年10月5日	1351	一色範氏感状	定頼、足利直冬の与党経頼を打つ。範氏その軍忠を賞する。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書142号
55	文和2年2月	1353	平河貞家軍忠状	兄貞世の討ち死、筑前・豊前などでの転戦。証明あり。	平河文書	熊本県史料中世編第3
56	文和2年2月	1353	平河貞家軍忠状	前述平河貞家軍忠状後半と内容重複。	平河文書	熊本県史料中世編第3
57	文和4年4月5日	1355	一色範氏地頭職充行状	相良式部丞、戦死の賞。「久米郷東方橘遠江入道田地・・」	相良家文書	大日本古文書 相良家文書156号
58			相良定頼并一族等所領注文	惣領・定頼をはじめとする一門・縁者が、一色範氏から宛て行われた所領を列挙した目録。宛行時期の最後が文和4年(1355)4月。内乱を通して、佐牟田相良家の球磨郡支配の進展、日向方面への拡大をうかがえる。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書161号
59	文和4年11月22日	1355	相良定長宛諸證文案	定長、経頼の地頭職を賞される。「多良木村田地詳町相良孫三郎経頼跡内・・」	相良家文書	大日本古文書 相良家文書162号
60	正平21年3月9日	1366	橘薩摩公多議状	宮原村が久米郷東方下分に含まれ、橘薩摩の支配を受けていたことがわかる。	小鹿高文書	佐賀県史料集成第17
61	永和元年12月1日	1375	今川了俊貞感状	了俊、経頼の人吉荘における軍忠を賞す。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書174号
62	永和2年6月5日	1376	野辺盛久書状	「求摩之上郡之人々」と呼ばれる一揆的集団。	祢寝文書	南北朝遺文 九州編
63	8月6日		島津氏久書状	真幸合戦の事。	祢寝文書	南北朝遺文 九州編
64	8月12日		多良木頼仲書状	馬岡田城合戦の事。	祢寝文書	南北朝遺文 九州編

番号	和暦	西暦	史料名	トピック	出典	刊本
65	永和3年10月18日	1377	一揆神水契状案	今川了俊のもとに結成された、南九州国人一揆の契状。「相良多良木 遠江守頼忠」がみえる。	御覽文書	南北朝遺文 九州編
66	永和3年11月12日	1377	今川了俊書状案	「多良木かたく申候之間、さしをきて候、多良木に能々仰候て、いかなる起請文をもかかせ」	御覽文書	南北朝遺文 九州編
67	元中8年2月18日	1391	相良立阿(前頼)契状	前頼、多良木を継望せざることを相良孫五郎に契約する。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 186号
68	應永34年4月7日	1427	相良前頼給分評付	佐牟田相良家前頼による給分給付。平河氏が南北朝内乱を経て佐牟田相良家の傘下に入ったことを示す。	平河文書	熊本県史料中世編第3
69	應永34年4月7日	1427	相良前頼給分評付	相良前頼による給分給付、中球磨給分給付。	平河文書	熊本県史料中世編第3
70	文明3年6月3日	1471	相良為統宛行状	為統から犬童三良次良への宛行状。「久米郷多良木村之内・・・」	豊永文書	多良木町史
71	文明5年10月18日	1473	犬童長式宛行状	犬童長式から犬童大吹助への宛行状。	豊永文書	多良木町史
72	文明10年2月18日	1478	果知行評付	為継花押あり。「久米郷多良木村・・・」	皆越文書	多良木町史
73	文明11年12月15日	1479	相良為統田高目録	為統から相良又五郎に宛行われた田畑目録。「久米郷奥野村・・・」	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 228号
74	文明17年3月18日	1485	相良頼泰置文	長統、多良木村を頼泰に譲る。	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 233号
75	文明17年2月吉日	1485	平河但馬守給分評付	為統による「久米郷西方」内給分給付。	平河文書	熊本県史料中世編第3
76	文明19年7月10日	1487	相良為統置文	為統が氏寺願成寺に長頼が寄進した久米郷多良木村の田地3町を元のよう寄進するので、室町幕府の諸役や軍事動員に際しては祈願を心得るよう求めたもの。	願成寺文書	熊本県史料中世編第3
77	天文5年11月22日	1536	沙弥洞然(相良長国)長状写	最も古い相良家の史書。「長頼御親父頼彰之事者・・・」	相良家文書	大日本古文書 相良家文書 319号

観察表

挿図 番号	挿載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県鳴鶴遺跡)	種別	器種	法量 (cm)			分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高	底径				
13	1	A区石積	A区石積内	土師器	環	11.2	3.4	7.2		色調: にぶい橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	2	A区石積	A区石積内	土師器	環	(11.2)	3.2	(7.0)		色調: にぶい橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	3	A区石積	A区石積下部	土師器	環	14.8	3.5	-		色調: にぶい橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	7図-7	
13	4	A区石積	A区石積北側	土師器	環	-	-	(6.0)		色調: にぶい橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	5	A区石積	A区石積北側	土師器	小皿	6.0	1.5	4.0		色調: 橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	7図-6	
13	6	A区石積	A区石積北側	土師器	小皿	6.0	1.1	5.0		色調: 橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	7	A区石積	基段石組東側取張	土師器	小皿	(6.0)	1.9	(4.8)		色調: 橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	8	A区石積	A-石積東3F底	土師器	小皿	6.8	2.4	4.6		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	9	A区石積	A区石積北側	土師器	小皿	7.0	1.6	5.4		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	7図-5	
13	10	A区石積	A-石積東3F底	土師器	小皿	(7.0)	2.0	(4.6)		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	11	A区石積	A区石積北側	土師器	小皿	7.4	2.2	4.0		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	12	A区石積	A区石積内	土師器	小皿	7.4	1.6	6.2		色調: 浅黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	13	A区石積	基段石組東側取張	土師器	小皿	7.6	2.7	5.6		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	7図-4	
13	14	A区石積	A-石積東3F底	土師器	小皿	(7.6)	2.0	(5.0)		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	15	A区石積	A-石積東3F底	土師器	小皿	(8.0)	1.8	(5.0)		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	16	A区石積	A-石積東3F底	土師器	小皿	8.1	2.0	5.4		色調: 橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	17	A区石積	基段石組東側取張	土師器	小皿	8.2	2.6	5.2		色調: 浅黄橙色 胎土: 3mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	7図-1	
13	18	A区石積	A区石積内東	土師器	小皿	8.2	2.0	5.2		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	7図-2	
13	19	A区石積	A区石積北側	土師器	小皿	(8.4)	2.0	(5.2)		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	20	A区石積	A区石積北側	土師器	小皿	(8.4)	1.7	(6.2)		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	21	A区石積	基段石組東側取張	土師器	小皿	(8.4)	1.7	(5.0)		色調: 橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	22	A区石積	A区石積内	土師器	小皿	9.0	1.9	5.8		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒及び赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: ハエ切り離し	7図-3	
13	23	A区石積	A-石積東3F底	土師器	小皿	-	-	3.8		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	24	A区石積	A区石積内北側	土師器	小皿	-	-	4.0		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	25	A区石積	A区石積内北側	土師器	小皿	-	-	4.0		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	26	A区石積	A区石積内	土師器	小皿	-	-	4.0		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	27	A区石積	基段石組東側取張	土師器	小皿	-	-	4.4		色調: にぶい黄橙色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	28	A区石積	A区石積北側	土師器	小皿	-	-	4.5		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	29	A区石積	A-石積東3F底	土師器	小皿	-	-	4.6		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	30	A区石積	A区石積北側	土師器	小皿	-	-	4.6		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	31	A区石積	A-石積東3F底	土師器	小皿	-	-	4.8		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	32	A区石積	A-石積東3F底	土師器	小皿	-	-	4.8		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	33	A区石積	基段石組東側取張	土師器	小皿	-	-	(5.0)		色調: にぶい黄橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	34	A区石積	基段石組東側取張	土師器	小皿	-	-	5.2		色調: 橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し 外面に指頭痕		
13	35	A区石積	A区石積下底部	土師器	小皿	-	-	(6.0)		色調: 橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
13	36	A区石積	A区石積内	陶器	四耳壺	9.2	22.0	7.8	"褐釉壺 耳葺VI-1類(大)" 13c	胎土: 精・長石含む灰白色 釉: 灰白色 胴部上半に褐色釉を流す、横型の四耳を配置、口縁内傾部に目耳(6個)、唇付~高台内無軸	10図-1	
14	37	A区石積	A区石積北側	中世須恵器	瓶	8.0	-	-	在地	胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ナデ	7図-10	
14	38	A区石積	A区石積北側	中世須恵器	瓶	6.4	-	-	在地	胎土: 長石及び砂粒を含む灰白色 外面: 頸部は縦位の工具ナデ、体部は工具ナデ 内面: ナデ	7図-11	
14	39	A区石積	A区石積内	中世須恵器	瓶	-	-	-	在地	胎土: 長石及び砂粒を含む灰白色 外面: 頸部は横ナデ、胴部は山形タタキ後工具ナデ 内面: 頸部はナデ		
14	40	A区石積	A-B3区上部石積	中世須恵器	瓶	-	-	12.7	在地	胎土: 長石及び砂粒を含む灰白色 外面: ナデ 内面: 内底はハケメ、ナデ 底部: 板目庄痕	7図-14	
14	41	A区石積	A-B3区上部石積	中世須恵器	瓶	-	-	11.7	在地	胎土: 長石及び砂粒を含む灰白色 外面: 山形タタキ、ナデ 内面: ハケメ、ナデ	7図-13	
14	42	A区石積	A-DT3層	中世須恵器	瓶	-	-	13.0	在地	胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ナデ 内面: ハケメ	7図-12	

探 洞 番 号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (本来調査時)	種別	器種	量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年 代	形態の特徴・製作技法等	集 積 No	
						口径	器高 底径					
14	43	A区石積	A区石積内	中世須恵器	瓶	-	13.2	在地		胎土:砂粒を含む灰色 外面:ナデ 内面:ハケメ	17図-17	
14	44	A区石積	A区石積北側	中世須恵器	瓶	-	11.4	在地		胎土:長石及び砂粒を含む灰白色 外面:ナデ 内面:ハケメ	7図-16	
14	45	A区石積	A区石積北側	中世須恵器	瓶	-	14.5	在地		胎土:砂粒を含む灰白色 外面:ナデ 内面:ハケメ後一部ナデ消し	7図-15	
14	46	A区石積	A区石積北側	中世須恵器	瓶	-	-	在地		胎土:砂粒を含む灰白色 内外面ナデ 内面に工具痕		
14	47	A区石積	基段石積東側拡張	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土:砂粒を含む灰白色 外面:ナデ、口縁部ヨコナデ、体部はユビ押え 内面:ナデ		
14	48	A区石積	A-B3区上部石積	瓦質土器	火鉢	-	-	在地		胎土:長石及び砂粒を含む灰白色 外面:口縁部にナデ後巴文スタンプ 内面:ナデ		
15	57	A区石積	A区石積内	磁器染付	碗 (広東)	-	6.6	肥前	1780~1840年代	内底:圓縁十草花 高台内縁に砂付着	38図-22	
15	58	A区石積	A区石積内	磁器染付	皿	8.4	2.0	肥前	1850~1860年代	内底:蛇の目軸割ぎ		
15	59	A区石積	A区石積内	磁器染付	皿	-	4.5	肥前	1850~1860年代	内底:蛇の目軸割ぎ		
15	60	A区石積	A区石積内	磁器染付	小坏	6.4	4.3	肥前	1680~1740年代	外面:コンヤク印判、全面施釉		
15	61	A区石積	A区石積北側	陶器	碗	10.2	7.1	4.4	肥前	1690~1780年代	透明釉、高台~高台内露胎、高台端部を削る	7図-9
15	62	A区石積	A区石積内	陶器	碗	11.4	-	-	17c末~18c前半	外面:銅緑釉 内側:透明釉、二次焼成を受ける		
16	63	埋藏遺構	A-BT2層	中世須恵器	搦鉢	28.0	11.9	12.4	在地	胎土:長石を含む灰色 外面:ナデ、ユビ押え 内面:ナデ後獅状工具による罫目 (7本:1.7cm)、口縁部はヨコナデ	12図	
18	65	A区溝	A-BT III層	土師器	坏	(10.8)	3.2	(7.8)		色調:にぶい橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	66	A区溝	A-BT3区II層	土師器	坏	(10.5)	3.2	(7.6)		色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	67	A区溝	A-BT3区II層	土師器	坏	(11.0)	2.9	(7.0)		色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	68	A区溝	A-B1区溝I層	土師器	坏	(11.2)	3.2	(6.4)		色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	69	A区溝	A-B3区II層	土師器	坏	(11.2)	3.0	(7.4)		色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	70	A区溝	A-B3区II層	土師器	坏	(11.4)	3.5	(8.0)		色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	71	A区溝	A-BT3区II層	土師器	坏	(11.4)	2.8	(7.8)		色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	72	A区溝	A-BT III層	土師器	坏	(11.6)	3.2	(7.2)		色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	73	A区溝	A-BT III層	土師器	坏	(11.6)	3.1	(8.4)		色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	74	A区溝	A-B III区III層	土師器	坏	(11.6)	3.0	(7.6)		色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し	30図-25	
18	75	A区溝	A-BT III層	土師器	坏	11.6	2.3	7.2		色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し	30図-33	
18	76	A区溝	A-B3区II層	土師器	坏	(11.8)	3.0	(7.5)		色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	77	A区溝	A-B...	土師器	坏	(11.8)	2.6	(7.8)		色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し 内底:回		
18	78	A区溝	A-B3区II層	土師器	坏	(11.8)	2.8	(8.4)		色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	79	A区溝	A-BT III層	土師器	坏	11.8	2.7	7.6		色調:橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し	30図-3	
18	80	A区溝	A-B III区III層	土師器	坏	11.8	2.8	8.0		色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し	30図-8	
18	81	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	坏	(11.8)	2.5	(7.4)		色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し	30図-30	
18	82	A区溝	A-BT3層区II層	土師器	坏	11.8	3.2	7.0		色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	83	A区溝	A-BT III層	土師器	坏	(12.0)	2.8	(7.2)		色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	84	A区溝	A-BT III層	土師器	坏	(12.0)	3.5	(7.4)		色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	85	A区溝	A-B1区溝内I層	土師器	坏	12.0	3.3	7.4		色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	86	A区溝	A-B3区II層	土師器	坏	12.0	3.1	8.0		色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	87	A区溝	A-B3区II層	土師器	坏	(12.0)	2.9	(8.3)		色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し・板目		
18	88	A区溝	A-B3区II層	土師器	坏	12.0	2.8	8.6		色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し	16図-16	
18	89	A区溝	A-B3区II層	土師器	坏	12.0	2.6	8.0		色調:灰白色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し	16図-27	
18	90	A区溝	A-BT III層	土師器	坏	12.0	3.1	6.0		色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し	30図-22	
18	91	A区溝	A-B3区溝	土師器	坏	(12.0)	2.3	(7.6)		色調:灰白色 胎土:赤色粒子及び雲母を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し	30図-32	
18	92	A区溝	A-BT III層	土師器	坏	12.0	2.9	8.2		色調:橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	93	A区溝	A-BT III層	土師器	坏	12.0	3.1	8.0		色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し		
18	94	A区溝	A-B1区溝内I層	土師器	坏	12.0	2.5	8.0		色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外面:糸切り離し(静止?)		

挿入 番号	挿載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)			分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高	底径				
18	95	A区溝	A-B2区砂層上部	土師器	環	12.0	2.6	8.0		色調: 橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	16図-6	
18	96	A区溝	A-BT3層	土師器	環	(12.2)	3.1	(8.0)		色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
18	97	A区溝	A-BT III層	土師器	環	(12.2)	2.5	(7.4)		色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
18	98	A区溝	A-B3区II層	土師器	環	(12.2)	3.0	(8.8)		色調: 浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
18	99	A区溝	A-BT III層	土師器	環	(12.2)	3.4	(8.0)		色調: 浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	100	A区溝	A-BT I層	土師器	環	12.2	2.9	8.0		色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し・板目 圧痕	16図-10	
19	101	A区溝	A-B1区II層	土師器	環	12.2	2.8	7.6		色調: 灰白色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し 内底: 回 転痕	16図-25	
19	102	A区溝	A-B3区2層	土師器	環	12.2	3.4	8.0		色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	16図-26	
19	103	A区溝	A-B1区溝内I層	土師器	環	12.2	3.2	8.2		色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し・板 目圧痕 内底: 強い静止ナデ	30図-9	
19	104	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	環	12.2	3.2	7.8		色調: 橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	30図-27	
19	105	A区溝	A-BT3層	土師器	環	(12.2)	3.0	(8.8)		色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	106	A区溝	A-BT3区II層	土師器	環	12.3	3.1	8.8		色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	107	A区溝	A-BT III層	土師器	環	(12.4)	3.0	(8.2)		色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ	16図-9	
19	108	A区溝	A-B3区II層	土師器	環	(12.4)	3.2	(8.4)		色調: 浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	109	A区溝	A-B3区I層	土師器	環	(12.4)	3.6	(8.0)		色調: 浅黄褐色 胎土: 赤色粒子及び1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切 り離し		
19	110	A区溝	A-B1区II層	土師器	環	12.4	2.9	8.8		色調: 浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	16図-17	
19	111	A区溝	A-B3区II層	土師器	環	12.4	2.4	8.8		色調: 灰白色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し・板目圧痕	16図-28	
19	112	A区溝	A-BT3層	土師器	環	(12.4)	2.8	(8.6)		色調: 橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	113	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	環	(12.5)	2.6	(8.4)		色調: 浅黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	114	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	環	(12.6)	2.8	(8.0)		色調: 浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	115	A区溝	A-BT3区II層	土師器	環	(12.6)	2.4	(7.6)		色調: 浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	116	A区溝	A-B3区2層	土師器	環	12.6	3.4	9.0		色調: にぶい黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	16図-18	
19	117	A区溝	A-B3区II層	土師器	環	12.6	3.2	8.2		色調: 灰白色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	30図-2	
19	118	A区溝	A-BT III層	土師器	環	12.6	3.0	8.4		色調: 橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	119	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	環	12.6	3.1	8.0		色調: 浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	30図-5	
19	120	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	環	(12.6)	3.1	(8.0)		色調: 浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	30図-26	
19	121	A区溝	A-B III層	土師器	環	12.6	2.5	8.4		色調: 浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	30図-31	
19	122	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	環	(12.8)	2.7	(7.4)		色調: 浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	123	A区溝	A-BT II層	土師器	環	12.8	2.8	8.0		色調: にぶい黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	124	A区溝	A-B1区溝I層	土師器	環	(12.8)	3.4	(8.8)		色調: にぶい黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	125	A区溝	A - B 3区II層	土師器	環	(12.8)	2.5	(9.2)		色調: 浅黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	126	A区溝	A - B 3区II層	土師器	環	(12.8)	3.1	(9.4)		色調: 浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	127	A区溝	A - B 3区II層	土師器	環	(12.8)	3.3	(8.4)		色調: 浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	128	A区溝	A-BT3区II層	土師器	環	(12.8)	2.7	(9.0)		色調: 浅黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	129	A区溝	A-BT3層	土師器	環	12.8	2.2	7.8		色調: 灰白色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
19	130	A区溝	A-B3区溝層	土師器	環	(12.8)	2.7	(9.0)		色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	16図-14	
19	131	A区溝	A-B2 II層	土師器	環	12.8	3.1	8.6		色調: 浅黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	16図-23	
19	132	A区溝	A-B3区溝II層	土師器	環	12.8	3.4	9.2		色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	30図-15	
20	134	A区溝	A-BT III層	土師器	環	12.8	3.1	7.0		色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
20	135	A区溝	A-BT1.2層	土師器	環	(12.9)	3.3	(8.8)		色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	16図-5	
20	136	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	環	(13.0)	3.0	(8.6)		色調: 浅黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
20	137	A区溝	A-B1区溝内I層	土師器	環	(13.0)	3.2	(8.8)		色調: にぶい黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		

挿入 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高 底径				
21	179	A区溝	A-BT III層	土師器	環	(13.8)	3.2 (9.0)			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
21	180	A区溝	A-BT3層	土師器	環	(13.8)	2.9 (8.8)			色調：にぶい黄橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
21	181	A区溝	A-BT II区III層	土師器	環	(13.8)	2.7 (8.8)			色調：浅黄橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
21	182	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	環	13.8	2.9 8.4			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・板目正痕 内底：静止ナデ	15図-31
21	183	A区溝	A-B1区溝内I層	土師器	環	13.8	3.2 9.0			色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し 内底：強い回転痕	30図-16 16図-1
21	184	A区溝	A-B2区砂層上部	土師器	環	13.8	3.4 8.8			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
21	185	A区溝	A-B3区II層	土師器	環	(14.0)	3.0 (8.8)			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	15図-26
21	186	A区溝	A-BT III層	土師器	環	14.0	3.2 9.0			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
21	187	A区溝	A-BT I区II層	土師器	環	14.0	3.2 9.2			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	16図-8
21	188	A区溝	A-B3区II層	土師器	環	14.0	3.4 11.2			色調：灰白色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・板目正痕 内底：静止ナデ	16図-15
21	189	A区溝	A-B2 II層	土師器	環	(14.2)	3.3 (8.0)			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
21	190	A区溝	A-B2区I、II層	土師器	環	14.2	2.9 8.4			色調：浅黄橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
21	191	A区溝	A-BT3区II層	土師器	環	14.4	3.6 10.0			色調：浅黄橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・板目正痕 内底：静止ナデ	16図-4
21	192	A区溝	A-BT III層	土師器	環	14.4	3.2 8.8			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	15図-28
21	193	A区溝	A-BT III層	土師器	環	(14.4)	3.1 (9.4)			色調：浅黄橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	15図-27
21	194	A区溝	A-B1区II層	土師器	環	14.4	3.4 9.2			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	16図-24
22	195	A区溝	A-BT III層	土師器	環	-	- (5.2)			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	196	A区溝	A-B3区II層	土師器	環	-	- 6.8			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	197	A区溝	A-BT3層	土師器	環	-	- 6.8			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	198	A区溝	A-B3区II層	土師器	環	-	- 7.2			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	199	A区溝	A-B2 II層	土師器	環	-	- 7.4			色調：にぶい黄橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	200	A区溝	A-BT III層	土師器	環	-	- 7.6			色調：にぶい黄橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	201	A区溝	A-BT III層	土師器	環	-	- (7.6)			色調：浅黄橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	202	A区溝	A-B1区溝I層	土師器	環	-	- 7.6			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	203	A区溝	A-B3区II層	土師器	環	-	- 7.8			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	204	A区溝	A-BT3層	土師器	環	-	- 7.8			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	205	A区溝	A-B1区溝I層	土師器	環	-	- 7.8			色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し 内底：強い回転痕	
22	206	A区溝	A-B3区2層	土師器	環	-	- (8.0)			色調：浅黄橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	207	A区溝	A-BT III層	土師器	環	-	- 8.0			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	208	A区溝	A-B1区溝I層	土師器	環	-	- 8.0			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	209	A区溝	A-B1区溝内I層	土師器	環	-	- 8.0			色調：にぶい黄橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・板目正痕 内底：静止ナデ	
22	210	A区溝	A-B3区2層	土師器	環	-	- (8.0)			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	211	A区溝	A-BT2	土師器	環	-	- 8.2			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	212	A区溝	A-B3区II層	土師器	環	-	- 8.2			色調：にぶい黄橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	213	A区溝	A-BT1,2層	土師器	環	-	- 8.2			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	214	A区溝	A-B3区溝II層	土師器	環	-	- 8.2			色調：にぶい黄橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	215	A区溝	A-BT I、II層	土師器	環	-	- 8.2			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	216	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	環	-	- 8.4			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	217	A区溝	A-B III層	土師器	環	-	- 8.5			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・板目正痕 内底：静止ナデ	

押 図 番 号	掲載 番 号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分 類 (※大:大宰府編年)	年 代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高 底径				
22	218	A区溝	A-B2区I・II層	土師器	杯	-	8.6			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・板目正痕	
22	219	A区溝	A-BT III層	土師器	杯	-	8.8			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・板目正痕	
22	220	A区溝	A-B3区II層	土師器	杯	-	(8.8)			色調：にぶい橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	221	A区溝	A-BT I・II層	土師器	杯	-	(9.0)			色調：にぶい橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・籠状正痕	
22	222	A区溝	A-B2区I・II層	土師器	杯	-	9.0			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	223	A区溝	A-B3区溝II層	土師器	杯	-	9.0			色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	224	A区溝	A-B3区2層溝	土師器	杯	-	9.0			色調：浅黄橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	225	A区溝	A-B1区II層	土師器	杯	-	9.0			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・板目正痕 内底：静止ナデ	
22	226	A区溝	A-B1区溝内I層	土師器	杯	-	9.2			色調：灰白色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
22	227	A区溝	A-BT3層	土師器	脚付杯	-	7.0			色調：にぶい橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・脚を付ける	
23	228	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(6.4)	1.7 (5.2)			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
23	229	A区溝	A-BT1.2層	土師器	小皿	(6.4)	1.5 (5.0)			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
23	230	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(6.8)	1.5 (5.4)			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
23	231	A区溝	A-B2区1.2層	土師器	小皿	7.0	1.5 (5.0)			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	14図-13
23	232	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	7.2	1.8 (6.2)			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し 内底：ナデ	14図-9
23	233	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	7.2	1.7 (5.8)			色調：にぶい橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	14図-10
23	234	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	7.2	1.2 (5.4)			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
23	235	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	7.2	1.2 (5.6)			色調：橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
23	236	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(7.2)	1.3 (4.8)			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
23	237	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(7.2)	1.4 (5.6)			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
23	238	A区溝	A-BT3層	土師器	小皿	7.2	1.5 (5.2)			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
23	239	A区溝	A-BT I・II層	土師器	小皿	7.4	2.3 (4.9)			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し 口唇にスス付着	14図-1
23	240	A区溝	A-B2区1.2層	土師器	小皿	7.4	1.7 (5.6)			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	14図-8
23	241	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	7.4	1.0 (5.2)			色調：浅黄橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	14図-16
23	242	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(7.4)	1.6 (5.2)			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	15図-13
23	243	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	7.4	1.6 (5.8)			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	15図-18
23	244	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	7.4	1.5 (5.0)			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
23	245	A区溝	A-B1区溝I層	土師器	小皿	7.4	1.5 (5.8)			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
23	246	A区溝	A-B2区1.2層	土師器	小皿	7.4	1.0 (6.0)			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
23	247	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	7.4	1.0 (5.0)			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
23	248	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	小皿	7.6	1.3 (6.0)			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	14図-22
23	249	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(7.6)	1.1 (5.8)			色調：にぶい橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
23	250	A区溝	A-B2区I・II層	土師器	小皿	7.6	1.3 (6.0)			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
23	251	A区溝	A-B22層	土師器	小皿	7.7	2.1 (4.6)			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	14図-4
23	252	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	7.7	1.3 (6.0)			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	14図-18
23	253	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	7.7	1.4 (5.6)			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
23	254	A区溝	A-B2区2層	土師器	小皿	7.8	2.0 (5.6)			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し 口唇にスス付着	14図-3
23	255	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	7.8	1.6 (5.6)			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	15図-1
23	256	A区溝	A-BT3層	土師器	小皿	(7.8)	1.6 (6.0)			色調：にぶい橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	15図-11
23	257	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	7.8	1.0 (5.6)			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	15図-14

挿入 番号	挿載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高 底径				
23	258	A区溝	A-BT3層	土師器	小皿	7.8	1.8 6.0			色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	15図-19
23	259	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	小皿	7.8	1.4 5.6			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	15図-20
23	260	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	7.8	1.8 6.2			色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	15図-22
23	261	A区溝	A-BT2層	土師器	小皿	7.8	1.9 5.6			色調:橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し 口唇にスス付着	
23	262	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(7.8)	1.9 (6.0)			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	263	A区溝	A-BT3区II層	土師器	小皿	(7.8)	1.4 (6.4)			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	264	A区溝	A-BT I・II層	土師器	小皿	(7.8)	1.5 (6.4)			色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	265	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	(7.8)	1.6 (6.5)			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し 口唇にスス付着	
23	266	A区溝	A-B22層	土師器	小皿	7.8	2.3 5.8			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	267	A区溝	A-BT3層	土師器	小皿	7.8	1.1 5.4			色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し 目庄痕	
23	268	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(7.8)	1.9 (5.0)			色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	14図-21
23	269	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	8.0	1.4 6.0			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	底部
23	270	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(8.0)	1.3 (5.8)			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し 穿孔	15図-2
23	271	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	8.0	1.4 6.0			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	15図-4
23	272	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(8.0)	1.8 (6.0)			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	273	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	8.0	1.2 5.4			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	274	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	8.0	1.2 5.6			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し 圧痕	
23	275	A区溝	A-BT3層	土師器	小皿	8.0	1.8 6.6			色調:にぶい橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	276	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	小皿	(8.0)	1.5 (6.0)			色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	277	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(8.0)	1.5 (6.4)			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	278	A区溝	A-BT3層	土師器	小皿	(8.0)	1.8 (7.0)			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	279	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(8.0)	1.6 (6.0)			色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	280	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(8.0)	2.0 (4.8)			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	281	A区溝	A-BT I・II層	土師器	小皿	(8.0)	1.5 (6.0)			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	282	A区溝	A-BT I・II層	土師器	小皿	(8.0)	1.6 (6.0)			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	283	A区溝	A-BT I・II層	土師器	小皿	(8.0)	2.1 (5.6)			色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	284	A区溝	A-B III区II層	土師器	小皿	(8.0)	1.4 (5.7)			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	285	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	(8.0)	1.4 (5.8)			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	286	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	(8.0)	1.3 (7.4)			色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	287	A区溝	A-B2 II層	土師器	小皿	8.0	1.3 5.8			色調:にぶい橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	288	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	8.2	1.7 5.7			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	14図-14
23	289	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	8.2	1.3 6.0			色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	14図-20
23	290	A区溝	A-BT3区II層	土師器	小皿	8.2	1.3 5.6			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	14図-24
23	291	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	8.2	1.3 6.2			色調:灰白色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	15図-8
23	292	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	8.2	1.7 5.6			色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	15図-23
23	293	A区溝	A-BT3区II層	土師器	小皿	(8.2)	1.2 (6.2)			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
23	294	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	小皿	(8.2)	1.0 (6.2)			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
24	295	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(8.2)	1.2 (6.4)			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
24	296	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(8.2)	1.6 (6.4)			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
24	297	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(8.2)	1.3 (6.4)			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
24	298	A区溝	A-B1区溝内I層	土師器	小皿	(8.2)	1.4 (6.2)			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
24	299	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	8.2	1.2 6.4			色調:にぶい橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	

採掘番号	掲載番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (原本調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等		県22集 掲載No
						口径	器高 底径			色調: 色	胎土: 色	
24	300	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(8.2)	1.5 (5.2)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	301	A区溝	A-BT3区II層	土師器	小皿	8.2	1.3 5.6			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	302	A区溝	A-B III区II層	土師器	小皿	8.2	1.4 (6.8)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	303	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	小皿	(8.3)	1.1 (6.2)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	304	A区溝	A-B2区砂層上部	土師器	小皿	8.2	1.6 6.6			色調: 浅黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	305	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	8.4	1.8 6.2			色調: 浅黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	306	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	小皿	8.4	1.3 6.2			色調: 浅黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	307	A区溝	A-BT3区II層	土師器	小皿	(8.4)	1.2 (6.4)			色調: 浅黄橙色	胎土: 赤色粒子を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	308	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	小皿	(8.4)	1.1 (6.4)			色調: 浅黄橙色	胎土: 赤色粒子を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	309	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	小皿	8.4	1.1 6.0			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	310	A区溝	A-BT3層	土師器	小皿	8.4	1.2 6.2			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	311	A区溝	A-BT3層	土師器	小皿	8.4	1.5 6.6			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	312	A区溝	A-B1区溝I層	土師器	小皿	(8.4)	1.4 (6.6)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	313	A区溝	A-B2 II層	土師器	小皿	8.4	1.4 6.0			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	314	A区溝	A-B1区溝I層	土師器	小皿	(8.4)	1.4 (6.3)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	315	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	(8.4)	1.4 (6.4)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 赤色粒子を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	316	A区溝	A-BT3区II層	土師器	小皿	(8.4)	1.3 (6.4)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	317	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(8.4)	1.2 (5.4)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 赤色粒子を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	318	A区溝	A-B2 II層	土師器	小皿	(8.4)	1.1 (6.8)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 赤色粒子を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	319	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	8.5	1.4 6.4			色調: 浅黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	320	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(8.5)	1.8 (5.6)			色調: 浅黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	321	A区溝	A-BT3区II層	土師器	小皿	8.6	1.1 5.6			色調: 浅黄橙色	胎土: 赤色粒子を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	322	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	8.6	1.8 6.4			色調: 浅黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	323	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	小皿	8.6	1.2 7.0			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し・板目 圧痕
24	324	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(8.6)	1.8 (6.2)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	325	A区溝	A-B1区溝I層	土師器	小皿	(8.6)	1.7 (6.0)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 赤色粒子を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	326	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	(8.6)	1.4 (6.2)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 赤色粒子を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	327	A区溝	A-BT3区II層	土師器	小皿	8.6	1.5 7.0			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	328	A区溝	A-BT3区II層	土師器	小皿	(8.6)	1.4 (7.2)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 赤色粒子を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	329	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(8.8)	1.3 (7.4)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 赤色粒子を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	330	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(8.8)	1.6 (6.6)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	331	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	(8.8)	1.0 (6.6)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	332	A区溝	A-BT I、II層	土師器	小皿	(8.8)	1.4 (7.0)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	333	A区溝	A-B1区溝内I層	土師器	小皿	(8.8)	1.2 (6.0)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 赤色粒子を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	334	A区溝	A-B1区溝内I層	土師器	小皿	(8.8)	1.3 (6.8)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 赤色粒子を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	335	A区溝	A-B III区II層	土師器	小皿	(8.8)	1.6 (6.2)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	336	A区溝	A-BT3層	土師器	小皿	(8.8)	1.8 (6.8)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 赤色粒子を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	337	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(8.8)	1.1 (5.8)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 赤色粒子を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	338	A区溝	A-BT I、II層	土師器	小皿	9.0	1.6 6.5			色調: 浅黄橙色	胎土: 赤色粒子を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	339	A区溝	A-BT3区II層	土師器	小皿	9.0	1.5 7.0			色調: 浅黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	340	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(9.0)	1.7 (7.2)			色調: 浅黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	341	A区溝	A-BT I層	土師器	小皿	(9.0)	1.3 (6.6)			色調: 浅黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	342	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	(9.2)	1.6 (7.6)			色調: 浅黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	343	A区溝	A-B3区溝I層	土師器	小皿	9.2	1.3 7.0			色調: 浅黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	344	A区溝	A-B3区II層	土師器	小皿	9.2	1.2 8.0			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し
24	345	A区溝	A-B3区II層溝	土師器	小皿	(9.2)	1.1 (7.4)			色調: ぶい黄橙色	胎土: 1mmの砂粒を含む	調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し

挿入 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高 底径				
24	346	A区溝	A-BT I・II層	土師器	小皿	9.3	1.5 (6.8)			色調: 浅黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
24	347	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	9.4	1.7 (7.0)			色調: 浅黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
24	348	A区溝	A-B2 2層	土師器	小皿	9.4	1.6 (7.2)			色調: 浅黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
24	349	A区溝	A-B3 区II層	土師器	小皿	9.5	1.5 (7.2)			色調: 淡褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	14図-19
24	350	A区溝	A-B3 区II層	土師器	小皿	9.6	1.2 (7.8)			色調: 淡褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
24	351	A区溝	A-B1 区溝I層	土師器	小皿	9.6	2.1 5.8			色調: 浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
24	352	A区溝	A-B2 II層	土師器	小皿	9.7	1.9 6.0			色調: 褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し 口唇にスス 付着	14図-12
24	353	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	10.0	2.0 6.4			色調: 褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し 口唇にスス 付着	
24	354	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	10.1	1.7 (7.0)			色調: 浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
24	355	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	11.2	1.7 (9.0)			色調: 浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
24	356	A区溝	A-BT III層	土師器	小皿	-	- 5.0			色調: 褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
25	368	A区溝	A-B1 区溝2層	青磁	碗	16.0	7.0 6.2	龍泉窯系A1類	12c. 後葉~13c. 初頭	胎土: 精・灰色 釉: 灰オリーブ色 内底に有段, 高台内も施釉	17図-2
25	369	A区溝	A-B3 区II層	青磁	碗	-	6.0	龍泉窯系A2類	12c. 後葉~13c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉: 灰色 内面: 片彫蓮花文 (3単位)、高台内も施釉	17図-4
25	370	A区溝	A-B3 溝I層	青磁	碗	-	5.8	龍泉窯系A類	12c. 後葉~13c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉: 透明なオリーブ灰色 内面: 片彫蓮花文 (3単位)、高台内も施釉	
25	371	A区溝	A-B3 区II層	青磁	碗	-	5.8	龍泉窯系A類	12c. 後葉~13c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉: 灰オリーブ色、量付一部施釉	17図-6
25	372	A区溝	A-B 3区II層	青磁	碗	-	5.9	龍泉窯系B1類	13c. 中葉~14c. 前半	胎土: 精・灰褐色 釉: オリーブ黄色、量付~高台内は無釉	
25	373	A区溝	A-BT III層	青磁	碗	15.6	5.6	龍泉窯系B1類	13c. 中葉~14c. 前半	胎土: 精・灰色 釉: 灰色	17図-1
25	374	A区溝	A-B1 区溝2層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉~14c. 前半	胎土: 精・灰褐色 釉: 灰褐色 外面: 無錫蓮弁文	
25	375	A区溝	A-B3 溝I層	青磁	小碗	12.8	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉~14c. 前半	胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉: 厚・青灰色 外面: 幅の狭い錫蓮弁文	
25	376	A区溝	A-B3 区溝I層	青磁	碗	15.8	4.5 5.0	"龍泉窯系B1類 高台無文平碗"	13c. 中葉~14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 灰色 量付まで施釉 内底にスタンプ	17図-3
25	377	A区溝	A-B1 区溝I層	青磁	皿	11.6	2.3 5.0	同安窯系	12c. 後葉~13c. 初頭	胎土: 精・灰色 釉: 透明な灰色 内底: 獅状の施文具による文様 底部無釉	17図-5
25	378	A区溝	A-B1 区溝内I層	青磁	皿	11.0	-	同安窯系	12c. 後葉~13c. 初頭	胎土: 精・灰色 釉: 透明な灰色 内底: 獅状の施文具による文様	
25	379	A区溝	A-B3 区II・III層	青磁	酒海壺蓋	-	-	小酒海壺蓋	14c	胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉: 厚・青灰色、外面: 蓮弁 火を受ける	
25	380	A区溝	A-BT I・II層	青磁	瓶	-	-	龍泉窯系	14c	腰部から下位 元縁式 下半に蓮弁文 胎土: やや精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉: 緑灰色	
25	381	A区溝	A-BT IV層	白磁	皿	-	-	龍泉窯系	13c. 後半~14c. 初頭	胎土: 精・灰白色 釉: 灰白色、口禿	
25	382	A区溝	A-B3 区II層	白磁	梅瓶	-	-	龍泉窯系	13c 中頃~14c 初頭	龍泉窯系 胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉: 透明な緑灰色	
25	383	A区溝	A-BT I・II層	陶器	碗 (天目)	-	-	中国・天目	13c~14c	中国: 非建窯 胎土: 粗・黒色粒子を少量含む灰白色 釉: 透明な緑灰色	
25	384	A区溝	A-B 区III層	陶器	甕	-	-	備前		胎土: 砂粒を含む灰白色 内外面ともナデ	18図-9
25	385	A区溝	A-B2 区溝内I層	常滑	甕	-	-	5 型式	13c 中頃	胎土: 砂粒を含む灰白色 内外面ともナデ 自然釉がわかる 内面頸部はナデ、体部はケズリ	
26	386	A区溝	A-B3 区溝I層	中世須恵器	瓶	8.0	-	在地		胎土: 長石・雲母を含む灰白色 内外面: ナデ	18図-6
26	387	A区溝	A-B3 溝I層	中世須恵器	瓶	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ハケメ後ナデ、頸部縦ナデ、体部横ナデ 内面: ナデ	18図-7
26	388	A区溝	A-B3 区II層	中世須恵器	瓶	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む褐灰色 外面: 山形タキ後ナデ 内面: ハケメ	18図-4
26	389	A区溝	A-B1 区I層	中世須恵器	瓶	-	14.2	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ハケメ後ナデ 内面: ナデ	18図-5
26	390	A区溝	A-BT I・II層	中世須恵器	瓶	-	12.2	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: 山形タキ後ナデ 内面: ハケメ	18図-8
26	391	A区溝	A-B3 区II層	中世須恵器	鉢	27.8	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: 体部ユビ押え後ナデ、腰部は横方向へラケズリ 内面: ハケメ、口縁部はヨココナデ	18図-1
26	392	A区溝	A-B3 区II層	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ユビ押え後ナデ 内面: ハケメ、口縁部はヨココナデ	18図-2
26	393	A区溝	A-BT3層	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む褐灰色 外面: ハケメ後ナデ、内面: ハケメ、口縁部はヨココナデ	
26	394	A区溝	A-B1 区II層	中世須恵器	鉢	25.2	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色・鱗状 外面: ハケメ後ナデ、ユビ押え、口縁部はヨココナデ、腰部横方向へラケズリ 内面: ハケメ、口縁部はヨココナデ 内底: 使用痕	18図-3
26	395	A区溝	A-BT III層	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む褐灰色 外面: ナデ、ユビ押え、内面: ハケメ、口縁部はヨココナデ	
26	396	A区溝	A-B1 区溝2層	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: : ハケメ後ナデ、ユビ押え、内面: ハケメ、口縁部はヨココナデ	

採掘 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (原本調査時)	種別	器種	量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	集 積 状況
					口径	器高 底径				
26 397	A区溝	A-B3区II層	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地	1840~1860年代	胎土:砂粒を含む灰色 外面:ナデ、ユビ押え 内面:ナデ後工具による搦目	集積状況
26 398	A区溝	A-B3区II層	中世須恵器	鉢	-	-	在地	1840~1860年代	胎土:砂粒を含む灰色 外面:ナデ、ユビ押え、口縁部はヨコナデ 内面:ハケメ	集積状況
26 399	A区溝	A-B3区II層	中世須恵器	鉢	-	-	在地	1840~1860年代	胎土:砂粒を含む灰色 外面:ナデ、ユビ押え 内面:ハケメ、口縁部はヨコナデ	集積状況
26 400	A区溝	A-B2 T砂層	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地	1840~1860年代	胎土:長石及び砂粒を含む灰色 外面:ユビ押え、ナデ 内面:ナデ後搦状工具による搦目 (7本:1.7cm)、口縁部はヨコナデ	集積状況
26 401	A区溝	A-B3区II層	中世須恵器	鉢	-	12.0	在地	1840~1860年代	胎土:砂粒を含む灰色 外面:腰部焼方向のケズリ 内面:ハケメ	集積状況
26 402	A区溝	A-B3区溝II層	瓦質土器	火鉢	-	-	在地	1840~1860年代	胎土:長石・砂粒を含む灰色 外面:山形タタキ、口縁部ヨコナデ、凹線巡る、体部下位はヨコナデ 内面:ハケメ後	集積状況
27 403	A区溝	A-B2 II層	瓦質土器	火鉢	-	-	在地	1840~1860年代	胎土:砂粒を含む灰色 内外面:ナデ 鈔上面及び側面に巴文スタンプ	集積状況
27 404	A区溝	A-B3区溝I層	瓦質土器	甕	-	-	在地	1840~1860年代	胎土:砂粒を含む灰色 外面:ハケメ後ナデ 内面:口縁部ヨコナデ	集積状況
27 411	A区溝	A-BT IV層	磁器染付	碗(端反)	11.2	5.6	肥前系	1840~1860年代	胎土:蛇の目軸割ぎ・圏線+格子文 外面:二重格子文+高台に圏線	17図-7
27 412	A区溝	A-BT I・II層	磁器染付	碗	9.0	5.8	肥前系	明治後半~大正	銅版転写	
27 413	A区溝	A-BT I・II層	磁器染付	德利	-	3.4	肥前	1780~1860年代	外面:蜻唐草文、高台砂付着	
27 414	A区溝	A-BT I・II層	磁器染付	皿	9.3	2.5	肥前系	1850~1860年代	内底:蛇の目軸割ぎ	17図-8
27 415	A区溝	A-BT I・II層	陶器	皿	-	4.4	肥前	1850~1860年代	外内面:透明釉、高台露胎	
29 416	B区溝	B-FG2区III層	土師器	坏	(11.2)	3.0		17c末~18c前半	色調:浅黄橙色 胎土:2mmの砂粒及び赤色粒砂を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り	
29 417	B区溝	B-FG区II層	土師器	坏	11.5	3.2			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
29 418	B区溝	B-FG区3層	土師器	坏	11.6	3.1			色調:浅黄橙色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
29 419	B区溝	B-FT II層	土師器	坏	(11.6)	3.1			色調:灰白色 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
29 420	B区溝	B-FG3区I、II層	土師器	坏	11.8	3.0			色調:浅黄橙色 胎土:2mmの砂粒を含む 内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
29 421	B区溝	B-FG区溝層上部	土師器	坏	12.0	3.0			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	31図-10
29 422	B区溝	B-FG2区溝III層下部	土師器	坏	(12.2)	3.4			色調:灰白色 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
29 423	B区溝	B-FG区II層	土師器	坏	12.4	2.9			色調:灰白色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
29 424	B区溝	B-FT II層	土師器	坏	12.6	3.0			色調:灰白色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	31図-27
29 425	B区溝	B-FG III層	土師器	坏	12.8	3.1			色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒砂を含む 調整:内外面回転ナデ 内底:弱い静止ナデ 外底:糸切り離し・板目圧痕	31図-9
29 426	B区溝	B-EF 溝	土師器	坏	13.0	3.3			色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒砂を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	31図-3
29 427	B区溝	B-FT溝III層	土師器	坏	(13.0)	-			色調:浅黄橙色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ	
29 428	B区溝	B-FT2層	土師器	坏	(13.2)	2.6			色調:浅黄橙色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
29 429	B区溝	B-EF 溝III層下層	土師器	坏	(13.4)	3.4			色調:灰白色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し・板目圧痕	31図-5
29 430	B区溝	B-FG3区溝内3層	土師器	坏	13.4	2.5			色調:灰白色 胎土:1mm 砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し・板目圧痕	31図-8
29 431	B区溝	B-FT溝第3層	土師器	坏	13.4	2.9			色調:灰白色 胎土:2mm 砂粒及び赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	31図-13
29 432	B区溝	B-EF III層	土師器	坏	13.4	3.6			色調:灰白色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	31図-24
29 433	B区溝	B-FG3区溝内3層下部	土師器	坏	13.8	3.3			色調:灰白色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	31図-4
29 434	B区溝	B-FT溝III層	土師器	坏	(13.8)	3.5			色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	31図-6
29 435	B区溝	B-FG区II層	土師器	坏	14.0	3.9			色調:浅黄橙色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
29 436	B区溝	B-FT2層	土師器	坏	14.4	3.5			色調:にぶい黄橙色 胎土:雲母を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	31図-23
29 437	B区溝	B-FT2層	土師器	坏?	-	-			色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
29 438	B区溝	B-FG II層	土師器	坏	-	(6.8)			色調:浅黄橙色 胎土:5mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
29 439	B区溝	B-FG II層	土師器	坏	-	7.4			色調:浅黄橙色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
29 440	B区溝	B-FG3区I、II層	土師器	坏	-	(7.6)			色調:浅黄橙色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
29 441	B区溝	B-FT溝III層下層	土師器	坏	-	8.0			色調:にぶい黄橙色 胎土:雲母を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
29 442	B区溝	B-FT溝III層	土師器	坏	-	(8.0)			色調:浅黄橙色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	

押図 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (原本調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	底径				
30	485	B区溝	B-FT II層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 青灰色	
30	486	B区溝	B-FG 区溝最上部	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 灰白色	33図-5
30	487	B区溝	B-FT II層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 暗緑灰色	
30	488	B区溝	B-FT II層	青磁	碗	-	5.4	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 灰白色 胎土: 精・灰白色 釉: 暗緑灰色	32図-12
31	489	B区溝	B-FG 2区 III層	青磁	碗	-	5.2	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉: 青灰色 内底: 印花文	
31	490	B区溝	B-FG 2区 III層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉: 緑灰色、量付～高台内は無釉 内底: 印花文	
31	491	B区溝	B-FT II層	青磁	碗	-	5.0	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 灰白色、量付～高台内は無釉	
31	492	B区溝	B-FG 3区 I・II層	青磁	浅形碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 緑灰色	
31	493	B区溝	B-FT 溝III層上部	青磁	浅形碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 緑灰色	
31	494	B区溝	B-FG 3区 II層	青磁	束口碗	12.0	-	龍泉窯系B1類(束口碗)	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 暗緑色	
31	495	B区溝	B-FG 3区溝3層	青磁	束口碗	11.0	-	龍泉窯系B1類(束口碗)	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 暗緑色	32図-11
31	496	B区溝	B-FG 区II層	青磁	碗	-	5.0	龍泉窯系B4類	15c. 後半～16c. 1/4	胎土: やや粗・白色粒を含む灰白色 釉: オリーブ灰色	32図-14
31	497	B区溝	B-FT II層	青磁	碗	-	4.6	龍泉窯系B4類	15c. 後半～16c. 1/4	胎土: やや粗・黒色粒及び白色粒を含む灰白色 釉: 緑灰色、高台～外底は無釉	
31	498	B区溝	B-EF 区溝3層	青磁	碗	13.8	-	龍泉窯系C2類	15c. 前～中葉	胎土: 精・灰白色 釉: オリーブ灰色	32図-15
31	499	B区溝	B-FT II層	青磁	碗	-	6.4	龍泉窯系D1類	14c. 後半～15c. 前葉	胎土: やや精・長石を多く含む灰白色 釉: 緑灰色、量付まで施釉	
31	500	B区溝	B-GT II層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系D1類	14c. 後半～15c. 前葉	胎土: やや精・長石を多く含む灰白色 釉: 緑灰色、量付まで施釉	
31	501	B区溝	B-GT II層	青磁	皿	-	-	折縁皿	13c. 後半～14c. 初頭	胎土: 精・厚・緑灰色 内面: 縦に凹面の削り	
31	502	B区溝	B-FT 溝III層上部	青磁	盤	-	-	龍泉窯系、元禄式	胎土: やや精・黒色粒子・長石を少量含む灰白色 釉: 緑灰色		
31	503	B区溝	B-FT 溝III層	白磁	碗	-	6.6	白磁碗IV類	11c. 後半～12c. 前半	胎土: 精 釉: 灰白色 内底に圈線、量付～高台内は無釉	32図-13
31	504	B区溝	B-FG 区溝最上部	白磁	碗	-	7.4	白磁碗IV類	11c. 後半～12c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色 釉: 灰白色、量付～高台内は無釉	
31	505	B区溝	B-FT 溝III層上部	白磁	碗	-	-	白磁碗IX類	13c. 中～初頭	胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉: 灰白色	
31	506	B区溝	B-FG 溝	白磁	皿	-	-	白磁皿IX類	胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉: 灰白色		
31	507	B区溝	B-FG 区II層	白磁	皿	-	-	白磁皿IX類	13c. 後半～14c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子・長石を少量含む灰白色 釉: 灰白色	
31	508	B区溝	B-FT 溝3層下部	白磁	皿	-	-	白磁皿IX類	13c. 後半～14c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子・長石を少量含む灰白色 釉: 灰白色	
31	509	B区溝	B-FG 区II層	白磁	皿	-	-	白磁皿IX類	13c. 後半～14c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子・長石を少量含む灰白色 釉: 灰白色	
31	510	B区溝	B-FG 溝上部	白磁	皿	-	5.4	白磁皿IX類	13c. 後半～14c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子・長石を少量含む灰白色 釉: 灰白色	
31	511	B区溝	B-FT 3区溝III層	白磁	皿	-	-	白磁皿IX類	13c. 後半～14c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉: 青味ある灰白色	
31	512	B区溝	B-FT 溝III層上部	白磁	皿	-	-	白磁皿IX類	13c. 後半～14c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉: 灰白色	
31	513	B区溝	B-FG 3区 I・II層	白磁	皿	-	-	白磁皿B群	15c. 前半	胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉: 灰白色	
31	514	B区溝	B-FT 溝3層	白磁	合子(蓋)	6.2	1.6	合子蓋		胎土: 精 釉: 灰白色 型成形	33図-1
31	515	B区溝	B-FG 区遺構内	白磁	合子(蓋)	6.2	1.8	合子蓋		胎土: 精・灰白色 釉: 灰白色 型成形	
31	516	B区溝	B-FG 区溝黒色土	白磁	合子(身)	5.4	2.0	合子身		胎土: 精 釉: 灰白色 底面無釉	33図-2
31	517	B区溝	B-FT 溝III層	白磁	合子(身)	5.0	-	合子身		胎土: 精・灰白色 釉: 灰白色 内面及び体部下無釉	33図-3
31	518	B区溝	B-FG 2区溝III層	青白磁	小壺	-	-	青白磁小壺		胎土: 精・灰白色 釉: 明緑灰色 外面に雷座、体部下無釉	
31	519	B区溝	B-FG 2区溝III層下部	磁器染付	碗	-	-	染付碗C群	15c. 3/4～16c. 1/4	内面: 口縁付近に二重圈線 外面: 草花文	
31	520	B区溝	B-FG 区II層	陶器	甕	-	-	甕II類(大)?	13 c	胎土: 白色砂粒を多く含む灰白色	
31	521	B区溝	B-FG 3区溝III層	常滑	甕	-	-	6B 型式	13c. 第4四半	N 字状口縁 胎土: 長石及び砂粒を多く含む 焼成やや悪い	
31	522	B区溝	B-FG 3区溝内3層下部	中世須恵器	壺	-	-	在地	13c 後葉～14c	胎土: 砂粒を含む灰白色 体部～頸部格子目タタキ (3mm) 後ナデ 内面: ヨコナデ	
32	523	B区溝	B-FG 区3層	中世須恵器	壺	-	-	在地	13c 後葉～14c	胎土: 長石及び砂粒を含む灰白色・縞状 外面: 格子タタキ (3mm)・山形タタキ 内面: ヨコナデ	
32	524	B区溝	B-FG 3区溝III層	中世須恵器	甕	-	-	在地		胎土: 長石及び砂粒を含む灰白色 外面: 横方向に菱形押し型 内面: ケズリ後ナデ	
32	525	B区溝	B-FT 溝3層下部	中世須恵器	甕	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: 頸部横ナデ、体部横ナデ、体部ケズリ後ナデ	

挿入 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高 底径				
32	526	B区溝	B-FG 層	中世須恵器	搦鉢	(31.6)	-	在地		胎土: 砂粒を含む赤灰色・内部は赤灰色 外面: ハケメ後ナデ・ユビ押え 内面: ハケメ後×状の罫目、口縁部はヨコナデ	34 図-2
32	527	B区溝	B-FG 溝3層	中世須恵器	搦鉢	26.0	11.0	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: ハケメ後ナデ・ユビ押え、口縁部はヨコナデ、腰部横方向のケズリ 内面: ハケメ後×状罫目、口縁付近はヨコナデ、胎土: 黒色靫及び砂粒を含む灰白色 外面: 斜めにユビ押え・ナデ 内面: ナデ後×字状罫目	34 図-1
32	528	B区溝	B-FG 区2層	中世須恵器	搦鉢	23.4	-	在地		胎土: 黒色靫及び砂粒を含む灰色 外面: 縦方向ケズリ・ユビ押え、口縁付近はヨコナデ、腰部横方向のケズリ 内面: ハケメ後後飾工具による罫目 (5本/2.8cm)、口縁部はヨコナデ	34 図-3
32	529	B区溝	B-G III層	中世須恵器	搦鉢	(27.8)	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: ハケメ後ナデ・ユビ押え、口縁部はヨコナデ、腰部横方向のケズリ 内面: ハケメ後×状罫目	
32	530	B区溝	B-FG2区溝III層下部	中世須恵器	搦鉢	26.0	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ押え、口縁部はヨコナデ、腰部は横方向のケズリ 内面: ハケメ	
32	531	B区溝	B-FG3区溝3層	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ押え 内面: ナデ後飾工具による罫目 (7本/1.7cm)、口縁部はヨコナデ	
33	532	B区溝	B-FT 溝3層下部	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: ハケメ後ナデ・ユビ押え、口縁部はヨコナデ 内面: ハケメ後×状罫目	
33	533	B区溝	B-FT 溝III層下	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ナデ 内面: ナデ後飾工具による罫目 (5本/2.3cm)	
33	534	B区溝	B-FG 区溝上部	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 長石及び砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ押え 内面: ナデ後罫目 (5本/1cm)	
33	535	B区溝	B-FG II区III層溝	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: ハケメ後ナデ・ユビ押え、口縁部はヨコナデ 内面: ハケメ後×状罫目	
33	536	B区溝	B-FG 区溝最上部	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ナデ・ユビ押え、口縁部はヨコナデ 内面: ハケメ後罫目 (5本) 後×状罫目	
33	537	B区溝	B-FG 区溝最上部	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 長石及び砂粒を含む灰色 外面: ハケメ後ナデ・ユビ押え、口縁部はヨコナデ 内面: ハケメ後×状罫目	35 図-5
33	538	B区溝	B-FT	中世須恵器	鉢	23.2	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: ハケメ後ナデ・ユビ押え、口縁部はヨコナデ、腰部横方向ケズリ 内面: ハケメ	34 図-4
33	539	B区溝	B-FG 区II層	中世須恵器	鉢	(25.0)	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: ハケメ後ナデ・ユビ押え 内面: ハケメ	
33	540	B区溝	B-FG 区II層	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 長石及び砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ押え、口縁部ヨコナデ、腰部横方向ケズリ、底面に山形タタキ 内面: ハケメ、口縁部はヨコナデ、外に開く	
33	541	B区溝	B-FG3区溝3層	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ハケメ後ナデ・ユビ押え、口縁部はヨコナデ 内面: ハケメ、口縁部はヨコナデ	
33	542	B区溝	B-FT II層	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ハケメ後ナデ・ユビ押え 内面: ハケメ	
33	543	B区溝	B-FT II層	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ押え 内面: ハケメ	
33	544	B区溝	B-FG 区溝最上部	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ユビ押え 内面: ハケメ 焼成: やや不良	
33	545	B区溝	B-FG 区II層	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ハケメ後ナデ・ユビ押え 内面: ハケメ	
34	546	B区溝	B-FT 第2層	中世須恵器	搦鉢	-	11.5	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ユビ押え、腰部横方向のケズリ 内面: ハケメ後×状罫目 焼成: やや不良	
34	547	B区溝	B-FT 第2層	中世須恵器	搦鉢	-	12.4	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: ナデ・ユビ押え、腰部横方向のケズリ、ナデ・ユビ押え 内面: ハケメ後×状罫目	35 図-6
34	548	B区溝	B-FG 溝	中世須恵器	搦鉢	-	14.6	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: 腰部横方向のケズリ、ナデ・ユビ押え 内面: ハケメ後×状罫目	
34	549	B区溝	B-FT 溝3層下	中世須恵器	搦鉢	-	11.0	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: 腰部横方向のケズリ 内面: ハケメ後×状罫目	
34	550	B区溝	B-FG 区3層	中世須恵器	搦鉢	-	11.8	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: 腰部横方向のケズリ 内面: ハケメ後格子状罫目	
34	551	B区溝	B-FG 区II層	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 長石を含む赤灰色・内外器壁は灰色 外面: ハケメ後ナデ・ユビ押え、腰部横方向のケズリ 内面: ハケメ後格子状罫目	
34	552	B区溝	B-FT II層	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: ハケメ後ナデ・ユビ押え、腰部横方向のケズリ 内面: ハケメ後格子状罫目	
34	553	B区溝	B-FG 区溝上部	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ナデ 内面: ナデ後罫目 (6本/1.8cm)	
34	554	B区溝	B-FG 区溝最上部	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: 腰部横方向のケズリ 内面: ハケメ後罫目 (6本/1.6cm)	
34	555	B区溝	B-FG II区III層溝	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: 腰部横方向のケズリ 内面: ハケメ後×状罫目	
34	556	B区溝	B-FT2層	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: 腰部横方向のケズリ 内面: ハケメ後×状罫目	
34	557	B区溝	B-FG 区溝上部	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: 腰部横方向のケズリ 内面: ハケメ後×状罫目	
34	558	B区溝	B-FT2層	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: 腰部横方向のケズリ 内面: ハケメ後×状罫目	

押図 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (原本調査時)	種別	器種	法量 (cm)	分類 (※大:大宰府編年)	年 代	形態の特徴・製作技法等	果 22 集 掲載No
34	559	B区溝	B-FG区3層	中世須恵器	鉢	口径 - 底径 11.0	在池		胎土:長石を含む赤灰色・内外器壁は灰色 外面:ナデ・ユビ押え、腰部横方向のケズリ 内面:ハケメ	
34	560	B区溝	B-FG区溝最上部	中世須恵器	鉢	- - 10.4	在池		胎土:砂粒を含む灰白色 外面:ナデ・ユビ押え、腰部横方向のケズリ 内面:ハケメ	
34	561	B区溝	B-FG3区溝III層	瓦質土器	蓋	- - -	在池		胎土:砂粒を含む灰色 内外面:ナデ	
34	562	B区溝	B-FG 3区溝III層	磁器染付	碗蓋	9.2 2.9 3.4	肥前系	18c後半	高台端部軸置きとり 量付に砂付着 外面:丸文	
34	563	B区溝	B-FT II層	磁器染付	碗	- - 3.8	肥前系	18c後半	高台外面に二重圈線	
34	564	B区溝	B-FT II層	陶器	碗	- - -	一勝地	1820年代~幕末	高台端部軸置きとり	
34	565	B区溝	B-EF III層	陶器	皿	13.8 - -	肥前:内野山窯	17c末~18c前半	内外面:銅線かけ流し	
34	566	B区溝	B-FG区II層	陶器	皿	- - 4.6	肥前	18c前半	内面:蛇の目軸調ぎ・打脚目 透明釉 外面下位露胎	
35	567	B区溝最下層 IV層	B-FT 溝内4層上	土師器	坏	- - (8.8)			色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ	
35	568	B区溝最下層 IV層	B-FG3区溝4層	土師器	坏	(9.4) 2.7 (6.4)			色調:浅黄橙色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	569	B区溝最下層 IV層	B-FG3区溝4層	土師器	坏	(12.4) 3.5 (6.8)			色調:橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	570	B区溝最下層 IV層	B-FG3区溝4層	土師器	坏	13.0 2.7 9.6			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し 内底:強い回転痕	31図-2
35	571	B区溝最下層 IV層	B-FT 溝4層	土師器	坏	13.0 3.0 8.0			色調:浅黄橙色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	31図-7
35	572	B区溝最下層 IV層	B-FG3区溝4層	土師器	坏	(13.2) - -			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 内外面に指痕	
35	573	B区溝最下層 IV層	B-FG2溝第4層	土師器	坏	13.6 2.1 7.6			色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒砂を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	31図-12
35	574	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	坏	- - (7.0)			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を多く含む 調整:内外面回転ナデ	
35	575	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	坏	- - (6.8)			色調:にぶい橙色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	576	B区溝最下層 IV層	B-FG3区溝4層	土師器	坏	- - (6.6)			色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し・籠状狂痕	
35	577	B区溝最下層 IV層	B-FG3区4層	土師器	坏	- - (6.4)			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	578	B区溝最下層 IV層	B-FG3区溝4層	土師器	坏	- - (8.0)			色調:浅黄橙色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	579	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	坏	- - (8.8)			色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	580	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	坏	- - (9.0)			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	581	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	坏	- - (9.0)			色調:にぶい黄橙色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し 内底に回転痕	
35	582	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	坏	- - (8.8)			色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	583	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	坏	- - (9.0)			色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	584	B区溝最下層 IV層	B-FG3区溝4層	土師器	小皿	(6.4) 1.3 (4.4)			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し 口唇にスス付着	
35	585	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	小皿	(6.6) 1.6 (5.0)			色調:にぶい黄橙色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	586	B区溝最下層 IV層	B-FG3区溝4層	土師器	小皿	6.8 1.4 5.2			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し・板目正	
35	587	B区溝最下層 IV層	B-FT 溝内4層上	土師器	小皿	(7.0) 1.1 (5.4)			色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	

挿入 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高 底径				
35	588	B区溝最下層 IV層	B-FG3区溝4層	土師器	小皿	(7.0)	1.3 (4.6)			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	589	B区溝最下層 IV層	B-FG3区溝4層	土師器	小皿	(7.0)	1.3 (4.4)			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	590	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	小皿	(7.6)	1.1 (5.6)			色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	591	B区溝最下層 IV層	B-FT溝4層	土師器	小皿	(7.8)	1.4 (6.0)			色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	592	B区溝最下層 IV層	B-FG2溝4層	土師器	小皿	(7.8)	1.2 (5.6)			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	593	B区溝最下層 IV層	B-FT溝4層	土師器	小皿	7.8	1.1 5.4			色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し・板目圧痕	
35	594	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	小皿	(8.0)	1 (5.8)			色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	595	B区溝最下層 IV層	B-FT溝4 上部	土師器	小皿	8.0	1.6 5.6			色調:灰白色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	31 図-20
35	596	B区溝最下層 IV層	B-FT溝4層上部	土師器	小皿	8.0	1.4 6.2			色調:灰白色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	31 図-21
35	597	B区溝最下層 IV層	B-FT溝IV層	土師器	小皿	(8.2)	1.3 (6.6)			色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	598	B区溝最下層 IV層	B-FT溝内4層上	土師器	小皿	(8.2)	1.2 (5.8)			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	599	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	小皿	(8.2)	1.2 (6.2)			色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	600	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	小皿	(8.2)	1.6 (5.6)			色調:にぶい黄橙色 胎土:2mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	601	B区溝最下層 IV層	B-FT溝IV層	土師器	小皿	(8.4)	0.9 (6.4)			色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し・板目圧痕	
35	602	B区溝最下層 IV層	B-FT溝内4層上	土師器	小皿	(8.4)	1.5 (7.2)			色調:灰白色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ	
35	603	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	小皿	(8.6)	1.4 (6.6)			色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ	
35	604	B区溝最下層 IV層	B-FT溝内4層上	土師器	小皿	(8.6)	1.1 (6.0)			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	605	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	小皿	8.6	1.6 7.0			色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	606	B区溝最下層 IV層	B-FT溝4層	土師器	小皿	(8.8)	1.1 (6.0)			色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	607	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	小皿	(8.8)	1.5 (7.0)			色調:にぶい黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	608	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	小皿	8.8	1.4 6.0			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	31 図-19
35	609	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	小皿	9.0	1.6 7.2			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	610	B区溝最下層 IV層	B-FT溝4層上部	土師器	小皿	9.4	0.9 6.2			色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	31 図-17
35	611	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層	土師器	小皿	(10.6)	1.2 (9.0)			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	612	B区溝最下層 IV層	B-FT溝内4層上	土師器	小皿	-	- (4.8)			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
35	613	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	土師器	小皿	-	- (6.0)			色調:にぶい黄橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	

押図 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高 底径				
35	614	B区溝最下層 IV層	B-FG3区溝4層	青磁	碗	17.0	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精 釉：灰色	32図-2
35	615	B区溝最下層 IV層	B-F溝IV層	青磁	碗	16.4	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・灰色 釉：オリープ灰色	32図-3
35	616	B区溝最下層 IV層	B-FT溝4層上部	青磁	碗	(16.4)	(5.0)	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・灰色 釉：オリープ灰色	32図-7
35	617	B区溝最下層 IV層	B-FT溝4層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・灰白色 釉：オリープ灰色	
35	618	B区溝最下層 IV層	B-FT溝4層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・灰白色 釉：オリープ灰色	
35	619	B区溝最下層 IV層	B-FG溝4層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・灰色 釉：青灰色	
35	620	B区溝最下層 IV層	B-FG 3区4層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・灰色 釉：青灰色	
35	621	B区溝最下層 IV層	B-FT溝4層	青磁	碗	-	5.0	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・灰色 釉：灰オリープ色、豊付～高台内は無釉 内底：草花文	
35	622	B区溝最下層 IV層	B-FT溝4層上部	青磁	碗	-	-	龍泉窯系D2類	15c. 中葉～後半	胎土：精・灰色 釉：緑灰色	
36	623	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	青磁	皿	10.8	2.5	同安窯系	12c. 後葉～13c. 初頭	胎土：精・灰色 釉：灰色、底面無釉	33図-6
36	624	B区溝最下層 IV層	B-FG3区4層溝	白磁	合子(身)	8.8	2.0	合子身		胎土：精・灰色 釉：灰色、受部と外面下部～底部にかけて無釉	33図-4
36	625	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層	白磁	四耳壺	-	7.2	四耳壺Ⅲ類(大)	13c	胎土：精・灰色 釉：灰色、底部外面付近から無釉	33図-7
36	626	B区溝最下層 IV層	B-FT溝内4層上 部②	陶器	碗(天目)	10.2	-	中国・天目	13c～14c	胎土：精・黒色粒子を多量に含む灰色 釉：天目釉(ねっとり) 胴下半は露胎 口縁すっぽん口 非建蓋	
36	627	B区溝最下層 IV層	B-FG3区溝4層	陶器	四耳壺	13.4	-	楊柳四耳壺	15～16c	胎土：やや精・灰白色 釉：褐色	35図-1
36	628	B区溝最下層 IV層	B-FT溝4層	陶器	甕	-	-	甕Ⅱ類(大)?	13c	胎土：粗・白色砂粒を多く含む灰色 釉：外面かけ流し	
36	629	B区溝最下層 IV層	B-FG3区4層	中世須恵器	壺	-	-	在地		胎土：砂粒を含む灰色・縮状 外面：格子タタキ(3mm) 内面：横ヨコナデ及びハケメ	
36	630	B区溝最下層 IV層	B-FG3区溝4層	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土：砂粒を含む灰色・縮状 外面：ナデ、ユビ押え、口縁部はヨコナデ 内面：ハケメ後日目	
36	631	B区溝最下層 IV層	B-FT溝内4層上 部	中世須恵器	鉢	24.0	-	在地		胎土：長石・卵石を含む灰色 外面：ハケメ後ナデ・ユビ押え、口縁部はナデ後ハケメ 内面： ハケメ	35図-4
36	632	B区溝最下層 IV層	B-FT溝内4層上 部	中世須恵器	鉢	20.0	-	在地		胎土：砂粒を含む灰色 外面：ハケメ後ナデ・ユビ押え、口縁部はヨコナデ 内面：ハケメ	35図-3
36	633	B区溝最下層 IV層	B-FG2区溝4層 上部	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土：砂粒を含む灰色 外面：ナデ・ユビ押え、口縁部はヨコナデ 内面：ハケメ、口縁部はヨ コナデ	
36	634	B区溝最下層 IV層	B-FT溝内4層上 部	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土：砂粒を含む灰色 外面：ナデ、ユビ押え、口縁部はヨコナデ 内面：ハケメ、口縁部はヨ コナデ	
36	635	B区溝最下層 IV層	B-FT溝上4層上 部	石製品	石鍋	(21.3)	-			滑石 外面：縦位の工具痕(3～5mm) 内面：横位の細かい工具痕	36図-4
36	636	B区溝最下層 IV層	B-FT溝IV層	石製品	石鍋	(15.3)	-			滑石 外面：スス付着 内面：縦位の細かい工具痕	36図-3
38	637	A区出土遺物	A-A1層	土師器	坏	11.0	2.6			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
38	638	A区出土遺物	A-?層	土師器	坏	(13.6)	2.8			色調：にぶい橙色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
38	639	A区出土遺物	A-AT1層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土：精・暗灰色 釉：褐色、無錫蓮弁文	
38	640	A区出土遺物	A-AT1層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系C2類	15c. 前～中葉	胎土：精・灰白色 釉：オリープ灰色 雷帯文 体部に連弁文	38図-19
38	641	A区出土遺物	A-DT西側3層	中世須恵器	瓶	-	-	在地		胎土：砂粒を含む灰白色 外面：ハケメ後ナデ 内面：ハケメ後ナデ	

挿入 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等		県22集 掲載No
						口径	器高			底径	器底	
38	642	A区出土遺物	A-CT	瓦質土器	火舎	44.4	15.8	30.4	1840～1860年代	胎土: 砂粒を含む灰色 罫上面・側面にバスタンプ、体部に山形タタキ後ナデ	内面: ナデ	7図-8
38	643	A区出土遺物	A-AT 1層	磁器染付	碗(端反)	-	-	4.0	1680～1740年代	内底: 斜格子文 外面: 二重格子文+高台に團縁		
38	644	A区出土遺物	A-AT 1層	磁器染付	小坏	-	-	-	17c末～18c前半	外内面: 透明釉 内底: 蛇の目細過ぎ、高台端部細過ぎ		
38	645	A区出土遺物	A-AT 1層	陶器	碗	-	-	3.8	12c. 後半～13c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰色 釉: オリーブ灰色 内底に片彫蓮花文、暁付～高台内は無		
39	646	B区出土遺物	B-AT 1層	青磁	碗	-	-	6.2	12c. 後半～13c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰色 釉: オリーブ灰色 内底に片彫蓮花文、暁付～高台内は無		
39	647	B区出土遺物	B-AT 1層	青磁	碗	-	-	6.2	12c. 後半～13c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰色 釉: オリーブ灰色 内底に片彫蓮花文、暁付～高台内は無		
39	648	B区出土遺物	B-FT 1層	青磁	碗	-	-	-	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 緑灰色		
39	649	B区出土遺物	B-AT 1層	青磁	碗	-	-	5.2	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰色 釉: オリーブ灰色、暁付～高台内は無釉		
39	650	B区出土遺物	B-AT 1層	青磁	碗	-	-	5.0	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・黒色粒子を少量含む灰色 釉: 緑灰色		
39	651	B区出土遺物	B-FT 1層	青磁	碗	-	-	5.4	15c. 後半～16c. 1/4	胎土: やや粗・黒色粒子を含んだ灰色 釉: 暗緑灰色、高台内は無釉		
39	652	B区出土遺物	B-EF 区 I 層下部	白磁	碗	-	-	-	11c. 後半～12c. 前半	胎土: やや粗・黒色粒子を少量含む灰色 釉: 灰色 内面: 脚目文		
39	653	B区出土遺物	B-G 1層	白磁	皿	-	-	5.0	11c. 後半～12c. 前半	胎土: 精・灰色 釉: 灰色、底部細は施釉後に削り取る 内底: 筒描き草花文		
39	654	B区出土遺物	B-CT 1層	白磁	皿	-	-	-	13c. 後半～14c. 初頭	胎土: 灰白色 釉: 灰白色、口禿		
39	655	B区出土遺物	B-CT 1層	白磁	皿	10.4	2.5	4.8	15c. 後半	口縁端反り 胎土: 精・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: 灰白色、高台端部細過ぎ		
39	656	B区出土遺物	B-AT 1層	白磁	合子蓋	-	-	-	13～14c	胎土: 粗・黒色粒子・長石を含む灰白色 (ざらざら) 釉: 緑灰色 外面: 貼付文		
39	657	B区出土遺物	B-ET 1層	磁器染付	皿	-	-	4.0	15c. 後半～16c. 初頭	胎土: やや粗・黒色粒子を少量含む灰色 釉: 灰色		
39	658	B区出土遺物	B-EF 区 I 層下部	陶器	四耳壺	-	-	-	15～16c	胎土: やや粗・灰白色 釉: 褐色		
39	659	B区出土遺物	B-AO 区第1層 (表土)	陶器	甕	-	-	-	13 c	胎土: 白色砂粒を多く含む灰色 外面: 釉かけ無し		
39	660	B区出土遺物	B-EF 区 I 層下部	陶器	碗 (天目)	-	-	-	13c～14c 初頭	胎土: 粗・黒色粒子・長石を含む灰白色 (ざらざら) 釉: 天目釉		
39	661	B区出土遺物	B-AD 区第1層(表 土)	石製品	石鍋	17.3	-	-		滑石 外面: 縦位の工具痕 (3～5 mm)、罫下に穿孔	36図-1	
39	662	B区出土遺物	B-FT 1層	石製品	石鍋	-	-	-		滑石 外面: 縦位の工具痕	36図-2	
39	664	B区出土遺物	B-FT 1層	磁器染付	皿	-	-	7.8	1690～1730年代	外面: 團縁 内底に草花文		
39	665	B区出土遺物	B-FT 1層	磁器染付	小坏	6.4	3.7	3.0	17c 後半	暁付細過ぎ		
39	666	B区出土遺物	B-EF 区 I 層下部	白磁	小坏	-	-	2.6	17c末～18c 前半	暁付細過ぎ		
39	667	B区出土遺物	B-AT 1層	磁器染付	蓋	-	1.1	4.2	18c 後半	コンニャク印刷、受部は無釉		
39	668	B区出土遺物	B-CT 1層	陶器	皿	-	-	-	1610～1650年代	透明釉		
40	670	C区出土遺物	C-AT 1層	土師器	坏	(11.8)	3.2	(7.0)		色調: にぶい浅黄褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り無し	38図-13	
40	671	C区出土遺物	C区トレンチ内 (表土)	土師器	坏	(12.6)	2.7	(8.2)		色調: 内・外面浅黄褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 外面ナデ糸切り 内面ナデ口縁を打 ち欠く		
40	672	C区出土遺物	C-AT 1層	土師器	坏	12.8	4.0	6.6		色調: 灰白色 胎土: 赤色粒砂を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り無し	38図-15	
40	673	C区出土遺物	C-AT 1層	土師器	坏	(13.4)	3.4	(8.8)		色調: 灰白色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り無し		
40	674	C区出土遺物	C-BT 1層	土師器	坏	-	-	(8.8)		色調: 浅黄褐色 胎土: 2mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り無し		
40	675	C区出土遺物	C-AT 1層	土師器	坏	-	-	8.4		色調: にぶい褐色 胎土: 2mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り無し		
40	676	C区出土遺物	C区トレンチ内(表土)	土師器	小皿	6.8	2.6	4.4		色調: にぶい褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り無し	38図-12	
40	677	C区出土遺物	C-AT 1層	土師器	小皿	(7.0)	2.3	(4.5)		色調: にぶい褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り無し		
40	678	C区出土遺物	C-AT 1層	土師器	小皿	(7.2)	2.4	(5.0)		色調: にぶい褐色 胎土: 2mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り無し		
40	679	C区出土遺物	C区トレンチ表土	土師器	小皿	(7.0)	1.1	(5.8)		色調: にぶい浅黄褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り無し	38図-7	
40	680	C区出土遺物	C区トレンチ表土	土師器	小皿	7.2	1.4	5.4		色調: 灰白色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り無し	38図-5	
40	681	C区出土遺物	C-AT 1層	土師器	小皿	7.6	1.8	4.0		色調: にぶい褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り無し		
40	682	C区出土遺物	C区トレンチ内(表土)	土師器	小皿	7.6	1.6	4.6		色調: 褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り無し	38図-4	
40	683	C区出土遺物	C-AT 1層	土師器	小皿	(7.8)	1.2	(6.4)		色調: にぶい浅黄褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り無し		
40	684	C区出土遺物	C-AT 1層	土師器	小皿	(8.0)	1.5	(5.6)		色調: にぶい褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り無し		

押図 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (原本調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等		県22集 掲載No
						口径	器高 底径			色調: 色調: 胎土: 胎土: 調整: 調整: 内外面回転ナデ 内外面回転ナデ	色調: 色調: 胎土: 胎土: 調整: 調整: 内外面回転ナデ 内外面回転ナデ	
40	685	C区出土遺物	C-AT I層	土師器	小皿	8.0	1.4 5.6			色調: にぶい橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	38図-8	
40	686	C区出土遺物	C-BT	土師器	小皿	8.0	1.1 5.5			色調: にぶい橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	38図-9	
40	687	C区出土遺物	C-BT1層	土師器	小皿	8.0	1.8 6.0			色調: にぶい浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し・板目 庄痕 内底: 静止ナデ	38図-10	
40	688	C区出土遺物	C-BT I層	土師器	小皿	8.2	1.3 7.0			色調: 浅黄褐色 胎土: 赤色粒子を粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	38図-6	
40	689	C区出土遺物	C区トレンチ内表 土	土師器	小皿	8.4	1.1 5.6			色調: にぶい橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
40	690	C区出土遺物	C-AT I層	土師器	小皿	(8.4)	1.5 (5.8)			色調: にぶい橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
40	691	C区出土遺物	C-AT I層	土師器	小皿	(8.4)	1.4 (6.4)			色調: にぶい橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
40	692	C区出土遺物	C-AT I層	土師器	小皿	(8.4)	1.5 (6.0)			色調: にぶい橙色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
40	693	C区出土遺物	C-BT1層	土師器	小皿	8.4	1.3 5.4			色調: にぶい浅黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
40	694	C区出土遺物	C-BT1層	土師器	小皿	8.6	1.6 6.0			色調: にぶい浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	38図-1	
40	695	C区出土遺物	C-AT I層	土師器	小皿	(8.8)	1.6 (7.0)			色調: にぶい浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
40	696	C区出土遺物	C-AT I層	土師器	小皿	(9.0)	1.5 (6.6)			色調: にぶい浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
40	697	C区出土遺物	C-AT I層	土師器	小皿	(9.0)	1.3 (7.0)			色調: にぶい浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
40	698	C区出土遺物	C-AT I層	土師器	小皿	9.0	1.4 7.0			色調: 浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
40	699	C区出土遺物	C-BT1層	土師器	小皿	9.0	1.6 6.0			色調: にぶい浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	38図-2	
40	700	C区出土遺物	C区トレンチ内(表土)	土師器	小皿	-	- 4.0			色調: にぶい浅黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	38図-11	
40	701	C区出土遺物	C-AT I層	青磁	碗	-	6.2	龍泉窯系A類	12c. 後葉～13c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: オリーブ灰色		
40	702	C区出土遺物	C-BT1層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系A類	12c. 後葉～13c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: オリーブ灰色		
40	703	C区出土遺物	C区トレンチ内(表土)	青磁	碗	-	-	龍泉窯系A2類	12c. 後葉～13c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: オリーブ灰色		
40	704	C区出土遺物	C区トレンチ内 (表土)	青磁	碗	-	-	龍泉窯系A4類	12c. 後葉～13c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: オリーブ灰色		
40	705	C区出土遺物	C区トレンチ内(表土)	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: オリーブ灰色		
40	706	C区出土遺物	C-DT I層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: オリーブ灰色		
40	707	C区出土遺物	C-BT I層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: やや精・長石・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: オリーブ灰色		
40	708	C区出土遺物	C-B	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・長石・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: オリーブ灰色		
40	709	C区出土遺物	C-DT	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・長石・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: オリーブ灰色	38図-18	
40	710	C区出土遺物	C-CT ?	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・長石・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: 明緑灰色		
40	711	C区出土遺物	C-DT	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: オリーブ灰色、單付～高台内は無釉		
40	712	C区出土遺物	C-AT I層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: オリーブ灰色、單付～高台内は無釉		
40	713	C区出土遺物	C区トレンチ内(表土)	青磁	皿	-	5.2	龍泉窯系B1類	13c. 後半～14c. 前半	胎土: 精・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: オリーブ灰色、單付～高台内は無釉		
40	714	C区出土遺物	C-DT I層	青磁	盤	-	-	折縁皿	13c. 後半～14c. 前半	胎土: 精・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: 明緑灰色		
40	715	C区出土遺物	C-AT I層	青磁	盤	-	-	折縁盤	13c. 後半～14c. 前半	胎土: 精・黒色粒子を少量含む暗灰色 火を受けている		
40	716	C区出土遺物	C-BT I層	青磁	皿	11.0	-	同安窯系	12c. 後葉～13c. 初頭	胎土: 精・灰色 釉: 透明なオリーブ灰色 内底: 飾状の施文具による文様		
40	717	C区出土遺物	C-BT I層	白磁	碗	-	-	白磁碗IX類	13c. 中～初頭	胎土: 灰白色 釉: 灰白色、口禿		
40	718	C区出土遺物	C-AT	白磁	皿	-	-	白磁皿IX類	13c. 後半～14c. 初頭	胎土: 黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: 灰白色、口禿		
40	719	C区出土遺物	C-AT	白磁	瓶	-	-	白磁海瓶	13c. 中頃～14c. 初頭	胎土: 精・長石・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: 明緑灰色		
40	720	C区出土遺物	C区トレンチ内 I 層	白磁	合子(身)	-	-	合子身		胎土: 精・灰白色 釉: 青みのある灰色、受部と体部下半は無釉	38図-20	
40	721	C区出土遺物	表探	白磁	四耳壺	-	-	四耳壺皿類(大)	13c	胎土: 精・長石・黒色粒子を含む灰白色 釉: 灰色		
40	722	C区出土遺物	C-BT I層	磁器染付	皿	-	-	内湾大皿	16c. 後半	胎土: 精・黒色粒子を少量含む暗灰色 高台端部掻き取り		
40	723	C区出土遺物	I層	磁器染付	皿	-	-	内湾大皿	16c. 後半	胎土: 精・黒色粒子を少量含む暗灰色 高台端部掻き取り		
40	724	C区出土遺物	C-AT	磁器染付	皿	-	-	染付皿F群	16c. 末～17c. 初頭	内面: 青海波文		
40	725	C区出土遺物	C-BT I層	陶器	壺	-	7.8	中国・陶壺		胎土: やや精・長石・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉: 褐釉		
41	726	C区出土遺物	C-BT	常滑	甕	-	-	4型式	1190～1210年	胎土: 長石及び砂粒を含む		

押図 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高 底径				
41	727	C区出土遺物	C-CT I層	常滑	甕	-	-	5型式	1210～1250年	胎土:長石・黒色粒子・砂粒を含む	
41	728	C区出土遺物	C-AT	常滑	甕	-	-	6a型式	1250～1275年	N字状口縁 胎土:長石及び砂粒を含む	
41	729	C区出土遺物	C区トレンチ内表 土	常滑	甕	-	-	6a型式	1250～1275年	N字状口縁 胎土:長石及び砂粒を多く含む、自然釉がかかる	
41	730	C区出土遺物	C-CT I層	常滑	甕	-	-	7型式	1300～1350年	N字状口縁 胎土:長石及び砂粒を多く含む	
41	731	C区出土遺物	C-CT I層	常滑	甕	-	-			胎土:長石及び砂粒を多く含む、外体部にスタンプ	
41	732	C区出土遺物	C-DT I層	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土:砂粒を含む灰色 外面:ハケメ後ナデ、腰部横方向のケズリ 内面:ハケメ後罨目 本(1.7cm)	638図-16
41	733	C区出土遺物	C区トレ表土	磁器染付	碗	-	-	肥前系	18c後半	四面に丸文を配置	
41	734	C区出土遺物	C-DT I層	磁器染付	碗	-	-	肥前系	18c後～19c		
41	735	C区出土遺物	C-DT I層	磁器染付	碗	-	-	肥前系	18c後～19c	外面:口縁2重圏線、草花文 内面:口縁2重圏線、内底1重圏線 フォルムが歪む	
41	736	C区出土遺物	C-AT I層	磁器染付	碗	-	3.2	肥前	1710～1750年	内外面:菊花文 量付無釉	
41	737	C区出土遺物	C-AT I層	磁器染付	碗(小丸)	6.2	2.6	肥前系	1700～1750年代	外面:窪 高台に砂付着	
41	738	C区出土遺物	C区トレ表土	磁器染付	小杯	7.0	-	肥前	18c?	口縁下位に1重圏線	
41	739	C区出土遺物	C-AT I層	磁器染付	小杯	-	-	肥前	1680～1740年	外面:草花文 量付無釉	
41	740	C区出土遺物	C-DT	磁器染付	小杯	-	2.8	肥前	1680～1740年	高台に2重圏線	
41	741	C区出土遺物	C-AT I層	磁器染付	小杯	-	2.8	肥前	1680～1740年	二次焼成	
41	742	C区出土遺物	C区トレンチ内表 土	白磁	小杯	6.8	-	肥前	1650～1660年	体部下半は露胎	
41	743	C区出土遺物	C区トレンチ内表 土	白磁	小杯	7.0	-	肥前	1680～1740年		
41	744	C区出土遺物	C-BT I層	白磁	小杯	-	3.0	肥前	1650年代頃	高台内も施釉、砂目痕	
41	745	C区出土遺物	C区トレンチ内表 土	磁器染付	皿	-	4.0	肥前	1850～1860年代	内底:蛇の目軸刺ぎ	
41	746	C区出土遺物	C-AT I層	陶器	碗	6.0	5.1	一勝地	1820年代～幕末	高台端部軸刺ぎとり	
41	747	C区出土遺物	C-DT	陶器	碗	-	-	肥前:内野山窯	17c末～18c前半	外面:銅緑釉 内面:黄灰釉	
41	748	C区出土遺物	C-BT I層	陶器	皿	-	-	肥前:内野山窯	17c末～18c前半	内面:銅緑釉 内底:蛇の目軸刺ぎ 外面:透明釉	
41	749	C区出土遺物	C-AT I層	陶器	皿	-	-	肥前	17c後半	内面:白化粧土を刷毛塗り後、鉄絵	
42	750	注記不明	注記無	土師器	杯	(11.6)	2.7			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
42	751	注記不明	注記無	土師器	杯	12.4	2.8			色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
42	752	注記不明	注記無	土師器	杯	(12.8)	2.9	(10.0)		色調:灰白色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
42	753	注記不明	記不	土師器	杯	(13.0)	2.5	(8.0)		色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
42	754	注記不明	記不	土師器	杯	(13.2)	2.6	(7.6)		色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
42	755	注記不明	注記無	土師器	杯	(14.0)	3.0	(9.4)		色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
42	756	注記不明	注記無	土師器	杯	-	-	(8.2)		色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
42	757	注記不明	注記無	土師器	杯	-	-	8.6		色調:浅黄橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
42	758	注記不明	注記無	土師器	杯	-	-	9.4		色調:にぶい浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
42	759	注記不明	蓮花寺	土師器	小皿	8.0	2.1	4.6		色調:橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
42	760	注記不明	記不	土師器	小皿	(8.2)	1.4	(5.6)		色調:にぶい浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
42	761	注記不明	注記無	土師器	小皿	(9.0)	1.5	(6.0)		色調:浅黄橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
42	762	注記不明	注記無	土師器	小皿	(9.2)	1.8	(7.0)		色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
42	763	注記不明	注記無	土師器	小皿	-	-	(4.8)		色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
42	764	注記不明	注記不明	青磁	碗	-	-		12c.後葉～13c.初頭	"胎土:精・長石、黒色粒子を少量含む灰白色 釉:灰オリープ色 外面:縦に飾目、その後片彫り蓮花文 内面:飾目、草花文"	
42	765	注記不明	注記不明	青磁	碗	-	-		12c.後葉～13c.初頭	胎土:精・長石、黒色粒子を少量含む灰白色 釉:灰オリープ色	
42	766	注記不明	注記無	青磁	碗	16.5	-		13c.中葉～14c.前半	胎土:精・長石、黒色粒子を少量含む 釉:厚い・オリープ灰色	
42	767	注記不明	注記不明	青磁	碗	-	-		13c.末葉～14c.前半	胎土:精・長石、黒色粒子を少量含む 釉:厚い・オリープ灰色 施釉後、高台端部掻き取り	
42	768	注記不明	注記不明	白磁碗V類	碗	-	-		11c.後半～12c.前半	胎土:精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉:灰白色	

押号 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (原本調査時)	種別	器種	口径	器高	底径	分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
42	769	注記不明	注記無	白磁	皿	9.5	2.7	5.3	白磁ⅢX類	13c.後半～14c.初頭	口禿 胎土:精・灰色 釉:灰白色、体部下半無釉	
42	770	注記不明	注記不明	白磁	皿	-	-	-	白磁ⅢX類	13c.後半～14c.初頭	胎土:黒色粒子を少量含む灰白色 釉:灰白色	
42	771	注記不明	注記無	青花	碗	15.4	5.8	6.4	染付碗B群	15c.中頃～3/4	外面:口縁部付近に二重界線、胴部に風景、高台外面に二重界線 内面:雷文、内底に2重界線 の中に花文 高台端部細掻き取り	
42	772	注記不明	注記不明	磁器染付	碗	-	-	-	染付碗C群	15c.3/4～16c.1/4	海州窯 胎土:精・灰白色、釉にじむ	
42	773	注記不明	注記不明	磁器染付	碗	-	-	-	染付碗C群	15c.3/4～16c.1/4	海州窯 胎土:精・灰白色、釉にじむ	
42	774	注記不明	注記無	磁器染付	皿	12.5	2.9	7.0	染付皿B1群	15c.後半～16c.初頭	宝相花唐草文	
42	775	注記不明	注記無	磁器染付	皿	12.8	2.8	6.4	染付皿B1群	15c.後半～16c.初頭	宝相花唐草文	
42	776	注記不明	注記無	磁器染付	皿	13.0	-	-	染付皿B1群	15c.後半～16c.初頭	宝相花唐草文	
42	777	注記不明	用水路内表サイ	中世須恵器	壺	-	-	-	在地		胎土:砂粒含む暗灰色 外面:格子状タタキ(3mm) 内面:ナデ	38図-21
42	778	注記不明	蓮華寺	磁器染付	碗	-	-	4.2	肥前	18c.前半	外面に草花文 内底に靴の目細網き 畳付けに砂付着	
42	779	注記不明	注記無	磁器染付	小坏	7.5	4.6	3.1	肥前	1680～1740年代	外面に草花文 高台端部に砂付着	
42	780	注記不明	注記不明	磁器染付	小坏	7.0	4.7	3.1	肥前	1680～1740年代	外面に草花文 高台端部に砂付着	
42	781	注記不明	注記不明	磁器染付	瓶	-	-	-	肥前	1780～1860年代	外面に唐唐草	
42	782	注記不明	注記不明	陶器	碗	-	-	-	一勝地	1820年代～幕末		
45	783	東外濠	B区外堀Ⅲ層	土師器	坏	13.0	4.5	6.6			色調:橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	55図-5
45	784	東外濠	B-6T溝状構内	土師器	坏	13.4	3.3	7.8			色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	55図-3
45	785	東外濠	B区外堀Ⅲ層	土師器	坏	14.0	3.0	7.8			色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	55図-4
45	786	東外濠	頼景B区東外堀3層	土師器	坏	13.0	3.5	7.2			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
45	787	東外濠	B-6T溝状構内	土師器	小皿	7.8	1.5	6.4			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	55図-1
45	788	東外濠	B-6T溝状構内	土師器	小皿	(7.8)	1.3	(5.8)			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
45	789	東外濠	B-6T溝状構内	土師器	小皿	(7.8)	1.7	(5.8)			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
45	790	東外濠	東外堀W	土師器	小皿	(8.6)	0.9	(6.2)			色調:浅黄褐色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	55図-2
45	791	東外濠	B区外堀Ⅲ層	土師器	小皿	8.9	3.1	4.6			色調:青色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	55図-7
45	793	東外濠	B区外堀Ⅲ層	青磁	碗	16.6	-	-	龍泉窯系A2類	12c.後葉～13c.初頭	胎土:精・灰白色 釉:灰オリープ色 内面:片影蓮花文	
45	794	東外濠	B-6T溝状構内	青磁	碗	-	-	-	龍泉窯系A4類	12c.後葉～13c.初頭	胎土:やや精・灰黄色 釉:オリープ黄色	
45	795	東外濠	東外堀Ⅲ層	青磁	碗	-	-	7.0	龍泉窯系A類	12c.後葉～13c.初頭	胎土:精・灰白色 釉:灰オリープ色、高台内は無釉	55図-9
45	796	東外濠	東外堀Ⅲ層	青磁	碗	-	-	-	龍泉窯系A2類	12c.後葉～13c.初頭	胎土:精・灰白色 釉:灰オリープ色 内面:片影蓮花文	
45	797	東外濠	東外堀Ⅲ層	青磁	碗	-	-	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉～14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰色、買入あり	
45	798	東外濠	頼景東外堀Ⅲ層 219	青磁	皿	-	-	4.8	同安窯系	12c.後葉～13c.初頭	胎土:精・長石含む灰白色 釉:灰色	
45	799	東外濠	B区外堀Ⅲ層	白磁	碗	-	-	-	白磁碗V類	11c.後半～12c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰色	55図-8
45	800	東外濠	B区東外堀3層	白磁	碗	-	-	-	白磁碗IX類	13c.後半～14c.初頭	胎土:精・灰白色 釉:灰白色、口禿	
45	801	東外濠	B区外堀Ⅲ層	白磁	皿	9.4	1.8	4.4	白磁ⅢVI類	11c.後半～12c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰オリープ色、底部無釉	55図-6
45	802	東外濠	東外堀Ⅲ層	白磁	皿	-	-	-	白磁ⅢVI類	13c.後半～14c.初頭	胎土:精・灰色粒子含む灰白色 釉:灰白色、口禿	
45	803	東外濠	東外堀Ⅲ層	白磁	皿	-	-	-	白磁ⅢVI類	13c.後半～14c.初頭	胎土:精・灰白色 釉:灰白色、口禿	
45	804	東外濠	東外堀Ⅲ層	白磁	皿	-	-	-	白磁ⅢVI類	13c.後半～14c.初頭	胎土:精・黒色粒子含む灰白色 釉:灰白色、口禿	
45	805	東外濠	B区東外堀Ⅲ層	白磁	皿	-	-	6.6	白磁ⅢIX類	13c.後半～14c.初頭	胎土:やや精・灰白色 釉:灰白色、底部まで施釉、口禿	
45	806	東外濠	B区東外堀Ⅲ層	白磁	四耳壺	12.2	-	-	四耳壺Ⅲ類(六)	13c	胎土:やや精・灰白色 釉:灰色	55図-10
45	807	東外濠	B区東外堀Ⅲ層	瀬戸	御皿	-	-	8.8	古瀬戸前筒鉢式 Ⅳ期	13c.後葉	胎土:灰白色 釉:自然釉・灰オリープ色 内底:御目 底部:糸切り痕	52図-17
46	808	東外濠	頼景B区東外堀 Ⅲ層	中世須恵器	甕/壺	-	-	-	在地		胎土:3mmの砂粒を含む灰色 外面:格子状タタキ(3-5mm) 内面:ハケメ	
46	809	東外濠	頼景東外堀Ⅲ層	中世須恵器	甕/壺	-	-	-	在地		胎土:砂粒を含む灰色、葉状 外面:格子状タタキ(3mm) 内面:ハケメ	
46	810	東外濠	B区外堀Ⅲ層	中世須恵器	甕/壺	-	-	-	在地		胎土:2mmの砂粒を含む灰色 外面:体部～底部:山形タタキ 内面:ハケメ	55図-16
46	811	東外濠	頼景B区東外堀3層	中世須恵器	搦鉢	-	-	8.8	在地		胎土:砂粒を含む灰色・縞状 外面:ハケメ後ナデ・ユビ押え 内面:ハケメ後搦目(8本/2.5cm)	

採掘 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (原本編纂番号)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大塚府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等		県22集 掲載No
						口径	器高			底径	在池	
46	812	東外濠	東外堀W層	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 2mmの砂粒を含む灰色	外面: ナデ・ユビ押え 内面: ハケケ	55 図-17
46	814	東外濠	B区外堀3層	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 2mmの砂粒を含む灰色	外面: 腰部横方向ケズリ 内面: ナデのち欄目	
46	815	東外濠	頼景東外堀III層	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色	外面: ナデ・ユビ押え、腰部横方向ケズリ 内面: ハケケ後X状欄目	
46	816	東外濠	頼景東外堀W層	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 赤色粒子を含むいぶい黄褐色	外面: ナデ・ユビ押え 内面: ナデ後欄目 (6本/1.9cm)	
46	817	東外濠	東外堀III層	瓦質土器	鉢	-	-		18c. 中頃～後半	胎土: 2mmの砂粒を含む灰色	外面: 腰部突帯の間に花菱状スタンプ 内面: ハケケ	
46	819	東外濠	B区東外堀III層	磁器染付	碗	-	-	肥前	18c. 後半	外面: 草花文		
46	820	東外濠	B区東外堀III層	磁器染付	碗 (筒型)	-	-	肥前	18c. 後半	外面: 鳥		
46	821	東外濠	B-6T 溝状溝内	陶器	碗	10.0	-	一勝地	1820年代～幕末	端反り口縁、鉄軸		
46	822	東外濠	東外堀III層	陶器	猪口	3.8	2.4	一勝地	1820年代～幕末	色調: 浅黄褐色	胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外面: 糸切離し板目庄痕	55 図-14
47	823	西外濠	S-7G 溝IV層	土師器	坏	13.0	2.9			色調: 浅黄褐色	胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外面: 糸切離し板目庄痕	
47	824	西外濠	S-7G 溝IV層	土師器	小皿	7.6	1.2			色調: 浅黄褐色	胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外面: 糸切り離し	
47	825	西外濠	S-9.8G 溝4層	土師器	小皿	(8.0)	1.3	(6.6)		色調: 浅黄褐色	胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外面: 糸切り離し	
47	826	西外濠	S-9.8G 溝4層	土師器	小皿	(10.0)	1.8	(6.0)		色調: 浅黄褐色	胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外面: 糸切り離し	
47	828	西外濠	S-8.9G 溝IV層	青磁	碗	16.0	-		12c. 後葉～13c. 初頭	胎土: 精・灰白色	釉: 透明な灰オリーブ色 内面: 片彫蓮花文	56 図-5
47	829	西外濠	S-8.9G 溝底	青磁	碗	15.4	-		12c. 後葉～13c. 初頭	胎土: 精・灰白色	釉: 透明な灰オリーブ色 内面: 片彫蓮花文	56 図-4
47	830	西外濠	S-8.9G 溝IV層	青磁	碗	-	-		12c. 後葉～13c. 初頭	胎土: 精・灰白色	釉: 灰オリーブ色	
47	831	西外濠	S-8.9G 溝IV層	青磁	碗	16.0	-		13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色	釉: 灰オリーブ色	56 図-1
47	832	西外濠	A区IT西外堀	青磁	碗	16.0	-		13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色	釉: 灰オリーブ色	56 図-3
47	833	西外濠	S-8.9G 溝IV層	青磁	碗	-	-		13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色	釉: オリーブ灰色、火受けている	
47	834	西外濠	A西堀外濠溝内	青磁	碗	-	-		13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色	釉: オリーブ灰色	
47	835	西外濠	S-8.9G 溝IV層	青磁	碗	-	-		13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰色	釉: 灰オリーブ色	
47	836	西外濠	A西堀外濠溝内	青磁	碗	-	-		13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色	釉: 緑灰色	
47	837	西外濠	S-8.9G 溝IV層	青磁	碗	-	-		13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色	釉: 灰オリーブ色	
47	838	西外濠	S-8.9G 溝IV層	青磁	碗	-	-		13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色	釉: 灰色	
47	839	西外濠	西外堀内	青磁	碗	-	-		13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色	釉: オリーブ灰色	
47	840	西外濠	S-7G 溝IV層	青磁	碗	-	-		13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色	釉: 灰オリーブ色	
47	841	西外濠	A西堀外堀溝内	青磁	碗	15.0	-		13c. 末葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色	釉: 灰色	56 図-2
47	842	西外濠	S-9G III層	青磁	碗	-	-		13c. 末葉～14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色	釉: 緑灰色、火受けている	
47	843	西外濠	S-8.9G 溝IV層	青磁	碗	-	-		13c. 末葉～14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色	釉: 緑灰色、火受けている	
47	844	西外濠	S-? 10溝?層	青磁	碗	-	-		13c. 末葉～14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色	釉: 緑灰色、端反碗・無文 (端反碗III類)	
47	845	西外濠	A区IT西外堀3層	青磁	碗	-	-		15c. 後半～16c. 1/4	胎土: 粗・灰白色	釉: 灰白色、高台内無釉 線刻細蓮弁文 内底: スタンプ	57 図-2
47	846	西外濠	S-8.9G 溝IV層	青磁	碗	-	-		12c. 後葉～13c. 初頭	胎土: 精・長石を含む灰白色	釉: オリーブ黄色 外面: 幅広い粗い縦の欄目文 内面: 欄目の施文による花文	
47	847	西外濠	頼景 S-9G 溝底 215	青磁	碗	-	-		12c. 後葉～13c. 初頭	胎土: 精・長石を含む灰白色	釉: 灰オリーブ色、体部下半は露胎	
47	848	西外濠	S-G 溝4層	青磁	碗	15.0	-		14c. 後半～15c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色、化粧土有り	釉: 灰色	56 図-6
47	849	西外濠	AIT 西外堀III層	青磁	碗	-	-		14c. 後半～15c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色	釉: 灰オリーブ色	
47	850	西外濠	S-8・9G II層	青磁	碗	-	-		14c. 後半～15c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色	釉: 灰色 内底に印花文、高台内無釉	56 図-14
47	851	西外濠	S8-9G 溝IV層	青磁	碗	-	-		15c. 中頃～後半	胎土: 精・長石を含む灰白色	釉: オリーブ灰色、火受けている	61 図-14
48	852	西外濠	西外堀内	青磁	大皿	-	-			胎土: 精・長石を含む灰白色	釉: 緑灰色	
48	853	西外濠	A区IT西外堀	青磁	皿	-	-		13c. 後半～14c. 前半	胎土: 精・黒色粒子を含む灰色	釉: 灰色、無文	
48	854	西外濠	S7G 溝IV層	青磁	皿	-	-		13c. 後半～14c. 前半	胎土: 精・灰白色	釉: 緑灰色、無文	56 図-8
48	855	西外濠	S-8.9G 溝IV層	青磁	皿	-	-		13c. 後半～14c. 前半	胎土: 精・灰白色	釉: 緑灰色	
48	856	西外濠	AIT 西外堀III層	青磁	皿	-	-		13c. 後半～14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色	釉: 灰色、無文	

押図 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	底径				
48	857	西外濠	S-8.9G 溝5層	青磁	皿	-	-	内湾皿Ⅲ類	15c. 中頃	胎土: 精・灰白色 釉: 緑灰色、無文、高台端部軸置きとり	56 図-10
48	858	西外濠	A1T 西外堀Ⅲ層	青磁	香炉	-	-	筒型香炉	南末	胎土: 精・灰白色 釉: 緑灰色	
48	859	西外濠	A 西側外濠溝内	白磁	碗	-	-	白磁碗V類	11c. 後半～12c. 前半	胎土: 精・白灰色 釉: 灰白色、口縁端部端反	
48	860	西外濠	S-8.9G 溝Ⅲ層	白磁	碗	-	6.3	白磁碗Ⅳ類	12c. 中～後半	胎土: 精・白灰色 釉: 灰白色 内底: 蛇の目軸置き	56 図-12
48	861	西外濠	S-8.9G 溝Ⅳ層	白磁	碗	-	-	白磁碗Ⅴ類	13c. 中～初頃	胎土: 精・黒色粒子含む灰白色 釉: 灰白色、口禿	
48	862	西外濠	A 西側外濠溝内	白磁	碗	-	-	白磁碗Ⅵ類	13c. 中～初頃	胎土: 精・黒色粒子含む灰白色 釉: 灰白色、口禿	
48	863	西外濠	西外堀内	白磁	皿	-	7.0	白磁皿Ⅶ類	13c. 後半～14c. 初頃	胎土: 精・黒色粒子含む灰白色 釉: 灰白色、口禿	56 図-16
48	864	西外濠	A 西側外濠溝内	白磁	皿	-	-	白磁皿Ⅷ類	13c. 後半～14c. 初頃	胎土: 精・黒色粒子含む灰白色 釉: 灰白色、口禿	
48	865	西外濠	A 西側外濠溝内	白磁	皿	-	7.2	白磁皿Ⅷ類	15c. 後半	胎土: 精・灰白色 釉: 灰白色、端部口縁、置付軸置きとり	
48	866	西外濠	S-7G 溝Ⅳ層	白磁	梅瓶	-	-	白磁梅瓶	13 c 中頃～14 c 初頃	胎土: 精・長石及び黒色粒子を含む灰白色 釉: 明緑灰色 外面: 肩部に二重沈線・御花文、火受けている	
48	867	西外濠	A1T 西外堀3層	磁器染付	皿	9.8	2.8	染付皿C群	15c. 後半～16c. 初頃	胎土: 精・灰白色 基筒底、化粧土あり、呉須は鈍い色調	57 図-1
48	868	西外濠	A 西側外濠溝内	磁器染付	皿	-	2.1	染付皿C群	15c. 後半～16c. 初頃	胎土: 精・灰白色、化粧土あり、呉須は鈍い色調	
48	869	西外濠	A 西側外濠溝内	磁器染付	皿	-	-	染付皿F群	16c. 末～17c. 初頃	胎土: 精・灰白色、罍皿タイプ	
48	870	西外濠	6-9G Ⅲ層	磁器染付	大鉢	-	-	大鉢	16 c 後半	胎土: 精・灰白色、罍皿タイプ	
48	871	西外濠	西外堀内	陶器	甕	-	-	甕Ⅱ類(大)	13 c	胎土: 白色粒子を多く含む灰白色、釉だれ	
48	872	西外濠	S-8.9G 溝Ⅲ層	陶器	甕	-	-	甕Ⅱ類(大)	13 c	胎土: 白色粒子を多く含む灰白色、釉だれ	
48	873	西外濠	S-8.9G 溝Ⅲ層	瀬戸	瓶子	-	-	古瀬戸前胡蝶式	13c 後半	胎土: 長石を含む灰白色 外面: 灰釉 内面ナデ	
48	874	西外濠	S-8.9 G 溝Ⅲ層	瀬戸	瓶子	-	-	古瀬戸前胡蝶式	13c 後半	胎土: 長石を含む灰白色 外面: 灰釉 内面ナデ	
48	875	西外濠	A 西外堀	中世須恵器	瓶	-	14.0	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ナデ 体部ハケナス、口縁罍上面に巴文スタンプ 内面: ナデ	57 図-3
48	876	西外濠	A 西外堀	瓦質土器	火鉢	-	-	在地	17 c 後半?	胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ナデ 体部ハケナス、口縁罍上面に巴文スタンプ 内面: ナデ	57 図-4
49	880	西外濠	A 西側外濠溝内	磁器染付	碗	10.6	-	肥前	1700～1750年代	口縁内面に一重圓線、見込みに一重圓線、外面に山水文	
49	881	西外濠	A 西側外濠溝内	磁器染付	碗	-	4.0	肥前	1700～1750年代	外面: 二重網目文、高台付近に三重圓線 高台内: 渦福 内側面: 一重網目文、内底に菊花文	
49	882	西外濠	A 西側外濠溝内	磁器染付	小杯	-	3.3	肥前	17 c 後半	外面下位から高台にかけて三重圓線、高台内面に砂付着、置付無軸	
49	883	西外濠	A 西側外濠溝内	磁器染付	小杯	-	2.1	肥前	1650～1680年代	外面下位から高台にかけて三重圓線、高台内面に砂付着、置付無軸	
49	884	西外濠	A区1T 西外堀	白磁	小杯	-	2.6	肥前	1650～1680年代	外面下位から高台にかけて三重圓線、高台内面に砂付着、置付無軸	
49	885	西外濠	西外堀内	陶器	碗	-	4.8	肥前	1610～1650年代	外面下位から高台にかけて三重圓線、高台内面に砂付着、置付無軸	
49	886	西外濠	S-9G 溝Ⅲ層	陶器	碗(天目)	-	-	肥前	17 c 前半	外面下位から高台にかけて三重圓線、高台内面に砂付着、置付無軸	
49	887	西外濠	A 西側外濠溝内	陶器	碗(天目)	-	4.0	肥前	1590～1630年代	外面下位から高台にかけて三重圓線、高台内面に砂付着、置付無軸	
49	888	西外濠	西外堀内	陶器	碗	10.4	-	一勝地	1820年代～幕末	内面～外面中位施釉、外面下位露胎	
49	889	西外濠	A区1T 西外堀	陶器	碗	-	-	一勝地	1820年代～幕末	口縁内外に薑灰釉、その他は鉄釉 胎土: 赤味のある灰色	
49	890	西外濠	A 西側外濠溝内	陶器	皿(京焼風)	-	-	肥前	17 c 後半	口縁端反、灰釉	30 と接合
49	891	西外濠	A区1T 西外堀	陶器	皿	-	6.0	肥前	1650～1690年代	置付無軸、内底: 蛇の目軸置き、砂目、白化粧土による刷毛目文	
49	892	西外濠	S-9G Ⅲ層	陶器	皿	-	4.0	肥前	1590～1610年代	外側面中位から露胎、内底: 胎目跡、灰釉	
49	893	西外濠	S-9 G Ⅲ層	陶器	皿	-	4.8	肥前	1610～1630年代	内底と置付に砂目(3箇所)、外面下位露胎	
49	894	西外濠	S-8.9G Ⅱ層	陶器	皿	-	4.8	肥前	1610～1630年代	内底と置付に砂目(3箇所)、外面下位露胎	56 図-11
49	895	西外濠	S-8.9G2層	陶器	皿	-	-	肥前	1610～1630年代	内面は渦状に鉄釉を掻き取る	
55	896	柱穴No.1	柱穴No.1	土師器	杯	(11.8)	2.1	(8.0)		色調: 浅黄褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
55	897	柱穴No.1	柱穴No.1	土師器	杯	12.4	4.4	7.8		色調: にぶい橙色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し・籾状	53 図-15
55	898	柱穴No.1	柱穴No.1	土師器	杯	12.6	2.6	9.0		色調: 浅黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し・板目正痕	53 図-9
55	899	柱穴No.1	柱穴No.1	土師器	杯	(13.0)	2.7	(7.8)		色調: 灰白色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し・板目正痕	53 図-7
55	900	柱穴No.1	柱穴No.1	土師器	杯	(13.8)	2.5	(8.8)		色調: にぶい橙色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し 内底に強い回転痕	53 図-10
55	901	柱穴No.1	柱穴No.1	土師器	小皿	(8.2)	1.3	(6.0)		色調: にぶい橙色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
55	902	柱穴No.1	柱穴No.1	土師器	小皿	8.4	1.1	6.8		色調: 浅黄褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	

挿入 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)			分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高	底径				
55 903	柱穴No.1	土師器	柱穴No.1	小皿	小皿	8.6	1.1	6.2		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
55 904	柱穴No.1	土師器	柱穴No.1	小皿	小皿	9.0	1.2	6.0		色調:灰白色 胎土:3mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	53図-4	
55 905	柱穴No.1	土師器	柱穴No.1	小皿	小皿	(9.4)	(1.9)	(6.6)		色調:浅黄褐色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	53図-5	
55 906	柱穴No.1	青磁	柱穴No.1	碗	碗	-	-	-	13c.中葉~14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰色		
55 907	柱穴No.1	青磁	甕貫柱穴No.1 220	碗	碗	-	-	5.2	13c.中葉~14c.前半	胎土:精・灰色 釉:緑灰色		
55 908	柱穴No.3	青磁	柱穴No.3	碗	碗	17.0	-	-	13c.中葉~14c.前半	胎土:精・灰色 釉:灰オリーブ色	53図-16	
55 909	柱穴No.4	土師器	柱穴No.4	小皿	小皿	7.8	1.3	5.6		色調:にぶい褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
55 910	柱穴No.4	土師器	柱穴No.4	小皿	小皿	(7.8)	(1.3)	(5.8)		色調:にぶい黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
55 911	柱穴No.4	土師器	柱穴No.4	小皿	小皿	(8.0)	(1.3)	(6.5)		色調:にぶい褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
55 912	柱穴No.4	土師器	柱穴No.4	小皿	小皿	(9.0)	(1.2)	(6.8)		色調:にぶい褐色 胎土:1mmの砂粒及び赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
55 913	柱穴No.4	青磁	柱穴No.4	碗	碗	-	-	-	12c.後葉~13c.初頭	胎土:精・灰オリーブ色 内面に二又片刀による区画、その中に飛雲文		
55 914	柱穴No.4	青磁	柱穴No.4	碗	碗	-	-	-	13c.中葉~14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:緑灰色		
55 915	柱穴No.4	青磁	柱穴No.4	碗	碗	-	-	-	13c.中葉~14c.前半	胎土:精・灰色 釉:灰オリーブ色		
55 916	柱穴No.4	青磁	柱穴No.4	碗	碗	-	-	-	13c.末葉~14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:緑灰色・厚い		
55 917	柱穴No.4	青磁	柱穴No.4	碗	碗	-	-	-	15c.中葉~後半	胎土:やや粗・長石を含む灰色 釉:灰オリーブ色		
55 918	柱穴No.4	陶器	柱穴No.4	碗	碗	-	-	-	1690~1740年代	高台内まで施釉、内外面とも白土打刷毛目 胎土:灰色		
55 919	柱穴No.6	土師器	柱穴No.6	環	環	(12.2)	2.8	(8.0)		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	53図-6	
55 920	柱穴No.6	土師器	柱穴No.6	環	環	(13.0)	3.0	(8.8)		色調:にぶい褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
55 921	柱穴No.6	土師器	柱穴No.6	小皿	小皿	8.6	1.1	6.4		色調:にぶい褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し・板目 圧痕		
55 922	柱穴No.7	青磁	柱穴No.7	盤	盤	-	-	-	13c.後半~14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:緑灰色、無文		
55 923	柱穴No.8	土師器	柱穴No.8	環	環	13.2	3.4	8.4		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒及び赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	52図-14	
55 924	柱穴No.8	土師器	柱穴No.8	環	環	13.4	3.6	7.4		色調:にぶい褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し・板目 圧痕 内底ナデ	53図-12	
55 925	柱穴No.8	土師器	柱穴No.8	環	環	14.6	3.5	10.0		色調:にぶい褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し・板目 圧痕 糸切り紐の痕跡あり	53図-13	
55 926	柱穴No.8	土師器	柱穴No.8	環	環	(14.8)	2.7	(10.0)		色調:にぶい褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
55 927	柱穴No.9	土師器	柱穴No.9	環	環	(13.4)	3.1	(9.0)		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し・板目 圧痕	53図-8	
55 928	柱穴No.12	陶器	柱穴No.12	洗	洗	-	-	-		胎土:粗・黒色粒子及び長石を多く含む暗灰色(そろってない) 釉:灰オリーブ色、火を受けている		
55 929	柱穴No.13	土師器	柱穴No.13	小皿	小皿	(8.6)	1.0	(6.4)		色調:褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
55 930	柱穴No.14	土師器	柱穴No.14	環	環	(13.8)	2.9	(8.4)		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	53図-11	
55 931	柱穴No.15	白磁	柱穴No.15	碗	碗	-	-	-	11c.後半~12c.前半	胎土:やや精・黒色粒子を含む灰白色 釉:灰白色		
55 932	柱穴No.15	白磁?	柱穴No.15	皿?	皿?	12.0	-	-	12c.中頃?	胎土:精・黒色粒子を含む灰白色 釉:灰色 内底:蛇の目細割き		
56 933	柱穴No.17	土師器	柱穴No.17	小皿	小皿	9.6	1.8	6.6		色調:にぶい褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し のち櫛状工具による罫目 (6本/1.6cm)		
56 934	柱穴No.17	中世須恵器	柱穴No.17	掃鉢	掃鉢	-	-	-		胎土:砂粒を含む褐色 外面:ハケメのちナデ・ユビ押え、腰部横方向ケズリ 内面:ハケメ	54図-2	
56 935	柱穴No.21	陶器	柱穴No.21	碗	碗	-	-	5.6	17c末~18c前半	内外面:銅緑釉 量付露胎		
56 936	柱穴No.22	青磁	柱穴No.22	碗	碗	16.0	-	-	13c.中葉~14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:暗オリーブ色・貫入		
56 938	柱穴No.26	青磁	柱穴No.26	碗	碗	-	-	-	13c.中葉~14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:緑灰色		
56 939	柱穴No.26	磁器染付	柱穴No.26	磁器染付	磁器染付	-	-	-	18c後半	外面:銅胎と雲		
56 940	柱穴No.26	陶器	柱穴No.26	皿	皿	-	-	5.2	1590~1610年代	灰釉、外面下位露胎		
56 941	柱穴No.26	陶器	柱穴No.26	皿	皿	-	-	-	17c末~18c前半	内面~外面中位透明釉 内底:蛇の目細割き		

押号 掲載 番号	出土地点・層位 (精査理後)	出土地点・層位 (概本調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
					口径	底径				
56 942	柱穴No.30	柱穴No.30	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉~14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰色・貫入	
56 943	柱穴No.31	柱穴No.31	青磁	碗	-	-	龍泉窯系A類	12c.後葉~13c.初頭	胎土:精・灰白色 釉:灰オリーブ色	
56 944	柱穴No.31	柱穴No.31	青磁	碗	-	5.0	龍泉窯系A類	12c.後葉~13c.初頭	胎土:精・灰白色 釉:灰オリーブ色 高台内無釉	53 図-19
56 945	柱穴No.31	柱穴No.31	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉~14c.前半	胎土:精・黒色粒子を含む灰白色 釉:緑灰色	53 図-17
56 946	柱穴No.31	柱穴No.31	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉~14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰色	
56 947	柱穴No.31	柱穴No.31	中世須恵器	甕・壺	-	-	在地		胎土:3mmの砂粒含む灰色 外面:格子状タタキ (3-5mm) 内面:ハケメ	
56 948	柱穴No.31	柱穴No.31	磁器染付	仏飯	-	4.4	肥前	1690~1800年代	内面~外面下部まで施釉、胴部露胎	
56 949	柱穴No.31	柱穴No.31	陶器	碗	-	4.8	肥前	17c末~18c前半	内面~外面下部位銅緑釉	
56 950	柱穴No.31	柱穴No.31	陶器	皿	-	5.0	肥前	1610~1630年代	灰釉 内底:砂目痕	
56 952	柱穴No.31	柱穴No.31	土師器	風戸	-	-	在地		内外面共ナデ	54 図-1
56 953	柱穴No.33	柱穴No.33	土師器	小皿	8.0	1.5	在地		色調:にぶい褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	53 図-2
56 955	柱穴No.33	柱穴No.33	白磁	皿	-	6.1	白磁ⅢX類	13c.後半~14c.初頭	胎土:黒色粒子を含む灰白色 釉:灰白色	
56 956	柱穴No.34	柱穴No.34	青磁	碗	-	-	龍泉窯系A類	12c.後葉~13c.初頭	胎土:精・灰白色 釉:灰オリーブ色	
56 957	柱穴No.34	柱穴No.34	磁器染付	小杯	7.4	2.8	肥前	1680~1740年	高台付近に三重圏線 墨付に砂付着	
56 958	柱穴No.39	柱穴No.39	白磁	皿	-	5.3	白磁ⅢVI類	11c.後半~12c.前半	胎土:精・褐色粒子を含む灰色 釉:灰色 底面:釉削り取り 内底:草花文	③接合
56 959	柱穴No.41	柱穴No.41	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B0類	13c.後半~14c.前半	胎土:精・灰色 釉:厚・緑灰色 高台内:施釉	
56 960	柱穴No.42	柱穴No.42	土師器	杯	13.1	4.5	在地		色調:にぶい褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	53 図-14
56 961	柱穴No.42	柱穴No.42	土師器	小皿	8.6	1.4	在地		色調:にぶい褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	53 図-1
56 962	柱穴No.42	柱穴No.42	土師器	小皿	8.8	1.3	在地		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	53 図-3
56 963	柱穴No.42	柱穴No.42	白磁	皿	11.4	-	白磁ⅢX類	13c.後半~14c.初頭	胎土:精・黒色粒子を含む灰白色 釉:灰白色、口赤	53 図-21
56 964	柱穴No.42	柱穴No.42	中世須恵器	甕・壺	-	-	在地		胎土:砂粒を含む灰色 外面:山形タタキ 内面:ナデ	
56 965	柱穴No.48	柱穴No.48	中世須恵器	甕・壺	-	-	在地		胎土:砂粒を含む灰白色 外面:山形タタキ後ナデ 内面:ナデ	
56 966	柱穴No.50	柱穴No.50	青磁	碗	-	6.0	龍泉窯系B1類	13c.中葉~14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰色、高台内無釉 内底:「金玉溝堂」	53 図-18
56 967	柱穴No.51	柱穴No.51	常滑	甕	-	-	6a型式	1250~1275年	胎土:長石含む灰色 N状口縁 自然釉掛る	
56 968	柱穴	柱穴	土師器	小皿	(7.8)	1.3			色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し・板目庄	
57 969	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	杯	(12.0)	3.7			色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
57 970	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	杯	(12.2)	2.9			色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
57 971	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	杯	13.0	3.5			色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	54 図-17
57 972	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	杯	13.0	3.4			色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	54 図-18
57 973	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	杯	(13.0)	3.3			色調:浅黄褐色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
57 974	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	杯	(13.0)	3.1			色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
57 975	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	杯	13.8	3.5			色調:にぶい黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	54 図-19
57 976	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	杯	(14.0)	3.4			色調:にぶい黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
57 977	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	杯	(14.0)	3.3			色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	54 図-20
57 978	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	杯	14.0	3.0			色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	54 図-16
57 979	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	杯	16.0	3.5-4.1			色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	54 図-21
57 980	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	杯	-	-			色調:浅黄褐色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
57 981	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	杯	-	-			色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
57 982	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	7.0	1.5			色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
57 983	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	7.2	1.5			色調:にぶい黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	59 図-3
57 984	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	7.4	1.6			色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し 内底:	54 図-8
57 985	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	7.5	1.7			色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	54 図-13
57 986	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	7.5	1.5			色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	54 図-11
57 987	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	7.6	1.6			色調:にぶい褐色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	54 図-7
57 988	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	7.6	1.6			色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	

押図 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)			分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高	底径				
57	989	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	7.6	1.5	6.0		色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	54図-10	
57	990	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	7.6	1.5	5.9		色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	54図-12	
57	991	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	7.8	1.6	6.0		色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	54図-9	
57	992	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	(7.8)	1.6	(5.8)		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
57	993	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	8.0	1.6	6.5		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
57	994	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	8.0	1.5	6.0		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
57	995	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	(8.0)	1.5	(6.0)		色調:浅黄褐色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
57	996	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	(8.0)	1.5	(6.2)		色調:浅黄褐色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
57	997	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	(8.0)	1.4	(6.0)		色調:浅黄褐色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
57	998	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	(8.0)	1.3	(6.0)		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	54図-6	
57	999	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	8.2	1.6	6.2		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	54図-14	
57	1000	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	8.2	1.6	6.5		色調:にぶい橙色 胎土:赤色粒子を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
57	1001	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	(8.2)	1.4	(6.0)		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
57	1002	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	(8.2)	1.4	(5.6)		色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
57	1003	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	(8.2)	1.4	(6.2)		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
57	1004	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	(8.4)	1.7	(6.4)		色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
57	1005	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	(8.4)	1.6	(7.0)		色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	54図-15	
57	1006	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	(8.4)	1.3	(6.2)		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
57	1007	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	(8.6)	2.5	(6.0)		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
57	1008	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	(8.6)	1.5	(6.4)		色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
57	1009	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	(8.6)	1.4	(6.2)		色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
57	1010	B区土器溜	B区土器溜り内	土師器	小皿	(8.6)	1.4	(6.4)		色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
57	1011	B区土器溜め	B区土器溜り内	青磁	碗	-	-	-	龍泉窯系A4類	胎土:精・灰白色 釉:透明な灰オリープ色 内面:二又片刀による区画	54図-22	
57	1012	B区土器溜め	B区土器溜り内	中世須恵器	鉢	-	-	-	東播系須恵器	胎土:1mmの長石を含む灰色 外内面:ナデ		
58	1013	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南上	土師器	環	12.4	2.8	8.0		色調:にぶい黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	59図-8	
58	1014	B区III層(褐色土)盛土	B-10T11T間盛土	土師器	環	12.4	3.1	7.4		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	59図-12	
58	1015	B区III層(褐色土)盛土	B区石積南盛土	土師器	環	(12.2)	3.8	(8.0)		色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	59図-10	
58	1016	B区III層(褐色土)盛土	B区列...	土師器	環	(12.6)	3.1	(7.6)		色調:にぶい黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
58	1017	B区III層(褐色土)盛土	B-10T11T間盛土	土師器	環	12.9	2.9	8.2		色調:にぶい黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	59図-9	
58	1018	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南上盛土	土師器	環	(13.0)	3.1	(8.2)		色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し・難状	59図-11	
58	1019	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南上	土師器	環	(13.0)	2.7	(8.0)		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
58	1020	B区III層(褐色土)盛土	B区石列盛土上	土師器	環	13.2	3.2	8.2		色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	59図-14	
58	1021	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南上	土師器	環	(13.6)	3.5	(9.0)		色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	59図-13	
58	1022	B区III層(褐色土)盛土	B-10T	土師器	環	(14.4)	4.5	(8.4)		色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	59図-15	
58	1023	B区III層(褐色土)盛土	B区10T~11T盛土	土師器	環	(15.0)	3.9	(9.0)		色調:にぶい黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
58	1024	B区III層(褐色土)盛土	B区石積南盛土	土師器	小皿	7.2	1.0	5.4		色調:灰黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	59図-1	

挿入 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年 代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高				
58	1025	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南土	土師器	小皿	7.4	1.3	5.4		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し 色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・板 目圧痕 内底：弱いナデ	59図-2
58	1026	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土	土師器	小皿	7.6	1.2	5.4		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・板 目圧痕 内底：弱いナデ	
58	1027	B区III層(褐色土)盛土	B-10T11T間盛土	土師器	小皿	8.2	1.4	6.0		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・板 目圧痕 内底：弱いナデ	59図-4
58	1028	B区III層(褐色土)盛土	B10T-B11T間(盛土)	土師器	小皿	8.2	1.5	6.2		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・板 目圧痕 内底：弱いナデ	
58	1029	B区III層(褐色土)盛土	B区石積南盛土	土師器	小皿	8.2	1.3	6.6		色調：浅黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
58	1030	B区III層(褐色土)盛土	B区石積南盛土	土師器	小皿	(8.2)	1.1	(6.4)		色調：にぶい褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
58	1031	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土	土師器	小皿	(8.4)	1.5	(5.8)		色調：浅黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
58	1032	B区III層(褐色土)盛土	B-10T~11T間(盛土)	土師器	小皿	8.6	1.2	7.0		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
58	1033	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土	土師器	小皿	8.6	1.1	6.8		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・板 目圧痕 内底：ナデ	
58	1034	B区III層(褐色土)盛土	B-10T~11T間(盛土)	土師器	小皿	9.0	1.3	7.0		色調：にぶい褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し 目圧痕 内底：ナデ	59図-7
58	1035	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土	土師器	小皿	9.0	1.4	7.0		色調：にぶい褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・板目 目圧痕 内底：ナデ	59図-5
58	1036	B区III層(褐色土)盛土	B-10T11T間盛土	土師器	小皿	9.2	1.3	6.8		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	59図-6
58	1037	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土上	土師器	小皿	(9.4)	1.7	(7.6)		色調：にぶい黄褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・板 目圧痕 内底：ナデ	
58	1038	B区III層(褐色土)盛土	B-10T	土師器	小皿	(9.8)	1.5	(7.0)		色調：浅黄褐色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し・板目圧痕 内底：ナデ	
58	1041	B区III層(褐色土)盛土	B-10T~11T間盛土	青磁	碗	-	-	-	12c.後葉~13c.初頭	胎土：精・灰白色 釉：オリープ灰色 内面：片彫蓮花文と柳描文	
58	1042	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	青磁	碗	-	-	-	12c.後葉~13c.初頭	胎土：精・灰白色 釉：透明な灰オリープ色 内面：二又片刀による区画、飛雲文	
58	1043	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	青磁	碗	-	-	-	12c.後葉~13c.初頭	胎土：精・褐色粒子を含む灰色 釉：灰色 外面：疵の跡目を入れ、片彫りで蓮弁文 内面：片 彫蓮花文	
58	1044	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	青磁	碗	-	-	-	13c.中葉~14c.前半	胎土：精・黒色粒子を少量含む灰色 釉：オリープ灰色	59図-17
58	1045	B区III層(褐色土)盛土	B区石積南盛土	青磁	碗	-	-	-	13c.中葉~14c.前半	胎土：精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉：オリープ色	59図-18
58	1046	B区III層(褐色土)盛土	B-10T11T間盛土	青磁	碗	-	-	-	13c.中葉~14c.前半	胎土：精・灰白色 釉：緑灰色	59図-16
58	1047	B区III層(褐色土)盛土	B区石積南砂層	青磁	碗	-	-	-	13c.中葉~14c.前半	胎土：精・黒色粒子及び長石を含む灰白色 釉：緑灰色	
58	1048	B区III層(褐色土)盛土	B区石積南砂層	青磁	碗	-	-	-	13c.中葉~14c.前半	胎土：精・長石を含む灰白色 釉：緑灰色	
58	1049	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土II層	青磁	碗	-	-	-	13c.中葉~14c.前半	胎土：精・長石を含む灰白色 釉：緑灰色	
58	1050	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土	青磁	碗	-	-	-	13c.中葉~14c.前半	胎土：精・長石を含む灰白色 釉：オリープ灰色	
58	1051	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土	青磁	碗	-	-	-	13c.中葉~14c.前半	胎土：精・長石を含む灰白色 釉：オリープ灰色	

挿図 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	底径				
58	1052	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南最下層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰色 釉: オリーブ灰色	
58	1053	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色 釉: オリーブ灰色	
58	1054	B区III層(褐色土)盛土	B区石列間盛土II層	青磁	碗	-	5.2	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰色 釉: オリーブ灰色、置付～高台内は無釉 内底: 印花文	59図-23
58	1055	B区III層(褐色土)盛土	観音B10T-11T間盛土212	青磁	碗	-	5.2	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰色 釉: オリーブ灰色、置付～高台内は無釉 内底: 印花文	
58	1056	B区III層(褐色土)盛土	B5～6T III層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰色 釉: オリーブ灰色、置付～高台内は無釉	51図-16
58	1057	B区III層(褐色土)盛土	B区石積南砂層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B0類	13c. 末葉～14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色 釉: 厚め・緑灰色、火を受けている	
58	1058	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B0類	13c. 末葉～14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色 釉: 厚め・緑灰色	
58	1059	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B0類	13c. 末葉～14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色 釉: 厚め・緑灰色	
59	1060	B区III層(褐色土)盛土	B-10T～11T間盛土	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B0類	13c. 末葉～14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色 釉: 厚め・緑灰色	
59	1061	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土II層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B0類	13c. 末葉～14c. 前半	胎土: 精・細かい黒色粒子及び長石を含む灰白色 釉: 厚め・緑灰色、高台端部間辺軸抜き取り	
59	1062	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	青磁	碗	12.4	-	龍泉窯系C3類	16c. 前半	胎土: やや精・長石を含む灰色 釉: 灰色 口縁部に退化した雷文帯	59図-19
59	1063	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南上	青磁	皿	9.8	2.1	同安窯系	12c. 後葉～13c. 初頭	胎土: 精・長石を含む灰白色 釉: オリーブ黄色、底部無釉	59図-25
59	1064	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	青磁	皿	-	-	同安窯系	12c. 後葉～13c. 初頭	胎土: 精・灰色 釉: 灰オリーブ色 内底: 罽目文	
59	1065	B区III層(褐色土)盛土	B-10T	青磁	皿	12.0	-	折縁皿	13c. 後半～14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 厚め・緑灰色	59図-21
59	1066	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	青磁	皿	-	-	折縁皿	13c. 後半～14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色 釉: 厚め、オリーブ灰色、火を受けている	59図-22
59	1067	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土I層	青磁	鉢	-	-	高麗象嵌青磁鉢	14世紀	胎土: 精・長石を含む灰白色 釉: 灰色	60図-1
59	1068	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	白磁	壺	-	-	四耳壺	13世紀後半～14世紀	胎土: やや精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉: 灰オリーブ色、貫入あり 外面: 縦に二重の沈線、白土かけ	
59	1069	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土	白磁	碗	-	-	白磁碗V類	11c. 後半～12c. 前半	胎土: 精・黒色粒子を含む灰白色 釉: 灰白色	
59	1070	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	白磁	碗	13.0	-	白磁碗IX類	13c. 中～初頭	胎土: 精・黒色粒子及び長石を含む灰色 釉: 灰白色 口禿、火を受けている	59図-20
59	1071	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土II層	白磁	碗	-	4.2	白磁碗IX類	13c. 中～初頭	胎土: 精・黒色粒子を含む灰白色 釉: 青みある灰白色 内底: 外周は太い沈線状の段がつく	
59	1072	B区III層(褐色土)盛土	B-10T～11T間盛土	白磁	皿	-	-	白磁皿VI類	11c. 後半～12c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰色 釉: 灰色	
59	1073	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	白磁	皿	-	-	白磁皿VI類	11c. 後半～12c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰色 釉: 灰色 底部: 露胎	
59	1074	B区III層(褐色土)盛土	B-10T～11T間盛土	白磁	皿	-	-	白磁皿VI類	11c. 後半～12c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰色 釉: 灰色 底部: 露胎	
59	1075	B区III層(褐色土)盛土	B区石積南砂層	白磁	皿	-	5.6	白磁皿VI類	11c. 後半～12c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色、釉: 灰色、内底: 罽目文	
59	1076	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	白磁	皿	9.0	1.8	白磁皿VII類	12c. 中頃～後半	胎土: 黒色粒子を含む灰白色 釉: 青みある灰白色 平底 外面下位: 露胎、体部は鈍角に内脚へ屈曲	
59	1077	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	白磁	皿	10.6	1.9	白磁皿IX類	13c. 後半～14c. 初頭	胎土: 精・長石を含む灰白色 釉: 灰白色、底部まで施釉、口禿	59図-26

押図 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (原本申請書時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高 底径				
59	1078	B区III層(褐色土)盛土	B-10T~11T間盛土	白磁	皿	-	-	白磁皿区類	13c.後半~14c.初頭	胎土:精・長石を含む灰白色 釉:オリープ灰色、口禿	
59	1079	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	白磁	合子蓋	7.0	1.6	合子蓋		胎土:精・長石及び黒色粒子を含む灰白色 釉:明緑灰色 型成形、外口縁~内側面まで無釉	59図-27
59	1080	B区III層(褐色土)盛土	B-10T11T間盛土	白磁	合子身	-	3.3	合子蓋		胎土:精・長石及び黒色粒子を含む灰白色 釉:明緑灰色 型成形、外面下半~底部無釉、内面上部も無釉	59図-28
59	1081	B区III層(褐色土)盛土	B-10T~11T間盛土	白磁	四耳壺	-	-	四耳壺III類(大)	13c	胎土:精・長石を含む灰白色 釉:灰白色	
59	1082	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南	白磁	梅瓶	-	-	白磁梅瓶	13c中頃~14c初頭	胎土:精・灰白色 釉:緑灰色、高台端部から底面無釉、火を受けている	
59	1083	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土	青白磁	小壺	-	-	青磁小壺	14世紀中頃	胎土:精・灰白色 釉:明緑灰色 外面:青磁	
59	1084	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土	磁器染付	碗	-	5.0	染付碗E群	16c.中葉~16c.後葉	胎土:精・灰白色 微頭心碗 内底:二重圏線内に草花文 高台内:銃款(不明)	
59	1085	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土	磁器染付	皿	-	-	染付皿C群	15c.後半~16c.初頭	漳州窯系 胎土:精・黒色粒子を含む灰白色、碁笥底、化粧土あり、外底露胎	
59	1086	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南最下層	磁器染付	皿	-	-	染付皿C群	15c.後半~16c.初頭	漳州窯系 胎土:精・黒色粒子を含む灰白色、碁笥底、化粧土あり	
59	1087	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土II層	瀬戸	御皿	-	-	古瀬戸前期様式IV期	13c後葉	胎土:精・灰白色 釉:灰色、外面の釉は剥がれおちている	
59	1088	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土	中世須恵器	壺	-	-	在地		胎土:砂粒を含む褐色 外面:山形タタキ後ナデ 内面:ハケメ	
59	1089	B区III層(褐色土)盛土	B-10T11T間(盛土)	中世須恵器	搦鉢	30.0	-	在地		胎土:砂粒を含む灰色、縮状 外面:ハケメ後ナデ、ユビ押え 内面:ハケメ後X状の搦目	60図-7
59	1090	B区III層(褐色土)盛土	観音B区10T~11T間(盛土)	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土:砂粒を含む灰色 外面:ハケメ後ナデ、ユビ押え、腰部は横方向ケズリ 内面:ハケメ後	
59	1091	B区III層(褐色土)盛土	B区石積南砂層	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土:砂粒を含む灰色 外面:ハケメ後ナデ、ユビ押え 内面:ハケメ	
59	1092	B区III層(褐色土)盛土	B区10T内盛土	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土:砂粒を含む灰色 外面:ハケメ後ナデ、ユビ押え 内面:ハケメ	
60	1093	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土II層	磁器染付	碗	10.0	-	肥前系	18c中葉~末	外面:若松	
60	1094	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土II層	磁器染付	碗	-	5.0	肥前系	18c	外面:草花文 高台外側に二重圏線、高台内に一重圏線	
60	1095	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	磁器染付	碗	-	4.6	肥前系	18c末~19c	外面:山水文 高台内に崩れた「大明年製」	
60	1096	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南最下層	磁器染付	碗	-	4.6	肥前系	19c	外面:草花文 壺付~高台内は無釉	
60	1097	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土II層	磁器染付	碗	-	3.9	肥前系	18c中頃~後半	外面:草花文 壺付軸底きとり	60図-3
60	1098	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土II層	磁器染付	碗	-	4.0	肥前系	18c末~19c	外面:草花文、高台外側に二重圏線、高台内に一重圏線 量付:砂付着	
60	1099	B区III層(褐色土)盛土	B区石列	磁器染付	碗	-	3.2	肥前	1700~1750年代	外面:二重網目文 内面:一重網目文 内底:菊花文	
60	1100	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土II層	磁器染付	組皿	13.4	4.4	肥前	17c前半	外面:口縁付近に一重圏線 内面:鳳凰文、貫入あり	60図-5
60	1101	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土	磁器染付	組皿	13.4	4.4	肥前	17c前半	外面:口縁付近に一重圏線 内面:鳳凰文、貫入あり	60図-6
60	1102	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南最下層	磁器染付	皿	-	-	肥前		外面:口縁付近に一重圏線 内面:鳳凰文、貫入あり	60図-4
60	1103	B区III層(褐色土)盛土	B区石列南盛土II層	磁器染付	皿	-	-	肥前系	18c後半	内底:蛇の目軸刺き	

挿図 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県 22 集 掲載No
						口径	器高				
60	1104	B区Ⅲ層(褐色土)盛土	B区石列南盛土II層	磁器染付	皿	-	7.2	肥前系	18c後半	豊付無軸	
60	1105	B区Ⅲ層(褐色土)盛土	B区石列	磁器染付	小皿	-	1.8	肥前系	近代	体部下～高台内無軸、型成形の菊花文	60図-2
60	1106	B区Ⅲ層(褐色土)盛土	B区石列南盛土II層	磁器染付	小環	6.2	-	肥前系	17c末～18c初	外面:草花文	
60	1107	B区Ⅲ層(褐色土)盛土	B区石列南盛土II層	白磁	猪口	5.0	3.2	肥前系	1780～1820年代	体部は直線的に開く	
60	1108	B区Ⅲ層(褐色土)盛土	B区石列	磁器染付	瓶	-	-	肥前	17c後半(Ⅲ期)	外面:一重網目文	
60	1109	B区Ⅲ層(褐色土)盛土	B区石列	磁器染付	鉢	-	-	肥前系	江戸後期	底部無軸 外面:草花文	
60	1110	B区Ⅲ層(褐色土)盛土	B区石列南盛土II層	陶器	碗	8.4	5.6	球磨郡	1820年代～幕末	豊付軸抜き取り	60図-8
60	1111	B区Ⅲ層(褐色土)盛土	B区石列南最下層	陶器	碗	-	-	肥前:内野山窯	17c末～18c前半	内外面:銅緑釉	
60	1112	B区Ⅲ層(褐色土)盛土	B区石列南盛土II層	陶器	碗	-	-	一勝地	1820年代～幕末	内外面:透明釉	
60	1113	B区Ⅲ層(褐色土)盛土	B区石列南盛土II層	陶器	碗	-	-	肥前	18c	内外面:透明釉、体部下から無軸	
60	1114	B区Ⅲ層(褐色土)盛土	B区石列南最下層	陶器	碗	-	-	肥前:内野山窯	17c末～18c前半	内外面:銅緑釉	
60	1115	B区Ⅲ層(褐色土)盛土	B区石列南盛土	陶器	皿	-	-	肥前	17c前半	内外面:透明釉	
60	1116	B区Ⅲ層(褐色土)盛土	B区石列	陶器	大鉢	-	-	肥前	17c末～18c前半	軸は外面口縁付近まで 内面:白土刷毛塗り	
60	1117	B区Ⅲ層(褐色土)盛土	B-10T～11T間盛土	陶器	-	-	-	八代(高田)	18～19c	胎土:精・暗灰色 釉:薄い・淡い暗緑色	
63	1118	広場覆土	B9T-K8T間下敷上層	土師器	坏	(13.4)	3.2 (9.6)			色調:灰白色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	61図-4
63	1119	広場覆土	B区G～8T～K8T石積内	土師器	小皿	(8.4)	1.2 (7.0)			色調:にぶい橙色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し	
63	1120	広場覆土	B区K8T-O-11T間石積周辺	青磁	碗	-	6.6	龍泉窯系A類	12c.後葉～13c.初頭	胎土:精・灰白色、釉:灰オリーブ色、高台内は無軸	61図-12
63	1121	広場覆土	B区石積南砂層	青磁	碗	-	5	龍泉窯系B1類	13c.中葉～14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰色、高台内は無軸	61図-13
63	1122	広場覆土	B区G-8T-K-8T石積周辺	青磁	碗	16.4	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉～14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰色	61図-7
63	1123	広場覆土	B区G-8T-K-8T石積周辺	青磁	碗	16.8	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉～14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰色	61図-8
63	1124	広場覆土	G-8T-K8T間石敷上層	青磁	碗	15.0	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉～14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰色	61図-6
63	1125	広場覆土	G8T～K8T間北	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉～14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:緑灰色	
63	1126	広場覆土	G8T～K8T間北	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉～14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰オリーブ色	
63	1127	広場覆土	頼景B区G-8T-K8T石積内 218	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉～14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰色	
63	1128	広場覆土	B区G-8T-K-8T石積周辺	青磁	碗	14.0	-	龍泉窯系D1類	14c.後半～15c.前葉	胎土:精・長石を含む灰色 釉:灰オリーブ色	61図-9
63	1129	広場覆土	B区G-8T-K-8T石積周辺	青磁	碗	-	7.0	龍泉窯系D2類	15c.中葉～後半	胎土:粗・長石を含む灰色 釉:灰オリーブ色 外底:靴の目軸剥ぎ	61図-11

押図 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (原本調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高 底径				
63	1130	広場覆土	G8F-K8T 間石敷 上II層	白磁	皿	9.4	-	白磁皿IV類	11c.後半～12c.前半	胎土：精・灰白色 釉：灰色、外面下位無釉	61 図-10
63	1131	広場覆土	G8T～K8T 間 北	磁器染付	皿	-	-	染付皿B群	15c.後半～16c.中頃	胎土：精・灰白色 端反	
63	1132	広場覆土	B区 K8T～ O-11T 間石積周 辺	常滑	甕	-	-	7型式	1300～1350年	胎土：砂粒を含む灰色 N状口縁	
63	1133	広場覆土	G8T～K8T 間	常滑	甕?	-	-		13c.後半～14c.	胎土：砂粒を含む灰色、内面に自然釉	
63	1134	広場覆土	B区 K8T～ O-11T 間石積周 辺	瓦質土器	羽釜	-	-	在地		胎土：灰白色 外面：ナデ 内面：ハケメ	
63	1135	広場覆土	B区 K-8T- O-11 T 間石積周 辺	瓦質土器	火鉢	-	-	在地		胎土：砂粒を含む灰白色・内面は灰色 内外面：ナデ、口縁と凸帯の間にスタンプ	61 図-18
63	1136	広場覆土	G-8T～K8T 石積 北II層	石製品	石鍋	19.2	-			滑石 外面：3mmの工具痕	61 図-19
63	1137	石積堤防基底 部	B、G-BT-K-DT 石 積周辺	青磁	碗	17.8	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉～14c.前半	胎土：精・長石を含む灰色 釉：灰ナリーブ色	52 図-15
63	1138	石積堤防基底 部	C区石積 M-M'	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉～14c.前半	胎土：精・長石を含む灰色 釉：灰色	
63	1139	石積堤防基底 部	C区石積 M-M'	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉～14c.前半	胎土：精・灰色 釉：灰色	
63	1140	石積堤防基底 部	C区石積 M-M'	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉～14c.前半	胎土：精・灰白色 釉：緑灰色	接合
63	1141	石積堤防基底 部	C区石積 M-M'	青磁	皿	-	-	折縁皿	13c.後半～14c.前半	胎土：精・白色 釉：緑灰色 外面：蓮花文	
63	1142	石積堤防基底 部	3 C区石積 J-J 間	白磁	皿	-	-	白磁皿IX類	13c.後半～14c.初頭	胎土：精・黒色粒子及び長石を含む灰白色 釉：灰白色	
63	1143	石積堤防基底 部	2 C区石積 J-J 間	白磁	皿	-	6.0	白磁皿IX類	13c.後半～14c.初頭	胎土：精・黒色粒子及び長石を含む灰白色 釉：灰白色	
63	1144	石積堤防基底 部	C区石積 (M- M'内)	中世須恵器	搦鉢	-	-	在地		胎土：砂粒を含む灰白色 外面：ハケメ後ナデユビ押え、腰部は横方向ケズリ 内面：ハケメ後 糊目	52 図-16
64	1145	B区出土遺物	B-1～2 T I、II 層	土師器	坏	(12.0)	3.4 (7.6)			色調：灰黄色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
64	1146	B区出土遺物	B-1T～3T 間II 層	土師器	坏	12.4	3.8 7.4			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	51 図-12
64	1147	B区出土遺物	B-1T～3T 間II 層	土師器	坏	12.6	3.4 6.8			色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	51 図-6
64	1148	B区出土遺物	B-1T～3T 間2 層	土師器	坏	12.6	3.2 8.2			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	51 図-7
64	1149	B区出土遺物	B-1T～3T 間2 層	土師器	坏	(12.7)	3.1 (7.6)			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	51 図-8
64	1150	B区出土遺物	B-1T～3T 間2 層	土師器	坏	(13.2)	3.0 (8.8)			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
64	1151	B区出土遺物	B-1T～3T 間II 層	土師器	坏	13.0	3.2 7.6			色調：灰白色 胎土：赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	51 図-10
64	1152	B区出土遺物	G-8T-K8T 間石 敷上II層	土師器	坏	13.0	3.8 8.4			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	61 図-2
64	1153	B区出土遺物	G-8T-K8T 間石 敷上II層	土師器	坏	13.4	3.8 8.2			色調：にぶい褐色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	61 図-3
64	1154	B区出土遺物	B-1T～2T I層	土師器	坏	13.6	3.0 9.0			色調：にぶい黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	51 図-9

挿図 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高 底径				
64	1155	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 (第2層)	土師器	杯	13.6	3.5 8.0			色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
64	1156	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 II 層	土師器	杯	(13.8)	3.2 (7.8)			色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
64	1157	B区出土遺物	G-8T-K-8T 間石 敷上 II 層	土師器	杯	14.2	3.5 10.0			色調: 灰白色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	61 図 -5
64	1158	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 II 層	土師器	杯	-	8.0			色調: 灰白色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	51 図 -11
64	1159	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 II 層	土師器	小皿	7.4	1.3 5.0			色調: にぶい橙 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	51 図 -5
64	1160	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 II 層	土師器	小皿	(8.0)	1.2 (5.6)			色調: 灰黄褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
64	1161	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 II 層	土師器	小皿	8.0	1.1 6.0			色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
64	1162	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 (第2層)	土師器	小皿	(8.2)	1.6 (6.4)			色調: 浅黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
64	1163	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 II 層	土師器	小皿	8.2	1.4 6.0			色調: にぶい橙 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
64	1164	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 II 層	土師器	小皿	(8.2)	1.2 (6.4)			色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
64	1165	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 II 層	土師器	小皿	(8.2)	1.4 (5.8)			色調: 灰白色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
64	1166	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 II 層	土師器	小皿	(8.2)	1.6 (6.2)			色調: 灰白色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
64	1167	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 II 層	土師器	小皿	8.4	1.6 6.7			色調: にぶい黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し・板目 圧痕: ナデ	51 図 -2
64	1168	B区出土遺物	B-7T II 層	土師器	小皿	8.4	1.7 6.0			色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	51 図 -3
64	1169	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 II 層	土師器	小皿	(8.4)	1.3 (6.8)			色調: 橙色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
64	1170	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 (第2層)	土師器	小皿	(8.4)	1.5 (6.0)			色調: 浅黄褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
64	1171	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 II 層	土師器	小皿	(8.6)	1.4 (6.6)			色調: 灰白色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
64	1172	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 II 層	土師器	小皿	9.0	1.2 7.0			色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
64	1173	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 II 層	土師器	小皿	9.0	1.7 6.8			色調: にぶい黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	51 図 -4
64	1174	B区出土遺物	G-8T-K-8T 石 敷上 II 層	土師器	小皿	10.0	3.0 7.8			色調: 橙色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	61 図 -1
64	1181	B区出土遺物	G-8T ~ K-8T 石 敷北 II 層	土師器	火鉢	(16.0)	-			色調: にぶい赤褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 外面印花文のスタンプ	
64	1182	B区出土遺物	G-8T-K-8T 間石 敷上 II 層	土師器	羽釜	-	-			色調: 灰褐色 胎土: 1mm の砂粒・長石・雲母を含む 調整: 外面ナデ 内面縦位ナデ	
66	1184	B区出土遺物	B4T ~ 5T II 層	青磁	碗	14.0	-	龍泉窯系 A1 類	12c. 後葉 ~ 13c. 初頭	胎土: 精・灰白色 釉: 灰オリーブ色	51 図 -15
66	1185	B区出土遺物	B-1T ~ 2T I 層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系 A2 類	12c. 後葉 ~ 13c. 初頭	胎土: 精・灰白色 釉: 薄い・灰オリーブ色 内面に櫛描文	
66	1186	B区出土遺物	G-8T ~ K8T 間石 敷上 II 層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系 A4 類	12c. 後葉 ~ 13c. 初頭	胎土: 精・長石を含む灰色 釉: オリーブ灰色 内面: 片彫蓮花文	
66	1187	B区出土遺物	B-7T II 層	青磁	碗	15.6	-	龍泉窯系 B1 類	13c. 中葉 ~ 14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰色 釉: 灰オリーブ色	51 図 -13
66	1188	B区出土遺物	B-1T ~ 2T 間 II 層	青磁	碗	15.4	-	龍泉窯系 B1 類	13c. 中葉 ~ 14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰色 釉: 灰オリーブ色	51 図 -14
66	1189	B区出土遺物	B-1T ~ 2T I 層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系 B1 類	13c. 中葉 ~ 14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色 釉: 緑灰色	

押 号 番 号	掘 載 番 号	出 土 地 点 ・ 層 位 (再 整 理 後)	出 土 地 点 ・ 層 位 (本 来 調 査 時)	種 別	器 種	法 量 (cm)		分 類 (※大:大宰府編年)	年 代	形 態 の 特 徴 ・ 製 作 技 法 等	果 2 2 集 掲 載 No
						口 径	底 径				
66	1190	B区出土遺物	B-1T ~ 2T I層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉 ~ 14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色 釉: 緑灰色	
66	1191	B区出土遺物	瀬景 B-1T・T 間 II 層 214	青磁	碗	16.0	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉 ~ 14c. 前半	胎土: 精・長石を含む灰白色 釉: 灰オリーブ色	
66	1192	B区出土遺物	瀬景 B-8T・II層 217	青磁	碗	14.0	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉 ~ 14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 緑灰色	
66	1193	B区出土遺物	G-8T ~ K8T 間石 敷上 II層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉 ~ 14c. 前半	胎土: 精・黒色粒子及び長石を含む灰白色 釉: 灰色	
66	1194	B区出土遺物	G-8T ~ K8T 間石 敷上 II層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉 ~ 14c. 前半	胎土: 精・黒色粒子及び長石を含む灰白色 釉: 灰色	
66	1195	B区出土遺物	G-8T ~ K8T 間石 敷上 II層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉 ~ 14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: オリーブ灰色	
66	1196	B区出土遺物	G-8T ~ K8T 間石 積上 II層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c. 中葉 ~ 14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 緑灰色、皿付 ~ 高台内は無釉	
66	1197	B区出土遺物	G-8T ~ K8T 間石 積上 II層	青磁	皿	-	-	同安窯系	12c. 後葉 ~ 13c. 初頭	胎土: 精・にぶい黄橙色 釉: 灰色	
66	1198	B区出土遺物	BIT-2T I層	青磁	皿	11.6	-	折縁皿	13c. 後半 ~ 14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 緑灰色 内面に凹状削り	56 図 - 7
66	1199	B区出土遺物	G-8T ~ K8T 間石 積上 II層	青磁	盤	-	-	折縁盤		胎土: 精・黒色粒子を含む灰白色 釉: 緑灰色、貫入	
66	1200	B区出土遺物	B-1T ~ 2T I層	白磁	皿	-	6.0	白磁皿X類	13c. 後半 ~ 14c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子及び長石を含む灰白色 釉: 灰白色・底部まで施釉	
66	1201	B区出土遺物	B-1T ~ 2T I層	白磁	皿	-	5.0	白磁皿X類	13c. 後半 ~ 14c. 初頭	胎土: 精・黒色粒子及び長石を含む灰白色 釉: 灰白色・底部まで施釉	
66	1202	B区出土遺物	B区列南 II層	白磁	水注	-	-	水注把手		胎土: 精・黒色粒子を含む灰白色 釉: 灰白色	
66	1203	B区出土遺物	B-1T ~ 2T I層	白磁	四耳壺	-	-	四耳壺		胎土: 精・灰白色 釉: 灰色	
66	1204	B区出土遺物	B4T ~ 5T I層	白磁	合子蓋	5.6	1.7	合子蓋		胎土: 精・長石を含む灰白色 釉: 灰色・内面縁部分無釉 型成形	51 図 - 17
66	1205	B区出土遺物	B-1T ~ 2T I層	白磁	合子身	8.2	2.0	合子身		胎土: 精・黒色粒子を含む灰白色 釉: 青みある灰色・外面下半 ~ 底部無釉・受部無釉	51 図 - 18
66	1206	B区出土遺物	G-8T ~ K8T 間石 積上 II層	磁器染付	皿	-	-	染付皿B1群	15c. 後半 ~ 16c. 初頭	白化粧、胎土: やや精・黒色粒子を多く含んだ灰色、化粧土	
66	1207	B区出土遺物	G-8T ~ K8T 間石 積上 II層	陶器	洗	-	-	黄釉鉄絵洗		胎土: 粗・黒色粒子及び長石を多く含む暗灰色 (そろってない) 釉: 灰オリーブ色、	
66	1208	B区出土遺物	B-1T ~ 2T I層	陶器	洗	-	-	黄釉鉄絵洗		胎土: 粗・黒色粒子及び長石を多く含む暗灰色 (そろってない) 釉: 灰オリーブ色、内面に鉄絵	
66	1209	B区出土遺物	BIT2T 拡張 II層	陶器	甌	-	-	魏 II 類 (大) ?	13 c	胎土: 白色粒子を多く含む灰色、釉タレ	52 図 - 4
66	1210	B区出土遺物	BIT2T 拡張 II層	陶器	甌	-	-	魏 II 類 (大)	13 c	胎土: 白色粒子を多く含む灰色、釉タレ 内面: 同心円状の当て具痕	52 図 - 3
66	1211	B区出土遺物	G-8T ~ K8T 間石 積上 II層	瀬戸	卸皿	-	-	古瀬戸前期様式 IV期	13c 後葉	胎土: 精・灰色 内外面: 自然釉	
66	1212	B区出土遺物	B-1T ~ 3T 間 II 層	常滑	甌	-	-	6 a 型式	1250 ~ 1275 年	N 字状口縁 胎土: 長石及び砂粒を多く含む、自然釉がかかる、内面頸部はナデ	
67	1213	B区出土遺物	瀬景 B-9T・G-8T 石積上 II層	中世須恵器	壺	16.0	-	在地		胎土: 1mm の砂粒を含む褐灰色 外面: 山形タタキ・頸部 ~ 口縁部ナデ 内面: 頸部ナデその下部 ハケメ	
67	1214	B区出土遺物	B-9T・G-8T 石積 北 II層	中世須恵器	壺	15.0	-	在地		胎土: 1mm の砂粒を含む褐灰色 外面: 山形タタキ・頸部 ~ 口縁部ナデ 内面: 頸部ナデ	61 図 - 15
67	1215	B区出土遺物	瀬景 G-8T ~ K8T 間石敷上 II層	中世須恵器	壺	13.0	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ナデ 内面: ハケメ	
67	1216	B区出土遺物	BIT2T 拡張 II層 (褐色土上面)	中世須恵器	壺	-	-	在地		胎土: 1mm の砂粒を含む褐灰色 外面: 山形タタキ 内面: ナデ	52 図 - 2
67	1217	B区出土遺物	瀬景 G8T ~ K8T 石積上 II層	中世須恵器 甌・壺?	甌	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: 格子タタキ (3mm) のち山形タタキ 内面: ナデ	
67	1218	B区出土遺物	瀬景 G8T ~ K8T 石積上 II層	中世須恵器 甌・壺?	甌	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色、ややマーブル状 外面: 格子タタキ (3mm) 内面: 粗いハケメ	
67	1219	B区出土遺物	瀬景 ?	中世須恵器 壺	壺	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む褐灰色 外面: 山形タタキ 内面: ハケメ	
67	1220	B区出土遺物	瀬景 B-1T ~ 3T 間 II層	中世須恵器	甌	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: 菱形状押し型 内面: 横位ケズリ	

挿入 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高				
67	1221	B区出土遺物	B-9T ~ G-8T 石 甕北II層	中世須恵器	瓶	-	13.1	在地		胎土: 1mmの砂粒を含む灰白色 外面: ナデ 内面: ナデのち罫目 (5本単位: 1.2cm)	61 図-17
67	1222	B区出土遺物	郷景 G1T ~ K8T 石甕北II層	中世須恵器	罫鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ナデ 内面: ナデのち罫目 (5本単位: 1.2cm)	
67	1223	B区出土遺物	B1T2T I層	中世須恵器	罫鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ナデ 内面: ナデ 外面: ナデ後脚状工具による罫目	52 図-1
67	1224	B区出土遺物	郷景 G区 T-K8T 間石敷上II層	中世須恵器	釜	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ナデ・ユビ押え 内面: ナデ 外面: ナデ後ナデ・ユビ押え 内面: ハケメ	
67	1225	B区出土遺物	G-8T-K8T 間石 敷上II層	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ハケメ後ナデ・ユビ押え 内面: ハケメ、口縁部ナデ	
67	1226	B区出土遺物	G-8T ~ K-8T 石 甕北II層	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ナデ 内面: ハケメ、口縁部ナデ	
67	1227	B区出土遺物	G-8T-K-8T 間石 敷上II層	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ハケメ後ナデ・ユビ押え、口縁部ヨコナデ 内面: ハケメ	
68	1228	B区出土遺物	郷景 G-8T ~ K8T 間石敷上II層	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒・顔石を含む灰白色 外面: ハケメ後ナデユビ押え 内面: ハケメ、使用感あり	
68	1229	B区出土遺物	G8T ~ K8T 石積 北II層	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ハケメ後ナデユビ押え、腰部は横位ケズリ 内面: ハケメ	
68	1230	B区出土遺物	G8T ~ K8T 石積 北II層	瓦質土器	火舎脚部	-	17.5	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ナデ 内面: ナデ	61 図-16
68	1232	B区出土遺物	A-B3 区上層石積	石製品	石鍋	-	-	在地		滑石 外面: 5 mm縦位ケズリ	
68	1233	B区出土遺物	郷景	磁器染付	小坏	6.6	3.4	肥前	17 c 後半	外面: 草花文、体部下位から底部無釉 内面: 色絵	
68	1234	B区出土遺物	G-8T ~ K8T 間石 敷上II層	色絵	碗	-	-	肥前	18c 第2・3 四半期		
68	1235	B区出土遺物	B-1T ~ 2T I層	磁器染付	碗	-	4.5	肥前	1700 ~ 1750 年代	二次焼成 外面: 二重網目文 高台内: 渦福 内面: 一直網目文 内底: 菊花文	
68	1236	B区出土遺物	B区石列南II層	磁器染付	碗	-	-	肥前	1710 ~ 1750 年代	外面: 半菊花文+米梨文	
68	1237	B区出土遺物	B区石列南II層	青磁染付	皿	-	-	肥前	1730 ~ 1740 年代	内底に染付、口縁付近で外反し、口唇内湾 青磁細: 厚め	
68	1238	B区出土遺物	郷景 B-2T ~ II 層	陶器	碗	8.2	4.8	一勝地	1820 年代 ~ 幕末	豊付無釉	
68	1239	B区出土遺物	G-8T ~ K8T 間石 甕北II層	陶器	碗 (京焼 風)	-	-	肥前	18 世紀前半	内外面: 透明釉	
68	1240	B区出土遺物	B-3T II層上面	陶器	碗 (天目)	-	4.0	肥前	1590 ~ 1630 年代	高台内兜巾状、体部下位から底部無釉	
68	1241	B区出土遺物	G-8T ~ K8T 間石 甕北II層	陶器	皿	-	-	肥前: 現川	1690 ~ 1740 年代	内面: 白土打脚毛目 胎土: 灰色	
69	1242	B区出土遺物	A-6T 黒褐色 I層	陶器	皿	-	4.4	肥前: 内野山窯	17c 末 ~ 18c 前半	内面: 鈍緑釉 内底: 靴の目細剥ぎ、外面下位まで透明釉、高台露胎	
69	1243	A区出土遺物	A-6T 黒褐色 I層	土師器	杯	13.0	3.5	9.6	色調: 浅黄褐色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	58 図-5	
69	1244	A区出土遺物	A-6 T 黒褐色 I層	土師器	杯	13.4	3.1	9.0	色調: にぶい橙色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	58 図-4	
69	1245	A区出土遺物	A-6 T 黒褐色 I層	土師器	杯	(13.8)	3.5	(10.0)	色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
69	1246	A区出土遺物	A-6 T 黒褐色 I層	土師器	小皿	8.0	1.2	6.0	色調: 橙色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	58 図-1	
69	1247	A区出土遺物	A-4 T 石積周辺	土師器	小皿	(8.4)	1.4	(6.0)	色調: にぶい黄褐色 胎土: 1mm の砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し		
69	1248	A区出土遺物	A-6 T 黒褐色 I層	土師器	小皿	8.6	1.4 ~ 1.5	6.4	色調: にぶい橙色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	58 図-2	
69	1249	A区出土遺物	A-6 T 黒褐色 I層	土師器	小皿	9.4	2.1	6.4	色調: にぶい橙色 胎土: 赤色粒子を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	58 図-3	
69	1251	A区出土遺物	S-9G 薄III層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系 A4 類	12c. 後葉 ~ 13c. 初頭	胎土: 精・灰白色 釉: 灰色 外面: 縦に罫目文 内面に罫目文	
69	1252	A区出土遺物	S-9G 薄III層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系 B1 類	13c. 中葉 ~ 14c. 前半	胎土: 精・灰色 釉: 灰オリーブ色	58 図-11
69	1253	A区出土遺物	S-9G 薄I層	青磁	碗	-	-	龍泉窯系 B1 類	13c. 中葉 ~ 14c. 前半	胎土: 精・灰色 釉: 灰オリーブ色	
69	1254	A区出土遺物	A-4T 石積周辺	青磁	碗	-	-	龍泉窯系 D1 類	14c. 後半 ~ 15c. 前葉	胎土: 粗・灰色 釉: 灰色 内底にスタンプ印花文	
69	1255	A区出土遺物	A-5T 石積周辺	青磁	皿	-	6.0	同安窯系	12c. 後葉 ~ 13c. 初頭	胎土: 精・長石を含む灰白色 釉: 灰色	56 図-13
69	1256	A区出土遺物	A-6T 黒褐色 I層	青磁	大皿	-	-	大皿内湾皿	15c. 中葉	胎土: 精・灰白色 釉: 緑灰色・黒色 内面: 縦に凹線	58 図-7
69	1257	A区出土遺物	A-6T 黒褐色 I層	青磁	皿	-	-	折縁皿III類	13c. 後半 ~ 14c. 前半	胎土: 精・白色 釉: 緑灰色 内面: 縦に凹線、火を受けている	58 図-8

押図 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (原本調査時)	種別	器種	法量 (cm)		分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	底径				
69	1258	A区出土遺物	A-6T 黒褐色土層	青磁	皿	-	-	折縁腰折皿	13c. 末葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 緑灰色 高台端部釉掻き取り	
69	1259	A区出土遺物	S-7G 薄第2層	青磁	香炉	-	-	筒型香炉		胎土: 精・灰白色 釉: オリーブ灰色	
69	1260	A区出土遺物	S-7G I層	陶器	洗	-	-	緑釉洗	13世紀	胎土: 粗・黒色粒子及び長石を含む灰色 釉: 緑釉	
69	1261	A区出土遺物	A-4T 石積周辺	陶器	梅瓶	-	-	古瀬戸前期様式	13c 後半	胎土: 長石を少量含む灰白色、頸部に二重流線 外面: 灰釉、火を受けている	
69	1262	A区出土遺物	A-9T 黒褐色土層	中世須恵器	瓶	-	-	在地		胎土: 砂粒を含むにぶい褐色・縞状 外面: 山形タタキ 内面: ハケメ	58図-6
69	1263	A区出土遺物	瀬戸AIT西外堀 III層	中世須恵器	罌鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含むにぶい灰褐色・やや縞状 外面: ナデ・ユビ押え 内面: ナデのち罌状工具による罌目	
69	1264	A区出土遺物	西外堀II層	磁器染付	碗	11.8	6.0	肥前	18c 後半	豊付細掻きとり、草花文	55図-15
69	1265	A区出土遺物	A区IT西外堀	白磁	猪口	-	2.4	肥前	1630～1640年代	外面下位露胎、縦に凹状の削り	56図-17
69	1266	A区出土遺物	A-5T 石積周辺	磁器染付	皿	13.0	8.0	波佐見	18c 後半	内側面: 雪輪 豊付: 砂付着	
69	1267	A区出土遺物	A-4T 石積周辺	陶器	碗	11.0	-	肥前: 内野山窯	1650～1690年代	豊付のみ無釉、豊付に砂付着	
69	1268	A区出土遺物	S-9G II層	青磁	碗	12.0	6.7	肥前	17c 後半	豊付のみ無釉、内面: 装飾貼り付け・雲文	58図-10
69	1269	A区出土遺物	西外堀砂礫層上面	青磁	皿	-	7.0	肥前	17c 中頃	口クロ整形 外面下半露胎 内面: 鉄絵・胎土目跡	58図-13 と接合
69	1270	A区出土遺物	S-9G II層	陶器	皿	-	-	肥前	I-2期 (1594年代 頃～1610年代)	灰釉、外面下位露胎	58図-14
69	1271	A区出土遺物	S-9G II層	陶器	皿	-	5.6	肥前	1610～1630年代	内底に砂目痕、灰釉は外側面中位まで	58図-12
70	1272	A区出土遺物	A-4T 石積周辺	陶器	皿	-	2.9	肥前	1610～1630年代	色調: 灰白色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
70	1273	C区出土遺物	C区石積周辺	土師器	坏	13.4	8.8	在地		色調: 灰白色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	
70	1274	C区出土遺物	C区石積周辺	土師器	小皿	8.2	1.0	在地		胎土: 精・長石を含む灰色 釉: 灰オリーブ色	52図-10
70	1275	C区出土遺物	C区II層上部	青磁	碗	15.6	-	龍泉窯系BI類	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰色 内外面: 自然釉、底部糸切り	
70	1276	C区出土遺物	C区石積J・J間 上部	瀬戸	罌皿	-	9.4	古瀬戸前期様式III 期	13c 第3四半期	外面: 下位ケズリ 内面: ナデ	52図-12
70	1277	C区出土遺物	C区石積周辺	陶器	瓶?	-	14.8	在地		胎土: 砂粒・長石を含む灰色 外面: 格子タタキ (4mm) 内面: 口縁ナデ、頸部へ体部ケズリ	52図-11
70	1278	C区出土遺物	C区石積周辺	中世須恵器	壺	-	-	在地		胎土: 砂粒・赤色粒子を含む褐色 外面: 山形タタキ 内面: ハケメ	
70	1279	C区出土遺物	C区出土遺物	中世須恵器	壺	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: 格子タタキ (4mm) 内面: ナデ	
70	1280	C区出土遺物	C区石積周辺	中世須恵器	壺	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰白色 外面: ハケメ後ナデ、ユビ押え 内面: ハケメ	
70	1281	C区出土遺物	C区石積周辺	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒・長石を含む灰色 外面: ハケメ後ナデ、ユビ押え 内面: ハケメ	
70	1282	C区出土遺物	C区石積周辺	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒・長石を含む灰色 外面: ハケメ後ナデ、ユビ押え 内面: ハケメ	
70	1283	C区出土遺物	C区石積周辺	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色・マーブル状 外面: タタキ後ナデ、ユビ押え・腰部横方向ケズリ 内面: ハケメ	
70	1284	C区出土遺物	C区石積周辺	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: ハケメ後ナデ、ユビ押え 内面: ハケメ	
70	1285	C区出土遺物	C区石積周辺	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒・雲母を含む灰色 外面: ハケメ後ナデ、ユビ押え 内面: ハケメ	
70	1286	C区出土遺物	C区石積周辺	中世須恵器	鉢	-	-	在地		胎土: 砂粒・雲母を含む灰色 外面: ハケメ後ナデ、ユビ押え 内面: ハケメ	
70	1287	C区出土遺物	C区石積周辺	石製品	石鍋	-	-	石鍋転用品、5-6mm 工具痕		胎土: 砂粒を含む灰色 外面: 天目釉、外面下半無釉	52図-13
70	1288	C区出土遺物	C-1T 石積周辺	陶器	碗 (天目)	-	4.0	肥前	1594～1610年代	胎土: 砂粒を含む灰褐色 釉: 天目釉、外面下半無釉	
70	1289	C区出土遺物	C-1T 石積周辺	陶器	碗 (天目)	-	3.8	肥前	1610～1650年代	胎土: 砂粒を含む灰褐色 釉: 天目釉、外面下半無釉	
70	1290	D区出土遺物	D-2T I層～II層	土師器	小皿	6.0	1.0	4.2		色調: (外面) にぶい褐色 (内面) 灰黄褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	62図-1
70	1291	D区出土遺物	D-1T 東坂張部I -II層	土師器	小皿	7.8	1.5	5.2		色調: にぶい褐色 胎土: 1mmの砂粒を含む 調整: 内外面回転ナデ 外底: 糸切り離し	62図-2
70	1292	D区出土遺物	橋本宅新築基礎工 事中	青磁	碗	-	-	5.4	13c. 中葉～14c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 灰オリーブ色、内底に印文	62図-3
70	1293	D区出土遺物	宮元高氏寄贈品	白磁	碗	17.0	6.7	6.0	11c. 後半～12c. 前半	胎土: 精・灰白色 釉: 灰オリーブ色、外面下位無釉	62図-9
70	1294	D区出土遺物	D-3T I層～II層	白磁	梅瓶	-	-	-	13c 中頃～14c 初 頭	胎土: 精・灰白色 釉: 緑灰色、火を受けている	

挿図 番号	掲載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地点・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)			分類 (※大:大宰府編年)	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高	底径				
70	1295	D区出土遺物	D-1T II層	常滑	甕	-	-	-	1275～1300年	N字状口縁 胎土:長石及び砂粒を多く含む 内面頸部はナデ		
71	1296	D区出土遺物	D-1T II層	中世須恵器	壺	-	-	-		胎土:砂粒を含む灰色 外面:頸部ナデ・体部山形タタキ 内面:頸部ナデ・体部ハケメ		
71	1297	D区出土遺物	D-9G 石組内	中世須恵器	搦鉢	-	-	-		胎土:砂粒を含む灰色 外面:ハケメ後ナデ、ユビ押え、内面:ハケメ後飾状工具による罫目(9本・2.5cm)	62図-8	
71	1298	D区出土遺物	橋本宅新築基礎工事	中世須恵器	鉢	-	-	-		胎土:砂粒・長石を含む灰色 外面:ハケメ後ナデ、ユビ押え、口縁部はヨコナデ 内面:ハケメ後飾状工具によるX状の罫目	62図-6	
71	1299	D区出土遺物	D-3T I層～II層	瓦質土器	火鉢	-	-	-	1650～1690年代	胎土:砂粒を含む灰色 内外面:ナデ 罫上面に巴文スタンプ	62図-7	
71	1300	D区出土遺物	D-1T I層	陶器	碗 "碗 (陶胎染 付)"	10.6	6.5	4.4	1650～1690年代	外面:銅緑釉、内面:透明釉、外面下半は無釉		
71	1301	D区出土遺物	D-1T 東張部I・II層	陶器	碗	-	-	-	1630～1650年代	外面:鉄釉 内面:染付		
71	1302	D区出土遺物	頼景D-1T 東張部	陶器	碗	-	-	-	1650～1690年代	外面:銅緑釉 内面:透明釉、外面下半は無釉		
71	1303	D区出土遺物	D-2T I層～II層	磁器染付	紅皿	4.2	1.2	1.4	1820～1860年代	貝殻状・型押し成形 外面下半露胎	62図-4	
71	1304	D区出土遺物	D-1T 東張部下II層	磁器染付	紅皿	4.2	1.4	1.4	1820～1860年代	貝殻状・型押し成形 外面下半露胎	62図-5	
71	1305	注記不明	注記不明	土師器	杯	13.2	3.0	8.2		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
71	1306	注記不明	注記不明	土師器	杯	16.2	3.7	9.5		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
71	1307	注記不明	注記無	土師器	小皿	8.2	1.4	6		色調:浅黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
71	1308	注記不明	注記不明	青磁	碗	-	-	-	12c.後葉～13c.初頭	胎土:精・灰白色 釉:灰オリーブ色		
71	1309	注記不明	注記不明	青磁	碗	-	-	-	13c.中葉～14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰オリーブ色		
71	1310	注記不明	注記不明	青磁	碗	-	-	-	13c.中葉～14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰オリーブ色		
71	1311	注記不明	注記不明	青磁	碗	-	-	-	13c.中葉～14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰オリーブ色		
71	1312	注記不明	注記不明	青磁	碗	-	-	-	13c.中葉～14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰オリーブ色		
71	1313	注記不明	注記不明	青磁	碗	-	-	-	13c.中葉～14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰オリーブ色		
71	1314	注記不明	注記不明	青磁	碗	-	-	-	13c.中葉～14c.前半	胎土:精・灰白色 釉:灰オリーブ色		
71	1315	注記不明	注記不明	白磁	皿	-	-	1.8	13c.末葉～14c.初頭	胎土:精・黒色粒子及び長石を含む灰白色 釉:灰白色・底部まで施釉		
71	1316	注記不明	注記不明	白磁	皿	-	-	6.7	14c.初頭～後半	胎土:精・灰白色 釉:明青灰色・罩付～外底無釉、内底に型文		
71	1317	注記不明	注記不明	磁器染付	碗	-	-	5.0	18c.後半	胎土:精・灰白色 釉:明青灰色・罩付～外底無釉、内底に型文		
71	1318	注記不明	注記不明	陶器	碗	9.0	-	-	1820年代～幕末	高台外面に三重圈線、外底に一重圈線、内底に草花文・圈線		
挿図 番号	掲載 番号	遺跡名	出土位置・層位	種別	器種	法量 (cm)			分類	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高	底径				
75	1319	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/D-16層	土師器	杯	-	-	-		色調:にぶい黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
75	1320	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/D-16層	瓦質土器	鉢	-	-	-		胎土:砂粒をかすかに含む灰色 外面:縦位のハケメ・罫外面はヨコナデ 内面:ハケメ、罫上面に有孔・二重の凹線		
75	1321	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/D-18層(整地層)	土師器	杯	-	-	9.0		色調:にぶい黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
75	1322	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/D-18層(整地層)	土師器	小皿	(7.4)	1.6	(5.0)		色調:にぶい黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
75	1323	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/D-18層(整地層)	土師器	小皿	-	-	-		色調:にぶい黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
75	1324	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/D-18層(整地層)	土師器	小皿	-	-	1.2		色調:にぶい黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
75	1325	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/D-18層(整地層)	土師器	小皿	-	-	-		色調:にぶい黄褐色 胎土:1mmの砂粒を含む 調整:内外面回転ナデ 外底:糸切り離し		
75	1326	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/D-18層(整地層)	青磁	皿	-	-	-	13c.末葉～14c.前半	胎土:粗・灰色 釉:緑灰色、高台袖掻き取り、火を受けている		

種 番 号	掲載 番号	遺跡名	出土位置・層位	種別	器種	法量 (cm)		分類	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高 底径				
75	1327	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/D-18 層 (終地層)	中世須恵器	鉢	-	9.8	在地		胎土：輝石及び砂粒を含む灰色 内面：ハケメ	
75	1328	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/ D-5.6.7層	常滑	甕	-	-			胎土：1mmの長石及び砂粒含む灰色 内面：ナデ	
75	1329	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/ D-5.6.7層	常滑	甕	-	-			胎土：1mmの長石及び砂粒含む灰色 内面：横ケズリ後ユビ押え	
75	1330	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/ D-5.6.7層	磁器染付	碗	-	4.4	肥前系	19 c	草花文	
75	1331	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/ D-5.6.7層	磁器染付	碗 (広東)	-	3.4	肥前	1780～1840年代	内底：幽線+草花	
75	1332	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/表土 中	磁器染付	碗	-	3.6	肥前系	19 c	外面：網目文	
75	1334	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/表土 中	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉～14c.前半	胎土：精・灰白色 釉：緑灰色	
75	1335	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/表土 中	陶器	碗	-	-	一勝地	1820年代～幕末		
75	1336	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/H-27 層 (粘質土層)	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉～14c.前半	胎土：精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉：明緑灰色 内底：草花文 底面を残し打ち欠く	
75	1337	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/H-27 層 (粘質土層)	青磁	碗	-	-	龍泉窯系D2類	15c.中葉～後半	胎土：精・黒色粒子を少量含む 釉：黒色 胎土：精・黒色粒子を少量含む 釉：黒色 胎土：1mmの砂粒及び赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
75	1338	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/H-20 層	土師器	杯	(12.0)	3.0			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒及び赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
75	1339	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/H-20 層	土師器	杯	-	-			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
75	1340	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/H-20 層	土師器	杯	-	-			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒・輝石・長石を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
75	1341	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/耕作土 中	土師器	小皿	-	-			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
75	1342	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/耕作土 中	青磁	碗	-	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉～14c.前半	胎土：精・黒色粒子を少量含む灰白色 釉：オリーブ灰色	
75	1343	相良頼景館跡	北側土塁 Tr/耕作土 中	中世須恵器	壺?	-	-	在地		胎土：砂粒を含む灰色 外面：山形タタキ 内面：ハケメ	
75	1344	相良頼景館跡	壺跡 表土中	磁器染付	皿	-	-	肥前	18c	内底：コンニャク印判五弁花スタンプ・蛇の目細刻ぎ	
78	1345	相良頼景館跡	北側 Tr/堀1 覆土 上層	土師器	小皿	-	2.5			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
78	1346	相良頼景館跡	北側 Tr/堀1 覆土 中位層	土師器	杯	-	3.1			色調：橙色 胎土：1mmの砂粒及び赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
78	1347	相良頼景館跡	北側 Tr/堀1 覆土 上層	常滑	甕	-	-			胎土：1mmの砂粒及び長石含む灰色 調整：外面に刻印、内面ヨコケズリ	
78	1348	相良頼景館跡	北側 Tr/堀1 覆土 上層	中世須恵器	壺	-	-			胎土：砂粒を含む灰色 外面：山形タタキ・頸部ナデ 内面：ハケメ	
78	1349	相良頼景館跡	北側 Tr/堀1 覆土 上層	中世須恵器	壺	-	-			胎土：砂粒を含む灰色 外面：平行タタキ・山形タタキ 内面：ハケメ	
78	1350	相良頼景館跡	北側 Tr/堀2 最上 層	土師器	杯	-	-			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ	
78	1351	相良頼景館跡	北側 Tr/堀2 最上 層	土師器	杯	-	-			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
78	1352	相良頼景館跡	北側 Tr/堀2 最上 層	土師器	杯	-	-			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
78	1353	相良頼景館跡	北側 Tr/堀2 最上 層	土師器	杯	-	-			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	

挿図 番号	掲載 番号	遺跡名	出土位置・層位	種別	器種	法量 (cm)			分類	年代	形態の特徴・製作技法等	県22集 掲載No
						口径	器高	底径				
78	1354	相良頼景館跡	北側 Ty/床土	白磁	皿	-	-	6.6	白磁皿CI群	15c.後半	胎土：精・黒色粒子を少量含む暗灰色 釉：灰白色、高台端部釉掻きとり	
78	1355	相良頼景館跡	北側 Ty/表土中	瓦質土器	釜	-	-	-	在地		胎土：砂粒含む灰白色 外面：ナデ 内面：ハケメ	
78	1356	相良頼景館跡	北西土塁 Ty/中世 遺構覆土	土師器	坏	-	-	-			色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒及び赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
78	1357	相良頼景館跡	北西土塁 Ty/表土 中	常滑	甗	-	-	-			胎土：1mmの砂粒及び長石を含む灰色 調整：外面ケズリ・ナデ 内面施釉	
78	1358	相良頼景館跡	北西土塁 Ty/石積 前面の礎層間	磁器染付	碗 (筒型)	-	-	-	肥前	1740～1780年		
78	1359	相良頼景館跡	北西土塁 Ty/石積 前面の礎層間	磁器染付	小坏	-	-	-	肥前	17c.後半	草花文	
78	1360	相良頼景館跡	北西土塁 Ty/石積 前面の礎層間	磁器染付	坏	-	-	2.4	瀬戸	近代		
78	1361	相良頼景館跡	北西土塁 Ty/石積 前面の礎層間	磁器染付	皿	-	-	-	肥前		内面：蜻唐草 外面：唐草文	
78	1362	相良頼景館跡	北西土塁 Ty/表土 中	陶器	皿	-	-	4.2	肥前	17c.前半	体部下半露胎 内底：蛇の目軸割ぎ	
78	1363	相良頼景館跡	北西土塁 Ty/表土 中	陶器	甗	-	-	-		近代		
78	1364	相良頼景館跡	東側 Ty/暗渠掘り 方	土師器	鉢	-	-	-	在地		胎土：1mmの砂粒含む	
78	1365	相良頼景館跡	表採	中世須恵器	甗	-	-	-	在地		胎土：綿状・灰色 外面：格子目タタキ (3mm) 内面：ナデ	
89	1366	東光寺菩薩梵 字	R3Tr/2層	土師器	小皿	7.1	1.8	4.8			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
89	1367	東光寺菩薩梵 字	R3Tr/2層	中世須恵器	搦鉢	-	-	-	在地		胎土：1mmの砂粒含む 外面：ハケ目・ユビ押え 内面：ハケメ後欄目	
89	1368	東光寺菩薩梵 字	R3Tr/2層	陶器	碗 (端反)	-	-	-	一勝地	近世	胎土：黒色粒子・白色粒子を含む灰色 二次焼成うける	
89	1369	東光寺菩薩梵 字	R3Tr/3層下位	土師器	坏	-	-	5.8			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
89	1370	東光寺菩薩梵 字	R3Tr/3層下位	土師器	脚付坏	-	-	-			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒及び赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 底部に脚が付く	
89	1371	東光寺菩薩梵 字	R3Tr/3層下位	土師器	坏	-	-	-			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
89	1372	東光寺菩薩梵 字	R3Tr/4層	土師器	坏	-	-	-			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒及び赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
89	1373	東光寺菩薩梵 字	R3Tr/4層	土師器	坏	-	-	-			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒及び赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
89	1374	東光寺菩薩梵 字	R3Tr/4層	土師器	坏	-	-	-			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
89	1375	東光寺菩薩梵 字	R3Tr/4層	土師器	小皿	6.4	2.4	3.5			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒及び赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
89	1376	東光寺菩薩梵 字	R3Tr/3層下位	土師器	小皿	-	1.8	-			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面回転ナデ	
89	1377	東光寺菩薩梵 字	R3Tr/3層下位	青磁	碗	-	-	-	龍泉窯系B1類	13c.中葉～14c.前半	胎土：精・黒色粒子を少量含む灰白彩 釉：明緑灰色	
89	1378	東光寺菩薩梵 字	R3Tr/3層下位	中世須恵器	甗・壺?	-	-	-			胎土：砂粒及び白色粒子を含む灰色 外面：ハケメのち山形タタキ 内面：ハケメ	
89	1379	東光寺菩薩梵 字	R3Tr/4層	中世須恵器	甗・壺?	-	-	-			胎土：砂粒及び長石を含む灰色 外面：山形タタキ 内面：ハケメ・ナデ	
89	1380	東光寺菩薩梵 字	R3Tr/12層	土師器	坏	12.0	3.7	8.6			色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面回転ナデ 外底：静止糸切り離し	

押 込 番 号	発 掘 番 号	遺跡名	出土位置・層位	種別	器種	法量 (cm)		分 類	年 代	形態の特徴・製作技法等	集 積 場 所
						口径	器高 底径				
89	1381	東光寺磨崖瓦 字	R3Tr/10.11層	土師器	脚付环	-	-			色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒及び赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 底部に脚が付く	
89	1382	東光寺磨崖瓦 字	R3Tr/10.11層	土師器	小皿	(7.4)	1.2 (5.6)			色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
89	1383	東光寺磨崖瓦 字	R3Tr/10.11層	土師器	小皿	(8.0)	1.7 (5.8)			色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
89	1384	東光寺磨崖瓦 字	R3Tr/10.11層	土師器	小皿	-	-	6.2		色調：灰白色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
89	1385	東光寺磨崖瓦 字	トレンチ 10層	瓦質土器	甕	36.4	6.2	-		胎土：砂粒・白色粒子含む 調整：外面ナデ 内面ナデ	
91	1386	東光寺磨崖瓦 字	R4石崖/湧水ト ンネル内	土師器	环	11.7	3.6	6		色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒及び赤色粒子を含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
91	1387	東光寺磨崖瓦 字	R4石崖/右奥ト ンネル湧水部分	土師器	环	-	-	-		色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面回転ナデ	
91	1388	東光寺磨崖瓦 字	R4石崖/右奥ト ンネル湧水部分	土師器	环	-	-	-		色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面回転ナデ 口縁端部内外面U状に窪む	
91	1389	東光寺磨崖瓦 字	R4石崖/右奥ト ンネル湧水部分	土師器	环	-	-	6.0		色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面回転ナデ	
91	1390	東光寺磨崖瓦 字	R4石崖/前庭部 表土	土師器	环	-	-	7.0		色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面回転ナデ、内底間縁を強くナデる 外底：糸切り離し	
91	1391	東光寺磨崖瓦 字	R4石崖/右奥ト ンネル湧水部分	土師器	小皿	8.0	2.7	3.8		色調：浅黄橙色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：内外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
91	1392	東光寺磨崖瓦 字	R4石崖/右奥ト ンネル湧水部分	土師器	小皿	-	-	4.0		色調：にぶい橙色 胎土：1mmの砂粒含む 調整：外面回転ナデ 外底：糸切り離し	
91	1393	東光寺磨崖瓦 字	R4石崖/奥床か らの段落ち部分	中世須恵器	擂鉢	-	-	-		胎土：砂粒及び白色粒子を含む灰白色 外面：ユビ押え 内面：ナデ後罫目 (8本/2.5cm)	

押図 番号	押載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地区・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		形態の特徴 製作技法等	県 22 集 掲載No
						径	高さ		
25	357	A区溝	A-B III区 II層	土師器	土鉢	2.0	6.9	色調：灰白	19 図-1
25	358	A区溝	A-B III区 II層	土師器	土鉢	1.8	6.5	色調：灰白	19 図-2
25	359	A区溝	A-B III区 II層	土師器	土鉢	1.7	4.2	色調：灰白	19 図-3
25	360	A区溝	A-BT III層	土師器	土鉢	1.8	7.0	色調：灰白	19 図-4
25	361	A区溝	A-BT III層	土師器	土鉢	1.4	4.1	色調：浅黄橙	19 図-5
25	362	A区溝	A-BT3区 II層	土師器	土鉢	1.2	5.8	色調：橙	19 図-6
25	363	A区溝	A-B III区 II層	土師器	土鉢	0.9	5.6	色調：にぶい黄橙	19 図-7
25	364	A区溝	A-B2区砂層上部	土師器	土鉢	0.8	4.3	色調：浅黄橙	19 図-8
25	365	A区溝	A-B2区砂層上部	土師器	土鉢	0.8	3.0	色調：橙	19 図-9
25	366	A区溝	A-B2区砂層上部	土師器	土鉢	0.7	3.6	色調：橙	19 図-10
25	367	A区溝	A-B2区砂層上部	土師器	土鉢	0.8	3.1	色調：橙	19 図-11
45	792	西外濠	B 東外堀第三層	土師器	土鉢	1.0	5.1	色調：橙	55 図-18
47	827	西外濠	A区 I T ~ 西外堀 (溝) 第四層	土師器	土鉢	1.8	4.1	色調：灰白	57 図-5
56	937	柱穴	柱穴No.26	土師器	土鉢	2.2	6.6	色調：灰白	54 図-4
56	954	柱穴	柱穴No.33	土師器	土鉢	1.8	5.5	色調：褐灰	54 図-3
58	1039	B区 III層 (褐色 土) 盛土	B区石列南盛土	土師器	土鉢	1.8	7	色調：にぶい黄橙	60 図-9
58	1040	B区 III層 (褐色 土) 盛土	B区石列南盛土	土師器	土鉢	1.6	6.5	色調：灰白	60 図-10
64	1175	B区 I・II層	B-I T ~ 3T 間 II層	土師器	土鉢	1.7	7.2	色調：灰白	52 図-5
64	1176	B区 I・II層	B-I T ~ 3T 間 II層	土師器	土鉢	1.8	7.3	色調：灰黄褐	52 図-6
64	1177	B区 I・II層	B-I T ~ 3T 間 II層	土師器	土鉢	1.8	7.3	色調：灰黄褐	52 図-7
64	1178	B区 I・II層	B-I T ~ 3T 間 II層	土師器	土鉢	2.0	7.8	色調：灰白	52 図-8
64	1179	B区 I・II層	B-I T ~ 3T 間 II層	土師器	土鉢	1.6	4.3	色調：浅黄橙	60 図-11
64	1180	B区 I・II層	B-I T ~ 3T 間 II層	土師器	土鉢	1.1	5.0	色調：浅赤橙	60 図-12
69	1250	A区 I・II層	A-5T 石槌周辺	土師器	土鉢	1.5	4.9	色調：灰白	58 図-9
75	1333	観察箇所	土塁 表土中	土師器	土鉢	1.7	5.0	色調：にぶい橙	

押図 番号	押載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地区・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		形態の特徴・製作技法等	県 22 集 掲載No
						直径	高さ		
16	64	埋鏡遺構	A-BT2層	銅製	双筒鏡	9.5	0.6		12 図
押図 番号	押載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地区・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		形態の特徴・製作技法等	県 22 集 掲載No
27	405	A区溝	A-B I 区 II層	土師器	輪羽口	幅	高さ	穴径	21 図
27	406	A区溝	A-B3区 II層	土師器	輪羽口	9.4	13.2	3.0	21 図
46	818	東外濠	東外堀 III層	石製品	輪羽口	13.4	11.5	2.5	55 図-19
65	1183	B区 2層出土物	B区 2層上層	石製品	輪羽口	15.1	25.8	2.5	57 図-8
押図 番号	押載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地区・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		形態の特徴・製作技法等	県 22 集 掲載No
27	407	A区溝	A-B3区溝 II層	鉄器	ノミ状 鉄器	幅	高さ	長さ	20 図-1
27	408	A区溝	A-B4区溝 II層	鉄器	釘	1.2	5.9	0.8	20 図-2
27	409	A区溝	A-B5区溝 II層	鉄器	-	2.4	5.6	0.7	20 図-3
27	410	A区溝	A-B6区溝 II層	鉄器	釘	1.0	2.9	0.7	20 図-4
39	663	B区出土	B区出土	鉄器	鈔	5.7	6.4	0.4	37 図-1
押図 番号	押載 番号	出土地点・層位 (再整理後)	出土地区・層位 (熊本県調査時)	種別	器種	法量 (cm)		形態の特徴・製作技法等	県 22 集 掲載No
49	877	西外濠	A- 西側外濠溝内	石製品	温石	長さ	幅	高さ	57 図-6
49	878	西外濠	S-9G3層	石製品	砥石	8.7	6.1	3.2	58 図-15
49	879	西外濠	西外堀	石製品	砥石	9.2	4.8	3.4	57 図-7
56	951	柱穴	柱穴No.31	石製品	砥石	9.0	3.4	0.6	54 図-5
68	1231	B区 I・II層	B1T2T 拡張 II層 (褐色土上面)	石製品	温石	4.7	5.0	1.3	52 図-9

写真図版

図版 1



令和 3 年度 北側土塁トレンチ 南側土層断面



令和 3 年度 北側土塁トレンチ 北側土層断面



令和 3 年度 北側土塁トレンチ 中央部土層断面



令和 3 年度 北側堀トレンチ H-27 層青磁出土状況



令和 3 年度 北側堀トレンチ H-27 層青磁出土状況



令和 3 年度 北側堀トレンチ下層状況



令和 3 年度 北側土塁・堀トレンチ土層断面



令和 4 年度 北側トレンチ堀検出状況



令和 4 年度 北側トレンチ北堀 2 礫廃棄状況



令和 4 年度 北西側トレンチ 土層断面



令和 4 年度 北側トレンチ 北堀 2 覆土炭化物散在状況



令和 4 年度 北西側トレンチ 石積検出状況



令和 4 年度 東側トレンチ 土層断面

图版 3



磨崖板碑 上部梵字残存状况



磨崖板碑 下部梵字残存状况



令和 3 年度 東光寺磨崖梵字トレンチ土層断面 (西側)



令和 3 年度 東光寺磨崖梵字トレンチ土層断面 (東側)



令和 3 年度 トレンチ 10 層出土状況 (1385)



令和 4 年度 石崖前庭～内部状況

図版 5



令和 4 年度 石窟内 湧水の水道



令和 4 年度 石窟内部 土層断面



令和 4 年度 石窟奥床検出状況



令和 4 年度 石窟右側壁柄内



令和 4 年度 石窟左側壁柄内



令和 4 年度 石窟天井に残る加工痕



令和 4 年度 石窟左側壁に残る加工痕



青蓮寺古塔碑群へと続く階段



青蓮寺・壇上積基壇（東側）



青蓮寺・壇上積基壇（西側）



青蓮寺・壇上積基壇（南側）

図版 7



相良頼景館跡 B 区土器溜め出土・土師器



蓮花寺跡 B 区溝下層出土・土師器



蓮花寺跡出土・中世須恵器（仏具）



蓮花寺跡 B 区溝出土・粘土塊



蓮花寺跡出土・瓦質土器（火舎）



蓮花寺跡 B 区溝出土・鉄滓

多良木町文化財調査報告 第3集

多良木相良氏遺跡

—多良木相良氏関連遺跡群総合調査報告書—

発行日 令和6年3月31日

発行 多良木町教育委員会
〒868-0595 熊本県球磨郡多良木町大字多良木1648番地

印刷 コロニー印刷
〒860-0051 熊本県熊本市西区二本木3丁目12-37
